

---

# うっかり女エミヤさんの聖杯戦争

E K A W A R I

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うっかり女エミヤさんの聖杯戦争

### 【Nコード】

N6723S

### 【作者名】

E K A W A R I

### 【あらすじ】

答えを得た紅い弓兵はそのまま座に帰る筈だった。が、帰還途中で再び聖杯戦争のサーヴァントとして呼び出され、呼び出したのは養父の衛宮切嗣!?しかも、うっかり属性と体の女性化まで付加されていて・・・これは遠坂凜を裏切った呪いなのか!?そんな女エミヤさんによる第四次&第五次聖杯戦争の物語。第四次聖杯戦争編完結しました!第五次聖杯戦争編スタート。

注:こんなタイトルですが、これはギャグ主体ではありません。シリラスー直線のダークドシリラスハード鬱展開濃厚なのでご注意ください

ださい。

## プロローグ（前書き）

どうも、作者のEKAWARIです。ばんははろ。

ええと、この話は前作の「衛宮士郎が頭の悪そうなアーチャーを召喚したようです」でもちよろつと言つてた性転換エミヤさんの長編ストーリーになります。

尚、第四次と第五次聖杯戦争の話になりますが、メインは第五次ですので、第四次につきましては、駆け足で始まって終わることになると思いますが、そこは一つご了承ください。では。

## プロローグ

s a i d . エミヤ

「答えは得た。大丈夫だよ遠坂、オレも、これから頑張っていくから」

これまでにない、開放された気持ちで、私は、英霊エミヤは笑顔  
を浮かべた。

彼女との別れの顔を思う。きっと彼女がついている限り、このせかいの  
衛宮士郎は大丈夫なのだろう。

消えていく。そして再び私は座に戻るのだ。

そう、其の筈だった。本来なら。

何が悪かったのだろうか。理由は神ではない身ではわからない。  
ただ、折角答えを得たのに座に戻ってその記憶を手放すのは残念だ、  
とか、切嗣じいさんや懐かしい人々に会いたいなとか、僅かでも思ってしまったのが悪かったのかもしれない。

「む!？」

ぐん、と何かに自分の体が引っ張られているのがわかる。

(これは、召喚か!?)

聖杯戦争に召喚されるのは英霊の座にある本体の分身だ。こんな  
風に本体に帰還する途中で他に引っ張られ、連続で召喚されるはず

などないのだが。

しかも、今自分の頭の中に流れ込んでくるこの情報は・・・自分はアーチャーのサーヴァントで呼び出されている等といったもので信じられないが、どうやら再び自分は聖杯戦争に呼び出されようとしているらしい。何故だ？もう、自分殺しなど企んでいないというのに。不可解な混乱する思考を他所に、出口に差し掛かろうとしている。

仕方ない。覚悟を決めるか。

サーヴァントとして呼び出されたのなら、呼び出した主<sup>マスター</sup>の為に今度こそ働いてみるのも悪くないのかもしれない。凜のことは裏切ってしまったから、今度こそ忠義を尽くす、それもまた一興だろう。そうして、出口へとたどり着く。

あの日を思い出す。月光の元の土蔵で呼び出した彼女との出会い。地獄に堕ちても尚忘れられないあの鮮烈な出会いの光景を。『問おう、貴方が私のマスターか』その神聖で清浄なる響き。そうだな、此度の主君への最初の一言はそれにしよう。そう思って若干皮肉気に唇の端を吊り上げて、目を見開き、<sup>マスター</sup>ラインが繋がった相手を認識した瞬間、最初の思惑など忘却して、私は素っ頓狂な声を上げてしまった。

「なんでさ!?!」

懐かしい口癖が、英霊になってからついぞ言うことのなかった口癖が零れ落ちる。いや、でもわかってほしい。だって、自分を呼び出したのは、くたびれたような黒いコートに身を包んだ黒髪黒目の魔術師、自分が知っている姿よりも若干若い自分を育てた男、養父、衛宮切嗣だったのだから。

そして動揺に駆られるオレは自分が今どんな状態にあるのかを正確に認識してはいなかった。

「ちよつとまで、なんで切嗣しいきんがオレを召喚する！？切嗣が召喚したのは確かセイバーの筈だろう！？」

相手の男は呆気にとられた眼で、頭が痛そうに眉根を寄せている。だが、そんなことに気を配れないほど今のオレは狼狽していた。

「ええと、貴方はアーサー王じゃないのね？」

ふと、極近くから女の声がして、私はすばやくそちらをむいた。今まで気付いていなかったが、その女性はどうやらずっと切嗣の隣に立っていたらしい。大人の女性だ。女らしい体型で、髪は雪のような銀髪、瞳は鮮やかな紅色、肌もまた透けるように白い……ん？この特徴は。

「イリヤスフィール！？何故君がここにいる！？いや、それよりその姿はなんだ！？君は確か成長が止まっていたはず……は！？」

ここまで自分で言い切ったとき、己の異変に気付いた。確か自分はここまで明け透けに思ったことを口に出す人間ではなかったはずだ。少年だった頃とは既に違うのだ。もしや、遠坂のうっかりが移ったのか？いや、それよりも、先ほどから自分の声もおかしい。私はいこんなに高い声をしていなかったはずだ。それに体にも違和感が……と、下に視線を落として絶句した。

そこには二つのふくよかな丘が存在していた。

ふよふよと柔らかかそうな双丘。おそろおそろ手を伸ばした。ふにゅ、柔らかい。くすぐりたい。ええと……これは……？（滝汗）ぎぎぎつと、首を切嗣と大人になったイリヤスフィールらしき女性に向ける。

二人ともどう反応するべきなのか迷ったような顔をしている。……心は硝子で出来ている、脈絡もなくそんなことを思った。

「その、つかぬ事を尋ねるが・・・」

「だらだらと汗が頬を伝いおちる。ああ、目からポーションが出そ  
うだ。」

「私は、もしかして女性になってしまっているのだろうか・・・？」  
「？君はどこからどうみても女性だと思っけれど？」

切嗣がここにきて初めて声を放つ、ああ、懐かしいなと思う間も  
なく、其の言葉は私の中の何かを破損した。

「は・・・はは・・・はは・・・」

ばたん。

そのまま私は卒倒した。ああ、サーヴァントでも気絶って出来る  
んだなあとか、なんで切嗣に召喚されたんだろうなあとか、考えて  
たのはそんなこと。これは遠坂を裏切った呪いなんだろうか？

勝手に人のせいにしていないでよと、どこか遠くであかいあくまが吼  
えたような気がした。

NEXT？



## プロローグ（後書き）

この女エミヤさんのステータスは次回書きます。

PS、何故性転換させたかっつていうと、おかんでツンデレなアーチャー書きたいなあ、なら、いつそ女でもいいんじゃないかね？とか阿呆な発想が原因だったりします。

ちなみにガールズラブ、ボーイズラブってのはあくまで精神的なものなので、具体的にくっつくとかはないので、そこは安心してください。おいどん、男×女、女×男、男×男、女×女、話さえ面白ければ別にオールドツケーですがね（ちよ）

## 第四次聖杯戦争編 01・アーチャーの能力を確認しよう（前書き）

好きなキャラって虐めたくなったりしますよね。え？しませんか。というわけで第四次編一話です。あ、本来セイバーが召喚されるところをアーチャーが召喚されたので、英霊陣には若干の変更がありますが、Fate関連に出てこないオリジナルサーヴァントは出てこないで、その辺は安心(?)してください。オリキャラは基本的にモブにいるかも程度です。

第四次聖杯戦争編 01・アーチャーの能力を確認しよう

昔から運には見放されているほうだとは思っていた。

けれどこれはないのではないか？

何故女になつてしまう。何故切嗣じいさんにオレが召喚されてしまう。しかも、かなりの巨乳……。いや、なんでもない。女性の体型の話はするものではない……。今はオレの体だつてというのが哀しいが。神よ、それほどオレが嫌いか。

『アーチャーの能力を確認しよう』

side・アイリスフィール

今日は夫の衛宮切嗣が、冬木の聖杯戦争に参加するためのサーヴアントを召喚すると聞いていたから、私、アイリスフィール・フォーン・アインツベルンはその隣で其の時をまっていた。

「こんな単純な儀式で構わないの？」

英霊なんて規格外な存在を呼ぶためのものだというのにも関わら

ず、夫が水銀を用いて描いたその魔方陣はあまりに単純で、思わずちよつと驚きながら尋ねる。

「拍子抜けかもしれないけどね、サーヴァントの召喚には、それほど大がかりな降霊は必要ないんだ」

熱心に魔方陣を検分しながら、妻の問いに真摯に答える切嗣。この男が魔術師殺しと呼ばれ恐れられている男だということが、妻であるアイリにはイマイチ実感がわかない。

「実際にサーヴァントを招き寄せるのは術者ではなく聖杯だからね。僕はマスターとして、現れた英霊をこちら側の世界に繋ぎ止め、実体化できるだけの魔力を供給しさえすればいい」

そういうものなのか、とアイリスフィールは思った。所詮門外漢の自分にはよくわからない。切嗣は一つ頷いて立ち上がると、祭壇に聖遺物である伝説の聖剣の鞘を置いた。鞘の名前はアヴァロン。かの高名な騎士王、伝説のエクスカリバーの担い手であるアーサー・ペンドラゴンの聖遺物としてこれ以上のものは存在しないだろう。

だから、これで招かれる英霊は最良と名高きセイバーのサーヴァントで、真名はアーサー王。そのことを疑う余地もない。そうアイリスフィールも切嗣も思っていた。

「さあ、これで準備は完璧だ」

アイリもそう思って疑わなかった。

なのに、どういう手違いでこんなことが起きたのか。

出てきたのは背の高い女性だった。褐色の肌に、真っ白な、自分よりも更に白いショートカット、顔立ちは凄く美人というわけではないが、それなりに整った顔立ちをしており、よく見るとわりと童顔だ。年齢は20代半ばくらいだろうか。服装は黒い軽鎧に、紅くて上下に分かれた外套、黒くてベルトが沢山ついたズボンにブーツ。それらが露出は全くといっていいほど少ないにも関わらず彼女の体のラインをくつきりと浮かび上がらせている。ふくよかな胸に、きゅっと引き締まった印象のウエスト、肉質なヒップのライン。声は

ちよつとボーイッシュユで、発音や言葉遣いが其の印象を助長させている。その瞳は鋼色。どこからどうみても、ブリテンの王たるキングアーサーとは結びつかない。

なにより、その発言内容。

それは夫である切嗣からみても、自分から見ても見過ごして良いような内容ではなかった。

サーヴァントが出てきてまずはじめにやるのは、マスターとの契約の誓いであるはずだ。

なのに彼女は最初に放った言葉は「なんでさ!？」だった。サーヴァントとして呼び出されるのは英霊、つまり英雄と呼ばれた人々が死後に信仰を受けて精霊たちと同格まで押し上げられた存在のはず。これが英雄の言動なのだろうか。

でも、そこまではまだいい。問題はその後。

彼女はまだ名前を知らないはずの夫の名前を呼んだのだ。「切嗣」と、それはもう言い慣れた感じで。しかも、呼び出したのはセイバーのはずだとも言った。まるでセイバーを呼び出すことをわかっていたかのように。おまけに自分のことを「イリヤスフィール」と呼んだ。切嗣との愛娘であるイリヤスフィールのことを何故呼び出されたばかりの英霊が知っているというのだろうか？おまけにイリヤが成長することがないことまで知っている・・・いや、イリヤ自体に会ったことがあるかのような反応だった。それらの不可解なことの連続に夫の切嗣もぴりぴりしているのを隠しきれていない。

ただ、目の前の彼女は狼狽が酷すぎてそのことに気付いていないようだったけれど。何故か突然自分の胸をわしづかみにして、信じられないように、泣きそうな子供のような顔で、すぎるように私達夫婦を見ている。

そして更に奇怪なことを彼女は尋ねた。

「その、つかぬ事を尋ねるが・・・私は、もしかして女性になってしまっているのだろうか・・・?」

もしかしてもなにも、女以外何に見えるというのだろう。

「？君はどこからどうみても女性だと思っつけれど？」

切嗣もそう返す。このサーヴァント、頭おかしいんじゃないだろうな？なんて夫の心の声が聞こえてきそうな雰囲気だった。

（そう、サーヴァント、なのよね）

確かに、かの騎士王ではなさそうだけど、この魔力と圧倒的な気配は目の前の存在が人間ではないことを示している。だから、英霊のはずなのだけれど。

（なんだか、保護欲が沸くのはどうしてかしら？）

今までの様子が様子だったせいかしらなけれど、アイリは目の前の女性が小さな子供みたいに見えて仕方なかった。まるでイリヤスフィールと相対しているような気分だ。

「は・・・はは・・・はは・・・」

その褐色の女性サーヴァントはそんな乾いた笑い声をあげると、ふっと卒倒した。

「え？」

夫と二人目を合わせて仰天する。まさか、サーヴァントがこんなやりとりで倒れるなんて誰が想像しただろう。とはいっても、本来は睡眠を必要としないサーヴァントである。五分もせずに目覚めると、再び私達夫婦の顔と自分の体を見回して、奈落の底に叩き落されたかのように落ち込んだ。

「お、おい？」

流石に夫も焦っている。彼女は「・・・体は剣で出来ている、体は剣で出来ている、体は剣で出来ている・・・」などぶつぶつ何度か繰り返すと、漸く乾いた笑みを貼り付けたまま、それでもなんとか立ち直れたらしい自分の二本の足で立った。

「ああ、その・・・マスターに心労をかけたようだ、すまない」

凄く居心地悪そうに視線を斜め下に落として彼女は謝罪した。そして次の瞬間彼女の身に纏う空気が変わった。

「サーヴァント、アーチャー。召喚に応じ、参上した。これより我が弓は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに契約は完了した」

頭を垂れ、騎士の誓いそのままに、すつと清涼な声で告げられる祝詞。それはつい先ほどまでの困惑に彩られた迷子の子供のような彼女の姿とは180度違う、厳かで神聖な儀式の形だった。

「アーチャーだって？」

切嗣が眉根を寄せる。気持ちはわかる。何故なら切嗣はアーサー王を呼ぶはずだったのだ。アーサー王ならばセイバーと呼ばれるはず。とはいえ、目の前の女性は最初からどうみてもアーサー王には見えなかったもので、その疑惑を確信に変えられただけ、全くの無成果でもないのだが。

「そのことについて言いたい事もあるだろう。アーサー王を呼び出すはずが、私のようなこの誰とも知らぬサーヴァントを呼んだのだ、無理もない。だが、それはすまないが後回しにしてももらえないだろうか？私には先にどうしても確認しなければならぬことがある」

そこまで言い切ると、彼女は今度は反転言いつらそうに、その薄めの唇を開く。

「・・・その、だな。マスターには、確かサーヴァントの能力を確認できる、ほら、力があるだろうか？」

「ああ、それがどうかしたのかい？」

言いながら、口元は笑みを浮かべてそう聞き返す切嗣。表面は穏やかだが目は笑っていない。相手の真意を探ろうとする色がある。

「その・・・私のステータスを、教えてもらえないだろうか？」

「は？」

思わず素になつて、切嗣が聞き返す。すると、そのアーチャーだという女性は頬を真っ赤に染めて「だから、私のステータスを教えて欲しいといったのだ」と言い返した。羞恥の極みにあるとでもいうかのような顔で、ぷつと私は思わず噴出していった。

「ふふ、あはは」

「アイリ？」

夫が訝しそうに私を見ている。アーチャーは何故笑う？と言わんばかりの顔で私の顔を見る。それに益々笑みが深くなる。

「貴女つてまるで、子供みたい。くすくす、可愛い」

ぱくぱくと口を開いては閉じ、絶句しながら益々顔を紅くしているアーチャーを見て、アイリスフィールは益々笑いが止まらなくなる。

「いいじゃない。切嗣。それくらい応えてあげても。この子は悪い子じゃないわ。ね？」

言いながら、彼女に駆け寄って、ぎゅつと背中に抱きつくと、アーチャーはあわあわと赤い顔をしたまま慌てて「き、君は一体何を、その、えつとイリヤ・・・ではないはずだな」

最後のほうは「ごによごによ」と小さな声だった。おそらく正面にいる切嗣には聞こえてないはずだ。

「アイリスフィールよ。そこにいるあなたキリッのマスターの妻。アイリでいいわ、よろしくね、アーチャー」

「そうか・・・君が・・・ああ、よろしく」

最初の声は消え入るような声で、何かをかみ締めているようだった。よろしく、そう言って笑う彼女は儂いくらい朧ろ気で見ている



不安になる、そんな笑顔だった。だから、ぎゅっとアイリスフィールは彼女を益々強く抱きしめた。

其の様子を見ていた切嗣は観念したようにため息を一つ吐くと、アーチャーのステータスについて説明し始めた。

#### サーヴァント・アーチャー

身長：174cm

体重：58kg

スリーサイズ：93/61/91

イメージカラー：赤

属性：中立・中庸

筋力D 俊敏C

魔力B 宝具??

耐久D 耐魔力D

幸運E 単独行動C

技能：千里眼（C）、魔術（C）、真眼（B）うっかり（A）

「ん・・・？」

#### side・エミヤ

おかしい、今、変なスキルが混じっていなかったか？

「すまない、そのもう一度最後の部分を言ってくれないだろうか？」

アーチャーは聞き間違いではないかと思い、そう尋ねる。

耐久と単独行動が凜のサーヴァントの時より落ちているようだったが、元々サーヴァントの能力はマスターの能力にも左右されるこ

とを思えば別段不思議でもなんでもなかった。しかし、今聞き捨てがならない単語が混じっていたような……。

「うっかりAだね」

さらっと、切嗣が告げる。

「がはっ」

精神ダメージを前に膝をつく。

(り、凜……。やはりこれは、彼女を裏切った呪いなのか!?)

やはりあかいあくまを敵にまわしてはいけなかったらしい。恐ろしい。もう既にこの身は凜のサーヴァントではないというのにこんな呪いを残すとは。

多分この世界にもまだ幼い凜はいるのだろう。おそらく、今回呼ばれたのは第四次聖杯戦争だ。切嗣に、イリヤの母親がいるのだ、間違いがない。この世界でもしも凜にあつたら、これ以上の呪いを振り掛けられないようにも気をつけよう。どうやら彼女は自分を真冬のテムズ川に叩き落したただけでは足りないらしいし。

そんなことを混乱した頭で考え、ふと、自分に抱きついていてる女性を見る。

大人か子供の違いはあるけれど、目の前の女性はイリヤによく似ている。その雪の妖精のような雰囲気も、面差しも、無邪気なところさえ、そうだ。彼女の母親なのだから当たり前なのかもしれないけど。そして、彼女は此度の聖杯だ。多分どんな結末を迎えようとおそらく、この女性は……。イリヤの母親であるアイリスフィールは、助かることはないのだろう。そう、思う。あの原初の光景、黒い太陽が焼き尽くした悪夢を起こした戦争の聖杯なのだから。

本当になんの因果なのだろうか。昔の自分に答えをもらって、召喚された先は切嗣しーさんの元で、おまけにうっかり属性を追加されて女性化してしまうとは。守護者となって以来理不尽にはなれているつもりだったが、これは聊か予想外にもほどがある。

「さて、こちらは君の疑問に答えた。今度は僕の質問に答えてもらえるかな？」

その言葉にはつとめる。切嗣は探るように私を見ていた。自分と一緒にいた頃にはついぞ見なかった、あれは親父の魔術師としての顔だ。

「君は僕を知っているようだ。しかし、僕には生憎、英霊の知り合いないなんてものはない。おまけに娘の存在まで把握している。君の真名は？君は・・・なんだい？」

きゅつと眉根を寄せた。ここまでポ力を連続して出しておいて誤魔化せるなんて思っていない。いつの間にか私に腕を回していたアイリスフィールも、真剣な顔で私を見ている。

「貴女は、未来からきた英霊なんじゃないかしら？」

「アイリ、それは」

「有り得ないことではないわ。聖杯は過去未来現在から英霊を呼ぶんだから」

「ごまかしは駄目よ？と言わんばかりにじつと紅い瞳が私の目を覗き込む。ああ、そうだな。降参の白旗を振るとしようか。」

「ああ、その通りだ。私は並行世界の未来から来た英霊だ」

その私の宣言に、多分そうだろうとは思っていたのだろうが、二人が静かに息を飲む。もう、半分自棄なのだが、何構わないだろう。正体を明かすのが駄目だとしたらそもそもこの時代に私が召喚されるはずがないのだから。

「私の真名はエミヤ。在りし日の名は衛宮士郎。並行世界の未来の、  
貴方の息子だよ、衛宮切嗣<sup>マスター</sup>」  
そうして私は一つ笑った。

N E X T ?

第四次聖杯戦争編 01・アーチャーの能力を確認しよう(後書き)

やあ、というわけで第一話でした。

そういえば、Fatezer 繋がりで、ニトロやうるぶち関連でサーヴァントを暇つぶしに考えてみたつい先日。

セイバー：武田赤音(他に思いつかなかった(おい))

ランサー：佐倉杏子(つか、長物他に使い手いたっけ?)

アーチャー：鹿目まどか(勿論10話のバージョンで)

ライダー：ヴェドゴニア(キヤルと配役逆でもいいかも)

キャスター：大十字九郎(ライダーとしての召喚じゃないのでデモンベインは無しで、アルが宝具&マギウスタイルバージョン、レムリア・インパクト」が必殺技)

アサシン：孔濤羅(兄様以外に誰がいると!?)

バーサーカー：キヤル(ヴェドゴニアと配役逆でもいいかも)

とかそんなんでどうでしょう?

・・・ヤベエ、アサシン最強伝説が立ち上がってしまう&最優であるはずのセイバーが最弱化してしまうじゃねえか。ちなみにアサシンの対抗馬はキャスターってことで。

まあ、なんだ、最後に、ごほん。ほむほむとあとにさまは俺のジャスティーヌ!!(意味不)

続くお。

## 第四次聖杯戦争編 02・並行世界の話（前書き）

やあ、作者のEKAWARIです、ばんははろ。昨日は女工ミヤさんの挿絵描いて過ごしてみたのですが、ペイントしか描く手段がないって辛いなと思う今日この頃。無料でいい絵描くソフトないものですかねえ。とか、愚痴ってみたり。まあそんなわけで第四次戦争編二話目です、どうぞ。

あ、追加のお知らせなんですが、挿絵のほうですが、11年4月28日現在描き直し版に差し替えさせていただきました。

## 第四次聖杯戦争編 02・並行世界の話

サーヴァントは聖杯戦争に勝利するために魔術師マスターに与えられた道具だ。

僕はそれを使ってこの聖杯戦争を勝ち抜き、望みをかなえる。

そのために9年前アインツベルンの陣営に入ったのだ。

なのに、其の日呼び出したサーヴァントは、呼ぶ予定だったアーサー王ではなく、白髪褐色の肌の女性サーヴァントだった。

能力値は低いし、一々言うことも本当に英霊なのか疑わしいその女。

言動から自分となんらかの関わりがあるのだろうと予測できたし、未来からの英霊だというのも、発言内容を考えれば驚くことではなかったのかもしれない。

それでも、驚いたのは、そのどこからどうみても女性にしか見えないサーヴァントが言った次の発言。

そう、彼女は未来の僕の息子なのだ、そう語ったのだ。

『並行世界の話』

side・エミヤ

想像りっくしていた結果ではあるが、自分の発言を聞き、並行世界えみやきの自

分の養父とその妻は目を見開いた。

アイリスフィール

「ええと、確認のだけけれど」

我に返ったのはアイリスフィールのほうが先だった。それでもその声には動揺が大分混じっている。

「貴女、女の子よね？息子って今言ったのかしら？」

「ああ、言った」

やはりか。追求されると思っていた。思わずため息をつく。いきなり女になって何も感じずにいられるほど私は無神経つよくはないのだ。

「ひゃ！？」

むにゅ。白くて細やかな白魚のような手がいきなり私の胸を掴む。

「本物よねえ・・・」

「ちよ、やめ、え？何故揉むんだ・・・！？こら、よさんか」

感心したように呟きながら犯人は続いてむにゅむにゅと私の胸を揉みしだいているのだが、正直ちよつとシヨツクが大きすぎて立ち直れそうにないのだが、心は硝子なんだ、やめてくれ。本当。ついでになんか腰のあたりがもぞもぞしてくる。そんな自分の反応がまたなんだか嫌だ。しかも、次第に指の動きがたくみになっているよ  
うな・・・？

「アイリ！」

がしつ、とその白く女性らしい手を掴んで、それ以上の犯行を止める。涙目になっていような気がするのだが、多分気のせいだ。そういうことにしておきたい。

「あら、ごめんなさい。貴女がとても可愛いから、つい」

につこりと慈母のような笑顔で告げるアイリスフィール。いくら、女性化しているとはいえ、心は男なのだ。可愛いと連呼されて内心複雑過ぎる。ついでに、彼女の言動から流石はイリヤの母親に当たる女性だ、なんて筋違いのことを考えてしまう。現実逃避だと？いかん、否定出来ない。

「でも本当にどうということ？納得のいく説明はもらえるのかしら？」  
「悪いが、女性化については説明できそうもない。私にも説明のつ



かない現象だからな。が、始めに言っておくがね、私は元々は男だった。だから、その、女性扱いはやめてもらえたら助かる」

とりあえず釘をさす。

見れば、切嗣はじつと、私アイリスフィールと自分の妻との様子を観察している。

自分の出方を見極めようとしているようにも見えた。

「まあ、私からも言いたいことは沢山ある。おそらくマスターの疑問もそれである程度は解消されるだろう。だが、その前に場所を移動しても構わないかね？このような場所で長々と話すのはあまり建設的とはいえないと思うのだが。何より、このような監視の目がある場所ではな、私とて手の内を明かしたくてもあかせんよ」

言いながらすつと虚空を見つめる。そこには、アインツベルの当主であるユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンが放った使い魔が紛れ込むようにして存在していた。

たとえ、遠坂のうっかりの呪いを受けようと、それでもやるべきことを見失うつもりはなかった。うっかりといっても常時発動するというわけではないのは、あのうっかりスキルがおそらくランクEXであるう遠坂凜が学校では見事に優等生を演じられていたところからしても明らかだ。常時発動するならそれはうっかりではなく、ただのドジっこだらう。

まあ、ここまで、切嗣にのみ与えるべき情報のカードをいくつか聞かれてしまっただけで相当ドジを踏んだともいえるのではあるが、セイバーの触媒を用意したのはアハト翁なのであるうから、全く違う英霊を呼んだ、しかもそれが未来の切嗣の女性化した息子というだけでも、相手がどう手を討ってくるか警戒せねばなるまい。

とはいえ、聖杯戦争の主役はマスターとサーヴァントだ。マスターでもなく、日本に行くわけでもないご老人に出る幕はないだろう。そう願いたい。

切嗣もこちらの意図がわかったのか、一つ頷いて、「こっちだ」と言い部屋を出て行く。

オレとしては頭の痛い問題だらけだ。それでも、切嗣に会えて嬉

しいという気持ちがあるのはもう、どうしようもない。オレの知っている切嗣はだらしない親父、そして正義の味方、つかみどころのない不思議な男だった。その憧れた背中をこうして見られるのなら、肩を共に並べられるのなら、それはそれで愉しみなのかもしれない、そんなことを思った。

ふと、自分をじっと見つめている視線に気付く。アイリスフィールが紅い目を細めてほほえましそうに見ている。

「アイリ？」

「貴女、今凄く良い顔してた」

そんな顔をしていたのだろうか？ぺたりと自分の頬を、魔術行使の影響で黒く変色した指で触れる。

「うん、貴女はそういう顔のほうがいいわ」

ぎゅっと腕に再び抱きついてくるアイリ。

「さあ、行きましょ、アーチャー。あの人がまつてるわ」

ふわふわと舞う白銀の髪、本当にイリヤによく似ている。

「・・・ああ」

腕をひかれるままに、かつて憧れた男の背中を、彼女の妻と共に追った。

side・切嗣

かちやかちかと、茶器が音を立てる。

褐色の指が優雅な仕草で紅く暖かな液体を、白く高級なティーカップに満たすと、アイリは子供のように目をきらきらと輝かせて感心したように嘆息をついた。

「美味しい」

こくりと飲んで、本当に幸せそうにそう告げる妻の言葉と表情に思わず頬が緩みそうに成るが、鋼の心で顔を引き締める。

「気に入ってもらえたのなら何よりだよ」

そう注げながら微笑み返す僕の未来の息子を名乗る女性も、それは充実した笑みを浮かべた。

「切嗣も、折角貴方の未来の息子が入れてくれたんだから、一口くらい口をつけたらどう？」

そんな妻の声に苦笑して口にカップを運ぶ。

確かにそれは妻の言うとおり美味しかった。正直言うとこんな美味い紅茶など飲んだことがない。だけれど、こんなことをするためにここに来たわけじゃないはずだ。

・・・全く何をやっているのだろうか。僕もこいつも。

僕の自室に招きいれた時、こいつは「長話になる。どれ、茶でも用意しよう」といいながら慣れた手つきで茶の準備を始めた。それはこの城の使用人用ホムンクルスに比べてみて、全く遜色のない優雅な手つきで、それだけでこれは人に給仕するのに慣れた人間だとわかった。

全く、接すれば接するほど謎が深まるばかりだ。

僕の未来の息子だという話だが別に鵜呑みにしているわけじゃない。それでも話してくれるというなら聞くだけは聞こうかと思っただけだ。

サーヴァントは聖杯戦争に勝利するためだけの駒。そこに感情を挟んだらこの戦争で生き残れなくなる。だから、情を移すわけにはいかないんだ。

この女の僕に対する目には確かに懐かしいものを見る色がある。だけど、それは別の僕だ。今の僕ではない。だから、このサーヴァントがどう思っているように僕とこいつは他人だ。そうでなくてはならない。

まるで自己暗示のようだ。けれどそのことに切嗣自身は気付いて

なかった。そう、思う時点で情がうつり出している萌芽なのだと  
いうことは、自覚するわけにはいかなかったから。

そして、話が始まる。

「さて。なにかから話せばいいものか。ああ、そうだな。私が「並行  
世界の未来から来た」といったと言った理由からにしたほうがいい  
か。と、その前に一つ言っておこう。私は、衛宮切嗣、貴方の並行  
世界の未来の息子と言ったが、私と貴方に血の繋がりはない。私は  
養子だったからな」

そう言って苦笑しながら、その紅い外套の女は優雅に紅茶のカッ  
プを口に運ぶ。

(養子・・・だつて?)

その言葉に内心驚く。この聖杯戦争でアイリは死ぬ。それは確定  
している。それで未来の息子だと名乗ったからには、てっきり後妻  
との間に生まれた子供かなにかだと思っていた。何故なら、自分が  
子供をわざわざ引き取って育てるとは思えなかったからだ。実の娘  
の愛し方さえ迷う自分だ。この血まみれの手にあんな小さな女の子  
を抱いて良いのか、それにすら苦悩しているというのに、それが、  
他人の子を引き取って育てる？はつきり言っただけで想像が出来なかった。

イリヤスフィール

「私はこの第四次聖杯戦争の後、貴方に引き取られた。その後成長  
した私は10年後私自身第五次聖杯戦争に巻き込まれることになっ  
た」

「な!？」

その言葉に驚愕する。第五次聖杯戦争だつて?それがおきたとい  
うことは第四次は決着を見せなかったということなのか。いや、そ  
れよりも驚くのは10年後といった言葉。聖杯戦争は60年周期の

はずだ。それがたった10年で始まったというのか。

「切嗣は聖杯を手に入れなかったというの・・・?」

アイリも動揺して告げる。それはそうだ。10年後ということは、つまり間違いなく第五次の聖杯は愛娘イリヤがなってしまうということなのだから。

「順番に話す。だから、今は落ち着いて聞いて欲しい」

宥める様な声で目の前の褐色肌に白髪の女が言う。それに、落ち着かせようと葛藤しているのか、アイリはこくりと紅茶を飲む。先ほどまであれほど美味く感じた紅茶が酷く味気なかった。

「あくまで、私の知っている歴史の話しよう。とにかく、私はマスターとなり、セイバーを召喚した。セイバーの真名は騎士王アルトリア・ペンドラゴンという少女だった」

少女?アーサー王が女だったというのか?

「そして彼女は第四次聖杯戦争にも召喚されていた。衛宮切嗣、貴方の手で。だから、私は第四次聖杯戦争のことも少しは知っている。熾烈な戦いを勝ち抜き、彼女は最後まで残ったそうだ。そして、聖杯は現れた」

遠い記憶を必死に思い出している、そんな顔で彼女は言葉を続ける。

「最後彼女は、衛宮切嗣あなたの手で、令呪の命によって聖杯を破壊したんだそうだ」

「そんなはずがないわ!」

がたん、と音を立ててアイリスフィールが立ち上がる。

「切嗣が、切嗣がそんなことするはずがない。だって、切嗣は」

「アイリ」

困惑した目で妻が僕を見ている。僕は軽く頷く。

「その僕は、僕じゃない」

「あ・・・」

何かに気付いたように彼女はうつむき、席に座りなおす。

「ごめんなさい。続けて」

こくり、サーヴァントは一つ頷いて続きを話し出す。

「聖杯は破壊して正解だったんだ。その理由がわかったのはオレが参加した第五次聖杯戦争だ。無色な願望器であるはずの聖杯は呪いに汚染され、破壊という形でしか願いをかなえない、壊れた玩具箱に成り果てていたからな」

「え？」

「衛宮切嗣、先ほど不思議そうにしていたな。何故わざわざ自分が養子を引き取ったのかと」

鋼色の瞳がじつと僕の目を覗き込んでいる。まるで、心のうちまで見透かすように。ざわりと、背中におかしな違和感のような感覚が走り抜ける。

「私の知る歴史では、第四次聖杯戦争はセイバーによって聖杯が破壊され終わった。しかし、既に呪われていた聖杯はそれだけでは終わらず、町を飲み込んだ」

「何？」

「死傷者約500名、燃えた建造物は約100にも及ぼうかという大災害、それは全て聖杯から漏れ出した呪いだ。私はその生き残りだったよ」

その言葉に、凍りついた。

「なんで、そんなことになったの？聖杯はなんで汚染されたの？」  
「第三次聖杯戦争でアインツベルンは勝利しようと呼んではいけないものと呼んだ。この世<sup>アンリ・ミュ</sup>全ての悪だ。だが、勿論神霊の類がサーヴァントとして召喚されるわけではない。呼ばれたのはこの世<sup>アン</sup>全ての悪を背負わされ殺された哀れな亡霊だった。史上最弱のその英霊は真っ先に倒されたのだそうだ。その後聖杯の中に吸収されたこの世<sup>リ・ミュ</sup>全ての悪は、その性質に従い、「悪であれ」という呪いをもっていった。それを聖杯が受け、無色であった聖杯は破壊でしかものを叶えない歪な願望器になりはてたのだ」

それは聞き流せない話だった。それがもし、本当なら自分がここにいる意味が全て根本からひっくり返されかねない。胃の中が冷た

い。

「とはいっても、あくまでこれは私の知っている未来の話だ。この世界まで同じとは限らん」

「どういうこと？」

アイリは青ざめた顔で尋ねる。それに、苦笑しながらアーチャーは「言っただろう、私がやってきたのはあくまでこの世界からすると並行世界にあたる未来なのだと」と応えた。

「私の知る歴史では衛宮切嗣が呼び出すのはセイバーのはずなのだ。しかし、呼ばれたのはこの私だ。その時点で私の知る歴史と食い違っている。なにより呼ばれたサーヴァントのクラス自体が違うのだ。当然私を知る、第四次聖杯戦争で呼ばれたサーヴァントやマスターにも情報の食い違う点はあるだろう。だから未来からきたからといって情報戦で有利だとは思わないことだ。それに、確かに私の知る歴史の聖杯は汚染されていたが、並行世界であるこの世界の聖杯まで汚染されているとは限らん」

その言葉にアイリはほっとしたように息をついた。

「だが、マスター。これだけは覚えていて欲しい」

すつと、姿勢をただし、彼女はまっすぐに僕を見る。まるで鷹の目のそれが僕を射抜いている。

「もし、この世界の聖杯も汚染されていたなら、その時の覚悟だけはつけておいてほしい。そして、最後言峰綺礼と二人っきりで対決するような状況になったのなら、私のほうがどんな状況でもかまわん。迷わず令呪で呼んでほしい」

お願いだ、と深々と頭を下げる。白い髪だ。アイリ以上に白い真っ白の髪。衛宮士郎だと名乗った。話に聞く限りでも日本人なのだろう。それがどうしたらこんな白い髪になるのだろうか。

がたん、と席を立った。

「切嗣？」

アイリが不思議そうに僕の名を呼ぶ。でもこたえる余裕もなく、僕は駆けた。

「切嗣!？」

ぐるぐると色んな考えが頭をまわる。思考がぐちゃぐちゃだ。こ  
んなの、魔術師殺しの衛宮ではない。僕は一個の機械のはずだった。  
ああ、きつと今の僕はとても見つとも無い顔をしているのだろう。

出て行く一瞬見た、自分のサーヴァントは傷ついた顔をしていた。

サーヴァントは道具だ。聖杯戦争を勝ち抜くための。道具に情は  
かけてはいけない。

けど、もしも聖杯が僕の望みを叶えてくれないとしたら？人を救  
つてくれないとしたら？僕はなんのために戦おうとしているのだろ  
う？アイリはなんのために死のうとしているのだろうか？

一つの道を信じて走っていったならよかった。呼び出したのがあ  
のアーチャーでなければこんな感情に苦しめられずにすんだのに。

憎んで、八つ当たりをすれば、少しは楽になれるだろうか。

サーヴァントを信じてはいけない。彼らは所詮死者だ。どんな高  
位の存在といっても道具なんだ。

ああ、でも、だけど、僕の息子だというあの女は、一体この英雄  
なき世の中でどうやって英霊の座へと上り詰めたというのか。

騎士の時代はとつくの昔に終わった。戦争は醜くむごいものだ。  
ぞくりと悪寒が駆け巡る。

あの鋼色の瞳の得体の知れなさに、僕は膝を崩して笑った。  
意味など到底有り得無い笑みだった。

NEXT?



第四次聖杯戦争編 02・並行世界の話（後書き）

というわけで第二話でした。第四話くらいから聖杯戦争始まるお。次回はイリヤのターンだ、多分。ちなみに三人のヒロインの次にイリヤが好きだ。（や、どうでもいいから）  
まあ、イリヤが活躍するのは第五次聖杯戦争編になるんですけどね。では、また次の話であいませう。

第四次聖杯戦争編 03・剣の夢と、魔術師殺しの答え（前書き）

やあ、作者のEKAWARIです。ばんははろ。

今のところの予定ですが、第四次聖杯戦争編は10話くらいで終わると思います。んでもって第五次聖杯戦争編は30話前後+聖杯戦争関係ない話があるもろで全部で50話完結くらいの話になるかなと今のところ見ているんですが・・・先長いな。

俺今まで書いた小説の長さ最高でオリバト小説の36話完結だったんだが・・・あつるえ〜？

ぶっちゃけ長編書くのは（モチベーションの関係あり）苦手なんですけどねえ。

まあ、ぼちぼち頑張ります、はい。

第四次聖杯戦争編 03・剣の夢と、魔術師殺しの答え

我知らず人並みに傷ついていたらしい。  
全く笑わせてくれる。

そんな感情とうに摩擦しなくしてしまっただと思っていたのに。

これも全ては答えを得たせいなのだろうか。

いや、もう別の自分たにんのせいにするのはやめよう。

求めてきた聖杯が汚染されている可能性が高い。

こんな話をいきなりしても信じる人間などそうはいない。

それが魔術師殺しと恐れられているあの男なら尚更だ。

それでも傷ついたのは、あの男、衛宮切嗣が並行世界とはいえ私の父であった男と同一の存在だったからだ。

誰かに嫌われたり憎まれたりするの慣れている。

それでも幼かった自分の全てを形作った男は別勘定らしい。

存外私も人間らしかったのだな、とそう思った。

『剣の夢と、魔術師殺しの答え』

side・アイリスフィール

夫が出て行った先を見て、一つため息をつく。

「ごめんなさいね、切嗣も悪気はないのよ」

「いや・・・」

褐色の肌に赤い外套の弓兵は、ちよつと困つたように眉根を寄せ、私を安心させようとする。うつつすら微笑む。唇の端が皮肉そうにつりあがる。

「君が気にすることは無い。下手な疑いをもたれるよりはよからうと、私の知っている事実を話したままであるが、まあ、普通の人間ならいきなり現れた見知らぬ存在に、「聖杯は汚染されている可能性がある」といってはいそつですかと信じられるものではないからな。まして、未来の息子だと言ってもそれを証明するすべもなければ、今の私は男でもないからな。信じられなくて当然だ、いや、マスターの反応は正しいよ」

そんな風になんでもないように言い、誤魔化すように紅茶を口につけているけれど、私にはそれが強がりには見えなくて、ぼふつと彼女の体を抱きしめた。元は男、とは本人の言だけれど、人間は第一印象に左右される生き物だ。私が会ったときには既に女だったし、私は元の姿を知らない。だから私にとってはなんといつてもアーチャーは女の子だ。正確には私自本人間ではないけれど。

「馬鹿ね、切嗣だつて本当はわかつてるわ。貴女、嘘をつくような人間じゃないでしょ？」

「さてな？狸だ、と言われたことはあるが？」

「馬鹿ね」

おどけたように言うから、ぎゅつと更に強く抱きしめる。

「意外だな」

アーチャーは少し感心したような放心したような声で告げる。

「君は信じたというのか？私の話を」

「ええ、信じた。信じました。だつて貴女切嗣と似てるもの」

その言葉に、包んだ体が僅かに強張る。

「なんというかね、眼差しとか色々、ほんの些細な部分かもしれなけれど、似ているわ。あの人と。親子だつていうのも納得出来ちゃう。それに貴女、イリヤのこともよく知っているみたいだったも

の

愛娘の名を出した時、先ほどよりも強く強張りを感じた。

「イリヤは……」

「貴女の世界でどうなったかなんて言わなくていいわ。あの子が長く生きれるように出来ていないのは母親である私がよく知っているから」

その言葉に、彼女は目線を下に向けて俯く。彼女の歴史では第五次聖杯戦争がおきたといった。なら、娘の結末に幸があるとは思えない。そんなことをわざわざ聞くつもりはない。第一、彼女の言ったとおり確かに彼女の知る世界とここは並行世界なのだろうから、ここにいる娘まで同じ運命がまつているとは限らない。イリヤは今ここで生きているのだから。

「ああ、そんな顔をしないで。でも、そうね」

ちよつと悪戯を覚えたような顔を作つて、彼女の顔を上げさせる。

「ふふ、私のこと、お母さんって呼んでくれてもいいのよ？」

「アイリ？」

驚いたように鋼色の眼が見開かれる。

「だって貴女、あの人の息子なんでしょう？ 私は切嗣の妻だもの。

あの人の子供なら私の子でもあるわ。まあ、今は息子じゃなくて娘かしらね？」

最後のほうの台詞に対しては、アーチャーは目に見えて落ち込んだ。「体は剣で出来ている。体は剣で出来ている」と、召喚されて気絶から立ち直った時と同じ台詞を小声でぶつぶつ繰り返しているけれど、一体なんの呪文なのかしらね？

「さて、行きましょう。城の中を案内してあげるわ」

今はこの褐色の手をとって行こう。この城で過ごすのもあと数日。まもなく私たちは日本の冬木へと向かう。どうせだから、このどこか夫と似た雰囲気をもつ新しい娘をイリヤスフィールと会わせてやりたい。そんなことを思いながら、私は足取り軽く部屋を後にした。

夢を見ている。いつもは僕は夢を見ない。夢を見るような眠りはしないからだ。

この9年は僕とは思えない穏やかな日々だった。それでも、だ。なのに、今夢を見ている。墓標のように突き刺さる剣の数々。赤い荒野。そこにいるのはたった一人の男、剣の王。

真つ赤な外套を纏って、背中を見せて立っている。知らない背中だ。なのに見覚えがあると思ってしまうたのは何故か。

体は剣で出来ている。

なんだこれは。

血潮は鉄で、心は硝子。

ここは一体なんだ。

幾度の戦場を越えて不敗。

知らない。こんな男の声は知らない。

ただの一度の敗走もなく、ただの一度も理解されない。

なのに何故か。

彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う。

得体がしれないのに、逃げようとは思えないのは。

故に、生涯に意味はなく、その体はきつと剣で出来ていた。

それは1人の男の歪でありながら真つ直ぐな生き様の詩だった。

画面が飛ばされる。

月だ。綺麗な月が出ている。場所は、武家屋敷・・・？

ぎくりと僕は夢の中とはわかっているけれど、体を強張らせた。

だって、そこは綺麗にされてはいたけれど、僕がこの聖杯戦争の為に購入した冬木にある屋敷そのものだったからだ。

男の子が現れる。赤い髪に、くりくりとした琥珀色の目が印象的な、それでも普通の平凡な小さな子供。その視線の先にいる男を見て僕は凍りついた。

着流しをきた僕がいる。いや、僕そつくりの、けれど僕より年上の男。穏やかで疲れたような顔。こんな顔はしらない。毎日鏡で自分の姿は見るけれど、僕はこんな顔をしない。そも、男の顔色。死の影が纏わりついている。あれは、病におかされているのか？何故。

月を見上げながら男は口を開く。男の子は横に座っている。僕によく似た男に対して信頼と愛情と尊敬の眼差しを向けながら、無邪気に見上げている。

「男が何か言っている。その声は聞こえない。そうだ、ここは夢の中だ。見えるのは映像だけ。音声はそこにはない。」

男の子はちよつと拗ねたような顔をして男を見上げている。いや、焦るな、動揺するな。僕は一個の機械。音声は聞こえない。でも映像は所々セピアに覆われているけど鮮明だ。唇を読み。彼らはなんと言っている。

「そうだね、正義の味方は子供限定で、大人になると名乗るのが難しいんだ。そんなこと、もっと早くに気付けばよかった」

啞然とした。尚も彼らの言葉は続く。

「そっか。なら仕方ないな」

「ああ、本当に仕方ない」

どくどくと心臓が早鐘を打っている。夢の中だというのに。

「だから、俺がかわりになつてやるよ」

そう語るその瞳はとて純粹で真剣で。まだ、彼らの言葉が続いている。だが、なんと言った？この子供は。かわりになる？正義の味方に？僕がかつて諦め、切望しているそれに？

「・・・ああ、安心した」

目を閉じ、本当に安らかに眠る僕らしき男。死んだ、とわかった。つうと、静かに本当に静かに男の子の目から涙が一筋落ちる。こんな幼い子供のする泣き方じゃない。

それらの光景は徐々にノイズに蝕まれ、掻き消えていく。僕が目覚めようとしているのだと唐突に理解した。

そして夢から覚めるその一瞬、きつと一秒にも満たない瞬間に流れた映像。

炎が街を飲み込んでいた。黒い禍々しい太陽が呪いを吐きながら笑う。生きとし生けるもの全て絶える死の世界。

僕は今まで生きてきて何度も戦場にいったことがある。戦場の不条理と醜さは身をもって知っている。でも、これは、なんだ？ただの災害？違う。もっとおぞましいものだ。

手を伸ばす子供。その手をつかんだのは・・・僕だ。  
救われた顔をした僕がその子供を・・・

「・・・！！！」

がばつと身をおこす。体からはびつしりと汗が滲んでいる。

懐中時計に目をやる。今の時刻は朝の四時過ぎ。寝ているのは僕の部屋のベットではなく、この城に無数にある客室のひとつのソファだ。昨日どうしても戻る気になれずここで夜をあかしたことを思い出す。汗を拭いながら立ち上がる。

「今のは・・・」

おそらく、間違いなく、あの褐色の肌に白髪のサーヴァントの夢なのだろう。

マスターとサーヴァントはラインによって繋がる。だから、稀にサーヴァントの過去をマスターが見ることがあるという。繋がりが深ければ深いほどおそらくその可能性はあがるのだろう。僕にとつては初対面でもあのサーヴァントからしたら僕は父親だ。確かにそれは繋がりが深いといえるのだろう。



最初に見たのは、剣の丘に立つ紅い外套の男だった。後ろ姿しかみていないが、白髪だったように思うし、衣装もあの女と細部が一緒だった。本人いわく元々は男だったという話だから、あれが本当の姿なのだろう。

しかし、次に見たのは・・・出てきたのはおそらくアーチャーの世界の僕なんだろうけど、あの赤い髪の男子は誰なのだろう。アーチャーは白髪に褐色の肌で鋼色の目をしている。けれど、あの男の子は赤い髪に琥珀色の瞳で東洋人らしい肌の色をしていた。アーチャーらしき人はその中には見当たらない。

そこまで考えた時、僕は彼女が昨日言った発言を思い出した。

『死傷者約500名、燃えた建造物は約100にも及ぼうかという大災害、それは全て聖杯から漏れ出した呪いだ。私はその生き残りだったよ』そう彼女は言った。第四次聖杯戦争後に引き取られたとも、養子だったとも言った。そして目覚める寸前に見たあの黒い太陽の死の世界のビジョン。救われた顔をした僕が手をとった子供、あれが・・・幼少のアーチャーなのか？ではやはり、あの赤い髪の「正義の味方になる」と言ったあの子供がアーチャーの昔の姿なのか。そう考えてみれば全く似ていないと思っていたが、あの男の子とアーチャーの共通点が見えてくる。

僕を見る、その眼差し。色も声も性別も年齢も違うのに、その表情は確かに同一人物だと語っていた。そこまでつらつら考え、はつと頭を振る。

「僕は何を・・・」

余計なことを考えようとしている。

「馬鹿げている」

僕の力はちつぽけだ。全てを救う正義の味方なんて不可能だ。僕はただ効率のいいように動くだけ。そんな僕がこれ以上何を背負えるというのか。あのアーチャーも言ったとおり、先ほど見たのはあくまでアーチャーの世界の顛末で、僕の生きるここも同じになるとは限らないんだから。

あの男の子の影が頭をよぎる。それをイリヤの顔を思い浮かべることで振り払う。

今日はあの子と遊ぶことになっている。イリヤと過ごせるのももう残り僅かしかない。あと数日で僕もアイリも日本へと旅立つ。あとは聖杯戦争がおわるまで会えない。だから、その数日を娘へ捧げることにした。これは僕の、父親としての唯一してあげられること。今日くらいはただの馬鹿な父親でありたい。

『オレガ、カワリニ、ナツテヤルヨ』

声は聞こえない。頭の奥で警報が鳴っていた。

side・アイリスフィール

「ふう、貴女の手つてまるで魔法みたい」

私は感心して思わずため息をつく。その視線の先では不思議そうな顔をして首をかしげるアーチャーが、赤いエプロンを身に着けて料理を作っている。

昨日好きなこととか趣味とかないのかと尋ねた時、アーチャーはあつげにとられながら「まあ、料理は好きだな」とぼろつと言ってしまったという風情で告白した。その後我に返ったアーチャーは「いや、でも趣味とかではなくてな、誰もやる人間がいなかったから仕方なく身についただけで！ほら、知っているだろう？切嗣はじいさんずばらで、そういうことできなかったし、ああ、何故笑うんだ、アイリスフィール！？」とそんなふうに続けるアーチャーを前に思わず笑いが止まらなくなってしまった。ようやく、笑いが止まった頃には、アーチャーはすっかり拗ねてて「ごめんね？」と謝っても「なんの話だ」とかいいながら、つーんといじけてて、そんな子供っぽい仕

草があんまりにも可愛かったから、くすくすと笑うのをやめれなくなった。その私を前にしてアーチャーも諦めたのか、仕方ないなつて顔をしてため息をつくものだから、「じゃあ、一度料理を作ってくれる?」と聞いてみたら、「ふむ。頼まれたなら仕方ない」とそわそわとしはじめて、そんなところがまたほほえましくて笑い出しそうになつたけれど、それは必死で我慢して、「じゃあ、明日の朝お願いね」と頼んだのが寝る前のこと。

アーチャーがいうには和、洋、中、他にも世界中の色々な国の料理が大抵つくれるということだから、どうせなら切嗣の故郷の料理が食べたいと言って、和食を作ってもらうことにした。「ふ、和食で私に及ぶものなどそうはおらんよ。何、明日の朝を期待していたまえ」なんて、自信満々に言うところが、私にはやっぱり可愛く見えるのだけれど、アーチャー自身は可愛いと言われるのはあまり好きじゃないみたい。

(でも、我が子を可愛いと思うのは、母親としてはとても真つ当な感情なんじゃないかしら?)

聖杯戦争が終わる前には「お母さん」と呼ばせてみせるのが密かな目標だ。

じいつと、そんなことを彼女が料理している姿をみながら考える。「アイリ」

料理からは視線を逸らすことなく、アーチャーが私の名前を呼ぶ。「見ててそれほど面白いものではなからう。君は向こうでまっついたほうがいいのではないかね?」

「いえ、とても新鮮よ、退屈しないわ」

正直な気持ちを告げる。昨日一緒にいて、アーチャーが結構な気遣い屋なことには気付いた。でも、その気遣いは時々のを外れていることがある。私は一緒にいるだけで楽しいのだけれど、そういうこと、わからないものなのかしらね?

「そういえば、アーチャー」

そうだ、この機会だから気になつて聞くことを聞いてしまおう。

「なんで貴女が召喚されたのか心当たりってある？私は貴女が召喚されたことに不満はないけれど、不思議なのよね。アーサー王の剣の鞘を触媒に召喚を行ったのに他の英霊が出てくるなんて。勿論、英霊は召喚者と似た気質のものが召喚されやすいのは知っているわ。その点でいうとアーサー王と切嗣はあまり相性はよく無さそうだし、あの人の未来の子供だっていう貴女のほうが相性がいいのは当然だと思うの。でも、用意した触媒は確かなものなのに、その触媒の英霊が呼ばれないなんて変なんじゃないかしら？」

「まあ、私も聖剣アウァロンの鞘とは浅からぬ縁があるからな。そのせいなのだろう。」

ん？どうということだろう。

「私は大災害の被災者で、その後切嗣に引き取られた。私がいた地区一角、生き残りは私だけだった。」

淡々とした声でアーチャーは続ける。そこには有りの俣を話す色があるだけで、そのことを話す後暗さとかさういった感情は見えない。

「そんな子供が無傷なわけがない。切嗣は私を生かすために、鞘を私の体に埋め込んだのだよ。」

その言葉に、驚き、目を見開く。

「その十年後聖杯戦争でセイバーを召喚したのも、私の体にあった鞘が原因だった。その後私は鞘を元の持ち主であったセイバーにかえしたわけだが・・・何せ、十年も私の体の中にあっただ。私自身の触媒になりえるのも、まあ確立は低いけど、有り得ないわけではないよ。」

それは、どう声をかけていいのだろう。

「さて、おしゃべりはここまでにしよう。料理は出来た。運ぶのを手伝ってもらってもいいかね？」

朝食の場に赴いたとき、僕は思わずあっけにとられた。

何故なら其処に並んでいる食事はいつものアインツベルンの豪華な食事などではなく、純然たる日本食ばかりだったのだから。

ほかほかの白米に、すまし汁、白菜の浅漬けに、青菜のおひたし、そして肉じゃが。

誰が一体これを作った。

そしてもう一つ信じられない光景。

イリヤスフィールが自分のサーヴァントの膝の上ののって嬉しそうにはしゃいでいる。そしてそれをほほえましく見守っているアイリ。一体何がどうなっている。

「あなた、おはよう」

「ああ・・・おはよう、アイリ」

とりあえず、動揺したまま妻に挨拶を返す。

アーチャーはイリヤを膝にのせたまま、僕に視線を合わせて「おはよう、マスター」と言った。その声が感情を押し殺し、サーヴァントとマスターとして、線引きしようとしているように聞こえた。

それは本来喜ばしいことだ。なのに、ちくりとどこか痛む気がするのは何故なのか。

「もぉー、キリツグったら遅いんだから！」

ぶくりと可愛らしく頬を膨らませて怒る愛娘。

「ああ、ごめんよ、イリヤ」

思わずただの父親の顔になってイリヤに謝る。

「せっかく、アーチャーがキリツグのこきょーの料理、つくってくれたのに」

その言葉に思わず、吃驚して自分のサーヴァントを見やる。アーチャーは困ったように眉根を寄せて、苦笑した。

「キリツグ？」

きよとんとした顔でイリヤスフィールが自分を見ている。不審に思われないようにすっと視線をはずした。

「ああ、なんでもないんだ。それよりイリヤ、いつの間にアーチャーと、その、そんなに仲良くなっただい？」

「んーとね、昨日お母様が部屋に連れてきてくれたの。あ、アーチャーたらすごいなのよ？すごくたくさんのことしてて、いろんなお話してくれたの。それでね、わたしにすごくおいしいホットミルクをつくってくれたの！」

そのときのことを思い出したのだろう。イリヤは目に見えてはしやぎながら僕に昨夜のことを話した。

「もう、イリヤ。そのあたりにしておかないと、折角のお料理が冷めてしまうわ」

苦笑しながらアイリがそうたしなめると、イリヤはあっと思いで出して口をつぐんだ。

「キリツグ、早く座って」

娘にせっつかされては仕方ない。席に着く。そして、イリヤが食べようとしたとき、まったをかける声があった。

「イリヤ、食事をするときにはね、言わなきゃいけない言葉があるんだ」

「なあに？」

アーチャーを信頼しているのだろう。イリヤは無垢に尋ねる。

「いただきます、だ。食べ物に対する感謝の言葉、だよ」

そう言っって本当に優しく、そのサーヴァントは微笑んだ。「いただきます」なんて懐かしい言葉なのか。ずっと忘れていた気がする。アイリは感心したようにアーチャーの言葉を聞いている。

「「いただきます」」

アイリとイリヤの声が重なる。

「ほら、キリツグも早く！」

「ああ・・・」

湯気を立てる料理の数々は高級で豪華なものではない、だけど、

とても美味しそうに見えた。

「・・・いただきます」

イリヤが小さな口に肉じゃがを頬張る。

「美味しい！」

ぱあっと、花のように娘が笑う。アイリも「美味しい」とじつくりとかみ締めるように言う。僕はすまし汁に手を伸ばす。

美味しかった。

それは特別高級で豪華じゃないけれど、それでも凄く特別な味でした。暖かで素朴で包み込むような、家庭を象徴する、作った人間の優しさが現れているそんな味がした。

何より、他の料理にも箸を伸ばしたとき、その事実気付いた。

妙に僕の舌に馴染む。初めて食べるはずなのに、まるで食べなれていたかのように。いつも食べていたかのように。

「ほら、イリヤ、口についている」

「え、どこどこ？」

「もう、とれた」

そんな会話を繰り返しながら、イリヤの口元を手を取ったナプキンで拭い取っているアーチャー、その光景を見たこと、それが決定的だった。

サーヴァントはマスターの道具だ。聖杯をとるためだけの。道具に情をかけてはいけないし、情をかけるべきではない。

なのに、僕は、ああ、本当の家族のようだ。

そう思ってしまったんだ。

もう無理だ。

認めよう。

僕はあのサーヴァントアーチャーを使えない。

N  
E  
X  
T  
?



第四次聖杯戦争編 03・剣の夢と、魔術師殺しの答え（後書き）

や、次回から冬木に舞台が移ります。そしてセイバーも、とうとうお披露目です。

まあ、あまり意外性ないあの方なんすけどね。

#### 第四次聖杯戦争編 04・誓いと、開始（前書き）

途中で一回データトーンで鬱になった、作者のEKAWARIです、ばんははる。

中盤当たりの展開構想大体終わってるんでオチについてうつらうつら考えてたんですが、多分この話はハッピーエンドになるんじゃないかなーと思います。ただし、全員救われるとかそういう大円満なエンディングを迎えることはないとも断言できそうですな、うん。まあ、そんな感じですが、第四次編第四話どうぞ。

第四次聖杯戦争編 04・誓いと、開始

暗躍。

其れは、始まる前から目論見は破綻していた。

屈辱に塗れながら、それでも我らの悲願を叶えるために呼んだ男に与えた触媒。最優名高きセイバーの中でもおそらく最強に類するだろうカード。

今度こそ悲願を。第三魔法をこの手に。

なのに召喚されたのは、あの男の未来の子を名乗る得体の知れぬ、いかにも弱げなサーヴァント。

落胆した。

この度の聖杯戦争も望みを叶えられる可能性は僅か、塵芥だろう。イレギュラーがその結果を呼んだ。

ならもう良い。捨て鉢にしてしまえばよい。

トオサカの若造が面白い触媒を手にいれたという。

身には過ぎたる英霊の触媒を。

そうだ、第四次にもう期待はかけられん。

第五次、そのときこそ、我らが悲願を果たそうぞ。

『誓いと、開始』

こんな風に飛行機にのる、というのは一体どれくらいぶりになるのだろうか。摩擦し果て、死したのち世界の掃除屋として数え切れないほど永い時を過ごしてきた我が身には既にわからない。

高度が落ちた。懐かしい風景が広がる。まもなく、日本にはつくだろう。否、領域という意味においては既に日本にはついていないのだが。

「何を考えているの？」

ふいに隣から柔らかな声がして振り向く。そこにいるのは、マスターであり、私の養父だった男と同一の起源をもつ魔術使い、衛宮切嗣の妻、アイリスフィールだ。切嗣はここにはいない。

「いや、大したことはないのだが・・・そうだな。ちょっとした疑問というやつだよ。何も私が君の供にならずともよかったのではないかね？ 霊体化して乗り込めば、わざわざ服を用意する手間も省けただろうし、飛行機代とて浮いただろう？ なのに何故わざわざ私に実体化させたまま君の同行者としたのか、その辺りがどうにも解せなくてね、いや、君を責めているわけではないのだが」

そう言うと、アイリはくすつと笑いながら胸のうちを明かす。

「それ、私が切嗣に頼んだのよ。女の一人旅なんて傍目にも物騒でしょう？ それに、服を用意する手間とか、飛行機代とか、貴女おかしなことを気にするのね」

そんなことをくすくす笑いながら言うアイリスフィール。仕方ないではないか。私は昔からしがない凡人だったし、これは性分というものだ。それに儉約は日本人の美德だ。節約は得意なんだ。

「それとも何、私の隣は嫌？」

「まさか。君ほど美しい女性と連れ立って歩けるなど、光栄の至りだよ」

そう切り返すと、目の前の貴婦人はっこりと品のある微笑を浮かべて「ありがとう。でもアーチャー、貴女は今女の子なんだから、その台詞はなんだかちよつと変よ?」という言葉のべ、その言葉にそういえば今は女だった我が身の不幸にへこんだ。体は剣で出来ている・・・私は大丈夫だ。

ふと、じつと見つめるアイリの視線に顔を上げる。

「やっぱり、切嗣のこと、怒ってる?」

「何故私がマスターのことを怒るといふのだね?」

「1人で先に日本に行ったこと」

確かに其れに対して思うところは色々ある。だが、この感情は怒りなどではない。

「怒ってない」

「そうね。貴女はそういう人みたいだもの」

アイリは一つため息をつく。

「確かに、聖杯戦争のマスターでありながら、私と別行動をし、1人で走るその姿勢には思うところはあるが・・・」

「そういうことじゃ、ないでしょう?」

たしなめるように言う声。まるつきり母親に怒られる子供の気分だ。私に母の思い出など存在していないが。

「怒ってないのは本当だ。だがそうだな・・・心配事になるが、切嗣きんの食生活が心配だ。あの人のことだ、1人なのをいいことにファーストフードばかり食べていそうだ。体は資本だというのに、あの人は昔から食の大切さを認識していないからな」

ちよつと話を横にずらす。が、言っていること自体は半分以上本音でもある。

「いや、その発言、あなたまるで切嗣の母親みたいよ?じゃなくてね、アーチャー・・・もしかしてわざと言ってるのかしら?」

嘘は許さなくてよ?と紅い目がきらりと輝く。全く、昔から私と関わる女性は強い人ばかりだな。これ以上の誤魔化しはやめようか。心配してくれているのだろうし。

「そう、だな。正直に言えば、少々落ち込んでいるのかもしれないな」

衛宮切嗣マスターは自分と共に戦えとは決して言わなかった。あの男が私じいさんに下した命令はたった一つ。「アイリの傍にいて、その身を守れ」  
それだけ。

これがただの戦場なら、妻を託した男の言葉に信頼を感じ取れたかもしれない。しかし、これから参加するのは魔術師同士の殺し合いの儀式である聖杯戦争だ。どんな優秀なマスターでもサーヴァント相手には太刀打ち出来得るものではない。そんな世界の中、切嗣はサーヴァントとの別行動を選択したのだ。おそらく、切嗣は自分の手で事を成し遂げようとしているのだろう。なにせあの男は魔術師殺しに特化した暗殺者だ。だが、私と別行動をとる理由については魔術師殺しとして腕に自信があったから、とかそういうことは別の次元に問題があるのではないかというのが私の推測だ。あくまで勘だが。

危険を犯し、マスターとサーヴァントが別々に行動する、それはセイバーが相棒あいてならわからなくもないのだ。彼女は本当に真っ直ぐな英霊で、切嗣じいさんとは相性がさぞかし悪かったであろうし、セイバーが敵を惹きつけている隙に敵マスターを討つ。切嗣がそういう戦法をとるだろうことは容易に想像がつくし、彼女相手ならそのほうが向いている。

だが、この身は弓兵だ。視認出来得る限り半径四キロが攻撃範囲という、人間には真似が出来ない超遠距離狙撃能力を有し、お世辞にも彼女のように目立つ派手さもなく、隠密行動もそれなりにこなせる私なら、そう切嗣との相性も悪くないはずなのだが。やはり、信用されていないのだろうか。いや、信用されていないのだろうか。思わず落胆する。今は女の体に何故かなくなってしまったとはいえ、私は男だ。かつて憧れその背を追った相手に認められたい、共に肩を並べて戦いたいという欲求は当然のように存在する。まして、今の私は英霊となり、切嗣よりも強い力をもつものだから尚更だ。なの

にこうも見事に置いていく選択をされるといのは、前提で拒絶されていると感じても仕方ないだろう。

やはり私の得体の知れなさが元凶か。それとも、今の見目が女だからか。

思えば爺さんは昔から女に甘かった。「女の子を泣かせちゃ駄目だよ」と何度も言われた。流石にサーヴァントを相手に守るべき女の子・・・なんて、私が衛宮士郎と呼ばれていた少年時代のようなことは思っていないだろうが、それでも女の身ということでも多少侮られている面はあるのかもしれない。

マスターが一言命令すれば、私は敵を斬る剣にもなり、敵を討つ矢にもなる。ただ、一言命じてくれれば私はいくらでも最強の自分になれるのに。その面に関して言えば確かに、凜は最強のマスターだった。眩しく鮮やかで、誰よりもかっこよくて、魔術師らしからぬ甘さを心の贅肉といいながら大事に抱えていた元、主。私が裏切ってしまったあの少女は今もあの世界の衛宮士郎と一緒にいるのだろうか。

そんなことをつらつら考えていると、私の顔を覗き込むアイリの姿に気付いた。優しく髪を梳くように頭を撫でられる。もしかしてこれは慰められているのだろうか？なんとというか、この姿になっから情けない面ばかりをさらしている気がする。

「大丈夫。切嗣だって、別に貴女のことを認めてない、とかそういうことじゃないわ」

「そうだったら、いいのだがな」  
ちよっとおどけたような声で言う。出来るだけ皮肉そうな顔を意識した。

「切嗣は、多分ちよっと迷っているだけなのよ。貴女こそ、大丈夫なの？」

「それはどういう意味の問いかね？」

「この戦いで叶えたい願いはないんでしょう？」

言外に戦う意義はあるのかと尋ねられて苦笑した。

「何、心配無用だよ。昨日の誓いを果たす。それだけで私には十分だ」

そして、その誓いをした昨日のイリヤとの別れを思い出す。

\* \* \*

「行っちゃうの？」

紅くて大きな目がじいっと私を見上げている。無垢な子供の瞳。私を知るイリヤよりも幼いその子は、年相応に子供らしく、それでもやっぱり私の知っているイリヤだった。

「早く帰ってきてね。レディをまたせたら駄目なんだから」

帰ってくるのが当然と信じるその台詞にちくりと胸が痛む。私の知る世界のイリヤ、彼女の元には最期まで切嗣ちちおやが帰ってくることはなかった。衛宮わたし士郎を恨んで、帰ってこなかった父を恨んで、復讐を胸に冬木へとやってきた雪の妖精のような少女。きつとずっと父親がかえってくるのをまつて、待つて待つて待ち続けて傷ついたあの子。

もしも、帰ってこなければ、この世界のイリヤスフィールも同じ運命を辿るのだろう。

「イリヤ」

そっと、その雪の色をした髪に手をのばし、壊れ物を扱うように細心の注意を払って撫でた。

「アーチャー？」

きよとんと私を見上げるあどけない顔。

「イリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。君に誓おう」

すっと、膝を折り、彼女と視線をあわせ、恭しく姫君にするようにその白い右手をとり、そっと触れるだけの口付けを手の甲へ落とす。

「我が身は弓と成り矢となり敵を貫こう。我は衛宮切嗣の盾となり、



剣となるう。そして再び君の父を君の元へと帰そう。サーヴァント、アーチャーの名において誓う。約束しよう。イリヤ、君の父親は必ず君の元へ帰す」

そう、父親を娘から取り上げてはいけない。もう二度とイリヤに復讐を誓わせてはいけない。この誓いはきつと果たす。絶対の約定。

「アーチャーも」

むうと、ちよつと拗ねたような顔をしたお姫様イリヤが私を見ている。

「アーチャーも戻ってきなさい」

その言葉に一瞬、私は時を忘れて呆けた。

「ああ・・・」

必要とされているのか、私は。このイリヤと共にいたのはほんの短い時間だった。彼女に好かれたのだろう。正直言うと私まで帰ってくるという可能性はとて小さい。それでも、ああ、人に好かれるというものは嬉しいものだったな、と、忘れていた感情が揺れる、跳ねる、息を吹き返す。小さく白いお姫様、イリヤ、イリヤスフィール。私の妹であり姉である少女。絶対の約定は出来ない、それでも彼女の願いは出来る限り叶えてやりたい。

「そうだな。イリヤ・・・いつてきます」

「うん、行つてらっしゃい」

世界の奴隷たる私には過ぎたる望みかもしれないけれど、笑顔で手を振る彼女に、応えたいと思った。

\* \* \*

「さて、と」

空港に着いた。アイリスフィールは伸びを一つすると私に振り返る。

「さ、行きましょ」

にっこりと微笑む気品ある美貌。私は一つ頷くと、彼女の荷物を手に従者よろしく連れ添う。

本当は荷物持ちにメイドが二人ほどつき従う予定だったのだが、私が実体化してアイリの供になるということが決まった時点で、彼女たちはお役御免にした。聖杯戦争に関係ない人間がわざわざ危険に身をさらすことはないし、正直女性に荷物をもちさせるのは気がひけた。それに元々荷物を届けたら彼女たちは帰還させる予定だったと聞くし、問題はないだろう。まあ、付き人がいるのが当たり前で育ったアイリスフィールが、メイド無しに生活をするというのは苦労をしそうな話だが、幸いにも私は家事が不得手ではない。何、マスターの命は彼女を守り共にいるとのことなのだから、身の回りの世話を私がやいても構わんだろう。

思わず苦笑する。全く私も現金なものだ。つい先ほどまで切嗣と肩を並べて戦えないことに落胆していたというのに、今度は彼女との生活を愉しみにしているとは。

気付いたら思い出し笑いをしていたらしい。そんな私を見て、彼女は満足したように一つ笑うと、足取り軽く市井へと向かう。人々の視線が集まるのがわかる。

アイリスフィールは美人だ。白く透けるような肌に、汚れ仕事一つ知らないかのような白魚の如き繊細な指、魅力的で大きく大きな瞳に小さな口、髪は雪のような白銀で、枝毛ひとつ見つからぬほど優美に長く、その体型も女性として出るところは出た理想的な体をしているともいえるだろう。更にその雰囲気、貴族である彼女は文字通り深窓の姫君である。今はアインツベルンの城で身に着けていたドレスではないが、それでも纏っている衣装は庶民には手の届かないブランド品である。それが嫌味なく彼女の体を飾り立てている。これで人目を惹かないはずがないのだ。

なのに彼女は自覚がないのだろう。きょとんと困惑した顔で一つ首をかしげる。

「私、何か変かしら？」

人里から隔離され、庶民には目の届かない場所で生きてきたアイリスフィールに、一般人の道理がわかるう筈がない。どうやら、彼

女は自分が目立っているのはその美貌のせいだとは認識出来ないらしい。

「いや、そういうわけではない。皆が私達を注目しているのは、アイリスフィール、君が美しい女性だからだよ。気にすることは無い」「そういうものなの？」

「まあ、目立っている原因の半分は、私にもあるのかもしれないがね・・・」

言いながら思わず自嘲の笑みが出た。私は自分の着ている今の衣装に視線を落とす。

執事服だった。

なんでそのチヨイスかというと、アイリスフィールに渡されたのがこれだったからだ。他に理由はない。今は女の体になっていないから、浮くのではないかと危惧したが、鏡で見るとそこまで浮いてはいなかった。だが、普通の街の往来でそもそも執事服を着るという時点で浮いているといえば浮いているのだ。コスプレと思われるも仕方ないだろう。

まあ、女になってまでこの服を着ることになるとは思わなかったのだが。

「似合っているわよ？」

アイリは釈然としないといった顔でそんな感想を漏らす。思わずため息をこぼす。

「アイリ、君は知らないのかもしれないがね、普通の人間は執事服を着て街を練り歩いたりなどしないのだよ」

「あら、だって貴女、私とお揃いの服は嫌なんですよ」

いや、まあ、それは拒絶する。たとえ今の我が身は女でも、心は男なのだ。女性物の服などハードルが高すぎる。多分身に着けるとき、自分が変態になった気分襲われることは想像に難くない。

「私としては、アーチャーにもっと可愛い服も着て欲しいんだけど。そうね、貴女は元々は男の子だったって話だもの、流石に可哀想かなと思っただのよ？」

で、その結果がこの執事服か。

「でもその格好を見たときは驚いた。よく似合ってるんだもの」

「なににせよ、そろそろ移動しないかね？」

とりあえず話題を変えて凌ぐことにする。

「そうね、行きましよう。アーチャー。私、外の世界に出るの初めてなの。ふふ、今から楽しみだわ」

「それは頑張つてエスコートせねばな」

そして二人で笑いあった。

### side・遠坂時臣

私、冬木のセカンドオーナーである遠坂家当代当主、遠坂時臣は、ソファーに腰掛けながら、知らず重いため息をこぼしていた。

その理由は先日やってしまった、あまりに痛すぎるミスについてだ。

遠坂家には代々伝わる呪いがある。それは「ここぞという時にうつかりをやらかす」というもので、有体にいえばその呪いが発動してしまったのだ。

聖杯戦争に勝利するために手にいれた最強の切り札、聖遺物である「この世で初めて脱皮した蛇の抜け殻」の化石が何者かに盗まれてしまったのである。

変わりに手に入れた間に合わせの聖遺物で急いで別の英霊を召喚したのはいいが、なんとも惜しいことをした。あの盗まれた聖遺物から召喚されるであろう英霊はおそらく何者も太刀打ち出来ぬほどのカードだったというのに。やはり手に入れたその日に召喚を行わなかったのが悪かったのか、一時的とはいえ、工房の外に出してしまったのが悪かったのか。過ぎたことを言ってもしょうがないけ

れど、それでも言わずにはおれない。

「何を辛気臭い顔をしておる」

ふいに、自分の呼び出したサーヴァントの声がして、そちらを見る。  
やる。

「セイバー」

そこにはけぶるような金髪を紅いリボンで結び、緑の瞳に白磁の肌の、美しい紅いドレスの少女が、優雅に茶を飲みながら座っていた。  
た。

「奏者よ、そのような顔ばかりするでない。余まで気分が悪くなるではないか」  
マスター

この召喚されたサーヴァントは色んな意味で時臣の予想を裏切る人物だった。

「君がセイバーであることが少し不思議だね」

そう言いながら苦笑する。そこには目当ての英霊が召喚出来なかった落胆をおくびにも出さない完璧な作り顔が存在していた。

「ふん、余が最優のサーヴァントであることに、なんの不服があるというのだ、奏者よ」

そうだ、一番の予想外で、嬉しい誤算だったのはこの呼び出された英霊が最優と名高きセイバーのクラスで呼ばれたことだ。

この人物の伝承のどこにもセイバーを彷彿とさせるところは存在していない。いや、有名な人物ではあるが、英霊であるということですら驚かざるを得ない人物というべきか。でも、理由はどうあれセイバーとして呼ばれた彼女のステータスは軒並み高い水準を誇っている。まあ、対魔力がセイバーとは思えないくらいには低めなのが気がかりだが、予想よりも使えそうな人物だったというのは、素直に喜ぶべき点だろう。女性だったということも驚くべき点なのかもしれないが、元の伝説からして、女装して男の嫁になったあの、男を去勢して妻に娶ったただのという話の持ち主である、この人物を相手に性別をどうのこうのというのは触れずにいるのがベストだろう。それに彼女のもつ宝具は使いどころさえ誤らなければ十分最強

と呼べる。

確かに目論見の英霊は召喚出来なかった。だが、私は遠坂の当主として優雅にこの戦いを勝ってみせよう。遠坂の悲願を背負う私はこの戦いに勝ち抜かなければならないのだから。

聖杯は私が手にする。

「まさか、不服などないよ。勝ちに行く。いけるね？セイバー」

「ふん、誰にいつておる。余は皇帝ぞ、奏者は大船にのったつもりでおればよい」

そう、暴君と名高きローマの第五代目皇帝ネロ。それがセイバーの真名。

彼女は不敵に笑う。その顔に気負いなどない。

ふいに部屋においた魔力の振り子が反応したのに気付きそちらを見やる。

教会からの連絡だ。どうやら七人目のサーヴァントが召喚されたらしい。

「セイバー。七人目だ。これより聖杯戦争は開始される」

「ほお、ようやくか。ふふん、奏者よ、そなたは余の後ろを見ているがよい。ああ、愉しみよな。まだ見知らぬ猛者よ、余と死の舞踏を踊ろうぞ」

からからと少女が笑う。

そう、今夜、この少女の笑いを引き金に聖杯戦争はここに始まった。

NEXT?

#### 第四次聖杯戦争編 04・誓いと、開始（後書き）

というわけで、セイバー＝赤セイバーなのでした。ちなみにわしは現在FateEXはアーチャールートクリア済みで、セイバールートはまだ二回戦までしか進んでないっす。宝具や正体はネタバレ見えて知ってるっただけ。

まあ、ガウエインがセイバーとして召喚とかのほうは、ランスロットと因縁あって面白いことになったのかもしれないんですが、正直言いますと、この「うっかり女エミヤさんの聖杯戦争」のメインストーリーは第五次聖杯戦争編の構想になっていますので、第四次戦争編は丸ごと全部プロローグみたいなもんです。よって当然ながら戦闘シーンに力をいれるどころか、バトルシーン飛ばして次々場面展開していく予定。故に戦闘の面白さで設定を考えてもなあというのと、やっぱりジル・ド・レエが「ジャンヌ」とセイバーを誤解って感じがいいなと思ったので赤セイバーに召喚されてもらいました。あと、ぶっちゃけZEROでは青髭組とイスカンドル組が好きでつ。あと、雁夜。あの不憫っぷりとか色々。まあ、好きだが、好きなキャラだから書くとは限らないんですけどね。メインが何かかっていうほうが大事でしょうから。無理矢理出すのは違うと思う。

まあ、そんなこんなで次回、英霊が複数出るよ！お楽しみに？

閑話 冬木の街で（前書き）

ええと、書く予定はなかった話なので番外編ということでファイナルアンサー。

つか、五話が長くなるだろうなあと予想しながら書き出したはいけれど、予想以上に長くなるもんだから息抜きに書きました。書いたからには上げようと思いました。まる。

次回、最初は登場させない予定だったけど、やっぱり青髭の旦那出そうかなと思います。



## 閑話 冬木の街で

side・エミヤ

夕暮れで赤く染まる冬木の街を、こんな風にアイリスフィールと歩くというのは不思議なものだ。

ここはとても懐かしく、同時に全く知らない街でもある。

凜と参加し、もう1人の自分に答えをもらったあの第五次聖杯戦争の時も、霊体になっていたとはいえ、凜と共にこうして街を歩いた。体感的にはあれから一月も経ってはいまい。

だが、あの冬木の街とここは別だ。ここは並行世界とはいえ、凜と歩いた街の十年前の姿だし、この時代にいる私はエミヤシロウではない、両親の庇護の元にいるだろうおそらくは平凡な子供だろう。私は、かの聖杯の泥によって引き起こされたあの大災害以前の記憶がない。だから、あれが起きていないここは私の故郷ではないのだ。

そんな街を、自分を引き取った男の並行世界の妻である女性と二人で歩く。

「凄い活気ねえ………」

美しい顔に感嘆の情を乗せて、夕日よりも尚紅い瞳を輝かせてしみじみと呟くアイリスフィール。その姿は子持ちの人妻というよりも、無邪気な子供を連想させる。自分の頬が自然と緩むのが解る。

「なんなら、少し見ていくかね？何、聖杯戦争のメインは夜だ。少しくらい構わんだろう」

本当はこんな提案はするべきではない。確かにメインは夜とはいえ、聖杯戦争は既に始まっている以上、昼間でも堂々とサーヴァン

トを実体化させて連れ歩かせるというのは、危険なことだし、本当は止めるべきなのだ。

だが、危険だとわかっていてもそう提案したのは、おそらくは生涯をあの冬の城で過ごしてきただろう彼女にとって、これが正真正銘の初めての自由な時だったからだ。

聖杯戦争の為に生まれ、聖杯戦争の為に死んでいこうとしている彼女。此度の聖杯である彼女もやはり、敗退したサーヴァントを取り込めば取り込むほど人間から機能が離れていくのだろう。

既に衛宮士郎しんぐわんではない私は、アイリが聖杯戦争後も生きているなんて楽観視することは出来ない。私に出来ることなどたかがしれている。それでも、この血まみれの手で救えるものがあるとすれば、せめて、死に逝くその時まで彼女の心だけでも守りたい。

これはイリヤと交わした誓いのように口に出して交わしたのではないけれど、これも私が此度の聖杯戦争で決めた誓いである。

「いいの？」

アイリはまるでいつかのイリヤのような顔をしてそんな言葉を放った。

私がこくりと頷くと、彼女は本当に嬉しそうな笑顔を浮かべた。思わず私まで嬉しくなるような笑顔だ。たとえ敵が現れても恐れることはない。こんな彼女の笑顔を見ただけで、私には十分だ。どんな相手だろうと戦えるさ。

「その前に、少し寄り道をしてもいいかね？いつまでも荷物を抱えたままでは観光も気分がのらなからう？」

茶目っ気を出して片目をつぶり、いつもの皮肉気な口調でそう告げると、アイリは不思議そうな顔をして私の後をついてくる。行き先は宅配業者だ。

絶世の美姫である西洋美人のアイリスフィールと、一見日本人には見えないだろう、執事服に身を包んだ私という組み合わせを前に最初業者は驚いていたようだったが、私が日本語を問題なく使えることに気付くと、ほっとしたような顔を浮かべて用件に応じ始める。

交渉は五分も経たずに終了した。

その私と業者のやり取りをアイリは感心したように見つめていた。

「・・・と、ではそのように。さて、行こうか。・・・アイリ？」

「え？何？」

「どうしたのかね？そんなにぼーとして」

「いえ、貴女、アーチャー、随分手馴れているのね、と思つて」

まあ、冬の城で人里から隔離されて育つたアイリには珍しく映つたのだらう。

「何、大したことではないよ」

「前から思つていただけれど」

アイリはじつと私の顔を見ながら「もしかして貴女って生前は家<sup>ハウ</sup>政婦<sup>スキーパー</sup>だったとか？」と言つた。

「む。何故君はそう思う」

「だつて貴女、色々手馴れすぎよ。紅茶を入れる所作だつて、まるで一流のメイドか執事のそれだつた・・・」

と、そこまで言つた所で彼女はぴたりと私に視線を合わせて、私を凝視した。

「え？その顔、もしかして貴女本当にメイドだつたの？」

・・・彼女は、私<sup>アイリ</sup>が本来は男だつたということを忘れているのだろうか。

「アイリ、君は私が生前は男だつたことを忘れていないのではないかね？その私がメイドであるはずがない・・・が、全く、君には敵わんな。ああ、その通りだ。確かに私はメイドではなかったが、一時とはいえ、フィンランドの貴族に仕える執事であつたことはあるよ。今はもう摩擦して擦り切れた記憶。思い出そうとしてもノイズがかかつて詳細はわからない。ただ、金髪の青いドレスをきた少女の面影がぼんやりと浮かんで消えていく。

ふと見ると、アイリはなにやら納得がいったような顔で頷いている。

「・・・なにかね？」

「貴女にその服がよく似合うわけがわかったわ」

正直、あまり嬉しくない。

「それより、そろそろ移動しよう。時間が私たちにはないのだからな。そうだろう?」

言いながら、手を差し出す。くすりと、白の姫君は微笑む。

「ええ、そうね。行きましよう、アーチャー。私、見たいものがない。はいあるの」

## side・アイリスフィール

楽しいときはあつという間だというけれど、それは本当で、そこが本当に残念だと思う。

つい最近出来た可愛い私の娘と、初めて見た異国の繁華街を歩く夕陽に赤く染まったビル、煌びやかなショーウィンドウ、どれも新鮮で、どれも綺麗で、世界は本当に美しく出来ていたのだと思った。連れ添った長身を見上げる。自分より尚白い髪に、鋼色の瞳に褐色色の肌。あまり見ない印象的な組み合わせの異彩。アーチャーは私が美しいから皆が見ているというのだけれど、アーチャーこそ自分をわかっていないんじゃないかなと思う。

きりつとした雰囲気の目元と眉に、案外童顔な面差し。女性的な肉感のある体躯をフォーマルな執事服に包んでいる。肉体の女性性と男性的な雰囲気のアンバランス、それが、ストイックで倒錯的な色気をかもし出している。薄い口元と、背の高さがより大人の女を強調する体躯でいながら、元が男なのだというアーチャーは自分が今は女なのだという意識が薄く、そのせいか雰囲気は体つきなどの女性性とは裏腹にどこか無垢であどけない、少年染みたものとなっている。

アーチャーには不思議な魅力がある。皮肉っぽい言い回しが好きみたいだけど、中身は凄く良い子だ。隣にいるのは私にとっても心地良い。

「ねえ」

「アイリ？」

腕をぎゅっと抱きしめる。

「貴女の知っている切嗣について教えて」

言つと、彼女の体が僅か強張った。だから「ごめんなさい、冗談だから気にしないで」と笑って告げた。アーチャーを困らせるのは嫌だ。彼女は切嗣の死も見てきたのだろう。不躰な質問をしまつたのかもしれない。

「いや。心配は無用だ。ただ・・・私はあまり君の期待に応えられそうになくてな、それで少し困った、それだけだよ」

アーチャーは皮肉そうな顔を浮かべてそんなことを言う。この顔はそんなに好きじゃない。強がって、偽悪的に振る舞っている、そんな感じがする。

「正直言つと、私が切嗣のことで覚えていることはそう、多くないんだ」

その言葉は凄く重い気がした。

「つまらない話になってしまったな。行こう、此処は場所が悪い」  
その言葉に違和感をもつ。だけど、私がこの街のことを知っているわけでもなく、またアーチャーが明確な目的をもって歩いているように見えたから、私はその後をについていくことにした。

どんとんと、アーチャーは人ごみにむかう。そして少し経った時、ぴたりと足を止めて、遠方を鋭い鷹のような目で見据えた。

もしかして・・・。

「・・・敵のサーヴァント？」

「アイリ、すまないが観光はここまでのようだ。あとは本分に戻ることになる」

本分。そう、この子は聖杯戦争の為に呼ばれたサーヴァント。出

来れば忘れていたかった事実だった。

「相手は誘いをかけてきているだけで、どうやら私たちを直接襲う気はないようだ。おそらく他のものにも同じような誘いをかけていることだろう。上手くすれば誘いにのった別のものとの戦闘が見れるかもしれない。遠巻きに追跡することとしよう。構わないかね？」  
頷いて返事にかえる。アーチャーはその顔にもう微笑を浮かべてはいなかった。

こうして私の冬木の観光は終わった。

楽しかった時はあつという間というけれど、それが本当すぎて涙すら出ないくらい寂しい。

アーチャーは私を抱えて夜の街を飛ぶ。

これからの聖杯戦争、サーヴァントが敗退すればそれを取り込み人間から遠ざかる私はいつまでこの褐色の肌に白髪のサーヴァントの隣に立っていられるのだろうか。

願わくばこの子が出るだけ悲しまない終わりになればいいのに。そんなことを考えながら私は、アーチャーに抱えられたまま、冬木の街を見下ろしていた。

了

## 閑話 冬木の街で（後書き）

アイリは華やかでいいですね。彼女のパートはとても書き易いです。この話のメインストーリーは第四次聖杯戦争編8話以降書くのに文庫本最終巻発売待ちすることになるので、更新が当然のように遅れます。

なので、これからも話進める合間に閑話を挟んでいくというのもありなのかもしれません。

PS、ZEROの設定集購入したどー。ちっちゃい凜かわええ。

第四次聖杯戦争編 05 うっかりスキル連発（前書き）

やあ、予定より更新が一日遅れた作者のEKAWARIです、ばんははろ。

一応昨日には書き上がったんですが、読み直したら日付過ぎた。

今回の話は大体いつもの倍くらいの分量になってしまったよ。キャラが多くて大変でした。ではではござぞ。



第四次聖杯戦争編 05 うっかりスキル連発

フェイト  
運命は動き出そうとしている。

正史とは異なる時間を歩もうとも、それでも変わらぬ流れもある。カラカラ、カラカラと音を立て歯車が廻る音が聞こえるだろうか。答えを得た赤い弓兵という異物があるうとも、それでも変わらぬ流れはある。

それは二槍の槍の使い手たる魔貌の槍兵が、海辺の近くの倉庫街で他のサーヴァントに誘いをかけることや、やはり最後のサーヴァントとマスターに選ばれたのは、本来ならこの聖杯戦争に呼ばれる筈がない殺人鬼と、魔術師ともいえぬキャスターであること。カラカラ、カラカラと輪廻は巡る。

ただ、確かなのは今夜、遠くから覗く姿見まで合わせたなら、ここに第四次聖杯戦争のサーヴァントが全て揃ったということ。

何よりも優美で醜悪な、魔術師による自己中心エゴイズム的によって起こされる最小で雄大な稀代の大戦争はここに始まった。

『うっかりスキル連発』

side・遠坂時臣

遠坂の使い魔を通して、私は海辺近くの倉庫街の様子を見ていた。

サーヴァントのたつての願いで、<sup>パス</sup>経路を繋ぎ、倉庫街で起こっている出来事の音声も映像もセイバーと共用で見ている現在、剣の英霊として呼ばれた暴君は、不敵な笑みを浮かべていた。

「いやはや、なんとも美しい男よの」

その感想にこつそりとため息をつく。

美しい男、確かに同性である私から見てもその男の顔の造詣は美しいと認めて良いほどではあるが、果たしてこれが聖杯戦争の敵サーヴァントに対する感想だろうか？

いや、そもそも本当は私はこんな風に使い魔を通して様子を眺めるなんて作戦をとる気はなかった。綺礼のサーヴァントであるアサシンを通して、情報は流れてくるのだ。それが、いつ撃ち落されるとも限らない使い魔を通してまでわざわざ視ているのは、彼女の我俣に付き合っている結果に過ぎない。だというのに、このサーヴァントは全く私の感情もお構い無しに思うがままに振る舞う。

「ここまでの美男子となると、余の時代にもそうはおらなかったぞ？眼福よな」

「セイバー」

たしなめるようにクラス名を呼ぶと、彼女はくつと不遜に笑いながら私の顔を静かに見た。

「余の奏者<sup>マスター</sup>たるものがそう揺らぐでない。そなた、家訓の優雅たれとやらはどうした？それに奏者のその心配はいささかの外れであるぞ？余はちゃんと考えておる。見くびるでないわ」

そう言われると、私に返すべき言葉などない。だから、私は使い魔を通して倉庫街の映像に集中することにした。

そこには、癖のある長い髪を後ろに撫で付けた、左目の黒子と、匂う様な色香が印象的な優男が1人立っていた。長身に引き締まったしなやかな体つきの男で、体のラインを余すことなく映す緑色の軽鎧に、両手にはそれぞれ各自一本ずつの長物。呪符に包まれているがその形状といい、自ら敵に身をさらす自信家かつ、正々堂々とした勝負を好むといわんばかりのその有り様といい、ほぼ間違いない

く、相手はサーヴァント三騎士が一角、槍兵ランサーのサーヴァントなのだろう。

「誘っているようだ。でも、誰もその誘いには乗らないか、それはそうだろうね」

と、冷静に分析しながら口にするが、正直面白くはない。ここで愚かにも誘いに乗るものが出れば、こちらは何の手も下さず情報は手に入るし、どちらも疲弊するような事態になればそこでセイバーをぶつけて倒せばいい。だが、誰も誘いにのらず、このサーヴァントが存在を主張し続けてもうかれこれ20分は経過する。これ以上見続けたところで無駄か・・・と、そこまで思ったとき、自身のサーヴァントが立ち上がったので、私は驚いて彼女を見上げる。

「セイバー」

「行くぞ」

簡潔な言葉。言ってる意味を理解して、目を見開く。

「あれほどの美丈夫が誘いをかけておるのだ。乗らねば女が廃るといふものよ」

「セイバー。君は先ほど『考えている』と答えたと思うんだが、それはどういう思考の元出た結論なのかな？」

まさか、言葉通りではないだろうな？というセイバーへの不審を胸にもったまま、出来るだけ平静を心がけて尋ねる。

「奏者マスターよ、そなたは誰のマスターだと思っておる？」

私に背をむけたまま、セイバーはそんな言葉を放つ。

「余は最優のサーヴァント、セイバーなるぞ？何を畏れておる。これは、チャンスなのだ。わかるか、奏者よ。余の力を示すまたとない機会だ。見られているなら結構。観客がいるほうが余の興も乗るといふものよ。ついてこぬならそれで構わぬぞ？そなたはここで、余の勇姿を見ているがよい」

止める間も無く、セイバーは行った。

思わず重いたため息を零す。令呪を使うか？いや、こんなところで切り札れいじゅを失うなどそれこそ馬鹿げている。

セイバーが、先日の演技を不満に思っていることは知っていた。弟子である言峰綺礼が脱落したと思わせるためと、セイバーの力を見せるのを目的でやった自演の襲撃事件。綺礼のサーヴァントは、複数に分裂するアサシン<sup>ハサン</sup>という特殊な能力をもった英霊で、それを利用して、一番弱そうなアサシンにわざとセイバーを襲わせ、一撃で葬り去った。

綺礼はサーヴァントを失ったという誤情報を他マスターに植え付け、その影で存命のアサシンたちが情報を集め、私が勝利するため礎へと使っている。何一つ私には損のない作戦だった。

だが、それがセイバーには酷く不満だったらしく、「余が華々しく戦う舞台を用意せよ！」と煩く騒いでいた。だから、おそらく今回誘いにのったのも、その鬱憤を晴らすという意味合いのほうが強いのだろう。

仕方ない。いざとなれば令呪で呼び戻すという手もある。

ここは彼女の言うとおり、その舞台を鑑賞させてもらうことにしよう。

使い魔を通して情景に再び集中する。緑の鎧の優男の映像。その向こうで赤い衣が風にたなびいて目に映った。

side・ランサー

俺は落胆していた。

生前の人生に不満があったわけではないが、次があるなら今度こそ主君の為に仕えて、騎士としての本懐を遂げたい。そんな想いを抱く中召喚されたこの度の聖杯戦争。主君であるケイネス・エルメロイ・アーチボルトに聖杯を捧げると誓い、戦いに参戦したはいいものの、誰一人として自分の誘いに乗ろうとしないこの現状。主君

に大口を叩いた以上、敵の首級の一つも持ち帰らねばと意気込むも、誰も現れぬなら話にもならない。

英霊とは英雄が神格化するまで祭り上げられ、精霊と同格となった存在だ。一人ひとりが猛者としての伝説をもっている。そんな相手なら1人くらいは乗ると思っただが・・・腰抜けばかりだったということか。そう思い、痺れをきらした主にパスを通して話しかけられ、一度帰還しようとした矢先、その女は現れた。

小柄な体に、赤いドレスを身に纏い、同色のリボンで黄金の髪を結び上げ、これまた赤く禍々しい形状の大剣を手に抱いた少女。

この気配、この魔力、この存在感。間違いがない、あれは俺の敵だ。サーヴァント

にやりと、自分の口が釣り上がるのが解った。

「よくぞ来た。今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決め込む腰抜けばかり。・・・俺の誘いに応じた猛者は、お前だけだ」

「何、そなたほどの色男に誘われて断るのは、余の名折れというものよ」

言いながら、女もにやりと笑う。傲慢さが板についたような笑いだ。その瞳には好色そうな色が見えて、少しだけ眉を顰めたくなる。

俺には生まれ持った呪いがある。左目のすぐ下にある「愛の黒子」だ。これは並みの女なら一目で虜にしてしまうほどの魅了の力を秘めた代物で、異性に絶大な効果をもつ。俺の意思ではどうにもならない力故に呪いと呼んでいる。これに抗える女というのは、一定以上の対魔力をもつ者だけであり、剣を手にしている以上、この赤いドレスの少女はセイバーであろうし、セイバーのクラスには高い対魔力が備わっているはずなのだが・・・もしもこの魔貌に魅了されているというのなら、とんだ拍子抜けだ。興ざめにもほどがある。

「セイバーだな？」

だから確認のためクラス名を呼ぶ。

「いかにも。余こそが最優のサーヴァント、セイバーよ。そういう

そなたはランサーだな。ふむ、二槍使いとは面白い」

その言葉で己の心配が杞憂であったかと思ひ直し、これから行う戦いに思いを馳せて気を昂ぶらせる。

「さて、そなたは美しいゆえ、余としてはこうして鑑賞しているのも悪くはないのだが、いつまでもこのままにいるわけにもゆくまい？」

言いながら女はゆらりと、その赤く特徴的な剣を構える。

「全くだな。さて、では尋常に死合つとしよう。・・・ゆくぞ、剣<sup>セ</sup>使い<sup>イナイ</sup>」

「美貌なる槍使いよ、今宵、余と死の舞踏<sup>ロンド</sup>を踊ろうぞ！」

そうして赤いドレスを身に纏った暴君の剣と、緑の鎧の騎士の槍が迸ったのは同時だった。

side・ライダー

「ほほう、これは中々」

眼下に見えるその光景を前に、余はワインを片手に、嘆息を一つ漏らす。

視線の先は海沿いにある倉庫街。そこには傍目には幼い赤いドレスの少女と、4時間程自分達で追跡していた緑の鎧の優男が、槍と剣を手に優美に剣舞を踊っていた。

否、実際に踊っているわけではない。彼らは死合いをしているのだ。

「おい、それで・・・どうなって、るんだよ。状況は。お、まえ、ぼ・・・くにも、少しは、説明しろよ」

と、隣から主君<sup>マスター</sup>のそんな声が聞こえ、ゆっくりと、余、征服王イ

スカンダルはそちらを振り向く。

そこには此度自分を呼び出した魔術師である、ウェイバー・ベルベツトが、必死の青い顔をしたまま鉄骨にしがみついている姿があった。

「セイバーとランサーの実力はほぼ拮抗しておるとみて間違いないだろう。力のセイバー、速さのランサーというところだな。しかしまあ、なんとも華のある戦いよ。これほど見事な演舞はそうはあるまいて」

想像以上の極上の酒の肴を前ににんまりと笑う。

と、そのときランサーの様子が変わった。どうも、宝具を解禁したらしい。続いてセイバーも、不敵な笑みを浮かべて……。

「……いかなあ。これはいかん」

よつと、冬木大橋のアーチの上から身を起こす。

一方マスターであるウェイバーは状況がわからんらしい。適当に説明しながら腰の剣を抜き払い、虚空を一閃させて、余がライダーたる所以の騎乗用宝具を取り出す。

「見物はここまでだ。我らも参じるぞ、坊主」

そして、主君である坊主共々ゴルディアス・ホイール神威の車輪に乗り込み、赤き剣使いと、緑の槍兵の下へ向かおうとした時、それは飛翔した。

「そこまでにしたほうがいい。これ以上手の内を明かしたくなければ双方得物をおさめる」

声変わり前の少年を連想させる、そんな声が凜と月夜に響いた。

その気配には随分前から気付いていた。

夕暮れの冬木市で、私は霊体化もせずにアイリスフィールの願いを叶えるため、実体化したまま市井を廻っていた。聖杯戦争で実体化したまま街をうろつくなど、見つけてくださいと言っているようなものだ。聖杯戦争が既に始まっている以上、昼間だからといって気を抜いていいわけがない。案の定、敵サーヴァントの気配に接触するはめになる。だが、相手は仕掛けてくることもなく、ただ強く気配を発して誘いをかけるばかり。

私が今切嗣<sup>マスター</sup>に与えられている命はアイリの傍にいてその身を守るということだけだ。

だから、敢えて私はその気配を無視してなんでもないかのように振る舞うことにした。

大体、聖杯戦争はまだ始まったばかりなのだ。こんな序盤にわざわざ手の内を明かすこともないし、これほどあからさまな挑発をするサーヴァントだ。他の者にも同じ事を繰り返すことだろう。ここまで正々堂々と気配を晒しているとなると、クラスはセイバーか、ランサーか。どちらにせよ、それも含めて見極めてからでも遅くはないだろう。

そもそも負ける気はないとはいえ、私はあまり接近戦に長けてはいないのだ。勝てないならば、勝てる状況を作ってから戦うべきだろう。

痺れを切らしたのか、その気配の持ち主はやがて私からは遠ざかった。そして、私の目からは見えるけれど、普通の英霊さえ確認出来ないほどそれが遠ざかった時点で、アイリにはサーヴァントがいたことを告げた。ここで、彼女との街の探索は終わりを告げ、私は普通の人間どころか並みの英霊にすら確認できないだろうkm範囲で離れた建造物の上で、その件の私を挑発していたサーヴァントの動向を見張った。

人気の無い倉庫街で、実体化をして誘いをかけるその男。

あれほどあからさまな挑発をしていた男だ。気付いているのが私



だけなはずがなく、他にも見物人がいると推測した。やがて赤いドレスの真つ赤な剣をもった少女がやってきて、戦いをはじめた。間違いなく男はランサーで、少女はセイバーだろう。クラスは確認した。決着がつくには時間がかかりそうだ。おそらく他の観客はあの二人の戦いに見入っていることだろう。その隙に、他の集まった同類の確認するために、私だったら潜むだろうポイントを重点的に考え、周囲を探り、思わずぎよっとした。

橋の上には大男の姿をしたサーヴァントと小柄な、おそらくそのマスターであろう魔術師がいたが、それは別に驚くべきところではない。

驚いたのは別の観客だ。そしてそれは千里眼のスキルを持つ私だからこそ見えたのだろう。

岩壁間際にあるコンテナの山の隙間から暗視スコープを身に付けて潜んでいる人間、見たのは一瞬だが間違いが無い。あれは衛宮切嗣だ。

やはり、切嗣は自分の手で敵を獲ろうと潜んでいた。それを否定はしない。それに驚きもしない。

だが、その目の鼻の先（少なくとも自分にとってはそうだ）、デリッククレーンの上、そこに漆黒のローブに髑髏の仮面を身につけたサーヴァント・・・まず、間違いないだろう、アサシンが霊体化もせず、倉庫街の成り行きを見張っていた。聞いた情報によるとアサシンは確かセイバーに倒されていたはずだ。あまりにあっさりと倒されたので不信には思っていたが、もしや今代のアサシンは複数いるということなのか？

対決しているサーヴァント二騎がアサシンに気付いた様子は無い。当たり前だ。アサシンには気配遮断のスキルがある。私がアサシンを見つけることが出来たのは、アサシンが実体化していたことと、襲撃ポイントを私が目視で探していたことと、単純に私の目の良さが功を奏した結果に過ぎない。

ここにきているアサシンの存在に気付いているものなど、私と、

アサシンを放ったものと、あとはアサシンのいる位置を見張れる切嗣くらいのもだろう。

・・・これはまずいのではないか？

切嗣じいさんがアサシンに見つかるへまを犯すとは思えない。思えないが、万が一ということもあるし、昔から私は運には恵まれていなかった。最低の顛末を予測してしまうのは当然の習い性ともいえる。

衛宮切嗣は魔術師殺しの異名で呼ばれる暗殺者ではあるが、あくまでも人間であり、この聖杯戦争に参加するマスターである。当然、暗殺者の英霊であるアサシンに敵うとは思えないし、暗殺者としてアサシンのほうが上でもそれは当然の結末といえる。今は切嗣がアサシンに見つかっている様子はないようだが、それでも見つかったときは・・・そう思ったときにはアイリに一言だけ告げ、許可を掠め取るなり行動し始めていた。

アサシンは、セイバーに倒された。情報上そういうことになっているが、他にもアサシンがいた。それをバラす。バラすことによつてアサシンを撤退させ、切嗣から危機を遠ざける。

綱渡りの作戦だということとは自分自身承知している。アイリとて危険に晒すだろう。だが、幸か不幸か、あの二人の対決を邪魔しようとしているのはどうやら、私だけではなかったらしい。橋の上からあの大男のサーヴァントが動き出そうとしている。なら、やるタイミングは今だ。

黒い洋弓を手取る。投影した矢は何の神秘も纏っていないただの矢。威嚇射撃ならこれで上々。八連の矢を番え、あとはただ想像イメージ通りに放てばいい。

槍兵と剣使いの気が高まる、その注目がかかるだろう最良のタイミングを狙って私はそれを放った。

「っ！？」

八連の矢は私の想像通りに二人の足元に突き刺さり、その進軍を止める。

さて、では行くのでしょうか。

「アイリ、君はここでまっていたまえ」

そう言っただけで彼女を置いたまま二人に私の姿が見えるまで近づこうと考えたのだが、その考えは置いていこうとしたその人自身に止められた。

「あら、駄目よ。だってアサシンがいるんでしょ？なら貴女の傍が一番安全だわ」

そう言われると確かに、危険度としてはここに置いていったところでかわりが無いのか。先ほどの街の件で彼女が私のマスターと誤認されている可能性もあるし、それに彼女の傍にいますというマスターの命令もある。迷っている時間もない。時間を置けば不信を募らせる結果になるだろうことは、想像するまでもない。仕方ない。内心葛藤しつつも、私は頷いて彼女を姫抱きに抱え、セイバーやランサーにもなんとか見える距離まで跳躍した。

「そこまでにしたほうがいい。これ以上手の内を明かしたくなければ双方得物をおさめろ」

そう言いながら、アイリスフィールを地面におろし、そして正面からランサーの姿を真っ直ぐに見た。それがどれくらい私にはまずいことなのか、そのときは勿論知る由もなかった。

直後に、硬直。

(なんだ、これは)

そこにいたのは、見たこともないような美男子だった。きりつとした中に艶然さが見え隠れするところけるような美貌。

(なんだ、これは)

顔が熱かった。かぁと、自分の頬が火照るのがわかる。おそろく見るからに今の自分の顔色は真っ赤なのだろう。そんな自身の反応に強く動揺する。

(いやいや、なんでさ？確かに今の身は女だし、相手は絶世の美丈夫といっただけで差し支えない人間かもしれないが、心まで女になった覚えは無い！なのに何故先ほどから心臓がバクバク鳴る？ときめいて

いるというのか？男相手に？このオレが！？いやいやいや、だから、  
なんでさ！静まれ、心臓)

「貴様……」

涼しげな目元を引き締めて、男が言葉を発する。うっとり、まるで甘い魔力を取り込んだかのように、言葉が全身に染み渡る。その一動、一動に目が離せない自分を自覚してしまう。

「アーチャーか。何ゆえ我らの戦いに介入した？……おい、聞いているのか？」

男が声を発するたびに体がとろけそうになって……あれ？何故こんなにぼおつとするのだろうか？そうだなしの思考で考えたそのときだった。

「アーチャー！落ち着いて、<sup>チャーム</sup>魅了の魔術よ！気を強くもって」  
「……は！？オレは今何を」

そのアイリスファイルの言葉で正気を取り戻した。

術の正体がわかれば、防ぐのはそれほど難しくは無い。そうか、魅了の魔術か。考えてみれば男として生きてきた私が男に魅了の魔術をかけられる状況を想定しているはずがなく、見事にかかってしまったらしい。

急いで武装概念の赤源礼装を身に纏う。これで私の対魔力は大分上がったはずだ。

ついでに、ランサーに見惚れてしまった理由が、女になった体に引きずられて男を好むようになったとかではなかったことに、少しだけ安心する。だが……。

(ク……いくら魅了の魔術にかけられたとはいえ、男にときめくとは！)

いや、寧ろそんな魔術にかかってしまう自分の対魔力の低さに涙が出そうだ。

男に魅了されるなど、一生物の不覚だろう。それにしても私だって低めだとはいえ、対魔力は備わっているというのに、なんでここまで見事にかかって……いや、その前に、いくら焦っていたとは

いえ、なんで私は武装もせず敵の前に姿を晒すなんて初歩的なミスを・・・あれ・・・？これってもしかして・・・。

ふと、嫌な予感がした。この体になつてから追加された呪いのスキルが頭をよぎる。

ランクAだというそれ。これが本当に遠坂の呪いであるならば、肝心な時に発動するのが当然で、それを思えば今のタイミングで発動するのは当たり前とでもいうべきことで・・・つまり。

(これがうっかりスキルか!?!?)

凜、君を恨むぞ。

思わず元主の少女を相手に内心で愚痴り、自分の傷ついた男心を慰めた。

「それで、アーチャー？先ほどは正気でなかったようだからな。もう一度尋ねよう。何ゆえ、我らの戦いに介入した？納得のいく説明がないというのなら、貴様から屠らせてもらうことにするが？」

「私としても本当は君たちの戦いに介入する気などなかったのだがね。だが・・・まあ」

刹那の早業で私は再び弓を創り出し、まっすぐにアサシンにむけた。仮面越しに視線が交わる。霊体化して逃げられるより早く、我が矢は敵を射抜いていた。

「敗退したはずの亡霊に漁夫の利を与えることは私としても気に食わなかったものでね」

想像通りアサシンの存在については気付いていなかったらしい。私の矢がアサシンを貫いたことによって、その事実気付いたようだ。

「アサシン・・・だと？」

少々の驚きに軽く目を見開くランサーの相貌に、こくりと頷いて私は返事とかえず。

「あのような亡霊まがいの連中に君たちの貴重な情報を明け渡すこともあるまい？」

にやりと皮肉気に笑って見せると、この美貌の槍兵も納得がいったらしい、すつと槍を下げ話を聞く姿勢となる。

「その様子では君も知っている情報だろうが、アサシンは先日セイバーによって倒されたはずなのだがな、いまだ現世に未練があったらしい。いや、これはどういうことだと思っ？どうやら私たちは揃って誰かの掌の上で踊らされていたらしい。君は何か知っているのではないかね？セイバー………」

そう言っつて初めて面とむかって、今回召喚されたセイバーだろう少女を見て、私は思わずびしりと固まった。

「え？」

顔立ちは、アルトリアによく似ている。その髪型も青いリボンか赤いリボンかの違いだけで同じだが、世の中には同じ顔の人間が三人はいるという話だから、そこはまあ、さしたる問題ではないだろう。そもそも髪の色はともかく、目の色は微妙に違うし、この少女が使う赤く禍々しい剣は、アルトリアのもつエクスカリバーとは似ても似つかない。その時点で全くの別人だろうと遠目でもわかっていたし、そこはまあいい。だが、なんだ、この格好。

ひらひらとした赤いドレスを纏っている、そのスカート部分が透けていた。ええと、これはシースルーってやつか？そう、透けている。半透明のスカート。足の形がくつきりと見えて、そして……ごしごしと目を擦る。見間違いではない。あー、なんだ、一言有体にいうなら、その赤いドレスを身に着けた、剣の英霊である彼女は、パンツが丸見えだった。

え？なんでさ？

「……な、な、な、君はなんて格好をしているんだ……！」

「おい、アーチャー？」

「君は自分がどれほどはしたない格好をしているのかわかっているのか……？ドレスで戦うなどは言わんが、パンツくらい隠すべきだろう！いや、それより何故その格好で出歩けるのだね……？君に羞恥

心というものはないのか!? 仮にも君は女性だろう!? 身だしなみをもってだな」

「アーチャー、落ち着いて! 今はそんなこと言ってるときじゃないから!」

「・・・は!?!」

またもアイリの言葉で正気に戻る。確かに今はアサシンのことを話に来ていたんだ。少なくとも、敵サーヴァントの服装に云々言いにきたわけではない。

またか、またうつかりか!?

見れば、セイバーの少女は肩を震わせ、俯いていた。

「く・・・くく」

「お・・・おい、セイバー?」

セイバーは奥歯で噛み締めるように笑っていた。魅了の魔術なんてふざけたものを私にかけてくれた槍兵は案外真面目な性格をしていたらしい、生真面目な声でセイバーに声をかける。

「そ、そなた、そんなイイ体をしておいて・・・、余にはしたないと申すか。なんともまあ、見た目にそぐわぬ初心さよな。くくっ」  
はい?

「アーチャーであつたか? いや、先ほどの槍兵を前にしたそなたの態度、男慣れしておらん様子がまるで生娘のようでなんとも愛らしかったぞ。いや、もしかして本当に処女か? そなたの時代の男共は人を見る目がなかったと見える。これほどの逸材を放っておくとは」

いや、まあ女になったのは、こっちに召喚されたからだし、この姿になってから情事とは無縁なのだから、それは処女なんだろうなとは思うが・・・初心? 生娘? いや、何を言ってる、この女。

「・・・君は何を言っているのかね? どうにも、私にはよくわからなかったのだが」

セイバーは、にやりと美しい顔に、かの英雄王がよく浮かべた傲慢染みた表情を浮かべて、私を見上げた。

「良い。良い。許す。寧ろ余はそなたが気に入った」

そう告げる緑の瞳には情欲の色が滲んでいて・・・あれ、もしかこの女・・・。

「あー・・・その、なんだ、君は同性愛者ということでもいいのか？」  
「余は美しいものが好きだ。美少年も美少女もどちらも余の愛でるところよ」

言い切る姿にはなんの気負いもなかった。

「で、アーチャーよ。余としてはそなたをいずれ手にかけるのは忍びない。故に選択権をやるうぞ。そなた、余のものになれ！そうすれば合い争わずにもすむ。名案であろう？」

・・・名案？いや、それよりこれはもしかして口説かれていたりするのか？こんな傲慢な言い草で。どこの暴君だ。ああ、もしかしてアルトリア、君がああ金ピカ慢心王に言い寄られた時の気持ちとはこんな感じだったんだらうか。

ちらりと一瞬周囲を見回す。

ランサーが槍を中途半端に上下させながら何か言おうとして葛藤しているような顔をしている。先ほどの、私を魅了の魔術にかけたことは水に流しても良いから、この場をなんとかしてくれないだらうか。・・・いや、無理か。

アイリスフィールは呆れ、苦みばしった顔で目をぱちくりさせている。うん、その反応は正しいだらうよ。いや、全く。これが人事だったらしいのに。

目の前の少女を見る。自信満々に反論を許さぬとばかりに見上げている少女。アルトリア、君に一瞬でも似ていると思っただ俺を許して欲しい。さて、現実逃避もここまでにして、わかりきった返事をかえそう。

「断る」

ガーン、そんな擬音が聞こえてきそうな形相で、セイバーだろう赤の少女は私を見上げた。断られるとは欠片も思っていなかったらしい。そっちに吃驚だ。



「何故だ！？余がたっぷり可愛がつてやろうというのに。それともそんなランサーのほうが良いと申すか！？いや、確かにランサーも美しい！しかしそれも戦場の華として愛でるべき美しさでな」

「ええい！少しは落ち着かんか、たわけ！そもそも私はアサシンの件でここにきたのであってだな」

「ふむ、余は哀しいが仕方が無い。そなたが余のものにならぬというのなら、力づくでいうことを聞かせるまでよ。何、暴れるじゃいや馬を飼いならすというのはそれなりに慣れておる」

「話を聞け！！」

あ、ランサーが同情の目で見てる。く、そんな顔で見るな。というか、そんな顔で見るくらいならセイバーを止める。アイリ、君は離れている。何故私の外套を掴む！？

「ふふ、此度のしおきは少々キツイかもしれぬが、まあ、それもそなたを想うが故よ。あとで存分に労わってやるゆえ、安心するが良  
い」

いいながら、セイバーは赤く特徴的な剣を私に向かって構えている。

く、トレス・オン投影開始。仕方ない、覚悟を決めて白と黒の双剣を両手に構えたそのときだった。

響く轟音、雷鳴の響き。ああ、やっと来たのか、あの時動き出そうとしていた巨漢のサーヴァントが。おそらく、今までタイミン  
グを見計らっていたのだろう。その男は、古風な二頭立ての空飛ぶ戦車に乗ってやってきた。

「チャリオット戦車……………？」

アイリスフィールが啞然とそれを口にする。

「……………ッ」

ランサーは緊迫の面持ちで頭上を見上げ、セイバーはいかにも面白いものを見たという顔をしてそれを見上げている。セイバーの意識が自分から離れた隙に、私はアイリを連れてセイバーから距離を離す。

それにして雷鳴を纏った戦車を駆る英霊とは、此度の聖杯戦争も中々一筋縄ではいかん連中が揃っているらしい。これだけのものを使えるということは雷神所縁の英霊か。第五次聖杯戦争でも神性適正をもつものは珍しくなかった。その類といったところか。

その戦車の主たるその巨漢の男は御者台の上で、威風堂々たるその姿を晒す。

「双方、武器を収めよ。王の御前である！」

その身にふさわしい大音量である。炯々たるその眼光と気迫、並みの人間だったら気圧されんばかりの迫力がある。

「我が名は征服王イスカンドル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

・・・イスカンドルだと？いや、それよりもこの男、自ら真名をバラすとは、大胆不敵というべきか、自信家というべきか。見れば全員が呆気にとられている現状、ライダーの隣にいた小柄な魔術師が慌てて叫び、自分のサーヴァントのマントに掴みかかっていた。

「何を・・・考えてやがりますかこの馬ッ鹿はああ！！」

直後、ライダーによってデコピンを食らったそのマスターらしき男は声にならぬ悲鳴を上げて沈んだ。なんとというか、哀れだ。いや、心底同情する。

「セイバー、ランサー、どちらも見事な腕であった。そしてそれを止め、余を含め、誰も気付いておらんんだアサシンの存在に気付き、それを撃ち落したアーチャーの腕も弓の英霊の名に恥じぬ豪傑っぷり。いや、全く、聖杯戦争とは大したものよ！」

「手傷を負わせたただけだ」

苦笑しながらそうもらすと、耳ざとく聞いていたらしい。

「そう、謙遜することもあるまい。あれほど正確無比な腕をもっていながら、姿を見せた上でアサシンのことを言及したのは、お主もセイバーとランサーの戦いに感銘を受けていたからであろう？」

まさか、かの征服王に褒められる日がくるとは。いや、これは本当に賛辞か？私が姿を見せたのは別に二人の戦いに感動したから、

なんて理由ではないのだが、誤解するならしてもらっているほうが都合がいいので黙っておく。

ライダーは、ごほんと一つ咳払いをすると、声高に本題だろう言葉に入る。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡りあわせだが……矛を交えるより先に、まずは問うておくことがある。うぬら各々が聖杯に何を期するのかは知らぬ。だが今一度考えてみよ。その願望、天地を食らう大望に比してもなお、まだ重いものであるのかどうか」「それで、そなたは結局何がしたいのだ？」

セイバーがなにやら面白いものを見るような、相手を秤にかけているような顔をしてそう聞くと、それを全く気にしていないのか、この巨漢のサーヴァントは「うむ、噛み砕いて言うとな、ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか？ さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を征する快悦を共に分かち合う所存である」なんてとんでもないことを言い出した。

いやいや、全く。これまで色んな王に会ってはきたが、ここまで自由な王というのは初めてだな。その豪快な気性といい、嫌いではない、が、言ってることは言語道断だ。

「先に名乗った心意気には、まあ感服せんではないが……その提案は承諾しかねる。俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓いを交わした新たな君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」

苦笑交じりに、瞳だけは鋭くライダーを見据えて、そんな言葉を吐くランサー。感服せんでもない……か。さては、今代のランサーは、真名を名乗ってしまいたいとも思っているところかだろうか。このランサーは騎士でありたいという想いが強いタイプだろう。騎士は自分の名をかけての誇りある戦いが好きだからな。

魅了の魔術なんてふざけたものを使われた立場としてはそういうタイプだと考えもしなかったが、このランサーの槍を解析した結果、槍の正体は「破魔の紅薔薇」と「必滅の黄薔薇」だとわかった。自然、この男の正体も判明する。クー・フリーンと同じくケルト神話

に名を連ねる英雄、デイルムツド・オディナだ。悲恋の伝承をもつこの英霊の左目の黒子は異性を虜にする力をもっていたという。

どうやらこの男自体は真面目なタイプなようだし、魅了の力を使われたのは癪でしょうがないが、本人にどうしようも出来ない力だというのなら仕方ない。馬に噛まれたと思って忘却しようじゃないか。ああ、そうとも、私の名誉のためにも。

「戯れ事が過ぎたな征服王。騎士として許し難い侮辱だ」

じろりとランサーに睨まれ、小さくうなりながらいかつい拳でこりごりと自分のこめかみをかいているライダー。その姿は威風堂々としているのに愛嬌がある、なんとも形容しがたい存在感だ。

「………待遇は応相談だが？」

「くだい！」

ランサーはどうにもならないと思ったのか、くるりとライダーは私とセイバーに向き合う。

「先ほどから黙ったままだが、おぬしら二人はどうだ？」

「……かの高名な征服王に私のような人間にまで声をかけられるとは光栄の至りだが……そうだな。君の冗談はあまり面白いとは思えん。気をつけたほうが良い」

「アーチャーの言うとおりよ」

意外に赤のドレスの少女が私の言葉にのってくる。

「この余に向かつて軍門に降れ……とな？つまらぬ冗談を口にするものよ。呆れて開いた口が塞がらぬわ。そもそも、王、王と汝は図が高い！」

ぴりぴりと空気が震える。どうやら、ライダーは彼女の逆鱗に触れていたらしい。

「そなたが王というのなら、余は皇帝よ！！控えおれ、下郎！！」

皇帝……？今、皇帝と言ったのか、セイバーは。トレース・オン解析開始。例

の赤く禍々しい剣を解析する。見たことの無い剣だ。銘は「アエストゥス・エス原初の火」？皇帝なんて立場にいた人間にそんな剣の伝承がある人物なんていただろうか？

「こりや驚いた。皇帝とな？」

「そう、余こそ王の中の王よ」

ふんと鼻をならして少女はそう告げる。どうやらイスカンドルが驚いた顔を見て大分気分が晴れたらしい。

「こりやー交渉決裂かあ。勿体ないなあ。残念だなあ」

そんなことをぼやく征服王に、恨みに満ちた視線と声上がる。

「ら、い、だあああ……」

発生源は彼のマスターの少年だった。

「どくすんだよお。征服とか何とか言いながら、けつきよく総スカンじゃないかよお……オマエ本気であいつらを手下に出来ると思つてたのか？」

「いや、まあ、“ものは試し”と言うではないか」

“ものは試し”で真名をバラしたンかい!？」

……ああ、仲睦まじい主従なんだな。こんなことをいうのもなんだが、これが平素なら非情に和んだのだが。しかし、今は聖杯戦争の真つ只中。

そのとき、二つの感じた気配に私は目を見開いた。

『そうか、よりによって貴様か』

憎悪の念をむき出しにした声で、魔術でどこから発生しているのかわからない、性別すらわからない声があたりに響いて、皆の意識がそちらに集中する。そんな中、私は確かに一つの視線を感じ取った。それは、この声の主ではなく……。

謎の声の主がライダーのマスターを責め、ライダーが反論をする。・・・どうやら、ライダーのマスターである少年が謎の声の主の聖遺物を盗んだ犯人で、謎の声の主の弟子であるらしい。ライダーが謎の声の主に反論などをしていたりする中、私は先ほど感じた視線の主を目視で探して、そして。

「セイバー!!」

無意識に彼女を庇うように私が前に出ている。

side・間桐雁夜

一年間ずつとこの時をまっていた。遠坂時臣への憎しみ、それだけを糧に耐えてきた。

あの、赤いドレスをきたサーヴァント。あれだ。あれが遠坂時臣のサーヴァントだ。時臣より先に八つ裂きにしてしまえばいい。

「はは、はははは」

笑いがこみ上げる。皮膚が引きつりながらも、あれが引き裂かれる瞬間を想像しただけで開放されたように気持ちがいい。

「殺せ……」

自分は出遅れた。けれど、あれはまだ残っている。それに心から感謝をする。

使いこなすには難しくても我がサーヴァントは絶大な力を保持している。あのような幼い少女の英霊などひとたまりもないだろう。

サーヴァントもなしではあの遠坂時臣とて、ひとたまりもあるまい。

桜ちゃんをあんな目に合わせ、凜ちゃんに寂しい思いをさせて、葵さんを悲しませたあの男に今こそ復讐を！！この世で一番憎い男をこの手で引き裂いてやる。

「殺すんだバーサーカー！あのセイバーを殺し潰せッ！！」

side・エミヤ

吹き荒れた魔力の奔流、それはやがて形を作り、実体と化して我

らの前へと現れた。

それはなんと形容し難い異形だった。

長身の骨格がしっかりした男らしいそれは、余すところなく闇のような黒い鎧に包まれている。とてもマトモな英霊とは思えないその有様。まるで怨霊のようだ。

それがヘルメットの隙間から覗く爛々と燃える目でセイバーを視ている。

「……………なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

口調だけは軽やかに緑の槍兵が豪胆な古代の大王を揶揄する。その瞳はかけらの油断もない。

「誘おうにもなあ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだなあ」

黒い騎士から放たれるのは純然たる殺気のみだ。おそらく、あれはバーサーカーなのだろう。解せないのはあれには私の解析の魔術が全く通らないことだが、ライダーのマスターであるウェイバー・ベルベットによると、正規のマスターにもステータスが視えないという話だから、おそらく、私の解析が効かないのも、あのバーサーカーが所持する宝具がそういう能力なのだろう。

「……………」

バーサーカーは最初からセイバーしか見ていないかのように、まっすぐ剣の英霊の少女に襲い掛かる。

「ぬお」

少女は冷や汗をかきつつも、手にもった赤い大剣で黒騎士の攻撃を受け止める。

黒騎士のもつ武器は……黒い鉄パイプ……だと？しかし、驚く暇があるのなら、行動をおこすべきだ。私はすぐさまアイリを抱えて後方に移動する。

あれはあまりに異常だ。どういう能力をもっているか確認くらいはしておきたい。まあ、ついででセイバーを手助けするような形になるだろうが、この際は仕方ないだろう。

アイリを連れてきているこの状況で、誰かが聖杯に取り込まれる状況はあまり歓迎できたものではない。なにせ、一人を取り込むことで彼女の人間としての機能がどこまで失われるのかわからないのだから。

矢を五連放つ。バーサーカーは狂化しているとは思えない精練された動きで私の矢を破った。あれはバーサーカーで呼び出されていないけれど、相当な使い手なのではないか？まだだ。まだ情報は足りない。今度は先ほどのなんの神秘もこめてない矢ではなく、少しは神秘の籠った剣を矢に変えて番え、打ち込む。

「おぬし、中々お人よしじゃの」

そんなライダーの声が聞こえた気がするが、気のせいということにする。

バーサーカーは、飛んで来る私が放った矢をその手に掴んだ。見る間に驚きの現象。私が放った矢が、彼が手にもっている鉄パイプのように黒く変色して、それでもってセイバーへと更に迫っている。これはまさか、手にとったものを自分の武器に出来る宝具ということなのか？

『アーチャー』

はっとした。頭の中で郷愁を感じざるを得ない人の、緊迫した声が響く。

今日、こちらから呼びかけても返事もしなかった男の声だ。

『アーチャー、聞こえるか』

『マスター。ああ、聞こえている。』

『命令だ。撤退しろ』

別に不思議には思わない。確かに今のタイミングは退くには調度いいだろう。

結局アサシンの件があやふやなのは残念だが、何、存在を忘れたわけでもあるまい。

『了解した』



念話を終えると、アイリスフィールを抱えたままセイバーとバーサーカーの戦いの続きも視ずにそのまま立ち去った。

あとの顛末は知らないが、完全に離れる前に途中でセイバーの気配が不自然に途切れたことを思えば、おそらくは令呪でマスターに引き戻されたのかもしれないかった。

全く、まだ一日目だというのにキャスター以外全て揃うとはな。

思わぬ展開に苦笑がこみ上げる。

情報は色々と集まった。あとで切嗣と今後の対策を話し合わねば。

私は切嗣が私をどう思っ、また、どう対応するのかもしれない、そんなことを考えていた。

side・キャスター

私はうつとり水晶玉を眺める。そこに映るのは一人の少女。

「叶った」

ずっと、ずっと、また会う日を夢見ていた。

「全て、叶った。まさか……或いは、とは思っていたが……」

「……聖杯は、まさしく本当に万能であった……」

「叶った……つてえ？ええと？」

私のマスターの龍之介にはわからないらしい。私は喜びもそのままにこの興奮を伝える。

「聖杯は私を選んだのですよ！」

私が彼女のことを説明すると、龍之介も我がことのように喜び賛同してくれる。

ああ、私は本当に良いマスターを引き当てた。

あとは、彼女がここにいればいい。

「嗚呼、“乙女”よ、我が聖処女よ……すぐにもお迎えに

馳参じますぞ。どうか、しばらくお待ちを……  
金の髪の気高き乙女。ああ、ジャンヌ。私の聖処女よ。今、貴女のジル・ド・レエが迎えに行きます。

贅を。もっと贅を。

宴はまだ始まったばかり。

N E X T ?

第四次聖杯戦争編 05 うっかりスキル連発（後書き）

というわけで、英霊とうとう全部書いたよ。そして赤セイバーのアーチャーに対するフラグ立てちゃいました。てへ。

いや、赤セイバーは出すって決めた時からこんな感じにしようかなと思ってました。方向性を決めたまっかけは主に公式のあのバブルトークで、アーチャーが赤セイバーのこと「飯作れとか、世話しろとかどこの暴君だ」つつつてたもんで、赤セイバーってああアーチャーのこと好きなんだなあと（？）公式で両刀キャラだし。

どうでもいいが、購入したゼロマテでタオロー兄さんの名前が出てくるもんだから、どっくんしましたぜ。きのこ、ダメ兄貴いうなwwいや、ダメ兄貴だけど、そこが大好きだぜ。永遠の本命だぜ。たおろーたんもげー！。

ああ、でもあとにさま型といわれて、俺が雁夜好きな理由に妙に納得したんだな。

そういや、同じ黒い妹キャラでも桜は好きですが、るいりはダメです。桜は過去が過去だから黒くてもしゃあないかなあと思ってるけど、るいり素でマジキチじゃけん、おっそろしすぎて萌えれませんが、正直るいりに逆れいpされるあとにさまは見たかった・・・ぐは、何する、やめ・・・。

ごほん、えー・・・まあ、ゼロマテは置いておいて、次回はみんな大好きマーボー神父が出てくるはずだよ。お楽しみに???

第四次聖杯戦争編 06・夢の接触と、新たな呪い（前書き）

やあ、作者のEKAWARIです、ばんははる。

えー、なんとなくやりたかったので話の途中で挿絵挟んじやいました、今回。邪魔だと思う人は挿絵機能OFFにして読んだほうがいかと思います、はい。（や、だってやりたかったねん）

今回の話は人間メインなのであんま英霊出てこないです。が、次回  
は出てきます。

どうでもいいが、この話はシリアス：コメディ：その他の割合が5：  
2：3くらいな気がする。あれ？

まあ、どうぞ。

第四次聖杯戦争編 06・夢の接触と、新たな呪い

まだだ、このままでは終われない。終わろう筈がない。

奴はどこだ？どこに消えた。いや、おれの身はどうなっている。

おのれ、おのれ、おのれ。

こんなことがあっていい筈が無い。

忌まわしい影め。

なんだ、あれは？

知っている、嗚呼そうともあれは知っているぞ。

なんとも、面妖なものよ。再びここへ戻ってくるとは。

なんだ？おれの存在に気付いていないというのか。

甚だ不快だが、今は良い。許す。

さあ、おれの声を聞くがいい。

『夢の接触と、新たな呪い』

side・衛宮切嗣

何度も夢まぼろしを見た。

本当はラインを切って眠れば見ずに済むだろうそれを、まるで義務であるかのように僕は見ていた。

残像のように通り過ぎていく剣の夢。

剣の王の夢。

彼は殺していた。

(どうして)

彼は少しでも多くの人を救おうと駆け抜けて、でも結局は手を赤く染め、殺した。まるで9年前の自分のように。いや、それよりもずっと必死に。

(なんで)

誰よりも笑顔が好きだったのに。多くの人の笑顔が好きだったのに、その手が為したことは殺戮。

(やめてくれ)

機械のように、歯車のように、乾いた顔をして、心で血の涙を流しながらその男は人を殺した。

(僕は)

平和が欲しい。全ての人間が争わずにすむ、そんな世界を作れるなら、自分がどうなってもいいのだと。それを嘲笑うように、彼は一身に憎悪と恐怖を受け、幾度も裏切られ、それすら許容し、その体を剣とかえながらも、赤い丘に居座った。

(僕は、こんなこと)

正義の味方に、あの時の約束を果たす、それが存在理由。それがなくなれば自分が自分でなくなってしまう。わかっている。既に理解している。永劫の平和なんて世界中どこを探しても有り得ない夢物語。人間は醜い生き物で争うことをやめることなんて出来ない。

(僕の、せいなのか?)

それでも、やっぱり人間が好きで、愛おしい。この身の死を願うというのならば、それで救われる人間がいるというのなら、嗚呼、喜んでこの身を差し出そう。

(そんなこと、しなくていい)

既に世界との契約は成立しているのだから。

(やめてくれ)

ギィギィ、ギィギィ。軋む音がする。

十三階段を、男はやせ衰えた足で登っていく。

白髪、褐色の肌、鋼色の瞳。まわりの観客は次々に男に罵声を浴びせる。石を投げる。

(やめてくれ！)

男はにっこりと、幼い、まるで少年のような純粹無垢な微笑みを浮かべて、世界平和を願いながら絞首刑を受け入れた。それはあの時、養父に向かって「正義の味方になる」と誓言した赤毛の少年と同じ、どこまでも無垢で幼い顔だった。

ギィギィ、ギィギィ。

(これは、僕の、罪の形なのか？)

赤い、赤い、真つ赤な背中。剣の王。その体を無数の剣に貫かれて、一人赤い丘に佇む。

(僕は、我が子すら不幸に落とすことしか、出来ないのか？)

白髪褐色肌の女の姿を思い浮かべる。これが彼女の過去だというなら、何故自分を糾弾しないのだろう。何故懐かしいものを見る目で僕を見る。自分に呪いを残した男を相手に、何故ただのサーヴァントとマスターの関係になろうとする。

彼女にこんな人生を強いたのは、たとえ並行世界の存在とはいえ、僕だろうに。何故。

恨んでくれればいいのに。ああ、でもきつと、最期まで自分を犠牲にする道しかとらなかつた彼女は、僕を恨むことなんて出来ないのだろうと、わかつてはいるんだ。

ギィギィ、ギィギィ。

もう、いい。

君は、もう　なくていいんだ。

これは、僕が始めた戦いなんだから。

僕が決着をつける。

ごぼりと、泡がたつように画面が歪む。目が覚めようとしている。さあ、現実に戻ろう。

夢を見ていた。この聖杯戦争が始まってから、いや、始まる以前から、何度か夢の中で見知らぬ誰かに名を呼ばれているような、そんな感じがしている。

そして今、暗い闇の中で、私は一人そこに立っていた。

『誰だ？』

後方に気配がする。しかし、姿は見えない。ただ、にたりとその何者かが笑っているような気がするだけだ。

『誰だ？』

再び問いかける。何者だろうか。黄金の圧倒的な気配。ゆっくりと後ろを振り返る。

そこにあつたのは形になっていない影だ。それが私に話しかけようとしている。いや、話しかけている。が、その声を聞き取ることが出来ない。

これが今のこの影との接触の限界だと、何故か理由もなく理解した。

いずれ、また。

そう、またコレに会う日は来るのだと。

そんな昨日の夢を何故か私は今思い出している。理由はわからない。

建設途中の高層ビルで、爆破され崩落していくホテルを眺めながら、これからあの魔術師殺しと会うのだという興奮も胸に宿したまま、白昼夢のように昨日の夢が脳裏を占める。

なんとも、私にしては珍しいことだ。



「馬鹿らしい」

夢の残照を頭を振ること追出し、そのまま階段を上っていき、人の気配を感じ、柱に身を寄せる。

そこには拳銃を握り締めた黒い女が一人、立っていた。それが衛宮切嗣ではないことに、僅かに落胆する。

「察しいいな。女」

こちらの居場所には気付いていないようだったが、女は明らかに私を射殺対象として、グロック拳銃を構えている。

「フン、それに覚悟もいい、か」

間違いが無い。この女は衛宮切嗣の陣営の人間だ。私は教会の付近をうろついていた、ＣＣＤカメラをくりつけられた蝙蝠……おそらく間違いなく使い魔だ、を女に向かって放り投げる。

ことさらゆつくりと、柱の陰から姿を晒すと、女の顔色は僅かに変化した。

「言峰、綺礼……」

「ほう？君とは初対面はずだが。それとも私を知るだけの理由があったか？ならば君の素性にも予想がつくが」

女は動かない。

「そうだとすれば、君は他にも色々と知っていただろうな。ここが冬木ハイアットの三二階を見張るには絶好の位置だったことも、あのホテルに誰が逗留していたかも」

そう、爆破されたホテルの三二階、そこにはランサーのマスター、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが婚約者共々滞在していた。

それが、キャスター以外の全サーヴァントが揃った倉庫街からの戦いから時間をさほど置くこともなく、襲撃されたのだ。全く恐るべき行動の早さといえる。

「それにしても……建物もろともに爆破するとは。ここまで手段を選ばぬ輩が魔術師とは到底思えんな。或いは、よほど魔術師の裏をかくのに長けている、ということか？」

「……」

「私にばかり喋らせるな、女。返答はひとつだけでいい。おまえの代わりにここに来るはずだった男はどこにいる？」

結果を言うのなら、私は目的である魔術師殺し、衛宮切嗣に出会うことは出来なかった。

第三者による煙幕によって、女は私からまんまと逃走を果たしたためだ。

そのとき、私が此度呼び出した英霊が近寄ってきた。

「アサシンか？」

「は。恐れながら」

アサシンといえば、衛宮切嗣のサーヴァントによってまだ存命であることを知らされた今、彼らが姿を隠す理由も半分ほど消えてしまった。

「何用だ？」

「早急にお耳に入れておかねばならぬことが出来まして」

アサシンによって判明した事実。

それは魔術師<sup>キャスター</sup>として召喚された英霊と、そのマスターについてのことだった。

キャスターのマスターは龍之介と呼ばれる人物で、ここのあるところ世間を騒がせていた連続殺人鬼で、キャスターのほうも錯乱して既に聖杯戦争すら眼中にない狂ったサーヴァントであるという。

この二人は魔術の秘匿を行わないどころか、就寝中の児童を次々誘拐していき、その被害は増えるばかりで、その所業を改める気もなく、このままでは聖杯戦争の存続自体も危ぶまれるという。

だから、父と、冬木のセカンドオーナーで魔術の師である遠坂時臣は異例の措置を取ることに決めた。

キャスターを仕留めるため、一時的な聖杯戦争の休戦。その教会の指示に従う報酬として、キャスターを討ち取ったものには令呪を一つ進呈するというもの。

教会に使い魔を集め、それを説明する運びとなったが、ここで一つ問題が発生した。

私だ。

サーヴァントを失ったとして保護された私だが、アサシンが存命であることがアーチャーによって判明してしまった。故に父の決定としては、私が今後本当に聖杯戦争から脱落しても保護することはしないし、今回のキャスター討伐を果たしても、私にだけは令呪を配ることはない。という方向で話はまとまった。それでも不満があるのだろうが、そこは監督権限をもつ父の強みで押し切った。

ふと、この流れに既視感を覚える。

「？」

正体がわからず、私は頭をふってその考えを追い払った。

side・エミヤ

そこに現れたのは、黒く、鋼鉄のような印象のあつさりした美人だった。

久宇舞弥と名乗った彼女からは、血と硝煙の匂いがする。

「<sup>マスター</sup>衛宮切嗣は？」

「暫く、奥方と二人きりで話したいことがあるということですよ」

小さくため息をつく。やはり私は信用されていないらしい。参ったな、色々と話したいことがあったというのに。まあ、しかし、夫婦の邪魔をするというのも悪いか。アイリの命はこの戦いで失われる。それはほぼ確定しているだろうこと。ならば、邪魔をするほうが野暮というものだ。

寧ろ、喜ばしいことだろう。切嗣はイリヤの母親である女性をとっても大切に思っているということなのだから。夫婦が共にいれる時

間は残り少ない。その少ない時間をどうか大切にしてほしい。

ならば、私に出来ることは影ながら支えることだろう。思いながら、立ち上がり、台所があるほうの部屋へ向かい歩き出すと、その硬質な美女は私の行動を見咎め、真面目な声音で尋ねる。

「どこへ」

「夜食を作ろうかと思っただけ」

無表情染みた顔の中、彼女はそれでも不思議そうな色を見せる。

「サーヴァントは、食事を摂らないと聞きましたが」

「無論、マスターや君たちの分だ。今夜は色々あった・・・が、君たちはまだ食事をとっていないのではないかね？食事は体の資本だ。疎かにするべきではない。どうせ切嗣あひとのことだ。ファーストフードか携帯食料くらいしか摂っていないのだろう？」

舞弥が無表情のまま、目に見えて動揺する。

「それに、腹が減っては戦は出来んという諺もある」

茶目つ気を出して笑みを浮かべると、啞然としながらも彼女は私の行動を否定しなかった。

そのまま、私の後についてくる。それは興味があるのか、それともただたんに見張りたいだけなのか、そのあたりはどうも判然としないが構わない。

とりあえず、簡単に腹におさめられるものを、と思って、甘い卵焼きと、色々な具を使用したおにぎりを作ることにした。

彼女は、特に卵焼きに興味を示しているように見えたから、「味見をしてくれないか？」と呼びかけ、一切れ差し出した。無表情のままぱくりと食べているようだが、同じく黙々と食事を摂り続けるタイプである某腹ペコ王に慣れている私は、彼女が美味しいと思っただけ満足して食べてくれたのだとわかった。ちよつと甘くしすぎたかもしれないと自己評価してたんだが・・・これだけ気に入ってくれたということは、もしかしたら案外甘党なのかもしれない。彼女は次々に私が差し出した分を黙々と食べる。

「あら？二人で何をしているの？」

「がちやりと音を立てて、ひよこりと長い銀髪が姿を現す。アイリスフィールだ、どうやら話は終わったらしい。」

「夜食を作った。彼女に味見をしてもらっていたところだよ。これから差し入れにいかがかと思ってたところだったんだが・・・マスターと、話は終わったのか？」

「そう尋ねると、アイリスは苦笑しながら、とすんと可愛い音を立てて椅子に体を預ける。」

「私は終わったけど、今度は舞弥さんと話したいことがあるらしくて、呼んできてと言われたの。差し入れは、今はやめたほうが良いと思うわ」

「折角だから私はいただくけど。そういいながらおにぎりに手をのばすアイリスフィール。それを見ながら、舞弥はきりつと表情を引き締めて「マダム、感謝します」と言い、部屋を出て行った。」

その後姿を見送りながら、複雑な心境になる。私は、マスターの手足となるサーヴァントだというのに、生身の女性である彼女のほうが信頼され、切嗣の手足として動いている。

「貴女は、気にしないでいいわ」  
まるで労わる様な口調で言われるものだから、反論も碌に出来なくなる。

「切嗣は、あの人なりに考えているはずだから。それよりも、私一人で食事つても味気ないわ。一緒に同伴してくれる？食べれないわけじゃないんですよ」

「そう言われると、私に否やと言えるだろうか。こくりと首を縦に振ると、彼女は満足したように「よし」と言っけて朗らかな微笑みを浮かべる。」

「それにしても、これ美味しいわ。なんていうの？」

「おにぎりという、まあ、日本ではポピュラーな料理だよ」

「へえ。アーチャーは料理上手ね。ふふ、良いお嫁さんになるわよ？あ、でも駄目ね。こんな良い子をどこかの馬の骨になんて渡すな

んで嫌だわ」

いや、良い子って・・・見た目だけなら私は君と同じくらいな上、元男としては良い嫁になるといわれても全然嬉しくないとか、いや、根本はそうじゃなくて。

「アイリ、だから、君は私が本当は男なのを忘れていないのではないか？それに、私は英霊だぞ、何を言ってるんだ」

「あら、私はアーチャーのこと実の子供だと思ってるのに」

美しい声でさらっとそんな言葉を吐く。それに思わず体を硬直させる。流すように言っただけで、彼女の目はどこまでも本気で、冗談ではないと物語っている。

「私のことお母さんって呼んでくれないって以前言ったの、本気だったのよ？それにね、切嗣のことだって、他人行儀にマスターなんて言わず、貴女本来の呼び方で呼んであげて。きっとあの人だって本当は、そのほうが嬉しい筈よ」

「馬鹿を・・・言っな」

声が強張る。どう顔を合わせていいのかわからなくて、顔を背ける。

「私は、サーヴァントだ。この聖杯戦争に勝つためだけに召喚された、マスターの道具。そんな私が」

そんなこと、許されるはずがないだろう、と声にせず口にした。

「ごめんなさいね」

そっと、白い手が私の首にかかる。アイリスフィールに抱擁されている。その仕草や表情はどこかでみた宗教画の聖母のようだった。

「これは私の我俣よ。だけど」

貴女のそんな顔は見たくないの、そう囁くように、祈るように彼女は言った。

それから何分たったか。彼女はにこりと、いつもの笑顔を浮かべると、「そういえば、貴女」と別件を口にし始める。それに内心ほっとする。

「今日の戦いは吃驚したわ。本当にアーチャーの視力って凄いのね。」

私何がなんだかわからなかった」

「まあ、弓兵は視力がよくなければ務まらんからな」

「でもね」

そこでアイリは言葉を止めると、むっとした顔になる。そんな仕草が妙に子供っぽくて、イリヤをつい思い出す。

「もうランサーとセイバーに近づいちゃ駄目よ。私、凄く心配したんだから」

は？思わぬことを言われて目を丸くする。

「・・・それは私があの二人に負ける、とでもいいいたいのかね？だとしたら、今の発言は流石に私でも聞き流せないんだが。ああ、そうとも。もし本当にそう思っているのだとしたら、君はその認識を改める必要がある」

この身に敗北はただ一度のみだ。私がこれまで戦ってきた相手は格上ばかりだった。それでも負ける気など更々ない。

「違うの。そうじゃなくて、貴女を弱いなんて思ってるわけじゃないわ。ただ、ランサーは魅惑の魔術なんてものを使うのよ？危険だわ。次も同じ目にあうかもしれない。近付くのは絶対反対」

ああ、そっちの心配か。まあ、あんな状態になったのだ、これは言い訳出来ないな。

「アイリ、大丈夫だ。もう油断などしない」

「そうね。気をつけて。男は狼よ」

・・・だから、オレも男だったんだって。

「男じゃないけど、セイバーもね。凄く危険だわ。だってあの子、貴女を自分のものにしようとしたのよ！？何をしてくるかわかるものですか。いい、絶対に駄目ですからね!？」

びし、っと指をむけてそう啖呵を切るアイリスフィールは、まるつきり母親の顔をしていた。心配してくれているのは嬉しいのだが、私はこれでも英霊だぞ？そこまで心配しなくても大丈夫だと思うのだがな。とかも思うが、多分ここで口を出すと長くなりそうなので黙ってこくこくと頷いておく。なんとというか、今の彼女には勝てる

気がしない。母は強し、だ。

それからアイリと色んな話をしていた。そのとき、一台の車が出て行った音を聞いてぎよっとする。遠ざかっていく気配は衛宮切嗣<sup>マスター</sup>だ。

色々報告すべきことが沢山あるというのに、全く話もせずに出て行った。がたん、と立ち上がると、それにタイミングを合わせたように、切嗣の右腕である女がノックをして部屋へと入ってくる。

「貴女に伝言を預かってきました」

相変わらず無表情のまま、久宇舞弥はまっすぐに私を見て話を切り出す。

「マダムと共に待機し、暫く動かないように、だそうです。特に今夜と明日の外出はならないと」

その言葉に衝撃を受ける。それは事実上、私を不要といっているのと同じではないのか？

「マスターは・・・」

「私はそれを告げることを許可されてません」

硝煙の匂いがする女は淡々と言葉を吐く。

「しかし、君はマスターと共に行動するのだろうか？」

私の言葉に普通の人間なら見逃すほど僅か、女が目を見開く。だが、答える気はないようだ。多分何を言っても無駄なのだろう。これはそういう種類の女だ。

「マスターに」

重い溜息を吐きながら言葉を紡ぐ。

「マスターに伝えてくれ。ランサーの武器は魔力を無効化する能力の『破魔の紅薔薇』と、回復不能の手傷を負わせる『必滅の黄薔薇』<sup>ケイ・ポウ</sup>

、真名はケルト神話の英雄、デイルムッド・オディナだ」

その声に、アイリと舞弥が目を見開く。

「何故それがわかったのですか？」

舞弥はきりつとした真剣な声でそう詰問する。そういえば、今思



い出してみれば、あの倉庫街の戦い、あそこにこの女らしき人間も潜んでいたことを思い出す。

「私は、私の魔術の関係でね、武器の解析は得意なんだ。まず、間違いが無い」

「え、アーチャー、貴女、アーチャーなのに魔術師なの!？」

と、そこまで言うてから、何かに気付いたようにアイリはぼんと手を打った。

「あ、それはそうか。貴女はあの人に育てられたのだものね。それにパラメーターも魔力の数値が一番高かったし・・・あれ?でもそれじゃあなんでキャスターのクラスじゃないのかしら?」

思わず、苦笑する。赤い少女のへっぴこと自分を罵る声が聞こえるようだ。

「残念ながら私は魔術師としては半人前でね。私の魔術は一点に特化しすぎている。私にキャスターの適性はない。あるのはアーチャーの適性のみだ」

そう、私に魔術師としての才能なんてない。あるのはただひとつの異能だけだ。

いや、話が逸れたか。舞弥は話は終わったと判断したらしい、出て行こうとしている。

「待ちたまえ」

「まだ、何か?」

硬質な黒い目がじつと私を見据えている。

「マスターの元に行くのだろう。なら、これを、マスターに届けてくれ」

私は、もしもの為に用意していたランチボックスを彼女に差し出す。中身は先ほど夜食に用意したおにぎりと卵焼きだ。

「ファーストフードよりは、ずっといいはずだ。・・・折角作ったんだ、これくらいさせてくれ」

つい斜め下を向きながらそういうと、彼女、久宇舞弥はその硬質な美貌の口元に、一瞬だけ笑み染みたものに乗せて、「はい」と答

えた。初めて見た彼女の素の表情だった。

> i 2 3 2 7 8 — 3 0 3 2 <

窓から彼女が出て行くのを見送っても一向に気持ちは晴れなかった。

サーヴァントはマスターの為にいるもの。なのに必要とされないとは、私は何故ここにいるのだろうか。あの時、冬木に来る前に誓ったのに。

イリヤに、衛宮切嗣やまみやは私が守り、必ず彼女の元へ返すと誓ったのに。

でも、アイリスフィールを放つてまで、マスターの命令に逆らうこともまた出来なかった。彼女は今回の聖杯だ。

だから私は、キャスターがセイバーに襲い掛かっていたことも、ランサーやアサシンと共にキャスター相手に戦っていたことも、衛宮切嗣いさながその隙についてランサーのマスターに戦闘不能の傷を負わせて逃走したことも、言峰綺礼が切嗣を求めて徘徊していたことも知らなかった。

side . 衛宮切嗣

「一仕事を終え、アーチャーが作ったという握り飯を口にする。」

時間を置いたというのに、それは馬鹿みたいに美味かった。食べ手のことを考えて作られたそれはあの日の朝飯と同じように、どこか暖かくて、作り手の優しさや人間性が言葉にしなくても伝わってくる。

英雄なんてものは所詮は殺人者だ。けれど、あの子、あの白髪褐色肌のサーヴァントを英雄にってしまったのは他ならぬ僕、それが重く胸を圧迫する。

こんなに暖かくて優しいものを作れるあの子を、血塗れの道に引きずり込んだ。

イリヤとの姿を思い出す。

普通の家族のように、イリヤを優しく諭して、世話を焼きながら見守っていた姿。まるで本当の姉妹のようだった。あれが本当のあの子なんだろう。

きつと僕が昔のとうに諦めた夢を話さなかったら、彼女は英雄ひーろになどならず済んだだろうに。全ての人から蔑まれ、裏切られ、殺されることなんてなかったはずなのに。

卵焼きを咀嚼する。甘い卵焼き。彼女の人間性そのものようだ。馬鹿みたいに泣きそうになっている自分を自覚する。

もし、ここで何もかも投げ捨てて逃げ出せたなら、それはどんなに甘美な誘惑か。

アイリスフィールと共に逃げ出して、イリヤスフィールも連れ出して、アーチャーもそこに、普通の家族のように……。

わかっている。色んなものを踏み躪り、代償にして生きてきた自分がそんな選択をするなんて無理だ。

そもそも、たとえ未来の我が子であろうとも、英霊でサーヴァントであるアーチャーは聖杯が貸し与えた道具に過ぎないのだから。

聖杯のバックアップがない限り、魔力で体を構成されているアーチャーはこの世に留まることなんて出来ない。

「……………」

怖い。怖いんだ。

聖杯がもし本当に汚染されていたなら、その時僕はどうすればいい？僕はどう選択すればいい？

それでも僕はやはり戦うのだろうけれど。

僕のこの手で守れるものはあるのだろうか？

衛宮切嗣、その魔術の起源は『切断』と『結合』。切つて嗣ぐことによつて変質をもたらす者。その僕が、一体何を守れるだろうか。それでも僕はやらなければいけない。親の罪を子供に残すわけにはいかないんだ。

ぎりつと手元の自分の武装概念である銃を握り締める。ロード・エルメロイ。あの男はもう魔術師としては終わりだ。今の僕に出来るのは少しでも早く聖杯戦争を終わらせること。そう、それだけ。かちりと音を立てて僕は煙草に火をつける。先ほどまで口にしていた自らのサーヴァントの心遣いの味を誤魔化すように。

そして数日が過ぎた。キャスターによる誘拐事件は未だ終わらない。

side・遠坂凜

私は勢い込んで、自分が育つた街に戻ってきた。

この街は戦場だ。敬愛する父が参加している7人の魔術師による戦いが行われている。危険だつてことはわかっている。散々言い聞かされてきたし、だからお母様と二人で禅城のおうちに預けられたんだつてことはちゃんと知ってる。

だけど、友達のコトネが戻つてこない。冬木でおこる児童誘拐の原因は聖杯戦争だと自分は知ってる。誰も知らない。なら、知っている自分は彼女を連れ戻す責任があるのではないか？と凜は思っていた。

コトネ、コトネ。いつも自分に頼りきりだったコトネ。きっと今も私ができるのを待って、泣いている。

だから、ごめんなさいお母様。少しの良心の呵責、それに従つて

書置きを残して部屋を抜け、今冬木の駅の出口に立っている。

どんなに危険だとしても、私はやっぱり助けを求める友達を救いたい。

冬の刺すような冷たさに立ち向かうように、よしと顔を上げて、探索の為の魔力針の蓋を開く。

「……なにこれ？」

普段ならばんやりと揺らぎながら震えているはずの針が、今夜はせわしなくぐるぐると回転していて、薄気味悪くなる。

でもこのままではいけないと歩き出して、人影がどんどん減っていくことに気付く。これは本当に見慣れた冬木の街なんだろうか？

（あ、やばっ）

パトカーの赤い閃光を目にして、咄嗟に路地裏に隠れる。今ここと見つかったら、保護者をつれていない自分は連れ戻されてしまう。それじゃあコトネを探せない。

やがて、遠ざかってほっとしそうなになった途端、大きな物音が聞こえて息を飲み込んだ。

発生源は路地の奥、魔力針もまた、そちらの方向を示したまま、ぴたりと静止している。

「……」

何かがいる。じつとりと汗が肌に滲む。魔力だ。異常な魔力を放つ何か。コトネが消えた元凶かもしれない何か。私はそれを確かめなきゃ……。

（嫌だ）

本能的な恐怖が湧き上がる。

（絶対に嫌だ）

ピチャピチャと、ナニかが音を立てている。怖い、これ以上はもう……そう思ったそのときだった。

「こら、凜、君は一体こんなところで何をしているんだ！？」

見知らぬ赤い外套の女性が、何故か自分の名前を呼びながら怒鳴っていた。

あれから数日たったが、いまだ衛宮切嗣<sup>マスター</sup>とは連絡もまともにかわ  
せていない状況に私はいた。とりあえず、全く何もしないというわ  
けにもいかず、アイリに許可をとって一時間だけ冬木の街の見回り  
をすることにした。

こここのところ起きている幼児誘拐事件がキャスターの犯行である  
ことは既にわかっている。それに苦い思いを感じていた。本当は今  
すぐでもキャスターのような外道は滅ぼしてしまいたい。だが、マ  
スターの意向に従うのがサーヴァントというものだ。あまり勝手な  
行動も出来ない。

戦闘は行わないという条件の元の見回りではあるが、それでも誘  
拐される子供達を一人でも多く助けられたらと、鷹の目で見張って  
いる時、彼女を見つけた。

真っ赤なシャツとスカート、黒いハイソックスに黒いリボン、ツ  
インテールの黒髪。間違いない、あの子は子供の頃の遠坂凛だ。す  
ぐ傍にはキャスターの手のもの。

戦闘を行わないという制約など既に頭から消えうせていた。矢を  
一閃させて海魔を消すと、赤い外套を翻しながら彼女のすぐ隣に着  
地する。

「全く、君という人は、今の冬木の街は危険だと親に教えられなか  
ったのかね!？」

そう叱ると、幼い凛はむうーっと顔を膨らませて、私をじろじろ  
見ている。構わず説教を続ける。

「大体、私が見つけたからいいものの、あのままでは君がどうなっ  
たことか・・・と、聞いているのかね!？」凛

「・・・あなた、誰よ」

(しまった)

ここで、漸く私は致命的なミスに気付いた。

そうだ、私が凜の名前を知っているはずがないのだ。彼女と私が出会うのは10年後なのだから。またか、またうつかりスキルか！？私はただらだと内心冷や汗をかきながら、「あー・・・まあ、その、なんだ」と口ごもる。こういうときに限っていい言い訳が思いつかない。

「ひよつとして、お父様の知り合い？」

少しだけ訝しげな顔を緩めて凜はそう問う。どうやら私が聖杯戦争に参加する父親の敵サーヴァントであることには気付いていないらしい。

「まあ、その、似たようなものだ」

「そっか」

言うと、凜は途端にしゅんとした顔になる。

「心配かけちゃったわね」

「全くだ。君はもう少し自分の立場とか色々と自覚したまえ。そんなことではこちらの心臓がもたんではないか」

むつと、凜は私を見上げて不服そうな顔になる。

「あなた、お父様の知り合いってことは魔術師なんですよ」

「む？」

まあ、魔術師としては半人前だったが、まあ一応の分類としてはそうなるだろうな。

「口調も変だし、魔術師の女なのに髪の毛だって短いし、髪は魔術師の命なのよ？あなた、変」

「・・・凜？」

いや、そんなこと言われても。

「見た目だけでも女らしくしたらどうなの？」

何故、私はそんなことを責められなくてはならないのだろう？

「凜、あのな、私は」

「ああ、もう煩い！！あんななんか髪の毛のばしてちょっとは女らしくしなさい！！」

そう幼い凜が叫んだ時だった。それはどういう魔法なのか。かつと、光が私を包んだ。そう、まるで令呪で命令を受けたときのように。

それが晴れたあとも、見た目は私は何も変わっていないかっただろう。だが、私は自分で自分を解析することによって何が起きたのかを理解することが出来た。

そう、何故か私は、既に完成された存在であるはずの英霊でありながら、普通の人間のように髪の毛が伸びる体質に変化していたのだ。

・・・いや、なんでさ。

まあ、新たな呪いを受けて、内心泣きたい気持ちになりながらも、駅までの距離を、凜と手を繋いで歩く。あとちょっとでつくというところで、凜はそっぽを向きながら「その・・・」と言い辛そうに口を開いた。

「なにかね？」

「今日はありがとう。その、助かったわ」

僅かに凜の頬は赤い。思わず暖かい気持ちになって、笑いながら「どういたしました。小さなお嬢さん」と返すと、凜は口をもごもごさせながら、「なんていうか、あんだ、ひきょう」と更に顔を赤くした。思わず首をかしげる。そのとき、品のよさそうな女性が血相をかえてこちらへと走りよってきた。

「凜！」

「お母様っ」

ぱつと、顔を上げて凜が母親らしい女性に駆け寄る。その凜とよく似た品のある女性は、ひっそと娘を抱き上げると、次に私の存在に気付いてはつと顔を上げた。

「貴女は・・・」



「どうやら私がサーヴァントであることに気付いたらしい。ぎゅつと緊張に体を堅くしながら、娘を抱き寄せる。」

「遠坂の奥方かね？私はここで帰らせてもらうが、そうだな。娘の動向にはもう少し気をつけたほうがいい。今この街で何が起きているか、貴女もよくご存知だろう？」

「貴女は……」

凜の母親の女性は葛藤にかられた顔をしている。おそらく娘の前で出している話題なのか測りかねているのだろう。

「大丈夫だ」

出来るだけ皮肉じゃない笑みを浮かべる。

「無駄な殺生は苦手でね。それにそんなことは命じられていないし、関係のない人間を巻き込む気もない」

そんなこと、とは凜に危害を加えるかどうか、ということであることは、頭の良さそうな女性だ、気付いただろう。

「お母様？」

凜は不思議そうに母親を見上げる。

「凜、達者でな」

そう言っただけ彼女達に背を向ける。

「ちよつと、待ちなさい！あんだ、名前は！？」

その声にふつと笑みがこぼれる。

「……また会えたら、その時にな」

次なんてない。なのに約束してしまったのは何故だろうか。まだ赤い魔女と呼ばれて無い彼女は、無邪気に手をふって私を見送った。これを嬉しいと思ってしまったのは何故だろう。

夜は明けない。今はただ、居住のアインツベルンの城を目指して、私は夜闇を駆け抜けた。

NEXT?



第四次聖杯戦争編 06・夢の接触と、新たな呪い（後書き）

とうとう凜が書いて満足なおいらです。

多分次回の更新はZERO文庫本新刊発売と同じような時期になるんじゃないっすかね。文庫版で集めている立場としては更新急ぎぎると困ったことになっちまいますので。本当は今回の話ももうちょっと後に投稿しようかなと考えてたんですが、書けたからまあいっつかとぼちつとやっちまいました。

次回はイスカンドルと赤セイバーのターンだぜ。いえい。

ではまた、次の話で。

## 閑話 イリヤ（前書き）

やあ、ばんははろ。作者のEKAWARIです。

FateZERO新刊発売待ちしてる間なんも上げんのもあれだし、このタイミング逃したら第四次聖杯戦争編ではもう番外編上げれそうになかったので上げてみた。

番外編なので本編と違ってあってもなくてもいい話なのはご愛嬌ですが、イリヤ分が足りなかったんです。さーせん。うひひ。

とりあえず第四次聖杯戦争編は10話完結で本決まりになりそうな状況ですが、8〜10話に関しては遊びいれる部分なさげな感じでつ。5巻と6巻がまだ発売してないんで、大まかな流れ以外は決まっていないですけどね。

短いですがどうぞ。

## 閑話 イリヤ

ふわふわと、雪が舞い降りる中、わたしはじいっと空を見上げた。ここからずっと遠く、ニホンという国にお母様とキリツグがいる。はぁ、と息を吐き出す。それが白い輪になってふわふわと舞う。寒いのは嫌いだ。でも、雪のように自分の髪は綺麗だと、母譲りの銀髪をいつも褒めてくれていたから雪は好き。

「まだかなあ・・・」

母と父とその従者が旅立ってまだ一週間も経っていない。だけど、初めての独りは想像していたよりもずっと長い。

大おじいさまや、他のホムンクルスもここにはいるけれど、それでも彼らはわたしの『家族』じゃない。

出発する前、お母様はこれからずっとイリヤの傍にいたっていった。でも、もうわたしを抱いてくれるわけでもないし、頭を撫でてくれるわけでもない、それが少し寂しくて哀しい。口にしたら困らせるから言わないけど。

そこで、ふと、自分の頭を優しく撫でる褐色の手の感触を思い出す。

アーチャー。

キリツグが呼び出したサーヴァント。

初めて会ったのに、何故か懐かしくて、ずっと前から知っているようなそんな気がする不思議な人。

自分の白銀の髪よりも白い、真っ白な髪に、鋼鉄みたいな色をしているのに優しく穏やかな瞳。傍に居るのは凄く心地よくて、一緒にいたのはたった数日だったけど、もっと昔から一緒にいたみたいな気がしていた。

アーチャーは優しい。優しい人は好き。わたしがねだると色んな

不思議なお話を聞かせてくれて、おいしいお料理とホットミルクを作ってくれるアーチャー。穏やかで優しい目でわたしを見るのに、時々哀しそうな顔をするのがくやしくて、そういう時はわざとわがままに振る舞ってアーチャーを連れまわした。そうしたら、アーチャーは仕方ないなって顔をして、それでも嬉しそうに笑うからわたしもうれしくなって、二人で笑った。それを後ろから見守るお母様の視線が居心地良かった。

アーチャーは不思議な人。大人の女性なのに凄くあどけなくて、時々わたしより子供みたいに見える・・・というよりも、なんだろう？知らないはずの男の子の姿に形がかぶる。彼女を見ていると、赤い髪の少年の姿を時々幻視する。よくわからない。

あと、もうひとつよくわからないのだけど、アーチャーはキリツグとどこか似ている。性格とか見た目とかそういうのは全然似てないと思うのに、不思議。なんでだろう。お母様もアーチャーとキリツグは似てると感じているみたいだから気のせいじゃないと思う。

だからかな。アーチャーは本当の家族みたい。

うっん、本当の家族だと思ってる。アーチャーもそう思ってくれてたら嬉しいな。

「.....」

そっと、アーチャーとお別れしたときのことを思い出す。

アーチャーは言った。わたしの名前に誓うと。

『サーヴァント、アーチャーの名において誓う。約束しよう。イリヤ、君の父親は必ず君の元へ帰す』

それはまるで神聖な儀式のようだった。

アーチャーはまるで御伽噺の騎士のように、わたしに膝を折り、頭を垂れて、わたしの右手にそっと口付けながら、まるで詠うように、厳かに、硬質な声音で誓いの言葉を放った。悲痛なまでの決意を宿した口上。

アーチャーがキリツグを守ってわたしの元に帰すって言うてくれ

ていることは嬉しい。だけど、そこに『アーチャー』のことは入ってなくて、それがたまらなく不愉快で、腹が立って、すごく悔しかった。

『アーチャーも戻ってきなさい』

だからわたしはその感情を隠そうともせず口にした。そうしたらアーチャーったら、すごく吃驚した顔で目を見開くんだもの、失礼しちゃう。思わず怒りたくなったけど、その後アーチャーは、あんまりにも嬉しそうな顔で、今にも泣きそうな笑顔で微笑むものだから、わたしはその怒りも忘れて彼女に見惚れた。

『そうだな。イリヤ。・・・いつてきます』

いつてきます。それはまた帰ってくるということ。彼女が帰る場所はわたしのところなんだ。そう思うと今までの怒りとかどうでもよくなって、わたしもえがおで手を振って見送った。

『うん、行ってらっしゃい』

「早く帰ってこないかなあ」

キリツグは二週間くらいで帰ってくるって言った。独りでまっ二週間は長い。それでも、キリツグも、アーチャーも、わたしの元へ帰ってくるって、そう約束したから、わたしはずっといい子で二人をまつんだ。

帰ってきたら何をしようか？

やっぱり最初は怒ってもいいかな。「レディをこれだけ待たせたんだから、その罪は重くてよ？」とお母様の真似をして、指でびしっと二人をさしながら言ったらどんな顔をするだろう。

そして、いっぱいお話ししよう。

キリツグとはまたクルミの冬芽探して勝負をして、二人して体を冷やして城に戻ったところで、あつたかいアーチャーのホットミルクを飲むの。

やりたいことはたくさんある。

いろんなことをしたいな。

そうして家族みんなで笑って過ごすの。

それはきつと、すごくあたたかい。

「早く帰ってきてね」

寒いのは嫌い、なんだから。

遠い、遠い、異国の空の下にいる両親と、紅い外套の女騎士を想って、イリヤスフィールは空をただじつと見つめていた。

了



閑話 イリヤ（後書き）

次回は再び本編に戻ります。次回、第四次聖杯戦争編7話、サブタイトル「脱落の夜」お楽しみに？

第四次聖杯戦争編 07・脱落の夜 前編（前書き）

やあ、作者のEKAWARIです。ばんははる。FateZERRO最新刊今日発売だつて聞いてたから今日買いにいったのに「明日入荷です」といわれてしまったとです。

ええと、今回の7話は色々申し訳ないのですが、本当はする予定なかったんですけど、前後編にわけてアップすることにしました。っていうのも、予定の部分まで書き上げると文字数が半端ないことになりそうなんで（推定2万〜3万文字）、キリのいいところでわけたほうがいかなあと思った故の犯行ということになります。

つか、文字数多すぎて執筆に時間かかりすぎなんだよ。・・・ぶっちゃけまだ後編書きあがって無いので、後編はもう暫くお待ちください。では。

第四次聖杯戦争編 07・脱落の夜 前編

今でも悔やまれる。

俺は今生の主に勝利を捧げると誓ったのに、あのような海魔に阻まれて、主の危機にも間に合わなかった。

駆けつけた時には、主は血塗れで、一刻を争う状態で倒れていた。主君の婚約者が自分に好意を抱いていたことは知っていた。

だから、主を代行すると聞いた時も俺は渋った。

それでも主と誓った人の体を治すためには聖杯が必要で、他意はないと、彼の伴侶としての決定なのだと言った彼女がいうから、己の意思を曲げ、それを受け入れたのに。

なのに、何故。

何故俺は、たった一つの祈りさえ成就させることは叶わない？

ただ、俺は騎士として生きて死にたかっただけなのに。

『脱落の夜』

side・アイリスフィール

冬木に用意されたアインツベルンの城で、アーチャーが入れてくれた紅茶の味と香りを楽しむ。

ゴールドンルールを知っているものだけが入れられるその味と香りは、その素材を余すところなく最大まで引き出され、これ以上はないというほどの極上のハーモニーを奏でる。

給仕するアーチャーといえば、私から三步下がって、茶器と茶菓子を置いたトレーを手に立っている。

どうやらアーチャーは自分がティータイムを楽しむよりも、私が楽しむ姿を見るほうが好きらしい。そうして給仕に徹しているアーチャーはまるで本物の執事のようだ。

「今日はスコーンを焼いてみた。こっちのクロステッドクリームとレモンジャムをつけながら食べてみてくれ・・・と、どうした？何か言いたいことがあるように見えるが」

知らずアーチャーを眺めていたらしい。

「ちよつとね」

「アイリ、私でよければ聞くくらい出来る。それに言ってくれなければわからないこともある。私は何か君に粗相をしてみましたか？」

「ううん、そういうのじゃないの」  
私は口元に手を当てながら苦笑する。この子は口調は皮肉気なのに心配性なところがちよつとおかしくて可愛い。

「ただね。聖杯戦争の只中なのに、こんなに平和でいいのかしらって、ね」

「アイリ・・・」

アーチャーはきゅつと、眉間に皺を寄せて俯く。

「わかつてる。平和と感じているのは私だけ。キャスターによる被害者はどんどん増えているし、私が見ていないところでも戦いは起こっている。貴女が今日遅かったのだから、誰かを救うために行動した結果なんですよ？」

言いながら、彼女の顔を見つめると、アーチャーは、はあと大きなため息を一つついた。

「確かにその側面はあるだろうがね、本来私が命じられているのは君の傍にいて君を守ることだけだ。誰かを救えなど言われていない。

君に我俣を言つて街まで行つて来たのはあくまで私のエゴだ。そして、いかなる理由があるうと、私が約束の時間に遅れたのも事実。この場合君が行うべき行動は、私の勝手な行動を叱責することだと思つんだがね」

そこまで一息にいつて、アーチャーは再び重いため息を吐き出し、困つたような顔をして私を見た。

「何故遅れたことを追求されなかったのかと思つていたが・・・アイリ、君は前から思つていたことだが、私を過大評価しすぎているぞ。私は君が思うほど大した人間じゃない」

言い切るアーチャーのその顔が、その声が、本気でそう思つていのだと物語つていたから、私は思わず我慢できなくなつて、勢いだけでそこから立ち上がった。

「そんなこと・・・」

そのときだった。耳を劈く轟音が夜のしじまを切り裂き、それにともない自分の体の中の魔術回路にのしかかる負担からきた眩暈に、私は倒れかけ、即座にかけつけたアーチャーによって身を支えられた。

轟音の正体は雷鳴だ。それで侵入者の正体がわかつた。敵サーヴ<sup>ライ</sup>アントだ。今まで戦場となることがなかつた、森の結界は万全な状態で、生半可な術では壊せないように出来ているはずなのに、半分以上術式を破壊され、あまつさえ自分達のほうへと真つ直ぐに向かつてきている。そのやり口に驚く。

「なんてこと・・・正面突破つてわけ？」

「十中八九ライダーの仕様だろうな。ところで、立てるかね？」

冷静を装つて声をかけているようだけど、アーチャーの声には真摯な心配の色が見えたから、私は安心させるように笑つてみせる。

「ええ。ちよつと不意を討たれただけ。まさか、ここまで無茶なお客様をもてなすとは思つてなかつたから」

「全くだ。これ以上破壊されてもかなわん。私が行こう。アイリ、君はここで待機していたまえ。あの豪快な男のことだ。私が前に出

れば君にまでは手を出さないだろうよ・・・アイリ？」

瞬時に武装し、颯爽と背中を向けて去ろうとするアーチャーを、その赤い外套を掴むことで押しとどめる。

「まって。私も行きます」

「しかし・・・」

困ったように眉根を寄せるアーチャーだったが、思案し、思いなおしたのだろう、ため息をひとつつくと、私を横抱きに抱き上げて玄関へと駆け抜けた。

そして正面玄関前のホール、階段の上で立ち止まると、威嚇射撃のためだろう、黒い弓を取り出す。けれど、アーチャーが矢を放つより僅かに早く、征服王の大音声が鳴り響いた。

「おおい、アーチャー。わざわざ出向いてやったぞお。さつさと顔を出さぬか、あん？」

その声は想像に反してというべきか、むしろ想像通りだったといふべきなのか、戦意の欠片も無い非情に暢気な口調で、アーチャーは頭が痛そうな顔をしてこめかみに手をあてると、気を取り直したのだろう、弓を消して玄関へとそのまま向かった。

「そんな大声で言わなくても聞こえている。それに生憎、こんな乱暴な客人を迎えることになるうとは思ってもみなかったものでね。全く、君はマナーというものがなくていいいな？アポイントメントも取らない招かざる客には、早々にお引取り願いたいものだ」

「がっはっは。おぬし、言うのお」

豪快に笑うライダー。月明かりの下で胸を張って立っているそのサーヴァントの姿を見たとき、思わず私は困惑と苦いものを感じた。そのライダーの格好はサーヴァントとしての戦装束などではなく、ウォッシュジーンズによくわからないデザインのＴシャツ一枚という格好だった。

「それにしても、城を構えてると聞いて来てみたが・・・何ともシケた所だのお、ん？こつ庭木が多かつちや出入りに不自由であろうに。城門に着くまでに迷子になりかかったんでな。余が伐採してお

いたから有り難く思うがいい。かなぐり見晴らしがよくなってるぞ」「そうか。かの名高き大王に庭師の真似事をさせてしまったとは、これは恐れ多すぎて涙が出てくるな。ところで君は有り難迷惑という言葉を知っているか?」

「むほオ、そんなに褒めんでもいいわい。あまり持ち上げられると痒くなるっちゅーもんだ」

「参ったな、褒めたように聞こえたのか」

ええと、とりあえず、戦闘にきたわけじゃなさそうだけど、私はどう反応したらいいのだろう?

「それより、おいこらアーチャー、今夜は当世風の格好はしとらんのか。何だ、のっけからその無粋な戦支度は?」

「・・・帰ってもらってもかまわんかね?」

「客人も持て成さずにつき返すちゅうのか?おぬし、案外器量が狭いのお。こちとら手土産もほれ、この通りもってきたというのに」  
そう言っただけでライダーが存在を強調したのは、オーク製のワイン樽だった。・・・今って聖杯戦争中なんじゃなかったかしら?何故この敵サーヴァントは酒樽を抱えてここにくるのだろう。

「君はまさかとは思うが、酒宴にきたというのではあるまいな?」

「そのまさかよ!なんだ、おぬしちゃんとわかっておるじゃないか。なら話は早い。ほれ、そんな所に突っ立ってないで案内せい。どこぞ宴に誘え向きの庭園でもないのか?」

アーチャーは、はあと大きく重いため息を一つつくと、静かな声で言った。

「・・・こつちだ」

「アーチャー?」

慌ててアーチャーに近づくと、彼女は苦笑して、小声でこんなことをいった。

「この手の輩には何を言ったところで無駄だ。どうも戦いにきたわけではないらしいし、この正々堂々とした男が不意打ちをすると思えない。ここは適当に付き合っつて、早々にお帰り願おう」

そう口にするアーチャーは、どこか妙に手馴れた熟練を思わせるものがあつた。

「畏、とか……そういうタイプじゃないものね、彼」

知り合つてそれほど時が立つていないし、敵サーヴァントだけでも、そういう面においては信頼がおける、そう思わせるだけのものがライダーにはあつた。人はそれをカリスマと呼ぶのかもしれない。

「それに……だ」

そこでアーチャーはくつと、口元の端を吊り上げて、獲物を前にした鷹のように、すつと目を細めた。

「上手くいくと、何もせずとも勝手に情報を吐き出してくれるかもしれない。何、せいぜい利用させてもらつさ」

その顔に、雰囲気的に、私は9年前の出会つたばかりの頃の切嗣あつとの姿をダブらせて……。

「アーチ……」

「おい、何をしちよる？置いてゆくぞ？」

言いかけた声は、こちらの思惑など欠片も気にしていないだろう征服王の単純明瞭な声にかき消された。

「今行く」

そうして二人で、豪快でひたすらに巨大な騎乗兵の英霊のあとを追つた。

side・ライダー

「美味い!!」

満面の笑みで余は偽らざる本心を投げかけた。

「それは何よりだ。私のようなものの手料理が、かの高名な征服王の口に合うのかと思つたものだが、いやはやその心配は杞憂だつた



ようだな」

そう答えるアーチャーは、初めて会ったときの現代服に身を包んで、からかうような口調で給仕に身をやつしておる。その仕草は手馴れていて、一朝一夕で身についたものじゃないことは、精練された身のこなしから明白だ。

「むむ、これほどの逸品を手がけておいてよく言うわい」

そういうとアーチャーは苦笑しながらも、追加のつまみでも作ってこようといって立ち上がった。その顔は満更でもなく、本人も口ほど今の状況を悪く思っではないなさそうだ。全く素直じゃないやつだの。

アーチャーは最初から思っておった通り相当にお人よしな人間だった。

『いささか珍妙な形だが、これがこの国の由緒正しい酒器だそうだと、余が竹の柄杓を取り出すと』ライダー、君のその知識は正しくない。由緒正しい酒器とはこういうものを言う』というなり、どこからともなく黒く艶やかな杯を人数分用意したり、『酒にはつまみがいるだろう』と、見たことの無い料理を次々と運んできたり、これで人が良くない筈が無い。おまけに、アーチャーの手料理だというそれらの品々は、驚くほど美味く、それらを口にするだけで、この白髪褐色肌の女サーヴァントの人間性が伝わってくるというものだ。

スタイルもいいし、顔も悪くない、その上料理上手で、接待も上手い。ここまで揃っとしてこやつが英霊ちゅうのも不思議なもんだ。着飾らない衣装と、可愛げのない喋り口調が正直勿体無い。

「・・・なにかね？そうじろじろ見られるのはあまり気分のいいものではないのだが」

「おぬし、その喋り方、もう少しなんとかならんのか？」

「は？」

「折角可愛い顔をしとるちゅうのに勿体無い」

言つと、あからさまにアーチャーの体が固まった。ついで、とて

つもなく重たいため息をひとつ吐くと、この白髪の女サーヴァントは頭が痛いといわんばかりの声を出す。

「・・・私がどんな喋り方をしてようと、私の勝手だろう。あと可愛いとはなんだ、可愛いとは」

「何を言うか。勿体無い。そもそも」

「ええい！そこまでにせよ！！」

まだも言い募ろうとした時、第三者の声にはばまれた。可愛らしい少女の声。どうやら、街のほうで声をかけた件の人物が到着したらしい。

「な、セイバー？」

「ライダー、貴様勝手に余のアーチャーを口説くでないわ！！アーチャー、無事であったか？このような巨大漢の相手などせずともよいぞ。ふふ、こここのところ気色の悪い、芸術性の欠片も無いキチガイの相手ばかりしておったからの。うむ、そなたにまた会えて余は嬉しいぞ！」

言いながら、金髪に赤いドレスを身に着けた少女がアーチャーに向かつて突進する。その顔は全身で喜びを露わにしており、今にも飛び掛らんばかりの形相。アーチャーは、おっかな吃驚しながら、二、三步後ろに下がった。が、胸に飛び込んできた少女は避けそこなった。

「いつ私が君のものになったのか、聞いてもいいかね？」

押し倒されんばかりの様子を、足に力をこめて踏みとどまったアーチャーは、汗を一筋流しながら、困ったような、苦虫を噛んだような顔で件の犯人に問いかける。セイバーは悪びれることもなく、元気な声で言葉を返す。

「無論、余がそう決めたからに決まっておろう！全く、それにしても余がまだ来てもおらなんだのに宴を始めるとは、ひどいではないか。それとも、そなた、余の仕置きが望みか？それなら邪魔者がいなくなつたあと、存分にかわいがってやるゆえ、感謝せよ」

「ライダー」

じろりと、アーチャーが不審げな目で余を見る。どういうことだ、説明しろとその目は語っていた。

「いや、な。街の方でこいつの姿を見かけたんで、誘うだけは誘っておいたのさ。遅かったではないか、セイバー。まあ余と違<sup>ち</sup>って歩<sup>か</sup>行<sup>ち</sup>なのだから無理もないか」

「ふん、そう思うのなら余を乗せれば良かったのだ。言い捨てるだけ言い捨てていったのはそなたであろう？」

セイバーはアーチャーに抱きついた姿勢のまま、余のほうを振り向いて眦を吊り上げて言う。見目麗しい金髪緑眼の美少女が、白髪褐色肌の肉質的な美女（というには、多少鼻肩目がある気もするが）にしな垂れかかっている絵は美しくはあるが、主に赤いドレスの少女の雰囲気の原因で妖しさをも醸し出している。花が二人、その絵をこうして観賞しておるのも悪くはないんだが、余がのけ者にされるのは面白くない。

「まあ固いことを言うでない。ほれ、駆けつけ一杯」

そういつて杯になみなみと満たしたワインを渡すと、セイバーは見た目の幼さにそぐわぬ豪胆さでその杯の中身を飲み干す。

「ふむ。悪くはないが、よくもない」

ありや。中々厳しい評価じゃの。アーチャーはもうセイバーの件は諦めたのか、気を取り直したのか再び給仕に徹しようとしている。「つまみでも食べるかね？」

「おお、気がきくではないか」

いいながらセイバーは、おそらくこの国の料理であろう、見たことのない品々に興味津々に手を伸ばす。

「む、こ、これは。アーチャー、今すぐこれを作った者を呼んで参れっ！」

興奮の体で声を上げる赤いドレスの少女、それに白髪の女はむっつりとした表情で口を開いた。

「これを作ったのは私だ。・・・なんだ。君の口には合わなかったか？」

「なんと！そなたがこれを！？」

セイバーは心底驚いたとばかりに目を見開く。それに、アーチャーは益々不機嫌そうな・・・というより、ありゃあ拗ねとるのか？そんな顔をして「私が料理をつくっては悪いのか」などとぶつくさ言っている。

「いや、悪くなどない！寧ろ、いい。余は皇帝ゆえ、色んな珍味をも食してきたが、これほどの美味なる料理など初めてよ。これほどのものを作れるとはさぞや高名な料理人かと思うのだが、よもやそなたの手料理であったとは。感動した。余は嬉しいぞ」

いいながら本当に満足そうに食事を始める赤いドレスの少女の言葉に、アーチャーも機嫌を直したらしい、「お褒めに預かり光栄だ」といいながら、セイバーの杯にワインを注いだ。

アーチャーはどうも素直でないわりにわかりやすい。あー、なんじゃ。最近現代にきてから読んだ雑誌にのっておったの。こういうのを「つんでれ」というのだったか？

むう・・・戦力とか抜きにしてもほしい人材じゃの。よし、そうと決まれば声をかけるか。余は征服王ゆえな。まずはやはりストリートにいつてみるか？

「アーチャーよ、ものは相談なんじゃが、おぬし、余のメイドにならないか？」

「たわけ」

一言で切って捨てられる。

「ライダー！アーチャーは余の花嫁になることが決定しておる！！余のものに手を出すのなら許さぬぞ」

「私にそんな予定はない」

「いや、そもそも女同士じゃ結婚出来んのではないか？」

そのツツコミは全力でスルーされた。むむ、世知辛いのお。

「さて、戯れはこの辺りにしておいて、そろそろ本題にでも入るか  
の」

そう余が口になると、一斉に弓兵アーチャーと剣使いセイバーは余へと意識を傾ける。

「おぬしら、聖杯に何を望む？」

side・遠坂時臣

「よりもよつて、酒盛りとはな・・・」

独り、自宅の地下工房に座したまま、私はライダーの奇行に幾度目かわからぬため息を吐いた。

『セイバーを放置しておいて構わぬのでしょうか』

通信機越しに弟子の綺礼のやや硬い声が聞こえ、「仕方あるまい」と返事を返す。

「あのセイバーに何を言ったところで無駄だろうからな・・・」

まあ、起きてしまったことはしょうがない。元々は目当ての英霊の聖遺物を消失してしまった私が悪かったのだ。それより今は自分に出来ることをするべきだろう。こんな状況でもこっちのメリットとてないわけではないのだから。

ライダーがインツベルンの森の結界を破壊してくれたおかげで、気配遮断のスキルを保ったままのアサシンがあそこに進入できるようになった。

そしてあの場にはなんとしても調べたいと思っていた対象が皆揃っている。

まず、ライダーであるイスカンドルと、そのマスターのウェイバー・ベルベット。未だ他のサーヴァントとも交戦せず手の内がしれない不気味な存在。征服王イスカンドルといえ、その真名の有名さから考えても破格の英霊といえるだろう。『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』を上回る宝具をもっていたりしたら厄介だ。

そして、アーチャー。気配遮断を用いて誰にも気付かれなかったはずのアサシンの存在に気付き、あまつさえ他のサーヴァントの眼

前でその姿を射抜き、アサシンが存命であることを周囲に知らしめた思まわしい存在。能力値はさほど高そうには見えないが、この白髪褐色肌の女サーヴァントも、ライダー同様に交戦らしい交戦をしてはおらず、わかっているのは正確な射撃能力をもっているということと、剣らしき矢を使ったということくらいか。

おまけに、ここのところはずっとアインツベルンの城に閉じこもったままだから、余計に実際はどんな能力の持ち主か伺えない。なのに、頭が痛いことに、自身のサーヴァントであるセイバーは、アーチャーを自分のものにすると思っているのだから始末に終えない。

「……………この辺りでひとつ、仕掛けてみる手もあるかもな。綺礼」

『成る程。異存はありません』

他のサーヴァントに対する情報収集は終わった。なら、ここでアサシンを使い潰しても問題はない。

『すべてのアサシンを現地に集合させるのに、おそらく10分ばかりかかるかと思われませんが』

「よし。号令を発したまえ。大博打ではあるが、幸いにして我々が失うものはない」

## side・エミヤ

ライダー主催の酒宴は緊張感を孕みながら進んでいく。それを私は他人事のように見ていた。

大王と皇帝による王道問答、それがどうもこの宴の最大の目的だったらしい。全く、王どころか騎士ですらない私には関わりのない話題だといえる。

セイバーとライダーがなにやら言い合っているが、興味はない。そもそも私のようなものが口を出すような問題でもなかるうよ。二人の言葉は平行線を描いて進んでいく。

「アイリ、疲れたなら君は下がっていたほうがいい」

私は、英霊同士の会話に口を挟む隙もなく、また口を挟むの躊躇していたのだろう、アイリと、イスカンドルのマスターである少年の前にそつと紅茶を置く。

「ええ、ありがとう、でも大丈夫よ、心配しないで」

アイリスフィールは気丈にそういうが、神経をぴりぴりさせており、とくにセイバーを警戒しているのが丸わかりだ。とりあえずため息をひとつつく。

「なら、いいんだがね。それと、君はウェイバー君だったかな？毒は入っていないから安心して飲むがいい」

そういうと、どこか少女染みた面差しの小柄な少年はじつと、胡散臭げに私の顔を凝視する。

「何、他意はないさ。それより、君も大変だな。サーヴァントがあも自由な男では君も苦労しているのではないかね？」

「おーい、アーチャー！何を他人事みたいな顔をしておる。おぬしはこつちに来んかつ」

セイバーとの議論に白熱していたライダーは、どうも私の不在に気付いたらしい。やれやれ、と重い腰をあげて二人の元へと戻る。

見ればセイバーはむう、と頬をふくらませて不満げに私を見ている。

「そなた、何ゆえ抜け出したのだ。怒らんからいうてみよ」

ふんつと鼻をならしながら言われても、説得力がない。

「王と王の会話に踏み入るのは不敬だと思つてね。私なりに気をつかつたんだがな」

「そのような些事気にするでないわ。仮にもそなたは余が見込んだ者であるぞ？」

「全く、変なところで律儀な奴じゃの。それで、結局聞けなんだが、おぬしの聖杯に対する望みは何か？聖杯に何を求める？」

そついいながら私を見つめる赤い瞳も、緑の瞳にも真剣な色があつた。

数週間前のことを思い出す。私の聖杯に対する願いはなんだと、あの時尋ねたのは私と道を違えたもう一人の私えみやしろだったか。

まあ、別段黙っているようなことでもないだろう。本音をいつたところで、私に損はない。

「聖杯に願うような望みなど、私はもってはおらんよ」

その言葉は、硬質な声音を意識していたのに、自分でも驚くほど柔らかな語調になって付近に響いた。

「・・・は？無い、と？万能の願望器に対する望みがないとな？」

困惑する赤毛の大男とは対称的に、赤いドレスの少女はゆっくりと見定めるような目で私を眺めている。

「私には、叶えられない願いなどなかった。他の連中とは違う。私は望みを叶えて死に、英霊となつた。故に叶えたい望みなどないし、人としてここに留まる事にも興味はない」

いつか衛宮士郎に自嘲気味に語つたそれと同じ内容を、あの時とは明らかに違う、穏やかで満ち足りたような声音で並べ立てる。

ああ、そうだ。美しいからそれに憧れたのだ。この手は取りこぼしてきたものばかり見ていた。それでも確かに救えたものはあつた。だから、間違つてなどいなかった。それに気付くのは遅すぎたのかもしれない。でも、答えはここにある。そうだな。望みを叶えられずに死んだ英雄などそれこそ数え切れないほどいるだろう。でも私は、最期まで貫けたのだ。

黄金の夜明け、愛した少女との別れの風景、あれに恥じぬものは私の人生にもちゃんとあつた。それに気づけなかったから、自己嫌悪と絶望の果てに、自分殺しを望み、マスターすら裏切つてしまつたけれど、それでも確かに救えたものはこの手にあつたのだ。

なんだ、私は幸せ者じゃないか。後悔し、絶望しても、それを諫めるものがいた。私の行く末を気にかけてくれた少女がいた。もう一人の自分に答えももらった。そして思わぬ形だったが、自分を育



て、理想をくれた、かつて憧れた人にまた会うことが出来た。

まあ、受肉して人として留まりたいというイスカ<sup>ライダー</sup>ンダルには理解が出来ないかもしれないが、それでも、ああ、悪くないのだ。こうしてここにあることは。

「私は、既に満たされている。これ以上は十分だ。しかし、まあ、この度の戦いにおける私の目的はといえば・・・」

嗚呼、そうだ、私は満たされている。ふと、自分の口元が綻ぶのがわかる。酔っているのか？私は。サーヴァントだというのに。ああ、でもたまにはこういうのも、悪くはないのかもしれない。

「マスターを守り抜き、家族の下へ無事帰すこと。それさえ果たせばそれでいいさ」

ふと顔を上げると、呆けたような目が私に集まるのがわかる。なんだ？何故皆して私を見る？

はあー、と大きな息を吐き出す音が聞こえる。発生源は赤毛の王様だ。

「おぬし、無欲じゃの。なんちゅうか、もっと、こう・・・」

まだライダーが何か言い募ろうとしたそのとき、突如おきた周囲の異変がその言葉を遮った。

アイリもウェイバーも、それに気付き、アイリは私に、小柄な魔術師は己のサーヴァントの元に駆け寄る。

月明かりの照らす中庭に、白い怪異が浮かんでいた。黒いローブに髑髏の仮面をかぶったそれ、間違いなくアサシン。それがそろそろと集団になって我ら5人を囲んでいる。

セイバーに倒されたはずなのに、倉庫街に現れたことから考えてアサシンは複数いるのではないかと思っていたが、それがここで確信へと変わる。そろそろと現れたアサシンたちは、10、20などという数では収まらない。

「・・・これは貴様の計らいか？セイバーよ」

無然と赤いドレスの少女に声を投げかけるライダー。それに少女は不機嫌そうな顔で、嫌そうに顔をしかめた。

「ふん、奏者の考えなど、余の知ったことではないわ。大体、余が暗殺をするのならもつと・・・ともかく、このような芸術性の欠片も無い、趣味の悪い影など、余にとつても不愉快だ」

心底そう思っているのだろう。ぷいっとそっぽをむいた剣使いの少女は、むくれた顔のまま、手近な料理に手をのばす。

その間も、周囲を囲む影の集団は数を増やしていく。

「む・・・無茶苦茶だッ！」

そう悲鳴をあげたのはライダーのマスターの少年だった。

「どういうことだよ!? 何でアサシンばかり、次から次へと・・・だいたい、どんなサーヴァントでも一つのクラスに一体ぶんしか枠はないはずだろ!？」

「全くだ。これは一体どういう手品をつかったのかね? 是非教えてもらいたいものだな」

アイリスフィールより、一步前で、私は悠々と腕を組みながら、不敵に尋ねる。

頭の中で設計図を描く。群れをなすアサシンたちが口々に忍び笑いをもらす。

「我らは群れにして個のサーヴァント。されど個にして群の影」

ああ、納得がいった。つまりはこのサーヴァントの宝具とは分裂に類するものか。アサシンたちを解析する。その能力は分散されている。魔力がサーヴァントとしては一体一体の値があまりに低すぎる。おそらく全部集めて初めて、並みのサーヴァントと同じだけの霊力量となるのだろう。

気配遮断のスキルを放棄して、こうして姿を見せたということは勝負に出るつもりなのだろう。英霊としてはいくら弱くなっていても、それでもアサシンは英霊なのだ。マスターであるあの少年やアイリスフィールには太刀打ち出来まい。

だが・・・くつと笑みが知らず漏れる。何、多対一の戦いには慣れている。見たところセイバーはあちらの陣営の人間だが、彼らに手を貸す気はなさそうだ。障害にはならんだろう。

設計図を描く。さあ、最強の自分を幻視しろ。

「……ラ、ライダー、なあ、おい……」

ウェイバーが不安げに自分の従者に声をかけている。ライダーはアサシンたちを睥睨したまま不動の如く居座る。

「ここら坊主、そう狼狽えるでない。宴の客を遇する度量でも、王の器は問われるのだぞ」

こんな時まで全く、大きな男だ。一緒にいると毒気を抜かれそうになる。

「あれが客に見えるつてのかあ!？」

悲鳴をあげる小柄な少年の言葉には同意したいところだが、ライダーとて何か考えていそうだ。私は設計図を維持したまま、とりあえずライダーの動向を見守る。

「なあ皆の衆、いい加減、その剣呑な鬼気を放ちまくるのは控えてくれんか? 見ての通り、連れが落ち着かなくて困る」

そのライダーの言葉に、赤いドレスの少女が、傲慢に笑う。

「あのような影まで宴に加えようとは、なんとも酔狂なものよな? 征服王?」

「おうおう、酔狂で結構だわい。王の言葉は万人に向けて発するもの。わざわざ傾聴しに来た者ならば、敵も味方もありはせぬ」

言いながらライダーは、樽のワインを私が投影した杯で汲み上げ、アサシンたちの前に掲げる。

「さあ、遠慮はいらぬ。共に語ろうという者はここにきて杯を取れ。この酒は貴様らの血と共にある」

ひゅん、と風を切りながら短刀ダークが飛翔し、杯を射抜く。射抜かれた杯は幻想を保てなくなりばぁんと、霧散した。その有様に、ライダー以外の人間がぎよつと息を飲んだ。

ライダーはじつと、零れ落ちた酒を見ている。杯におきた怪異など気にも留めていない。彼にとつては、そのこぼれた酒と、アサシンたちの返答のほうが余程重大事だった。

「余の言葉、聞き間違えたとは言わさんぞ？」

この明瞭な英霊には珍しいほどの、静かな声音だった。

「『この酒』は『貴様らの血』と言った筈・・・そうか。敢えて地べたにブチ撒けたいというならば、是非もない・・・」

その言葉と共に、熱砂が吹き込んだ。この場にあるう筈の無いそれが、大王の気の昂ぶりと共に渦巻いていく。

「さて、貴様らには余が今ここで、真の王たる者の姿を見せ付けてやらねばなるまいて！」

最初の異変から、まさかとは思いつつも私はこの現象の正体を理解していた。だが、これは普通の魔術師ならば驚愕と共にある現象。これは、最も魔法に近いとされる魔術だ。

「そ、そんな・・・ッ！」

驚きの声はアイリと、ライダーのマスターの声。

「固有結界・・・ですって!？」

ああ、アイリ、君は私の宝具も固有結界だと知ったらどう思うのだろうか？そんなことを他人事のように思いながらその異界を眺める。

照りつける灼熱の太陽。晴れ渡る蒼穹の彼方、吹き荒れる砂塵に霞む地平線まで、視野を遮るものは何もない。

「そんな馬鹿な・・・心象風景の具現化だなんて・・・あなた、魔術師でもないのに!？」

「もちろん違う。余一人で出来ることではないさ。これはかつて、我が軍勢が駆け抜けた大地。余と苦楽を共にした勇者たちが、等しく心に焼き付けた景色だ」

「ふむ、中々面白い見世物ではないか」

赤いドレスの少女はそんな言葉で茶化す。

このライダーの固有結界の世界、そこに入ってから、世界の転換に伴い、位置関係すら全てが覆されていた。

アサシンたちは揃って荒野の彼方に追いやられ、中央にライダー、私や他の者はライダーの後方に配置させられている。そして、辺り

に漂う塵気楼のような影、それがどんどん色彩と厚みをもって正体を顕わにしていく。

「この世界、この景観をカタチにできるのは、これが我ら全員の対象であるからさ」

そうして現れた無数の騎兵達。彼らは一人一人が一騎当千の勇者だ。

「こいつら……一騎一騎がサーヴァントだ……」

呆然と呟いたのはライダーのマスターであるウェイバー・ベルベツトだった。

「見よ、我が無双の軍勢を！」

誇らしく、数多の騎兵達を従えながら、征服王の大音声が響く。

「肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』に召し上げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を越えて我が召喚に応じる永遠の朋友たち。彼らとの絆こそが我が至宝！我が王道！イスカンダルたる余が誇る最強宝具……『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』なり！！」

結果をいうなら、アサシンたちは、千を数えるだろう勇者達によって蹂躪され、痕跡すら残すことはなく、消え去った。それがこの宴の幕切れ。セイバーとライダーも帰還し、静かになった城で、破壊の後を修復しながら、私はライダーが見せた固有結界のことを考えていた。

あれは、厄介だ。おそらくは、私の持つ『アンリミット・ブレイドワークス無限の剣製』との相性はあまりよくないだろう。かの慢心王となら相性は悪くないのだが……と、そこまで考えてそういえば此度の聖杯戦争にはギルガメッシュが存在していないことに考えを馳せる。やはり、私がアーチャーとしてこの戦いに召喚されたことで変わった歴史の一つなのだろう。

聖杯は汚染されている。私は召喚されてすぐに「あくまで私の知る歴史の話だ。並行世界であるこの世界も同じとは限らん」と聖杯が汚染されているのは可能性の一つとしてしか提示していなかった

が、今は強く思う。やはりこの世界の聖杯も汚染されている、その可能性は十中八九間違いないだろう。

一番の理由は、キャスターとそのマスターだ。快樂殺人者がマスターに選ばれるなど、無色の願望器なら考えられないことだろう。まあ、元からこの街の聖杯の成り立ちを考えるに、血に塗れた醜悪な玩具箱に過ぎないわけだが、それでも度が過ぎている。

とはいえ、現段階で私に出来ることなどない。聖杯が顕現するのは、サーヴァントが残り少なくなってからだし、大聖杯を今破壊したところでアンリ・マユの呪いが漏れ出さないという保証は無い。大聖杯の居場所もわからない。なにより、ここにはセイバーが・・・騎士王アルトリア・ペンドラゴンがいない。

セイバーの持つ「約束された勝利の剣」ほどの大威力がないと、汚れた聖杯を消し去るのは難しいだろう。

なんだ、本当に問題だらけじゃないか。私は一つため息をつく。今夜のことは切嗣マスターにも連絡をつけてある。叱責を受けるのは覚悟の上・・・ではあるが、正直今の爺さんの気持ちは私にはわからない。どうにも避けられているようだし、私を不必要に思っているように見える。全く、どうしたものか。

叱責してくれたらいい。そのほうが余程私だって気が楽だ。

サーヴァントはマスターの道具、それを魔術師殺しといわれたあの男がわからないはずがないというのい。道具としてすら見てもらえないのなら、サーヴァントとしてこれほど辛いことがあるだろうか？

星空を見上げる。脱落したサーヴァントは、まだ一人。

後編へ続く

第四次聖杯戦争編 07・脱落の夜 前編（後書き）

というわけで酒宴パートでした。

いやあ、この酒宴の話は、赤セイバー召喚決めたときから書きたかった話でしたので、書いて満足です。イスカにアーチャーのこと「メイドにならんか？」って言わせてみたかったんだよ。いや、なんとなく。

冒頭分は後編の内容の一部ネタバレになっていますが、元々前後編あわせてひとつの「脱落の夜」という話のつもりで構成立ててたからその名残みたいなもんです。

次回、後編では青髭の旦那がぶいぶい言ったり、マーボー神父がふわふわしたりするよ。お楽しみに？

第四次聖杯戦争編 07・脱落の夜 後編（前書き）

お待たせしました。脱落の夜後編をお送りします。ばんははろ、作者のEKAWARIです。

今回の話は意外にランサーの出番が多くなりました。

ゼロマテで作者陣にフルボッコ言われているランサーかわいいそうですw  
だが、そこがいい。（待てや）今回の話もまた龍ちゃん全然書けなかったことにしょんぼりです。ZERO読んでいると龍ちゃんと旦那の会話に思わず和むんですが、わしだけですか？

それはともかく、ではどうぞ。



第四次聖杯戦争編 07・脱落の夜 後編

side・言峰綺礼

最初は暗闇の中で誰かの気配を感じているだけだったその夢は、日が経つにつれどんどんと鮮明に進化していった。それに伴い、たった五分目を閉じただけでも、その世界が私の前に広がるようになった。

ぼんやりと影が揺れる。はっきりした姿とはいえないが、それでもその正体が黄金のアーマーに包まれた男の姿をしているところまでは見て取れるようになった。今なら、もう言葉を交わせるだろう。根拠がないがそれは確信だった。

『お前は誰だ』

『我に名を尋ねるか？とんだ無礼だな、綺礼』

くつくつと笑い声。そうその男は笑っているのだと確かにわかる。何を言っているのかもわかるのに、声がわからない。どんな声で喋っているのかはその表情が輪郭しかわからないのと同様に不鮮明なのだ。

『私のことをお前は知っているのか』

『ああ、そうとも。知っている。我ほどお前のことを知っているものなど他におらんだろうよ』

傲慢に男は笑う。嗚呼、これは超越者だとわかった。

『それは私よりも、という意味か？』

けらけらと、男の笑いがより大きく膨れ上がる。それは是。当たり前前なのだという肯定。

『二度目だからな。茶番は嗚呼、いらんだろう？なあ、言峰綺礼。』

自分の愉悦を認められない歪んだ魂よ！貴様は今日アサシンを使い潰しただろう？正式に聖杯戦争を脱落できたとも思ったか？

『・・・何を言いたい？』

『お前は何故聖杯にマスターとして選ばれたかわかるか？』

・・・判る筈が無い。父と時臣氏は、遠坂陣営を助けるためだと言った。私自身には望みなど何も無い。ならば、半信半疑ながらも、そうなのだろうと思った。アサシンが脱落して、ああ、ようやく私も肩の荷がおりたと思った。それだけだ。強いて望みをいうならば、おそらく私が求める答えをもっているだろう衛宮切嗣に問いかけを放つ、それくらいものだ。

『綺礼よ。王の言葉だ、よく聞け。お前はな、聖杯に願う望みを既にもっておるのよ。それから目を逸らし続けているだけに過ぎん、既にもっている、だと？』

『自分の悦楽に目を背けるな。答えは既にお前の中にこそあるのだからな』

にたりと、影が笑う。ぞっと背筋が凍える。

『お前は・・・』

『そら、証拠だ。左の上腕を見よ』

その、声ならざぬ超越者の声を合図に、ずきりといつかも味わった痛みが走って・・・奇妙な暗闇に、意識が覚める直前、私が自分の腕に見たものは、失くしたはずの二画の聖痕が浮かび上がっていき姿だった。

カラカラ、カラカラと歯車は廻る。

side・エミヤ

現代人だというのなら、騎乗のスキルはもっていなくても車の運

転は出来ると考えていいですか、と黒い女に尋ねられて、是と答え  
た。

昨夜の酒宴の件について、切嗣<sup>マスター</sup>はただ、一言。『拠点を変えたほ  
うがいい』とそれだけを言った。自分が昨晚予想した嫌な想像通り、  
叱り付ける言葉の一つすら飛んでこないことに、内心落胆しながら、  
『そうか』とそれだけを答えた。

そして今、貸し与えられた外車<sup>メルセデス</sup>にアイリスフィール共々乗り込み、  
先導として前に行く久宇舞弥の後についていつているのだが・・・  
冬木市の内部へ入ったときから、彼女がどこに向かっているのかわ  
かってしまい、思わずため息を漏らす。

(まいったな)

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

そう、とだけ口にする。彼女はそれ以上追及してはこなかった。  
気を使わせてしまったか、それとも・・・追求する元気がないほど  
消耗しているのか。

そして、想像通りの場所こそがこの拠点変えの終着地だった。

「ここが・・・ふうん。また随分と不思議な建物ねえ」

アイリスフィールが素直な感想をもらす。しかし、その言葉もす  
るりと、右から左へ私の耳から抜け出していくようだ。

体感としては、たった数週間。数週間前にも来た筈の建造物、後  
の衛宮邸の前に私は立っていた。

切嗣に引き取られてから冬木を出るまで自分が育った家。馬鹿な  
感傷だ。荒れ放題の前庭、寂れた雰囲気の家屋敷。これは人が住  
まないようになってから長い月日を重ねてきた建物だ。決して私が  
育ったあの家と同じとは言えない。それでも、目を閉じればかつて  
の姿が鮮明に浮かび上がるだろう。

『士郎、いつでも帰ってきていいんだからね。おねえちゃんは待つ  
ているから』

そう言ったのは誰だったのだろう。既に摩擦してうすらぼんやり

としか思い出せないけれど、いつもこの家にいた人だったような気がする。そう、きっと衛宮士郎にとっては大切な人だったはずだ。オレが切り捨てた」。

ふと、視線を感じて隣の女性の姿を伺う。アイリはその赤い目で観察するようにじっと私を見ていた。

「アイリ？」

「そっか・・・ここがそうなのね？」

どきりと、心臓が早鐘を打った気がした。無論、錯覚だ。

「さて、何の話か・・・」

「とぼけなくても結構よ。ここが、貴女の育った家なんでしょう？」

私は、そんなにわかりやすい反応をしていただろうか。それとも、彼女を誤魔化せると思ったほうが愚かだったのか。苦笑しながらひとつ首を縦にふる。それを答えにかえた。

「やっぱり。懐かしいって顔してたもの。でも、ウフフ。なんだか嬉しいわ。私、むかし日本のお屋敷を見て見たいって切嗣に話したことがあったのよ。それで用意してくれたのかしらって思ったのだけれど、ここが貴女の育った家だなんて、感動が二倍だわ」

そう言いながら彼女は物珍しそうに屋敷中を見て廻った。私はそのあとを三步分ほど離れてついていく。やがて、見終わると次いで真剣な顔をして何かを思索しはじめた。

「どうかしたのかね？」

「ああ、うん。この家で育って魔術師でもあった貴女ならわかると思うんだけど・・・、ここ結界の敷設はいいんだけど、工房の設置がね・・・」

「ああ、それなら庭にある土蔵を使うがいい。私がこの家に住んでいたときは、工房・・・とまでいえる代物ではなかったが、工房としてあそこを使っていた」

「そっか。なら、案内してくれる？」

ぎいと、古めかしい鍵を開けて土蔵を開く。

「ああ、ここなら理想的！」

土蔵の中に一步踏み込むなり、アイリはそんな風に満足そうに口にする。

「ちよつと手狭だけれど、ここならお城と同じ要領で術式を組んでも大丈夫ね。とりあえず魔方陣を敷いておくだけで、私の領域として固定化できそう」

魔方陣、とその言葉で私が思い出したのはアルトリアとの出会いだ。書いた覚えのない古い魔法陣が光を放って出てきた彼女。そうか、あの魔法陣はアイリが書いたものだったか。

「じゃあ、さつそく準備に取り掛かりましょうか。アーチャー、悪いんだけど車に積んである資材をもつてきてくれる？」

「了解だ。と……その前に尋ねたい」

「何？」

「アイリ、君は今、どこまで人としての機能を失っている？」

その言葉にはつの悪そうな顔をしてみせる白皙の麗人。

私の参加したときの聖杯戦争、聖杯であるイリヤは終盤にむかつていくにつれ彼女も人としての機能を失っていった。それでもその身に取り込んだ英霊の数が少ないうちは元気にはしゃいでいたわけだが、人間とホムンクルスのハーフであり、生まれつき調整を受けていたイリヤと比べて、完全なホムンクルスであり、彼女のプロトタイプであるう母親のアイリスフィールがどこまで平気なのか、それは私には判断がつかない。

「……そつか。やっぱりアーチャーは知ってるのね」

決まり悪そうに苦笑しながら、アイリは私の手をとった。美しく細く滑らかな指がゆるく私の腕を掴みこんだまま、か弱い痙攣だけを繰り返す。

「今の私は全力で掴んで、これが精一杯なの」

「……なんてことだ。イリヤよりも人としての機能を失うスピードが早いだろうと予測は立ててたが、想像以上に早い。」

「指先に引っ掛けたりするのが精一杯で、握ったり摘んだりするの

はとても無理。壊れ物や機械の類の操作は出来ないわ。朝、着替え  
るのにもかなり苦労しちゃった」

「そうか」

なのに君は、なんでもないかのような顔で私の隣に立っていたの  
か。

「・・・そうか」

私は彼女の指示を受けて魔法陣を描きながら、これからの聖杯戦  
争の行方に思いを馳せていた。

戦局が大いに動き出したのは、この約七時間後だった。

side・ランサー

その気配が現れたのは未遠川付近だった。数十人がかりの多重詠  
唱儀式と変わらぬその気配に、おそらくは全ての魔術師とサーヴァ  
ントは気付いただろう。その外道は、川幅の真ん中に悠然と佇んで  
いた。

おぞましき海魔を足場に、水面の上に立っているその男は、魔術  
師<sup>タ</sup>のサーヴァント。聖杯戦争に何の関係もない子供達を襲い、非道  
を繰り返す、俺たちの拠点を襲撃し、主を瀕死に追い込んだ何者か  
の次に許せない醜悪な召喚師<sup>サモナー</sup>。

「ランサー、そなたもきておったか!」

そう言いながら、駆け寄ってきたのは赤いドレスに歪な大剣を携  
えた少女、剣使い<sup>セイバー</sup>の英霊の少女だ。いつも傲慢そうな微笑を浮かべ  
ているその顔には、真剣な色を浮かべており、この女もキャスター  
の尋常ならざる様子は理解しているらしい。

そういえば、この女ともおかしな縁だ。最初に斬り結んだ相手だ

というのに、対キャスター戦で協力し、共に戦っている回数が多い。だからといって、いざ死合いをすれば容赦など互いにしないだろうが。

キャスターは、そのぎよろりと大きな目でセイバーの姿を捉えたからだろう、にたりと表情だけは綺麗に破顔し、どこかうつとりとしたような、酔っているような声で言葉を紡ぎ出す。

「ようこそ聖処女よ。ふたたびお目にかかれたのは恐悦の至り」

「余は貴様などには二度と会いたくはなかったがな！」

セイバーは心底嫌そうな顔でそう吐き捨てる。それをキャスターは気にも止めずに自分の言いたいことだけを言い続ける。先日の戦闘の焼きなおしのようなようだ。違うことといえばキャスターの危険度が今夜は大幅に上がっているということか。

「申し訳ないがジャンヌ、今宵の宴の主賓は貴女ではない」

「ええい！だから余はジャンヌなどというどこぞの小娘などではないと言っておろうが！！貴様、見るに耐えぬ醜悪な姿だけでは飽き足らず、余の言葉すら聞かぬとは万死に値するぞ！」

・・・あの異常な魔力を迸らせている相手に対して、いつも通りの調子でいるとは、いい加減このセイバーも大したタマだな。

「ですが、貴女もまた列席していただけるといふのなら、私としては至上の喜びですとも。不肖ジル・ド・レエめが催す死と退廃の饗宴を、どうか心ゆくまで満喫されますよう」

「ふふふ、殺す。今すぐ殺す。このような蒙昧なる汚物、我慢ならぬ」

そんなセイバーの声がする傍から、キャスターは無数の海魔に飲み込まれていく。それに思わず目を見開く。笑いながら、狂人の言葉を吐きながら、キャスターは自身が呼び出した海魔どもに吸収されていき、もはやひとつの肉塊となりながら、巨大に不気味な成長を遂げていく。

「・・・なんてやつだ」

聖杯戦争の秘匿性など度外視した暴挙。住人のパニックの声がこ

ここまで聞こえてきそうだな。

そのとき、聞き覚えのある雷鳴が耳に響いた。

「よおランサー、それにセイバー。良い夜だ・・・と言いたいところだが、どうやら気取った挨拶を交わしておる場合じゃなさそうだな」

「そうだな。あのような怪物はさっさと退治するに限る」

「ぬ？ライダーよ、そなただけか？アーチャーはおらんのか？」

「余もあのデカブツは放つてはおけんからな。呼びかけてまわろうかと思つたのだが、アーチャーがどこにいるのかはわからなかった。だが何、あのお人よしがこの状況を見過ごすとも思えん。そのうち来るんじゃないか？」

なんとも楽天的な考え方だった。それより、あの夜以来表に出てきていないはずのアーチャーのことをよくしつたような口だったが、会つたのか？いや、今の問題はあの怪物だ。忠誠を誓つた主君・ケイネス・エルメロイの容態はこれ以上となく悪い。悪化する前にさっさと倒して、ソラウ様をつれて拠点に戻りたい。

「あんたたちは、キャスターと戦つたことはあるのか？」

と、そうたずねてきたのはライダーのマスターの少年だった。軽く頷いて返事とかえす。

「ともかく速攻で倒すしかないだろうな。今はあのキャスターの奴が手にもつている宝具だろう。魔術書で現界を保っているのだろうが、あれが独自に自給自足を始めたら、手に負えなくなるだろう」

「成程な。奴が岸に上がつて食事をおつ始める前にケリをつけなきゃならんわけだ。しかし・・・」

そこでライダーが嫌そうな顔をして言葉を止める、ここにいるものならその意味は皆わかつて然りだ。

「当のあの汚物めは穢らわしい肉塊の奥底ときておる。正直余も本当は気が進まぬが、主な方法としては一つだけであるうな」

「引きずり出す。それしかあるまい」

その征服王の言葉を合図に戦闘は開始された。



戦闘方針としては、無限再生を繰り返す巨大な海魔を相手にして、先陣をライダーとセイバーが務め、俺が後方待機、キャスターを引きずり出してから俺の破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルクで奴の宝具の術式を破壊するというものだったが、浅瀬までやつが近づいたこと此処に至っては、そうもいつてられない。俺も参戦を考え始めたそのとき、光の束のようにそれは遙か彼方からやってきた。

化け物の手足急所など重要な箇所全てに、普通の人間なら目視すら適わぬ速度で飛んで来た36連撃。即座に再生されるとはいえ、それは確かに海魔の動きを数瞬止めた。

「何？」

矢が飛んで来たであろう方向を一瞥する。そこに矢を射掛けた存在の姿は見えない。これほどの正確射撃を、サーヴァントの視力でもつても捕らえきれない彼方から果たすとは、間違いがない。射手の正体は疑うまでもなく、アーチャーだろう。しかし、ここまで正確な射撃を果たすとは、厄介な敵となるな、あの女。まあ、いい。今は一時的とはいえ味方だ。あの外道を相手にするには正直頼もしい。

アーチャーの矢は前に出て戦う二人を綺麗に避けて、海魔の動きを止めるように貫き続ける。アーチャーの援護はありがたいが、しかし、このままでは埒が明かないことにも気付かずにはいられなかった。

俺と同じことを考えたのだろう、ライダーとセイバーは揃って戻ってくる、時間がないとばかりに征服王が早急に言葉を切り出す。その間の海魔の侵攻はどこにいるのかも知らぬアーチャー1人で食い止めている。

「いいか皆の衆、この先どういう策を講じるにしろ、まずは時間稼ぎが必要だ」

「そなた、あれを使う気か？」

そのセイバーの言葉に、是とばかりに赤毛の大男は緊張感を孕ん

だ顔でにっとう笑みを浮かべた。

「ひとまず余が『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』に奴を引きずりこむ。とはいえ余の精鋭たちが総出でも、アレを殺し尽くすのは無理であるう。せいぜい固有結界の中で足止めするのが関の山だ」

「その後は、どうする？」

「わからん」

あっけらかんといいながら、その顔はあくまで真剣だ。事実どう対応していいのかわかっていないのだろう。

「あんなデカブツを取り込むとなれば、余の軍勢の結界が持つのはせいぜい数分が限度。その間にどうにかして・・・英霊たちよ、勝機を掴みうる策を見出してほしい。坊主、貴様もこっちに残れ」

言うなり、己が主の少年をライダーはつまみ出した。

「お、おい!？」

「いざ結界を展開したら、余には外の状況が解らなくなる。坊主、何かあったら強く念じて余を呼べ。伝令を差し遣わす」

そして一言二言言葉を交わしてライダーが立ち去り、さてこれからの方針をどうするか話し合おうとした矢先、一匹の蝙蝠がこちらへとやってきた。

『聞こえるか?』

その蝙蝠から響いた声、それは以前俺とセイバーの戦いにわって入った白髪アーチャーの女の、声変わり前の少年を連想させる凜としたソレだった。

side・エミヤ

巨大な海魔が出現した未遠川よりkm単位で離れた、建設途中の高層ビルの屋上部にあたる鉄骨の上、そこが弓兵アーチャーたる私の戦場だった。

た。

明らかに異常な魔力。なにをしようとしているのかは知らないが、これまでの経緯から考えてあのキャスターが魔術の秘匿や住民への配慮など考えているはずがなく、感じる魔力の量から考え見るに、間違いなく多くの人を犠牲にしようとしているだろうことは想像に難くなかった。正義の味方・・・という言葉には未だに抵抗が残っている私であるが、それでも正義の味方になりたかったのだと言ったあの男が、大勢の人間が犠牲になるようなことを黙認するはずがない。そう私は思った。

しかし切嗣しさいさんはやはり私に何も命じない。住民の犠牲を是としていくはずがないのに。だから私は「これは流石に放っておくわけにはいかないだろう。マスター、戦闘への許可を」と機械越しに詰め寄り、マスターきしゅうへくが出した条件を了承し、遵守する代わりに、今回の戦いに参入することにこじつけることが出来た。

この一刻の猶予すらない状況でも私を動かそうとしないとは、本当に何を考えているのか。あの人が、異常者のサーヴァントを相手に自分ひとりではどうにかできる・・・などと論外なことは、流石に思っていないと信じたいのだが。

通信機ごしの切嗣への説得にかかったロスタイムもあり、他の者より出遅れたが、まだあの海魔が浅瀬の内側に留まっていたことに内心ほっとする。

そして、私は矢を放った。

放たれた矢でおった傷はすぐさま塞がられるが、足止めくらいにはなる。目の前には海魔と戦うライダーとセイバーの姿と、後方で槍を構えて待機するランサー。思わずため息を吐きたくなる。後方支援の重要性は承知していても、気分としては自分も今すぐあそこへ乗り込んでいき、直接戦いたいぐらいだ。それは叶わないことだが。

切嗣が私が参戦するにあたって言い渡した条件は二つ。

一つは、あくまで遠距離攻撃にのみ徹して、敵とは1km以上距

離を離して戦うこと。二つ目は、その間私と視力の共有をするということ。

まあ、どちらも納得できる条件といえれば条件だ。凜と共に行動していたときは、白兵戦を行うことのほうが弓で戦うよりも多いくらいだったが、本来アーチャーのクラスの正しい運用法としては、敵の反撃も届かぬ超遠距離射撃にのみ徹するほうが賢明なのである。その意味では凜よりずっと真つ当な使い方だろうよ。それに、視力を共有するのも、戦局を私の千里眼を使つてくまなく見渡せるのだから、戦場を正確に把握するには一番確かな方法だ。ああ、全くもって正しい判断だとも。

それでも不満に思ってしまうのは、最終的に戦闘を許可されたとはいえ、あのような巨悪そのものの存在が、住民を食らおうとしているのに、私を使うという選択を最後まで渋っていたあの男の態度そのものだ。いくら私のことを信用出来ないからってこんなときまで何を考えているんだ。

そんなことを思いながら弓を射掛けていると、セイバーとライダーが一度ランサーの元まで戻り、何事かを言い合っている。ここからじゃ顔や姿はわかつてても声までは流石に聞こえない。だが、マスターである小柄な少年をおろし、ライダー一人だけである海魔に向かった時点で何をしようとしているのかはわかった。

私は久宇舞弥に先日借りた、使い魔たる蝙蝠を彼ら三人の元に飛ばす。蝙蝠が彼らの元についたと同時に、ライダーと海魔は姿をこの世界より消した。

「聞こえるか？」

使い魔を通して声をかけると、一部で驚いたような声と息を呑むような音が聞こえた。弓兵のサーヴァントである私が魔術を使えるというのはそんなにおかしいのか。とはいってもこの身はただ一点に特化した魔術回路。オーソドックスな魔術は習得しているとはいえ、こういうことが不得手なのもまた確かなんだが。

『アーチャーよ、そなた今どこにおるのだ？』

「君たち全ての姿を見れる場所にいるのは確かだがね、今はそんなことを悠長に話している時ではなかるう。ライダーの作戦は固有結界で足止めをし、その間になんらかの策を講じる・・・というものよのだが、固有結界ほどの大魔術ともなれば精々もつのは数分というところだな。率直に聞こう。君たちに策はあるのかね？」

『それを今から考えようとしていたところだ』

そう答えたのは魔貌の槍兵だ。

「なら、私のプランで進めさせてもらう」

『方法が、あるのか？』

少年の驚いたような声に、そんなときでもないのに苦笑染みたまのが浮かぶ。

「先ほどまでの戦いで、キャスターのいる大凡の位置は把握した。今から私は私のおきを使う。魔力を充填するのに少し時間をとらせてもらうことになるが、準備が出来次第合図を送る。そうしたら、消えたときと寸分たがわぬ位置で固有結界を解くようにライダーに伝えてくれ、ライダーのマスター」

『わかったけど、大丈夫なのか？』

まあ、あれだけ何度も敵の超再生をする様子を見てきたのだから、その心配は当然だろう。

「何、他に手をもてあまして英霊が二人もいるのだ。心配いらんだらう。セイバー、私が奴を狙撃した後、キャスターを薙ぎ払うのを任せてもかまわんかね？」

『うむ、任せよ』

えっへん、とそんな擬音が聞こえてきそうなくらい自信満々に赤いドレスの少女は言った。

「ランサーはセイバーがキャスター本体を攻撃している隙に、あの馬鹿でかい怪物を召喚した奴の宝具の破壊を頼みたい。出来るだろっ？」

『ああ、任せておけ。俺はあのキャスターを許せない。いずれお前とも敵になるのだから、今はあの外道を倒すための同士だ。奴を

倒す術があるというのなら、喜んでその策受け入れよう』

魔力を充填する。自己に埋没する。世界ではなく自分に問いかける言霊を紡ぐ。

「I am the bone of my sword (我が骨子は抜れ狂う)」

その言葉と共に抜れた剣を弓に番える。

『まだか、まだなのか!?!』

少年の焦る声が遠く響く。今はライダーのマスターの肩にのつている蝙蝠つかいま、それが飛び立ったときが私が伝えた合図だ。些細な声を無視し、私は魔力を高めていく。そして私は、キャスターを射抜く姿を見た。

「ガラドボルグ偽・螺旋剣！」

飛び立った蝙蝠、現れたライダーと醜悪なる怪物。放った矢は私が「見た」通りに真つ直ぐキャスターのいる肉塊の奥底へと向かう。いくら真名開放した偽ガラドボルグ・螺旋剣といえど、あの超再生能力をもつキャスターが相手では、これだけでは心もとない。だからこそもう一策を講じる。

「ブローケン・ファンタズム壊れた幻想」

瞬間、魔術師のサーヴァントを包み込んでいた周囲の肉塊が爆破した。赤い衣が舞うように走る。

『ロサ・イクトウス花散る天幕!!!』

金糸髪の少女のその言葉と同時に、キャスターの体は真つ二つに切り裂かれた。

どこにいるのかも知らぬ弓兵の女の言葉に従い、俺は赤い愛用の槍を構えて待機していた。

「まだか、まだなのか!？」

ライダーのマスターの少年が焦った声を上げる。固有結界の足止めも限界なのだろう。赤いドレスの少女は対照的に自信満々に不敵な笑みを携えて、赤い大剣を構えている。

「随分余裕だな」

「ふん、惚れた女子こねが見ておるのだ。当然よ」

てらいもなく返される。惚れた女、か。そういえば初めてアーチャーに会ったときに「気に入った」だの「余のものになれ」だの言っていたな。敵サーヴァント相手に何を考えているのか、俺には理解し難いが。そういえば、理解し難いといえばあの白髪の女弓兵もそうだ。

当初、俺がもつ生まれ持った呪い、愛の黒子に魅了され普通の小娘のようにつるたえ、赤面していた姿が嘘だったかのように、あの女は冷静に戦局を把握する。こうして使い魔ごしに声のみを聞いてみると、少年のような印象の声質もあいつて、その女らしからぬ喋り方や物言いいい、女というよりは男と話している気分になってくる。

おまけにこんな短時間で敵を仕留める方法を的確に指示し、弓の腕は百発百中ときている。正直あの女に内心舌を巻く思いだ。今は味方だからこそありがたいが、敵としてはこの最優と名高き剣使いの少女よりも、相手をするのは厄介だ。それだけの腕をもつのに、一番解せないことは、ずっと閉じこもったまま、あの夜と今日以外全く表に出てきていないということだが。

臆病風に吹かれた・・・とかそういう手合いでもあるまい。弓兵のクラスといえば、こそこそ隠れて陰から狙い打つしか能がないイ

メージもなくもないが、あの白髪赤い外套の女戦士は、あまりに堂々とし過ぎていて。そういえば、セイバーに剣を向けられた時には、あの女も弓ではなく、黒と白の双剣を手に使っていたな。いかにも握りなれたような立ち姿といい、近接戦の心得もあるのか。一体この英霊だ。

そんなことを考えていると、ライダーのマスターの少年の肩から蝙蝠が飛び立ち、そしてそれと入れ替わるように、固有結界に消えていたライダーと巨大海魔が現れた。

ゴウツッ！そんな物騒な音を立てて遙か彼方から飛翔する巨大な光の塊。おそらくはアーチャーが言っていたとおりおき・・・奴の宝具なのだろう。が、海魔の足元を抉るようにして斬り進み、その後轟音を立てながら爆発した。

思わず目を見開く。

なんて威力だ。あれならいくら超再生能力をもっていようと即座には回復出来まい。それと入れ替わるように赤い衣を靡かせながら少女が駆ける。

「花散る天幕！！」

セイバーの放つ高速剣戟、それはアーチャーの攻撃によって衰弱し、全身血まみれになっていたキャスターの体を両断するには十分な代物だった。

すかさず、奴の手を離れた人皮製の邪悪なる魔道書を破魔の紅薔薇ルグで貫く。本は悲鳴を上げるようにして力を失う。巨大な海魔も自身に魔力を提供していた依り代を失い、その体を粒子に換え霧散した。

ああ、終わったな。そう思い満身創痍な征服王のほうに顔を向けた時、まさしくその刹那だった。

「・・・あ？」

ぬるりと血が手に伝い落ちる。ぼたぼたと命の息吹が失われていく。

己の胸には黄色い見慣れた何かが突き刺さっている。なにか？考



えるまでもないではないか。これは必滅の黄薔薇だ。決して癒えぬ傷を与える呪いの魔槍。其れを握りこんで心の臓に突き刺しているのは誰の手か？ そうだ、考えるまでもない。この握りなれた手の感触、毎日見ていたこれは俺の手。

「ランサー!？」

誰かの声が聞こえる。見れば呆然と自分を凝視している8対の瞳。だけど、そんなことはどうでもいい。俺はどうして自分の心臓を貫いているのか、何故なんだ。何故、何故、何故。

答えは一つしかない。

この聖杯戦争におけるひとつの要、三度限りの絶対命令権、令呪はサーヴァントが望んでいない命令だろうと実行してしまうのだから……。

side・エミヤ

異変が起きたのは海魔が消滅したすぐ後だった。ああ、終わった。そう思いやれやれと肩を竦めたそのときに起きた衝撃の瞬間。

魔道書を貫いた魔貌なる槍兵は、突然何の前触れもなく、自分の胸をその呪われた黄槍で貫いていた。

「何？」

驚き、急いで川辺へと向かう。

見れば全員が予想外の事態に呆然としながら、美貌の槍兵を見つめている。

「……ぜ……だ……」

がは、と血を吐き出しながら、幽鬼のように男が目を見開いて、わなわなと痙攣している。

「……何……故……俺は……俺は……!!」

壮絶な形相で必死に言葉を紡ぎながらも、黄槍を握った左手はよりの奥へと愛用の得物を飲み込ませていく。此度の聖杯戦争でラッサーのクラスとして呼び出された英霊、ディルムッド、それ以外の誰もが声を出せない。声をかけられない。

「主、よ……何故こん、な……何故……なぜ、何故だあああああ……！」

狂おしいほどの絶望の声。それを最期に、深緑を纏った美貌の槍兵は完全に姿を消滅させた。

NEXT?

第四次聖杯戦争編 07・脱落の夜 後編（後書き）

というわけで、三人脱落なりました。ぱふぱふ。

次回、ついに始まったアーチャーと切嗣の親子対決！？久々に登場だよ雁夜さん、マーボー神父も大活躍？鬱展開まっしぐら第四次聖杯戦争編第8話「慟哭」お楽しみに？

第四次聖杯戦争編 08・慟哭 前編（前書き）

やあ、作者のEKAWARIです、ばんははろ。

ええと、今回の話「慟哭」ですが、なんか予定の3分の1しか進んでねえのに1万文字オーバーしちゃいましたので、急遽三部構成でお送りいたします。

おかげで雁夜さんの出番が・・・あうあう。

ちなみに今回の話では、漸く3話の伏線回収することが出来ました。まあ、そんな感じで、ではどうぞ。

PS・酷くどうでもいい話ですが、女エミヤさんの個人的イメージボイスは某AHS社の猫村の姐さん（何故か設定はキティラー）の音声だったりしますぜ。あの魅惑の低音ボイスでは是非「たわけ」って言っほし・・・げふんげふん。

お願い、泣かないで。

そんな顔をしないで。

傷ついて、必死に私の名前を呼ぶ貴女。

今はもうおぼろげにしか見えないけれど。

やっぱり貴女はあの人と似ている。

不安で傷ついて揺れる時のあの人と同じ顔をしている。

冷酷なフリをしていても、本当はどうしようもなく弱くて、とて

も優しいのよ。

私の数日間の愛しい娘。

あら、そういえば私どうなったのかしら。

必死に伸ばされる褐色の手、赤い血が滲んでいる。

駄目よ、怪我をしたのならちゃんと手当てしなくちゃ。

叫んでる喉、ああ、女の子がそんな大声出しちゃ駄目。

「……かあさんっ……」

いつか、私が彼女に望んだ呼び名、その言葉で呼ばれた気がした。

ひゅうひゅうと、喉を鳴らしながら僕を見上げるベットの上の男を見下ろす。

「・・・これ・・・で、ソ・・・ラウは・・・」

「ああ、大丈夫だ、問題ない」

懐からたばこを取り出し、かちりと火をつける。

「そう・・・か」

セルフギアス・スクロール

自己強制証文を握り締め、瀕死の男・・・かつて時計台で栄誉を一身に受けていた魔術師、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは気絶するように眠った。

この男と最初に直接交戦したのは約2日前のことか。

セイバー、ランサー、アサシンの三名の英霊がキャスターを相手に交戦中のその日は、マスター殺しには打って付けの夜だった。

傲慢に油断していたエリート魔術師を狩るなど、魔術師殺しの異名をもつ僕にはさほど難しいことでもない。それはロード・エルメロイと言われていたケイネスも例外ではなく、僕の持つ、自分の起源に基づいて敵の魔術回路をショートさせる起源弾をその身に打ち込んだ結果、男は瀕死の重傷を負って倒れこんだ。

本来ならそこで命も刈り取るのが常だったが、主君の命の危機にサーヴァントが反応しないはずがない。サーヴァントを連れていないし頼るつもりもない生身の僕が、サーヴァント相手に太刀打ちできるはずがないことは痛いほどわかっていたので、その場では特別性の発信機を男に仕込んだだけで去ることにしたのだ。いずれ来るチャンスで仕留めるために。

そして今日がそのチャンスだった。

キャスターの悪行を止める為に殆どのサーヴァントが出払うことは想像に難くない。誤算といえば僕のサーヴァントとして呼び出さ

れた彼女・・・アーチャーも戦闘に参加すると言い出したことだったけど、考えてみれば彼女がそう言い出すのは当たり前だったのだ。彼女がどれほどいつそ歪に真っ直ぐで、他人の犠牲を厭う人間なのかなど、夢を通して痛いくらいに知っている。自分の命すら進んで捧げる様子はまるで殉教だ。これがもう一人の僕が育てた己が子供の姿だと思つと、胸が痛くなる。

その真っ直ぐな声に、自分の醜さを思い知らされるようで苦しくなる。子供の頃、僕は正義の味方になりたいと思つていた。それは本当だ。だけど、僕は彼女ほど純粹になどなれないし、あそこまでひたむきでもない。僕のこの感情はもつと後ろ向きで、今までの犠牲にしてきた人々の為にも止まつてはいけないという、そんな思いでしかないのだから。いつそ、彼女がもう少し汚い人間であるならばよかった。

他の誰でもない彼女にだけは戦つてほしくはなかった。あんなふうにスタスタにされて殺された彼女がこれ以上苦しむのは何かが間違っている。そう思う一方でもう一人の自分が冷静に彼女を使うことを検討する。

そうしてつけた条件が視力の共有と、1 km以上離れた位置からの射撃許可だった。

アーチャーの射撃範囲は4 kmにも渡るといふ。1 km以上離れた位置からならば、敵の反撃を食らうこともないだろうという計算。そして同時に彼女の千里眼のスキルで戦場を把握することは、僕にとつて随分と大きなメリツトを生み出すこととなる。

舞弥にまずは、キャスターのマスターである存在を見つけ出し、射殺するように命じ、自分は発信機を元にロード・エルメロイの元に向かう。間も無く、無事目標を狙撃したことを無線で受け、続いてエルメロイの婚約者であるソラウ・ヌアザレの確保に向かつてもらった。奇しくも、アーチャーが陣取っているビルの下階にいたのが予想外といえれば予想外だったが、居場所がわかっていて分探し回る手間が省けて好都合だった。（実は先にソラウが屋上を拠点

としていたのだが、アーチャーが近づいた気配で慌てて階下に潜んだのだという事は知らない。また、余談ではあるが、川にいたランサーからアーチャーの姿が見れなかったのは、見たのは一瞬だったのと、たまたま互いのいた位置が悪かったが故の偶然である。そして、舞弥がソラウを捕らえたと同時に僕は、ケイネスの元へとたどり着いた。

あとは、舞弥が男の婚約者をいつでも殺せる状態にいるという証拠映像を瀕死のこの男に見せ、婚約者を無事帰し、殺さない代わりに、令呪全画を使ってランサーをこちらの指示したタイミングで自害させると、そう要求した。指一本も動かす力さえ残っていない男が陥落するのは簡単だった。

タイミングを指示したのは、僕とて今ランサーを倒すのは得策ではないとわかっていたからだ。あの二槍の槍兵がもつ破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルグが、キャスターのもつ宝具に有効なのは僕とて理解している。マスター狩りこそ優先したが、僕だつてあのキャスターの危険性は重々承知しているんだ。あれを放っておくということは多くの犠牲を生み出すということだ。だから、アーチャーの目を通して、ランサーがその役を果たしたのを確認してから、目の前の男に令呪を発動させるよう指示した。

あの美貌と悲恋の伝説に彩られた男がしっかと消えた様子も、アーチャーの目を通して確かに視た。

もう、ここにいる理由もない。僕は男を置き去りにしてこの廃墟を去る。同時に舞弥に連絡をいれて、ソラウ嬢をこの男の元に約束通りかえすように指示する。ただし、ただで返すほど僕もお人よしではない。その記憶は奪わせてもらうが。

舞弥と合流して、彼女の運転する車に乗り込む。

「どうしたのですか」

「何がだい？」

長い付き合いだ。無表情ながら、彼女が何が言いたいのかはわかっつて僕はとぼける。



「殺さず記憶だけを奪う、など。貴方とも思えない」

「何・・・思うところがあっただけさ」

おそらく、今回召喚したのがあのアーチャーでなかったのなら、いや、他人だったのなら、決して僕は今回のこんな選択を選ばなかった。容赦なくソラウもエルメロイの命も奪っていただろう。

それを躊躇した理由、それは並行世界の自分が育った世界では、聖杯は呪いに汚染されていたという紅い弓兵が以前口にした言葉だ。そして僕は、彼女の夢を通して、本当に汚染されていた場合聖杯がどんな悲劇をおこすのかも見ている。

聖杯が全てを救うと、この世から争いを無くせると信じたからこそ、僕は躊躇なく誰をも切り捨てられると思っただけで今日の9年を過ごしてきた。やがて全てを救えるのだから、どんなことでも僅かな犠牲なのだと自分に言い聞かせることが出来た。今でも聖杯に絶える気持ちはある。それでも、本当にアーチャーの言葉通り聖杯が汚染されていたのなら、僕はただ犠牲を増やすことになる。

無色の願望器であると信じていた気持ちと、汚染されていたのなら、呪いが噴出す前に僕の手で止めなければならぬという気持ちの狭間で揺れる自分を自覚する。

時間が経てば経つほど、彼女の夢の記憶も合いまり、聖杯は汚染されているのではないかと、そう無色の願望器を信じる気持ちよりも、疑う気持ちのほうが徐々に比重が大きくなり始めている。

嗚呼、でもどんな結果になるにせよ、僕のこの手で一体どこまでが守れるのだろうか。いや、僕はこの手で「何か」を守ることが出来るのか？わからない。ただ、そのとき脳裏を過ぎったのは初めて羊水槽の中にいた銀髪の女性の姿を見た時の記憶だった。

「・・・舞弥」

「はい」

「明日の朝になったら、アイリたちの元へ向かってくれ」

舞弥は僅かに躊躇、らしきものを見せて、小さな声でそっと「それでいいのですか」と尋ねた。

「ああ、構わない」

今は無性にアイリの顔が見たかった。たとえ、それが最後の妻との語らいになるとしても、だからこそ愛しい女性の体温を身近に感じたかった。

怪物が倒れた後の静かな夜に、車の排気音だけが音を立てて街を彩っている。

side・言峰綺礼

ぼたりぼたりと、血が私の腕を紅く染め上げている。

(私は何をしている?)

眼下にいろのは、自分が生まれてから今まで、自分という存在を誤解し続けてきた父親の姿。そう、自分の右手に心臓を貫かれて絶命している聖杯戦争の監督役、言峰璃正の姿があった。

「どうした、綺礼。もっと悦んでみせよ」

その声ならざぬ声が耳元で囁く。うっとりとして、唇が笑みの形を作る。こんな、満ち足りた気持ちは初めてだった。

(これが、悦び?)

このようなものが悦びであっていいはずがない。聖職者である自分が、他人を傷つけることを愉悦に感じるなどあってたまるだろうか。でも、この超越者の声のまま父を手にかけた自分は認めるしかなかった。

これは甘美な毒<sup>つみ</sup>の味だ。けれど、なんと抗いがたい味がするのだろうか。その、信じられないと目を見開いた姿。最期まで息子を信じていたであろうその死相は。

「もう、いいだろう? さあ、綺礼。神父の腕から令呪を剥ぎ取れ」  
「ああ・・・」

その死の直前に父から読み取り出した、聖言を諳んじる。

「神は御霊なり。故に神を崇める者は、魂と真理をもつて拜むべし」  
その言葉を合図に、父の腕で光る令呪の数々がするすると自分の腕に移植されていく。

ぼたりと、涙が伝った。それはどういう種類の涙だったか。父を殺した悔恨・・・ではないことは確かだ。かつての恐怖に答えを見出した喜び？それとも、父を自分の手で殺したことによる嬉し涙か。父殺しを果たしながら、未だ綺礼の心は揺れ続けていた。

side・遠坂時臣

その連絡を受けた時、まさかと思った。

「言峰神父が・・・死んだって？はは、何の冗談かな。君でも冗談を言うことがあるんだね」

遠坂の魔術で弟子と連絡をとりながら、出来るだけ冷静になろうと心がけた。だが、動揺は掻き消えない。

「いえ、事実です。昨夜のキャスター討伐のドサクサに紛れた何者かに襲われ、父は死にました」

ぐわんと、頭をハンマーで叩かれたような衝撃が走った。死んだ？あの言峰璃正が？あの老練にして屈強な神父が？

「・・・本当に？」

「ええ。知つての通り、私は教会の保護を受けられない立場にいましたので、容易に近づくことも出来ず、発見が遅れました」

「そう、か」

言峰神父の死は私にとつてもショックだが、弟子の綺礼にとつては尚更だろう。何せ実の父親なのだ。きつと、発見が遅れたことで一番辛い思いをしているのは綺礼に違いない。

「わざわざ連絡すまなかつたね。色々と君もこれからが大変だろうが頑張りたまえ」

『いえ。では』

切れた通信を見つめる。

「セイバー」

静かな声で呼びかけると、すつとどこからともなく赤いドレスの少女が姿を現す。

「何用だ、奏者よ」

「これから、出かける。護衛を頼む」

「ほう」

にやりと、美しい少女の顔が傲慢な笑みを貼り付ける。

「ずっと閉じこもってばかりだと思っておったが、閉じこもるのはやめたのか？どこにいくというのだ。奏者よ」

「隣町だ」

side・エミヤ

眠っている白皙の美女の顔をそつと見つめる。

土蔵に設置した魔方陣の上で彼女はまるで眠り姫のように、昏々と長い眠りにについている。

昨夜のキャスターとの戦闘から帰ってきた時から、既に彼女、今回の聖杯たるアイリスフィールは眠りについていて、その顔を見ながら様々な想いが胸に押し寄せる。

悪戯っぽい顔に、少女染みた可憐さ。そして母親としての一面と、アイリは実に色鮮やかにそのときによって顔をころころと変える。だが、もう彼女に私が紅茶を入れることもないだろう。これは、彼女が今回の聖杯であるということから、わかりきっていた結末だ。

『ふふ、私のこと、お母さんって呼んでくれてもいいのよ?』

何故か会ったばかりの頃に言われたその言葉を思い出す。

私と切嗣じいさんは似ていると、だから親子だっていうのも信じるのだと、あの人にとっての子供なら自分にとっても子供なんだと、そう言ったアイリ。

私に母との記憶なんてものはない。あの災害以前の記憶がない私には、おそらくはいただろう生みの母親の顔も姿も全く覚えていないし、私を引き取った切嗣はその頃には独り者で、養母ははと呼べるような人はいなかった。

母親とは、アイリのような女性のことをいうのだろう。彼女は私に母と思って欲しいという。そう、だな。たった数日間だったかもしれないけれど、それでも接した彼女は誰より母親だった。

だけど、私は英霊だ。既に死んでいる存在。それが、この時代を生きている彼女に母親と思うなんておかしいだろう?許されることじゃない。私はこの聖杯戦争のためだけに呼び出された道具なのだから。

キイト、車のブレーキ音が聞こえてはっと顔を上げる。この気配は、切嗣マスターだ。

実体化し、すぐさま玄関に赴き、主人を出迎える。

くたびれた黒いコートに、ぼさぼさの黒髪、無精髭。僅かに香る煙草と硝煙の匂い。主人マスターと従者サーヴァントという関係だというのに、こうして顔をマトモに突き合わせるのとは一体どれくらいぶりか。どれだけ長いこと自分が避けられてきたのか、痛感する。

「アイリなら、土蔵で眠っている」

「・・・そうか」

(・・・?)

どこかほっとしたような顔をしている。珍しい。今の私の前でそんな顔をするなんて。

「夫婦で語らいたいこともあるだろう。私は消えていよう」

そう言っすつと霊体に戻り、屋根の上へと飛ぶと、切嗣は僅か

手を彷徨わせて私が消えたほうを見、きゅつと口を引き結んで、土蔵へと向かった。

本当にどうしたというのだろうか。なんだか様子がおかしい。変だ。噂に聞いた魔術師殺しとはもつと機械のような男なのではなかったのか？まさか、体調不良ではあるまいな？それはいけない。どうせあの人のことだ、食事も睡眠も碌にとってなかったのだろうか。その無理が生じたというところか？ならば、霊体化して周囲の見張りをするよりも、粥とかちよつとした食事を用意したほうがいいのだろうか。

すつと、霊体のまま下に降り、台所に立つと、身体を形作り、投影した赤いエプロンを身に着ける。材料はそれほどあるわけではないが、全く無いわけではない。その少しで十分だ。水を沸かしながら、トントんと、野菜を切る。

本当は色々マスターに尋ねるべきなのだろう。例えば、昨夜のランサーの急変。あれをやったのはマスターなのか？とか。でも、わざわざ聞くまでもなく、私は原因があつた男であると確信していた。そして、それを咎めるつもりもない。おそらく、爺さんが本来呼び出すはずのアルトリア<sup>セイバー</sup>ならば、激昂しながらも詰め寄るのだろう。彼女はそういう人だ。でも、アイリが言った言葉じゃないが、基本的に私と切嗣は同類なのだ。一体何を責められようか。

だが、まあ、この時代にきてから私は色んな人に色んな誤解をされてきているような気もする。別にそれで損をするわけでもないから放っておいているが、どうも私は騙まし討ちや相手を策略に嵌めるタイプだとは思われていないらしい。ライダーなんかは完璧に私をお人よし呼ばわりだ。私はそんな上等な人間ではないのだがな。

そう、昨夜のランサーが突如自害した件についても、ライダーもセイバーもあんな倒れ方をしたランサーのことを不憫に思ったらしく、ランサーに自害を命じたであろうランサーの主君に対して大なり小なり怒りを覚えていたし、ライダーのマスターたる少年も呆然としていたものだが、私にとっては決してランサーが倒れた件は怒

りを覚えるようなものではなかった。

誇りのある戦いよりも、目的を達成するためには何を犠牲にするし、誇りなんて自ら投げ捨てる。それが私の戦いにおけるスタンダードだった。三騎士のクラスで召喚されようとも、私は騎士などではないのだ。敵サーヴァントが一人脱落した。私にとって価値ある事実はそれだけだ。

私は、私の目的さえ遂げればそれでいい。銀髪紅眼の少女の、幼く純粋な顔を思い出す。

イリヤスフィール。私の妹であり姉の少女。彼女との誓いはここにある。約束を違えるつもりはない。もう二度と私は主を裏切らない。それが私の戒めだった。

#### side・衛宮切嗣

玄関で出迎える白髪の女の姿を見たとき、僕はどう反応すればいいのかわからなくて、僅か戸惑った。

「アイリなら、土蔵で眠っている」

「・・・そうか」

なんだ、僕の戸惑いに気付いたわけじゃないのか。ちょっとほっとする。こうして顔を正面から突き合わせるの、日本にきてからは初めてだったと思うが、彼女の記憶を見てきた事に気付かれていないならそれでいい。やはり、自分の記憶が勝手に見られていた事を知るのはいい気分ではないだろう。

そう思っていると、アーチャーは仏頂面ながらも、僅かに眉根を寄せ、不思議そうな顔をした。

「夫婦で語らいたいこともあるだろう。私は消えていよう」

そういつて霊体化して消えていく様を見て、思わず呼び止めそう

になる。馬鹿馬鹿しい。こんなところでボ口を出してどうする。僕は葛藤を押し殺して、当初の予定通りアイリの元へと向かった。

暗い土蔵の片隅で、魔方陣の中に横たわる眠り姫。その姿に羊水槽の中で眠っていた彼女との出会いを思い出す。思えば、あの最初の出会いの時、アイリの緋色の瞳に魅入られ、僕は彼女を深く愛するようになっていったのだ。

覗きこむ僕の前で、彼女はゆっくりと目を開いて、柔らかく微笑んだ。

「あ……キリツグ、だ……」

冷え切った弱々しい指が、僕の頬を緩く包む。

「……夢じゃないのね。本当に……また、逢いに来てくれたのね……」

「ああ。そうだよ」

出来るだけ優しい声音を意識して妻の声に応える。

アイリスフィールは、紅い瞳に透明な雫をためて、ぼろぼろと溢していく。それはまるで真珠のように彼女の白い肌を彩る。

「私ね……ずっと……満足だと思っていたの……」

しゃくりあげる元氣すらなく、それでも妻は健気に言葉を続ける。

「……人、じゃない私が……人みたいに恋をして……愛され

て……夫と、娘と、九年も……あなたは、全てを与えてくれた……

「私はなんて幸せ者……なんだろうって……ずっと、そう……

・思ってた」

でも、と言葉を切って、妻は目を細めて僕を見上げる。

「今は……怖い……本当に、アーチャーの……言うとおり、

聖杯が……汚染されていたら、そうしたら……私はどうなるの……

……？あなたは……どうなるの？……あの子やイリヤは……

私、私……」

「アイリ」

ぎゅっと彼女の白い手を両手で握り締める。僕の体温が伝わった



のか、アイリは涙はそのままに、どこかほつとしたような目で再び僕を見つめる。

「ねえ・・・キリツグ・・・約束して。生きて、イリヤの元に帰る・・・って。イリヤをいつか・・・この国に連れてきて、私が見れなかったものを全部・・・見せて・・・一つでも多くの幸せを・・・あの子にあげて・・・」

今朝仮眠中に見た夢を思い出す。アーチャーの記憶。僕の息子えみやしんじうに復讐するためにやってきた、雪の妖精。巨大な狂戦士を侍らしながら、美しくも残酷な微笑を浮かべた姿。僕の行動次第においては、この世界の未来でもおそらくはなるだろう、愛娘イリヤの姿。たとえこの戦いの結末がどうなるうと、絶対にそんな未来を繰り返すわけにはいかない。

「ああ、約束する」

我が子を守るのは親の役目だ。並行世界の僕が果たせなかったというなら、その分も僕が果たしたい。

「聖杯が、ね・・・本当に、汚染されていたら・・・あなたの手で私を終わらせて・・・私、あなたがいい・・・」

「わかつているよ」

他の誰でもなく僕の手で引導を渡す。愛しているからこそ、それは僕の役目だった。

「あと・・・ね」

これが最期だとわかっているからだろう、妻は言葉をやめることなく続ける。その姿に胸が軋む。

「アーチャー・・・のこと、まもってあげて・・・あの子を、残していくのが・・・一番心配・・・あの子は、だって・・・もっと幸せになるべきだもの・・・」

報われない人生、剣の丘に佇む赤い背中の剣の王。その光景をアイリは知らないはずだ。裏切られ、傷つきながらも正義の味方たろうとして生きてきたことも、自らを差し出して死んだことも。だけど、そう言葉を紡ぐ彼女は、僕みたいに夢を通して見てきたわけで

もないのに、全てをまるで知っているかのようだった。

「ねえ・・・お願いよ、キリツグ・・・アーチャーを、私たちのもう一人の娘を・・・守ってあげて」

「・・・ああ」

「そうだ、彼女はもう一人の僕の娘だ。」

「わかってる」

血の繋がりなんて関係ない。僕はあの子の父親なんだ。娘を守るのに他に理由がいるだろうか。

「わかつているよ」

全てに裏切られ、無数の剣に刺し貫かれ息絶える。もう二度とあんな終わりを迎えさせたくない。

「僕にとつても彼女は・・・アーチャーは大切な、娘だ」

初めて言葉に出して、そう、かの紅き弓兵のことを認めた。

何を守れるのか、僕のこの手で守れるものなどあるのだろうか、そうずっと自問自答してきたことの答えがもたらされたような気がした。

（守れるか、ではなく、守る。そうか、それでよかったんだ）

僕は今、笑えているだろうか？

アイリがそつと目を細める。起きて、こうして人のように話す、その限界が近いのかもしれない。

「これを・・・返さないと、ね・・・」

アイリスフィールは、震える手で自らの胸に精一杯の魔力を紡ぐ。すると、彼女の手のの中から黄金の鞘が具現化され、その白い貴婦人の手に収まった。

「アイリ・・・!？」

本当はアーサー王を呼ぶ為の媒介だったそれは、所有者を不老不死にするとされ、あらゆる病や傷から身を守るとされるアーサー王の失われし宝具。聖剣エクスカリバーの鞘。

アーサー王の魔力さえあれば、どんな傷もたちどころに治すというそれは、持ち主が召喚されなかったことによって、本来の能力が

引き出されることはないが、それでも一級品の武装概念ではある。人としての機能を失っていくアイリの進行を僅かでも止める力からいならあるはずだった。

「なんで……」

「……あなたは、アーチャーから……きいてなかったかしら……？」

聞いてなかったか、とは一体何の話だ。

「アーチャーが召喚されたのは……聖剣の鞘と縁があつたからよ……彼女の歴史で、聖杯が引き起こした大災害で……彼女の命を救ったのは、キリツグ、あなたが……埋め込んだ……聖剣の鞘だった……そう言つてたわ……」

はつとした。以前見た、聖杯の泥が引き起こす大災害の情景を思い出す。そうだ、あんな中、普通の子供が五体満足でいられるものだろうか？

「……10年、彼女は鞘と……共にあつたらしいわ……だから、きつとこれは……アーチャーの助けになってくれる筈……今は意味がないかもしれないけど……でも、もっていつて」

そう言つて無理に笑う妻の姿を見て、その細い身体をそつと抱きしめた。

「ああ……必ず」

当初、僕はこの戦いで、9年前の魔術師殺しと呼ばれた頃に戻るつもりだった。

「必ず……君との約束は、守る」

だけど、おそらく、あのアーチャーを召喚したときからそんなこと土台無理だったのだろう。

「じゃあ、行つてくるよ」

「はい……お気をつけて、あなた」

そうして僕は土蔵から背を向けた。

外に出ると、そこにはタイミングを読んだかのように、白髪褐色

肌の弓兵が立っていた。その顔を見た途端、先ほどまでの誓いはどこにいったのか、どう対応していいのかわからなくて、僕の頭は軽く混乱した。

「マスター、もういいのか？」

そう言っただけで近づいてきたアーチャーを、反射的に避けるようにしてつかつかと歩く。

「ちょっと、待ちたまえ」

「？」

こんな風にアーチャーに呼び止められるなんて初めてじゃないのか。思わず足をとめる。

「顔色が悪い。体調管理もマスターの仕事だぞ。食事や睡眠はちゃんと採っているのか？」

今更のことだけど・・・僕のことをマスターと呼ぶわりに、アーチャーはサーヴァントらしくはない。それはきつと親愛の情からきているのだろうが、アイリにはああ約束したし、僕自身彼女を守ると誓いはしたものの、彼女との距離の取り方がわからなくて、僕はアーチャー惑う。

「その、粥を作ってみた。少しくらいなら時間はあるだろう。だから・・・」

「結構だ」

自分でも少し予想外なくらい冷たい声になってしまって驚く。

「そう、か」

肩を落とした様子に罪悪感がじわじわと胸に押し寄せる。いや、今のは違うんだ、と笑いながらいえばいいものの、僕の頬の筋肉は依然張り付いたままだ。喉がからからと渴く。

「余計な気をまわして悪かった」

言うなり、アーチャーは霊体となって消えた。

守りたいと思っているのに、上手く接することも出来ず、心に澱みを抱えたまま、僕はその家を立ち去った。

私は遠坂の自室で、自分が認め<sup>した</sup>た書類の数々を点検しなおしていた。

聖杯戦争も折り返し時点にとっくに入っている。だが、一気に二人のサーヴァントが脱落した三日前が嘘のように、昨日、今日と変動はなく、私が思い出すのは昨日、実の娘と会ったときの、あの意思の強い眼差しだ。

言峰神父が死んだと知らされるまで、私は聖杯戦争など勝って当然のものと、そう自負していた。そう、それはたとえ英霊が望んだ相手とは違うものだったとしても、だ。それでも尚勝つのは私だと思っていた。だが、親交の深かった神父の死を受けて、私は自分の死の可能性を考えるようになった。

だから、もし私が死んだとしても何の不都合もおこらないようにと、準備をし、妻の実家に預けた娘の凜に会いに行った。

語るべきことを語り、別れを告げた。幼いながらも、家訓に恥じない誇り高き遠坂の娘としての矜持を胸に、自分が遠坂の後継者であるということ<sup>を</sup>正面から受け止め、当たり前だと語るその碧い瞳、遠坂凜、我が最愛の娘、彼女こそが私の一番の誇りなのだと、そう実感した。

ああ、あの子が私の子でよかった。あの子を授かったこと、それが一番の天恵だと断言すら出来るだろう。

ふっと、顔を綻ばせる。

「奏者よ」

もう暫く余韻に浸りたいという私の思いは、ここ数日ですっかり聞きなれた少女の声に邪魔された。

「なんだ、セイバー」

思わず不機嫌な気分になるが、家訓にふさわしくないので、無理

矢理に平素の声を作って返す。

「サーヴァントが近づいておる」

「何？」

言われて、遠坂の使い魔を近くに放つ。

雷鳴と共に走る車輪、赤毛の大男と小柄な魔術師、間違いなくライダーたちだ。

「ふん、目的は余との戦いであろう。客をもてなすは家主の役目であるが、さてどうするのだ、奏者よ<sup>マスター</sup>」

今までは好き勝手にこちらの指示も聞かず戦ってきたセイバーが、私の意志を尋ねるとは、と内心少し驚く。だが、先日のランサーの急変、あれを思えば無理がないのかもしれない。何者かが裏で暗躍している。あのタイミングを合わせたような無茶な自害はそうしか思えない。

「そうだな」

ふむ、と暫し思索する。

ライダーの宝具の、あの戦車といい、固有結界といい、どちらも破壊力がありすぎる。

他者を迎え撃つにあたり、魔術師の工房としての自宅に自信はあるが、あの戦車で乗り込まれたら、アインツベルンの森の結界の二の舞になりかねないな。だからといって、セイバーと離れすぎていると、第三のサーヴァントが現れた時にまずいことになる。初日の、バーサーカーによるセイバーへの襲撃は忘れたわけではないのだ。

「外で向かい撃ちたまえ。ただし、あまり此処から遠く離れすぎるとな。いざというときは、宝具の使用も許可しよう」

「なんだ、大判振る舞いではないか。よいよい。漸く奏者も少しは乗り気になってきたというだけで此度は満足しようぞ」

そんな言葉を不敵な顔で笑いながら言い、セイバーは外へと駆けていった。同時に使い魔をセイバーとライダーの下に複数飛ばす。

ライダーは今回はやる気らしい。セイバーと二言、三言言葉を交わすと、騎乗宝具『<sup>ゴルディアス・ホイール</sup>神威の車輪』に乗ったまま、セイバーへと突進

していった。セイバーはひらりと赤い衣をなびかせながら、剣を手に踊りかかる。そんな攻防を5分ほど見続けたときだっただろうか。遠坂家の呼び鈴を鳴らす音が聞こえて、私は精神同調の術を解いた。  
(誰だ?こんな時に)

見れば、相手は三年間私の門下だった男、今回の聖杯戦争の協力者である言峰綺礼だった。

思わずほっとして玄関に出る。

「どうしたんだい、綺礼。こんな時に」

「マスター導師と早急に話したいことがあります」

師弟の礼に則って深々と頭を下げながらそんな言葉を言い出した。直接話したいとは、それほど重要な件なのだろうか。

「そうか・・・君がいうからには相当重要な話なんだろうね。入りたまえ。調度私からも君に話がある」

その時、綺礼がどんな顔をしていたのか、思えばもっとじつくりと見ておくべきだったのかもしれない。

そう、私はこの時の選択がどれほど重要だったのかなど、その際きわまで理解などしていなかったのだから。

中編へ続く

## 第四次聖杯戦争編 08・慟哭 前編（後書き）

というわけで前編でした。中編と後編はまだ書けてないので暫くお待ちください。

えー、もう出番がないから言っていると思いますが、ここまで読んでお分かりかと思いますが、ケイネスの身体状態は原作よりも酷い状態にあるのでした。というのも、この話のランサーが重傷のケイネスの元に駆けつけた時には時間が経ち過ぎていて、ソラウの治療が間に合ってなかったせいです。別に本編でわざわざ書く必要がある設定とは思えませんが、気になってる人がいるかもしれないので一応補足ということ。

・・・つかさ、話変わるが、前編だけじゃまだ、前回予告したアーチャーVS切嗣の親子のぶつかり合いまでいってネエよ。つか、前編、切嗣ターン過ぎだよ。ってな、話です。まあ、第四次聖杯戦争編のテーマに含まれているからなあ。ケリイとえみやんのすれ違いとかは。

次回、もしかしたらバトルシーン書くことになるかもしれないが、俺バトルシーンあんま上手くねえので、あんま期待しないでまっついでくらすい。

中編に続くお。



第四次聖杯戦争編 08・慟哭 中編（前書き）

やあ、ばんははろ、EKAWARIです。そういえばまだこのシリーズ上げだして漸く一ヶ月目なんですなえ。早いんだか、遅いんだか。

というわけで、慟哭中編です。

慟哭三部作が終わったら、9話の執筆がZERO文庫版最終巻発売するまで取り掛かれないので、その間、本編で描くことはないけれど、読者の思ってるあんな疑問やこんな疑問に答える「ハサン先生のQ&A教室」でも書こうかと思っているので、質問募集中。ついでにPNのせていいか、それともイニシャルだけかも書いてくれると嬉しいでぶ。ではでは。

side・ウェイバー

三日前、二人のサーヴァントが脱落した。その時の戦いでライダーは宝具「アイオニオン・ヘタトロイ王の軍勢」を使った。

ボクは悔しいことにその宝具のことを今朝になるまで見誤っていた。川原の戦いで使った時も、その前日にアサシン相手に使った時も、ボクからもってかれた魔力はあまりに少なすぎて、誤解していたのだ。だが、大禁術である固有結界に類するものがそんなに燃費がいいわけではない。この対軍宝具は実際は莫大な魔力を必要とするもので、ライダーはあんなに生身の身体にこだわっていたのに、霊体化して魔力の回復に努めるしかないほど消耗してしまった。

しょうがないから、アイツを召喚した場所で魔力の回復に努めた結果、漸くあいつは夕方になって戦闘が出来るくらいには力を回復させることが出来た。でも、アイツ曰く「アイオニオン・ヘタトロイ王の軍勢」を展開するのはあと一回が限度らしい。ったく、まだ敵サーヴァントはあと3人も残っているつてのに、なんでコイツはそういう大事なことを言わないんだ。

「それで、誰と戦いに行くんだ？」

「そうさなあ・・・今夜は、セイバーの奴の相手でもしてやるか」  
漸く実体に戻れたライダー・・・こと、征服王イスカンダルは、顎をぼりぼりとかきながら散歩にでもいくかのような口調でそう言った。

「また酒の誘いとかじゃないだろうな？」

「当然だ。奴とは語るだけのことは語り尽くした。あとは矛を交えるまでよ」

飄々といつてるようできて、どこか獰猛さを秘めた声。至極当たり前だといわんばかりのその声は、マスターとしてなら心強い類のものなんだろうが……。

「アーチャーのやつは？」

「うん？なんだ、坊主？藪から棒に」

ライダーは意外なことを尋ねられたって顔でボクを見ている。それにむつとする。

「オマエだつて見ただろ。川原の戦いで。アイツの宝具の破壊力は危険だ。それにかなり遠くから放てるみたいだし、セイバーと戦っている途中にアレを使われたらどうするんだよ。語ること語りつくしたのはアイツも同じ条件だろ？だったら先にアーチャーを片付けたほうがいいんじゃないか？」

幸いにも、アーチャー自体のステータスはキャスターに次いで低い。遠距離戦は危険でも、近距離戦に徹したら勝つのは難しい相手とも思えなかった。

そういうと、ライダーはほけつと奇妙なものを見たような目でじろじろとボクを眺めた。……至極当たり前のことを言ってるはずなのに、なんでそんな呆れたような目でみてやがるんですか、このバカサーヴァントは。

「あのな、坊主……何も全ての英霊と戦う必要なんてなかるう？なにせ、まだ聖杯が本当にあるのかすらわからないんだからな」  
「ん？どういうことだよ」

確かに他にもサーヴァントはいるんだから、潰しあうのを待つ手もあるけどさ。でもそういうことを言いたいわけでもないみたいだけど。

「冬木の聖杯とやらが本当に噂どおりのシロモノだつてえ保障はどこにもない。違うか？」

そうしてライダーが語ったのは自分の生前の話だった。『オケア最果ての海』を<sup>ノス</sup>目指して世界を荒らし、自分を信じてついてきた者達を随分死なせたこと、現代に召喚されて、地球は丸いことを知り、自分

がかつて目指したものだ、この世にはなかったということを知ったこと。自分の理想はただの妄想でしかなかったというそんな話だ。

「余はなあ、もう、その手の与太話で誰かを死なせるのは嫌なんだ。丸い大地と同じぐらいに途方もない裏切りが、潜んでいないとも限らぬからな。そんな、あるともないとわからないものために、あんな無欲でお人よしの小娘を手にかけるとなると、どうも夢見が悪くなりそうだなあ」

「いやいや、敵サーヴァントを無欲でお人よしの小娘って・・・何考えてんだコイツはと、そこまで思っただけ出したのは、アインツベルンの城で給仕に励んでいたかの白髪の弓兵の姿だった。・・・紅茶美味かったな。」

まあ、願いは何かと尋ねられて、「マスターを守り抜き、家族の下へ無事返すこと」なんて自然体で微笑みながら言ってる時点で、確かに無欲なお人よしにしか見えない気もするけど、それでもあれは敵サーヴァントなんだぞ。もしかしたら、あれも演技だったのかもしれないじゃないか。そんなことをあの女を全く警戒していない自分の従者を前に、ぐるぐる考える。

「・・・んで、アーチャーとは戦う気ないのに、セイバーとは戦うのかよ、オマエ」

「当然よ。あやつは王の王、皇帝を名乗っておるのだぞ？余は数々の国を征服せし大王、征服王イスカンダル。王は二人といらぬ。ならば出会えば戦うのは必然のこと」

そう言い切る姿は、あまりにも威風に満ちていて・・・ムカツクことに、ボクはそんな言葉を吐くこいつに魅せられていたのだ。

「わかったよ」

だから、そう返事するしかなかった。

ライダーの宝具「ゴルディアス・ホイール神威の車輪」に乗って、トオサカの家があるだろ、深山町のほうに向かう。まもなく、こちらの魔力に気付いたの

だろう、紅いドレスを身に纏った、金髪の小柄な少女が現れ、裏山のほうへとこちらを誘った。

「よお、セイバー。三日ぶりだな」

「そうよの。ところで、今宵は酒盛りの誘いではあるまいな？」

歪な紅い大剣を携えた少女は、いつもの傲慢そうな微笑を浮かべながら、擲掬るような言葉を放つ。

「まさか。もう、貴様とは必要がなからう」

「ふむ。全くもってその通りよ。わかっているではないか、稀代の<sup>イスカ</sup>大王よ。余とそなたは所詮、合い争うのが定め。さあ、今宵は余と踊ってもらうぞ！」

そのにやりと吊り上げられた口角、不遜に告げられた紅き少女の宣言、それがこの戦いの口火だった。

紅い大剣を携えた小柄な少女が、己が言葉どおり踊るように斬りかかってくる。それをライダーは<sup>チャリオット</sup>戦車にのつたままかわす。

足を絶とうというのだろう。少女の狙いは戦車を引く神牛だ。ライダーもそれがわかっていているからだろう。縦横無尽に手綱を引きながら、逆に少女を轢き殺そうと向かう。少女はバックステップを踏みながら、軌道から逃れる。紅い衣がそのたびにひらひらと舞って、戦場に華を添えていた。

いかに障害物が多い場所を戦場を選ぶとも、この征服王の駆る戦車を前にしては全てが無駄に見える。<sup>ゴルディアス・ホイール</sup>神威の車輪は、土を削り、木を薙ぎ倒し、石つぶてを撒き散らしながら、目の前の紅き少女を蹂躪しようと唸りを上げて突き進んでいく。まるでこの姿は死神だ。

一見絶体絶命な状況に置かれている剣使いの少女は、それでも不敵な笑みを絶やすことはなく、こちらを翻弄するように自由な動きで、紅の大剣を振る舞う。

<sup>グラディサス・ブラウセルン</sup>「喝采は剣戟の如く！！」

「いかん！」

そう少女が叫んだかと思うと、戦車を引く神の牛は悲鳴を一つ上

げて・・・ライダーは雷を纏わせながら空中へと逃れさせる。

ぎりぎりで回避が間に合ったのか、神牛のうち一匹は片足に重傷を負っていた。それでも死んでいないのならば、時間と共に回復するだろう。が、戦車の要である神牛にこれほどの傷がついてしまっゴルディアス・ホイールては、神威の車輪の真名開放技である遥かなる蹂躞制覇ヴァリア・エクスラグナテリオを使用することは諦めるほかない。そんな状況にもかかわらず、ライダーは「あやつめ、中々やりおるわい」と感心したような声で呟いていた。全くこの男は、どこでも変わらない。

「何をごちゃごちゃ言っておる。さっさと降りてこぬか」

セイバーは苛立たしげにそう怒鳴ると、ちゃきつと大剣を構えなおす。

「そちらが来ぬなら余がゆくぞ」

「ほう？こちらに對抗する術があったのか？余が見たところ、貴様には制空権をもつ相手に對抗する術はないように思っておつたがな」

「ふ・・・余を見縊るでないわ。そのようなもの・・・余は持つておる！！」

そう金紗髪の少女が宣言した時だった。それは一体どういうからくりなのか。空中を足場に変え、少女は空を駆け上がった。きた。

「なんと」

ライダーすら感嘆の息を漏らす。

「覚悟せい！！」

少女の足が、神牛の頭を踏み台にして、戦車の中にいるライダーへと踊りかかってくる。ライダーは手に持った剣を片手にそれを受け止める。ざつと手綱を引いて一気に距離を離す。少女は空中が地面であるかのように、空中で体制を整える。

再び軽やかに飛んで、紅いドレスが風にはためき、ライダーへと迫り来る。ライダーは手綱と剣を巧みに操って少女をいなしていく。そんな斬り合いを幾度結んだ時だっただろうか。10は下らない数だったと思う。

「ふふ・・・」

「ははは・・・」

暴君たる風情をもつ紅いドレスの女が笑い出した。自分の従者もそれに倣って笑う。

「あはははは！なんとも愉快！痛烈なものよな！余は楽しい！」

そなたもであるう、と、その緑の瞳は問うような色を混ぜてこちらを見ている。

「がっはっは。全くだ。うむ、貴様を我が軍勢に加えられぬとは全く持って残念よ！」

言葉ほど残念そうでもなく、ライダーは手綱にこめる力を上げる。女も油断なく紅い剣を構えて、獰猛な瞳で己の敵を見据えていた。

「ふふ、まだそのような戯言を言うか。よいよい。そなたと遊ぶのも中々楽しかったがそろそろ終わりに・・・」

そこまで自分で口にしたところで、女の顔色は見るからに変化した。どんな状況でも作っていたあの傲慢な笑みが失われる。ぱつと少女が視線をやったのは、トオサカの屋敷の方角。もう、ライダーには興味が失せたといわんばかりのスピードで、主の館へと彼女は駆けてゆく。

セイバーのマスターになにかあったのか？いや、あったからこそこの反応だろうけど。

いきなり無視されたことに、このやたらでかい男が不服そうに小さな唸りを上げる。

「おいおい、セイバーよ。ここまで来て、貴様どこに行くつもりだ？ちいゝと、虫がいいんじゃないか？」

ライダーが立ち塞がるように、女の行く方角へ戦車を滑らせると、目の前の紅いドレスの少女は、余裕が無い搾り出すような声をあげる。

「・・・退け」

「むう？」

何を都合の良い事を言ってるんだとばかりにセイバーを見るライダー。それに苛立たしげに少女は舌打ちをして、鬼気迫る声で大音声張り上げた。

「ええい！余が退けと言ったのだ、さつさと退かぬか！！」

side・言峰綺礼

この三年、自分に魔術の手解きをした亡き父の年若い友を見上げる。男は私が自分を害する可能性など欠片も予想していないかのような無防備さで、私を魔術師の要たる工房いえの中へと招き入れた。

時臣以外の家人が退去したその居間は、戦争中とも思えぬ家の当主の気配りから、埃一つ落ちていない清潔な姿そのままに私を迎え入れる。勧められるがままにソファに腰かけて、三年間私の本質を見抜くことなど終ぞなかつた師・遠坂時臣と二言、三言会話を交わす。

私は微笑を浮かべながら師の言葉を肯定する。するとこの完璧を取り繕った男は、喜ばしそうに笑み、書簡を私へと差し出した。

「………導師、これは？」

「まあ簡略なものではあるが、遺言状のようなものだ」

言いながら男は自分の用件を次々と語りだしていく。自分が死んだ場合、家督は娘の凜に譲ることや、凜の後見人に自分を指名していることなどだ。自分がこの家を訪れた目的を思えば、それは皮肉な願いだったのだが、それでも自分は聖職者だ。頼まれたなら責務を果たそう。

「お任せください。不肖ながらも、御息女については責任を持って見届けさせていただきます」

「ありがとう。綺礼」

師は信頼すら込めて私に感謝の言葉を送る。

「何度見ても、酷い道化だな」

そんな声が頭の中で響くも、私は無視して遠坂師との会話を続け



る。続いて、宝石細工のアゾット剣を一つ、師は私へと手渡ししてくる。本当に、この男は・・・父と同類に過ぎる。父の最期の顔を思い出す。私という人間を見誤り、信じられないと目を見開いたまま死んでいったその姿。思い出すだけで震えるくらいに甘美な感覚が背筋を通り抜ける。

思い出しに誘惑に駆られている私を前に、客人である私に茶を用意してないだろことに気付いたのだらう、男は立ち上がり、くるりとその無防備な背を向けた。

「ああ、そういえば、君が私に話したいこととはなんだったんだい？聖杯戦争に関係することなんだらう？」

「はい、そのことです」

言いながら私は行動に移っていた。ぶしゅつと、真っ赤な血がぴかぴかに磨かれた床に飛び散るその様を、綺麗だなと思ひ眺める。

「・・・あ？」

「私に、導師のサーヴァントを譲ってもらえないかと、そうお願いにきたのですよ」

言われた男は、未だ何をされたのかわかっていないらしい。師は常らしからぬ間の抜けた声を上げて、私と自分の腕を交互に凝視する。痛みさえ麻痺しているかのようだった。

そう、私は男の令呪を宿した腕を、今しがた手に入れたアゾット剣で両断した。その、切り離された腕を掴む。そして見せ付けるように殊更ゆつくりと、血の滴る師の腕の切断面を舐め上げた。

「・・・綺・・・礼？」

弟子に襲われるなど欠片も思っていないかった男は、へたりこみ、欠けた腕を抱えて呆然と私を見上げている。その顔に愉悦が走り、私は笑った。

「さて、この舞台を見に観客がやってくるまで、それほど時間があ  
るわけではないでしょう。最期の懺悔はありますか？導師」  
マスター

どたどたと、少女が立てるには荒々しい音と共に、膨大な魔力の

塊が近づくと、間違いないかの最優と名高きサーヴァントだ。彼女が部屋に到着するまで、3、2、1。頭の中でカウントをとる。

「奏者<sup>マスター</sup>！……！」

バンと豪勢な音を立てて、師のサーヴァントが部屋に駆け込んでくるそのタイミングにあわせ、少女の目の前で男の首を斬り飛ばした。ぶしゃつと、赤い血がまるで新鮮なトマトジュースのように部屋中に散らばる。錆びた鉄のような匂いさえ今の私には愛おしい。ゴロゴロと時臣氏の首は転がって行って少女の足元に辿りついた。セイバーは緑の目を益々大きく見開いて、その滑稽ともいえる死相を目に焼き付けている。

「ツ……！！綺礼、貴様！」

ギツと私を睨みつけて、少女はすぐさまに紅い大剣を手に私に飛びかかるうと迫ってくる。

「今呪に命ずる」

想像以上にその様子を眺めるのは楽しい。これほどまでに楽しいものがこの世にあったとは。自分の口元が昏い悦びに笑み歪むのを自覚しながら、私は言の葉を紡ぐ。

「主変えに賛同せよ」

言うなり、少女は顔面を蒼白にして、己の胸元を抱きしめた。自分のレイラインが今どこに繋がっているのかわかったらしい。その屈辱に満ちた目。いつも傲岸不遜な顔をしていたこの美しき少女が、感情を押し殺すようにして唇を噛み締め、視線だけで私を射殺さんとはかりに睨みつけている。嗚呼、なんてキモチがイイのか。今すぐにもイってしまったいそうだ。

ぶるぶると、小さな口が震える。こめかみが引き攣っている。少女は憎しみすら込めて私に言葉を放つ。

「……承知した。奏者<sup>マスター</sup>」

「くく……あははははっ」

憎悪も敵意も隠そうともせず、しかしその少女の態度が私には一番の馳走だ。ついに耐え切れなくなつて、私は大きな声で笑った。

こんなにおかしく思えて笑えたのは生まれて初めてに違いがなかった。

side・衛宮切嗣

僕は迷い続けている。それでも歩む足だけは止めない。

僕の目的を達するには大聖杯までいかずともいい。そう思って大聖杯の事まではこれまでは考えてなかった。しかし、聖杯が汚染されていたとしたら、その原因があるのは大聖杯のほうだろう。決してアイリが胸に宿す小聖杯のほうじゃない。

今朝方、漸くこの段になって、ライダーのマスターの住居が判明した。なんと、その魔術師は一般人に暗示をかけて、普通の家に紛れ込んでいた。その魔術師らしからぬやり口に内心賞賛を覚える。しかし、住所がわかったところで、サーヴァントを連れていない自分に対抗の手段があるわけでもないし、大聖杯の様子を一度調べたほうがいいのではないかという気持ちもある。

だから、自分の右腕たる久宇舞弥に、そのライダーのマスターが寄生している家を遠くのマンションの屋上から見張らせて、自分は大聖杯があるだろう場所を目指して歩を進めていた。

舞弥をわざと窮地に追い込むつもりもないから、ライダーと鉢合わせしても、詳細を報告するだけで攻撃はしなくていいと指示した。ライダーのマスターは他の魔術師に比べると利口だ、と僕は思う。なにせなにをするにもずっとライダーと一緒に行動し、空駆ける戦車にのって移動し続けているのだ。はつきりいつて魔術師殺しが付け込む隙がないに等しい。

そんなことを思っているとき、ざっと、念話が僕の脳内に飛び込んできた。

『………スタ』

遠く離れているが故に、声はノイズがかかったようにかすれる。そのどこか少年じみた女の声は、間違いなく自分のサーヴァントであるアーチャーの声だ。それが、緊迫した硬い声音で僕を呼んでいる。

その只ならぬ雰囲気に、僕は今まで目的地としていたはずの山に背を向け、ぱつとくたびれた黒い外套を翻し、車に乗り込んで彼女達がいる武家屋敷へと向かい、エンジンをかけた。

「何があつた!？」

『……襲撃だ。相手は……あれは』

響く声には余裕がない。襲撃だつて? 応戦しながら語りかけているのだろうアーチャーに念話を飛ばす。

「知覚共有の術を使う! いいな!？」

そうして目に映つたのは……赤毛の大男! ? あれは、ライダーか。天までつかんばかりの大男が、アーチャー相手に斬りかかっている。アーチャーはいつかも見た、黒と白の双剣を手に応戦しているが、臂力その他において明らかに下回る彼女がいつまでも持つはずがない。大男が技を一つ振るうたび、致命傷を避けていても浅い傷が無数に刻まれていく。そして巨大なその手は、アーチャーよりも、彼女が後ろで守るアイリスフィールを狙っているように見えた。『マスター、これは……ライダーではない。狂化した目……これはバーサー……ぐっ! !』

ついに大男に捕らわれ、アーチャーは土蔵の壁へと放り投げられる。がらがらと、壁が崩れ、彼女の体の上に瓦礫が大小問わずに降りかかる。

『………ッ』

体中血塗れになつてなお、双剣使いの弓兵はしつかと己の足で立ち上がり、今まさにアイリを連れて去ろうとするライダー、いやアーチャーがいうにはバーサーカーにむかって双剣を手に駆け出す。それを男は、アーチャーに一蹴り、腹部を蹴つ飛ばして壁へ逆戻り

させる。

それでも尚、追いつがるアーチャー。男の眼には最初から彼女は映っていない。ただ目的を果たさんとばかりに、狂人は僕の妻を連れ、この家から自分の主の元へ立ち去ろうとするのみだ。そのでかく太い足を確かに、血塗れの弓兵は掴んだ。

『……させ……ん』

息を乱しながら、それでもアイリスフィールを取り戻さんとする、白髪の女。それに、容赦なく男のもつ剣が降りかかるうとしていて……それはまるで死神の鎌のように妙にスローモーションで僕の中に映った。

ドクリ、と心臓が脈打つ。

死ぬ？このままでは？この紅い弓兵は。

(……駄目だ！！そんなこと、絶対に)

嫌な汗がじつとりと伝う。もう、時間がない。このままでは、彼女が死んでしまう。

でも、アイリが。だけど、アーチャーは、僕は……僕は！何故、僕はここにいる。どうしてこんな時に二人の傍に僕はいない。

アイリを連れて行かれるわけにはいかない。でも、だけど！

『ねえ……お願いよ、キリツグ……アーチャーを、私たちのもう一人の娘を……守ってあげて』

白い顔の最愛の妻がいった言葉が、僕の脳裏を過ぎった。

そして、命を奪う凶器が、獰猛な口を開けて、僕の娘を屠ろうとしたその刹那、僕は叫んでいた。

「令呪に命じる……！」

昨日も、今日も私は昏々と眠り続けている彼女を見守りながら傍に控えていた。

こうして眠っている姿を見てみるとまるで白磁の陶器人形のようなだ。それもあながち間違っていないのだろう。彼女は人工の生命体、ホムンクルスなのだから。だけど、ホムンクルスとわかっていても、私にとってはアイリスフィールとはイリヤの母親で、切嗣の伴侶で、無邪気さと母性を併せ持つ、一人の人間でしかない。むしろ、彼女を人形のように扱うことは許せない、とあっていい。

だって彼女は誰よりも人間じゃないか。どこか壊れ歪んだ生を歩んでいた自分よりも、よっぽど人間として生を全うしていた。冬木の街にたどり着いた時の彼女とのウィンドウショッピングを思い出す。

見たいものがいっぱいあるのだといって、私の知る切嗣が知りたいのだと語ったその顔。好奇心に満ち溢れた冬の姫君。だけど、それももう終わりだ。まだ、話すくらいなら出来るだろう。けど、もう彼女があんな風に笑いながら日の下を歩く日は永久にこない。

ずっと、銀色の睫毛が震える。目が覚めようとしているのか。私はずっと実体を形作って、彼女の傍に寄り添う。アイリの印象的な紅色の瞳が、微笑むように私を見つめた。

「よく、眠れたかね？」

「ねえ、アーチャー。私、どれくらい眠ってた？」

時間の感覚もわからなくなっているのだろう。無理もない。それほど、彼女の人としての機能は削ぎ落とされているのだ。

「一日半といったところかな」

「・・・そっか。動きとか・・・その様子じゃなかったみたいね」  
頷いて返事に代える。白晳銀髪の美女は、白い形の良い指をそつと私の褐色の腕に重ねる。私はその白いたおやかな手を、自分の手で包み込んだ。自分はここにいるから、安心しろというように。

「ねえ、アーチャー・・・私の、最後のお願い聞いてくれる？」

愁いを帯びた紅色の瞳が私の姿を捉えて、懇願するように細めら

れる。

「・・・聞こう」

「一度だけでいいの・・・私をお母さんと呼んで」

その衝撃をなんと名づけたらいいのだろうか。嗚呼、これまでも彼女は何度か私に言ってきたことじゃないか。だけど、からからと、喉が渴く。

「アイリ、それは・・・」

私に許されることじゃないんだ、とそう言ってしまうえば、彼女はきっと傷つくだろう。でも、だけど、拒絶も肯定もどちらも選べない。彼女の願いは叶えてやりたいと、そう思う気持ちは嘘じゃない。だが、それはその名称はイリヤにだけ許されたものだ。私にはふさわしくない。

「どうしても駄目？」

「・・・」

下唇をぎゅつと噛み締める。

「そんな顔をしないで・・・貴女にそんな顔をさせたいわけじゃないのよ」

白い手が彷徨う。

「私ね・・・アーチャー・・・貴女が私の子で・・・」

その時だった。膨大な、暴力的ともいえる魔力の塊が屋敷の結界を破って侵入してきた。瞬時に白と黒の夫婦剣、干将莫耶を投影して、土蔵の外へと駆け出す。ガツ、と敵のもつ剣を防いだ瞬間、その敵の攻撃の重圧に耐え切れず、幻想は霧散した。

真つ直ぐ土蔵にむかってきた敵の姿を見上げると同時に、切嗣じいさんへと念話を飛ばす。

『聞こえるか、マスター』

がざりと、再び男の剛剣が唸りを上げて私に迫り来る、それを新たに投影した双剣で防ぐ。が、その重さゆえに私の身体は土蔵の中へと後進する羽目となった。

こっちの事情を察したのだろう、切嗣は感情そのままの声で『何

があつた!?』と問うてくる。それを男の攻撃を受け流しながら、念を飛ばして返事を返す。

『・・・襲撃だ。相手は・・・あれは』

それは赤毛の大男の姿をしていた。その屈強な身体も、真つ赤なマントも、同じく赤い剛毛そうな髭も、どれもが寸分違わずライダーイस्कンと同じ姿。だが、これはライダーなどでは決してないと、私にはわかつた。だから告げるべき敵の名に戸惑う。

『知覚共有の術を使う!いいな!?!』

焦るような声と同時に、私の目と主君きりつぐの目線がリンクする。

その間も、干将莫耶を手に、私はこのライダーの姿をとつた何者かの攻撃を受け流していく。が、致命傷を避けても逃れきれぬ浅い傷が無数に我が身を刻みこんでいく。

これは相当な手練だ。思わず舌打ちをしそうになる。こんな化け物染みた剣の達人を前に、私はこの時代に召喚されてから今まで気づいてなかつた不都合に、うかつにも今更気付かされていた。

当然ながら性別が変わつたということは体格もかわつたということ。腕の長さも足の長さも、私が感覚としてしているその間合いとは異なるし、目線も10cm強低い。おまけに戦闘には、このやたらでかい胸は邪魔なだけだし、男のときの感覚のまま剣を振るうとイメージとのズレがでかくなるだけの体たらく。幸いにも腕力その他は英霊だからか、あまりさしたる変化は起きていないが、凜がマスターであつたときに比べて、今の私は耐久力がワンランクばかり落ちている。つまりは長くはもたないということだ。

こちらに召喚されてからは、弓ばかりを使つていた。それ故に気づかなかつた盲点ともいえるが、そもそもそんな当たり前の問題を今まで気付かずここまでできた時点で、自分がどうかしていたかと思えない。これもまた遠坂のうっかりの呪いだといえはそこまでかもしれないが、戦場にそんな甘えは許されないのだ。間違はなくこれは私の落ち度だ。

我知らず荒い息になりながら、眼前の大男をぎつと睨みつけ、剣



を休む間もなく振るい続ける。

赤く燃える怨念を孕んだこの不気味な双眸、これは以前も見た覚えがある。あれは確か、キャスター以外のサーヴァントが全て揃った夜。私の解析魔術でも一切がわからなかった・・・そうか。この英霊は。

『マスター、これは・・・ライダーではない。狂化した目・・・これはバーサー・・・ぐっ!!』

大男の姿をした狂人に首下を捉えられ、渾身の力で壁へとぶん投げられる。がらがらと壁が崩れて私の上へと大小さまざまな瓦礫が降りかかった。

「・・・ッ」

身体が悲鳴が上げている、それを無視して即座に立ち上がる。赤い大男の姿をしたバーサーカーは今まさにアイリスフィールを連れて去ろうとしている。それを何があるうとさせるわけにはいかない。夫婦剣を再度投影、我武者羅に狂人へと立ち向かう。男は私の腹部へと正確無慈悲な一蹴りを食らわし、私の身体は再び壁まで吹き飛ばされた。

だが、こんな痛みがどうした。あの男の目的はアイリだ。たとえ片足がもげ、片腕がとられる羽目になろうと構うものか。もとよりこの身は主の為の道具。<sup>サーヴァント</sup>ならば、何を懼れることがある。

「・・・させ・・・ん」

男の太い足首を掴みこむ。男は私など眼中になく、ただ邪魔者としてだけ認識して剣を振り上げる。

(たわけ、私がただで、死ぬと思うな)

身体は剣で出来ている。

男が切り込むその瞬間に、この身の剣製でもって男を諸共滅ぼす。それは一か八かの賭けでしかない。だが、勝率がたとえ一割でもあるのだとしたら、その勝利を引き寄せて見せよう。

男の黒い剣が私に迫る。ぎっとライダーを模った狂戦士を鷹の目で見据える。

(今か・・・！)

『令呪に命じる！！』

ラインを通じて流れ込む声に、びくりと、身体が固まった。

『この場において自分の命を最優先せよ！』

何を・・・。

(この男は何を命令した！？)

ぐん、と強制的に霊体に戻らされる。男の黒い凶器は空を切り、それきり興味を失って、アイリを抱えたまま土蔵から去っていく。

「待つ・・・」

即座に実体に戻った。だけど、もう遅い。伸ばした手が掴む先に何者もない。全てが遅すぎる。元よりスピード勝負に出たら私に勝ち目などない。

この手はアイリに届かない。結界から連れ去られた姫君は元の人形に戻ったかのように狂人の腕の中で昏睡に落ちる。それを、目の前で連れ去られていくのを、何も出来ずただ指を銜えて見つめるしかないということなのか？ふざけるな。

だけど、令呪は絶対だ。今男を追えば私が振り返り討ちになる可能性が高い。そのことを指摘するかのように、身体は重く私を縛り、動けない。動かない。ぎちぎちと剣が蠢く、足は縫い付けられたように止まったままだ。

「・・・アイリ！」

待つてくれ。行くな。銀色の髪が空を揺れる。イリヤと同じ髪。

あの人はイリヤの母親なんだ。此度の聖杯、だからなんだ。人間だ。生きた。誰よりも人間だった！夫を愛して、娘を慈しんで、こんな私さえ我が子のように扱った。

「アイリスフィール！」

無邪気な顔、母親としての顔、気品とお淑やかさと柔らかさ、全て内包しながら、市井の人々の営みを物珍しげ愛しんでいた。そんな女性だった。たとえこの聖杯戦争で失われる命だろうと、それまでは私がきつと守り抜いて見せるのだと、そう誓っていた。

どうして、この手は彼女に届かない。どうしてこの手は何も守れない。こんな時に何も出来なくて、何が英雄だ。何故オレは肝心な時にいつだって無力なんだ。動け、動け、動け、動け。

何故だ、どうして。魔術師殺しと呼ばれた貴方が、誰よりも冷酷無比な魔術師だったと称される貴方が、何故オレにあんな命を下した。なんでだ、切嗣おやし！貴方なら、優先順位はわかっている筈だろう！？何故、どうして、よりもよって貴方が私から戦う術を奪う！？

貴方はアイリスフィールを愛していたはずじゃなかったのか。慈しんでいたあの姿は嘘だったのか。そんなはずがないだろう、大切にしていた、あの姿こそが素の貴方だったはずだ。だというのに何故だ、どうして。何故オレから、オレは、オレは・・・たった一人の女すら守ってやれないんだ！？何故、他の誰でもない衛宮あなたがオレからその手段を奪う。何故だ。

遠い、もう追いつけない。行ってしまおう。彼女が、自分を子供だと呼んだ女性が。

『一度だけでいいの・・・私をお母さんと呼んで  
何故私は躊躇したのか。』

「・・・かあさんっ・・・」

禁忌を破って叫んだ声、それに返事が返ることなんてありえないのだと、知ってて頬が熱く濡れた。

自分が泣いていることにすら気付かず、ただ私は令呪に縛られたまま、案山子のように地面に足を縫い付けていた。

後編へ続く

第四次聖杯戦争編 08・慟哭 中編（後書き）

つうわけで中編でした。後半こそ雁夜さんのターンダヨ。

いやあ、今回の話は令呪使いまくり回ですね。

今までのアイリの「お母さんと呼んで」「宣言は全てこの回のためにあつたのです。ぱふぱふ。

次回、慟哭後編。不完全燃焼なイスカ様はさてどう動く？こつこつ期待<sup>え</sup>

## 第四次聖杯戦争編 08・慟哭 後編（前書き）

やあ、ばんははろ、EKAWARIです。お待たせいたしました。慟哭後編です。

今回の話、エミヤさんが自虐的モード過ぎて、予定ほど喧嘩らしい喧嘩になりませんでした。・・・まあ、キャラはナマモノだから、いつも予定通りいくとも限らんよね。

今回はZERO文庫版六巻発売後執筆予定なので、前回の予告どおり「ハサン先生のQ&Amp;A教室」を書きます。質問まだまだ募集中です。  
ではどうぞ。

母さんが僕を殺して

父さんが僕を食べた

妹のマリーちゃんは 僕の骨を絹のハンカチ

に包んで

杜松ねずの木の下に埋めた

キウエット キウエット

何て美しい鳥なんだ僕は

【グリム

童話 杜松の木 より】

「神父……こんな小細工に、本当に令呪を二つも費やすだけの意味があつたのか？」

眼下にそびえる町、冬木の街を見下ろしながら、俺は隣に立つ僧衣を纏った男に胡乱気に視線をやる。

「案ずる必要はないのだ。雁夜、私に協力する限り、君は惜しむことなく令呪を浪費して構わない。……さあ、手を出したまえ」

すっかり一年前と変貌した、干からびた老人のような己が右手を男に差し出す。すると、男の低い聖言と共に失われた二画の令呪は元の輝きを取り戻した。

「あんた、本当に……」

男の言っていることに半信半疑だったが、言った言葉に嘘は無いらしい。

「言つたとおりだ。雁夜。監督役の任を受け継いだ私には、教会の保管する令呪を任意に再配分する権利がある」

「……」

確かにそう聞いてはいたが、本当に何を考えているのかさっぱりわからない。俺はため息を一つ漏らすと、背後に立つ自分のサーヴァントを見やる。

その赤毛の巨体、バーサーカーを示す瞳の怨念が滲んだ様さえ除けば、此度のライダー、征服王イスカンドルに瓜二つだ。その腕には意識の無い白人女が一人抱えられている。

「……もういいぞ。バーサーカー」

その自分の言葉を合図に、サーヴァントは本来の黒く禍々しい甲冑姿に戻っていく。バーサーカーのことについて、神父と一言、二言、言葉を交わす。煩わしい会話だ。狂戦士は維持するだけで疲労度は他のサーヴァントと比べ物にはならない。魔力供給を一方的に断ち切ると、バーサーカーは肉体を維持できなくなり、霊体へと戻り、どさりとバーサーカーが抱えていた銀髪の女もまた屋上の床へ

と落ちた。

「この女が本当に『聖杯の器』なのか？」

その女は美しい白人女の姿をしている。とてもじゃないが、聖杯の器であるようには見えなかった。

「正しくはこの人形の“中身”が、だがな。あと一人か二人のサーヴァントが脱落すれば、正体を現すことだろう。……聖杯を降ろす儀式の準備は、こちらで引き受ける。その間、この女の身柄は私が預かるう」

意識なき女の身体を担ぎ上げる神父の真意を詰問する視線をくれても、男はただなんでもないかのように微笑を返すばかりだ。

「心配するな。聖杯は、約束通り君に譲り渡す。私には、願望機など求める理由が無いのでね」

「それ以前にもうひとつ、あんたは俺に約束したはずだ。神父」

「ああ、その件か。……問題ないとも。今夜零時に教会を訪れるがいい。そこで遠坂時臣と対面できるよう、既に段取りは整えてある」

「……」

食えない男だと思う。元は遠坂時臣に師事しておきながらも聖杯戦争に参加したこの男が、間桐邸の門を叩いたのは今から2時間ばかり前のことだ。

敵という立場からのいきなりの協力申し込み。疑う俺にこの元代行者が言った言葉は、監督役である自分の父が死んだのは遠坂に責任があり、間桐おれの力を借りて、父の仇を討ちたいのだという、本当なのか嘘なのかわからない話だった。だが、あの妖怪ジジイによると、監督役の老神父が死んだということは本当らしい。

それでも信用出来ないこの男と組んだのは、デメリット以上にメリットが魅力的だったからだ。男は遠坂時臣を罫にかける算段、聖杯の器の潜伏場所、任意譲渡可能な保管令呪の数々を所持しており、協力する限りその恩恵を譲るのだという。現にこうして聖杯の器を手元に置き、無くした令呪は元に戻ったわけだが、この男は信用し



てはいけない、そう思えてならなかった。

「だけど……」

（桜ちゃん、もう少しだ、まっついてくれ）

間桐の家にいる幼い少女を思い出す。頭のつま先まで蟲に犯され抜いて絶望に堕ちた少女。自分が死ぬのは時間の問題だ。それでも彼女だけは救わないといけない。そのためなら、何者も利用し、この戦いに勝ち抜かなければならないのだ。

そんな雁夜の様子を愉悦に嗤いながら、二人の男が見ていた。

side・エミヤ

剣が蠢く音がする。まるで自身が剣になったかのように。いや、初めから私は一振りの剣でしかなかった。ぎちぎちぎちと、剣の鏝競り合う音がする。それは心の臓の音と同義だった。

……漸く身体の束縛が解けたのは、どれくらいの時が過ぎてからだだったか。全ての感覚が遠く曖昧で、上手く認識が出来ていない。「アイリ……」

ぎりつと奥歯を噛み締める。連れ去ったのはバーサーカーだった。だが……裏で誰が手をひいているのか、過去に二度の聖杯戦争を経験した私には用意に想像がつく。あのやり口、誰も知らないはずの場所を正確に知っていた情報力、その他合わせて考えて、おそらく犯人はあの男、言峰綺礼だ。これはあの神父のやり口だと、証拠はなくとも確信している。だが、今私の胸の内をざわめく感情は、あの神父に対するものではない。

衛宮切嗣。私の義父で、私をかつて救った男で、英霊<sup>わたし</sup>エミヤの全

てを形作った男で、そして今の私の主君<sup>マスター</sup>。あの背中にかつて憧れた。爺さんみたいになりたくて、正義の味方の夢を継いだ。成長してから聞いた爺さんの噂は、魔術師殺しで、誰よりも冷酷な魔術師だったというそんな話ばかりだったが、それでも直に本人に触れて育った私は、誰よりも切嗣<sup>おやし</sup>のことを、尊敬していた。憧憬と羨望の対象。それが私にとつての衛宮切嗣という男だった。

だが・・・、ぎりと歯をかみ締める。血がぼたりと落ちる。

そう、今私は確かに、今生にて守ると誓った男に対して、怒りを覚えていた。

アレは、私に戦う手段を与えた男だった。私の行く末を決定した男だった。愛情と名を与えた男だった。

どこか歪で我武者羅な人生を、自分が間違っているとすら思わず終えて、守護者に堕ちた私は、救われぬ戦場に召喚され続けて、次第に摩擦し、自分を殺すことを夢想するほどの絶望に墜ちた。だがしかし、正義の味方というものを忌々しく思うようになってさえ、それでも私にとって衛宮切嗣はヒーローで、セイバーと同じく、穢せない憧憬だった。憧憬であり続けた。

わかつている。今のマスターであるあの男は、私を育てたあの男<sup>きつぷへ</sup>とは同一人物の別人だ。並行世界の間人なのだ。それでも、その根は同じな筈なんだ。それが、どうして、よりによって私から戦う手段を奪う・・・？何故、自分の妻である存在が目の前で奪われるのを見すみす許すというのだ。

もう、限界だ。

あの男に会わなければ・・・。

「何をしておる？」

はっと、顔を上げる。見れば、天駆ける戦車<sup>チャリオット</sup>に乗ったライダーと、そのマスターである少年が揃って私を見ていた。こんな近くにいるのに気付いていなかったというのか、私は。自分のあまりの迂闊さに思わず舌打ちをする。

ライダーはそんな私の様子を知ってか知らずか、まあおそらくはなにも気にしていないのだろうが、よつと掛け声を一つあげると、私の隣に降り立った。一般人に見られる危険も考えて簡易な結界をしようがなく張る。

「おぬし、酷い顔をしておるぞ？ 全く、若い娘がそんな顔をするもんじゃない。別嬪が台無しというもんだ」

「……………」

ほら、と自身の主君から奪ったハンカチを私に差し出してくるライダー。それを受け取ることをもせず、じつと真意を尋ねる視線で見続けると、この大きな男は肩を一つ竦ませて「ありや、まるで懐かない猫みたいだの」なんてことを、顎をぼりぼり掻きながらぼやいた。

「大分魔力を消費しとるようだし、どこぞの誰かと戦闘でも交わした後か？ ん？」

「……だから、どうした」

思わず苛立ちが声に滲んだ。

「あん？」

「敵が弱っているというのなら、倒せば良かろう。今の私を倒すのなど、君には造作もない。違うか、征服王よ？ 全く君は物好きなものだ。敵は倒せるときに倒せ。情けなどかけるな。窮鼠猫を噛むという言葉もあるぞ」

自然と自嘲するような口調になる。そんな私に対して、この赤毛の大王は額にひとつデコピンを食らわせた。……地味に痛いな。これを生身で食らっているこの男のマスターに同情する。

「なぐに、自棄になつとる。それに前にも言つたじゃろが。おぬしをメイドに欲しいとな」

「つて、オマエ、それ本気で言つてたのかよ！」

「当然よ！」

今まで口を挟まなかったウェイバーが思わず突っ込みを入れているが、まあ概ね同意見である。何故かわからないが、この少年を見

ていると懐かしいものを感じる気がするのはどうしてだろうか。もしや生前に会ったことでもあったか。

「・・・本当に物好きなことだ。君の考えてることはさっぱりわからんよ。君には私と戦う気はないのか？」

「そもそも、おぬしがなんで戦いなどに身を投じておるのかのほうかわからん」

ふと、真面目な語調になってライダーはそんなことをぼつりと言い出した。いきなり何を言い出すのか。読めない男だ。じつと静かな赤い目を見る。

「おぬしは器量もいいし、家庭的だ。料理上手で気配りも上手い。性格とて、物言いこそあれだが、好戦的とは程遠いし、お人よしで善良だ。確かに技量は戦士として申し分ないものを具えているだろうよ。だがなあ、生前何があったかしらぬが、おぬしのような娘っ子が何故戦場に出るようなことを選択したのか余にはさっぱりわからん。既に英霊となった以上過去は変わらんだろうが、おぬしには優しい夫に守られて家庭を築く姿のほうが似合うと、思うのだがなあ」

そんなことをしみじみと語ってきた。・・・意外すぎる答えに思わず脱力しそうになる。と、同時に自分が今は女であることを厭でも自覚させられて頭が痛くなる。私が本来は男であることをこの世界で知っているのは、アイリと切嗣だけだし、二人とも私の男としての本来の姿を見たことがあるわけではない。つまり、この世界で私の性別を男だと真の意味で自覚しているのは私だけであり、周囲から見たら私はただの女に過ぎないのだ。征服王の言葉は考えたくないと思ってきたそのことを指摘するも同然の台詞といえる。

今のお前は男などではないのだと、言われたようで惨めな気持ちも少しはある。だが、元男だと知られ、今は何故か女になってしまったことを告げて、それで同情でもされてしまえばより一層惨めな気分になるだろうし、信じられず笑い飛ばされたりなどしたら、屈辱のあまり死にたくもなるだろう。だから、そもそも切嗣達以外の

人間に、元は男だと告げる気すらないわけで、だから私の生前は女であつたと誤解されても、今の私の姿を考えれば、それは当然のことなのかもしれないが、それでもこうも完全に女だと認識され、扱われるとなるとそれはそれで・・・なんというか、腹の中が気持ち悪いものがあるな。

割り切れれば楽なのかもしれないが、何十年も男として生きてきて死んで、今更性別が変わつたからといって、女のように振る舞えとか言われても、勘弁しろとしか言えないわけだし。

そんなことをぐるぐると考えるが、征服王は私のそんな様子にも気付かなかつたかのように言葉を続けている。

「余としては、セイバーのような輩ならいざしらず、おぬしのような娘とは矛を交えたいと思わんわい。正直言えば、戦場にも出てほしくはないぞ」

・・・しかし、そうか。今の私は征服王たじんにはそう見えているのか。意外な発見だ。男であつた本来の姿ではまず言われぬような言葉ばかりだな。

だが、今の自分の消耗具合を併せて考える。先ほどはああこの男に言ったが、戦う気がないというのなら、私が助かるのもまた事実なのだ。ここで出会つたのがこの男ライダーでよかつたと、そう思ふべきなのだろう。若干癪ではあるんだが。

「まあ、おぬしが男だつたのならまた、話は別なのだがな」

そこまで思いを馳せていた時に、そんな言葉も小さく聞こえてきて、自分が今は女で助かつたと思うべきか、それとも本来は男なのに女になったことで舐められていると憤慨するべきなのか、若干悩みそうになつたのは、まあここだけの話だ。

とりあえず、聞かなかつたことにするか。詳しく追求して思考を働かせたりすれば、我が身におきた不幸具合に落ち込みそうだな。

「・・・見逃してくれるというのなら、素直にありがたく受け止めておこう。先ほどはつい、ああ言ったが、私としても戦闘にならぬというのならそれに越したことはない。なにせ、先を急ぐ身なので

ね

本当はこの男とこうして話している時間も惜しいくらいだ。

「む？そのようなふらふらの体でどこに行く気だ？」

「君に関係はあるまい」

「もしやと思うが・・・マスターを連れ去られたか？」

ぱつと視線を赤毛の王に向ける。我知らず殺意が滲んだ。

「凶星か。なら、しょうがないなあ。なんなら送ってやっても構わんぞ」

いいながら、御車台の横をぽんぽんと大きな手で指し示すライダー。その邪気のない様子に思わず毒気を抜かれそうになる。この男に怒りを向けたところで全部無駄かもしれぬ。それくらいこの男の器は底知らずにでかい。

「結構だ。だが・・・そうだな。見逃してくれた礼だ。情報を一つ

やろつ」

「ほう？」

興味津々な赤茶色い目が私をじっと捉える。

「バーサーカーには気をつける。奴はどうやら他人に変身する能力をもっている。私の前にはライダー、君の姿で現れた。君の前にももしかしたら、君の知っている誰かに化けて現れるかもしれんぞ？」

## side・衛宮切嗣

アイリスフィールが連れ去られてから早数時間が経とうとしていた。

使った令呪、消えたアイリの行方。思うところは多く、それらは黒い膿となって僕の感情を圧迫する。心が冷えていく。この感情に名をつけるとしたら憎悪となるだろう。

バーサーカーは間桐家が呼び出したサーヴァントだ。ならば、と思い、間桐家の防護結界を突破して、この500年の歴史をもつ御三家の一角へと進入を果たした。

そこにいたのは、部屋着姿でアルコールを過剰摂取する、中年の男だけだった。

「アイリスフィールは、どこだ？」

その濁った目は、質問の意味がわからぬとばかりに見開かれる。その仕草にすら苛立った。

「わ、私は、私は……」

呂律のまわらない口調でうるたえる男の右手を、愛銃で打ち抜く。轟音と共にそれは四散した。男はヒステリックに叫びながらのた打ち回る。

「し、しししし知らない知らない知らない私は何も知らないッ！ ああああッ！ 手がッ！ ぎゃあああッ！」

とぼけている、わけではない。真実、この男は「何も知らない」のだろう。僕が追い詰めるその前から、この男の心は折れている。この状態の人間が嘘をつける筈もない。

思わず舌打ちをもらす。アイリを連れ去ったのは、確実に間桐の陣営だろうに、彼女が連れ込まれたのは間桐邸ではなかったのだ。

もう、足元に転がっている人間への興味などなく、間桐の家を去る。

「舞弥、聞こえるか」

ざっと、無線をオンにして、相手である女に語りかける。

『はい』

「間桐邸ではなかった。次は……」

その時、ぞつとするほどの凍り付いた感情が僕の中へと流れ込んできた。

「そこで、何をしている？」

絶対零度の、聞き慣れたように聞きなれない女の低音が、脳に直

接叩き込まれたように響いた。

どくり、と心臓が脈打つ。反射的に振り返ると同時に、女はもう僕の目前にいた。

「アー……」

「何を、無駄なことをしている」

鋼の色の瞳が、嘲笑うような、冷やかな色を孕んで僕を突き刺す。

「アイリを連れ去った輩を陰から操っているのは、言峰綺礼だ。あんただって本当はわかっているはずだ。それを、こんなところで何をしている」

意外な名が出たことに内心目を見開く。言峰綺礼、この聖杯戦争で一番僕が危険だと思った男。だが……あの男は既にサーヴァントを失っていた筈だ。

「わからんとは言わせん。他ならぬ衛宮切嗣がわからぬ筈が無い」  
確信なんてものではない断言。女の声は鋭い刃のように重々しく僕の耳に浸透する。

次の刹那、白髪長身の女、アーチャーは僕の胸倉を掴み上げて、道路の壁へと押し付けた。肺が圧迫され、苦しい。だが、それ以上に、その色んな感情が混ざり合って冷え切った、この目の前の女の瞳のほうがずっと痛かった。

「言え」

冷え切った瞳に焰が燈る。

「何故、私にあんな命を下した！？それほどまでに、我武者羅に探すほどアイリが大事だというのなら、何故みすみす奪われるのを黙認した！？答えるよ、切嗣<sup>じいさん</sup>！！」



約束の時間が来た。

この一年間、溜めに溜め込んだ狂おしいほどの殺意を胸に足を進める。

自分の身体は既に死に体だ。聖杯戦争が終了すると、体中を蠢く蟲共に鬩り喰われるのは一体どちらが早いだろうか。詮無い考えだ。

神父は言った。今宵12時に教会で、あの憎き遠坂時臣と対面させる場を用意すると。

自分が死ぬのはいい。もう、わかりきっていることだ。

それでも、今も間桐の家で蟲に犯され続けるあの少女を開放することが出来るのならば、かの魔術師を打ち殺し、聖杯を掴み取ってみせる。其れがこの一年の苦痛に耐えてきた俺にとっての何よりも優先する願いだった。

(もう少しだ、あと少しで……)

ぎい、と神の家の戸を開ける。

厳かな礼拝堂の中を淡い燭台の灯が飾っている、その中、信徒席の最前列に座る後頭部を見咎めた。間違いなく、夢想するほどに引き裂きたいと思っていた男だ。ぞわりと怒りが鎌を擡げ、男に向かって走り寄った。

「遠坂、時臣………ッ！」

返事はかえってこない。そのことに益々憎悪を募らせる。

「俺など眼中にないというつもりか!? 貴様を殺すためだけに、俺は今まで生きてきた! こちらを向け、時臣! 答える! 貴様は何故、桜ちゃんを臓硯の手に渡した!?!?」

そうして、引き攣った俺の老人の如き手が、その見慣れた肩の辺りに到達した時、それは、ごろん、と、まるで熟れ過ぎた林檎のよう

うに取れた。

「……え?」

「ごろごろと転がる頭、まるでどこかで読んだ童話のように、男の

首は転がった。

その丹念に整髪された巻き髪、耳の形、形良く整えられた顎鬚、全てがこの男は遠坂時臣と語っている。鞠球のように転がったそれを自分の顔の高さまで持ち上げる。人形などではない。冷たい肌、見開かれた瞳孔、間違いなく死んでいる、自分が殺すはずだった男。(死んでいる?)

その男を自分の手で殺す瞬間をずっと夢見てきた。その後のことなんて考えたこともなかった。

足が、がくがくと揺れる。自分が今立っているのか座っているのかすら曖昧で、全てのものから現実感が失われていく。

(遠坂時臣が・・・死んだ?)

「な・・・何・・・何故・・・?」

冷たい、首。ごろりと、転がって、身体はアソコにある。いつも通りの、綺麗に整えられた洒脱なスーツ姿。首だけがなく、優雅に足を組んで座っている。頭がない。コレはナニ?この、俺の手に、ある、この物言わぬ憎らしい男の顔をしたモノは。薄く開いた口から言葉が漏れることはない。呼吸さえしていやしない。

ぶるぶると、指が震える。コレは、コレは・・・遠坂時臣の生首・・・?顔に手を沿わす。冷たくて、生きている人間とは程遠い。死後、何時間も経っている。

何もかもが考えられなくなっていく。思考が乱れる。混乱に陥る。何故自分がここにいるのかすら、曖昧で、混濁していく。俺の目は、一体ナニをミテいる?わからない、わかれぬ。全てが、意味を失っていく。崖から突き落とされたように、意識が濁る。

「・・・雁夜、くん?」

その声の主が一体誰なのかすら、俺には認識できていなかった。

「何故、黙っている。何故、何も答えてくれない」

冷やかに女の声が響く。苛立ちが滲んだそれに答える言葉を失って、僕はされるがままに立ち尽くしていた。そんな僕の様子に気付いたように、彼女はそこで視線を落とす。

「ああ、そうか・・・」

ふと、女の声が重々しく沈んでいく。それに嫌な予感染みた感覚が僕の背を走った。

「私になど、答える価値もないか？」

口元だけは皮肉気な笑みを浮かべて、泣きそうな目で女は笑った。「ああ、そうだ、所詮私など、ただの道具だ。あんたが望んでいたカードでもなければ、女一つ守り抜くさえ出来なかつた役立たずだ！さぞかし、私のようなカードを掴まされて落胆したんだろうよ！」

自虐的なそれは、しかし心の底からの叫びだった。僕はアーチャーが何を言っているのか一瞬意味を理解出来ず、目を見開く。

(馬鹿な、そんな風に思ったことなんてない)

どうして、自分をそんな言葉で形容する。

でも、彼女は、アーチャーはずっとそんな風に僕に思われていると思つて過ごしてきたというのか。呆然とする僕に気付いた様子もなく、彼女は言葉を続ける。ぐつと、胸倉を強く掴まれた。苦痛に歪んだ瞳、涙こそ流していないが、それはまるで小さな子供が泣き叫んでいるかのような貌をしていた。

「でもだからって、妻が浚われようとしている場面ですら、使う価値がないほどか！？私はそんなにも要らないか！？あんたはアイリを愛していたはずだろう、それでも、敵に浚われるのを黙認するほど、それほどに・・・」

激昂する声、最初は僕を問い詰めていたはずの声が自嘲を帯びる。苦痛に耐えるように歪む顔。ずるりと、その肩が落ちる。その声は、

震えていた。

「オレは、あんたにとって信用がなかったのか・・・!?」  
まるで、迷子になった子供のような顔で、ぼろりと溢す言葉。

その顔と声に、ぐわんと、ハンマーで頭を撃ち抜かれたような衝動が、僕を襲った。

(違う、違う、違う)

こんな顔をさせたかったんじゃない、そんな言葉を言わせたかったんじゃない。どうしてこんな場面になってすら、自分を責める。何故、そんなことを言うんだ。

僕は、馬鹿だ。何も見てなんていなかった。

目の前に彼女はいつでもいたのに、ここまで追い詰めていた。

「アイリスフィールを全力で守れ、とそう令呪を使うことも出来たはずだ。そんな命令にも値しないほど私は・・・貴方にとっては、命を使い捨てる価値すらないのか」

ぎゅっと寄せられた眉根。僕の胸倉を掴む力は弱々しく、まるで縋るような力に墮ちる。

「・・・ごめん」

唾液が張り付いて、上手く喋れない口を開いて、僕がやっと放った言葉は、そんなありふれた謝罪の言葉だった。そんな言葉しか思い浮かばなかった自分の愚かさに、齒噛みする。

自分を見上げてくる焦燥した鋼の瞳、その目元が薄っすらと赤く腫れていた。そんなことにすら今まで気付いていなかった。どうして、僕は、守ると誓っておきながら、この子とちゃんと向き合わずにきたのか。ここまで、彼女の心を追い詰めていたのは僕だった。うの。

本当に僕は父親失格だ。

ふと、8年前の事を思い出す。愛しい女との間に生まれた小さな命、それを汚れた自分は抱く資格なんてないのだと、アイリを前に泣いた夜。あの時、アイリは理想を遂げ、聖杯を手に入れたあと、

普通の父親としてイリヤスフィールを抱いてくれ、とそう言った。ただ、今はそれがどんな夢物語に近い奇跡なのか知っている。聖杯が汚染されていたとしたら、僕がやっていることは被害を広めているだけなんだ。そしてアーチャーの記憶どおりに歴史が進めば、僕がイリヤをただの父親として抱く日なんてくるはずがない。

（そうだ、僕は何度間違えるつもりなんだ）

終わってから、なんて言い訳だ。

涙を流さずに泣いている我が子が目の前にいるのに、今伸ばさずに何の為の腕なんだ。

有りつ丈の勇気を振り絞って、ぎゅっと、その自分と背丈の然程変わらぬ身体を抱きしめた。腕の中の身体は動揺に震える。

「何を、あんたは、何をしているんだ」

うるたえ、混乱に揺れる声。より一層強く抱きしめた。

「・・・大事なんだ」

「何を、言ってる」

「君が大事なんだ」

静かに、息を飲む音がした。

「僕は、君を守りたかったんだ」

今までずっと逃げてきた。でも、もう逃げるのは止めた。困惑したような声がすぐ傍で響く、心臓がばくばくとなる。自分の行動に内心不安が渦巻いている。だが、今逃げたら、きっともうアーチャーは僕の言葉を聞いてくれなくなる、今度こそ心を閉ざしてしまう。それは確証の無い確信だった。

「私はサーヴァントだぞ」

「君を失いたくなかったんだ！」

「たわけ！私は死者だ！何を考えている！？まさか・・・生者のア  
イリよりも、私を優先したという気か！？そんな、馬鹿な・・・馬  
鹿なことを。貴方は自分が何をやったのかわかっているのか！？」  
信じられない、と、アーチャーの声が揺れる。

嗚呼、そうだ。僕自身信じられない。こんな選択をする日が来る

なんて、日本に来る前は思っても見なかった。

「アイリは聖杯だ、すぐに殺される危険性は低い」

「それが甘い考えだっことは、私が言わなくてもわかっているはずだろう!？」

「君が死ぬと思ったんだ!」

ぎゅうと、万感の想いをこめて、その身体を抱きしめる。腕の中の大きな子供は、泣きそうな目をして、唇を戦慄かせていた。

「馬鹿なことを、貴方は・・・馬鹿じゃないのか。大たわけだ!私なんかをアイリより優先してどうする気だ、私は貴方の子供イリヤスフィールじゃないんだぞツ!」

「僕の娘だ!!!」

息を呑んだアーチャー。その、真っ白な髪に手を伸ばし、ぐしゃぐしゃとかき混ぜた。

「誰がなんと言おうと君は僕の娘だ。我が子を守るうとして、何が悪い!」

「馬鹿だ!!!」

堪らず、彼女は叫んだ。泣くような声だった。

「貴方は、馬鹿だ。大戯け者だ!!!」

「うん、そうかもしれない」

気付けば、口元が笑いを模っていた。でも、父親なんていつだってそんなものだ。娘の前ではいくらでも馬鹿になってしまいう生き物なんだよ。今の僕は、今までになくそのことを素直に受け止めていた。これでいいんだと、自然に思えた。

「私は、死者だ!サーヴァントなんだぞ!それを・・・ツ」

「関係ないよ」

葛藤に揺れる声、ぽんぽんと、落ち着かせるように背中を叩いた。

「貴方は・・・」

「シロウ」

初めて真名で名を呼ぶ。はっと、彼女は目を見開いた。

「今まで、ごめんね」

「…………たわけ」

鋼色の瞳から一滴、涙が零れ落ちた。  
初めて見た、本当の涙だった。

side . 間桐雁夜

「…………雁夜、くん？」

それは自分がこれまでの生涯、最恋焦がれてきた女性の声だった。  
立ち尽くしている女性は、自分の幼馴染で、この、自分の腕の中  
で骸になっている男の妻の……遠坂葵。

「あ……………」

(何故、ココに葵サンが……イル?)

葵さんが俺を見ている。いや、俺の手の中にある、ナニ力を、変  
わり果てたナニ力を凝視している。

「葵、さん…………俺は……………」

すると、俺に興味などなく、彼女は真つ直ぐに遠坂時臣の物言  
わぬ死骸へと歩み寄る。何が起きているのかワカラナイ。気圧され  
て、自分は彼女が涙を流して嗚咽を上げる姿を、逃げ場を失ったま  
ま、見ているだけだ。なにもかも理解が出来ない。いや、理解した  
ら自分が崩壊すると、そんな予感が理解することを拒んでいた。

やがて顔を上げた、葵さんはこんな言葉を俺に投げかけた。

「…………これで聖杯は間桐の手に渡ったも同然ね。満足して  
る？雁夜くん」

その憎悪に満ちた声。知らない。何故、葵さんがそんな声で俺を  
呼ぶ？そんな顔で俺を見るんだ。俺が知っている葵さんは、優しく  
て…………だって、なんで。

「俺は…………だって、俺は……………」

何もかもわからない。なんで遠坂時臣が死んで咎められなければならぬ？そもそもなんでこの男はこんなところで死んでいたんだ？幼馴染の自分を見る目も、この状況も何もかもがわからない。

「どうして、よ……間桐は、私から桜を奪っただけじゃ物足りなかったの？よりもよって、この人を、私の目の前で殺すだなんて……どうして？そんなにも私たちが憎かつたの？」

この人は誰だ？葵さんそっくりの、憎悪を自分にむけてくるこの女は。ワカラナイ、ワカレナイ。

「そいつが……そいつの、せいで……」

震える指で時臣の首が切断された死体を指差して、精一杯の声を上げた。

「その男さえ、いなければ……誰も不幸にならずに済んだ。葵さんだって、桜ちゃんだって……幸せに、なれた筈……」

「ふざけないでよ！あんたなんか、何が解るっていうのよ！あんななんか……誰かを好きになったことさえなくせにッ！」

「……あ……」

ナニカが、ぴしりと罅割れていく。

「俺、に、は……」

好きなヒトがいた。

彼女の為なら命さえ惜しくないと、ずっとだから、どんな痛みにも、あのジジイの仕打ちにも耐えて、耐えて、耐えて、耐えて耐えて耐えて耐えて耐えてタエテキタノニ。なんで否定、ドウシテ、オレは、俺は。

「俺には……好きな……人が……」

あの、口をふさがないといけない。

だって、耐えて、嘘が、駄目だ。俺は、否定しないでくれ。貴女だけは否定しないで、葵さんと同じ顔をして、やめて、嘘だ。黙って黙って黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ。

ぐつと、両手に力をこめた。細い首。ぱくぱくと閉口する口は尚も俺を罵倒しているかのようで、更に力をこめた。そうして土気色



に変わっていく女の風貌、それは確かに今まで秘めてきた最愛の女性と同じだったんだ。

「……………あ」

どさりと崩れ落ちる、女の身体。昏倒して身じろぎすらしやしない。

「あ、あ……………」

死んでいる…………？誰よりも大切だったヒトが？命すら惜しくない…………そう思ってきたヒトを…………。

（俺が殺した…………？）

ぎい、と礼拝堂の扉を開ける音が聞こえて、はっと振り向いた。

そこにいたのは、赤毛の天まで届かん大男。真っ赤なマントを身に着けた、膨大な魔力の塊。

「なんじゃ、辛気臭いところだわな。本当にここは神の家か？」

それがナニカを言ってる。わからない。なにが。なにを。

「さて、余の許可も得ず、王の姿を騙った不届き者は貴様の連れか？」

ざらりと光る眼孔の意味も、その気圧される膨大な力の主の意味も、何故ここに其れが現れたのかも、全てが理解の外にあった。この目に映るのは、倒れた葵さんと、首の無い時臣の死体と、入ってきた第三者。

「ああああアアアああああアああ……………！」

頬を掻きながら、蟲に犯された体中を憎悪しながら、俺は、黒き甲冑の自分の従者を目の前の男に差し向けていた。

一人の男の慟哭の声だけが冬木の街を木霊する。

怪異だけがその様子を見ていた。

からから、からからと運命の齒車フュイトは未だ途切れることなく廻り続けていた。

N  
E  
X  
T  
?

第四次聖杯戦争編 08・慟哭 後編（後書き）

そんなこんなで、イスカVSバーサーカー確定したところで、9話「暴君の矜持」に続く。まだ六巻が発売していないので、内容は今のところ7割くらいしか決まっていますが、タイトル通り赤セイバーがメインな回です。いえい。

まあ、今回はその前に番外編なわけですが。

ちなみに冒頭のグリム童話の引用は、まあ後編の展開と、そのグリム童話の内容かけて暗示しているわけなんです。勿論あのシーンのパロディですよ。

グリム童話はいいねえ。エロティックでグロくてエグイ話が大量で原点じゃ、白雪姫の母親は、娘の内臓とか取り出せって猟師に命じていたり、鹿の内臓とかを娘だと思って悦んで食うシーンがあったり、最後真つ赤に焼けた鉄の靴履かされて踊り狂わされて殺されていたりするもんねえ。シンデレラも、儘姉たちは硝子の靴はくために、指やかかと切り落としてたり、最後鳥達に目玉つつつかれて見るも悲惨、聞くも悲惨な末路に。とてもグリム童話は素晴らしいと思います。

では、のし。

## 番外編 ハサン先生のQ&A教室（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。今回は前回予告したとおり、番外編の「ハサン先生のQ&A教室」になります。番外編ということで、俺の描いたもんや作ったもんなどの挿絵がやたらと多い回なので、嫌いな人は挿絵機能オフにしてね

ハサンズは数が多いので、性格は適当に捏造してみた。100人もいりゃ、こんなやつ等もいるはずさ。では、GO.

番外編 八サン先生のQ&A教室

> i 2 4 6 7 7 — 3 0 3 2 <

アサシン1：ついに我らの天下が来たー！！

アサシン2：不遇なこの身も遂に主役か・・・感慨深いものがあるな。

アサシン3：うむうむ。あんな一行で消し去られるような退場をした時はどうしたものかと思いましたが。

女アサシン：何を騒いでいる。

アサシン2：む・・・？これは我らの代表扱いを受けている女アサシンじゃないか。

アサシン1：いやあ、とうとうここまで来たなーって話をしていただけですよ。

アサシン3：我らが主役を張るきっかけになった某お方には感謝しなければいけませんな。

アサシン2：謝辞は辞退されたけどな。

女アサシン：・・・いつまでくだらないことを言い続けているつもりだ。

アサシン2：それもそうか。

アサシン1：あー、このコーナーは、原作のFateでいうところの、タイガー道場の派生的なコーナーになってます。

アサシン3：まあ、バッドエンドの案内ではなく、我らが行うのは、主に「うっかり女エミヤさんの聖杯戦争」本編では語られることはないけれど、読者が気になるあんな疑問やこんな疑問に答えたり、ゲストキャラを招いて、これまでのことやこれからのことをちょこっと話し会っただけのコーナーですがの。

アサシン1：とりあえず、まずは、やっぱりQ&Aに答えちゃおう？

アサシン2：あ、女アサシン、司会進行頼む。

女アサシン：何故私が……。

アサシン1：我らの代表みたいなもんでしょ？ちゃちゃっと、皆さん頼みます。それに、なんだかんだ言っただけで、集合絵ではピースしてるし、本当はちょっと乗り気なんですよ？わかってますって。

アサシン2：こら、アサシン1、余計なことを言うんじゃない。

女アサシン：お前ら……あとで覚えておけよ。……ああ、最初の質問だ。お便りは、まし殿から。

『結果としてケイネスが今のところ生きていますが、このまま生き残るとウェイバーの将来が少し変わるのでしょうか』だそうだ。

アサシン3：ケイネス殿ですか……。

アサシン1：……あちゃー……しょっぱなから答えづらいのがきましたねー。

アサシン2：いつそ、ちゃっちゃと答えるほうが慈悲深いんじゃないか。

アサシン3：ケイネス殿ですが……残念ながら、そんなことにはなりません。ソラウ殿もケイネス殿も生きたまま帰還できませんでした。元々ケイネス殿の身体状態は原作 F a t e Z E R O よりもずっと酷い状態にありました。

アサシン1：そりゃもう、定期的にソラウ嬢の治療受けなきゃ駄目なくらいにね。

アサシン3：ところが、ソラウ殿は例によって記憶を奪われてケイネス殿の元に返却されたわけです。

アサシン1：元々ソラウってケイネスのことどうでもいいとか思ってるよね。

アサシン3：なので、ケイネス殿の元に帰されたソラウ嬢は、包帯ぐるぐるまみれの男ケイネスを見て、そのまま吃驚仰天して逃亡、まもなくケイネス殿は……その、非常に言いづらいのですが。

アサシン1：ぼっくりとご臨終してしまいましたとさ。

アサシン2：……わざわざ助かったと皆思ってただろうに、なんて酷い裏設定なんだ。

アサシン1：でも、ほら、ソラウ嬢は原作と違って助かってるんだし、惚れた女助けられただけケイネスは報われているんじゃない？

アサシン3：ソラウ嬢は、混乱したまま異国をうろつろする羽目になりますが、最終的に実家が迎えに来て無事に家に帰れるようですよ。

アサシン2：まあ、以上諸々から、ウェイバーの将来に変更なんかあるわけがない。だ、そうだ。

女アサシン：話は終わりか。じゃあ、次の質問だ。・・・とはいっても、これがラストの質問だ。質問者はぼく暴君殿から。

『アーチャーさんのスリーサイズ！』というとてもシンプルな質問だ。

アサシン2：アーチャーのスリーサイズね。一応、第四次聖杯戦争編第一話の「アーチャーの能力を確認しよう」でも乗っていた気はするけどな。

アサシン3：いやあ、良い身体していますからな。気になるのも仕方はないかと。

アサシン1：アーチャーのスリーサイズは、バスト93、ウエスト61、ヒップ91だ。

アサシン3：原作の第五次編ライダー以上のボンキュボン体型ですな。

アサシン2：ちなみに、E寄りのFカップらしい。・・・でかいな。



アサシン1：二次元のキャラにしては、ウエスト60cm台だから、一部の人には太いような錯覚あたえるかもしれないけど、元々リアル日本人女性の平均ウエストサイズは65cmだっていうし、アーチャーの場合、上背も半端なくあるから、総合的に考えると寧ろやや細すぎるくらいなんだよな。

アサシン2：作者は、乳ばーんで、尻のラインをむっちり描けたら満足らしいぜ。

アサシン3：それは素晴らしい。ではなく、けしからんですな。

女アサシン：あんたら、女である私がここにいることを忘れてはいないか？

アサシン3：まあまあ、お気になさらず。

アサシン2：とりあえず、Q&A部分に関しては以上だな。ここからは、これからの展開について、ネタバレしない程度にいくぜ。

アサシン1：とりあえず、次回の「暴君の矜持」については、赤セイバーが主役クラス級の扱いになる予定だってさー。

アサシン3：うむ・・・羨ましい。

アサシン2：俺らなんて、全然活躍する間もなく、ライダーの宝具でお陀仏だもんな。・・・世知辛い世の中だぜ。

アサシン1：だよな！？ひでーよ。こんなに沢山いてお得なサーヴァントもいないってのに。

女アサシン：そこが寧ろネックだったんじゃないのか・・・？

アサシン3：まあ、作者は元々、第四次編は急ぎ足で進めるつもりだったらしいですからなあ・・・これでも初期予定に比べると出番が増えたものです。

アサシン2：番外編とはいえ、ここでは主役だしな。

アサシン1：まあ、元々「うっかり女エミヤさんの聖杯戦争」は、主役であるTSアーチャーから、主軸をブラす気はねえって作者も公言してたから、出番ないのかもしれないがねえんだけどな！。

アサシン3：それでも、哀しいものは哀しいものです。

アサシン2：そういえば、第四次編で、第八話「慟哭」までの展開で、作者が最初っから書くと決めていたのって「切嗣がアーチャー召喚（女性化&うっかり付き）」、「最初に聖杯のことや正体がバレル」、「切嗣とアーチャー親子のすれ違い」、「ギルの聖遺物盗まれる」、「赤セイバーとイスカンドルが、アーチャーの料理食って宴会&メイド嫁闘争」、「子凛とアーチャーが会う」、「アイリが浚われる」ところで、切嗣が令呪使って、アーチャー泣き叫ぶ」で全部だったけ？

アサシン3：残りの展開は特に考えてなかったそうですから、全部辻褃合わせに繋いだ結果、こんな感じになったそうですな。

アサシン1：宴会の話といえば、赤セイバーが口まわりに食べかすを沢山くっつけて、アーチャーが呆れつつもハンカチでそれを綺麗に拭って、赤セイバーが胸どきゅん・・・なんてネタも書こうと思っただけ、初期からあったためたらしいけど、いざ書きはじめたら、

そのネタ挟む隙がなくなってた、とか言ってたっけ？

アサシン2：いくらお倉入りとはいえ、こんなところでバラすのもどうかと思う。

アサシン1：つか、最初の予定からして赤セイバーは優遇されているよな。ちえ、いいなあ。

アサシン3：我らも、少しくらいは優遇されてもバチはあたらんと思うのですが。

女アサシン：ここで主役もらっているだけまだマシだろう。

アサシン1：そういえば、キャスター主従とかあたりは、作者もお気に入り大好きらしいけど、奴らも俺らと同じくらい出番ないまま終わったよな。

アサシン3：まあ、主軸である女エミヤ殿とは全く絡んでいないので、致し方ないのですが・・・世知辛いものです。

アサシン2：アーチャーといえば、第五次編やるって公言している以上、なんらかの方法で生き残るんだろうが、全くの無事で生き残るってわけじゃないらしいぜ？

アサシン1：え？そんなことバラしていいのかよ？

アサシン2：まあ、それだけの情報でどういうオチにもっていくのかはわからんだろうから、いいんじゃないか？

アサシン3：女エミヤ殿といえば、第五次編では髪が伸びて、戦

闘コスチュームも変更されるそうです。

アサシン1：あー、言ってた言ってた。そんなこと言ってた。そういうえば、長髪バージョンの髪型で大分作者は悩んでたみたいだなあ。

アサシン2：最終的には結い髪メインにすることにしたらしいぜ？

アサシン1：みたいだなー。三つ網なんかも描いてみたが、あんましっくりこなかったらしいもんな。

アサシン3：おさげ・・・ですか。しかし、おさげの女エミヤ殿の笑顔はとても可愛らしい感じになっているようですが。

> i25000 | 3032 <

アサシン2：・・・かつぱらってきたのかよ。

アサシン1：いや、でもこれ、可愛くね？

アサシン3：UBWルートの最後の笑顔をベースに性転換したらこうなったそうですな。

女アサシン：もう、ぐだぐだとその話はこのあたりでいいだろう？そろそろゲストキャラが到着するはずだ。

アサシン3：む？もうそんな時間ですか？いやあ、時間が流れるのは早いものです。

アサシン2：で？最初のゲストは誰だっけ？

????：何故、俺はこんなところに……？

アサシン1：え……。

デイルムツド：アサシン集団！？どういうことだ。奴らは一番に散った筈。

アサシン1&2：なんだ、ランサーか（がっかり）

デイルムツド：なんだ……失礼なことを言われている気がするな。

女アサシン……ボツ／／（顔真っ赤）

アサシン1：あれ？リーダーどうしたの？

アサシン3：デイルムツド殿には『愛の黒子』がありますからなあ。魅了されたんでしょう。我らには耐魔力なんてありませんし。

アサシン2：くっ……リーダーを籠絡するなんて、なんて酷い男なんだ。

アサシン1：許せないっすよね！！

女アサシン：べ、別に籠絡なんてされてないんだからね／／良  
い男なんて思っていないんだから／／

アサシン1&2：リーダーがツンデレになつた〜!?

ディルムツド：ここは、漫才劇場なのか？

アサシン3：いえいえ、ここは我らアサシンこと、ハサンが経営するQ&A教室です。貴殿は第一回ゲストとして招待されたのですよ。

ディルムツド：何？そんなの初聞きだぞ。そもそもそんなものに参加するのなら、主の許可を・・・そういえば、主は・・・主はどこに？（きよろきよろ）

アサシン2：え？気付いてないのか？

アサシン3：貴殿は既に聖杯戦争に敗れている身です。お忘れですか。

ディルムツド：・・・思い出した。く・・・俺は何故・・・。

アサシン1：はいはい、こんなところで鬱るんじゃねえよ。つか、帰れ。イケメンなんてお呼びじゃねえんだよ。

アサシン2：大体悲劇のヒーロー気取りなところがむかつくんだよ。

ディルムツド：え・・・。

アサシン1：俺らの扱いよりはマシのくせになー、本当むかつくイケメン様だぜ。

アサシン2：俺らなんてな、一度も視点を合わされることもなく、

退場なんだよ。

アサシン1：お前はいいじゃねえか。同じ脇キャラでも、視点ス  
ポット最後にあてられまくりやがって。

アサシン2：おまけに、やっと俺らが主役だっというのに、こん  
なところにまでゲスト一人目としてきやがって。

アサシン1：帰れ、帰れ。

アサシン2：帰れ、帰れ！！

アサシン3：なんというフルボッコ・・・。

女アサシン：やめてー！あたいのために戦わないでく／／／

アサシン3：いや、誰も女アサシン殿の為に戦っているわけでは  
ないかと思われませんが・・・。

デイルムツド：（・・・俺とて帰れるものなら、帰りたい・・・）

アサシン3：こほん、気を取り直して。デイルムツド殿、7話で  
退場された御身ですが、今までの出番で思ったことなどはありませ  
んかな？

デイルムツド：・・・何故、俺はあんな結末になったのか・・・  
聞きたいのはそれだけだ。

アサシン2：そりゃしょうがない。

アサシン1：幸運Eの宿命ってやつだよ。諦めな。

アサシン3：同じ幸運Eでも、ジル殿は幸せそうでしたが。

アサシン2：や、あれは狂ってて幸せとか不幸とか超越したところにいたからしょうがないだろ。

ディルムツド：・・・（座に帰りたい）。

アサシン3：続いて・・・此度の主人公である女エミ・・・アーチャー殿のことについての印象をお聞きして終わりとなります。

ディルムツド：アーチャーか？何故俺に聞く。

アサシン3：そういう企画コンセプトですので。

ディルムツド：そうだな。油断がならない女だ、と思ったな。

アサシン2：それだけ？

女アサシン：やめてー。あたいの前で他の女の話なんてしないで  
ー／／。

アサシン2：リーダーはいい加減落ち着け。

アサシン1：眠り薬調合が得意なハサンはいませんか？

ディルムツド：質問には答えたぞ。

アサシン3：はい。本日はお越しいただきありがとうございます



た。帰り道はそちらになってます。ではどうぞ。

ディルムツド：ああ・・・。

アサシン2：ふう、漸く帰りやがったか。

アサシン1：ん？大変だ。リーダーがふらふらとあいつの後についていつてる。

アサシン2：ほつとけばいいんじゃないねえ？

アサシン3：まあ、女アサシン殿もそのうち戻ってくるでしょう。

アサシン2：で、次のゲストは誰だっけ？

アサシン3：ああ・・・次は・・・。

????：む？狭い場所じやの。

アサシン2：この声とでかい影は・・・。

アサシン1：え？マジか。

イスカンドル：なんだ？また、そち等か。

アサシン3：『穿いてない』王様、イスカンドル殿です。

アサシン2：俺等を殺した張本人を召喚するとは、作者相変わらず鬼畜だな。

アサシン1：まあ、ドSで結構とか公言している野郎の考えだもんな。

アサシン3：まあまあ、我等の事情は置いておいて。これまでの展開について、一言メッセージをいただけたらと思うのですが。

イスカンドル：むう？これはぬしら以外の人間も見ておるのか？

アサシン3：はい。ここでの会話は全て、これまで見てきた読者に公開される手筈となっております。

イスカンドル：王の言葉は万民に向けて発するもの。ならば、それには答えねばな。

アサシン1：で、どうなのよ、王様。

イスカンドル：そうだなあ・・・余の出番が少ない！！これは由々しき問題だぞ？

アサシン2：いや、出番が少ないってあーたー・・・。

アサシン1：俺等の出番の何倍あると思ってんだよ。

アサシン3：当初の予定ではもっと出番が少なかったらしいのに、気付いたら出番が凄く増えていたと作者は言っていたように思うのですが・・・。

イスカンドル：貴様らと余を一緒にするでない。余こそは征服王であるぞ。よって、スポットはもっと余にあてるべきだ。そうであらうか？

アサシン2：はは・・・。

アサシン1：いや、十分あたっているだろ、スポット。

アサシン3：まあまあ。それで、この話の主役であるアーチャー殿のことについて最後にお尋ねしたいのですが。

イスカンドル：それは、アーチャーの奴の何について答えろっちゅう問いだ？

アサシン3：そうですねー。メイドにほしい宣言の真意とか。

イスカンドル：決まっておる。それがアーチャーの奴の幸せというものよ。

アサシン1：え？メイドって幸せか？

イスカンドル：あやつは、戦いに身を投じておるが、気性といい、性格といい、争いを良しとするタイプではなからう。城で給仕に身をやつしているときのあやつは、それはもう楽しそうだったぞ？大體、あんな若い娘っ子が、いくら戦士の才覚があろうと戦場に身を投じるといのが気に入らん。余のメイドとして傍仕えるほうが余程幸せというものだろうて。

アサシン2：つまり、女はひっこんでろって？

イスカンドル：おうおう、そう受け取ってもらって結構だわい。

????：おーい、ライダー、オマエこんなところにいたのかよ。

イスカンドル：む？なんだ、坊主。貴様もきておったのか。

アサシン3：まあ、一応ゲスト扱いとして、道だけは開けておきましたからねえ。

ウェイバー：って、うわ、なんだよ！？アサシン集団！？オマエら消えたんじゃないのかよ。

アサシン2：見事に、あんたのサーヴァントの攻撃くらって死んだぜ？

アサシン3：ここはなんでもあり空間・・・みたいなものです。

アサシン1：ここでは、俺等が主役だからな。

ウェイバー：・・・はあ？

アサシン3：まあまあ、ウェイバー殿、ここでお目にかかれたのも何かの縁。一つ質問に答えては下さいませんか？

ウェイバー：質問？サーヴァントが何を聞くっていうんだよ。

アサシン3：アーチャー殿をどう思っているか、ですよ。それさえ答えてくださったら帰る道を開けさせていただきます。

ウェイバー：アーチャーのやつ？なんでまた、アーチャー限定なんだ？

アサシン2：本編の主役だからだよ。

ウェイバー：・・・変なサーヴァント。紅茶いれんのが上手いし、なんか援護してくれるし、敵なのに敵らしくないし。てか、なんで敵なのにボクの心配なんてしてんだよ。あいつ。女なのに、ボクより頭一個背が高いのがちよつとむかつくし、女なのに執事の格好が似合っているし、そもそもなんであいつ執事の格好してんだよ？とも思うし・・・女なのに男みたいな喋り方するし、でも料理上手いし・・・ああ、もう、変なサーヴァントだよ。アレは変！変すぎても意味がわからないんだよ！！以上！これでいいんだろ！？じゃあ、もうボクは帰るからな／＼（顔真っ赤）

アサシン１：おお、照れてる。照れてる。

イスカンドル：ほほう、坊主、もしや・・・。

ウェイバー：ああ、もう、何やってんだよ。ライダー。ほら、さつさといくぞ。

イスカンドル：うむうむ、ならば行くとするか。

アサシン１：じゃーなー。

アサシン３：ウェイバー殿、イスカンドル殿、有難うございました。

アサシン２：で、次はラストのゲストだっけ。

アサシン１：そろそろ到着するんだよな。

????：なんだ、またそなたらか。（嫌なものを見た顔）

アサシン2：と、思ってたら到着したみたいだぞ。

ネロ：それで？余は忙しい。用事があるのなら、さっさとすまぬか。

アサシン3：本日、ラストゲストの赤セイバー殿ですな。さて、時間も押していることだし、さくさく進めることにいたしますか。赤セイバー殿の、アーチャー殿に対するコメントをいただけないでしょうか？

ネロ：アーチャーに、と？しかし、ふむ・・・余のアーチャーに対する思いは次回「暴君の矜持」であらかた語る予定になっているゆえ、あまり喋りすぎるな、と作者に釘をさされておる身で・・・さて、どうしたものか。

アサシン1：あー。そういや、そんなことを言ってたっけ。

アサシン2：じゃあ、あれにいつちやおうぜ。

アサシン3：あれですな。これはQ&Aに寄せられた質問ではないのですが・・・、アーチャー殿が男にもど・・・なって熱上げるところが見たいって意見が以前きたことがあるのですが、そのあたりどうなのですか？アーチャー殿が男になったらどう思われます？

ネロ：アーチャーが、男に、と？

アサシン1：そうそう。

ネロ：アーチャーが、男にか。ふむ、きっと良い男になるである

う。まあ、何、余は男も女もいけるゆえな、仮に男になったとしても、なんの問題もない。ふふ、盛大に結婚式をあげて、花嫁として迎えてやろう。

アサシン1：あー・・・アーチャーが男でも、アーチャーが「花嫁」なんだ。

アサシン2：し、相手は元々の伝説からして、男を去勢して妻にしたなんて伝説持ちの相手だぜ、何言い出してもおかしくないって。

アサシン3：まあ、アーチャー殿の元の性別は男だとはいっても、この世界で赤セイバー殿と出会ったときには既に女性の身空でしたからな。人間は第一印象に左右される生き物ですから、今更男に戻っても女として認識してしまうのでしよう。

アサシン2：俺等人間じゃないけどな。

ネロ：ええい、何をこそこそ言っておる。

アサシン3：とりあえず、更に熱をあげる・・・とかはなく、性別が元通りになっても赤セイバー殿は何も変わらないでしょうな。

アサシン2：とりあえず、これからの展開について、ネタバレにならない程度にコメントよろしく頼みます。皇帝さん。

ネロ：む？これからの展開か？ふ・・・余の勇姿をとくと見るがよい！まあ、惚れてくれても構わぬぞ。（にやり）

アサシン1：うわあ、自信満々。

アサシン3：まあまあ、赤セイバー殿は元々第四次聖杯戦争編では、サブヒーロー的立場の構想でしたから。次回なんてほぼ主役回ですし。

アサシン1：うらやましいなあ。

アサシン3：では、赤セイバー殿、有難うございました。

~~~~~10分経過~~~~~

アサシン2：さて、そろそろお開きかね。

女アサシン：・・・ただいま帰った。

アサシン1：お、リーダーおつかえりく・・・って、何？そのネガの山。

女アサシン：これか？作者にどさりともたされてな。どうせ番外編なんだし、第四次聖杯戦争編が終わらない今のうちに公開してしまえ・・・とのことだ。

> i 2 5 1 0 0 | 3 0 3 2 <

> i 2 5 1 0 4 | 3 0 3 2 <

アサシン1：ちょw



アサシン3：おや、これは作者が、ZEROマテリアルで、子凜に萌えすぎてうっかり作った子凜人形写真シリーズですな。

アサシン2：人形本体はフェルトで、ツインテールは毛糸で作ったらしい。

アサシン1：なんて無駄な努力。

女アサシン：身長は20cmちょいだそうだ。靴は材料切れ&給料日前で金が切れ&気力切れで作らなかつたらしい。室内ということとで勘弁してほしいのだそうだ。

> i 2 5 1 0 2 — 3 0 3 2 <

女アサシン：あと、後ろ姿は大体こんなものらしい。

アサシン3：後姿が一番似ていますかな・・・。

アサシン2：スカートを厚手のフェルトで作ったら、あんま曲がってくれないとかって、写真とるときにはやいてやがったつけ。

アサシン1：型紙の描き方すら知らない、ミシンの使い方知らない身でよくやるぜ。

> i 2 5 1 0 6 — 3 0 3 2 <

アサシン3：こんなものも撮っていたみたいですよ。

アサシン2：テーマはパンチラ・・・って駄目じゃねえか、あの駄作者。

アサシン3：パンチラをとる為だけに、10分以上携帯片手に苦戦していたそうです。

アサシン2：益々、駄目じゃん！！

アサシン1：まあ、元々内臓とか完備した人形を作りたがるような作者だし、まだこれはマシなほうなんじゃねえの？少なくとも、内臓とか脳みそとかは作ってないんだし。

女アサシン：手足の爪を刺繍して作るくらいなら、もっと別のところに労力を裂くべきだと思うがな……。

アサシン1：その情熱の片鱗を俺等の出番に反映してくれたらなあー。

アサシン3：……耐えるのです。我等ハサンの時代もきつといずれは来るはずです……。

アサシン2：アサシン3、自分で言ってる虚しくないか？

アサシン3：……多少は。

アサシン1：そういえば、リーダー。そろそろ、終わりだけど、この企画って第二段とかの予定はないの？

女アサシン：そんなことは聞いていない。だが……。

アサシン2：だが？

女アサシン：おそらく、次があるとしても第五次聖杯戦争編だ。「ハサン」といつても、我等ではなくなっているだろうな。

アサシン1：あ……。

アサシン2：……あいつか。

アサシン3：……ふ……敗者はただ去るのみですかな。

アサシン2：……なんつうか、哀しいな。

アサシン1：うん。でもまあ、ここまでご覧いただきありがとうございます。次回はまた本編に戻るんでこれからもよろしく応援したってください。

女アサシン：……なんだ。いきなり作者みたいなことを言い出すとは。

アサシン1：いや、ほら、ここで行儀良くしたら、もしかしたら読者コメントで「もっとハサンさんたちの出番増やしてくださいw」なんて懇願がくるかもしれないじゃん？ちよっとは株を売らないと思うってな。

アサシン2：いや、そういう本音は伏せとけよ。

終わり。

**番外編 ハサン先生のQ&A教室（後書き）**

というわけで、番外編コーナーでした。

今回はまた、第四次聖杯戦争編に戻ります。

これでもろもろの疑問がとけていたら、幸いです。

第四次聖杯戦争編 09・暴君の矜持 前編（前書き）

やあ、お待たせいたしました。約二週間ぶりの本編の続きです。

今回も長いので前後編に別けさせていただきました。しかし、前後編にわけて思ったのだが、前編は結構地味な話になったなあと思います。・・・その分後編が派手だからいいか？

今回の話では、初めて赤セイバー視点が出てきます。今までも出番が多かった赤セイバーですが、この話でメインで書く決めていたので、今まで視点をわざとあわさずにここまで来た経緯があったりします。

ではごっつぞ。

正直な話をすれば、余は当初、言葉ほどアーチャーの奴を気に入っていたというわけではない。

容姿とて、整ってはおつても、取り立てて美人と呼ぶほどでもない、女らしからぬ長身に少しの妬みもある。なにより、そんなものより、戦いに水を差されたという事実が、不愉快さを覚える要因となつて、不機嫌な気持ちでその矢を放つてランサーとの死合いを止めた犯人を、さぞや無粋な輩であろうな、とそんな風に思つて、我らの前に降り立つのを見ていたのだ。

現れたのは現代衣装に身を包んだ、鋼のような目をした女戦士。それがランサーの美貌を前に、真つ赤になつてうるたえている姿が愉快で、先ほどの意趣返しも含めて可愛がつてやろう、と、まるで愛玩動物に対するかのように、そう思いついた、始めはそれだけだったのだ。

余と戦うほどの価値もないと、花は花らしく、大人しくしておればいいのだとそう思った。

なのに、余を狙う黒甲冑が現れた時、それにいの一番に気づいたのはアーチャーで、あまつさえ、余の申し出を拒絶しておきながら、アーチャーは黒甲冑から余を守るように前に出ていた。

衝撃だった。

余を庇うというのか？会ったばかりで、よくも知らないというのに？奏者の命があればいつでも敵対するであろう余を？

アレの存在に気付けなかった自分を恥じる気持ちもある、アーチャーを侮っていたことに対する自分の迂闊さを呪うような気持ちも少しはあるのだ。けれど・・・人に庇われるとは、なんとも嬉しいものよ。

舐められている、とかとも違う。アーチャーは驚くほど自然体で、

まるで当たり前のように余を庇っていた。その紅い背中が、まるで一振りの真つ直ぐな剣のように余の目には映った。

そう、それが余には、嬉しかったのだ。

最初の、アーチャーに対して抱いた不愉快な気持ちはただそれだけでさっぱり消えた。

そして、あの日、アーチャーの城で行われたあの宴、マスターを守り抜ければそれでいいと、今までついぞ見せなかつた柔らかな微笑みを湛えて、そんな言葉を吐いたその姿。邪気が欠片もないその姿は、まるで敬虔な聖者のようで、ただ、その笑顔を綺麗だと、コレはとても尊いものなのだと、そんな風に余が一方的に思ったただだ。

そうよの・・・それを余は、守りたい、と思ったということなのかもしれない。

のう、アーチャー。余は、己の民を愛していたぞ。民に糾弾され、死した身なれど、それでも余は民を守りたかつたし、愛おしかった。それもな、一つの事実なのだ。

そなたに対する想いも同じこと。

暴君と呼ばれて死んだ身空なれど、それでも、暴君には暴君の矜持<sup>イト</sup>がある。

『暴君の矜持』

「はあ、はあ・・・はあ」

肺の中が凍てつくように痛い。酸素が欠乏している、刻印蟲が体中の神経という神経を食い荒らす。

「はあ、はあ・・・はあ、は・・・は・・・はは」

ぐしゃりと、無様に転びながら、意味のない笑い声が自分の引き攣った口から漏れた。

ぐちゃぐちゃの思考、誰もいない無人の墓地。

あの時現れた大男、そして信じられないあの光景から、俺は逃げた。逃げ出した。

自分が何を見たのかさえ、今では曖昧で、ただ全てのものが、世界すら痛い。

バーサーカーの暴れる様に刻印蟲が悲鳴を上げる。もういい。供給を切つて、身体の疼きを治める。そんな俺の前に、そいつは現れた。

「まったく。随分なザマに成り果てたのう、雁夜よ」

ぞわりと、全身が総毛だつのがわかる。そこに現れたのは小柄な老魔術師の姿をした、醜悪な間桐の妄執だ。

「これだけの手傷を負って、よくもまあ、ここまで生き延びたものよ。既に三人のサーヴァントが果て、残るは四人。正直なところ、まさか貴様がここまで食い下がるとは予想しておらなんだ」

妖怪ジジイが何かを言ってる。

(煩い)

蟲たちがぎちぎちと飼い主の来訪を喜んで軋みをあげている。

(黙れ)

「改めてひとつ、掛け金を上乗せしてみるのも悪くない。雁夜よ、貴様にはワシがここの一番の局面に備えて秘蔵しておいた切り札を授けてやる。さあ・・・」

ぐい、と口を無理矢理開かされた。その口内にずるりと鼠のような俊敏なナニカが喉の奥へと飛び込んできた。

「が、ぐふうッ・・・ッ!？」



おぞましさと苦痛を湛えながら、それは腹の中にまで納まり、瞬間、焼き鏝を押し当てられたような灼熱が俺を襲った。

「ぐああああッ………がああッ!?」

あまりの熱さにのた打ち回る。夜の墓場の冷たさなど微塵も認識出来ない。これは圧縮された魔力の塊だ。其れが暴れる、活性化した刻印蟲が俺の身体を食い荒らす、歡喜の声を上げる。

「呵々々々ッ、覲面じゃのう。いま貴様に吞ませた淫虫はな、桜の純潔を最初に啜った一匹よ。どうだ雁夜よ?この一年、じつくりと喰らいに喰らった娘の精気……極上の魔力であろう?」

擦れる耳と思考の中拾い上げたその言葉に、桜のことを漸く思い出した。そうだ、あの子、桜、あの子だけは、サクラダケハ、俺が、助けなけれバ。

思い出せない痛みなんてどうでもいい。

それはきつと思いい出してはいけないことなのだから。

思いい出してしまったが最後、きつと俺はもう動けなくなる。

俺はそう、笑顔が消えたあの子だけでも、桜だけでも救出しなければいけないんだ。

だから、ダカラ、俺はオレハ聖杯を掴マナケレバ。

聖杯を、モライにいこう。あの神父はヤクソクした。でも、今は、今だけは……。

ずずつと、鼻を嚼る。夜の墓地で、魔力の熱にうなされながら、俺はただ嘔み殺すように咽び泣いた。

side・ライダー

「むっ!?」

キュプリオトの剣が虚空を切る。先ほどまで猛々しく、奇妙な現代兵器を振り回しながら暴れまわっていた黒い甲冑の輩は、跡形も

なく、姿を消した。

「何が、どうなったんだよ!？」

敵の弾丸が届かぬよう、離れたところで様子を見ていた、余のマスターたる坊主は、おっかな吃驚そんなことを尋ねる。

「霊体化して逃げられた、というところだろう」

言いながら、検めて余は惨状を見回した。

そこには首のない男の死体が一つと、そして・・・先ほどまで生きていた女の死体が一つ、寄り添うように横たわっていた。あの、黒甲冑のマスターらしき男は、女の生死も確認せずに出て行ったが、男が出て行った時点ではまだ、女は生きていた。その息の根を止めたのは、黒甲冑が放った短機関銃サブマシンガンによる流れ矢であった。

崩れ落ちる女の顔を見ていた時の、あの錯乱した相貌を思い出す。おそらく、このどの誰とも知らぬ哀れな女と顔見知りであったであろうあの男。その、知り合いの息の根を止めたのは、自身のサーヴァントであったのだ。其れを知らずに去ったことは不幸なのか幸いなのか。

ただ・・・余が思うには。

(気に食わん)

それだけだ。あの、黒甲冑、あれは余が叩く。

「坊主、一旦帰るぞ」

「はあ? 追うんじゃないのかよ」

「これは余の勘だが・・・これが最後の戦場となろう。マッケンジ―夫妻に別れを済ませてやれ」

side・エミヤ

其れは、話せば話すほど馬鹿な男だった。

聖杯戦争も終盤に当たる現在、聖杯アイリが連れ去られた今、本当は一刻の猶予もないのだろう。

こうしている今も、聖杯戦争は続いている。されど、その状況だからこそ、オレも、切嗣じいさんも話をするを選んだ。

アイリが連れ去られた家で、一晩中互いに話し続けた。

お互いに馬鹿だと言いつつ、取りとめのない話から、果ては切嗣が私の記憶を見ていたということまで。

血が繋がっていなくても、やはりエミヤわたしと衛宮切嗣は父子だった。互いに互いを崇高なものだと、そんな風に見間違えて、空回りして、遠回りして、二人とも揃ってどうしようもなく大莫迦者だった。朝日が昇る、その様を二人で並んで見上げた。今日こそが最終決戦の日なのだと、どちらが言うこともなく理解している。

朝焼けに染まる、その横顔を眺める。目元には薄い隈が出来ている。おそらくは、二日は眠っていないはずだ。

「切嗣マスター」

「何だい」

自分に視線をむけられる、その顔は幼少期に見ていた切嗣の表情によく似ている。魔術師ではなく、一人の人間として、切嗣は私に接していた。それに嬉しいような、サーヴァントとしてはあまり喜ばしくはないことのような複雑な心境になる。でもそういう弱さを含めての衛宮切嗣なのだろう。

「少しいい。睡眠はとるべきだ。あまり寝てはいないだろう。寝れるときに寝るのも戦の定石だ。そんなこと貴方はわかっている筈だが」

「でもね・・・」

「まだその時ではない。大丈夫だ、私がついている」

渋る様子にそういうと、切嗣は、「じゃあ、五分だけ頼むよ」とそう告げて、身体を横たえた。

「了解した」

そして眠りにつくその顔を見る。

やはりというべきか、当たり前だというべきなのか、その顔は自分もよく知る「衛宮切嗣」そのものだった。生前噂で散々聞いてきた「魔術師殺し」などどこにもない。

昨日の話し合いの内容を思い出す。

私も、切嗣もアイリスフィールの生存についてはもう諦めた。元より、そういう風に造られた存在であり、イリヤと違って完璧なホムクルスである彼女が、この第四次聖杯戦争が終わったあとも生きているなど始めから思ってたなどいかなかったのだ。だから、彼女の探索はもう行わない。

今回の聖杯の光臨場所は既にわかっている。おそらく、今回も其処に配置されるだろう。それを先回りして乗り込んでいれば或いは道が拓けるのではないか。だが、それがどういいう結果をもたらすのかは不明だ。今回の聖杯戦争は、私の知る歴史とは違うものなのだから・・・だから、万が一の可能性も考えて、他の聖地・・・遠坂邸と教会には使い魔を、一番の霊地である円蔵山には久宇舞弥が向かい、待機することになっている。

ふと、自分が衛宮士郎とよばれていた時に言った言葉を思い出す。私が昔のことで覚えていることは数少ないけれど、こんな風に類似状況に会えばふいに思い出すこともある。かつての自身が参加した第五次聖杯戦争で、聖杯である大災害をなかつたことにしないかとそう問われて、私は「やり直しなど望まない。そんなおかしな願いはもてない」とそんなようなことを言った。そんな私が自分殺しを望んで聖杯に召喚される死後を送るなど、まあ皮肉な話だが。

今私は衛宮切嗣へんぐうに召喚されて此処に・・・衛宮士郎が誕生する以前の過去にいる。そしてそれに当事者として関わっている。これは、やり直しになるのだろうか。

いや、答えは否だ。私の知る歴史では、爺さんに召喚されるのはアルトリアでなくてはならず、英霊エミヤがアーチャーとして此処に召喚されるのも有り得るはずがないからだ。何故なら前提が間違えている。ギルガメツシュもおらず、あの赤いドレスのセイバーが

いるこの世界は、確実に私には繋がらない世界だ。だから、私が何をやるうと私の世界の歴史と同じになることはないだろうし、私がどういう行動をとったところで、それは「過去の改竄」にはなりえない。並行世界とは、つまりそういうものだ。

ならば、答えを得た英霊やわしエミヤのとする行動など決まっている。何をやったところで過去の改竄にならない別世界であるなら、一人でも多くのものが助かる道を模索し、それを果たす。それが正義の味方というものだろう。

そんなことを考えていると、目の前の男がぱちりと、その黒い眼を開く。五分など瞬きに等しい時間というものだろう。

「さて、行こうか」

僅かに、少し無理をしたきこちない笑顔を浮かべた男は、そんな言葉を言いながら、右手を私のほうへと差し出した。

「その前に、やるべきことがあるだろう」

私がそういうと、切嗣は、少し嫌そうに眉根を寄せる。

「どうしても・・・かい？」

「先日の令呪の件でなんでも私の言うことを一つ聞くと、そう言ったのは貴方だ」

「でもね・・・」

「爺さん」

までも洩る男に私は嘆息を一つ、言い聞かせるような声で言葉を続けた。

「オレを信じろよ・・・私は、貴方の子供だ。そうだろう？なら、何も心配などいらぬさ」

言いながら、笑った。切嗣は瞠目に目を見開く。そういえば、この切嗣に自分が貴方の子供であるなんて言葉を使うのは、召喚された日以来だったな。そう意識すると、急に頬の周りに熱を持ちだしたような熱さを覚え、羞恥に赤らんでいくのを感じた。なんだこれは、我ながらこの年でこれは恥ずかしいぞ・・・英霊に年は関係

ないかもしれないが。ああ、上手く言えんが・・・何か、これは照れくさいものだな。

「そっか。なら、しょうがない」

そう言つて、切嗣も笑つた。困つたような、少しの悲しみをない混ぜた笑みだつた。

自分の中に通っているラインが、熱を持つ。

「令呪でもって命じる」

side・セイバー

醜悪だ。目の前の男は何よりも醜悪なもので出来ている。

薄汚い地下空洞で、余はただ、目の前で起こる其れを見ていた。

(おぞましい)

アーチャーのマスターの女だと、そう認識していた女が、この悪臭と妄念が籠る貯水槽に描かれた魔方陣の上で仰臥し、望まず新しい奏者マスターとなつた男に、呪いの声を吐いている。

(醜い)

聖職者の仮面をかぶりながら、師を裏切り、他人を陥れるばかりのこんな男が余の奏者であるなど、悪い冗談としか思えない。だが、あやつが下した令呪の命は確実に余の身体を縛り、認めたくなくとも認めずにはいられない。この屈辱、それすら酒の肴にするこの男ほどの悪党も、そうはおらぬだろうぞ。

屈辱と嫌悪、凡そマスターたるべき存在に向けるべきではない感情を向けられようと、あの男は逆に心地よさそうにするだけだ。それがわかつていても、憎まずにはいられようか。

そして幾許かの問答のあと、余の新しき奏者、黒衣の大男、言峰綺礼はその女の命を奪つた。

思わず、目を逸らす。其れがせめてもの慈悲だった。アーチャーはきつと、この女の死を悲しむだろう。それに遣る瀬無い気持ちもある。

「セイバー」

男の声が余のクラス名を呼ぶ。それすら耐え難いほど不愉快だ。

「私は聖杯を降臨させる準備に取り掛かる。近づくものは、衛宮切嗣を除いて全て始末しろ」

「.....」

貴様が、降ろすというのか。貴様のような害悪が。

「どうした？それとも、令呪で命じられなければ動けないという気か？」

男が薄っすらと笑う。おぞましい。こんなものが聖杯に選ばれないか。と？世の中とはとことん狂ったものと、そう言うしかないではないか。

「セイバー」

「わかっておる」

感情のない声が出る。その声で、吐き捨てるように続けた。

「余は貴様に近づく輩を足止めすればいいのだろう」

side・ウェイバー

ボクは馬鹿だ。

あの後、深夜に、寄生しているマッケンジー夫妻の家に戻ると、夫妻は当たり前のようにやはり自分を迎えてくれた。暗示で孫と思っ込んでいるのだ、当然だとボクは思った。そんな中、明け方に、家の主であるグレン老に「一緒に屋根の上で星を見よう」そういわれて、ライダーに背中を押されたのもあり、一緒に並んで座った。

その時知った衝撃の事実。

グレン老は自分が「孫」なんかではないことに気付いていた。暗示なんて、魔術の初歩の初歩だ。それが一般人の、自分から「騙してくれ」と言い出してくるようなお人よしの老人にすら破られるような出来でしかなかった。

時計台にいた頃、ボクには才能があると思っていた。そう、自惚れていた。だけど、結果は・・・はは、なんだ、ボクは道化なんじゃないか。

「さて、坊主行くか」

すつと、隣に立つ大男を見上げる。この十日余りの日々をチャリオットと共に過ごしてきた、古代の征服王。本物の英雄。いつも通り、戦車の身車台の横を、自分の為に開けている。だけど、ボクは苦笑しながら、その申し出にかぶりを振った。

イスカンドルの為のその豪華な騎乗宝具は、凡俗で卑小な自分にはふさわしくない。

征服王の覇道の道を穢していいわけがない。負け犬には負け犬なりのプライドがある。

「我がサーヴァントよ、ウェイバー・ベルベットが令呪をもって命ずる」

ライダーが僅かに目を瞬く様子を出るだけ見ないように、右手の令呪に集中した。

「ライダーよ、必ずや、最後までオマエが勝ち抜け」

元より相手は征服王なのだ、それは当たり前前の約定。

「重ねて令呪をもって命ずる。・・・ライダーよ、必ずやオマエが聖杯を掴め」

消えていく二画目の令呪に、未練が心を過ぎる。それを無視して三度目の命令を下す。

「さらに重ねて、令呪で命ずる」

自分は彼のマスターだった。それを最後の意地として、怯むことなく彼と対峙していたい。だから、真っ直ぐにその大きすぎる男を



見上げた。

「ライダーよ、必ずや世界を掴め。失敗なんて許さない」

これで名実共に自分はライダーのマスターではなくなった。けれど、妙に清々しい気持ちで正面に立つ男を見た。

「……さあ、これでボクはもう、オマエのマスターでも何でもない。さあ、もう行けよ。どこへなりとも行っちまえ。オマエなんか、もう……」

うむ、と頷く声が出た。それでほっとして、肩の力を抜いたその時、ライダーはいつものいかつい手でボクの首根っこを掴んで、身車台の横へと押し込んだ。

「もちろん、すぐにも征かせてもらうが。……あれだけ口喧しく命じた以上は、もちろん貴様も見届ける覚悟であろう？すべての命令が遂げられるまでを」

え、と口が勝手に開く。何を言ってるんだ、こいつは。だってボクは……。

「ば、ば、馬鹿バカ馬鹿ッ！あ、あのなあ、おいこらッ、令呪なんだぞ！マスター辞めたんだぞ！何でまだボクを連れて行く！？ボクは……」

連れて行くような価値なんてないだろう、そう続ける前に言葉は遮られた。

「マスターじゃないにせよ、余の朋友<sup>とも</sup>であることに違いはあるまい」  
うるたえ、狼狽するボクを前に、その男は至極当然といった口調で、呑気な笑顔を浮かべながら、そんなことを言った。

（あ、駄目だ）

涙腺が崩壊する。鼻水が混じってぐちゃぐちゃだ。誰に言われるでもなく、自分が酷い顔で泣き崩れていることがわかる。でも止められそうにもない。嗚咽交じりの酷い声で、それでも聞きたい言葉を問いかけた。

「……ボク……ボクが……ボク……ボクなんか、で……  
……本当に、いいのか……オマエなんかの隣で、ボクが……」

「あれだけ余と共に戦場に臨んでおきながら、今さら何を言うのだ。馬鹿者」

そんなボクの言葉を笑い飛ばしながら、イスカンドルは、ボクの肩をバンバンと叩いた。

「貴様は今日まで、余と同じ敵に立ち向かってきた男ではないか。ならば、とも朋友だ。胸を張って堂々と余に比肩せよ」

「……………」

この日のことを、ボクはきつと一生忘れないだろう。目の前にあるのは、夜の冬木市の街並み。第四次聖杯戦争最後の夜が始まったんだ。敗北も恥辱もない。今、自分は王と共にある。この男さえ信じていれば、きつとこの頼りない足でだって世界に届くだろう。

side・間桐雁夜

聖杯八どこにあるノだろう。

まどろみから目が覚める。あたりは暗闇。

冬木の街に、聖杯を降ろす聖地は4つある。アの神父は聖杯を俺に譲るといつていた。

急がなければイケない。蟲に喰われル前に、終わらせなければいけない。

ふらふらと、身体が動く。この冬木デ一番の霊地は……円蔵山ソウダ、きつとお山だ。そこに違いナい。ふらふら、ふらふらと山を登る。何かの嗤い声ガする。何の音だろう。いや、今俺八視得ているのだろうカ？

(思考停止)

人はイナい。いつから？確か僧侶たちがイタはずだったのに。で

も、いないならそのほうが都合がイイ。どうでもイイ。聖杯は、どこダ。

「神父・・・いないのか」

はずした、のか？

その時、雷鳴が響いた。ぱつと、空を見上げる。

「さて、賊よ。昨日ぶりだのお。今度は逃げんのか？」

いたのは天駆ける戦車にのった大男。そうダ、あれはサーヴァントだ。

迸る怨念に眼を吊り上げる。サーヴァントはすべて滅しなれば。あれが、どれほどの英霊力などどうでもイイ。今の俺は、力が漲ってイる。

「まあ、どちらにせよ、逃がす気もないがな」

大男がナニか言っている。アレを見てイると気分が悪くなる。思いついてはいけないことを思い出しそうになる。頭がガンガンと響く。すつと、引き攣った右手を掲げル。

「殺せ」

怨念、憎悪、それが原動力になって、自身の従者にラインを通じ流れていく。

「殺し潰せッ！バーサーカーッ！！」

黒い甲冑の狂戦士が、声ならぬ叫びを上げながら、赤毛の大王へと斬りかかった。

side・衛宮切嗣

冬木氏市民会館。それが今回の聖杯降臨の舞台の名だ。十中八九此処がその舞台になる。

だから、昼間からこの場所に潜伏し、数々のトラップを仕掛けた。

とはいっても、ここはあまりに防御に向かない土地だ。仕掛けたトラップは全てあの神父を倒す為の迎撃用の装置だ。夜半が近づく。朝、アーチャーが用意した一口サイズのサンドイッチを口に収める。『切嗣』

無線から、右腕である女の冷徹な声が響く。

「どうした、舞弥」

『サーヴァントの戦闘が始まりました。相手はバーサーカーとライダーです。今のところ私に気付いている様子はありますが、どうしますか』

少し思考の波に落ちる。

「様子を見ていてくれ。自分の命を最優先に、介入できそうなら介入してくれ。そこは君の判断に任せる」

『了解しました』

その時、トラップが人を来た事を告げて、即座に意識を切り替える。

コツコツと、靴音を鳴らしながら現れたのは、教会の代行者、言峰綺礼。

間違はなくこの戦いでもっとも危険であろう男。その腕には、アイリの死んだ身体を抱えている。

「・・・ツ」

「驚いたな」

地下で刃と刃が衝突する音が響いている。ラインからも、戦闘中である気配が流れ込んでくる。

「よく、私が此処を選ぶとわかったものだ」

どさりと、綺礼は、物のように、アイリスフィールだった身体を背後に投げた。其れを合図に、僕は9mm軍用弾パラベラムによる一撃を放った。

あの時から、こうなるとそう思っていた。

地下駐車場に向かう我らを、閃光のような矢が狙い打つ。見るのが初めてであればおそらく対処は出来なかったであろう、それほど技巧を秘めた攻撃であった。それを、余の愛剣で撃ち落していく。

「セイバー」

「.....」

「アーチャーの相手をしろ」

言いながら、僧衣の男は一人階段を上ってその地に・・・おそろくは言っていた、衛宮切嗣とかいう男の元へと向かう。

狭い地下空間での弓の不利を悟っているのだらう、余がどこにその姿を潜めているのか中りをつめると同時に、アーチャーは、いつかも見た黒と白の双剣を手に、余の前へと躍り出た。

「久しいのう、アーチャー」

「まだ、四日ほどしか経っていないと思うがね」

「そうであったか？余にはもっと、永く感じたぞ」

ふと、アーチャーが戦闘中に被る鉄面皮を曇らせる。眉根を寄せ、何事かを考えたかと思えば、すぐに「ああ」となにやら納得して、再び剣を構えた。

「君もついていないな」

余の本来のマスターのことについては、アーチャーは知らないはずだ。表に最後まで出ようとしなかった男であった、知りよう筈もない。だけど、その言葉だけで、アーチャーは全てを知っているのだと。そんな風に感じた。

「全くよ。のう、アーチャー・・・剣を収める気はないか？そなたが手を出さぬというのなら、余とてそなたを手にはかけはしない」

「愚問だな」

アーチャーはまっすぐな声で、口元に笑みさえ浮かべて言った。

「私の望みはマスターを無事に守り抜くこと。ならば、マスターの障害である君を前に、おめおめ逃げ帰るはずがなかるう？」

その言葉に、衛宮切嗣とかいう男こそがアーチャーの本当のマスターなのだと気付く。かつて、アーチャーが「守り抜いて家族の元に帰す」と言った男。余の今の奏者<sup>マスター</sup>は、一応とはいえあの男、言峰綺礼だ。あの男の目的が衛宮切嗣である限り、あの男のサーヴァントである余が障害であるのは、成程道理であつたか。

目の前の長身白髪の女弓兵を見上げる。

其処にいたのは、忙しなく給仕に励んでいた娘でも、敬虔な聖者の如き微笑みを讃えた女でもなく、主君の為の一振りの剣だった。

「そうか」

その姿を、ただ欲しいのだと、そう思った。

かつて、「聖杯に願うような望みなどない」と言つたその口で、余を欲しいと言わしてみせるとそう思ったときもあつた。でも、今はその剣を思わせる生き様諸共に、この紅い女戦士の全てが欲しい。器量は、整つてはおつても十人並みだ。美しいとは呼べぬ。されど、その鋼の一振りの剣のような鋼鉄の意志と心根は、充分に魅力的で、紅玉よりも尚美しい。

ああ、アレが欲しい。

(けれど、今の余は・・・)

自分の今の境遇に自嘲がもれる。

アーチャーに対して抱いた欲望も、憧憬も、それが果たされることはない。ならば、この闘争に全てを賭けようぞ。

「覚悟、せいよ」

そして、アーチャーと余が斬り込んだのは、ほぼ同時だった。

後編へ続く。

第四次聖杯戦争編 09・暴君の矜持 前編（後書き）

というわけで、後編に続く。

後編はマジで赤セイバーが主役的な感じになってきます。お楽しみに？

第四次聖杯戦争編 09・暴君の矜持 後編（前書き）

ばんははろ、E K A W A R Iです。お待たせしました、暴君の矜持後半です。

やっと二話の伏線を回収できました。ここまで長かったなあという気がします。  
ではどうぞ。

P S 挿絵があるので嫌いな人はオフにしてね。



side・エミヤ

その剣技は、どこか暴風に似ていた。

少女が、歪な形の赤き大剣を振るえば、唸りを上げてコンクリートが抉れる。かわし切れない飛礫を無視して、私は確実に致命傷になろう技だけをいなし、避けながら、鷹の目のスキルと千里眼を十全に發揮して機を伺う。

「はあああッ！」

気合の声を上げて躍り掛かる少女。ひらひらと、揺れるドレスがまるで花が舞うようなのは、以前も見た通りなのに、確実に以前とは異なっていた。

楽しげに笑みさえ浮かべていた顔に浮かべるは焦燥、剣も粗く、少女の拘りであっただろう雅さが欠けている。それでも、少女の細腕で扱う代物としてあまりに異形な大剣による一撃は、一つ一つが致命傷であることは明白だ。たとえ、剣筋がいつもよりも荒れていようと、油断が出来る相手ではないことは確かだろう。だが、当初の想像以上に私が負う傷は少ない。

剣使いの英霊を相手に弓使いが剣で競って勝てるわけがない。それが聖杯戦争の常識だ。なのに、ここまで傷が少ないのは、私の実力と言うよりも、セイバーの側に問題があるからだ。

セイバーは、この赤いドレスの少女は、私に致命傷を与えようとする時、おそらくは本人にも自覚がないのであるほどの数瞬、動きを鈍らせる。私はその攻撃に対処するには十分な隙だ。とはいえ、腐っても相手は剣の英霊。反撃するほどの隙は流石に貰えてはいない。

ゆえに、戦況は膠着する。

ギン、と幾度目か、私の手から干将莫耶が弾き飛ばされる。其れを見ながら、少女は感情を押し消した目でぼつりと言った。

「そなたは、まこと不思議よな」

「.....」

言葉を交わしながらも、少女は剣を振るうのはやめない。

「性格は凡そ戦場には向いておらんだろうに、誰よりも戦士だ」  
ヒュツと、風を切って赤き大剣が私の顔の横に向かう。

(!?)

殺意が欠片も滲んでいない、あてるつもりで放った攻撃ではなかったが故の、少しの油断。少女の歪な形の大剣の調度腕が入るほどの凹みに首を捉えられ、後ろの壁へとそのまま縫いとめられる。首の左側は少女の剣、右側は少女の左手が、逃がさないとも言いた気に困んだ。

「剣才も容姿も凡百なのに、それでもそなたは誰より美しい。ふふ、何故今の我が身はサーヴァントなのであろうな・・・」

もしも、生身であれば、このままそなたを浚って逃げられるのに、蚊の鳴くような声で、この赤いドレスの少女はそんな言葉を続けた。

「君は、何を言ってる？」

「そうよの・・・恨み言・・・いや、ただの独り言よ」

乾いた声で少女は笑った。

「私から見たら、君のほうが余程不思議だ」

言いながら、少女の腹部に右足を打ち込み、怯んだ隙に逃れ、距離を再びとった。

「アレがマスターとは、同情はするがね、それでも我らはサーヴァントだ。ならば、やることは一つだけだろう？」

待ち望んでいた男との対峙に、我が胸が狂喜に震える。

苦もなく、銃撃をかわし、黒鍵を二本、目の前の男に向かって放つ。

「Time alter...double accel! (固有時制御、二倍速)」

突如として男の動きは明らかに不自然なほど早まり、私が放った黒鍵を銃弾で叩き落す。その隙に衛宮切嗣に接近しようとする私の足元で爆破が起こる。それに対処しようとする隙を狙って再び男の銃弾が火を噴く。仕方無しに後ろに僅か下がって手にもった黒鍵を刀身を倍化させて、銃弾を凌いだ。

またも、トラップ。私の身体を拘束しようとする魔術を力技で破る。9mm弾の雨が怒涛のように押し寄せる。両腕でそれをガードして、今度こそ切嗣に迫ろうとする、連続で様々なトラップがこの身を阻む。近づかれたら終わりだと知っているのだから男は、徹底的に自分を引き寄せようとはしなかった。

(解せんな)

まるで、衛宮切嗣は私の戦い方を知っているかのようだ。これが初の接触であるにも関わらず。頭の中で変わらず、男なのか女なのかすらわからぬ声の主が何かを囁いている。だが、それに耳を傾けるほどの余裕はここではない。

男のコンテナーが唸りを上げて30・06弾を私に向かって吐き出す。それを予備令呪2個分の魔力を使って右手でもって打ち払う。流石に令呪をつかったとはいえ無理をしたか、右手は激痛と夥しい血が滴っている。だが、それは些細なことだ。コンテナーで再び攻撃しようとするれば、装填する時間がある。

ぐん、と踏み込み接近する。足元で爆破がおきるが、先ほど威力は見て取った。構わない、そのまま走り続ける。ぎよっと、男が先

ほども唱えた呪文を使い、私から距離を離そうとする。

させるわけがない。

「そつだ、それでいい」

何かが笑う。八極拳が最大の効果を発揮する間合い、踏み込んだ震脚で男に必殺の一撃を・・・放ったはずだった。

「全く、本当に人間とは思えないな、貴様は」

短く切られた白髪、皮肉気に吊り上げられた口元から流れる一滴の血、私の一撃を喰らって輝が入っている黒い鎧に、紅い外套。今までいなかったはずの存在がそこにいた。

## side・エミヤ

今日の朝、切嗣は二度目の令呪を使った。

若かりし頃の言峰がどれほどのものかは知らない。だが、あの男の現役時代というだけで、どれほど危険かは考えずともわかるだろう。

それに加えて、私の知る歴史では爺さんはアヴァロンをもっていた上で、セイバーを召喚したわけだから、詳細は知らないが、アヴァロンの加護を得て戦っていたから勝ったという可能性が高い。だが、今回よばれた爺さんのサーヴァントは私だ。いくら、アヴァロンが此処にあると、鞘が持ち主の魔力も無しに発動しようはずがない。それだけで私の知る歴史よりも大分不利だろうことは想像に難くはなかった。

だからこそその令呪。

「次回サーヴァントの真名を呼んだ時、如何なる状況でもマスターの眼前に必ず召喚される」

それが今朝に使った切嗣の令呪の内容だった。

令呪は曖昧なものには利きが弱いが、はっきりした内容には強い。その特性を踏まえて、「次回」といつなのかを限定させた。

それならそのときに令呪を使って呼べばいいというふうに思えるかもしれないが、切嗣の場合、アイリが浚われた時の前科がある。最後まで私をよばずにいる可能性がある為、事前に仕込んでおけば否が応でも使わねばならないことを意識するだろうし、土壇場で令呪など使ってしまったら、令呪を使ったということが目の前の男に直前で気付かれ、不意がつけなくなる可能性がある。だからこそ、事前の令呪だった。

そしてその思惑は成功した。

腹部に受けた攻撃は、人間のものとは思えないほど重かった。だが、魔力さえあればサーヴァントの傷など回復するし、10年間アヴァロンと共にあったためか、私の傷の回復は人一倍早い。驚き硬直している男の隙をついて、お返しとばかりに今度は私がその腹部に有りつ丈の力をこめて蹴っ飛ばした。

強化してあるのか、サーヴァントの一撃を受けても腹に穴一つ開くこともなく、男は頭を守りながらも派手に転がっていった。

「切嗣無事マスターでなによりだ、ひやひやしたぞ」

「本当は僕一人でなんとかする気だったんだけどね」

「やはりか。そう言うと思ったよ」

むっすりと、不機嫌な顔を隠そうともせずに戻すと、わずかに苦笑するような響きが聞こえる。私は、ぐいと、口元から流れる血を拭くと愛用の弓を構え、矢を番えた。

(参ったな)

ダメージは、想像以上に酷い。体の中身をぐちゃぐちゃにされたような感じがしている。本当にあの男は人間なのか。これを切嗣が受けたら、アヴァロンの加護がないんだ、おそらく即死だっただろう。万が一に備えていてよかったと思う。

矢を放つ際に腹部が軋んだ。そんな自身の状態に構わず、反撃を与えないように矢を連続で放った。セイバーをよばれたらどうしようもない。

おそらくは、令呪を奪ってマスター権を得たのであろうが、確か彼女への令呪は、最初の戦いのときに一回、あのセイバーにマスター換えを了解させるのに一回使っているはずだ。ならば、残る令呪は一度、それを使って呼んだ場合、自分が殺される可能性のほうが高いだろうことは理解しているだろうから、やるとも思えないが、楽観視するわけにもいかない。

煙が晴れる、そこには倍化させた黒鍵を携えて、なんでもないかのような姿で立ち上がる神父の姿があった。

(化け物か・・・!)

「全く、セイバーの奴も役に立たんな。足止めもまともに出来ぬとは」

言峰が腕を掲げる。

「ッ！」

その腕には、びっしりと令呪が浮かんでいた。

(この男・・・そういうことか)

緊張が走る。その中にも走る異常の空気。それは言峰ではなく、その背後で。はっと、目を見開いた。

『マスター！あそこに何がある!?!』

『そうか、あそこはアイリの・・・』

「貴様がサーヴァントに頼るといふのなら、こちらも相応に・・・!?!」

どろりと、突如膨らんだ黒い泥が、言峰綺礼を襲い、飲み込んだ。

その戦いをボクは最初から最後まで見ていた。  
異国の境内は、ライダーによる固有結界『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』によって塗り替えられる。

砂煙を上げて、一騎当千の兵達が、ただ一人の男にのみ群がる。

「蹂躪せよ！」

「A A A A L a L a L a L a i e ! !」

王の命を受けた男達は、雄叫びを上げて返事と返し、各々の武器を手に、黒い甲冑へと斬りかかる、それを黒い甲冑の男は逆に斬り伏せていつていた。

（なんて、やつだよ）

千を数える敵を前にしても、狂戦士の武勇に比類なし。狂ってもうマトモな判断力すらないというのに、男は敵の武装を奪い、蹴散らし、同士討ちまでさせ、縦横無尽に戦場を駆け抜ける。

「ッ！」

声にならない唸り、怨嗟の声を上げて男は、愛馬ブケファラスに乗っているライダーに向かって剣を手に躍り掛かる。

「むうっ!？」

手綱を引き、キュプリオトの剣を手に男の攻撃を受け止めるライダー。細身の黒甲冑の一撃は体格の印象以上に重いのだろう。ライダーの足元が陥没する。王の危機に駆けつけた兵士達が、左右からバーサーカーへと追撃にかかる。黒き狂戦士は、しなやかで空気を抵抗すらないかのような動きで後ろへと跳躍、そこに群がる兵士どもを切り伏せていく。どれほどの兵士が屠られたのか、幻想を保てなくなってきた大地がぐにやりと曲がる。

「坊主」

いつの間に行ったのか、ライダーが、愛馬からボクがいる戦車の御車台のところへと戻ってきていた。そのまま、ゴルディアス・ホイールどかりと神威の車輪へと座り込む。

「ひとつ訊いておかねばならないことがあった」

「え……?」

いつも朗らかな笑みを浮かべている古の征服王の目は、真剣だった。すっと、目の前の敵から目を逸らさずに真っ直ぐ見ている。自分の配下が黒甲冑に逆に蹂躪されていく、その様子をだ。もう、結界は、このライダーの世界は数秒と保たないだろう。

「ウェイバー・ベルベットよ。臣として余に仕える気はあるか?」  
はじめは何を言われたのかわからなかった。続いて、意味を理解した。つまりはボクも……。

(あの中の一員に加えてもいいと……?)

王と共に歩むのを、その夢を見てもいいんだと、そう言ったのか? 涙がぶわりと溢れ出てくる。

「あなたこそ……」

結界が瓦解する。元の冬木の街へと戻っていく中、涙もそのままに続けた。

「……あなたこそ、ボクの王だ。あなたに仕える。あなたに尽くす。どうかボクを導いてほしい。同じ夢を見させて欲しい」

「うむ、良かるう」

征服王が微笑んだ。

「、、……!!」

数多の標的を失ったバーサーカーが、僕らを狙って襲い掛かる。それを車輪を走らせ、弾き飛ばす。

このまま、王と一緒に歩める。そんな風に浮き立つボクを見て、ライダーは、物陰でボクの身体を其処に降ろした。

「え?」

「夢を示すのが王たる余の務め。そして王の示した夢を見極め、後世に語り継ぐのが、臣たる貴様の務めである」

王の背中が遠ざかる。再び踊りかかってくる狂戦士の一撃を王は、手にした剣で受け止めていた。

「生きる、ウェイバー。そして全てを見届けよ」

流れる涙のまま、ボクは頷いた。それが王の意思ならば成し遂げ



ようと思った。

ト・フィロロティモ  
「彼方にこそ栄え在り・・・いざ征かん！遙かなる蹂躞制覇！！」

真名開放を前に、雷を背負った神牛が、強壮なる嘶きをあげて猛然と目の前の男を轢き殺さんと走る。

「A A A L a L a L a L a L a L a i e ! !」

最大出力で放たれたその蹂躞に、耐えられる者などいるだろうか。征服王の咆哮と共に、黒い甲冑の男はついに、敗北した。

がしゃんと、今まで男の姿を隠していた黒い兜が剥がれ落ちる。かつては美丈夫だっただろことが連想させる顔。狂気を湛えていた目からは、ずっと憑き物が落ちたようにそれらの痕跡が消えていく。

「礼を言ったほうがいいのだろうか・・・」

今までの、声ならぬ唸りとは打って変わった声で、男はそう言った。

「私は我が王に裁かれたかった。貴方は我が王とは真逆の王でしたが、それでも王によって終わることが出来たのは私にとっては天恵でした」

さらさらと、男の涼しげな顔が、体が崩れていく。ライダーはそれをただ聞いて、見ていた。

「手間をかけさせました、古の征服王よ」

「うむ。貴様のような猛者にそこまで思われるとは、おぬしの王とやらも、果報者よ」

「はは・・・そうだったら、よかったですね・・・」

その言葉を残して、男は完全に消滅した。

「終わった、のか？」

緊張の糸が解ける。そのタイミングをまるで狙ったかのように、今度はライダーの体がさらさらと、指から順に光に解けた。

「！？ライダー！？」

驚き、走りよる。

「む・・・これは、いかなん」

いつもの笑顔で征服王イスカンドルは、こともなげにそんなことを言った。思わず、ボクの顔が青くなる。

「どういうことだよ、これっ。オマエ勝ったんじゃないのかよっ」

「ああ・・・うむ、どうやら予備魔力まで使い潰してしまったよ  
うだの」

あはは、と豪快に笑い、言う。

(そうだ、なんで気付かなかったんだよ、くそ)

固有結界を使うのはあと一回が限度とは、最初からライダーが言っていたことだ。それに加えて、戦車の真名開放技まで連続で使用したんだ、ボクの供給魔力程度でなんとかなるはずがないじゃないか。

「そんな顔をするでない」

諭す様な声でそう言った。そこで、またボクは泣いているのだと気付いた。

「二度目があったのだ。なら三度目がないとは限らんだろう?」

ぐしゃりと、ライダーの大きすぎる手がボクの頭を撫でる。

「しかし、まあ・・・此度の遠征も、存分に心躍ったのう・・・」

まるで夢見心地な声音でそんなことを言っつて、やっぱり最後まで笑顔を浮かべながら、ボクの王は消えていった。

## side・間桐雁夜

体内から刻印蟲が消えていく。バーサーカーへの過剰魔力供給による死滅だ。そのバーサーカーも先ほど消えた。令呪が消失したのだ、間違いが無い。

殆ど俺の身体は死に体だ。だが、それでも俺八生きてイる。

(勝った・・・！)

俺は、あの蟲共に勝つたのだ。

今なら、体内から見張るあいつらがいない今なら、桜を救いに戻ってもジジイには気付かれない。

(桜ちゃん、あと、少し、あと少しだ)

ぐっと、身体を起こす。荒い息が漏れる。ハアハアと、まるで獣の唸り声のようだった。

(桜ちゃん、おじさんが、今から行くから。君を助けに行くから)だから、待っていてくれ・・・その思考は途中で途切れた。

パンと、何かが弾ける音がした。それが最期。

目の前には、闇よりいつそ闇めいた黒衣に黒髪黒目の女が銃を構えて立っている。

それだけだった。それが全てだった。

side・久宇舞弥

「・・・」

目の前に転がる遺体を見る。

それはなんと奇妙なニンゲンだった。

左の顔は人間とも思えぬ異相で、既に見つけたときから瀕死の身体だった。とても、サーヴァントを・・・それも、最も魔力を喰らうバーサーカーのクラスを使役するマスターとも思えない肉体でありながら、それでも男はマスターとして戦い、バーサーカーが斃れた後も、地を這いながらどこぞへと必死に向かっていた。その姿が憐れで、銃弾を一つ、その男の額へと放っていた。

びくりびくり、と身体を揺らしながら、信じられないような目をして男は死んでいった。

こんなに憐れな姿になりながら、どうしてそこまで命を繋ごうと  
していたのかは私にはわからない。男の身体や顔から滲む感情はど  
れも私には理解が出来ない代物ばかりだ。

こんな、人とも言えぬ姿に成り果てながら、ここまでボロボロに  
なりながら、どうしてそこまでして生きようとしたのだろう。

わからない。 فقط。

(羨ましいのだろうか)

身体だけは切嗣に救われた私。けれど、心は遠い昔に死んでいる。  
死人に生者の気持ちなどわかる筈がない。それでも、死人は生  
きている者が妬ましいのだ。

とりとめのない思考。機械にはふさわしくない。

任務完了。自分の命を最優先に、介入できる分は介入をした。そ  
う、それだけでいい。

ずっと、男の死体の前で膝をおり、まともな右目だけでも閉じさ  
せた。これもまた、機械らしくない感傷だった。

side・セイバー

「なんだ、これは・・・」

呆然と呟いて空を見上げる。黒い太陽、それがこの、市民会館の  
真上に昇っていた。

「まさか・・・」

自身でも信じられないくらい目を見開いて其れを見つめる。

「まさか・・・コレが聖杯の正体というのか？」

・・・先ほどの戦い、突如としてアーチャーは目の前から姿を消  
した。

霊体化したというわけではない。あれはマスターによる強制召喚だ。それに安堵の吐息をついて、余はそれきり戦いを放棄した。もとより、あのマスターを相手に尽くす気などさらさらない。アーチャーとの戦いを請け負ったのも、それを拒絶することによって、厄介な令呪を課せられるのを避けたかったが故だ。

あの男が何を言い出すのかはわからぬが、どちらにしるろくでもないことしか言わぬに決まっておる。むしろ、こうしてあの男が目の前にいないこの状況に出くわすとは、余にとっても願ってもいい展開だ。

先ほどから胸騒ぎもする。この陰鬱な建物にいつまでも留まっていたくもない。そう思って、地下駐車場を出て、外に出た。

そして、見上げたそのときは普通の空だった其れが、一瞬後には黒い太陽に覆われた。

泥がごぼりごぼりと太陽から滴る。ぞっと、背筋が凍る。

アレは、英霊にとつてよくないものだ。いや、人があれを受けても生きていられるか。

この尋常ではないものが突如生まれるはずがない。生まれたのに理由があるはずだ。そう、そしてこれくらい途方もない力を発揮するものなど、答えは一つではないか。

「ッ！アーチャー！」

余は踵を返して、焰に包まれていく建物の中へと飛び込んでいった。

side・エミヤ

突如として膨らんだ黒い泥に、言峰綺礼が捕食される。其れを認識した瞬間、私は切嗣<sup>マスター</sup>を抱えて、泥からざっと距離を取ろうとして・

・・・黒鍵に撃ち抜かれた。

「・・・ッ」

右足太ももと右腕に突き刺さった黒鍵は腱を切断するように伸びた。それを身体をひねって避けようとするが、体制が悪く、僅か逸れただけで、深々と肉を抉られる。それを目前で見て、私への攻撃があつたと認識した切嗣の指は速やかに次の動作を放ち、私が地面に着地をするのと、切嗣のコンテNDER銃が、言峰綺礼の心の臓を打ち抜いたのは同時だった。

「・・・マスター、助かった」

「君は・・・」

「言いたいことはわかる。だが、話は後だ・・・あれを破壊する」

だが、それが言葉ほど簡単ではないことは自分でもわかっていた。最期の足掻きとはいえ、現役時代の言峰綺礼の其れは人間の技量とも思えぬものだった。右手は動かない。腹に受けた傷も回復しきつておらず、また、切嗣の今ある装備で、聖杯を消し去るには頼りない。

その時、がしゃんと、思わぬほうから音が聞こえ、反射的にそちらを振り返った。

そこに現れたのは、今しがた心臓を撃ちぬかれた男の、サーヴァントである剣使いの少女であった。

side・セイバー

気配を追い、アーチャー等がいるであろう部屋へと駆け込む。ここで余が見たのは遠くで黒い泥を滴らせながら黄金に輝く杯と、怪我をおったアーチャーと、そのマスターらしき銃を構えた男と、そして・・・心臓を撃ちぬかれて死亡している余の汚らわしき奏者の

姿だった。

「・・・綺礼、死んだのか」

ぼそり、と呟く。全く、あれほど憎らしい男であったのに、死ぬのは呆気がない。

「それで・・・セイバー？ここまで追いかけてきたということとは、やる気と判断してかまわんのかね？私としては勘弁してほしいのだが」

アーチャーが無骨な黒と白の双剣を構えて、そんな言葉を放つ。ふん、と鼻で笑って余は高らかに宣言する。

「所詮こやつは余の本来のマスターを殺した不届きな賊ぞ。死んだとなれば余が従う道理など、どこにもないわ」

言つと、アーチャーは僅かに眉を伏せた。

「それより、そなた、今から何をするつもりでおった？」

いつも通りの不敵な笑いを心がけて表情を作る。

「・・・」

答えない、その鋼の目が、言葉よりも雄弁に意思を語っていた。

「やはりな。そなた、あれを破壊するつもりであろう？」

「君は、邪魔をするかね？」

皮肉そうな表情を浮かべて、そんな言葉を吐く。そんな可愛げのない仕草さえ、余には愛い。

「いや、余が代わろう」

「何？」

「あれはこの世の害悪よ。あつてはならんものだ。そうそなたも思っていたのである？」

アーチャーは目を白黒させて、言葉につまっておる。くくと、意地の悪い笑みが思わず漏れる。

「余はなあ・・・生前、暴君よ、バビロンの妖婦よとそう称され、悪名の限りを受けたし、終には己が民に追われて・・・今思ってもなんと惨めな末期を送ったものだ。だがな・・・それでも余は民を愛していた。市民の幸せをいつでも願っていたぞ。それもな、一

つの事実なのだ」

「まさか、君は・・・」

ふふ、ここまで言えば、流石に余の正体には気付くか。

悪名と汚名をこの身は拭いきれぬほど受けてきた。だが、それでも余は自分の人生を誇っておる。たとえ、暴君とよばれようと暴君には暴君の矜持がある。胸を張っていえる。暴君でも構わぬ。余は余の人生を生き抜いた。そして余は民草を愛している。

「アレは、無辜の民を飲み込むものだ。ならば、あれを始末するのは、王の王である皇帝の余の役目よ、たとえそなたでも邪魔は許さぬ」

アーチャーの前へと出ながら、愛剣を構える。今、アーチャーはどんな顔をしておるのであるうか。

「それにな」

ふと顔を綻ばせて、後ろを振り返った。ああ、やっと見れた。全く、なんて顔をしておるのか。抱きしめたくなるではないか。でも、それは我慢してやろう。仕方ない、本当に仕方ない。残念だが、それは諦めてやろう。余にここまで我慢させるとは、本当、そなたは罪な女よな。のう、アーチャー。今だけだ。今だけ余は、私に戻る。

「余はそなたが好きだ」

笑って、言った。其れを見て、アーチャーがまた目を見開いた。

全く、失礼な奴よな。もしや、余の言葉を今まで信じておらなんだというのか？ええい、余とて傷つくのだぞ？本当はな、そなたのつれない態度にだって、いつも辛い思いをしていたのだぞ。全く、鈍感もいい加減にせいよ。でも、構わぬ。わからぬのなら何度でも言葉を重ねてやる。

「余はそなたのことが大好きだぞ！」

哀し気な顔をしてくれるな。そうだな、うん、どうせなら笑って欲しい。でも、これ以上は時間切れだ。むう、しかないことであるうが、残念なものだな、うん。



「築かれよ、我が御殿、黄金の劇場よ！」

前を見据えて宝具を解禁する。

アエストウス・ドムス・アウレア  
「招き蕩う黄金劇場！！」

余の為の舞台が降臨する。黄金の劇場に浮かぶ、黄金の杯という光景は見た目だけならば美しいのに。それでもあれが害悪ならば、余のこの手で消し去る。奏者のおらぬ状態での宝具の解禁、加えあれの破壊までこなせば、余のこの身が保たないのは明白。だがな・・。

(惚れた女を守り抜いて逝けるなら、それも些細なことよな)

「アーチャー」

ふと、笑いながら、もう一度だけ振り向く。最期まで名前も知らない女だった。でも、今はそれすら構わない。

「今更惚れるとは言わぬ。今からではそなたも辛いだけであろうかな。だがな、余を忘れるでないぞ。よいか。絶対だぞ？忘れなどしたら、余はそなたを許さぬからな！」

わざと明るい口調で、最期の強がりと言った。

「・・・達者でな」

そして、最期の魔力をこめる。

ラウス・セント・クラウディウス  
「童女謳う華の帝政！」

> i 2 5 7 1 6 — 3 0 3 2 <

side・衛宮切嗣

目の前の少女によって聖杯が破壊されていく。それに伴い、少女も、辺りを包んでいた黄金の劇場も露霞のように消えていく。  
(終わったの、か?)

そう思い、息をついた。その油断を狙っていたかのように、その泥は何かの意思を帯びて蠢いた。

「マスター!!!」

そして、最後に見たのは、迫りくる泥の軍勢と、右足を引きずりながら僕を庇うように伸ばされた彼女のアーチャーの手と、そして、泥の奥で心臓を穿たれたまま、晒う言峰綺礼の、確かにつり上がった口元、それだけだった。

泥に飲まれる。

NEXT?

第四次聖杯戦争編 09・暴君の矜持 後編（後書き）

というわけで、後編でした。残るは後一話「闇の中伸ばされた手」で第四次聖杯戦争編は完結します。あと、おまけでこんなネタ考えてみた。

> i 2 5 7 1 7 — 3 0 3 2 <

第四次聖杯戦争編 10・闇の中伸ばされた手（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。漸く、ついに、第四次聖杯戦争編完結です。いやあ、想像以上に長かった。元々は第五次聖杯戦争編のおまけとして考えた話ですが、当初の予定よりもうっかり真面目にがつつり書きちゃったような気がします。第四次編最終話のこのオチだけは、大分初期から予定していた通りの流れですね。つか、この話書いている最中、第五次聖杯戦争編のエンディング&エピローグ書きたい症候群に襲われて大変でした。・・・て、まだ40話は先の話だったの。つうわけで、どうぞ。

第四次聖杯戦争編 10・闇の中伸ばされた手

ザー……ザー……。

(接続エラー、接続エラー)

ねえ、聞こえる？

て……ちょっと、馬鹿 何言ってるのよ。

あー、もう、煩い！アンタはそこで黙ってなさい！

これが真正正銘、のチャンスなんだから。

をう機会は なんだから。

(リンクは蜘蛛の糸のように頼りない)

ザー……ザー……。

ねえ、お願い返事をして。

私、あなたに繋がっている？

(接続エラー、接続エラー。次の機会は十年後)



(駄目だ、私はここで終わるわけにはいかない)

ここで、諦めれば、この腕の中の人はどうなる？

ぎしぎしと、体中が悲鳴を上げる。脳髄まで犯す呪いに抗う。抗い続ける。

「が……は……ッ」

呪いが蝕む。この身を喰らおうと口を開けている。まとわりつく私が墮ちるのをまっっている。目の前が暗く沈んでいく。目が見えない。真っ暗だ。私は……私は、この手に本当にあの人を掴んでいるのだろうか？

指の感覚がない。身体があるのかないのかさえ、不明、不明、不明。

だが、なんだ。だから、なんだ。それが、どうしたというのだ。

「は……ぐっ」

そう、守り抜くと約束した。ならば、切嗣<sup>じいさん</sup>だけでも、この身に代えて……！

そこまで思いを馳せたその時、その私の決意をたしなめるような、幼い声を思い出した。

『アーチャーも』

脳裏に過ぎる。それは、10日以上前のこと。その時の記憶。

『アーチャーも戻ってきなさい』

私の誓いを前に、雪の妖精の少女はそんな言葉を返した。

……ああ、そうだった。そうだったな、イリヤ。オレも戻らないといけないのだったな。

君と約束した。君の名にかけて誓いを立てた。

果たすよ、きっと君との誓いは果たすから。姉さん。

「……っ」

(体は・・・)

そも、この身は正規の英霊とは違う。人々が忌み嫌い、それによって信仰を受ける反英霊。英雄とも呼べぬ世界の掃除屋だ。呪いなど、こんな怨嗟の声など、聞きすぎるくらい、聴いてきた。

それに、まだ私が衛宮士郎と呼ばれていた時代、あの時も、セイバーと参加したあの戦いで、私は聖杯の呪いを受けて、それに打ち勝ったのだ。

ならば、いくらサーヴァントに・・・呪いへの抵抗が低いエーテル体になったからといって、易々とこんな呪いに屈していいはずがない。

そうだ、いまだ未熟だったあの時でさえ、耐え切れたのだ。敗北はただ一度のみ、それは自分が相手でも例外はない。

「・・・ア、ぐ・・・ッ」

(身体は、剣で出来ている)

自己を埋没させる呪文を口内で唱える。それだけで随分と楽になった。

帰ろう。あの場所へ。雪の少女が待つ場所へ。

(約束を・・・したからな)

父親を連れて、君の元へ帰る。

パキパキと、暗闇に、輝が入っていく。その向こうには誰かの人影が見える。そして私は其処に手を伸ばした。

パキンと、何かの幻想が壊れるような錯覚。

突如訪れた、呪いや怨嗟の声とも無縁な暗闇空間。

そこで私が視たものは・・・誰かの名前を呼んでいる一人の・・・女・・・?

ドクン、と心臓が脈打った。誰だ、あれは。



(懐かしい)

ぼんやりと、輪郭すらおぼろげで、まるですぐに消え去る幻のような。

(ああ、彼女こそが私の……)

「……は……ッ!?」

白昼夢より目覚め、視力を取り戻す。現実に取り戻される。何を見たのかすら、こうしている間にぼろりと腕をすり抜け、失われていく。

目の前には、私の腕に包まれたまま、泥の攻撃を受けて昏倒している衛宮切嗣<sup>マスター</sup>の姿。既に場所は市民会館ではない。泥に飲まれたまま、大分押し流されていたようだった。

「……爺さんッ」

呼びながら、頬に触れた。死んではない。その時、爺さんの頬に触れた時、自分の身体の異変に気付いた。この、肉が触れ合う違和感は……そうか。

「受肉……している?」

呪いの力の影響なのか、身体機能は大分弱体化してはいるが、間違はなく、この肉体は受肉している。その証拠に霊体になろうと意識しても変化は欠片も訪れない。

聖杯の泥を飲んだから……か。

自分の迂闊さに舌打ちする。気を抜くと呪いに飲まれそうな肉をもって身体を得ている。吐き出したいほど醜悪だ。だが、そんな嘆きなどどうでもいい。オレの知っている爺さんは、切嗣は、聖杯の呪いを受けて5年後死んだ。このままでは同じ結末を辿るだろう。

(守りきると誓ったのに、なんてザマだ)

自虐に浸っている場合じゃないのに、胸の奥に苦いものがこみ上げてくる。だが、それは今必要なことではない。

(何か、爺さんを救う方法があったはずだ……)

そうだ、思い出せ、それをオレは知っているはずだ。

そつだ、聖杯の泥を浴びたのはあの時も一緒だ。衛宮士郎とオレがよばれていたあの時と。あの時、オレは、どうやって助かった。  
(思い出せ、思い出せ、思い出せ)

「・・・あ」

そつだ、あの時は・・・。

「セイバー・・・」

ぐつと、息を吐き出した。地獄に落ちても忘れない1秒にも満たない邂逅を思い出す。

月光に照らされた金紗の髪と、翠と白銀の鎧の少女。オレの騎士王。

「セイバー、力を貸してくれ」

何故、こんな単純なことさえ、オレは忘れていたんだろう。

大火災からの10年、私は聖剣の鞘と共にいた。私の属性は剣だ。投影魔術もそれに特化している。だが、その中の唯一の例外。永い月日で、世界の掃除屋として過ごした日々の中で、忘れ去っていたソレ。

(10年共にあった私が、それを投影出来ないはずがなかったな) そんなことすら忘れていた。

彼女の鞘とは、10年共に生きた相棒だった。だが、今では漠然としたイメージしか、覚えていない。それでは造れない。本物には迫れない。爺さんを助けることなど夢の又夢だ。

しかし、ここには、本物の聖剣アヴァロンの鞘がある。切嗣の体内なかに、其れはあるんだ。掌を切嗣の胸の上にあてる。聖剣の鞘の息吹を感じる。(嗚呼、そつだった。オマエはそんな形をしていた)

すまなかつたな。オマエは触媒として、主ではなく、私を呼ぶほどこに私のことを覚えていたというのに、私はそつではなかった。

(もう、大丈夫だ)

オマエの息吹も、形ももう知っている。思い出した。思い出せた。思い出すことが出来たんだ。

(力を貸してくれ)

持ち主に不老不死さえ与える黄金の鞘、そのイメージを丸ごと写す。

「トレス・オン  
投影、開始」

此処に本物の聖剣の鞘があるのなら、ならば、私がそれを写しきれない筈がない。

この身はそれだけに特化した魔術回路なのだから。

「アウァロン  
全て遠き理想郷」

投影された、男の中にある聖遺物と変わらぬ姿の黄金の鞘が降臨する。光が溢れる。泥が浄化されていくのを確かに見た。

「ごふ」と黒い血を吐き出す。聖剣の鞘の模造品は、切嗣の体から泥を浄化するだけではなく、私の身体からも、呪いの半分以上を浄化して、それから幻想に戻って消えた。切嗣の顔色が戻っていく。

その黒い眼がゆっくりと開かれていく、その様子をただ見ていた。

side・衛宮切嗣

暗闇の中、白銀の髪の子を見る。

「アイリ・・・」

懐かしい顔だった。愛おしい顔だった。9年間愛し共に過ごした僕の妻。アイリスフィール。だけど、目の前のアイリはどこか、違う。初めて見た黒いドレスのせいかな、いや、もっと根本的な何かが決定的に違う。

「きつと来てくれると思ってた。あなたなら、ここに辿り着けると信じてた」

微笑んでいる見慣れた美貌、だけど、違う。これは、そうコレはアイリではない。

その証拠に周りにあるのは屍ばかりだ。この光景はまるで、いつか夢で見たアーチャーの過去そのものじゃないか。

「……お前は、誰だ？」

銃口をむけながら、気付けばそんな言葉が自分の口から漏れていた。いや、正体に察しはついている。だから、今度はそれをはつきり口に出す。

「お前が、この世全ての悪なのか？」

にたり、と女の口が笑いを模った。

「ええ、そうよ、その通りよ。さあ、願いを、祈りを捧げて。あなたこそ、この世全ての悪にはふさわしい」

「断る」

パン、と、女を射抜く乾いた音がした。

「僕には守るものがある。僕はお前を破壊するために此処にきたんだ」

「……呪ってやる」

アイリの顔をしたそれが、アイリの声でもって呪詛を張り上げる。

「衛宮切嗣……オマエを呪う……苦しめ……」

・死ぬまで悔やめ……絶対に……!？」

憎しみの泥が、僕の血管を通り、心臓に流れ込んでくる。それが、突如黄金の光に遮られた。

「ぎ……あ、ああアアあああ……!」

目の前の妻の姿をしたナニかが苦しむ。僕に侵食していた呪いが突如勢いを止める。体内から浄化されていく。暖かい。どこか懐かしい、そんな光だった。

瀕死の女は、びくびくと、身体を小刻みに震わせながら、「は、はははっ」そんな感じの心底おかしげな笑い声をあげていた。

「衛宮切嗣、これで終わりだとは思わな……殆どの呪いは打ち消

されただろう。だが、オマエはどれだけの時間私の呪いを受けていたと思う？少しずつ、少しずつ、真綿で首を絞められるように、オマエは苦しみ、そうして死んでいくのだ」

「だから、なんだ」

すつと、愛銃のグリップを握り締めた。

「マトモに泥を浴びた僕でも5年もつた。なら、殆どが浄化されたこの僕なら、倍以上生きられるとは思わないか？それだけの時間があるのなら充分だよ」

そうして笑って、女の額を打ち抜いた。

目を開ける。其処には、泣き笑いのような表情を浮かべた、褐色の肌の女が、僕の顔を覗き込んでいた。

「………シロウ……」

「全く、いつまで寝ているつもりだ、この馬鹿者。心配をかけさせるな」

視線を斜め下に落としながら言った、彼女の最初の一言は、ちょっと呆気にとられるくらいに可愛気がない言葉で、でもその言葉がただの彼女流の強がりではないことは、その表情を見れば一目瞭然だった。

「うん……ごめんよ」

言いながら、上半身を起こす。その時、はたと気付いて、慌てて言った。

「シロウ、服、服着てない」

「うん……？あ」

どうやら、本人も気付いていなかったらしい。自分の身体を見てしまつて、慌てて自分の体から目を逸らしながら、どこかから簡易の衣服を出して着込んだ。その間、10秒もかかっていないあたりが、ある意味凄い。

「……爺さん」

落ち着いた頃を見計らつて、僕の娘は抑えた声を出した。

現状を把握する。

「……………」

そこには、いつかも夢を通してみた地獄があった。

阿鼻叫喚の声、舞い踊る炎が街を焼いていく。僕らの周囲のみ何も無いのは、おそらくは彼女が結界か何かを張っているかなにかと  
いうだけだろう。

「僕のせいだ……」

自分の筋張った右手を見つめる。数え切れない人を殺してきた手。  
「僕が、君の話信じなかったから……。聖杯は呪いに犯されて  
いないと、信じたがったりなんかしたから……。僕が、決断するの  
が遅かったから……。だから……」

ぱん、と乾いた音がした。右頬が熱い。数瞬後に、彼女にぶたれ  
たのだと理解する。

見れば、眉を吊り上げ、唇を噛み締めたシロウが、低く声を張り  
上げていた。

「ふざけるな」

がっつと、胸倉を掴まれる。

「今、そんなことを言っている場合か！？こんな時に、貴方がそんなことを言うのか！？私の言葉を信じられなかった？それは、人と  
して当たり前のことだ！誰も初対面だった人間の言い分をそう、易  
々と信じられるものか！私は言ったぞ！覚悟だけはつけておけと。  
この状況を想定してなかったと、だから、どう動くのかも考えられ  
ないと、貴方だけは言うな！！」

怒鳴り声。だけど、それは紛れもなく、懇願だった。

「貴方は、『正義の味方』なんだろう……。？」

ああ、そうか。

（彼女にとっては、僕はそうだった）

実態は、ただの薄汚い暗殺者でしかないのだろう。だけど、この  
第四次聖杯戦争のこの大火災で、彼女は僕に救われたんだ。だから、  
その憧憬を胸に呪いを受け継いだ。

つまり、この火災のどこかには彼女になる可能性を秘めている子供が生きて、今も救いの手をまっけているのだ。

「うん、そうだね、ごめん」

ぐしゃりと、シロウの真っ白な髪を撫で付ける。

「生存者を探そう。それが、今出来る最善だ」

口調を、魔術師殺しのものに切り替える。それを見てシロウは、

一拍ほど置いてから、淡く笑った。

「了解だ、マスター」

「シロウ」

右手を差し出す。きょとんと、鋼色の目が子供のような表情を作って僕を見る。

「もう、僕は君の『マスター』じゃない」

「……うん、父さん」

side . 士郎

……気がつけば、焼け野原にいた。

『助けてくれ』『この子だけでも連れて行ってくれ』と、道中聞こえるそんな声を無視して歩き続けていた。

(ごめんなさい)

助ける力なんてない。

(ごめんなさい)

自分が助かることだけで精一杯だ。

(ごめんなさい)

生き延びたからには生きなくちゃとそれだけを思って、ひたすら歩いた。

生きているのは、動いているのは自分だけ。

それでも、こんな状況で助かるわけがないとわかっていた。  
そして倒れる。

雨が降りそうだ。なら、この火事もきつともう終わる。  
朦朧とした頭で手をのばして、そして、その手を掴む人の姿を確  
かにみた。

泣きそうな顔で、笑いながら自分の手を包む、黒髪の男と、眉を  
ぎゅっと引き締めて、必死に目を逸らすまいとしているかのような  
白髪の女性。

その二人組みに、初めて見た顔のはずなのに、わけのわからない、  
安堵を覚えて、そうしておれは意識を手放した。今目にした黒髪の  
男のように、口元に笑みさえ浮かべながら。

side・イリヤスフィール

あの時、キリツグは二週間もすれば帰ってくる、ってそうだった。  
アーチャーも、キリツグと一緒に戻ってくるってそうだった。でも、  
二週間が経っても、二人は戻ってこなかった。

どうしたのかな。お仕事、そんなに大変なのかな。

ある日、おおじいさまは言った。

「あいつらは裏切り者だ」って。嘘だって、わたしは思った、答え  
た。

(だって、誓ってくれたんだもん)

必ず、戻ってくるって。だから、わたしは待ち続ける。

一ヶ月が経った。まだ、二人は帰ってこない。

二ヶ月が経った。おおじいさまはいい加減諦める、あいつらを赦  
すなとそう言う。

(だって・・・約束したんだもん)



寒い。寒いよ。一人でまつのはとても寒い。

寒いのは嫌いな。早く、こんな悪夢は終わらせて。帰ってきて、抱きしめて。また、ホットミルクをいれて。遊んで。お話をきかせて。

やだよう。なんで、まだ帰ってきてくれないの？イリヤ、良い子だよ。良い子にまっっているよ。ねえ、なんで、どうして。

早く、帰ってきてよ。ねえ、早く……。

がらん、と何かが音を立てた。はっと、自分の部屋で、顔を上げる。

(侵入者だ)

そつだ、結界が破られた合図だ。

ばたばたと、外から音が聞こえる。重々しい響きで、何かと、戦闘用ホムンクルスが戦っている。

(何？何？何？)

ガシャン、と硝子が割れる音までしている。音から判断すれば、戦闘が行われている場所は自分の部屋のすぐ出た場所だ。

(こわい)

ぎゅつと、ぬいぐるみを抱きしめて縮こまる。シーツを被る。バン、と扉が開けられる音がした。

(こわい、こわい、こわい)

戦闘用ホムンクルスがどれくらい強いのかなんて知っている。それを破られた、殺されるかもしれないと、恐怖に心が震える。その心は、「イリヤ」と次の一声で溶かされた。

「え……？」

幻聴じゃないよね、と目を見開いてかぶりを振る。

「イリヤスフィール」

「……アーチャー？」

聞き間違いないじゃない。その、少年にも似た印象のハスキーな女の声。それは、会いたいと思っていたその片割れで。シーツを振り払

って、扉のほうに顔を向けた。

「イリヤ、遅くなつてすまない。約束通り、帰ってきた」

あちこちに大小の傷を受けながら、それでもいつかのように優しく微笑む顔、以前見たときよりも伸びた真つ白な髪、褐色の肌、紅い外套。夢幻じゃなく、彼女はそこに立っていた。

「さあ、行こう。切嗣が・・・君のお父さんが待っている」

色々と話したいことがあった。だけど、頭の中がまっしろでなにも思いつかない。頬が熱い。目元がじんわりと、涙に滲む。

「イリヤスフィール」

差し伸べられた右手。わたしの名前を呼ぶその柔らかい響きを、ずっと聞きたいと思っていた。

「アーチャー・・・！」

走りよつてその右手に飛びつく。アーチャーはわたしの身体をしつかりと抱きしめて、窓から飛び出し、夜の冬の城を後にした。

ずっと、この城で育ってきた。だけど、そこを出ることに躊躇いなんてない。

アーチャー  
彼女とキリツグたちと生きていけるなら、どこにだって行けるだろう。

さあ、行こう。この手に未来を掴もう。

そして家族みんなで、笑って生きていくんだ。

「ぼ、ぼと、まるでそれは暗闇の海の中を泳ぐようなものだ  
た。」

（見つけた）

にたり、と晒う。

（やっと、繋がったぞ）

我は、嗚呼、漸くこの舞台へと、出れるのだ。  
オレ

そう、これは、衛宮切嗣と英霊エミヤが泥に飲まれたすぐ後にあ  
った出来事。

心臓の鼓動がない。死んでいる。私は間違いなく死んでいる。それははずなのに、動いている。まるでリビング・デッドだ。衛宮切嗣と、そのサーヴァントが泥に飲み込まれていくのを私は見届けていた。

市民会館だった建物は既に見る影もない。そんな中、私のすぐ目の前で、ゆっくりと小さな黒い穴が開いていくのをみていた。

ずるりと、闇の中から男の片手が伸ばされる。何故そんなことをしたのか、自分でも定かではないが、確かに私はその手をとった。

その途端、軽く電流が流されたような痺れが走る。唐突なことだったが、契約が繋がったのだと、漠然と思った。ずるずると、私に手をとられた男の身体は穴から這い出て、地面へと投げ出され、男がそこから出た後、黒い穴は収縮し、閉ざされていった。

金の髪の子だった。王者としての風格を放つ美貌、それが血に汚れている。その額には何かの剣が突き刺さったあとがあった。片腕も一度切り取られて、また付け直されたかのような有様だ。

「・・・」

男は動かない。その身体は瀕死だ。足りない魔力を補うように男は眠りについていた。

その顔も、造形も初めて見たはずだった、でも私は知っていた。

（ああ、そうか、これが）

片膝をついて、男の顔を観察する。

（これが、あの声の主か）

そうして、私はその男を背負って、その場を後にした。

第四次聖杯戦争は終わった。だが・・・。

(ここから、全ては始まる)

それは予感とも違う、確信。

飲み込まれていく人々の嘆きと叫び、それらを肴にしながら、私は高らかに、生まれてはじめての大いなる愉悦を前に笑い声を張り上げて、愛おしい黒い太陽を見つめていた。

第五次聖杯戦争編 NEXT?

第四次聖杯戦争編 10・闇の中伸ばされた手（後書き）

というわけで、第四次編完結なのでした。次回からは暫くの間閑話シリーズが長々と続きます。第五次聖杯戦争編は遠いなあ。

閑話 新しい家族（前書き）

やあ、ばんははろ。EKAWARIです。

前回もお伝えしたとおり、第五次聖杯戦争編がはじまるまで暫く閑話集が続いていきます。というわけで第一弾は新しい家族の話。

小説ではなく、漫画ですが、一応舞弥さんとの距離もどくなったのかもせしたつもりなだけ。ではどうぞ。

## 閑話 新しい家族

side . 土郎

目覚めた時、病院のベッドの上で、おれは「君は知らないおじさんに引き取られるのと、孤児院に引き取られるの、どっちがいいかな」そう、唐突に黒いコートの男に言われた。

思わず、目をぱちくりすると、その黒いコートの男と同じくらい背の高い白髪の女の人が「切嗣、その物言いはいきなり過ぎるだろう、それは」といいながらため息をついて、そつとおれの頭を撫でた。

「私たちのことは覚えているか？」

こくりと頷く。確か、あの大火災の日、おれがのばした手を掴んだのがこの二人だった。大火災以前のことはぼんやりとしか覚えていない。でも、朦朧とした頭だったにも関わらず、この二人に会った時のことは鮮明に覚えている。

「そうか。それは、結構。こちらの男は衛宮切嗣、私は・・・そうだな、シロとでも呼んでくれ。切嗣は・・・いや、私たちは、まあなんだ。孤児になった君を引き取りたいと思っている。だが、それはあくまで私たち側の事情だ。嫌なら断ってくれてもかまわん。よく考えて返事をするのだな」

口調は厳しいけど、優しい目をして、そうシロと名乗った女の人にはそんな言葉を言った。髪を撫でる手は繊細で優しくかった。多分おれのことを真剣に考えて言ってくれているんだろう、と思った。

隣の黒いコートの男はそわそわとしている。ふと、この二人はどいう関係なんだろう、と思った。黒い髪に黒い目の男は多分名前前からしても日本人なんだと思う。でも、このシロと名乗った人は、髪は真っ白だし、肌は黒いし、変わった目の色をしている。でも日



本語はぺらぺらだし、なんだろう。

「あの・・・」

「なんだ、どうした。もう、決めたのか？」

シロという人は、片眉をあげて、窘めるような声でそんなことを聞く。それに違つと横に一つ首をふるつと、真つ直ぐに二人をみた。

「もしかして、夫婦・・・なのか？」

その言葉に、なんでか知らないけれど、シロという人はずるつとこけた。黒いコートの男はちよつと照れたような顔で、頬をぼりぼりかいている。

「違つ」

苦虫を噛み潰したような顔でシロつて人はそういつた。思わず不思議に思つて、首をかしげる。

「私も、この男の養子なんだ」

ちよつと吃驚した。だつて、確かに黒いコートの男の人とシロつて人は年が離れているみたいだけど、親子ほどは離れているようには見えなかつたから。

「まあ、だから、おじさんに引き取られたら、シロは君のお姉さんになるつてことだね」

そんなことを嬉しそつに笑いながら男は言つて、白い髪をくしゃりと撫でた。

（お姉さん）

おれはじつと、白い髪の女の人の顔を見上げる。

会つのは二度目だ。でもなんでだろう。ずつと前から知っているような気がする。何故か、胸の奥がぼかぼかと暖かい、そんな感じがする。

「・・・なんだ？」

あまりにじつと見すぎたからか、お姉さんは居心地悪そつな顔をして眉を顰めた。

「それで、どうするか決まつかい」

優しい声で、男がそつ語りかける。

「うん」

気付いたら笑ってた。笑って言った。

「おれ、おじさんたちのところに行く」

そして、その日、おれは 士郎から衛宮士郎になった。

side・イリヤスフィール

初めての飛行機、初めての日本。そわそわしながら、わたしは、隣の席にいるアーチャーの腕にぎゅっと抱きついた。

「えへへ」

「イリヤ、のどは渴いていないか？」

「うん、大丈夫。それより、わたし、「お姉ちゃん」になるのよね？」

上目遣いにそう聞くと、アーチャーはこくりと一つ頷いて返事を返してくれる。

「士郎とは仲良くするんだよ？」

通路をはさんだ向こう側のキリツグがそんな言葉をいう。シロウ、それがわたしの弟の名前らしい。

「言われなくてもわかってるわ。わたし、お姉さんだもの、うんと可愛がってあげるんだ」

そしてまだ見ぬ弟に思いを馳せるわたしを前に、アーチャーは優しくわたしの髪を撫でた。

side・衛宮士郎。

おれがこの家にきてから、一ヶ月が経ったその日、切嗣じいさんとシロねえは旅立った。なんでも、爺さんには他に娘がもうひとりいて、とある事情で今まで別々に暮らしていたけど、おれがこの家に慣れたのを見て、そろそろ頃合だと引き取りに行くことにしたらしい。

今は、爺さんの知り合いだという藤村組の孫娘の、藤村大河（大河って言ったら怒るから、藤ねえって呼んでる）と、藤村組の人たちが交代でおれの様子を見に来ている。

そして今日、その娘を連れて切嗣じいさんたちは帰ってくる。

藤ねえは切嗣に実の娘がいたってことになんだかふてくされていくけど、おれは新しい家族がもう一人増えることに内心、ちょっとどきどきしている。

そして、その新しい家族を迎えるときが来た。

現れたのは、まるで人形みたいな白い肌に、綺麗な銀髪の、人形みたいに綺麗な女の子だった。

「士郎、この子がイリヤスフィールだよ」

にこにここと、爺さんが笑いながら告げる。

（・・・嘘だ）

確か、爺さんが迎えに行ったのって実の娘って言ってなかったっけ？でも、この目の前の同い年くらいの女の子はどこからどう見ても爺さんには欠片も似ていない。

そのおれの様子を見て、シロねえはため息を一つ、フオローするように口を開く。

「イリヤは母親似なんだ」

いや、いくら母親似だからってここまで爺さんと似てないなんて詐欺みたいだぞ。

あ、でも、シロねえと姉妹っていうのは納得できるかもしれない。肌の色や目の色は全然違うけど、髪の色は似ているし、見ても二

人は凄く仲がいい。

にっこりと、人形のような女の子が笑って手を差し出す。思わず、頬が火照って赤面する。

「あなたが、シロウね？わたしが、今日からあなたの姉になるイリヤスフィールよ。よろしくね」

(・・・姉?)

じっと、目の前の女の子を見る。同い年くらいかと思うその子はおれより小さかった。

「シロウく？レディが握手を求めているんだから、ちゃんとそれに応えなきゃ駄目ですよ」

むうと、頬を膨らませてそういうイリヤは年下みたいで、とても可愛かった。益々姉には見えない。

「わたしはシロウのおねえちゃん、シロウはわたしの弟なんだから、今日からシロウはわたしに絶対服従！わかった」

「いや、イリヤ、それは横暴だ」

「思わず、シロねえが突っ込みをいれている。」

「嫌だ」

「思わず、おれはそう言っていた。」

「嫌ってなに？わたしがお姉ちゃんなのが嫌っていったの？」

「おれ、イリヤのこと姉には思えないぞ」

「・・・キ~~~~ツ~~~~グ~~~~！」

イリヤが視線できっと、親父を睨みつけている。どういう教育してんのよ、と言いたげな目だった。

「だって、イリヤ、おれより小さいじゃないか」

そういうと、イリヤはきよとんと、紅くて大きな目を見開いて、それからまだ不満げに「でもわたしが、おねえちゃんなんだからね」とそういった。

「イリヤ」

「おねえちゃん」

「イリヤ」

「おねえちゃん」

「イリヤ」

「おねえちゃん」

「うん、イリヤはイリヤだ」

「もう、シロウのばかばかばか〜！」

side・エミヤ

子供達のほほえましいじゃれ合いを背後に、私は茶を沸かす為に台所へと移動し、ヤカンを火にかける。

どうやら、あの二人は上手くいきそうだ。今の今までのほほえましいやり取りを思い出して、ふっと笑みを溢す。

(そういえば……)

あれも、衛宮士郎だというのに、驚くほど憎しみの感情はわいてこなかった。

答えを得たから、というだけではないだろう。そもそも、英霊と人にわかれようと同一の存在が其処にあるのなら沸いて当然の、世界の修正による反発心自体が沸いていない。

(もしかして……私が女に変わったからか?)

その可能性はわりと高いような気がしている。男と女、性別自体が全然違うのだ。いくら元が同一の存在といえど、ここまで違えば、全くの異物である。世界の修正自体が機能を停止している。そう考えたほうが自然な気がした。

「アーチャー」

耳に馴染んだ品のある幼子の声が聞こえ、思わず振り向く。落ちて着きをもって、イリヤは其処に佇んでいた。

「どうしたんだ、イリヤ。茶はまだだぞ」

「そういえば、ここでは貴女は「シロ」とよばれているのよね」

先ほどまで士郎相手にあった無邪気な年相応の女の子はなりを潜めて、一人の淑女が其処に現れていた。

「ねえ、アーチャー！。率直に聞いわ。貴女って、「シロウ」と同じなの？」

思わず、息を飲み込んだ。

「やっぱり。同じなのね。ううん、安心して、誰にも言わないから」

「イリヤ、何故気付いた？」

「そうね……。上手くいえないわ。うーん、女の勘ってことにし  
といて」

言いながら、イリヤは、唄うような声で告げた。

「時々ね、貴女の向こうに見えてたの。赤い髪の男の子。今日、シロウと会って確信したわ。あ、シロウとアーチャーって同じなんだ、  
って」

その言葉に衝撃が走る。見えていた……。？

ヤカンが沸騰した音で、はっと我に返り、火を止めた。

「ねえ」

にっこりとイリヤは微笑む。

「シロウはわたしの弟なんだから、アーチャーはわたしの妹よね？」

「……は？」

思わず、耳を疑った。

イリヤはいつの間にか、元の年相応の子供に戻って、ふふんと鼻を  
をならして、意地悪気に笑っている。

「アーチャー……。ううん、シロ。貴女も今日からわたしの妹なん  
だから。だから、おねえちゃんに甘えてもいいんだからね！」

そうして満面の笑みで、雪の少女は笑った。

(参った……)

全く、君には昔から勝てたためしがない。

「全く、君には敵わないよ、姉さん」

そして人数分の茶をお盆にのせながら、イリヤと手を繋いで、居間へと戻った。

新しい家族、新しい生活、受肉した体。同一の存在がそこにありながら起きない矛盾の修正。

さあ、新しい『衛宮家』を始めよう。

了

おまけ、「再会の約束」

> i 2 6 3 2 0 | 3 0 3 2 <

> i 2 6 3 2 1 | 3 0 3 2 <

## 閑話 新しい家族（後書き）

ぷぷ、おまけ漫画ですが、バスケットがちょっと失敗した気がするが、細かいことは気にしないんだぜ。

素直に「また来てくれ」とは言わない、ツンデレなエミヤさんが好きであります。

あんなにクール？なのに甘党な舞弥さんはとても素敵だと思う。

次回は戸籍と凛との話になります。多分次回もおまけがついていると思うよ。では。



閑話 名前を君に（前書き）

ばんははろ、E K A W A R Iです。

大聖杯関連が気になるひとが多いみたいなので、もうちょっと後に  
出すつもりでしたが、大聖杯に今手出せない理由もちよろつとのせ  
ました今回、視点はエミヤさんオンリーであります、いえい。

というわけで、漸くこの小説内のフルネームお披露目だよ。

## 閑話 名前を君に

side・エミヤ

士郎、切嗣、イリヤ、そして私の4人で、冬木で暮らし始めてから、3ヶ月ほどが過ぎた。今では、士郎もイリヤも大分あの家での生活に慣れ始めている。

2週間前に、とある高名な人形師の力を借り、イリヤも既に聖杯の器ではなくなった。本人そのものの人形すら作れる封印指定の持ち主の作だ、元の体では肉体の成長が止まることが確定していたイリヤだったが、今の体ならば、年相応に、普通の子供のように成長していくことも出来るだろう。

まるで理想の家族だな、と思う。

戦争犯罪人として死に、反英霊の守護者となった私が、受肉したとはいえ、こんな風に人間として暮らす羽目になるとは思いもしなかった。全く、一度死んだというのに、人生とは何が起こるかかわらないものだ。

……いつかも言った。

衛宮士郎と、そして王達の酒宴の場で。

『人としてここに留まる事にも興味がない』

それは決して嘘ではない。現に、私は今すぐ座に帰ってもかまわないとすら思っている。

それが、こうして人として暮らすことにした、その理由は色々がある。だが、一番大きな理由は・・・多分、切嗣とイリヤが哀しむ顔が見たくなかった、それだけなのだろう。

この世界は既に私の知っている歴史と違う歴史を歩んでいる。

イリヤがいて、切嗣が生きているこの世界ではきつと、衛宮士郎が「正義の味方になる」という呪いを受け継ぐことはないだろうが、それでもあれは衛宮士郎だ。断言は出来ないし、なにより・・・この世界は私から見たら、私の知る歴史よりも理想的ではあるけれど、其れゆえの警報が頭の隅で鳴っている。

等価交換。私の知っている歴史とこの世界の歴史の違いはなにかの歪を生むのではないかと、漠然とした不安が寄り添っている。そこがどこから来たのかはわからない。

ふと、泥の中で見た光景を思い出す。

顔など既に忘れた。だが、あれは、暗闇の中で見たあの白昼夢で、確かに私は誰かに呼ばれたのだ。リンクが細くて切れそうだったけれど、今ならばつきりと自覚できる。私は、この世界に召喚されてからずっと、誰かと細いラインで繋がっている。召喚主ではない、切嗣以外の人間と。本能のようにそれを確かめなければいけない気がしている。そして、それに次に接触できるのはこのままなら10年後おこるだろう、聖杯戦争しかないと、自分でも理解出来ない部分で何故か確信している。

(10年後の・・・聖杯戦争か)

起こるのがわかっていいるのなら、それを止めるべきだ。それはわかっていいる。だが・・・。

(力が足りない)

アヴァロン

呪いの殆どは、聖剣の鞘の投影によって殆ど浄化されたというのに、依然この体は受肉した時のまま、弱体化したままだ。切嗣もはつきりとはいわないが、流れてくる魔力量から見れば、魔術師としては大分衰退していることがわかる。

それでも、普通の人間には今更負けはしませんが、トドメはイリヤを浚いにインツベルンの城に乗り込んだあの時。戦闘は得意ではないとはいえ、流石は御三家の一角というわけか・・・。そう、あの戦闘で私は遅至性の呪いを受けた。それは私の身体から大量の魔力を奪い、衰弱させるといった代物だ。今の私の魔力量など、たか

が知れている。正直言えば、いくら受肉しているとはいえ、現界するだけで精一杯だ。

チャリと、人形師青崎にもらった髪留めに手を伸ばす。

特別製の魔術礼装であるこの髪留めは、私が身につけることによつて、大気中の魔力を少しずつ集めて貯蔵することが出来、また、一度集めた貯蔵魔力は一流の魔術師にも看破されることはないという優れたのだが、一年、二年ではおそろくたいした魔力が集まると思えない。だが、時を経ればやがてここ一番の切り札にはなるだろう。

今は大人しく人間のフリを続けていよう。

右手の小指につけているこの指輪もまた、魔術礼装だ。これがある限り、私の気配は限りなく人間に近づく。受肉している身体も合いまり、まず元英霊だと気付かれることもないだろう。

そこまで考えて、ふと、先日切嗣に言われた言葉を思い出す。

「戸籍・・・か」

そう、切嗣は、必要だろうと行って、偽装書類を元に私の戸籍を作るとそういった。

私の真名は「衛宮士郎」だ。だが、ここに士郎が別にいるし、そもそも今の私は女の姿になっているし、色からしても、私を日本人と見抜ける者もないだろう。切嗣は好きな名前を名乗ればいいと言っていたが、さてどうするか。

まあ、いい。商店街で夕食の買い物が終わった後、改めて考えよう。

そう思つて商店街に入ったとき、その姿を見つけた。

黒いツインテールに、赤いスカートの女の子が、重そうな買い物籠を抱えて歩いている。連れもいずに一人で。

(全く、何をしているのか)

私は思わずため息をもらすと、その少女に「凜」と呼びかけながら、ひょいと、その小さな身体には聊か大きすぎる荷物を手に取っ

た。

「え？わあ、何するのよ・・・って、あんた」

吃驚した顔の、幼い遠坂凜が私を見上げていた。

「全く、この荷物は君には手に余るだろう。何故手伝いをよばなかつたのかね？」

「あんた、あの時の。って、いいわよ、私、自分ひとりで運べます！」

キツと意思の強い大きな目を私に向けて、一生懸命荷物を取り返そうとからまわる小さな紅葉のような手。荷物をひよいと上にあげたまま、いつかの日々を思い返して懐かしい気分になる。

「人の好意を無碍にするのは感心せん。まあ、いい。君の家までこのまま私が運ぼう」

言いながら、凜の家の方角へとゆっくり歩みだすと、凜は慌てて私を追いかけた。黒いウェーブを描いたツインテールがふわふわと風に揺れる。それがまるで動物の尻尾のようではほえましい。

「あのね、貴女ね、人の好意云々の前に、わたし、貴女と一回しか会った事ないんですけど」

「む、そうだったか？」

「いかん、つい凜が相手ということ、そういうことを失念していたらしい。」

「おまけに会うのは4ヶ月ぶりなんですけど？あんた、馴れ馴れし過ぎ！」

「む・・・」

しまった、それなら先に久しぶりと声をかけるべきだったか。その辺りをうっかりしていた。

「・・・それは、すまなかつた」

思わず頭を下げて謝罪する。

「それにね・・・って、わかつたならいいのよ、わかつたなら」

「まだも何かを言い募ろうとしていた凜は、だが私の謝罪を聞いて口をもごもごさせ、焦ったようにぶいと視線を逸らす。その頬は赤

く熟れた林檎のように真っ赤だった。思わず微笑ましくなる。

「何、何よ、その目」

「いや、ついな。君が気にするほどでもない」

どうも、気付いたら笑っていたらしい。

「わかつたんなら、荷物返してくれないかしら？」

むうと、立腹しながら凜は、小さな手を私に差し出している。

「いや、やはりこれは私が運ぼう」

「はい？」

「リトル・レディ 小さなお嬢さんに恥をかかせたお詫びだ」

しれっと、そういうと、凜は暫くぽかんと口を開けて、ついで、

茹で蛸のように耳まで真っ赤にしながら、「だから、なんで、あんたはそういうことというのよ。女なのに」とかぶつぶつと小さな声で呟いていた。む？と思わず首をかしげる。

「それにしても、あんた、ね」

凜はいつそ挙動不審なくらいに、焦った声で、私に語りかける。

無理矢理話題を変えようとする意図が目に見えるようだ。

「わたしのいうこと、覚えていたわけ？髪、のばしてるみたいだけ  
ど」

言われて思わず自分の髪に手をやる。

「・・・まあ、そうなるな」

「あんた、どうしようもなく男女だけど、ふん、長いの似合うじゃない。うん、そっちのほうがいいわよ。やっぱり口調とか変だけど、あんたも女なんだし」

むすつとした顔でそんな言葉を吐く凜。

「・・・女なんだし・・・か。ごめん、内心泣きたいよ、遠坂。悪  
いが全然嬉しくないぞ。」

む、いかん、昔の口調が表に出た。気をつけよう。

そんなことを考えながら、色々話を交えて歩いていると、気付けばもう遠坂邸は目と鼻の先にあった。

さて、別れるか。そう思い、荷物を返却して背中を向けたその時、凜は「あのね！」と呼び止めの言葉を叫んだ。

「あんた、約束は？」

・・・約束？はて、そんなものしただろうか？

「ああ、もう、こっちはいつあんたが言うのかわざわざまってたつていうのに」

凜は、ぐしゃぐしゃと自分の髪を乱しながら、憤慨したようにそんな言葉を吐く。いや、それは凜、折角の綺麗な髪が台無しになるからやめたほうがいいぞ、と思うが、逆鱗に触れそうなので黙っておく。

「名前！次に会ったら名乗るって言ったでしょうが！」

「あ・・・」

そういえば、もう会うことはないだろうなと思いつつながら、そうだった。そんなこといって別れたのだったな。すまん、凜。すっぱりうっかり忘れていた。

「何よ、その顔。忘れてたってわけ？」

むうと、唸りをあげる小さなあかいあくま。

「・・・すまなかった」

とりあえず素直に謝罪した。なんか、オレ今日謝ってばかりだな。「もう、いいわ。あんたが天然だったのはよくわかったから」

はあ、とため息をつきながらそんな言葉を吐く凜。・・・天然ってなんだ。天然とは。

「それで、名前は」

そうだな・・・なんと名乗ろう。

じつと自分を見上げる碧い瞳。黒いツインテールの未だ幼い少女。遠坂凜。かつて自分の憧れだった存在、魔術の師匠だった存在、そしてマスターであった少女と同一の起源をもつ存在。

「私の名前は・・・」

衛宮士郎はここでは、もう私の名前ではない。

普段よばせている名前の・・・シロと名乗るか？いや、それもあ

まり気がのらない。

そう、つまらない見栄かもしれないけれど、彼女には、彼女だけには私は特別でありたい。

私にとって彼女が特別であるように。

「・・・アーチェ」

サーヴァントでは既にない私が「アーチャー」を名乗るのはおこがましい。それはわかっている。それに、いくら幼い彼女でもアーチャーと私が名乗ればきつと、聖杯戦争のサーヴァントであることに気付いてしまうだろう。そんなことはするわけにはいかない。それでも。

(それでも、縁ゆかりに少しくらい浸つても構わんだらう?)

アーチェはアーチェリー。裏切ってしまったとはいえ、それでも私は彼女の弓となることを誓ったのだ。消え行く寸前に、契約を持ちかけてきた少女の顔を思い出す。彼女と目の前の凜が重なる。だから、そう、これは新たな誓いだ。きつと。

「衛宮・S・アーチェだ」

未だ小さな君に、この時代、出会はずがなかった君に、君だけに呼ばれる為だけの名を送ろう。

そして私は、心の底から暖かい気持ちに包まれて、君に向かって笑った。

了

おまけ、「シロねえと料理教室」



> i  
2  
6  
2  
7  
3  
| 3  
3  
0  
3  
2  
<

閑話 名前を君に（後書き）

久しぶりの凜様の出番は書いてて楽しかったです。いえい。  
・・・ところで、次回は海に行く話にするつもりだったんですが、  
時系列的に考えて、授業参観に行く話にしようかなと順番を変更し  
てみたり。

まあ、まだまだ閑話は続くよ。

## 閑話 授業参観（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

閑話にしては今回の話ちょっと長くなつたなあと思つたりした。

今回もおまけ四コマついていたりするんですが、小学生ネタのおまけ四コマがもう一個あつたりするのに、上げる予定の閑話集でもう小学生ネタがない罨。（次の予定は士郎中1時代の閑話が予定だったのです）

えー、誰か小学生士郎なイベントで見たいネタある方はいませんかー？

## 閑話 授業参観

side・衛宮士郎

衛宮の家に来てから、あつという間に何年も月日が経った。今年で俺も小学五年生。一つ年上のイリヤと同じ小学校に通うのは今年で最後だ。そう思うとなんだか少し不思議でくすぐつたい。

あの日、あの大火災の日、全てが燃え尽きて、両親も隣人も帰る場所も何もかも全て失ったと思っただのに、俺は新たな家族の元で穏やかな生活を送っている。

衛宮切嗣。俺の今の父親。いつもにこにこ俺たちを見ながら見守っている。家事も仕事もシロねえにまかせっきりっぽいのに、この普通の邸宅というにはでかい屋敷を購入したのはこの人らしいし、昔仕事で溜め込んだんだとかで、金はもっているらしい。シロねえが言うには、切嗣が今働いていないのは理由があるんだって。でも、爺さんに理由を聞いてもはぐらかされるんだよな。

藤村のじいさんと親交が深いらしく、時々話し合っているのを見かける。そういう時の爺さんきりつぐは、のほほんとした隠居人みたいな家での姿が嘘みたいにかっこいいと思う。

あの、大火災の日、伸ばした手を包んでくれた大きな手の暖かい感触を思い出す。

イリヤは爺さんのことを「キリツグは本当だらしがないんだから。士郎はあんな大人になつちや駄目なんだからね？」っていうけど、それでも俺にとっては、あの火災の記憶のせいもあるかもしれないけど、やっぱり切嗣はヒーローで、憧れの人だなんて思う。うん、俺は爺さんのこと好きだ。「父さん」とか「親父」とか呼ぶのは照

れくさくて中々言えないけど。

シロねえ。フルネームは衛宮・S・アーチエっていうんだって、一緒に暮らし始めて半年以上経って知った、義理の姉。Sは何の略か教えてもらえなかったけど、「シロ」って本人は名乗ったから、多分シロがつく名前なんだと思う。

引き取られた日、「なんかおれの名前と似てるんだな」と嬉しくなってそう言うと、シロねえは「そうだな」と複雑そうな顔をして返事をした。よくわからないけど、悪いことを聞いたのかなと思う。

シロねえは、一言で言うなら凄い人だ。料理なんかもそうだけど、家事全般が得意で、繊細で、いつも家の中はピカピカで、だけど、いつ掃除をしたのかとかがちつともわからない。気付いたときには終わってるみたいで、だからいつも手伝おうとしてもタイミングを逃すんだ。でも、去年あたりになって、食後の皿洗いを任されたときは、ちよつと認められたみたいで嬉しかった。

はつきりいって、うちで一番忙しなのがシロねえだ。色んなところで仕事していて、しかも人に頼まれたらはいはいと引き受けていて、しかも完璧にこなすんだ。その姿は俺から見ても凄いなと思うけど、無心に真摯に何事も取り組む姿は、ちよつと憧れを覚えなくもないけど。自分の時間とか度外視して頼まれごとを引き受けたりするのは、なんだか納得がいかない。もう少し自分を大事にして欲しいとも思う。

だって、シロねえは、女の人だ。地味な格好ばかりいつもしているけど。言葉遣いだって女性らしくはないけど。でも笑顔が綺麗で、気立てもよくて、心配性で、ちよつとわかりづらいくらいけど凄く優しい、女らしい人じゃないか。なのに、自分は幸せになっちゃいけないみたいな顔とかするのや、人に利用されるのもまたよしみみたいな態度を取るのを見ると、なんだか腹が立ってくる。シロねえはもつと、女としての幸せを追求するべきだと思う。恋人の一人でもつくればいいのに。

でも、男とも普通に話すし、警戒心とかないわりに、この人男に

モテるの嫌がるんだよな。男嫌いでもないっばいのに、なんでそんなに嫌なのかとか見ていて結構不思議だ。

あ、でも恋人を作ればいいとは思っけど、誰でもいいってわけじゃないぞ。シロねえにはやっぱりちゃんとした人と付き合っただけだと思ってる。

そもそもシロねえって、基本的に凄くしつかりしているし、家事も仕事もなんでも出来るっばいけど、たまに、変なところでうっかりしているんだよな。包丁と間違えて夫婦剣投影したりとか。おまけに美人でスタイルもいいのに、男にモテるとか嫌がっているわりに、男への警戒心とかないし。むう、その辺りどうなんだろう。

弟としては、いつか変な男に騙されないか凄く見えて心配になるんだけどな。だから、いつそきちんとした恋人とか作ってくれたほうが安心するんだけど。でも、シロねえ、そういうの話題に出すだけでも嫌がるんだよな。まあ、それで「うちの娘に手を出そうなんて不届き者は僕が仕留めるよ?」「シロはわたしのなんだから、恋人とか作らなくていいの」とか言っちゃうちの家族も別の意味で心配なんだけどな。でも、それもみんなシロねえが好きだからなんだと思う。

うん、俺もシロねえが大好きだ。

俺より一つ姉のイリヤ・・・イリヤスフィールは、ちょっと吃驚するくらい美人で、うちの小学校で多分一番の有名人じゃないかなと思う。

まるで雪みみたいな白銀の綺麗な長い髪に、紅色の大きな瞳に、透き通るような白い肌で、まるで絵本に出てくる妖精みたいだ。今では大分慣れたけど、最初の一年くらいはイリヤのちよっと過剰なスキンシップについドキドキしてた。

無邪気な笑顔は素直に可愛いと思うし、イリヤは俺より小さいから、姉には見えないんだよな。だから、未だにイリヤって呼んでいるけど、今では大切な姉だと思っっている。うん、姉だって認めているんだ。でも、今更呼び方を変えるのも照れくさいし、なんだかん

だでイリヤって呼び方に愛着をもっているんだと思う。だから、「姉さん」とは呼ばない。でも、イリヤはいつも「士郎はお姉ちゃん」が守ってあげるんだから」って言うてるくらい、俺の姉だつてことに誇りをもっているみたいだから、多分姉さんって呼んだらすごく喜ぶんだろうなあって思うけど、そんな満面なイリヤとか見た日には、気恥ずかしさのあまり死ねそうだから、やっぱり呼ばない。うん、イリヤはイリヤだ。

でも、イリヤ、シロねえ相手にまで姉ぶるのは見ていて変だからやめたほうがいいと思うぞ。

今の俺の家族は、まあ以上、俺を含めての4人になる。あ・・・と、家族じゃないけど、半分家族みたいなものかなつて人を忘れてた。

藤ねえ。本名は藤村大河っていうんだけど、名前で呼んだら怒られるから、藤ねえって呼んでいる。・・・でも、切嗣じいさんが「大河ちゃん」、シロねえが「大河」、イリヤが「タイガ」って呼ぶのは許してるんだよな。なんで俺だけ怒るんだろう。不公平だ。

藤ねえは、爺さんと親交の深い、藤村組の孫娘とかで、「冬木の虎」とかよばれてて、まあ実際本人もなんか虎みたいな人だ。

三日に一回くらいの確率で家へと嵐みたいにやつてきて、夕食を平らげては去っていく。うん、あまりにハイテンション過ぎて全然ついていけないぞ。

藤ねえは爺さんのことが好きらしく、「切嗣さん、切嗣さん」と爺さんによく尻尾をふっている。爺さんもそこでにこにこ藤ねえの相手をするから付け上がるんだけど、藤ねえはイリヤが苦手らしくて、しょっちゅう言い負かされている姿を見かけるし、その姿は自分より一回り年上には見えないし、俺は藤ねえを「女の人」にあまりカウントしたくないなあって思ってしまったりする。多分イリヤがいなかったらもつと今以上に頻繁にうちにきていたんじゃないのか？あれ。

そつえば、藤ねえはこの家に通い始めた最初のほうは、シロね

えのことを「本当は切嗣さんの愛人なんじゃ」とか疑っていたらしくて、結構つかかっていたのに、いつの間にかシロねえにも懐いていた。餌付けされたんじゃないかと思っている。今では藤ねえもシロねえのことが好きみたいだ。

なんだかんだいって、俺も藤ねえのことは嫌いじゃない。うん、寧ろ好きなんだと思う。絶対本人には言いたくないけど。だから、こうやって頻繁にうちに来るのは、家族が増えたみたいで嬉しい。

「授業参観・・・か」

じつと、学校で渡されたプリントを見つめる。思わずため息をつ。

去年も一昨年も、俺はプリントを『家族』の誰にも渡さなかった。爺さんも、シロねえも、イリヤもみんな好きだ。でも、こういうことは別だなと思ってしまふ。

イリヤは爺さんの実の娘だ。イリヤの授業参観があれば、爺さんが行くべきだと思うし、シロねえはいつも忙しい。頼みたくない。だってシロねえは頼みごとを断らない。自分より他人を優先してしまふんだ。俺の授業参観なんかに手を患って欲しくない。

だけど、去年プリントを隠していたことを知ったイリヤに散々怒られたんだよな。「シロウの馬鹿！なんで、そんな大事なことを言わないの！そんなことしていると、シロみたいになっちゃうんだから！！」とか、そんなことを言われたよな。

多分今年も隠したりしたら、イリヤは去年よりも怒るんだろうけど、どうしよう。

来てほしいか、来て欲しくないかなら、そりゃ来てほしいけど・・・でも、やっぱり言いづらい。

だって、授業参観にくるのは、殆どが母親達だ。たまに父親もいるけど、そうだ。俺は爺さんもシロねえもイリヤもみんな大事な家族だと思っているけど、でも切嗣もシロねえも俺とは似ていないし、家族だって理解してくれないかもしれない。（シロねえなんて、見



た目どう見ても日本人じゃないし）変な噂とか立てられるかもしれない。切嗣やシロねえが無責任に色々言われるのは嫌だ。

うん、イリヤには悪いけど、やっぱり授業参観のことは黙っておこう。

そう思っつて、プリントを隠したまま、授業参観の日を迎えた。

クラスメイトの母親たちが揃う教室の風景は、いつもと違っていで、気付いたら軽く緊張して、こわばっている自分がいた。

他のクラスメイトも浮き足立っている。先生がパンパンと手を叩いて「はいはい、皆さん静かにしましょう」と声をかける。ざわめく教室。ああ、今年も始まった。そう思い、肩の力を抜いたその時、がらりと、扉を開ける音がした。

「すまないが、隣に失礼しても構わないかな」

小声で、扉の前の誰かの母親に断りを入れる、どこか少年じみたハスキーな女の声。

クラスメイトの視線が、母親達の視線すら、その入ってきた人物へと集まる。

イリヤの銀髪ともまた違った真っ白な髪を一つに束ね、日本人離れした鋼色の瞳に褐色の肌を黒いダークスーツに包んでいる。ネクタイをもししていたら、完璧に男装だと思っただろう格好だ。だけど、スーツに包まれてなお、その体軀は隠し切れぬ女の丸みを帯びていて、一種独特の雰囲気がある、長身の若い女。間違いなく、シロねえだ。どこからどう見てもシロねえだ。

え、なんでさ？なんできてるのさ。

あまりの周囲との浮きっぷりに、先生も戸惑いながら「失礼ながら、貴女は・・・？えーと、あ、日本語わかるのかしら？」とか、声を半分裏返ししながらそんなことを言ってる。シロねえは、周囲の奇異の眼差しに不思議そうな顔をして首を傾げたかと思うと、ついで何かに納得したような顔をして、先生を見て、にこり。男も女も魅了してしまわんばかりの笑顔を浮かべて、「先生の生徒の衛宮の

姉ですよ。私のことはお気になさらず、どうぞ授業の続きを」「そんな言葉を放った。

思わず頬が火照る。

普段、シロねえは、俺の姉だなんて言わない。どうしよう。なんだか、嬉しいんだか、恥ずかしいんだか、よくわからなくなってきたぞ。

「すげー、衛宮のねえちゃん外人かよ」

「イリヤ先輩ともタイプが違うね」

「衛宮君のお姉さんかっこいい」

とか、そんな声は、あー、あー、聞こえてない。聞こえてないぞ。その日、その時の授業内容のことは、ちっとも頭に残らなかった。

side・エミヤ

「明日ね、授業参観なの」

と、イリヤが言い出したのは昨日のことだった。

「切嗣が行くといっていたからな、知ってはいるが。なんだ？私も行っただ方がいいのか？」

と、イリヤの服を作りながらそう尋ねると、イリヤはむうう・・・と可愛らしく唸りながら、「違う」と苦々しく言った。

「そりゃ、シロが来てくれたら嬉しいけど。あのね、わかっていると思うけど、士郎も明日が授業参観なのよ？」

真剣な目でそう抗議する白いお姫様。とりあえず、作り掛けの衣服を横において、真っ直ぐにイリヤに視線を合わせ「それで？」と尋ねた。

「あいつは私たちに来て欲しくないと思ったから、プリントを渡さなかったのだろう。なら、行くのは却って迷惑だと思うが」

「シ〜ロ〜!」

む、イリヤが無敵の姉モードに入っている。なんだ？私は間違っただけだよ。たことは言っていないはずだぞ。

「もう、シロウはね、遠慮してるのよ。きてもらうのは迷惑とか筋違いのこと考えてるの！なんでシロウと同じだったのに、そこがわからないのかしら・・・」

・・・私にそういわれてもな。生前の記憶など、それも小学生時代の記憶など殆ど摩擦して風化しているも同然なんだが。

だが、ふむ、そうか。遠慮か。自分と違う衛宮士郎とはいえ、やはり衛宮士郎は衛宮士郎か。いかな。答えを得たからにはそれまでの人生を否定するつもりはもうないが、それでも他の何者にも私と同じ道を辿らせるのだけは御免だ。そういうところも、修正していかねば。

「シロ、お姉ちゃん命令です。明日の授業参観、シロウのところに行ってきたさい」

びしり、と指をさして毅然と言い放つイリヤスフィール。

「了解した」

ちよつと皮肉気な笑顔を浮かべて返答とした。

そして、当日になったわけだが・・・。

なんとというか、当たり前というか、わかりきっていたこととか・・・参加者は殆どが子供達の母親だ。ここまで大量に婦人会のご婦人方がいるというのも圧巻だ。

見た目は私も女とはいえ、精神は未だに男のつもりである身としては、中々入っていきづらいオーラが漂っている。落ち着け、体は剣で出来ている、体は剣で出来ている。うん、大丈夫だ。

そして、さあ士郎の教室に向かうか、と思ったその時「あら、エミヤさん」と呼び止められた。見れば、そこには週2で私が開いている料理教室に通う奥様方。「こんなところでお会いするなんて」と一人の奥さんが言い出したのがきっかけで、私のことを知ってい

る人間が沸いてくる、沸いてくる。なんだこの状況？気付いたら10分以上、ご婦人方に取り囲まれて話をしていたということに……。

「すまないが、私は行くところがあってね、ここらで失礼するよ」  
そういつて、なんとか囲みを抜け出るのに更に5分。・・・なん  
でこんなに時間かかっているんだろう、とか思ったりなんてしてな  
いぞ。うん、そうだ。女のパワーを侮るなかれ。元英霊でも太刀打  
ち出来ないものとはあるのです。

そして、急いで土郎の教室へと入っていった。

(全く、なんて顔をしているのだから)

授業も終わり、土郎と二人で歩いているのだが、先ほどから土郎  
は顔を俯かせたまま、がちごちに緊張したままだ。思わずため息を  
吐く。

授業後は、保護者と一緒に帰宅していらしいので一緒に歩いて  
いるものの、いつもその違いのようにどう反応していいのやら、何  
気に困る。

イリヤは、今日は土郎と一緒に帰って。そう言った。まあ、たま  
にはイリヤと切嗣を二人つきりにさせるのも悪くなくろうと思つて  
了承したわけではあるが、なんとというか、この空気はどうしたもの  
か。

この空気は困る。この衛宮士郎は、衛宮士郎であるけれど、私に  
繋がる衛宮士郎でもないから余計に困る。

「あー・・・その、なんだ」

意を決してとりあえず声をかける。

「急に、悪かったな。頼まれてもいないのに رفتたりして」  
土郎がびたりと足を止める。

「迷惑だったのならはつきり言え。次からは行かん」  
ぼそり、と小さな声で、土郎が何かを呟いた。ん？

「土郎？」

「・・・ワクなんかじゃない」

赤い髪が震えている。

「迷惑なんかじゃない」

そういつて、きつと眦を吊り上げて言う土郎の顔は、髪に負けないくらい真つ赤だった。

「シロねえがきてくれて、嬉しかった」

・・・私の得意な鉄面皮はどこに行った。

あれか、これが遠坂の呪いか。発動しないように気をつけてても、変な所で発動するように出来ているのか。

なんで、私は・・・顔を赤らめているんだ。ちよつとまで、私のキヤラじゃないだろ。なんで顔が火照る！？土郎の照れ顔は感染するものなのか。いや、普通は感染などしないだろう。いかん、自分で自分の思考がわからなくなってきた。心眼スキルはどこ行った。

いや、落ち着け。いつも通りに振る舞うんだ。いつもの私に戻れ。  
「・・・そうか」

とりあえず、返事をかえしてなんでもないように・・・出来なかった。何故、声が上擦る。何故、顔の赤みがひかない。

「なら、次からは遠慮するな」

顔を合わせるのはなんともし気恥ずかしい。そつぱを向いて、戸惑ったまま、気付いたらそんな言葉を吐いていた。

「オマエが遠慮をすると、皆が気にする」

「シロねえも？」

・・・なんていつた、この子供は。

「シロねえも、俺が遠慮していると気にする？」

何故、そんな嬉しそうな、期待に満ちた瞳でそんなことを言う？私はそんなことを聞く子供じゃなかったはず、うん、そう、摩擦してよく覚えていないがそのはず。いや、この衛宮士郎は私にならない私だからそれでよくて、あれ、うん？自分で自分が本当によくわからなくなってきた。

「なあ、シロねえ。どうなんだよ」

ああ、もう、そんな眼で見るんじゃない。というか、聞くな。顔から火が吹きそうだ。

「ああ、気にするとも。だから、もうオマエは遠慮なんかするな。満足したか？なら、これでこの話は終いだ、いいな？」

早口で追い立てるようにそう言って、無理矢理話を打ち切った。

そもそも、ああ、なんで私はこんな小さな子供相手に（しかも、元は同一人物といえる子供だ）こんな風に心乱されているんだ？

「うん」

頷いた少年は、にっこりと、太陽みたいな顔で笑った。

「へへっ、シロねえ帰ろうぜ」

照れ交じりの満面の笑みを浮かべて、士郎はぐいと私の手を引いて家へと歩む。

「ああ、そうだな。帰るか」

手を繋いで家まで帰って、そしてああ、そういえば士郎から私と手を繋いできたのはこれが初めてだったな、とそんなことを思った。夕陽の綺麗な日のことだった。

了

おまけ、「姉というより母親」

閑話 授業参観（後書き）

というわけで、ちょっと心の距離が近くなったエミヤさんと太郎の話なのでした。

どうでもいいけど、四コマ漫画三コマ目の太郎が、今まで描いてきた中で一番士郎らしく描けた気がするんだぜ。

閑話 そつだ、お山に行こう（前書き）

やあ、ばんははろEKAWARIです。

今回の話は急遽つくったわりにはそこそこまとまったんじゃないかなあ。

この話読めばわかるだろうけど、この話の士郎は原作士郎よりもよく笑つ子です。



## 閑話 そつだ、お山に行こう

side・衛宮士郎

「春休みなんてあつという間ね」

TVを見ながら、イリヤがそんなことをぼやく。

「とうとう、シロウと別の学校か」

その言葉には残念そうな響きがあった。

今日の日付は4月2日。あと数日で俺は小学校の最上級学年に上がり、イリヤは中学校に入学する。

つまり同じ学校にまた通おうと思えば、あと一年またなければいけないことになる。それがイリヤには不満らしくて、春休みが始まる前からこの手の愚痴をよくこぼすようになった。それがちよつと嬉しいけど、恥ずかしくもある。有体にいえば照れ臭い。

イリヤの名前や容姿からして、俺と「実の姉弟」と思うやつはいなかったし、実際血は繋がっていないわけだけど、それでも俺たちは姉弟として上手くやっているとと思う。先生には衛宮くんちのご姉弟はいつも仲良しね、といわれてきたけど、イリヤは凄く美人で天真爛漫で可愛いから、よくやつかみも受けたし、「オマエなんかイリヤ先輩の弟なんかじゃない」なんてことを言われることも結構多かった。そのたびに、一番激怒したのはイリヤだった。「シロウはわたしの弟なんだからね」とはイリヤの口癖だ。

それを嬉しいと思う。俺もイリヤのことが大好きだ。でも、小さい頃はほほえましく見られても、大きくなつてくると、姉弟よりもカップルみたいの間違われることも増えるし、イリヤの過剰なスキンシップにどきどきしてくる。

イリヤに好かれているのは嬉しいけど、こうやって別の学校になることを惜しまれるのも嬉しいけど、でも正直一旦距離を開けられるのは俺には少しありがたかったりもする。

俺もいつまでも子供でいられないだし。

なんてことを考えながら、お茶を啜っていると、シロねえがひよっこり、マドレーヌを片手に入ってくる。

「あ、ねえ、シロ」

ぱっと顔をあげて、イリヤはシロねえに視線をあわせる。

「お花見とか、温泉とかなんでもいいから、どこか今から行けない？」

「・・・別にかまわないが、中学校に入学する準備は全部終わったのかね？」

「そんなの、とっくに終わってます」

心外だわ、と言わんばかりのむくれ面でそう返答するイリヤ。それに、後ろから、ひよっこりと爺さんが現れて「ああ、それなら・・・」と、手元の紙を見ながら「お山に行こう」

そう、言い出した。

side・エミヤ

「それで、どういつつもりかね？」

切嗣の部屋で、向かい合わせに座りながら、今回の突然の柳桐寺行きについて真意を尋ねる。

4月3日から4日の一泊二日で、既に住職とは話をつけているという。

「まあ、お寺での生活もいい社会勉強になるんじゃないかと思ってね。それに、零観くんたちにも一度来ないかと誘われていたし、た

またまだよ」

「爺さん」

じろりと、見据える。

「はぐらかすな」

それに、切嗣じいさんはばつの悪そうな顔を一瞬浮かべると、ため息を一つ。「うん、これは表向きじいさんの用事」と言った。

「大聖杯の確認がまず一つだね。流石にあれを破壊するほどの力が今はないし、不審な動きを今やって魔術協会に目をつけられるといけないし。まあ、それでも、色々と準備くらいは出来るだろうから……そんなこと数年前にもすませていたはずだ。」

あの日、話し合いで決めた。次回の10年後の聖杯戦争に自分達は関わる。それまで力を蓄えていると。

本当は破壊しようとするれば、手段を選ばなければ方法はないわけではない。だが、それを……その手段を切嗣は認めなかった。

私が破壊するならば、第四次聖杯戦争直後ならともかく、3割ほど力が戻った今なら、現界魔力全てをつぎ込んだら、切嗣のただ一つ残った令呪のブーストさせれば不可能ではないだろう。だが、私の消滅を切嗣は拒否をした。

切嗣じいさんが破壊するのならば、いつものように、魔術師らしからぬ手段で、金にものを言わせて、爆薬を落としてしまえば不可能ではないだろう。だが、そんな派手な手段をすれば目をつけられる。そもそも、御三家のうち二家が冬木の土地にあるわけで、聖杯戦争中のださくさでもないのに、大聖杯の破壊なんてド派手な真似を見逃すはずがない。まあ、それだけなら切嗣にとって問題ではないのだろうが、それでも問題なのは、私と士郎、そしてイリヤの存在だ。

切嗣は魔術師殺しとしてももう死んだも同然だ。全盛期の半分の実力も残っていないだろう。そんな状態で、大聖杯を破壊して、未だ幼い士郎やイリヤたちを守れるかといったら、絶望的という他がない。

おまけに、私が受肉した英霊だなどということが協会の耳に入れ

ば、モルモットとしてこぞって狙われよう。爺さんはそれを一番恐れているように見えた。

そしてなにより、この、穏やかな日常を守りたいと、そう思っているのだ。

悲劇のシナリオに蓋をする。自分達がかかわるのは次回の聖杯戦争だと、脅威を前に蓋をする。

だが、それは果たして悪いことなのか。

切嗣は夢を通して私が知っている第五次聖杯戦争の内容も知っている。

私の歴史のイリヤや士郎を知っている。

親として子を愛し、子供達に同じ悲劇を与えたくない、慈しみ今は平和な日常を与えたいと、士郎に「自分は幸せになっただけじゃない」なんて考えをさせないようにしたいと、そう思うことは罪なのか。

思考停止と試行錯誤の連続。それが第四次聖杯戦争が終わってから、今までのこの男の全てだ。そしてそれは私の全てでもある。

なんとといっても、本人が否定するし、私ももう口に出さないけれど、それでも私は本来サーヴァントで、この衛宮切嗣こそが今のマスターなのである。

本当は、必要以上にこの世界に関わるべき存在ではないのだ。なら、マスターの意向に従うのが筋というものだろうか？とは言っても、これは言い訳だ。それを言い訳にして、この、夢のような生活を享受している。それが私の現実だった。

私ではない、私に決してならないだろう衛宮士郎と、天真爛漫なイリヤ、かつて憧れた父と同一の起源をもつ切嗣。本来なら交わらないだろう存在であるはずの私が、家族として受け入れられ、人間のフリをして生きている。本当はいつか（本当は今すぐにでも）切り捨てなければいけないことを知っておきながら、それでもここにいる。この生活に、身も心もまるで麻痺していくかのようだ。そう、これは私を溶かす甘い毒薬なのだ。それにもう、膝まで漬かりきつ

てしまっている。

(未熟だな、オレは)

マスターの方針を言い訳に、この生活を一番終わらせたくないとか願ってしまっているのは、きつとオレのほうなんだろうよ。

「シロ・・・？」

はつと、我に返る。爺さんは不思議そうな顔をして私を見ていた。「いや、なんでもない。しかし、準備といっても、今更何をする気なのかね？」

「うん、ここ数年で地脈のあちこちに円蔵山へ流れ込むレイラインに瘤が発生するように仕組んでおいたんだけど、その仕上げと微調整というところかな」

そこで、切嗣は、ふと自嘲気味な笑みを口元に浮かべる。

「次の戦いで、万が一僕達がしくじったらの・・・まあ、ただの保険なんだけどね」

そういつて乾いた笑いを浮かべた。

「万が一なんて、ないさ」

ぎゅっと、その瘦せた手を掴んで、不敵な表情を作り笑った。

「私がついている。大丈夫だ」

side・イリヤスフィール

(足いたーい)

長い石段を憂鬱な気分になって上がっていく。

全く、切嗣もわかっていないんだから。確かにみんなどこかに行きたいと提案したのはわたしだけど、誰が好き好んで、こんな山の上のお寺なんかに行きたがるというのかしら？本当ずれているんだから。

そう思い上っていると、隣のシロウが「大丈夫か？」と心配そうな顔で言った。どうやら顔に出ていたらしい。でも弟の前でかっこ悪いところとか見せられないわよね。

「大丈夫よ、シロウ、こんななんでもないんだから」

と、意気込んで返答すると、横からひよこり、私は褐色の腕に浚われていた。

「だから、もう少し動きやすい靴をと言ったんだが・・・それは自業自得だぞ」

「だって、ここまでキツイなんて思わなかったんだもの」

むうくと、拗ねながらじいっと、私をお姫様抱っこで抱えた人物を見上げる。犯人であるシロは、仕方ないかと、まるつきり子供をあやすような顔をして、「じっとしている。上についたら、ママが出来ていないか診るから」とそんなことを言っ、私を腕に抱えたまま、なんでもないかのように残りの石段を上がっていく。

「私がお姉ちゃんなのに」

「年は今の私のほうが上だ。こういう時くらい素直に甘えててくれ、イリヤスフィール」

・・・なんでこういうときは、シロはかっこいいのかな。

「シロねえすげえな・・・」

と、後ろからシロウの感心したような声が響くけど、どこことなく複雑そう。

「みんなー、おっそいぞー！とくに士郎！あんた若いんだからもっとちゃっちゃんと上つてきなさいよね」

石段の上に仁王立ちした虎がなにかを叫んでいる。

「なんで、タイガがいるのかしらね」

人の家族の団欒に飛び込んでくる、その人の厚顔無恥っぷりにわたしは思わずため息を吐いた。

・・・楽しい思い出作れるかと思ったんだけどな。

「よしっ」

言われたとおりに廊下を拭いて、ぱんと、雑巾を絞って広げる。

廊下は広くて、掃除のし甲斐があった。

「随分と慣れているのだな」

「そうでもないぞ？学校と自分の部屋くらいしかしていないし。それに、同い年なんだろう、そんなに固くならなくてもいいぞ？」

振り向いた先にいるのは、眼鏡をかけた秀麗な顔立ちの、同い年の少年だった。

「む・・・これは習性のようなものだ。気にするな、衛宮」

「士郎でいいって」

少年のその様子に苦笑する。少年の名前は柳洞一成、この寺の息子らしい。

「二人とも、ここにいたか」

ひよこりと、シロねえが現れた。

「夕食の準備が整った。手を洗ってきたまえ」

シロねえの今の格好は、家でつけている赤いエプロンじゃなくて、料理教室の時身につける割烹着姿だ。そこから、今日の夕食はシロねえが用意したんだとわかる。

「行こうぜ、一成」

嬉しくて、笑顔で少年の手をとって歩く。一成はそれに顔を赤らめてもごもごといったが、大人しくついてきた。

（？なんだ？）

細かいことを考えるのはやめて、今日の夕食に思いを馳せた。

「ほう、これは凄い」

寺のみんなが感動のため息をついている。

「たいしたものではありませんが、ささやかな一泊の礼です」

にこりと、笑いながらそうシロねえがいう。机に並んでいるのは見事なまでの精進料理の数々だ。季節の山菜や大豆などの類がふんだんに使われている。肉つ気ゼロ。それにも関わらず、なんとも食欲をそそのこの香りや見た目といい、料理人の腕の凄さを見せ付けている。

「ご謙遜を」

言いながら、一成の兄だっという零観さんが苦笑する。

「うわあ・・・精進料理とかあまり美味しくなさそうと思ってたけど、シロさんが作るとこんなにおいしそうになるのね」

何故かついてきた藤ねえも、ちゃっかり座って瞳を輝かせながらそんな言葉を言う。

「いただきます」

その言葉と共に食事は始まった。

その味は、見た目や匂いに恥じず絶品。精進料理ってこんなに美味しいのかと思わせるには十分な出来だった。

皆が食事を終えたタイミングを計って、シロねえが各自に茶を配っていく。イリヤも、シロねえのあとについていつてるようだ。その様子がなんだかほほえましい。

一成も恐縮しながら茶を受け取り「やや、かたじけない」と、やはり年齢に似合わない堅い口調で返答してずりと茶を啜る。その様がやけに似合っつて、おかしくなって少し笑った。

「衛宮は、良い姉君をもたれたな」

しみじみと呟いている。

「シロさんのようによく出来た婦人はそうはいまい」

なんだか、時代劇かかっている言い回しだ。でも本人は真剣なんだよな。それがちよつとおかしくてほほえましい。

「む？俺はおかしなことを言ったか？」

「いや、そんなことはない」

はにかみながら俺は、「うん、シロねえは自慢の姉だよ」そう言



って笑った。

用意された部屋に向かって歩いてみると、男の声が俺を呼び止めた。

「や、士郎君」

「零観さん」

にこにこ陽気な顔をした、一成の兄がやってくる。

「いやあ、君のお姉さんは凄いな。あんなよく出来た人はそうはいないよ」

「一成も同じこと言っていましたよ」

使い慣れない敬語を意識して、苦笑しながらそんなことを言う。

陽気な零観さんに、堅くて真面目な一成は一見正反对タイプに見えて、その実こういうこと言うところが兄弟なんだなあって思う。

「おや？一成が。はは、あの子は見てのとおりの子だね。人望はあるんだけど、友達はずなくて。よければこれからも一成と仲良くしてやってくれないかな？」

「はい。喜んで」

実際、ここにきて、一成という友人が出来たことは嬉しかった。

俺には同性の友達というのは少ない。

それはまあ、いつもイリヤといるからってのも大きいだろうし、イリヤの血の繋がらない弟ってことで、やっかみをむけられることも多いからかもしれないし、それでも俺はイリヤが好きだけど、こっちは同じ年の男友達が出来るとのいうのは、嬉しいものだなって思う。

「うん、良い笑顔だ」

零観さんは陽だまりみたいで、くしゃりと、俺の頭を撫でる。それがくすぐったくて、ちょっとだけ恥ずかしい。

「今日はどうだった？初めてのお寺生活はやっぱり大変だったかい？」

「そうですね。確かに慣れないことばかりでしたけど、楽しかった

ですよ」

「うん。君は若いんだ。色んな経験を積みなさい。でも、その楽しかったという心を忘れないようにな」

そう言っつて零観さんは、もう一度くしゃりと俺の頭を撫でて去っていった。

それから、時間が過ぎるのはあつという間だった。俺が風呂に入るのにイリヤが突撃してきたり。そのイリヤの行動に一成が慌てふためいたり、イリヤが一成をからかったり。夜、やっぱりイリヤが忍び込んできて一緒に寝て、次の日の朝、一成に驚かれたりとか。爺さんはただそれをにこにこ眺めていた。シロねえは見守りながら、それでもさり気なくみんなの手助けをしていた。

そんな風に行っているうちに帰る時間になった。

「じゃあ、土郎君もイリヤちゃんもまたおいでね」

にこにこ零観さんが言う。

「まあ、気がむいたらいつてあげてもいいわ」

まんざらでもない顔でイリヤが答える。

一成は、じつと下を見て静かだった。思わず苦笑する。

「土郎？」

不思議そうにシロねえが俺の顔を見る。

俺は、すつと、一成にむかって右手を掲げて、「一成、またな」と言った。

同い年の秀麗な顔立ちの少年は驚きながら顔をあげる。その後、照れ臭そうに「うむ。またな、土郎」そう言っつて俺の名前を呼んで、ハイタッチをして別れた。

小学校六年に上がる年の春、俺に新しい友達が出来ました。

了

おまけ、「父親なんて……」

> i 2 6 5 9 8 | 3 0 3 2 <

閑話 そつだ、お山に行こう（後書き）

というわけで、お山の話でした。つうわけで高校に上がる前に一成と知り合いました。

藤ねえは出せたけど、出番少なかったなあ。ぶっちゃけ藤ねえの使いどころが難しく困る。

おまけ四コマ今回のネタは、切嗣の扱いネタですが、ナチュラルにうちの切嗣の扱いこんなんですーせん。途中でバーサーカー倒せなくて放置しちゃったけど、タイガー道場アツパーを見てるとこんな親子に自然と・・・げふんげふん。

次回はみんなお待ちかね？海の話になっています。三人娘も登場したりしなかったりするよ、お楽しみに？

閑話 夏と海とシロねえと（前書き）

やあ、ばんははろ、E K A W A R I です。

知っていますか？女性が男性ホルモンを摂取すると、ヒステリーが減少し、髭がはえてきて、体毛が濃くなり、にきびが出来やすくなり、声変わりをし、性欲が増強されるようになることが多いらしいです。

んでもって、男性が女性ホルモンを摂取すると、気性が穏やかになり、性欲が減少し、胸が膨らみ始め、身体が丸みを帯びてくるんだそうです。

異性のホルモン摂取だけでこれだ。性別が変わって、全くそのままってのは難しいでしょうね。言いたかったのはそれだけ。

閑話 夏と海とシロねえと

side・衛宮士郎

じりじりと、照りつける太陽、真つ青な空、碧い碧い海、そして、大量の人、人、人。

「イリヤたち遅いな」

パラソルを張って、場所を確保し、ぼんやりとそう言葉をかけると、隣から返事がかえってくる。

「まあ、女性の支度ってというのは、いつだって時間がかかるものだからね」

苦笑しながら答えるのは、黒髪中年の口ひげを生やした男。義父の切嗣だ。今日はいつも来ている着流しじゃなく、白いパーカーに日差し避け用のサングラス、青い海水ズボンという出で立ちで、ゆつたりと、持参したやや大きめのクーラーボックスに腰をかけている。

「ほら、シロ、早く！」

可愛らしいイリヤのせかすような声。

「ちよっと、まちたまえ。やはり、こういうのはだな」

「言い訳はききませーん。士郎、おまたせっ」

そういって、花のような笑顔で現れたのは、可愛らしいピンクのワンピースタイプの水着に身を包んだイリヤだった。中学二年にあがって、体つきも女性らしくなってきたのが水着の上からよくわかる。ただでさえ、イリヤはとてつもない美人なんだ。それが、こんな風に水着に身を包んで、満面の笑みを向けてくるとなると、長く

一緒にいて慣れていているとはいえ、どきまぎしてしまつ。

「ね、ね、似合う？ 似合う？」

「あ、うん」

思わず顔を赤らめて、頬をぼりつとかく。

真つ白な肌に、結び上げた白銀の長い髪。ぱつちりとした淡い紅色の瞳はとても印象的で、ワンピース水着の裾のひらひらとしたフリル部分が女の子を強調してて、それがどうしようもなくイリヤを魅力的に飾り立てている。うっすらと、膨らんできた胸元や、健康的な太ももが、見てはいけないものを見たような気がして、正直居た堪れない。

「凄く、似合ってる」

「えへへ、ありがとう」

答えるのは色々恥ずかしかったけど、こんなイリヤの笑顔が見れるなら悪くないかもしれない。

俺からの返答をきいて満足そうに笑ったイリヤは、次いで、ぱちり、瞬きを一つして、今度はちょっと頬を膨らませて後ろに振り返る。

「もう、シロも、いつまでもパーカーなんか着てないで、そんなの脱ぎなさい」

「・・・断る」

そういえば、シロねえもいたんだつた。そう思って、イリヤの後ろに目を向けて、つい固まる。

いつもはあげている白い髪をおろしているシロねえがいた。切嗣しじきんとほぼ背丈の変わらぬその長身を薄い布で、包んでいる。

健康的な褐色の肌に、水色のパーカーがよく映えている。その合わせの狭間から、黒のチエックが入った赤い水着と豊かな胸の谷間が僅かに覗いているのが、なんだか凄くいけないものを見た気にさせられる。下は、青い超ミニのジーンズ・・・に見えるが、多分これ水着だ。上と下の水着って大体ワンセットで同デザインなほうが普通だと思うけど、違つとは珍しいんじゃないかなと思う。だけ

ど、そんなことより、別の驚きが勝って、思わずぽかんとしてしま  
う。

「全く、シロははずかしがりなんだから」

「別に、そういうわけではない」

そんな会話も耳に入っていないかった。

「士郎、で、シロへの感想は？」

につこりと、間近で紅色の瞳に問いかけられて、漸く我に返った。  
目の前には、ふてくされたように片眉を寄せるシロねえの顔。

普段、シロねえが女らしい格好を身につけることは殆どない。俺  
やイリヤがプールにいくのについてきたときも、なんだかんだいっ  
て自分は水着になるのを避けていた。

女性らしい言葉遣いや格好なんてしなくても、シロねえは十分女  
らしい人だとは思っけれど、それでも、こうな風な格好をされると、  
ああ、本当にシロねえは大人の女の人なんだなと、妙に実感させら  
れて、なんだか見ているこっちが気恥ずかしくなってくる。

それは、普段から女の子しているイリヤよりも、意外な一面を見  
たような気にさせられたってのもあるのかもしれない。

「あ、うん・・・」

でも、そんな照れとかを裏切るように口は素直な感想を弾き出し  
ていた。

「綺麗だ」

・・・あ、シロねえがなんか変な顔している。俺、おかしいこと  
言っただけ？

side・エミヤ

イリヤの「折角家族みんな海に行くんだから、今回こそちゃん



とシロも水着を着てきなさい。一人だけ私服なんて今日という今日は許さないんだから」という言葉に押され、水着を身に着けた矢先から私は後悔に襲われていた。

(・・・なんでオレは、こんな格好をしているんだろうなあ・・・)  
今の私の肉体はまごうことなく『女』なわけで、なので、今の姿で水着を身に着けるとなれば、当然女物水着を身に着けると同義になるわけだが・・・今更ながら、完全に女そのものの自分の格好を見下ろして、ため息を一つ。

とりあえず、気休めかもしれないが、上からパーカーだけは羽織ることにした。イリヤは文句を言ったが、こればかりは譲れない。

「全く、シロははずかしがりなんだから」

イリヤはちょっと怒ったような口調でそんなことを言う。

「別に、そういうわけではない」

私だって、元は男である。生前なら上半身裸やら、水着姿の一つや二つ別に恥ずかしくもなんともなかった。それに、女の身体にしても、生前は恋人だったいたし、女性とそういう関係になったことなんて何度もあるし、女の裸だって何度も見てきたさ。だが・・・これ、今の私の身体だぞ？

そう、問題はこれが、「今の私」の体だっていうことなんだ。

いや、自分が今女になっているってことくらい、ここ数年で十分認識させられてきたさ。でもな、元男としては、忘れていたんだよ。その事実。出来るだけ無視していたんだよ。こんな格好では、ちよつと視線を下におとしただけで、いつも以上に自分が「女」になってしまったことをまざまざと自覚させられて、それが嫌なんだよ。

大体なんで私の胸はこんなにでかいんだ？せめてセイバーや凜並の大きさならば、適当にスルー出来たというものの、こんなにでかいのでは、忘れるほうが難しいというものだ。水着などきていたら尚更、少し下に視線をおとしてしまうだけで、まざまざと思い知らされてしまうではないか。

やはり、イリヤになんといわれようと私服で通すべきだったか。体型が体型だから完全に女であることを忘れるのは難しいが、それでも「女」を強烈に印象付けるような格好をするよりはまだマシだ。

・・・まあ、私が水着だのなんだのと、女を意識せずにはいられない格好を避けていた理由は、我が身におきた不幸を忘れていたいということのほかにも、もう一つあったりするが。

私は、切嗣に召喚されて女の身体になった時以来、肉体の性別が変わっても、心は男のままのつもりでいたわけだが・・・本当に時々だが（そして内心あまり認めたくない）、自分の精神が肉体の性別に引つ張られているような感じが襲うことがある。

まあ、ありえぬ話ではない。同じ人物でも、異性の性ホルモンを注入すればそれだけで性格とかにも多少の変化があると聞くし、オレの場合、性別がまるごと変わったんだ。別に肉体に引つ張られて不思議はあるまい。むしろ自然におこる変化だろう。

・・・だが、嫌だ。

自分が元が男であることを忘れてたら、何かが終わりの気がする。そもそも、別に女になりたい願望があったわけでもないのに、女に変わって、それをそのまま受け入れるなんて真似をしてたまるか。私は変態じゃないんだ（？）。

やはり、今の私にとって、この女物の水着姿なんて鬼門も同然である。

いや、本当なんでオレこんな格好しているんだろう。

ふと、前を見ると士郎が私を見て固まっている。

「士郎、で、シロへの感想は？」

・・・なんでそんな余計なことを聞くんだ、イリヤスフィール。あれか、私が困る姿を見て楽しんでいるのか。そうなのか。

「あ、うん・・・綺麗だ」

・・・そして、なんで私は過去の自分（厳密には違うが）に綺麗だなんて言われなければいけないのだろうな？しかも、照れるな。

眉を下げて笑うな。くっ……土郎の記憶の中から今日の私について消してしまいたい。

すすつと、猫のような仕草でイリヤが近づいてくる。ついではやがめというジェスチャー。素直に従って、膝を折る私の耳元で一言「シロ、いい加減自分が今女の子であることを受け入れなさい」と、真剣な声音で言い放った。イリヤのその顔……いつか見たアイリスフィールの顔にそっくりだ。流石親子。

ふふ……はははは……受け入れられるならとつくに受け入れている。出来ない、むしろしたくないからしないんだ。私が土郎と同一人物、つまりは元が男だと知ってて、なんでそんな酷な提案が出来るんだ、イリヤスフィール。この世に神も仏もないのか。いや……ないんだろうけど。

……体は剣で出来ている。ふ……そうとも。私に味方なんているはずがなかったな。ああ、独りは慣れてる。

あれ？空は蒼く晴れ上がっているというのに、目から雨が流れそうだよ。

ともあれ、折角の海。楽しそうにはしゃぎまわるイリヤと土郎を見ているのは悪くなかった。そうだな……にぎやかなのを見るのは嫌いじゃない。二人が喜ぶ姿を見ていたら、来て良かったなど自然と思え、頬が綻ぶ。ふと、横を見ると切嗣じいさんも、私を見て微笑んでいる。なんだ？と不思議に思って首をかしげると、切嗣は穏やかな目をして言った。

「シロも、楽しんできなさい」

それが本当に父親然とした言葉で、一瞬固まる。

「いや、私は……」

別にいらない……だが、それを本当に口にしていいのか？そう思ったその時、「シロねえ！」と元気な少年特有のボーイソプラノが後ろから響いて、言葉を遮られたのに内心ほっとしながら、声の主のほうへと顔を向ける。

「どうした、士郎」

「暑いからさ、アイス買って来た」

見ると、イリヤも二本、士郎も二本アイスをてにしている。イリヤが一本を切嗣に手渡し、嬉しそうな顔をして爺さんが受け取っている。・・・普段、イリヤには冷たくあしらわれることも多いから、嬉しさはより一人ひとといっただころだろう。

「はい」

士郎は満面の笑みで、アイスを私のほうへ差し出しているが・・・この握り方だと受け取れないんだが、そのあたり気付いていないのか？

「シロ、そのままパクツといっちゃいなさい」

と、イリヤの談。いや、それはどうなんだ？と思っただのは一瞬。

・・・まあ、いいか。他人ではないのだ、別に構わんだろう。

身をかがめて、そのまま、アイスを口に含んだ。練乳ミルク味が。夏の風物詩だな。

> i26507—3032<

パシャ。シャッター音が響く。・・・うん？

見れば、今回大河に貰ったという使い捨てカメラを構えたイリヤが、えへへと可愛らしく笑っていて・・・まで。

「・・・イリヤ？」

「何？」

「何故、撮ったのが尋ねてもかまわんかね？」

なんとなく、よくない予感がする。

「そんなの、シロが可愛かったからに決まっているじゃない」

いや、そんなのいつ決まった。それより、その腰に手をあてて、

えへんと偉そうにするポーズ・・・あの虎の影響か！？

「それに、こんなシロの姿、すっごく貴重なもの。うちの学校の生徒に売ったりなんかしたら、高く売れるんじゃないかしら・・・？」

ふふふと、目を細めて意地悪げに笑うイリヤスフィール。・・・いやいや、イリヤ流の冗談・・・だよな？半分本気が混ざっていそうでなんだか怖い。

ひくりと、思わず喉を鳴らすと、イリヤは「なんてね。そんな勿体無いことなんて出来ないわ。シロの可愛い姿はわたし専用のアルバムに大切にしまっておくから安心して」と反転、ころつと無邪気な笑顔を浮かべて言い切った。安心・・・か？

「世の男達がシロの悶絶水着姿を見て鼻の下のばす姿なんて、おもしろくないもの。シロはわたしのものなんだし」

と、なんだか黒い口調でくすりと言っているイリヤの姿は・・・あ・・・幻覚ということにしておこう。思い出は美しいものだけがいい・・・。

「シロねえ」

今まで口を挟まずにいた土郎が、自分のアイスを食べながら「アイス、溶けてる」と、先ほどまで私に突き出していたアイスに視線を移しながら言う。食い物を粗末にするわけにはいかない。「すまない」と一言謝ると、残りのアイスを一気に食べる。

すすつと、そんな私に、再びイリヤが近づいてきて、土郎には聞こえない声で「シロ、なんだかその姿、ちよつとエッチよ？」と言い出してきて、思わず咽る。

「土郎も、よりによってその味を差し出すなんてマニアックよね」

・・・

「・・・？イリヤ、なんのことだ？」

きよとんと首をかしげる土郎。

「って、流石に土郎にはちよつと早かったかな。ううん、こっこの話」

なんていいながら、再びイリヤは小悪魔じみた表情を打ち消して、無邪気な笑顔を顔に浮かべる・・・が、何を言わんとしていたかわかってしまった私から見たら・・・逆にそこが恐ろしい。イリヤ・・・どこでそんな知識を仕入れてきたんだ・・・。おかしいな・・・

真つ当に育ててた・・・筈なんだがな。

逆に、意味がわかっていない士郎からしたら、その笑顔はまさしく天使の微笑みエンジェル・スマイル。ほにやりと、つられて邪気のない笑顔を浮かべて、イリヤの手をとった。

さて、私はどうしようか、と一騒動が終わって、適当に浜辺を歩いているとき、その光景に遭遇した。

「あの・・・その、私、連れがいるし・・・その」

おろおろと、可愛らしい容姿の・・・多分中学生くらいの女の子が、中・高生くらいの年頃の男4人ほどにかこまれている。

「じゃあさ、そのお友達も一緒にいいからさ」

「俺たちと遊ぼうぜ」

ナンパだ。髪を金に染めた男が、にやにや笑って、茶色い髪の女の子の腕を馴れ馴れしく触っている。

「あの、やめてください」

今にも泣き出しそうな声だ。止めたほうがいいか？そう思ったその時、あたりの喧騒をつんざくような女の声が鋭く響く。

「由紀っち、おまたせ・・・ってこら！！オマエら、由紀っちに何をしてんだ！！」

と、黒い髪に浅黒い肌の少女が、言葉と同時に「由紀っち」とよばれた茶色い髪の少女の腕に馴れ馴れしく触っていた男のみぞおちを狙って、とび蹴りを放つ。

「ぐあっ」

金髪の男はマトモに受けて悶絶。

「時ちゃん、鐘ちゃん」

由紀っちとよばれた少女は、目に僅かに涙をためて、とび蹴りを放った少女と、彼女の後ろにいた、クールそうな外見の少女へとたたつと近寄る。男達は悶絶する男に「おい、しろうちゃん！？」などと声をかけて、慌てている。

「中学生相手にナンパとは、余程女に飢えている連中といったところ

るか」

「鐘、こんなときに呑気なこといつてんなっ!!」

由紀つちにこんな顔させるなんて許せん!なんていいながら、がーと浅黒い肌の少女が喚く。

「てめえ……」

男達が、仲間を倒された怒りか、三人の娘にむかって、先ほどまでのにやけ面を消して、低く唸る。

「あ」

やべえと言わんばかりの顔をして、現状を把握する黒髪の少女。

「ガキが、いい気になってるんじゃないっ!」

そういつて、殴りかかる男達を見て、私は既に行動に移っていた。

音すら立てずに、その学生らしき年代の少年達の拳を全て受け流す。

黒髪の少女は、殴られると思ったのだろう、目をつぶっていたが、自分になにも起きていないのを知って、そっと目を開ける。

「全く、いたいけなお嬢さん方に手をあげるとは、どういう躰を受けて育ってきたのか、是非とも聞いてみたいものだ」

「なっ」

突如、目の前に知らない人間が現れた故か、少年達三人はぱちくりと目を見開く。

「さて、『女』の相手がしたいというのならば、私が相手をしよう」

「ババアが……舐めんなっ!」

そういつて、真っ先に突進してきた雀斑の少年を投げ飛ばし、残りの二人も同時に地に沈める。残ったのは先ほどとび蹴りを受けて悶絶していた少年だけだ。

ざっと、少年の前まで歩み寄る。

「ひっ」

一瞬で友人を全て沈黙させた私を前に、少年が怯えた声をあげる。私にはっこりと、わざとらしく笑顔をつくりながら「お友達をちゃ

んと回収したまえよ」とだけ伝える。少年は慌てて飛び上がり、どこぞへと走り去っていった。

見れば、気付けばまわりに人だかりがぼかーんと私を見てて……しまった。目立つつもりなどなかったのに、注目を集めてどうするんだ、オレ。

内心冷や汗をだらだらかきながら、ごほん一つ咳払い。ふと、横からきらきらとした視線がやたらと突き刺さって、思わず顔をそちらに向ける。

「すげー……ねえちゃんかつこいい……」

黒髪の、蒔ちゃんと言われた少女だった。

「あの、先ほどは蒔ちゃんの危ないところを助けていただき、ありがとうございます」

と、茶色い髪の娘がぺこり、頭を下げる。礼儀正しくて可愛い、良い子だな……。

「何、礼には及ばん。勝手に私がしゃしゃりでただけだ」

「ほう、謙遜されるか」

「なあ、あんた、名前は？」

思わず苦笑する。きらきらした視線は正直居心地が悪い。私はそんな視線をむけられるような上等な人間じゃないんだが。

タイプの違う三人の中学生らしき少女たち。全てが私を見ている。なんとも弱ったものだ。なんだか彼女達を見ていると、何かを思い出しそうになるのだが……肝心のそれが何であるかまではわからず、おかしなもやもやが胸に広がる。それが少し気持ち悪い。ふいと視線を避けるように思わず視線を逸らす。

「何、名乗るほどの者じゃないさ」

そう言って、背中を向ける。これ以上の接触は、避けたかった。

「きゃあぁ」

折り良くというべきなのか、更になにか言い募ろうとする三人の娘の声を遮るように、近場から悲鳴があがった。これ幸いとその悲鳴の発生源に向かう。



「坊やが、坊やが」

悲鳴の主は母親らしき女性。視線の先には溺れている子供。どうやら浮き輪をもって遠くまでいったところ、浮き輪が流されたらしい。判断と同時に飛び込んだ。

「そうだ、名前など名乗るほどのことではない。」

「ただ私は、私の在るよう在る。それだけだ。」

思い出せないことは考えなくなかった。そう、自分を誤魔化すように、ただいつかも望んだだろう作業を繰り返す。それを逃避と、人は呼ぶのだろう。

side・衛宮士郎

その噂が流れ出したのは昼も過ぎての頃からだった。

白髪褐色の肌の女ヒーローが行く先々で人を助ける、と。

溺れている人がいれば飛び込み、ナンパに困っている女性がいたら手助けに入り、女だてらに半端なく強いとか、なんとか。

（絶対、シロねえのことだ）

「イリヤなんか完全に呆れた顔をしている。」

「シロのことは仕方ないわ。わたしたちだけでも遊びましょ」

「と言ってきたけど・・・。」

「ごめん、イリヤ。俺、シロねえ探してくる」

「あ、待ちなさい士郎」

「そういつて、人だかりが出来ているところ中心に探して・・・いた。」

泳ぐのに邪魔になったからだろう、水色のパーカーを脱いで、肉質的な体つきを水着で包んだシロねえが、「ふむ、これで大事無い。暫くすれば目を覚ますだろう」なんていいながら、見知らぬ誰かの

看病をしていた。その母親らしき若い女性は、「ありがとござい  
ます」とぺこりと頭を下げて、礼を言っている。

思わず呆れた声に俺もなる。

「シロねえ、何やってるんだよ・・・」

「む？見たところ子供が熱中症にかかっていたようだな、そのアド  
バイスをしていただけだ」

「いや、そういうことじゃなくて」

そもそも、今日はみんなで遊びにきたのに、シロねえは何をやっ  
ているんだよと聞きたかったわけ。

「士郎、シロにそういうことについて何を言っても無駄よ」

イリヤはなんだかちよつと怖い笑顔を浮かべてそう言いきる。声  
が冷え切っているのは多分気のせいじゃない。怒っている。これは  
怒っている。でも、シロねえはそれに気付いているのか気付いてい  
ないのか・・・どつちもありえそうだよな・・・で、何事もなかつ  
たかのように、「では、これで失礼する」と先ほどの子供の母親に  
ぺこりと、頭を下げると、海へとダイブした。見れば、その先に溺  
れている女性がいた。あつという間にシロねえがその人に追いつき、  
肩を貸しながら浜辺へと戻ってくる。

「士郎、いきましょ」

イリヤの声は冷えていた。

「うん・・・」

多分、なにを言ったところで無駄なんだろう。とりあえず、せめ  
て自分達だけでも海水浴にきた子供らしく遊ぼう。それがきつとこ  
の旅行を企画した切嗣への一番の恩返しなんだから。

そう思って身をひいた。

結局、シロねえの人助け伝説は、爺さんが「帰るよ」と呼びかけ  
るその時まで続いた。

「士郎・・・」

車の中、隣り合わせの席で、小さくイリヤの声が響く。シロねえはどことなく満足そうに助手席で寝入っている。

「シロみたいな大人になっちゃ駄目よ？」

「うん。肝に銘じておく」

これは、俺が中学1年にあがった年の、とある夏の一日の出来事だった。

了

おまけ、「天然タラシ」

> i 2 6 6 5 9 | 3 0 3 2 <

閑話 夏と海とシロねえと（後書き）

というわけで、海の話でした。内容は大体前から決めていたわりに割りと難産だったです。

とくに三人娘。ぶっちゃん性格とか雰囲気とか口調とか上手くつかめなくて書きづらくて大変でした。見えなかったらさーせん。

慎二は髪型がワカメだったらOKかなとか思っている俺がいる。

次回は誕生日話になります。

閑話 君の誕生に感謝を（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

なんか書き出すまでに今回時間がかかったような気がします。

久しぶりに凜登場です。

ところで、もしかして士郎×シロ展開希望している人多かったりするんだろうか？とか頂いた感想見て思いました。はい。

## 閑話 君の誕生に感謝を

side・エミヤ

これが始まったのはいつからだっただか。確か最初は4年ほど前だったか。

まあともかく、今年も・・・私にとっては記憶から消し去りたいその日がやってきた。

「ねえ、シロ、早く。あんまり遅いとわたし、入っちゃうかも・・・」

「今行く」

観念して、襖を開ける。

そこには、今日の主役であるはずの白いお姫様が華やかに着飾って、にっこりと、出てきた私の姿を見ながら優美に微笑む姿があった。

「うん。似合ってる。似合ってる。一度着せてみたかったのよね。

シロに白ワンピース」

恥ずかしいんだか、屈辱なんだか、それともそういつて笑うイヤに照れているのだから、思わず赤面する。

・・・約束だ。仕方がない。それに、こうして喜ばれる姿を見るのは悪くないんだ。今日という今日を記憶から封印したいくらい、自分の格好は恥辱ではあるのだが。

今日は私の姉であり、妹である彼女、イリヤスフィールの誕生日なのだから。

確か、始まりは、誕生日に何がほしいのかと、いつものように尋ねたのがはじまりだった。

小学生のイリヤが毎年ねだっていたのは、可愛らしくも新しい洋服やぬいぐるみの類だった。油断していたのだろう。

「なんでもいいの？」

「ああ、構わない」

「本当にいいのね？」

「私に出来る範囲ならな」

「じゃあ、誓って」

と、そこまでいったとき、何故内容を確認しなかったのか・・・あの時確認していたら、今日という日を来ることを憂鬱に感じたりすることもなかったものを。

イリヤの願い事は確かに私に出来る範囲ではあった。ただ・・・したくなかったというだけで。

「シロ、貴女の一日着せ替え権をバースディプレゼントとしていたたくわ。あ、毎年よろしくね？」

というイリヤの、中学にあがったばかりとは思えないどこことなく妖艶な微笑みつきのお台詞を聞くまでは、この日は私にとっても楽しみな日だったんだがな・・・。

まあ、そんなこんなで、これまで頑なに拒んでいた「女」を強く意識させられる衣装ばかり毎年着せられる羽目になったというわけだ。今年はシンプルなデザインの白ワンピースに、薄紫のシースル―上着で、髪はお団子に結い上げられた。

「もう、そんな顔ばかりしないで、ちょっとは機嫌よくしなさい。わたしの誕生日なんだからね」

と、ぶんぶんと怒ってみせる白のお姫様。今年高校生に上がって、

背ものび、体つきもかわり、大分大人っぽくなったと思っていたが、そういう仕草をする時のイリヤは、昔から変わらず愛らしい。

「本当は毎日でも着せ替えたいところ、誕生日だけで我慢しているんだから」

きらり、と紅い目に小悪魔的な微笑みをのせるその姿を見なければ・・・だがな。・・・彼女の忍耐が続くことを祈っている。

「ほら、鏡で自分がどんな姿になっているのか、見て見なさい」

なんて、歌うように言いながら、手鏡を渡してくる。・・・受け取らなきゃいけないのか。いや、いけないんだろうな・・・。

しょうがなく、こっそりと心中でのみため息をつきながら、姿見を覗いた。

髪は自分でやったわけではない。だからあまり実感が今までなかったが・・・その髪型は、セイバーと同じだった。

はっと、自分の変化に気付く。

セイバーと同じ、それで最初に脳裏を過ぎったのは、地獄に落ちても忘れないとすら思った気高き騎士王ではなく、赤き大剣とドレスを纏った少女のほうだったのだから。

それは、衝撃的でしたらあったというべきか。

アルトリアとの出会いが、ずっと、胸の奥の宝物だった。

なのに、髪型がセイバーと同じだ、と思って過ぎったのが顔だけアルトリアとそっくりな、彼女とはどこまでも正反対の少女だったのだから。

『余を忘れるでないぞ。よいか。絶対だぞ？忘れなどしたら、余はそなたを許さぬからな！』

そう言った時の、あの声は今も耳に残っている。

自信家で、傲慢で、好戦的で、高飛車で、暴君のような英霊だと思つた。サーヴァント

真名を知った今、確かに暴君というのは当たりだったなとは思っている。

暴君ネロ。ローマ帝国第五代目皇帝。キリスト教迫害で知られた



人物で、最期は己が民に追い詰められた末の自害。だが、一方で、ネロが治めた5年間はローマで最も平和な5年だったともいわれている人物。女であったという驚きは、アルトリアを知る私からすればそこまで驚愕するべき点ではなかったが、セイバーの適正がある人物とも思えなかったから、彼女とネロが結びついたのは、彼女が最後のほうに言った言葉でだ。それまでは気付きもしなかった。

功績もある人物だ。だが、どちらかといえば、反英霊的な印象の強い人物といえよう。だが・・・それでも彼女はやはり英雄だった。『アレは、無辜の民を飲み込むものだ。ならば、あれを始末するのは、王の王である皇帝の余の役目よ、たとえそなたでも邪魔は許さぬ』

その言葉に嘘偽りなどなかった。いや、はじめから彼女の言葉に嘘偽りなどなかったのだ。

そう、アルトリアとは全く違うけれど、あれもまた王だった。

彼女は何度も私を好きだと言った。それを真剣に受け止めたことはない。戯言としか思えなかった。けれど、あの赤き少女は『余はそなたが好きだ』そんな言葉を残して、笑って消滅していった。

嗚呼、今なら断言出来よう。あれも一つの英雄だったのだ。

私からしてみれば、眩しすぎるほどの光。

信じていなかったのに、敵だったのに、そんな私を前にして、自身の消滅より民を優先し、笑いながら散っていった。

果たして私は、オレは、彼女と引き換えに助かるほどの価値があったのか？その答えはいまだ、ない。

ただそれでも、なんの因果か、受肉してこの世に留まる限りは、恥じぬように在りたいとは思っ。

(忘れるでない・・・か)

無茶な言葉を言ったものだ。聖杯戦争に呼び出される英霊は、英霊の座にある本体のコピーだ。聖杯戦争が終われば、消滅し、記録のみを持ち帰る。忘れるでないといった彼女自身、私のことは忘れ・・・いや、記憶に残ることがない。ただ、「そういうことがあ

った」とそう記されるだけで。それでも。

(忘れやしないさ)

この、受肉した身が減ぶまでは、大きすぎる貸しを作ってそのまま消えたあの少女との約束を守る。それが、この身が出来ることだった。

「シロ？」

はっと、目を見開く。握りこんでいた指は、強く握りすぎていて白くなっていた。

気付かれただろうか。いや、気付かれたからこそその反応か。

静かに私を見据える紅色の瞳には、どことなく労わりの色があった。

「イリヤ・・・そのだな」

誤魔化す言葉が咄嗟に浮かばない。つい、とイリヤは私の手をとって、くるりと後ろを向く。

「ね、シロ」

そして一拍置いて振り返ったその顔は、いつも通りの無邪気な笑顔だった。

「行こう」

・・・本当、君には敵わない。

居間へと移動する。

そこには、土郎、切嗣、大河の三人がそわそわした出で立ちで揃っていた。

「うわあ、イリヤちゃんの誕生日にはシロさんも着飾るんだって本当だったんだ。いつも黒い格好ばかり見てたから、白い服ってなんだか新鮮〜」

とは、大河談。

「やっぱり、女の子は、たまにはおめかししないと。うん、シロ似合っているね」

にここにことそんな風に呑気に笑いながらいうのは、まあ、いつも通り切嗣だ。・・・あんだ、オレが男だったってこと知っているんじゃないかったか？てらいもなく「女の子」というな。大体なんで士郎のことは普通に息子扱いするくせに、私は娘の扱いなんだ・・・」

そして、士郎はといえば・・・なにやら、赤面してつつたつていた。む・・・なんだ？

「・・・おい？」

「士郎？女の子がおめかししたときはちゃんと褒めないと駄目だよ、切嗣にせつつかされた士郎は、はっと一度目をぱちくりすると、もごもごと声にならない声を出し、「あ、うん、吃驚した」と言つて、鼻の頭をかいた。

「シロねえのスカート姿とか見慣れなくて・・・でも、悪い意味じゃないぞ。うん。そうだ、綺麗だ。綺麗で吃驚した」

・・・その返事聞かなければ良かったと心底思う。

だが、ここは孤立無援、共感してくれる人間などどこにもいないのもまた事実。・・・忘れよう。それが一番だ。

「イリヤ、今日の昼飯は何が食べたいのかね？」

とりあえず、話題をかえることで乗り切ろうと思った私の考えは、思わぬ言葉によって遮られた。

「ああ、シロは今日のご飯は作らなくていいのよ」

なんでもないように答えるイリヤ。

「む・・・？もしや、外食が希望だったのか？」

「違う」

そう答えたのは士郎だった。

「今日は俺が作るから、シロねえはしなくていいんだ。今年の誕生日プレゼント、イリヤに何がいいって聞いたら、俺の手料理だつていつからか」

へへ、と照れたように答える士郎。ああ、成程。

「ぶむ、ではどれほど腕が上がったか、ご拝謁といこうか」

先ほどのお返しというほどではないが・・・本当だ。私はそんなことを根にもつほどは子供っぽくないぞ・・・話がそれた。とかくにやり、と笑って腕を組んでみせると、士郎は慌てたように「・・・いや、うん・・・お手柔らかに頼む」なんて言いながら萎縮している。

「何、あとで採点して、どこが駄目だったのか事細かにメモに書いて渡そう。今日はオマエの誕生日ではないが・・・イイプレゼントだろう?」

にっこり、わざとらしく笑顔をつくると、士郎はがっくりとうなだれながら「駄目出し決定かよ」なんてぶつぶついつてる。その姿がおかしくて、思わず本心からくつくつと笑った。

昼食はつつがなく終わった。焼き鮭に茶碗蒸し、里芋の煮っ転がしに、豆腐の味噌汁。士郎の家事の腕は、普段から料理してない割には・・・、それも同年代の子供に比べたら、「出来る」ほうではあるといえよう。だが・・・「衛宮士郎」としてはまず、駄目駄目である。なんというか、全体的に駄目。数いる並行世界の衛宮士郎の中でもトップクラスに駄目なんじゃないのか?といった、お粗末な腕である。士郎も今年で中学三年なわけだが・・・おそらくは、平均的な衛宮士郎の小学校高学年レベルの料理の腕でしかないと思われる。採点でいうなら、38点。もう少し頑張りましょう。

とはいえ、士郎の家事の腕が低めなのは、私が家事を一切取り仕切っているのが原因なのだから、そこまで咎めるポイントでもないのだろう。

しかし、こつも腕に開きがあると・・・なんだ。塵も積もれば山となるとは本当だな、と思えてくる。

と、そんなことを思うのは私だけなのか、大河は「うわー、士郎。シロさんほどじゃないけど、あんたも料理上手いじゃない。男の子がそんなに上手くなってどうするつもりなのよ、このー」なんて騒ぎながら士郎をつついていたし、イリヤも「美味しい」とい

って笑って食べてたし、切嗣も「いやあ、息子に料理を作ってもらえるなんて、父さん嬉しいなあ」なんて親馬鹿モード全開でへらへら言っているんだから、こんなこと考えている私のほうが異端なんだろうさ。

「さて」

食後のお茶をのみ、一息ついた今日の主賓は、ナプキンで優雅に口元を拭うとにっこり。天使のような朗らかな微笑みを湛えて、「シロ、出かけるわよ」と言った。

「ああ、了解し………つて、まて、イリヤスフィール！？この格好でか！？」

一瞬、自分がどんな格好をしているのか、うっかり忘れかけて返答しそうになり、焦る。

「当然よ。たまには着飾ったシロと一緒に歩きたいもの」

そんなことをしたら、ご近所中に見られてしまうのでは……いや、商店街の奥様方に噂に立てられる自分の姿がありありと目に浮かぶ。

「イリヤ、出かけるのはまた今度にしないか……？」

口元をひくつかせながら、そう言うと、イリヤはにっこり、死刑を宣告するかのような響きと迫力で「イ・ヤ。大体、今日はわたしの誕生日で、今日のシロはわたしのバースディプレゼントなんだから。そのまま出かけるの。わたしの言うことは絶対」

とてもいい笑顔を浮かべる白い悪魔。この笑顔に逆らえる人間がいるのなら、是非お目にかかりたいといいたくなるような、そんな顔だった。

出来るだけ知り合いに会いませんように、との願いもむなしく、思わぬ人物と遭遇する。

「あら？」

艶やかな烏の濡れ場色の髪をツインテールにして、赤い服と黒い

スカート、ニーソが印象的な鮮やかな美少女。中学生の遠坂凜がそこにいた。

暫し、固まる。相手は・・・確実に気付いているな。うん。はは・・・どうせ私の幸運値はEでしかないよ（自棄）。

「アーチェ・・・あんた、ぶ、なにそれ、どうしたのよ、その格好」  
案の定笑い出された。ええい、そんなに笑うな。おかげで羞恥のあまり、私の顔は耳まで真っ赤だ。

「ふふつ、あんたでもそんな格好することあるんだ？」  
「にやにや。アカイアクマだ。アカイアクマがここにいる。」

「君な・・・出会い頭、早々にそれか」

「がつくり、と思わずうなだれた。・・・空、青いな。」

「シロ？何、知り合い？」

ひよこりと、少し前を歩いていたイリヤが顔を出す。

凜は、イリヤを見ると、はっと目を見開き・・・瞬時に警戒した。余所行きの仮面をかぶる。そこで、自分の行動の迂闊さを思い知る。今のイリヤの体は青崎製の人形の体だ。本当の身体・・・魔術使い衛宮切嗣とアインツベルンのホムンクルス・アイリスフィール・フォン・アインツベルンとの間に生まれた肉体は、報酬として青崎にもっていかれた。それでも、元々イリヤは聖杯の器である。青崎の身体に移って尚、紅色の瞳は魔眼を有しているし、元の身体ほどではないが、魔力量もまた、人並みより大きい。おまけに、魔術を切嗣に習っているときた。幼くとも一流の魔術師たる遠坂凜に気付かれぬはずがない。

まずいな。若くとも凜は、冬木のセカンドオーナーだ。私のことはただの魔術師だと勘違いしているし、存在を知られているので、色々払うものを払って黙っていてもらっているが、イリヤのことは・・・さてどうするか。

「ええ。アーチェさんとは親しくさせていたでいております。ところで、私は「遠坂凜」と申しますが、貴女は？」

「にっこり。猫かぶりモードの口調と微笑みで、イリヤに問いかけ

る凜。その言葉には暗鬼が秘められている。

それにイリヤが気付いていないはずがないのだが・・・イリヤは殊更明るい声で、ふふつと無邪気に私の腕をひいて、喋り始めた。

「そう。シロから聞いているわ。わたしはね、シロの姉の・・・ふっふっ」

ぱつと、反射的にイリヤの口を塞ぐ。

「この子はイリヤスフィール、私の妹なんだ」

にっこりと、わざとらしい笑顔で一息に言い切った。口をふさがれたイリヤは、不満そうにむっつと私を見上げる。

「妹・・・？」

その言葉に警戒が揺らぐ。

「ああ、可愛い妹だよ。今日はこの子の誕生日でね。それで不慣れな格好ながら、同伴していたというわけだ」

これ以上はまずいか、とぱつと手を離す。イリヤは一瞬面白くなさげな視線を私に送ったかと思うと、ぱつと一見無邪気な笑みにかえて、にっこり笑顔で言葉を続ける。

「そうなのよ。シロったらわたしの誕生日でもない、スカートもドレスも着てくれないの。全く、素材はいいのに、本当困った姉だわ」

どうやら、のってくれたらしい。とにかく、その言葉で凜の警戒が更に引き下げられた。

・・・かかった。

本来、魔術師が魔術を教わるのは兄弟姉妹のうち、跡継ぎ一人だけである。他の兄弟は皆魔術のことを知らされず育てられる。それが魔術師の常識だ。そして凜はその魔術師の常識を信じるまっとうな魔術師である。

凜は私が魔術師であることは知っている。そして彼女の常識からしたら、私こそが衛宮の跡継ぎということになるだろう。ならば、どれほど巨大な魔力を秘めていても、魔眼をもつていても、イリヤは「魔術師ではない」そう、この会話で思い込んだ、その確率が高

い。

くすり、と凜は素に近い表情で笑いながら、「そうですか。それは大変ですね。でも確かに、アーチエさんはもっと色んな服を着たほうがいいですよ。どうしても着せ替えしたい時、よかつたら、私にも手伝わせてください。逃げられないよう捕まえときますから」なんて猫かぶり口調のまま言い切った。・・・しまった。敵が増えた。

「ええ、そうね。その時は頼むわ。それと、リン、もっと楽な口調でいいのよ？」

「あら、そうですか？」

その後10分ほど彼女達の会話は続いた。その内容のほとんどが私に関する話題で・・・正直どんな羞恥プレイだと思った。なにはともあれ、最後はがっしりと握手を交わしてアカイアクマは去っていった。

なにはともあれ、年頃の女二人には友情が芽生えたらしい。・・・私弄りという名の。

「リンって、おもしろい子ね」

「・・・まあ、そこは同感だが・・・私を巻き込むのはやめてくれないか？」

「あら、それは可愛いシロが悪いのよ？ねえ、『お姉ちゃん』？」  
不意打ちだ、思わず赤面する。

「だって、わたし、シロの『妹』なんですよ？そう言ったわよね？」  
くすくすと笑うイリヤ、意地悪げなその顔は一体誰に似たのやら。  
「イリヤ、からかわないでくれないか？」

「さあ？なんのことが、わたし、わからないわ。お姉ちゃん？」  
楽しんでいる。絶対楽しんでいる。

「イリヤ・・・」

はあ、とため息をつく。仕方ない、ここはアレを言うか。

「私が悪かったよ。だから機嫌をなおしてくれないか、姉さん」

紅い眼が開かれる。そして・・・今日見た中でも最上級の、心底



美しい笑顔で、彼女は笑った。

「うん、許してあげる」

直前、今日という日を封印したいと思っていた。去年も、一昨年  
もそう思った。

でも結局、私はイリヤの誕生日に彼女の願いを叶えるだろう。

こんな笑顔を見られるのならば、それも悪くはない報酬なのだか  
ら。

「いきましよう。シロ。今日という一日、一分一秒だって無駄にし  
ないんだから」

そうして笑い、駆けていく君は、もう小さな子供じゃない。

「了解だ、姉さん」

そうして、君が生まれてきたこの日に、今年も感謝を捧げる。  
生まれてきてくれて、ありがとう。

了

おまけ、「マッサージです」

> i 2 7 1 4 7 — 3 0 3 2 <

閑話 君の誕生に感謝を（後書き）

というわけで、イリヤの誕生日の話でした。

次回、祭りの話が終わり次第、時間軸が原作ステイナイト年代に追いつくことになります。

PS 今回のおまけ四コマの1コマ目と2コマ目のエミヤさんは思春期まっさかりの中学生士郎ヴィジョンのため、実際の映像とはちよつと異なるかもしれません、とか言ってみる。

## 閑話 夏の約束（前書き）

ばんははろ、E K A W A R I です。

今回は・・・えー・・・挿絵描くのに約24時間くらいかかったんですが、これどういうことなんでしようかねー？背景がしょぼいのは、基礎画力が不足している俺にはこれが限界なのであしからず。ちなみに、三人娘とかの着物や帯の柄も結構細部まで描いていたのに、いざあげたら縮小化の結果つぶれてわからなくなつた罫。・・・どうせそんなことだと思つたよ。

浴衣の柄を考えるのは楽しいけど、描くのは大変でした。

今回凧は出てこないけど、凧に浴衣きせるなら、鮮やかな赤地に蝶と蓮、帯の色はレース模様の黒つてとこですな。

んでもってセイバーにきせるなら露草色地に青菖蒲と水草、帯は瞳にあわせて青竹色に蔓草模様、結び紐は引き締める意味をこめて躑躅色。髪は銀の一見シンプルな、でも良く見ると意匠をこらして百合模様の透かし彫りな簪。

赤セイバーならば、シグナルレッドに百花繚乱花鳥模様、帯は原色に近い金糸と赤系豪華仕立てで、一部レースで透かし模様。結び紐は銀糸をふんだんにつかった伝統的な結び紐、品ある感じの絹糸仕立ての藤紫色の袱紗付き。髪は紅薔薇花飾りと蝶の意匠をこらされた金の櫛形簪という華美仕立てですな。

## 閑話 夏の約束

> i 2 7 5 3 3 — 3 0 3 2 <

side・久宇舞弥

「夏祭り・・・ですか」

周期として3ヶ月、1年に一度の、日本・冬木の衛宮邸への来訪で、新作だというアーチャーの・・・いえ、シロのミックスベリータルトをつつきながら、自分の持ち主である男の娘を前に、意外な台詞に少し惑い、フォークの手を止める。

「そう、一週間後夏祭りがあるの」

「それに、私も同伴しろ・・・と?」

意思の強そうな紅色の瞳が生き生きと、いかにも楽しげにYESといわんばかりに満面の笑みに飾られる。

・・・彼女は・・・、衛宮切嗣の実娘であるイリヤスフィールは、少し苦手だ。

面差しは、死んだマダムにそっくりで、年々母親に似てくる。天真爛漫ではあるが、拭いきれぬ品がまわりついているところもそっくりだ。けれど、母親よりもずっと彼女は押しが強く、物言いもはっきりしている。そんなところが、苦手だ。心はずっと昔に死んでいる私には、彼女はあまりに強く眩しすぎる。

しかし、祭り・・・か・・・私とは縁がないものだと思っ  
てから、誘われたこと自体が意外で、どう返答するべきなのか、悩む。

「行けばいい」

そう横からかけられた声は、どこか少年的なハスキーボイスで、私にタルトを差し出した製作者である女性だ。

「君は日本の夏祭りに参加したことなどないのだろう？なに、良い経験じゃないか。そうだな・・・ふむ、折角だ。君の分の浴衣も用意しよう」

そこそこ整った顔立ちに皮肉気な笑みを携えて、けれど声だけは穏やかにそうのべる。今は、衛宮切嗣の義娘として、この家で暮らしている元サーヴァント、シロ。アーチャーとして聖杯戦争にかつて召喚された彼女は8年以上に渡る人としての暮らしのせい、か、召喚された頃に比べて随分と穏やかに・・・柔らかな表情を浮かべるようになった。

「舞弥の分の浴衣を用意するのもいいけど、今年こそあなたも浴衣を着るのよ？シロ」

にやと、小悪魔めいた微笑みを浮かべて告げられる軽快な声に、げつといわんばかりにシロの顔がしかめられる。

「まさか、人に勧めておいて、自分だけ私服で済まそうなんて思わないわよね？」

くだら、褐色の肌から冷や汗をこぼしながら、シロは視線を泳がせ、「・・・わかった。着る。着るからそんな目で見るな、イリヤスフィール」と心底困ったような声で告げる。

「ふふん、わかったならよろしい。シロは良い子ね」

「そうやって私を子ども扱いするのはやめてくれないかね？」

そんなやりとりが・・・年齢が逆な気もするが、本当に姉妹みたいで、思わず頬がゆるむ。

ぽかん、視線が私に集まる。それに、自分でも意外なほど穏やかな声で、「では、祭りの日まで厄介になりましょう」と告げた。

はつと我に返ったイリヤは、優しげな天使にも似た笑顔を浮かべて、「舞弥、気付いた？」とそんなことを穏やかな声で言った。

「？」

思わず首をかしげる。

「貴女、今、笑っていた」

・・・9年の月日、何も変わらなかつたと思つていたけれど、本当は私も変わつていたのだろうか。

あの男・・・瀕死の身体のまま、それでももがいていたバーサーカーのマスターだった男をふと思ひ出して、手は引き金をひくような形を描いた。

それらの答えはまだ見つからない。

side・衛宮士郎

高校生にあがつて初の夏祭り、一緒に同伴するメンバーはこれまでに多く多くて、思わずそわそわしながら、親父と二人、女性陣の着替えが終わるのをまつ。

がらり、と戸を開けて一番初めに入ってきたのは、予想通りというべきか、親父と揃いの色の浴衣を身に着けたシロねえだった。

ちよつとあつさりしすぎるくらいに、親父と柄違いの藍色紬に、地味な印象の浴衣のデザインとは対照的な、黒い花模様がどことなく色っぽく派手やかな蘇芳色の帯、見事なまでの白髪は結い上げられて、いつもの紅い髪留めと黒くシンプルな簪で纏め上げられている。大人の女性なら、これに加えてメイクの一つでもしているものだろうけど、シロねえはいたっていつも通りの素面だ。多分イリヤに化粧するようにいわれはしたけど、いつもの調子で頑として断つたつてとこだろう。

でも、化粧なんてしていなくても、結い上げられ、浴衣から覗くうなじがどことなく色っぽくて、少しだけ目のやり場に惑う。

「イリヤたちはもう少しかかりそうだ。茶でもものむか？」

あつさりと飾りっ気のないいつも通りの言葉を告げる、シロねえ。

だけど、いつもは祭りも私服で通しているシロねえが浴衣を着ていることに妙にどきまぎとして、「飲む」と上擦った声で答えてしまふ。情けない。

シロねえは一瞬不思議そうな顔を浮かべるが、思いなおしたのか、なんでもないかのような仕草で茶を沸かしにかかる。そんな姿が堂に入っていた。

「切嗣さん、桜ちゃん終わったよ」

そんな言葉を上げて、シロねえの次・・・約15分後に入ってきたのは、髪に黄色い花飾り、黄色地の着物に抑え目の向日葵柄の浴衣、そして抑え目な浴衣とは対照的にオレンジ地にコミカルな虎の絵が描かれたのが一目を引く帯を身に着けた藤ねえと、友人である間桐慎二の妹の桜の姿だった。

「あ、あの・・・」

下をむいて、うつむきながら自信なさ気な声を出す、後輩の姿、それに暫し見惚れた。

「先輩・・・どうですか？私、変じゃないですか？」

髪型は・・・いつも通りの桜だ。けど、ピンク地に白い桜柄の浴衣、藤紫色の和模様が入った帯、結び紐は赤で、その小さな口には薄っすらと紅がひかれている。

それを一言で言うのなら、凄く・・・。

「うん、可愛い」

ぱつと、藍紫色の瞳が、輝くように上を向く。

「本当ですか・・・っ」

「嘘なんてついてどうするんだ。うん、今日の桜は凄く可愛いぞ」  
えへへ、と照れたように桜が頬をかく。それに、きらんと虎の目が輝く。

「ほほっ?」

「・・・なんだよ、藤ねえ」

思わず胡乱気な目で、自称「おねえちゃん」を見上げる。

「んー、士郎もお年頃ってことかなってね」

うふふ・・・なんて笑うのが正直薄気味悪い。

「いや、でも本当に今日の桜ちゃんはいつにも増して可愛いよ」「と、ここにこしながらも落ち着いた調子で言葉をかける切嗣<sup>じいさん</sup>。それに桜は、につこりと、俺にむけたのとは種類の違う笑顔を浮かべて「おじさまも、ありがとうございます」と、ぺこりと頭を下げ、それから、桜と藤ねえの分の茶をもって居間へ入ってきたシロねえにも頭を下げた。

「シロさん、こんな素敵な浴衣まで用意していただいて、ありがとうございます」

「気に入ったかね？」

「はい、とても」

「ふむ・・・やはり君には名前の通り、桜がよく似合う。気に入ってくれたというのであれば、製作者としてはそれに増した喜びはない」

「え・・・それってわざわざ私の為に作ってくださったってことですか？」

「・・・そうなのだ。実は衛宮家から夏祭りに参加するメンバーの浴衣は全部シロねえの手作りである。勿論、俺が今着ているオレンジ色の浴衣もシロねえ手ずからの作品だ。それに思いを馳せて、少し照れくさくなる。」

「そうだが・・・なんだ？迷惑だったか？」

「いえ、迷惑だなんてとんでもないです。でも・・・わざわざ作ってくださったなんて、なんだか申し訳ないです・・・」

しゅんと桜がうなだれる。それに、シロねえは、家族でも見れるのは稀なほど穏やかな顔をして、ほんと、桜の柔らかさそうな髪の上に手をおいて、優しく梳いた。

「何、気にすることはない。私が好きでやったことだ。それに、師が弟子に贈り物をするのはそれほどおかしなことでもあるまい。気にするな。君の今日の仕事は、今日という日を少しでも沢山楽しむ



ことだ」

諭すような優しい響きに、桜の頬も緩む。

「はい」

そういつて笑う桜の顔は、初めて会った時の暗さとはどこまでも対照的で思わず安堵の息を内心つく。

「士郎、シロ、大河、桜ー、おまたせー」

そういつて元気な声で入ってきたのは、親父やシロねえの昔からの知り合いだつていう舞弥さんを引き連れたイリヤだった。その台詞の中に、親父が含まれていないのは・・・多分わざとなんだろうな。横目で見ると、やはり爺さんは娘の仕打ちを前にしくしくと年甲斐もなく哀しんで、苦い顔をしたシロねえに肩を叩かれ慰められている。

イリヤはなんで親父にだけあんなにキツイのかな。・・・まあ、知らない他人にもキツイけど、親父のとはまた種類が違う気がするし。

と、内心苦笑する間もなく、暫し固まる。

いつもはおろしている、雪みたいなお銀の髪をポニーテールに結び上げ、赤と黄色の花飾りを身に着けているイリヤ。控えめな薄水色の着物には兔があらわれ、でもそんなに子供っぽいデザインというわけでもなく、しつとりと落ち着いた風情をかもし出している。その胸の下で纏めている帯はタンポポが描かれた薄い黄色の帯。それら全体的に薄い色が、赤朽葉色の布地によって引き締められている。

幼い頃から見続けてきた不思議な印象の紅色の瞳が笑みを象る。白い妖精を思わせる美貌。どこかの物語から抜け出てきたみたいだ。思わず頬が火照る。

（落ち着け、イリヤの浴衣姿も着物姿も去年も一昨年も見ってきたじゃないか）

昔からイリヤは綺麗な子だった。でも、年々それに増して綺麗に、

女の子から女の人になっていく。その少女としての美しさに、その浮世離れした美貌に浮かんだ天真爛漫さに心をかき乱される。

「ただ、毎回こう赤くなっていたらたまらない。意地で、照れを引つ込めた。」

「ああ、イリヤ、よく似合っている」

「えへへ、シロ、ありがとう」

固まっていた俺より先に声をかけたのはシロねえだった。

「うん。イリヤは浴衣もよく似合うよ」

「キリツグには聞いてないわ」

シロねえとは対照的なイリヤのさめた返答に、がんと、親父がシヨックを受けて沈む。

「もう、イリヤちゃん。どうして、そんなに切嗣さんに冷たいの」

「おじさま、大丈夫ですか」

ぶんぷんと怒ってみせる藤ねえと、心配気に爺さんに近寄る桜。

「イリヤ、その物言いはあんまりだろ」

思わず、はあ、とため息をつきながらそう言つと、イリヤはむうと頬をふくらませる。

「だって・・・うざかったから」

最後のほうがぼそぼそと、聞こえるか聞こえないかの声でそんな言葉を告げるイリヤ。

「イリヤ。爺さんはイリヤのたった一人の父親だろ。大事にしなきゃ駄目だ」

「だって・・・」

語尾が弱くなり、それきり言葉は切れた。

ふ、と目線をやると、浴衣を着た舞弥さんが所在なさ気にたつていた。

常盤色地に紅牡丹、サーモンピンクの帯には、流水と小さな花模様があしらわれている。見事に真っ黒な髪は飾りつ気のない黒のバレッタで纏められていて、その姿は堂に入っている。とても着物の類を初めてきた人間には見えない。でも舞弥さんは黒髪黒目だし、

浴衣もよく似合うけど、どこか異国人じみている感じもするのは、年中外国を飛び回っているからなのだろうか。

「舞弥さんは、浴衣を着るのは初めてって本当なんですか？」

話しかけられた舞弥さんは、少しだけ意外そうに、僅かながら目を瞬く。

「そうなりますね。変、だったでしょうか」

言葉としては、この部屋に入ってきた時の桜と同じような台詞ではあるけれど、淡々としたその口ぶりからも同じ印象を受けることはない。彼女にとっては、ただの確認作業にすぎないのだろう。

「そんなことないです。お似合いですよ」

慣れない敬語を口にしながら、にこりと笑って、本心からの言葉を告げる。それに律儀に彼女は「有難うございます」と淡々と頭をさげて、シロねえに手渡された茶を啜った。

今年はいつてもよりも人が多い。というわけで、みんなでまわるのははつきりいつて大変だ。だから、くじ引きをして、誰と誰がペアになってまわるのかきめ、花火が始まる30分前に待ち合わせの場所で合流するという形となった。

その結果、イリヤと切嗣<sup>おやじ</sup>と舞弥さん、シロねえと桜、俺と藤ねえという組み合わせになったわけだが、ここに不満の塊となった白いお姫様が一人。

むうーっとな頬を膨らませて歩いている。その姿は子供っぽくてほほえましくて可愛い。

とりあえず、祭り会場までは全員一緒だ。横で歩きながら、そんな義姉の姿に苦笑する。

「シロか、士郎と一緒に良かったのに」

拗ね気味でいうイリヤ。

「そう言っなよ。この機会に、親父ともしっかりとちゃんと話をしたほうがいいと思うぞ」

そういうとイリヤは、拗ねた目で俺を見上げる。

「キリツグと話すことなんてないもの」

「それにだ」

ああ、これは別のアプローチをしたほうがいいな、と思って言う。「舞弥さんを祭りに誘ったのはイリヤだろ？これを機会に、ちゃんと日本の祭りを案内してあげないと」

「それをしたら、士郎、褒めてくれる・・・？」

不意打ちだった。普段はよく姉ぶるイリヤだったが、時折俺相手にはこんな風に、少し頼りなげな、守りたいと思わせる顔や言葉を表に現す。再び、顔に熱が集まりだす。それを誤魔化すように手で顔を扇ぎながら、それでも言葉だけはしっかりと「ああ、いくらだつて褒めるさ」と言い切った。

ふわりと、イリヤが微笑む。この笑顔が昔から好きだ。

「ねえ、士郎」

「くい、と袖を引かれる。」

「うん？」

「わたし、今日まだ肝心なこと、士郎の口から聞いてないわ」

肝心なこと・・・なんだっただろうか？と、ふと、家を出る前のことを思い出す。そして、思い至った。

「ああ、イリヤ、その浴衣凄く似合っている。うん、可愛いぞ」

「うん、ありがとう。士郎もよく似合っているわ。わたし、見惚れちゃった」

そうして悪戯そうに微笑むイリヤは、大切な宝石を慈しむように、俺の手をぎゅっと握った。

side・エミヤ

屋台がところ狭しと並ぶ中を、間桐桜と一緒に並んでまわる。桜

は、どことなく、不思議の国に迷い込んだ少女アリスのような顔をして、周囲を見渡す。

人が増えてきた。頼りなげな少女の肩を見下ろす。人並みに今にも浚われそうだ。実際浚われそうになって、そっと、間に入って助ける。

「大丈夫かね」

「はい、ありがとうございます」

ぺこりと、軽くお辞儀をして、またまじまじと周囲を眺める桜。

・・・もしかしたら、祭り等こつこつという行事に参加したことはそれほど多くないのかもしれない。

じっと、少女の視線が一点に集中した。何を見ているのか、程なく気付く。射的の景品のぬいぐるみのようなようだ。少女らしい嗜好に私の頬もゆるむ。

「一回だ」

そのまま迷わず的屋を選び、金を払う。桜はちょっと吃驚したように「シロさん？」と話しかけ、私は店の親父から射的用の玩具・・・銃を受け取る。私が外す筈もなく、そのまま、狙いの景品を撃ち抜いた。

「・・・うわ、やるねえ、ねえさん」

そんな店の親父の言葉を無視して、すっと、今とつた景品であるぬいぐるみを桜に手渡す。

「え・・・シロさん、あの・・・」

「何、無理にとはいわないが・・・よければ受け取ってくれないかね？」

桜は少し惑ったと思うと、次に柔らかな微笑みを浮かべて「はい」とそう言った。

桜は、明るくなった、と思う。

初めて会った時はもっと暗く、自分の内に籠りがちな少女で、何故そう思ったのか自分でもわからないが、そんな彼女を変えたくて衛宮家で料理を教えることを提案し、誘った。

生前、彼女と接点があったのかどうかは、摩擦し果て死んだ私には既にわからない。でも、この懐かしさからすれば、おそらくは親しい存在だったのだろうとは思う。

御三家の一角、間桐の跡継ぎだということを考えればそうやって家に上げるのは危険だともいえた。だから、はじめは爺さんに反対されもした。だが、体感としては8年半前にサーヴァントとして参加した第五次聖杯戦争では桜はマスターではなかったように記憶している。少なくとも、その姿を見かけることはそういう場ではなかった。それを理由に説得に踏み切った。

間桐の家の人間という時点で警戒を完全に解くことはありえない。だが、それでも受け入れようとしたのは、あの暗く陰のように生きる少女に笑って欲しいと、そう思ったからかもしれない。

(・・・そんな感情も摩擦し果てたと思ったのにな・・・)

まるで昔の自分に引き戻されていくようだ。思えば、この8年強の年月はずっとそんなことの繰り返しだった。穏やかに、安らかに、まるで本当に人間のように暮らしている自分を自覚する。・・・私は死人だというのに。それを悪くないと感じはじめたのは、さて、いつからだだったのか。

「桜」

「なんですか？」

穏やかな藍紫色の瞳が私を見上げる。

「君はもつと我侭になっていい。むしろ、なつてくれないか？」

「え？」

「君は子供だ。まだ発展途上の少女だ。大人は子供を守り、導く勤めがある。まあ・・・私では役不足かもしれないがね、それでもこういう時くらいもつと頼ってくれないかね？」

「え・・・と、それって・・・」

桜が言いよどむ。

「まあ、そうだな。ふむ、手始めに欲しいものがあるのなら迷わずいつてほしい。縁日の出し物だ、多少は割高だが・・・何、たまの

散財くらい構わんだろう」

「・・・そんなこと言っていると、私、調子にのっちゃいますよ？」  
桜がどこか心配気な、でもそれでいて楽しげに首をかしげながら私を見上げる。

「君のような可愛らしいお嬢さんの頼みなら喜んで請け負うさ」

「ふふ、その物言い、まるでシロさん男の人みたいです」

「・・・まあ、男だったからな、とは流石にいえませんが。」

「やはり、私では役不足かね？」

「いえ・・・有難うございます」

そうして本当に綺麗に、桜は笑った。

side・衛宮士郎

「もー、士郎、そんなにのんびりしていると、おねえちゃんおいてっ  
ちやうんだからね」

「あー、と手をあげながら、藤ねえが元気良く声をあげる。

「あー、はいはい」

結構声がでかいのが、一緒にいて恥ずかしい。

藤ねえはずっとこの調子だ。あっちこっちに目移りしてはたばたと行くからそのうちはぐれるんじゃないかと思う。まあ、ここには藤村組から店を出している人も多いためだし、知り合いが多いみたいだから、はぐれたところでどってことないだろうけど。

そう思っていると、聞き知った声に呼び止められる。

「あれ？衛宮じゃないか」

「慎二」

桜の兄で、俺の親友の間桐慎二だ。今日も今日とて女の子を数人つれている。

どうやら慎二も今日は浴衣だったらしく、老竹色地に唐草模様が垢抜けていて、瑠璃色の帯がしゅっと締まった感じの色男を演出している。浴衣にあわせて同じく緑系統の苔色の下駄の選択が中々渋い。

「そつだ、衛宮」

なんだよ、と返事をする前に、慎二に手をとられ（気付いていたが、慎二なので避けなかったただけだな）、こそこそと内緒話をするように顔を寄せられ、小声で話しかけられる。

「なあ、今日はシロさんと一緒じゃないのか？」

そつ口にする慎二の顔は、まるで純粋な少年のような照れ顔だった。

・・・ああ、そういえばそつだった。

慎二は初めて俺の家でシロねえに会って以来こんな感じでシロねえのことを気にしている。

「だけど・・・。」

「なあ、慎二」

「なんだよ、衛宮」

むつとしたように、慎二が眉根を寄せる。

「お前、遠坂が好きなんじゃなかったっけ」

そつ、確か、学年のアイドル、あの遠坂凜に告白して、こっぴどく振られたとかなんとか聞いたような。

「あのなあ、衛宮」

ふう、と慎二はまるで聞き分けの悪い生徒を前にしたような顔をして言葉を続ける。

「いいか、遠坂とシロさんに関する感情は全くの別物なんだよ。つたく、なんでそんな当たり前のことがわからないわけ？ああ・・・衛宮だから仕方ないか」

・・・いや、わからないから。

「あの人はそんなんじゃないだよ」

とりあえず、慎二の心は中々複雑みたいだ。



「そうか」

「で、一緒じゃないのか」

「ああ、シロねえは今桜と一緒にまわってる。あとで合流する予定だけど、それまでは別行動だ」

「げ、あの足手まといとかよ」

慎二が嫌なものをきいたとばかりに頬をひくつかせる。

「慎二、妹にそんな言葉はないだろ」

「まあ、あの人は優しいから、桜みたいな落ちこぼれにも手を差し伸べるんだろっな」

相変わらず言葉は酷いが、そのわりにその声音には棘が含まれていなかったから、それ以上咎めるのはやめる。そもそも、この毒舌さが慎二の持ち味なんだし。これがなければ慎二じゃない気がする。ひよいと、慎二が離れ、女の子たちの元に向かう。

「行くのか？」

「ああ、あの人によろしく言っといてくれ」

そんな言葉を残して慎二は俺と別れた。

side・エミヤ

待ち合わせ時間30分前が近づき、桜と私は集合場所に近づく。

その時、何度かこれまでも聞いてきた威勢のいい少女の声が私の耳に届いた。

「あー、レッドのねえちゃん！」

「おや、これは奇遇」

「エミヤさん、お久しぶりです」

嬉しそうな声をあげて、私を指差しはしゃぐ、浅黒い肌の少女は蒔寺楓、時代がかった口調のミスティアスな少女は氷室鐘、ぼやん

と柔らかな微笑みを浮かべるいかにも癒し系といった感じの少女は三枝由紀香だ。彼女達と初めて会ったのは3年ほど前の夏の間だ。たか。ナンパに絡まれていた由紀香を助けたのが始まりで、その時は名乗りもせず別れたのだが、新都を歩いていた時にばっかり何度か出くわし、根に負けた末、「エミヤ」とだけ名乗った。以来、何故か懐かれている。

「三人とも、元気そうだなによりだ」

ふむ、とそれぞれの格好を見回す。三人は三人とも浴衣に身を包んでいた。

色黒の肌が健康的な楓は、藍色地に桔梗柄、帯は灰色が地だが、色鮮やかな花模様に包まれていて地味さはどこにもない。左下に一匹だけ描かれた赤い蝶が印象的だ。落ち着いた意匠の浴衣は、元気で活発な彼女には合わぬと思いきやなんのその、呉服屋の娘で普段は着物で過ごしていると聞くだけあって、よく似合っている。

鐘は、白緑地に、白鶴と月をあしらひ、大人っぽく仕上げている。帯の色は老緑と柑子色。唐草模様が慎まし気に描かれている。衣装にあわせて華やかな和柄のポーチを身に着けている辺りが抜け目がない。髪は結い上げ、赤い花飾り一つ、それが大人っぽい落ち着いた色合いに華を添えている。

由紀香は、朱色地に流水と和鞠をあしらった浴衣に、山吹色の帯には黄色い小さな花々が描かれたデザインに、結び紐は鮮やかな茜色。全体的に可愛らしいデザインとなっており、赤い花飾りもまた、その印象を強めている。

「ふむ、楓も鐘も由紀香もよく似合っている。年頃の娘らしい美しさだ。また、下らぬナンパにひっかかるからぬよう注意することだな。次も私が助ける保障などどこにもないのだからな」

その言葉に三人が照れる。

「かー、もうあんなのにひっかかるわけないって」

「む・・・前から思っていたが、貴殿は男子のような物言いをされるな」

「あははは・・・エミヤさんもその浴衣よくお似合いですよ」

そんなやりとりを繰り返していると、後ろからおずおずとした声がかかる。

「あの・・・」

桜だ。話においていかれてどうしたものか、と思っていたのだから。

「およ？」

「もしか、妹君か？」

「でも、そのわりに似てないぜ」

三人が興味津々といった風情で桜を見る。それに、桜が萎縮する。

「ああ、桜。こちらの三人は・・・そうだな。士郎や君の兄の学友にあたる。まあ、色々あつてな・・・私とは顔見知りといったところか」

「そうですね」

士郎の学校の生徒ときいて、ほんの少しだけ桜の警戒が緩む。

「おお、顔見知りとはレッドのねえちゃん、そりやつめたいぜ」

「ふむ、まあ確かにそれほど知っているわけではないからな」

「あはは・・・」

全く、本当にこの三人は見ていて飽きないな。

「間桐桜です」

そう、桜が挨拶をすると、三人は大小は別にして一様に驚く。

「え・・・間桐つてもしや、あの間桐か？」

「君の兄とはもしかや間桐慎二のことか」

「あの間桐くんの妹さん？」

その言葉に戸惑いつつも桜は・・・「えっと・・・はい、そうですね」と答えた。

「かー、まじかよ。あの間桐の妹でなんでこんないい子そうなるんだ？」

「全く、事実は小説より奇也とはこのことだな」

「あはは・・・。あ、自己紹介が遅れたね。わたし、三枝由紀香。」



がーん。そんな擬音が本当に聞こえてきそうな風体で、少女はあからさまなシヨックを受けてへこんだ。

「なに？何の話？」

話についていけない虎はしこたま買い込んだ食い物をむぐむぐと消化していた。桜は状況がわかっていても何も言い出せず、ただ苦笑しながら立っていた。

イリヤ達が合流するその直前に、三人娘達は、鐘の「さて、これ以上家族の団欒を邪魔するわけにはいくまい。楓、由紀香、行くぞ」との言葉を合図に立ち去っていった。

再会したイリヤは、分かれたときのことなく不満そうな様子は跡形もなく消え去り、今は土郎相手に嬉々として今までの経緯を話している。土郎もそんなイリヤの様子に頬を緩めながら耳を傾けている。

ふと見ると、隣には舞弥が立っていた。

「祭りとは、これほどにぎやかなものなのですね」

淡淡とした声。だけど、どこか羨望のような色が僅かに染み出しているのは、きっと私の気のせいではないのだろう。

「もつとにぎやかな祭りはいくらでもある」

「そうですね・・・」

そんな言葉と共に口を紡ぐ横顔を見る。

老いたな、と思う。

女性に年齢の話をするのは失礼ではあるが、それでも、8年余りの年月は人間にはとても長い。

出会ったときは皺一つない若い女だった。だが、今は口元と目元に少しばかり皺が浮いている。30も半ばになるうとしているのだから、それが当然だ。寧ろ、8年以上の歳月を経ても全く外見に変化に見られない私こそが異端なのだから。

当然だ。受肉したとはいえ、私は英霊の一席。変化などおきよう筈がない。

それでも・・・受けた当初はただ、災難としか思えなかった、小さな凜による呪いが今は寧ろありがたい。

『普通の人間のように髪がのびる呪い』といえば、なんとも間抜けな響きでは在るが、人間の外見には髪型もまた大きく作用する。私自身の外見年齢は全く変化していないが、それでも髪型一つで5歳くらいは印象が左右されるといつていい。それは、年をとっていないということとを誤魔化すのにはとても有益な手だ。・・・とはいえ、流石に10年も誤魔化すのは難しいだろう。いくら若作りだと言い張っても限界はある。それから考えたら・・・さて、聖杯戦争のことを抜きにしても私はあと何年冬木で生活ができるのやら。偽造戸籍の私の今の年齢は26歳。もって、あと五年が限界というところだろう。

ああ・・・でもそんな心配はそもそもいらぬ。これは余計な思考だった。

そんなことを考えているうちに花火がはじまる。空に打ち上げられる大輪の花。それを前に人々の瞳が輝き、その天上のアートを眺め、見惚れていく。

人の手で創られ、創意工夫されて残ってきた伝統と職人技の人工の花。

だが、それは確かに人々の心を打ち、感動を与える一枝なのだ。

「また・・・」

ぼつりと、士郎がつぶやく。

「また、みなで来年見に来ような」

それにふつと明るい声でイリヤは「ええ、そうね、勿論よ」という。

二人は花火を見ている。だから、気付いていない。

爺さんは・・・切嗣は、哀しげに瞳を細めて、儂く笑っていた。

「親父？」

静かなことに・・・返事がないことに気付いたのだろう、士郎が振り向く。それに、切嗣はいつもの顔を装って「ああ・・・そうだ

ね」と、静かな声で告げ、そして。

「約束しよう」

そう言った。

花火が終わり、祭りは終わった。その帰り道、私は切嗣の横に立ち、念話で会話を繋げた。

「爺さん」

「ん・・・？どうしたんだい、シロ」

まるで好々爺のような顔と口調。しかしその頬はやつれ、指は細くなっていった。それは、なにも歳をとったから、というわけではない。

「保ちそうに・・・ないのか？」

僅かな動揺がラインに流れ込んでくる。

「まいったな・・・」

「どうなんだ」

8年以上の月日、青崎の礼装のおかげもあつたのだろう。年月を経るごとに力を取り戻していった私とは裏腹に、切嗣の力は少しずつ少しずつ、年々弱っていった。

なんといおうと、最後の令呪が残っている以上、私は切嗣のサーヴァントだ。ラインから流れる魔力からしても、切嗣の生命力そのものが弱っているのは明白だ。

「保つよ」

こともなげに、爺さんはそう伝えた。

「来年の約束を反故にする気はない。それに、聖杯戦争がはじまるのは10年目なんだろう？それまで、保つよ」

「・・・本当に、か？」

淡々と伝えられる声。だが、それに逆に不安が過ぎる。

「自分の身体のこととは自分がよくわかつている。だから、そんな顔をしなくても大丈夫だよ。君がそんな顔をしていると、イリヤや士郎が哀しむし、僕も見たくないなあ」

『・・・わかった』

たとえ虚勢だろうと、それでも信じると決めたのだから、だから私は思考をそこで打ち切った。

「もう、シロ、おいてっちゃうよー。ついでにキリツグも、早くきなさい」

白いお姫様が元気良く発破をかける。

その紅色の瞳には明日への希望がつまっていた。

「わかったわかった。今、行く」

そして空を見上げる。

果たせるかわからぬ約束を残して、そうして今年の夏も終わっていくのだ。

了

おまけ、「猫好き必死」

> i 2 7 5 4 8 | 3 0 3 2 <



## 閑話 夏の約束（後書き）

というわけで、夏祭りの話でした。次回は登場人物詳細プロフィールをあげて、物語は本編開始の年代に突入します。

あ、ちなみに今回四コマですが、イリヤの猫嫌いがこの後発覚して、藤ねえの生徒ん家にもらわれていきました。とかオチをつけてみる。元ネタはホロウのアーチャーがなんか「子猫さん」とか可愛いこと言い出してたからだ。そんな感じ。

## 登場人物・詳細プロフィール（前書き）

ばんははろ、E K A W A R Iです。

今回はいよいよ年代がステイナイト本編の時代においつきましたので、最後の閑話集である「それぞれの日常」編の前に、ざっとプロフィールをあげさせていただきます。

まあ、これにも書いてますが、第五次聖杯戦争編からはいよいよ、一人だけオリジナルマスターも参戦という運び。だが、オリジナルサーヴァントは存在していないので、そういうのが嫌いな方はご安心ください。

## 登場人物・詳細プロフィール

> i 2 7 7 3 3 — 3 0 3 2 <

### 【衛宮家の人々】

【名前】 衛宮・S・アーチエ<sup>ウロツ</sup>

【性別】 女性（本人は内心否定したい）

【身長・体重】 174 cm 58 kg

【スリーサイズ】 B 93 W 61 H 91

【備考】

原作UBWルートにて、過去の自分に答えを貰い、そのまま何故か連続で座に戻る事もなく、第四次聖杯戦争に参加した並行世界の養父・衛宮切嗣に呼び出された英霊エミヤシロウその人・・・だが、切嗣に呼び出された時点でうっかりの呪いを受けていたり、女性体になっていたり、途中で髪の毛が普通の人間のようにのびる体質に変わってしまったり、おまけに聖杯の泥を浴びて受肉してしまったり数奇な運命を歩んでいる、この話の主人公。

ヒロインでもあり、ヒーローでもあり、ヒロインポジションにいらっしゃると思ったら突如ヒーローポジションに戻ったり、やっぱりヒロインポジションになったり、とても忙しい人でもある。

聖杯の泥の影響で受肉はしてはいるものの、英霊全盛期の6割くらいに能力が落ち込んでおり、魔力の消費を抑えるために普通の人間のように食事も睡眠も取る。また、特別性の髪留めをしており、大気中の魔力を少しずつ集めることや貯蔵することが出来る。右手小指に嵌めている指輪は魔力封じの一種で、これによって彼女の魔

力量は並みの人間、普通の魔術師並にしか認識することが出来なくなっているし、気配も人間そのものに偽装されている。以上、諸々によって元英霊だとはまず気付かれない。彼女が元英霊だと知っているのは、髪留めと指輪の提供者である青崎橙子と、養父の衛宮切嗣、姉で妹のイリヤスフィール、第四次聖杯戦争に参加していた言峰綺礼、虫で全てを見ていた間桐臓硯、アインツベルンのアハト翁くらいなものである。あと舞弥さん。

今は一応人間ということにして、ひっそりと暮らそうとしているのだが、気付いたら冬木の伝説的存在になっており、本人も納得していないらしい。あと、火曜と木曜の週二回奥様方たつてのお願いで料理教室を開いている。評判はいい。仕事は頼まれたらはいはいやっているので定まらない。

自分が今女性であることについては大分受け入れられるようになってきているが、完全に女性物の衣服を着るのは凄く嫌。あと、男にナンパされるのは個人的に納得いかない。基本的に老若男女、動物にも好かれる。本人が望む形とは限らないけど。

衛宮家を仕切っており、実質みんなのオカンの存在になっているのだが、本人にそのことを指摘すると怒る。士郎の魔術と剣の師匠でもある。偽名のアーチェは、アーチェリー（洋弓競技）をもじつたものであり、その名前で呼ぶ人間は実質一人しかいなかったりする。

偽造戸籍上の年齢は28歳。が、英霊なので10年経っても外見年齢は変わっていない。

【名前】 衛宮 士郎

【性別】 男性

【身長・体重】 167cm 58kg

【備考】

やっぱり衛宮家に引き取られて育った原作の主人公にして、この

話の準主人公。

原作同様、穂群原学園2年C組に在籍しており、弓道部では現在幽霊部員状態。むしろ半マネージャー。穂群原のブラウニーになりかけているが、原作ほど人間的には壊れてはいないし、正義の味方の呪いを受けてもいない。だが、多くの人の役に立ちたいという思いだけはゆるぎなく、強く心にもっている。

義姉に、アーチエとイリヤがいるが、アーチエが自分と同一の起源をもつ存在だとは夢にも思っておらず、時々うっかり「母さん」と呼んでしまつては怒られている。

普段はアーチエのことは「シロねえ」と呼んでいる。

アーチエには憧れ尊敬を覚えている反面、時々発動するうっかりや、自己犠牲を厭わぬそのあり方には危ういものを感じており、強いことは知っていても、寧ろ完全に守護対象なイリヤよりもアーチエのほうが心配だつたりもする。ある意味イリヤよりずっと隙がでかいし。

ちなみにイリヤのことは普通に「イリヤ」と呼んでる。あと、無報酬で士郎が生徒会の雑用とか引き受けた日にはイリヤが報酬を受け取りにいたりするので、士郎は頼まれごとをするとき、何かしら相手から報酬を貰うようにしているらしい。まあ、ジューズ一本とかそんなんだが。

それでも、正義の味方に対する漠然とした憧れは今も胸に燻つていたりする。

原作と違つて、アーチエに主夫として活動の場を奪われているためか、バイト先は「コペンハーゲン」ではなく、週二回派遣の形で家事代行サービス会社に所属していたりする。んでもって、時々アーチエがどれくらい士郎の家事の腕が上がったのか確認したりしてる。頑張れ未来の家政夫。

引き取られて1年後からの9年間、元来同一の魂を持つアーチエに剣と魔術を師事しているため、剣と魔術に関しては原作士郎よりもずっと格上。（原作開始時の士郎の約五倍くらいの戦闘能力）だ

が、毎日調理や家事をしてない分、家事スキルは要領がいいだけで、原作士郎よりもずっと格下だったりする。

魔力殺しのバンドをしているのと、普通魔術の跡継ぎは一人だけとされる魔術師の常識が故に、完全に一般人と周囲には思われている。

衛宮士郎であるにも関わらず、幸運値がB〜Cくらいあったりする。基本あまり危険な目に合わない。

【名前】 衛宮 イリヤスフィール

【性別】 女性

【身長・体重】 157cm 45kg

【スリーサイズ】 B83 W56 H84

【備考】

士郎の義姉であり、アーチエの戸籍上の義妹である。

私立穂群原学園3年B組に在籍、元生徒会長。

魔術師殺し衛宮切嗣と、アインツベルンのホムンクルス、アイリスフィール・フォン・アインツベルンとの間に生まれた、結構珍しいタイプのホムンクルスだった。ただし、今の彼女の肉体は人形遣い青崎橙子が作った人形体であり、彼女本来の肉体は報酬として青崎橙子にもっていかれている。

彼女本来の身体は、冬木の聖杯の器になるために生まれる前から調整を施されており、そのせいで外見は第二次成長期前の姿でストゥップしたまま成長することもなく、また、長く生きることが出来ないように設定されていたわけだが、青崎の人形に移ることによってそれらの問題は解決した。ただし、元の体ほどの膨大な魔力貯蔵量もまた、今の体に移ることによって失われており、今の彼女の魔力量は遠坂凜よりも少し下といったところである。

原作と違って幼い姿ではないためか、士郎を「お兄ちゃん」と呼んだりしないかわりに、よく姉ぶる。だが、根本的な性格はあんま

り変わっておらず、大河をよくからかったり、土郎大好きスキンシップ大好きだったり、時々誘惑してきたりなんかもある。

アーチェエのことは「シロ」と呼んでおり、彼女に対してもわりと姉ぶる。んでもって、土郎と同一の起源だった存在であることをしつかり認識している。だが、元男だと知っていても、あまり気にしていない。むしろ、今は女の子なんだから、と内心彼女に可愛い服を着せたくてたまらない。拒否られるのはわかっているので、自分の誕生日の時にここぞと着せ替え人形になってもらっている。シロもシロウも自分のもの！と唯我独尊なお姫様です。おそらく一番ヒロインの座に近いキャラ。

どうでもいいが、実の父親である切嗣には冷たい。でも、魔術の師として接している時の切嗣は嫌いじゃないらしい。

学校での彼女は遠坂凜に並ぶ二大アイドルの一人で、「雪の妖精」の名で慕われている。現生徒会長の一成は土郎にべたべたしすぎて面白くないので、二人が話をしているとよく割り込みに入る。

【名前】 衛宮 切嗣

【性別】 男性

【身長・体重】 175cm 67kg

【備考】

衛宮家の大黒柱。イリヤの実父で、アーチェエと土郎の養父。そして、アーチェエのマスター。

10年前、聖杯の泥をかぶり呪いを受けたため、魔術師としての能力はかなり弱体化されている。だが、原作と違ってアーチェエが投影した全て遠き理想郷の真名開放によってある程度まで浄化されたため、未だ存命中。とはいえ、呪いの汚染が消えたわけではなく、現時点で余命1年を宣告されている。そのことを知っているのはアーチェエとイリヤ、右腕である舞弥、その体を診た青崎橙子くらいのもの。

戦いが終わって以来、すっかり子煩悩の駄目親父。アーチエが土郎と同一の存在で本来は男だと知っていても、その扱いは「娘」。アーチエが娘ではなく自分の妻か恋人だと誤解されても、寧ろ嬉しそうにデレデレする。んで怒られる。

アーチエのことはイリヤと同じく「シロ」と呼んでいる。

衛宮家に通ってくる間桐桜のことは「桜ちゃん」と呼んで一見可愛がっているけど、実は衛宮家で一番桜を警戒しているのはこの男。蟲とか入ってきたらコロす。

やっぱり女の子に甘く、だらしない。土郎のことも可愛がっているが、元が同一の存在かつ英霊であるアーチエよりは厳し目に接していたり。その辺は性別の差？息子と認めているからですよ。寧ろ、アーチエ的には「息子」ではなく「娘」にカテゴライズされていることのほうが余程泣きたい。

子供達が幸せになってくれることを、何よりも望んでいる。

#### 【その他】

【名前】 遠坂 凛

【性別】 女性

【身長・体重】 159cm 47kg

【スリーサイズ】 B77 W57 H80

【備考】

御三家の一角にして、冬木の若きセカンドオーナー、名門遠坂家の現当主。

原作同様穂群原学園2年A組に所属しており、学校ではミスパーフェクトの呼び声高い優等生で、イリヤと並ぶ二大アイドルなわけだが、イリヤにからかわれる時にうっかりで地を晒すこともわりと



あつたりもする。

子供の頃に、アーチエに「髪が普通の人間みたいに伸びる」呪いをかけた張本人だが、本人は覚えていないし、アーチエのことはただの変わり者な魔術師だと思っている。

原作同様、両親の死後、言峰を後見人に遠坂家を継いで、広い洋館で一人暮らしをしていたわけではあるが、原作と違って、多ければ1週間に2、3度、少なくとも1カ月に1度くらいの確率で、わりと頻繁にアーチエが訪ねてきたりするために、あまり一人を感じることもなく育った。

アーチエのことはなんだかんたいつつも、その関係を気に入っており、本当は自分の管理地に「衛宮」なんて得体の知れない魔術師一家を迎え入れるのはいけないだろうと理性では思いながら、アーチエから定期的に金その他を徴収することによって、協会にも教会にも知らせずに黙認している。

それらの環境の違いのせいか、原作の凜に比べると気が長めで、原作ほどは完璧であろうと気が張っているわけではない。だが、凜は凜なので、色々注意は必要。

唯一、アーチエのことを「アーチエ」と呼んでいる存在。

【名前】 間桐 桜

【性別】 女性

【身長・体重】 156cm 46kg

【スリーサイズ】 B85 W56 H87

【備考】

やはり、子供の頃に遠坂の家から間桐の家へと養子に出され、虐待に等しい魔術調整を受けて育った。

衛宮邸に通う経緯は原作とは異なり、兄の慎二がアーチエに妹に会ってみたいといわれて、桜を連れてきて話をしたところ、「よかつたら料理を覚えてみないか」と誘われ、後日返事をするこ

てその場では別れ、前回の実質勝者な衛宮に警戒をする祖父が、それでも情報ほしさに通うだけ通うように指示したのが原因。

また、慎二も、アーチエとの接点欲しさというか、情報ほしさといった感じでそれを認めため、家族公認で衛宮家に週に三回ほど通っている。

とはいえ、賑やかな衛宮家に通ううちに桜も段々明るい性格になってきており、やはり原作同様衛宮家が彼女にとっては唯一安らげる場になっている。

兄の慎二との関係は、主にアーチエが原因で原作ほど酷い関係にはなっていないらしい。

あと、原作同様に凜に憧れと嫉妬をもっていて、士郎には恋心を寄せているわけだが、イリヤがいるために一步踏み出すのにどうしてもためらう。だが、イリヤのことも嫌いじゃないし、今の立ち位置を捨てるのも嫌だし、衛宮家のみんなが好きだから、自分はこのままでもいいんだ、という気持ちで8割を占めていたりもする。

どんなに遅くても、夜の八時には家に帰される為に、魔術師としての衛宮家の様子を見ることはない。+士郎は魔力殺しのバンドを常時どこかしらに身に着けている為、衛宮の跡継ぎはイリヤだと思っただけ、士郎のことは一般人だと思っただけ。

【名前】 間桐 慎二

【性別】 男性

【身長・体重】 167cm 57kg

【備考】

やっぱり士郎とは中学時代からの友人で、桜の義兄。弓道部副主将なのも同じ。

女の子が好きで、女の子を周囲にはべらして、同性には嫌われ、他人を見下す自己中心的なところも原作同様ではあるが、原作ほど精神的に追い詰められているわけではなく、ホロウの時の性格

に近い。

また、原作とは違って、土郎と大喧嘩もおこしていないので、友情は続行中。同性の友人は土郎だけなので、高校に入ってから土郎の横ポジションをとっていく一成がちょっと疎ましい。

凜への執着と情欲を抱いているあたりも原作とあんまり変わっていない。ガツガツしていないだけで。

中学時代に、気まぐれで衛宮家に訪れた時にアーチエと初遭遇し、強烈な一目惚れに似た憧れを抱いた。以来、アーチエのことを気にしているが、それは凜や他の女の子に向けた感情とは全くの別物であるらしく、本人の中にある綺麗な感情の塊みたいなものらしい。そのためか、アーチエにむける感情や表情にはウブな少年のような初々しさがやけに漂っていたりする。

ちなみに、イリヤのことは苦手。

【名前】 柳洞 一成

【性別】 男性

【身長・体重】 170cm 58kg

【備考】

やっぱり穂群原学園の生徒会長にして、土郎の友人。

しかし、原作と出会い方は異なっており、小学6年生にあがる年の春休みに、衛宮一家が寺に来たのが縁で知り合った。そのため、学校こそ高校までは別々だが、幼馴染であるといえる。

だからか、周囲の目があるときは土郎のことを「衛宮」と呼んでいるが、二人だけになると「土郎」と名前呼びしていたりする。

原作同様、土郎大好き。凜が嫌い。

前生徒会長で、土郎の義姉のイリヤのことは凜ほどじゃないが苦手で、嫌いに分類している。反面、アーチエのことは尊敬出来る御仁だと思っており、なんでイリヤだけあんな小悪魔めいた性格をしているんだと嘆いたりもする。

【名前】 藤村大河

【性別】 女性

【身長・体重】 165cm 53kg

【スリーサイズ】 B?W?H?

【備考】

原作と同じく、切嗣目当てで衛宮家に通うようになっており、今では二日か三日に一度の頻度で朝夕ご飯を一緒に食べていく、衛宮家半同居人にして、冬木の虎。

アーチエのことは、当初、娘とか何とかいっちゃって、本当は愛人か恋人なんじゃ・・・なんて疑っていたらしいが、一緒に接するうちに、あ、親子だなんて思う部分をいくつも発見して、なんか納得してしまっただらしい。あと「シロさんのご飯さいこー」とかって餌付けされた部分もなくもない。

やっぱり、士郎の姉ぶっているんだが、ぶっちゃけイリヤのことが苦手なので、イリヤにまでは流石に姉ぶれていないようだ。口でイリヤに勝てた試しがない。

【名前】 久宇 舞弥

【性別】 女性

【身長・体重】 161cm 52kg

【スリーサイズ】 B76W60H82

【備考】

原作とは違い、バーサーカーの襲撃に遭遇していない為に第四次聖杯戦争を生き延びた切嗣の片腕。そして公式の愛人。

第四次聖杯戦争後は外国を飛び回っており、それでもアーチエとの約束を交わしたことも相まって、数ヶ月に一度、年に一度の頻度で日本の冬木市衛宮邸に訪れていた。

10年の月日が経ち、30代になった彼女は全盛期に比べると腕が落ちたといっているが、それでも一定以上の水準の戦闘能力を維持しており、弱体化した切嗣に比べると遥かに「使える」人材とも言える。

やはり、隠れ甘党は健在であり、アーチエにはその辺完璧に気付かれているため、よく新作ケーキの味見にまわされている。

切嗣の妹の娘であるイリヤのことはわりと苦手だったりする。

【名前】 レイリスフィール・フォン・アインツベルン

【性別】 女性

【身長・体重】 147cm 38kg

【スリーサイズ】 B68 W52 H70

【備考】

この作品唯一のオリジナルメインキャラクター。

第五次聖杯戦争を前に、アインツベルンから送り出された第五次聖杯戦争の為にマスターであり、この度の聖杯の器でもある。

イリヤスフィールの模造品<sup>コピー</sup>。

外見年齢は中学生くらいのもので、ZEROマテリアルにのっている初期デザイン版アリスフィールといった感じではあるが、アイリと違って冷め切った眼が印象的。

纏っている衣装はわりとゴスロリ系ではあるが、そのナイフのよきな気性もあり、可愛らしい印象はそれほど高くない。

原作のイリヤ以上の孤独な少女。

## 登場人物・詳細プロフィール（後書き）

というわけで、プロフィールでした。

唯一のオリジナルマスターであるレイリスフィールですが、イリヤが聖杯の器ではない以上、別の人物がアインツベルンから送られてくるのが当然ではないかと思った末に生み出したキャラですので、オリキャラいれんなよ派の方には何卒ご容赦いただけたらと思います。

閑話 それぞれの日常 衛宮・S・アーチエ編（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。さて、今回は最後の閑話集である「それぞれの日常」シリーズ第一弾というわけで、丸々エミヤさん視点の話をお送りします。

いやあ、挿絵なしの話は久しぶりにかいた気がするんだな。

side・エミヤ

朝の四時半、夜明けと共に私は目覚める。

まず始めに、洗濯機をまわし、屋敷中を音を立てないように掃除をする。余裕があれば草むしりや庭木の剪定もこの時済ます。

それから、約20分ほど外へとランニングに出かけ、帰ってきたら手と顔を洗い、洗濯物を干し終わると、朝食と弁当の下ごしらえへと取り掛かる。

「おはよ、シロねえ」

そうこうしているうちに士郎が目覚め、朝食の手伝いを申し込んでくるから、一品ほどおかずを任せ、残りの仕上げへとかがつていく。

「ふああ、士郎、シロおはよう」

朝6時を過ぎると、眠そうな顔をしたイリヤが居間にやってくる。高校三年にあがり、部活にも所属していないのだから本当はこんなに早く起きる必要はないだろうに、それでも切嗣より後に来るのは嫌らしく、出来る限り早起きを心がけているらしい。殊勝な心がけだ。といたいところだが・・・あれは、父親への対抗心からきたところがでかいと見た。だが、まあ、イリヤと切嗣の問題だ。口を出すのは野暮というものだろう。それに早起きは三文の徳ともいう。悪いことではない。

「おはよう。味見するかね？」

そういつて卵焼きを一切れつまんで差し出すと、「うん、ありがと



う」と微笑んで口にするあたりが、なんとも愛おしい。

「うん、美味しい」

そういつてにこにこと、イリヤは私と士郎のエプロン姿を眺めて大人しくしている。士郎とシロのエプロン姿を見るのが好きなのよ、と彼女が言ったのは大分昔のことだ。

「おつはよ～～～～！うん、今日もいい匂い！シロさん今日の朝ごはんなんに？」

と、どたばたと忙しい足音と共に、元気な声が玄関から響いてきて、思わず苦笑する。

「今日は納豆と、豆腐とワカメの味噌汁、鯖の煮付けに、青菜のおひたしだ。ああ、自家製の胡瓜の浅漬けも出そう。楽しみにしてくれているのはありがたいがね、君も女性としての慎みをもってだな、廊下を走ったり叫ぶのはやめたまえ、大河」

「はい」

そうやってにこにこと答えるのは小さな子供・・・などではなく、れっきとした成人を迎えた大人だ。・・・一応。

茶色いショートカットに幼くさえ見えるだろう、知らぬ人間が見たならかわいいという感想をもつてもおかしくない顔立ちをしており、虎柄の衣服を好んで身に着けている、元気な女性だ。元々、この衛宮の屋敷を管理していた藤村組の孫娘で、切嗣に懐いており、今では二日に一度は朝飯と夕食を一緒に囲んでいる。

「おはよう。大河ちゃんは今日も元気だね」

そっぴいながら、にこにこと入ってきた衛宮切嗣ちちおは、新聞を片手に定位置へと腰をかける。

「あ、切嗣さん、おはようございます」

ぱつと、大河の顔が輝く。それにタイミングをあわせるように士郎の声が呆れたような音を上げる。

「藤ねえ、顔出すのはいいけど、たまには少しくらい手伝えよ」

むっすりとした顔だ。士郎の手には大皿が二枚のついている。

「何よ、やらないのはイリヤちゃんも同じじゃない。ふんっだ、そ

ういうの鼻肩っていうんだからね。全く、おねえちゃんは哀しいわ。すっかり土郎ったら生意気に育っちゃって」

「あら、それは大河が相手だからよ。土郎はわたしにはいつだって素直だわ。それに、二十歳を越えても祖父からお小遣いをもらっている大河とわたしを一緒にしないで欲しいんだけど？頻繁に家に来て、シロの料理を平らげていくくせに、いい歳をした大人が食費すらいれないのはどうなのかしら？食費を払わないというのなら、手伝いくらいして然るべきだと思うけど？それが嫌なら、諦めて実家で食べてきたらどう？」

にっこりとした、これでもかつてほど綺麗な笑顔で告げられたイリヤの言い分に、大河は涙目だ。

「う、う、う、シロさ〜ん」

虎はがばりと、そのまま茶の用意をしていた私へと突進してきた。とりあえず、身動きできない状態で一言いわせてもらおうとすれば・・。

「・・・何故、私に抱きつく？」

最初は切嗣目当てで、私を敵視すらしていたのも関わらず、気付けばいつの間にか私に懐いていた猛獣を前に、思わず途方にくれた声で呟いた。

朝8時、学校へと出かける土郎とイリヤ、大河を見送った後食器を洗い、ゴミ出しへと出かける。

「おはよう、エミヤさん」

「ああ、おはようございます」

近所の奥様達に話しかけられて、慇懃無礼にならない程度に笑みを浮かべて会話をかわす。・・・本当はこういうのは苦手なのだが、近所づきあいを無視するわけにもいかないし、奥方達の情報網を甘く見るわけにもいかない。もしかしたら、ここでしか聞けない話もあるかもしれないので、会話にのる。

「そうだ、エミヤさんこの前は助かったわ。もう、買い換えるしか

ないかと諦めてたから・・・」

そういつて、つい先日、動かなくなったビデオデッキの相談を受け、修理したことについて思い出す。

「機械の方が完全に壊れていたのなら修理しようがありませんが、あれくらいでしたら、なに、大したことじゃありませんよ」

「またまたそんなことをおっしゃって、素人目から見ても業者よりも手際がよくって凄かったですよ。エミヤさん、昔は修理屋に勤めていたりしたんじゃないんですか？」

「まさか」

軽く首を振って返事とかえす。

「あたしは助かりましたけどね、でも本当にお礼はいいんですか？ 少しくらい・・・」

「いや、結構。困った時はお互い様です。それに対価なら既に頂いていますから」

「え？」

不思議そうに首をかしげる中年女性の様子を見て、口の端を知らず吊り上げる。

「貴女の笑顔ですよ。私への礼というのならあれで充分です」

目の前の奥さんの顔が急に赤らむ。

「あらあら・・・まあまあ・・・」

見れば、他の奥方達3人もどことなく照れたような顔をして私をじっと見ていた。

・・・む？私はそれほどおかしなことを言っただろうか？

「エミヤさんって本当変わってるわねえ」

「エミヤさんが男の人だったら、わたし、絶対ファンになっていましたよ」

「ふふ、エミヤさん、今度はあたしの家の水道管のほう見てもらってかまいませんか？ なにか最近調子が悪くて」

「ふむ・・・構いませんよ。いつ頃が都合がいいですか？」

ゴミだしから帰ってきた後は、その時その時の予定に従って行動する。今日は、新都のヴェルデにあるレストランのひとつで、新人への研修指導を頼まれている。時間は二時間ほど。その後は深山町に戻り、マウント商店街の骨董屋で、真贋の見分けの鑑定の指導、商店街に戻り夕食の食材を買い込み、帰宅といった予定だ。

いつ消えるかわからない身でもあるから、一つの仕事だけに従事することは殆どないが、それでも人として生きていく限り先立つものは必要だ。故に、私の予定は毎日日替わりでめぐるましく変化しており、確実に確定しているのは火曜と木曜の週二回開いている料理教室くらいのものだが・・・頼まれ始めた時から約9年。そろそろ、潮時かと思っている。思っているのだが、想像以上に評判がいいせいで、中々やめるきっかけが出来ないところが辛いところだ。とまあ、そんなことはおいておこう。そろそろ出る時間だ。指導を頼まれているといっても、特別な格好もいらさない。必要なものは全部向こうが用意している。せいぜい買い物のマイバックと財布があればそれでいいといったところだ。

「切嗣しんすけ」

眼鏡をかけて、かたかたとパソコンを操作している切嗣に声をかける。

「ん？出るのかい？」

「ああ、今から出てくる。昼食は冷蔵庫の中にしまっておいたから、くれぐれも買い食いなどはしないようにな」

「はいはい」

苦笑しながら答える切嗣だったが、はっきりいってこの人がこういう態度をとっているときはあまり信用がならないのだ。

「それと、出かける時はちゃんと戸締りをしてからいってくれ。爺さんに限って忘れたりしないだろうが、最近の貴方は注意力も散漫気味だからな。私の今日の帰宅時間はそれほど遅くはないだろうが・・・なんだ？」

見れば、くすくすと切嗣は笑っていた。

「いやね、本当にシロはお母さんみたいだなんて」

「誰が母親だ。誰が」

「この家の、だよ」

それがあんまりにも穏やかそうな顔だから、怒るのも馬鹿らしくなってきた、思わず重いため息をつく。

「からかうのなら、他所でやりたまえ」

「そういうのじゃないんだけどな。まあ、シロは頑固だから仕方ないか」

にこにここと笑う顔はどこまでも食えない。

あと、頑固とはなんだ。あんたには言われたくないし、そもそも私が元は男だと知ってて何故母親に例える。嫌がらせとしか思えないのに、この人だけは結局私は憎めないように出来ているらしい。まあ、有体にいうならどうでもいいような気がしてきた。考えるだけで頭が痛いし、無駄だ。言ってきたのが士郎だったらもつと遠慮なく怒鳴れるというのに。

「シロ？顔が怖いよ？折角可愛いんだから、そんな顔をしていると勿体無いなあ」

「ああ、つたく。貴方は。ああ、もういい。伝えることは伝えたらな」

ふい、と背中を向ける。外は青い。この調子だったら洗濯物は綺麗に乾きそうだ。

「・・・父さん、行ってきます」

「うん、シロ、いつてらっしゃい」

さてさて、頼まれていた件のレストランの新人への研修講師は無事に済み、さて、深山町へ向かうかと思った矢先・・・少しだけ困ったことになった。

(何故、こんなことに・・・)

思わず呆れ混じりのため息が出そうだ。

「なあ、ねえちゃんちよつとくらいいいだろ？」

「何、もしかして日本語わかんない？ファック・ユーOK？」

「男ばかりでかわいそーな俺たちと、たのしーことしようぜ？」  
「そうそう。痛いことはしないからさ」

一人で歩いていたのが原因か、気付けば6人ほどの男達にかこまれていた。というか、一人が最初話しかけてきたのだが、全くどこから這い出てきたのやら、無視していたらどんどん膨れ上がって6人になった。

じつと、男達を見回す。

どいつもこいつもにやげづらしてて、図体ばかりでかい青二才だ。大方、年中女の子をオトすことやらしか考えていないような連中なんだろう。

あわせて男6人の言い分から判断するとするなら、私の肉体目当てで近づいてきたナンパ連中といったところか。

あまり嬉しくない現実ではあるが、現在の私は見た目も肉体も女だ。若い女だ。やつらの私を見る視線には、欲情しているといった下種びた色がのっている。

げらげらへらへらした顔といい、どことなく慣れた動きといい、集団レイプなども経験がありそうな奴らだな、とあたりをつける。そういう空気を纏っている。どう見ても真っ当に「女の子とお付き合います」というタイプではない。

たとえ多少背が高く近づきがたくとも、一人である私なら襲いやすいと見て声をかけてきたというところか。・・・まあ、今は夜ではなく、昼間だからそこまであからさまなことはしでかさないだろうが。夜になるのをまてないほど、飢えているという可能性もある。

だが・・・。

(・・・納得がいかない)

何故、よりにもよって私をナンパする？

私は別に着飾ってもいなければ、男の欲情をそそるような格好をしているわけでもない。黒いシャツに黒いスラックスという、凡そ



「このアマ、女の分際でいい気になるんじゃないやねえ！」

「腐れマ コがッ！！」

「やれやれ、野卑な連中だ」

右から来た拳をひらりと交わし、一人目の男の腹を蹴り上げて次に自分にむかつてきている男のほうへと飛ばす。二人目の男は、一人目の男にもろにぶつかって、そのまま一緒に転倒。その頃には私へとむかっていた、3人目の男と4人目の男の攻撃をひらりと交わして同士討ちをさせ、そのまま一緒に足払いをかけて仲良く倒れこませる。それらを見ていて萎縮している五人目の男は首の付け根に一撃、手刀を浴びせ気絶させた。

残るは、最初に腕を捻りあげて投げ出しておいたリーダーらしき男一人。男は、目の前で起きた10秒足らずの出来事を前に仰天し、腰を抜かしていた。

「さて・・・まだ、やるかね？」

につこりと、笑顔をおまけして意思を尋ねる。

「ア・・・あ、あ、あ、あんた・・・もしかして、あの伝説の・・・

「・・・む？

「謎の紅き女救世主・・・！」

「・・・なんだ、そのやたらと恥ずかしいネーミングは。

「レッド・ヒーローだって・・・!?!?」

「あの、鬼のように強いつて言う!?!? ヤクザにかちこみして勝ったこともあるとか、族を一晚で一つ壊滅させたとかいう噂の!?!?」

「ていうか、そんなに有名なのか、その恥ずかしいネーミングの伝説。そんなものがこの街にあったとは知らなかったな。」

「白髪褐色の肌だつていうんだから、間違いがねえ」

「ん・・・? 白髪褐色の肌だと・・・いくら外国人が多い街でもそんな容姿は一人いるかいなか・・・む? いや、まで・・・」  
「・・・ひよっとしてオレ、確定!?!? ちよつとまで、何故私がそんな恥ずかしいネーミングの伝説持ちになつてる!?!?」



いやいや、まてまて・・・ヤクザにかちこみなんてしたことなんてないぞ。せいぜい藤村の爺さんへの鉄砲玉を取り押さえたこととか、夜の巡回の時に、女性に無体を働いていた輩30名くらいをとつちめて、匿名で警察に突き出したことがあるくらいで・・・あれ・・・？もしかやあいつらが族だったのか？そういえば、バイクを全員所持していたような・・・。

男達はこわばった眼でオレを見ている。く、そんな目で見るな。マジなのか。その恥ずかしい名前の人物はオレなのか。ていうか、伝説とはなんだ、伝説とは。

おかしい・・・オレは平穩に暮らしている。そのはずだ。目立たないように、普通の人間のように・・・。そう、余計なものに目をつけられたりしないように、土郎とイリヤが普通の生活を維持できるように・・・そう、してきた・・・筈・・・だよな？

思わず、冷や汗がたらたらと流れる。

「そんな化け物相手に勝てるわけがねえ」

「すみませんっしたー！もう二度と声かけませんから、金潰しだけは勘弁してください！！」

「あ、おいつ」

ぴゅーっと、逃げ足だけは速く、気絶した男も拾って、蜘蛛の子を散らすようにナンパしてきた男達は去っていった。

もう少し詳細についてその・・・れっどひーろーとやらについて聞きたかったんだが・・・、同時に詳しいことを聞くのも怖く、つい逃してしまった。

(しかし、あれだ・・・)

金潰しってなにさ・・・。

いや、本当、オレどんな伝説仕立て上げられているんだろう。

と、まあ、今日は予想外のハプニングがあつたが、仕事に私情を持ち込むほどは私は落ちていない。マウント商店街の骨董屋で、頼まれていた仕事を済ませ、礼金を手にして商店街の町並みを歩く。

現時刻は3時半。買い物をして帰るには大分時間がある。

ふむ、そうだな・・・一週間ぶりに凧のところへ今日は顔を出すか。と決め、彼女の家に向かって歩き出す。

確か、最近の実験で家に籠りがちなはずだし、今日この時刻ならそろそろ凧は帰宅しはじめる頃だ。

(全く、少しは息抜きをしろというのに)

まあ、私の言うことを素直にきく凧というのも、なんだか気持ちが悪いのだが。

そうこうしているうちに遠坂の、丘の上の洋館へと辿り着く。

コンコン、とノック。

凧は若くても優秀な魔術師だ。誰か来たならそれに気づかないはずがない。

「凧、私だ」

『何、またあんた？わたしが最近忙しいって、あんた知ってるでしょよ』

億劫そうな声が魔術で反響して届く。

「全く、つれないな。根をつめすぎるのも悪いと思ってるね。食事を作る時間も惜しいだろう君にかわり、夕食を作りに来たというのに・・・全く、昔なじみに少しくらい優しくしてくれてもバチがあたりんとは思わないのか？」

『・・・別に頼んだことなんてないでしょ。でも、まあ、いいわ。

あんたが作るっていうなら食べる。入って。でも前から言ってるけど、余計なところに入ったら殺すから』

「重々承知している。私が入るのは、居間と食堂と台所だけというのだろう。他人の魔術師の工房に土足で踏み入るほど、私は無作法者ではない」

『どうだか』

返ってきた声には少しだけ笑いが滲んでいる。

どうやら、いつもの調子を少し取り戻したらしい。そんな今の凧の顔を想像してみる。きつと意地悪げな表情を浮かべているんだろ

う。だけど、それがどうしようもなく、らしいと思っただけで、思わず頬がゆるむあたり、私も大概未熟者だな。

「さて、と」

とん、と追加で買った材料と、冷蔵庫の中身を見比べる。

「作るか」

「あんだ、相変わらず料理上手いわね」

凜に出した今夜の夕食メニューは、ビーフストロガノフと、半熟卵のサラダ、胃にもたれないあっさりしたコンソメスープに、食後には蜂蜜を少し混ぜたヨーグルト。凜はあまり食べるほうではないから、量はそれなりに調整をしている。

「それは、褒め言葉と受け取っておこう」

「ええ、文句なしの褒め言葉よ」

ぶつきらぼうな口調だけれど、凜は本当に味わって、じっくり咀嚼しながら、少しばかり早い夕食を楽しんでいる。その姿を見ると思わず頬がほころぶ。

同時に、年齢があこの時の『彼女』と近づいたこともあり、かつてマスターだった少女と出会ったその日のことも思い出す。

サーヴァントの召喚に失敗しながら、絶対服従なんて無茶な真似をして、片づけを命じた彼女に自分が放った第一声は「地獄に落ちろ、マスター」だったか。その翌日、疲労していた彼女に差し出した紅茶を、彼女は本当に美味しそうに飲んでいた。

この凜とあの彼女は違うことはわかっていて。それでも、仕方ない。同じ顔、同じ魂、同じ容姿の限りなく同一に近い存在が、あの時と同じ顔をして私の料理を口に行っているのだ。

「あんたは、食べないの？」

「ああ・・・家に帰ったら、家族の分の食事もつくらねばならないからな」

「ふーん、そう」

そういう彼女の顔は、ほんの少しだけ複雑そうな顔をしていた。

凜は、一人暮らしだ。この広い洋館で、家族が死んでからずっと一人で暮らしている。家族というものとは無縁になつて久しい。以前、一度だけ言ったことがある。

『家に一度来てみないか？』

その時凜は、実にあつさりした声と顔で言つてのけた。

『遠慮しておく。他人の家族にわつて入るほどわたしは無粋じゃないの。それに、わかつてるんでしょ。わたしは魔術師よ』

それは独りが当たり前だ、と言つたも同然な言葉だったが、その言葉に悲痛さなどどこにもなく、改めて私は遠坂凜という人間の強さを実感したものだ。

「ねえ、アーチエ、そんなにわたしの顔見てるの楽しい？」

その言葉に意識を目の前の凜に戻す。凜は上品な仕草で私が入れた食後の紅茶を口に行っている。

「そうだな。君が満足そうに私の作った料理を食べている様は、見ている気持ちのいいものだ」

「ふーん……」

凜は、ちよつと肩を竦めながら視線を斜め下におとす。

「ねえ、今度の日曜、アンタ開いてる？」

「……いきなりだな、私の予定など聞いてどうする？」

「いいから、答える」

はきはきした少女の声に、思わず苦笑する。

「そうだな。開けようと思えば開けられる」

「そう、じゃあ、駅前に11時」

それは、なにか。私と出かけるという意味か？

「凜？」

「等価交換よ。確かに一度も私から料理も掃除も頼んだことはないけど、貰いつぱなしじゃ気がすまないわ」

ああ、本当に君は……。

「とはいっても、それでは私のほうが借りが多いことになるのではないかね？冬木のセカンドオーナーに我が家が魔術師一家であるこ

とを黙認して、見逃してもらっている恩を考えれば、私のしていることなどたいしたことではないだろう？」

「・・・ああ、もう、煩い。このわたしが貸しだと感じているんだから、ちよつとは素直に受け取りなさいよ、この男女の捻くれ者」

じろりと、凡そ学校ではとてもじゃないが見せられないような形相をして、ミスパーフェクトの異名をもつ少女は私をにらみつけた。「それともなに？私の隣の歩くのはそんなに嫌？」

そういう顔には、先ほどまでなかった不安が少し隠れていた。

「いや・・・」

彼女の食器を片付けながら、自分でも10年前は考えられなかったほどの穏やかな声音で本音を押し出した。

「君の隣を歩くのは、私にとって何よりも光栄だよ」

夜六時、急ぎ足で買い物を終えて帰宅をする。

「シロ、おかえり」

玄関で切嗣がにこにここと出迎えにきている。

「ただいま」

こんなやりとりに自分はすっかり成れ、安堵さえ覚えている。

「シロ、おかえりつ。桜、きているわよ。ねえ、今夜の夕食は何にするの？」

「ああ、ただいま、イリヤ。そうだな。桜は洋食のほうがむいているから、今日は洋食にしようかと思ってる」

「ふふ、楽しみにまつてるわね」

いいながら、弾むように白銀の髪を揺らしてイリヤは私から買い物袋を預かり、廊下を共に歩く。

「おー、シロねえ、おかえり。桜さつきからずっとまつてるぞ。どこか寄り道してきたのか？」

人数分の茶を出している土郎がそんなことをいう。

「まあ、そんなところだ・・・ただいま」

「おかえりなさい、シロさん」

顔に似合ったおしとやかな声が、静かに響く。桜は愛用のエプロンを身に着けて、まっていた。

「ああ、ただいま。すまなかったな、遅くなった」

「いえ、私も少し前にきたばかりですから」

そういつて控えめに桜は微笑む。それを見ながら手早く手を洗い、私も愛用の赤いエプロンを身に着ける。

「今夜はどうします？」

「洋食で纏めようとは思いますが・・・そうだな、桜は何がいいと思う？」

逆に問いを放つ。

「私、ですか？」

きょとんと、桜が首をかしげた。

「そうだな、今日の課題だ。鳥胸肉をメインディッシュに、自分なら何を作るか考えなさい」

「えっと、そうですね。あ、先日藤村先生に新鮮なトマトをいただいてましたから、鳥のトマト煮込みでどうでしょう？」

「ふむ、ならば他はあっさり仕上げたほうがよかるう」

「はい、そうですね。なら・・・」

そんな感じで、桜との夕食作りは始まった。

桜が私の元に料理の弟子として通うようになったのは、今から2年ほど前。その頃はおにぎりすらマトモに作れなかったというのに、今では間違いなく料理上手と呼んでいい出来にまで育ったのは、感慨深いものがある。

「ふう、ごちそうさまでした」

今日は虎が来なかった分、全体的に静かで落ち着いていた食卓になったと、食後の茶を配りながら思う。

「しっかし、桜料理うまくなったなー」

「本当、本当。とくに肉料理は思わず感心しちゃうくらいだわ」

「桜ちゃんは、きつといいお嫁さんになるよ」

そんな衛宮家一同の賛美に、桜の顔は真っ赤だ。

「そんな・・・シロさんの指導がいいからですよ」

「いや、そんな謙遜をすることもない。君が努力してきた、その結果だ。もう数年もすれば、洋食では私を抜くだろうさ」

ぼん、と頭を撫でながらいうと、桜は、恥ずかしそうに、でも嬉しそうに「ありがとうございます」とそう言った。

「でも、シロねえ、桜ばっかりじゃなく、たまには俺にも料理の稽古つけてくれよ」

「ほう？どついう風の吹き回しだ？私の駄目出しをあれほど恐れていたオマエの言葉とも思えんな」

からかうように言うと、土郎は、うつと声をつまらせて思わず視線を彷徨わせる。

それに、ちよつと意外なくらい強めの声で、桜が言葉を発した。

「そんなの駄目です。土郎先輩は男の人なんですから、料理なんて出来なくてもいいんです」

「あら？それって性差別よ？桜。今は男でも出来て当然なんだからふぶん、と愉快気に答えたのは、白銀の小悪魔だ。

「それとも何？桜は、土郎が料理できないでほしい理由でもあるの？」

意地悪げに全部わかっていてわざと聞いているイリヤの様子に、桜は顔を真っ赤にそめてたじたじになる。

「そ、それは・・・」

「なぐんでね。ふふ、桜、おもしろい顔しているわよ？貴女はもう少し表情に出さない術身に着けないと駄目ね」

「もう、イリヤ先輩ったら。からかわないでください」

「ふふ、ごめんね、桜。好きよ」

そんな少女二人の姿に思わず和んだ。この二人は正反対のようできて、案外仲がいいのだ。

と、時計を見る。時刻は夜の7時半を過ぎたところだった。

「と、桜ちゃん、そろそろ君は家に帰ったほうがいいと思うよ」

爺さんのその言葉を聞いて、桜ははつとした顔をした。

「そうですね。じゃあ、私、そろそろ失礼します」

「士郎、送ってあげなさい」

「あいよ」

「え、先輩、いいですいいです。わざわざそこまでしなくても」

その士郎の返答に、桜は慌てたような声で言う。

「よくないよ。女の子に夜道を歩かせるわけにはいかないからね」

とは、切嗣の談。

「そうよ、桜。こういう好意はありがたく頂戴するのが、レディの礼儀よ」

そのイリヤの言葉が決定稿になったようだ。

「・・・ええと、それじゃあ、先輩、よろしくお願いします」

そういつて、ぺこりを頭を下げる桜。それを前に、士郎は本当に明るい笑顔を浮かべて、手を差し出す。

「何、こんなんでも鍛えてるからな。そんじょそこらのやつに負ける気はないから安心していいぞ」

桜の心配をどうやらずれて認識していたらしい。

「ええ、頼りにしています」

そういつて笑う彼女の顔は、本当に華やかだった。

ただ・・・。

「いつてらっしゃい。士郎・・・送り狼になっちゃ駄目よ？」

というイリヤの台詞が、なんとなく場をかき乱したりしたわけだが。

風呂から上がり、髪をかわかし、切嗣じいさんが取り込んでいた洗濯物をアイロンにかける。

「シロねえ、あがった」

がらりと戸を開けて、いまだ濡れ髪の士郎が現れた。

「イリヤと、切嗣じいさんは？」

「もう、二人とも『土蔵』に入った」



「そうか。では、いくぞ」

ぱきり、そんな音が聞こえた錯覚が襲う。

夜の9時半。この家の結界は受け入れるものから、魔術を包むものに変化する。

日付が変わるまでの数時間、ここは暫し異界となる。

士郎と二人連れ立って、道場へと入る。ここが私と士郎の修練場。

「さあ、オマエの今の力を見せてみる」

すつと、士郎が手を構える。

「………トレス、オン投影開始」

士郎に魔術と剣、そして生きていく戦術や戦略などを教えるようになったのは、この家に住んで一年目のことだった。

私と切嗣が10年後の聖杯戦争に関わると決めたのはかなりの初期だ。

その時、私と切嗣にとって問題だったのは、この世界のイリヤと士郎のことだった。

聖杯戦争に関わるということは、家族であるこの二人もまた危険に晒すということだ。

家族など、狙ってくださいというも当然だし、それに、私も切嗣もあまりに弱体化していた。

そう、聖杯戦争に関わりながら、二人を守りきる自信なんて双方共になかったのだ。

だから、これは賭けだった。

生き延びさせることだけを目的に二人に魔術を教える。だが、それは本人の意思を確かめた上でのこと。

魔術師になるか否か、そのテストを施した末に結論する。そして、その上で一般人として生きさせる場合は、聖杯戦争がおきる時期になれば、本人がどれほど嫌がるうと問答無用で海外へと逃がして、決して期間中はかえってこないようにする。

そして、その賭けで士郎は、勝った。

魔術使いになる。

だから、私はその時、士郎に本物の聖剣の鞘を埋め込んだのだ。私の属性は『剣』だ。だが、その属性が培われたのはアヴァロンが体内にあったからだし、私に元より魔術の才能などない。並行世界の同一存在である士郎もそれは一緒だろう。

ならば、同じもの以外果たして私に何が教えられる。

本当は、アヴァロンを埋め込むこと自体危険な賭けだと知っていた。私と同じ道を辿る可能性を増やすようなものだからだ。でも……。

この世界の士郎は、やっぱり私にはならないだろうと思うのだ。

この世界の士郎は、壊れてなどいない。あどけなく笑う無邪気な少年だ。

だからきつと、同じにはならない。

それは、それも一つの救いだっただ。私と同じ道を辿るのは私だけでいい。私だけじゃなく。だから私はあの士郎に安心する。

けれど、アヴァロンを埋め込んだ士郎はやはり、能力自体は私と基本的に同じなのだ。

それをどうのばしていくのかを考えるのは、思ったよりもずっと楽しかった。

士郎は、私から魔術も剣も学んでどんどん強くなっていった。それは、過去の私とは全く別の過程。衛宮士郎にはこんなにも可能性が残されていたのか、と驚愕と感心、愛おしささえ感じた。

「こんなものがオマエの実力か？」

「ッ、まだまだ」

「基本骨子が甘い！そら、幻想が崩れるぞっ」

「くそ、トレス・オン投影開始！」

互いに投影魔術で剣を作り出しながら、討ち合いを続ける。

はあはあと息切れをする士郎は、それでもその琥珀色の瞳にいまだ闘志を漲らせている。

「ッ」

「そら、足元がから空きだ。足元をおろそかにするな。油断をするな。全身を目にしる。敵がどう動くのか幾千ものシミュレートをしたき出せ。格上の相手に勝つ方法を考えて考え抜け。勝てないのなら勝つ方法を用意しろ」

返事をする余裕は既がない。だが、どんな攻撃を喰らわせようとも、士郎はもう目を閉じたりなどしない。

士郎は強い。弱体化した私にすら及ばぬとはいえ、年齢を考えれば充分すぎるほど強くなった。

人間は英霊に勝てない。だけど、おそらくは今の實力なら、サーヴァントにむざむざ殺されずに、なんとか助けを呼ぶ間くらいはもたせれるくらいは強くなっただろう。

その方法は今までずっと仕込んできた。

「うああアアアッ・・・！」

気迫の声をあげる。そして踏む込んできた少年を私は真っ向から受け止めた。

「来い、士郎ッ」

そうして夜が明ける。

了

閑話 それぞれの日常 衛宮・S・アーチエ編（後書き）

というわけで、それぞれの日常、エミヤさん視点版でした。  
次回は切嗣のターンになります。

閑話 それぞれの日常 衛宮切嗣編（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

第四次編執筆中はそうでもなかったのに、今回の話オール切嗣視点  
が書きづらかったとです。

なんか今回モブキャラに話の進行上名前を与えましたが、あくまで  
モブキャラなので再び出てくることはないので安心してください、  
なんてことを宣言してみる。

side・衛宮切嗣

この時間が、僕はとても嫌いだった。

嗚呼、今日は何の夢を見るのか。十二の記憶を見るのか。

どろり、どろりと、黒い膿が広がる。

・・・最初の数年は大丈夫だった。だけど、日に日に弱る身体は抵抗力をなくしていく。今の僕に夢に抗う力は殆どない。魔力で膿を押し流せば抵抗は不可能ではないけれど、そんな魔力の無駄遣いをするような真似もしてられない。それほど今の僕に多くの魔力が残されていないからだ。

そしてまた、どちらの記憶を見ても、決して楽になどなりはしない。これは、死ぬまで続く責め苦なのだから。

『衛宮切嗣、これで終わりだとは思わな・・・殆どの呪いは打ち消されただろう。だが、オマエはどれだけの時間私の呪いを受けていたと思う？少しずつ、少しずつ、真綿で首を絞められるように、オマエは苦しみ、そうして死んでいくのだ』

そう妻の声と姿で言われたのは約10年ほど前のこと。その言葉通りに、この身体は少しずつ死んでいった。

そして、毎夜夢を見る。

生贄として殺されたある反英雄の夢か、それとも、信じてきた全てに裏切られ剣の丘で死に絶えた赤い男の夢か。

彼女が『彼』だった時代の夢を見るのは、呪いに汚染されるより

以前にもあった。だけど、それと今見る夢の違いは、あまりにリアルな痛みや感覚、匂いまで僕へと伝えられるという、その差だった。無論、現実には傷を負うわけではない。だけど、夢の中で僕は、その『人物』の受けた痛みや感情まで共有する。それが、浄化しきれずに僕の体内に巣食った呪いの力の一端だった。

嗚呼、今日は『彼女』の日らしい。

絞首刑にされる日の前夜、看守に暴行を加えられている。

『この悪魔』

『化け物』

『人でなし』

『死ね』

『くたばれ』

それらの言葉のナイフは、あの子をどれほど痛めつけたのだろう。誰かの笑顔を願ったあの子は、全てを踏みにじられていく。その肉体的な痛みも、精神の叫びも、夢を見ている僕に同化する。何処までが僕で、どこまでが彼女・・・否、まだ彼と呼ぶべきか、がわからない。

まるで、永遠に翔られて行く様な錯覚。

それらから開放する様に、明瞭な少年の声が遠く反響して響いた。

『親父』

ああ、漸く・・・漸く朝が来た。

すう、とまぶたをあける。くりくりと、年のわりに幼い少年の琥珀色の目が、心配げに僕の顔を覗き込んでいた。

ふ、と口元を綻ばせる。

「おはよう、士郎」

「ああ、おはよう、親父」

昔は、シロのまねをしていたのか、切嗣じいさんとよんでくることが多い士郎だったが、高校に入った辺りからはよく、『親父』と僕のこと

をよぶようになった。そんな息子の日々の変化がとても嬉しい。

「その、大丈夫なのか？」

「ん？何がだい？」

身体を起こしながら、首をかしげてそう聞き返すと、士郎はぼつが悪そうな顔で、でもはつきりと口に出して言った。

「うなされていたぞ。親父、隠しているつもりかもしれないけど、ずっと夢見が悪いみたいだし、医者について睡眠薬とかもらってきたほうがいいんじゃないのか？」

そう言ってくる顔は真剣で、本当に僕のことを心配してくれているのがわかって、だからこそ、困った。

これは、医者にいったところでどうにもならない問題だから、とそう言うわけにもいかない。何故そう言いきれるんだ、と追求されたら困るのは僕だ。

どうしようか。無難なことを言って、話を打ち切るくらいしか、打開策は見当らなかった。

「大丈夫だよ、士郎」

「大丈夫って……どこが……」

「大丈夫だから」

困惑した顔の士郎に、罪悪感がないといったら嘘だ。でも、本当のことを言うくらいならこんなことは大したことじゃない。

士郎は、追及したいのだろう。本当は無理にでも医者に連れて行きたい。そんな顔をしている。でも、「先、行ってる。シロねえを手伝ってくるから、爺さんも顔を洗ったらちゃんと来いよ」

重いため息を一つついたあと、そう言って、士郎は立ち上がり、背をむけた。

「うん……ごめんね、士郎。ありがとう」

朝食はつつがなく終わった。

今日は大河ちゃんに来ていなかったから騒がしさもなく、和気藹々としてはいるけれど静かな食卓だった。



シロが淹れてくれた食後のお茶を啜りながら、新聞にざっと目を通す。其処に記された日付に、その時が近づいていることを感じる。イリヤは、一瞬だけそんな僕の様子を感じ取ったような顔をして目を伏せるが、次にはいつも通りの顔をして、「ご馳走様でした」と席を立った。

「土郎、行こう」

いつも通りの明るい顔をして、いつも通りの無邪気な表情をして、土郎に腕を絡めてじゃれる愛娘。だけど、彼女もまたこの日常の終わりが近いことに気付いている。何せ、今は違うとはいえ、元は聖杯だ。わからないはずがなかった。その上で娘は、日常をそのギリギリまで全うすることを選んだ。

そして、またイリヤは土郎に異変があることを気付かせることをなによりも嫌った。

彼女はとうに僕の身体が死に体に近いことなんて知っている。余命一年の宣告を受けていることも。でも、その上でイリヤは平凡な日常を演じることに決めた。・・・この家で僕の余命が残り僅かであることを知らないのは土郎だけだった。

もし事実を知って、何故教えてくれなかったのだと、あの子が怒ったら、それで恨みを買うのは自分でいいと、そこまで思った上でイリヤは言わないでくれと、そう懇願してきたのだ。

だから、土郎は何も知らない。

「じゃあ、切嗣私も出るから」

土郎とイリヤが学校に向かい、暫く経ってから、無骨なデザインの買い物鞆を背負ったシロが、ひょいと居間に顔を出してそう告げる。

その出で立ちはいつも通り、黒の上下のなんの飾り気もない格好だ。長い白髪は一つに結わえて、10年前に青崎に貰った赤い宝石の髪留めだけが妙に華やかで目をひく。

凡そ、年頃の娘の格好とは思えないくらいに素っ気無い格好だが、

其れが妙に似合うのだから、少しだけおかしい。

「うん、行ってらっしゃい」

そうして見送ってから、僕はきたるべき日の為の道具の整備と、結界のシステム改良作業に暫し励んだ。

午後になり、シロが用意していた昼食を平らげると、藤村雷河さんの元へと暮を打ちにいく。

ついでに色々と世間話も交える。雷河さんは以前からイリヤのことを気に入って可愛がってくれている。自然と会話もそちらに流れる。

「うちの大河と交換したいくれえだ」

という台詞には苦笑しか出てこない。

「大河ちゃんも、あれでいてしっかりしているところはありますよ・・・と、僕の勝ちです」

「・・・む？やるじゃねえか」

今日の戦績は五勝二敗一引き分けた。まずまずといったところだろう。

適当に切り上げて藤村の屋敷を出ると、若い衆に声をかけられる。暫し、話に応じてみる。あまり見ない顔だ、と思つたら藤村にきたのは三ヶ月ほど前らしい。

「そつえば、衛宮の旦那」

「ん？」

「あの、白い髪に色黒い肌のお嬢さんが旦那の娘さんって本当ですか？」

ああ、シロのことか。まあ、色だけ見たら日本人とは思えないカラーリングをしているし、血の繋がりもないせいで顔立ちも似ていない。本当に親子かといぶかしまれるのは慣れていた。

「本当だよ」

でも、似ているとか似ていないとか、血が繋がっているとか繋が

っていないとかは関係ない。僕にとってシロは可愛くて大事な娘だ。  
「その娘さんって名前なんていうんですか？あ、今付き合っている男とかいたり・・・」

ガチャ。

先ほどまでの和やかな空気を一変させて、感情よりも早く僕の手は動いた。一瞬で懐から愛銃を取り出し、男の即頭部に突きつける。

「ちょ、衛宮の旦那、ストップ!!」

見た目180cm越えのガタイのいい強面の男は、青い顔をして焦って・・・とはいえ、下手なことをしたらマジで撃たれるとわかっているのか、暴れたりとかはしていないが、悲鳴染みた声を上げる。

「・・・僕の娘シロに手を出したりしたら、殺すよ？」  
につこりと、笑って告げる。

男はいっそ憐れなほどにコクコクコクと、高速で首を縦にふる。其れを見て、漸く僕は手を離し、再び懐へと愛銃を仕舞った。

随分とかつてに比べ、衰退した我が身ながら、たとえそれが呪いの汚染からきた弱体化であろうと、家でただ大人しくしているだけでは、更に衰えを加速させるだけだ。

散歩がてら冬木大橋のほうへと足を伸ばす。

「ん？」

海浜公園の付近、ちらりと一瞬見えたただだが、僕が彼女を見間違っ  
違っ筈がない。

白髪褐色の肌、間違いなく、娘のシロだ。

とりあえず、木々の間に身を潜め、様子を伺う。

シロは、困惑したような顔だ。シロの長身でもかすまなくらいには長身な若い男が、ずい、と身を乗り出して、シロの両手を握り締めている。その男の行動にシロの顔が引き攣った。だが、男はそれに気づいていないらしく、更に身を乗り出している。

(・・・後で埋めよう・・・)

とりあえず、自分の中の抹殺リストに男をのせながら、会話内容に聞き耳を立てる。

「だから、ただのお礼ですって」

「いや、しかしだな、私はただ人として当たり前のことをしてただけで・・・」

「その当たり前のことが出来ない人がどれだけいることか。俺、本当に助かったんすよ。感謝感激です。あ、すみません、自己紹介してなかったですよ。俺、田中将太っていうんですけど。あ、名前なんていうんすか？」

「・・・エミヤ、だが・・・あ」

うっかりスキル発動。つい、ぼろっつという感じで名乗ってしまったっているシロ。それに男は更に身を乗り出して、聊か大げさすぎる仕草でぶんぶんとしロの手を握り締めたまま、「エミヤさんですか名前も素敵なんですね！それに、これでもう、知らない人じゃないっすよね」なんてことを嬉しそうな声で言う。

「だから、奢りますから今夜付き合ってくださいよ。俺、良い店知ってるんです。エミヤさんもきつと気に入ります・・・」

(こいつ・・・殺りたいな)

ぶつん、シロ、お父さんは限界です。

男の言葉を聴き終わるか否か。即座に二人の元に向かい、ぐいっつと、シロの肩を掴んで、べりっつと男を引き離れた。

「切嗣」

ほっつとしたような声でシロが僕の名前を呼ぶ。

男は第三者の登場に驚きながら、目を見開いた。

「うちのシロに粉をかけるのはやめてくれないかな？」

にっこりと、自分でも空々しいほどの笑顔で男へとプレッシャーをかけた。男は、即座に顔を蒼くして顔を引き攣らせる。

本当は殺してやりたいところだけど、シロの前でそんなことするわけにもいかないので、しょうがないので見逃しているんだ、ちょっとプレッシャーをかけるくらい許して欲しい。

ぐい、とシロを抱き寄せてみる。シロは驚いたように目を見開きはしたが特に抵抗はしない。うん、よしよし、これでバツチリだ。

「……次にシロに近づいたら、殺すから」

「……かつ」

男はぱくぱくと口を開いたり閉じたりしながら「彼氏さん付きでしたか……」とごによごによとした声で言った。ああ、やっぱり。お礼がどうのこうのっていつてただシロをナンパしていただけだ。そのことをわかってなさそうなのはシロ本人くらいか。

「は？」

彼氏？と不思議そうな声音で舌にのせるシロ。

「し、失礼しましたー……！」

ぴゅーっと、男は脱兎の如き勢いで去っていった。

「あ、おい」

シロはというと、どうしたのかというように、手を半分あげながら、困惑したように首を傾げた。

ふう、と息をつく。

かつて機械の様に生きていた頃の名残で、僕は気持ち切り替えるのは結構早い。さっきの息をスイッチに、苛立ちや殺意を切り替え、にこにここと、普段家でよく携えている種類の笑顔を浮かべて「いやあ、僕がシロの彼氏に見えるなんて。もう僕も年かなあと思っていたけど、まだまだ捨てたもんじゃないね」なんてことを冗談めかして口にした。すると、シロも漸く「彼氏」といった言葉の意味に至っただけらしい。そんな顔をしたあと、むっすり。顔を顰めて一言「それでなんで爺さんはそんなに嬉しそうな顔をする」

と、本当、不機嫌な顔で言った。

「うん？父親にとって娘は永遠の恋人という言葉もあるじゃないか。僕にとってはシロは可愛い娘だからね。恋人に誤解されるのは悪い気がしないかな」

「あのな、爺さん……」

シロは、はあ……と重いため息を一つつくと、一息に自分の意

見を口に出した。

「『娘は永遠の恋人』というのは、娘というのは成長すれば、かつて愛した妻の若かりし頃の姿によく似てきたりすることから生まれた言葉だろう。実の娘で、アイリとは瓜二つなイリヤならばともかく、私にその定義は当てはまらないぞ」

「・・・うーん。前からわかっていたことだけど、シロはその辺堅いなあ。」

「それより、シロ、なんであんなことになったのか、お父さんにちゃんと説明してくれるよね？」

きりつと顔を引き締めて、真剣な声音でそう問いただすと、「いや、別にわざわざ話すようなことでもないんだが」なんてことをシロは言い出す。

「シロ？僕がどれほど心配したと思っっているんだ？」

そう言うつと、シロは一つため息を再びついてから、口を開いた。

「本当に、大した話じゃないぞ。全く、物好きだな・・・」

大したことじゃないか・・・そう思っているのはシロだけだよ。少なくともうちの家族は全員僕の意見に賛同すると思う。

「遠くから歩いているところを見かけてな、財布を落とした様子もたまたま眼にした以上、見過ごすわけにもいかないし、本人に落ちた財布を届けたところ、なにやら感激したあの男にしつこく礼をするからと食事に誘われて、どうしたものかと思っていたそこへ、切嗣さいが現れたというだけだ」

「・・・どうやら、思ったとおりの展開らしい。」

「なんで、すぐに無理だつて断らなかつたんだい？」

断らなかつたから、あの男は調子にのつて増長したんだろうに。

「財布を届けた『礼』だつていうのだ。断るのも気がひけてな」

そういつて、シロは肩を竦めた。その表情はあくまでも真面目で、本当に人の善意を反故にすることを気にして断れなかつたといわんばかりだ。・・・なんでこの子は人の悪意には敏感なのにこうなのかな。

「シロ。あれはね、お礼を口実にシロをナンパしていただけだよ」  
「・・・は？」

への字口になってシロはまじまじと僕を見た。

今は女の子なシロだけど、元は男だったと本人も明言しているし、生前が紛れもない男だったことは、夢を通して僕もまあ知っていることだけど、だからなせいか、あまりシロは自分が男にどういう風に見られているのかということについて、大概鈍感で、どうして自分に惹かれて声をかけられるのかがイマイチ理解しにくいらしく、そういう方面で自分が声をかけられているというのは、相手が余程あからさまな態度や言動をとらない限りは発想すらしない。

その、男に対する一種の無防備さが、自分に声をかける男を更に産んでいるという状況に気付くこともまあ、ないのだろう。

「冗談、だろう？」

「いや、あれは確実にナンパだったよ」

はあ、とシロは再び大きなため息をつく、ぼそり。

「なんで、私なんかに声をかけるのだから・・・」

と、本当に理解し難いといった顔をして告げた。

「シロは、もつと今の自分について自覚をしなきゃいけないよ。そんなんじゃない、父さんはずっと心配だ」

苦笑しながら、諭すような声でそう告げた。

実際、シロは本人が認識している以上にモテているし、魅力的だ。確かに、言葉遣いは女らしくない。むしろ、成人女性が普通使うような言葉なんか使っていない。格好だって、女の子らしさからは程遠いし、背だつて高くきりつとしている。

でも料理は上手いし、家事全般が得意だし、気遣いだって上手くて、憎まれ口とは裏腹にシロは優しい。ふいにこぼれる笑顔は外見年齢以上にあどけなく、幼い、そのギャップ。叱るべきところは叱れるし、褒めるところは褒められる人間性。

普段はしっかりしててなんでも出来るかのようなのに、ふいに覗く子供っぽさや、意地っ張りな一面に、危うさすら感じさせる、瞳

に時々陰る虚ろな・・・遠くを見る瞳。

知っている人間はむしろ、その人間性に惹かれてるように思う。でも、外見に対する自覚もシロには欠けている。

確かに、雑誌のモデルを張れるほど美人かといえば、残念ながらそれほどではない。けれど、決して不美人ではないし、寧ろ美人が普通かといえば、美人に分類していいくらいだ。

それに、顔立ち自身はモデルになれるほどではないとはいえ、その体つきはモデルと遜色ないくらいとっていいほどのプロポーシヨンだろう。

褐色の肌にふくよかな胸、鍛え引き締まったウエストに、肉質なヒップのライン。たとえ、飾りつけない黒のシャツと同色のスラックスという格好であれど、そのボディラインから匂う女を打ち消せるほどではない。

それに、モデルとかそういう種類の美とは違うが、何よりシロには・・・一種独特の存在感がある。

白髪と褐色の肌に鋼色の瞳という色の組み合わせ自体が異彩を放っているが、その上で凜とした張りのある雰囲気と、女の色香漂うプロポーシヨン。少年すら連想させる張りのある低音ボイス。

凜とした清廉さと、無自覚の婀娜っぽい艶かしさ、大人の女と少年、それらが混在しているような一種独特の雰囲気は、たとえ傾国の美女が如き相貌でなくとも、人が惹かれる理由には充分だ。

「・・・あんだ、何を考えてる」

じと目で胡散臭げにこちらを見ているシロに、しれっと返す。

「シロのことだけど？」

シロは、むすり、と口をへの字にすると、鞆を手にふい、と背を向ける。

「もういい・・・私はこれから買い物をしてくる。今夜食べたいものがあるのなら、今のうちに言え」

不機嫌そうな声して、可愛いことを言ってくれる娘に、思わず頬がほころぶ。



「そうだな、うん。じゃあ、すき焼きが食べたいかな」  
「了解した」

そういつてちらりとだけこっちを振り向いたシロの口元は、僅かに笑っていた。

夕食は僕のリクエストどおり、すき焼きが出てきた。多分、これがあの子なりのナンパから助けられたことに対する礼なんだろうなと思うと、思わず頬がほころぶ。素直じゃないけど、そこが可愛いな、と思うあたり、僕は多分親馬鹿なんだろうな。

そんなことをのんびり風呂に浸かりながら思う。

良い気分だった。

・・・でも、ふと、こんなに幸せでいいんだろうか、とも思う。

可愛い娘が二人と息子が一人。子供達に囲まれて・・・こんなに平和で幸せな生活が僕なんかには、『魔術師殺し』とかつてよばれた男にゆるされていいのだろうか。

アイリと生活した9年間でさえ、こんな・・・気持ちにはならなかったのに。こんな満ちた気持ちに。

(シャーレイ・・・)

死徒と化して死んだ初恋の女性を思い出す。続いて、自分が初めて手をかけた存在である父を、養母ともいうべき存在だったナタリアのこと。

彼らの犠牲を無駄にしたくはなくて、シャーレイについぞ言い出せなかった幼い頃の自分の夢「正義の味方」を憎んで恨んで憧憬して、父のような存在を生み出さないように、多くの人を救うために少数を切り捨てようと決めて生きてきた少年時代。

僕にとってどんなに愛していても、少数の身近な人間でも、大勢を救うためなら礎に出来ると、たとえ僕には不可能なことでも、万能の聖杯なら僕の望みを・・・争いのない世界をつくれると、妻を犠牲にすることをわかつていながら飛び込んだ第四次聖杯戦争。

あれで全てが変わった。

僕は、本当に愚かだけど、切り捨て望みを叶えられると思っていたんだ。

でもそれは、アーチャーとして召喚されたシロによって全ては瓦解したんだ。

僕はもう、僕の思う「正義の味方」になどなることはない。

アイリが浚われたあの日、シロを救おうとして令呪を使ったその瞬間から、そんな資格もなくなった。

残り少ない余命、僕は、ただの父親として生きる。

そんな選択を、こんな穏やかな気持ちで受け止めて過ごす日がくるなんて思わなかった。

風呂からあがり、まだ風呂に入っていなかった、シロに空いたことを告げると、僕はおもむろに自室に向かい、がさりと、机の引き出しを開けて目当てのものを取り出す。

「・・・・・・・・」

これを僕に渡した女の顔を思い出す。

封印指定の人形師。

きつともう、会うこともないだろう。

ふと、笑う。

僕は、本当に変わった。

黙々と今夜も準備を整え、そして、工房でもある土蔵へとむかい、家を包む結界を第二形態へと移行した。

防音、認識障害、魔術の痕跡の完全隠蔽。

これより、この家は異界となる。

僕から僅か5分遅れで、娘たる彼女が現れる。

「来たね」

ぱき、錠剤を模した魔薬を口に含む。それを見て、最近益々亡き妻に似てきた美貌の娘が、イリヤスフィール気まずそうに眉根を寄せる。

「・・・そんなものに頼らなくても、修練くらいもうわたし一人で出来るわ」

「そうはいかない。イリヤに教えられることはまだまだあるからね」  
士郎がシロに魔術を習いだした頃から、イリヤも僕から魔術を習うようになった。

魔術師としての格なら、僕より娘のイリヤのほうが圧倒的だ。でも、魔術使いである僕は普通の魔術師では知らないようなものにも通じているし、僕に才能があるかないかと、指導が出来るか出来ないかもまた別問題だ。

イリヤは、アインツベルンの血を濃く受け継いでいる。元はアインツベルンの後継者ともいうべき存在なのだから当たり前だ。属性は水。アイリと同じく魔眼持ち。だから、幻覚やサポート方面にその才能をのばす形で今まで指導をしてきた。攻撃魔術に関しては、アイリ同様に針金使いという方向で育ててきた。とはいえ、それだけが使えるというわけでもなく、状況に応じて対応できるように、今は咄嗟の判断力を養う方向性で魔術指導を行っている。

そうして、イリヤが使った針金の鷹や、それについての改善点などを話し合いながら、また実践へと戻るそんなことを繰り返した末の1時間、イリヤはぽつりと、言った。

「キリツグは馬鹿みたい」

「イリヤ？」

「まだ聖杯戦争は始まっていないのに、そんな薬に頼らないですよ。・・・今日、二つ目でしょ。わたし、ちゃんと見てるんだからね」

咎めるような視線。ああ、さっき薬がきれて追加して飲んだことに、やっぱり気付かれていたのか、という気持ちと、わかっていたとはいえ、娘ににらまれるのは父さん悲しいなあ、なんて気持ちで苦笑する。

「笑ってないで。・・・なんで、ただでさえ短い寿命を自分で削るの」

服用している魔薬の効果をわかつていての言葉、ごまかしなんてきかない。

「うん・・・これが、父さんがイリヤにやってあげられる最大限のことだから、かな？」

「馬鹿みたい」

「手酷いな」

再び苦笑する。

服用している魔術薬。その効果は生命力（寿命）を魔力に変換させ、鈍った四肢五感をかつてのレベルにまで引き戻すというもの。それは、この薬を服用すれば服用するほど、死期を早めるということでもある。今の時点で余命一年であるうと、この薬を乱用すれば、その猶予期間すら失くすことになるだろう。

「わたし、キリツグのそういうところが嫌い」

感情の抜けた声で、淡々とイリヤは言う。

「そんなだから、キリツグは駄目なのよ・・・大嫌い」

「父さんはイリヤのこと大好きなだけだな」

ふう、とイリヤは小さく息をこぼす。

「お母様はキリツグを甘やかしてばかりだったから、その分わたしは言つてあげてるの。感謝してよね」

「・・・そうか」

「うん、そう。同情なんてしないんだから。キリツグがたとえ明日死んでもそれは自業自得。わたしは、泣いてなんてあげないわ」

真摯で物静かな声で、イリヤはそう言った。それは普段士郎に見せている無邪気で明るく天真爛漫な姉とは違う顔。

「キリツグ、シロと士郎を泣かせたら、わたし怒るわ。その言葉の意味がわたしからの課題よ」

その言葉を最後に、沈黙が暫し流れて、二人そろって、淡々とまた魔術の改良へと戻る。

そうして、日付が変わるか変わらないかという時刻、二人そろって土蔵を後にする。

その出て行く最後、イリヤは「じゃあね、おやすみ、キリツグ。わたしの言葉、忘れないでよ」そう言っつて背をむけて、それから、一度も振り返ることもなく自室に向かって歩を進めた。

「ああ・・・おやすみ、イリヤ」

かけた声は届いたのか届いてないのか。

真夜中の空、月が雲に隠れていたことに、奇妙な安心感を覚えて、僕もまたぼんやりと自室にむかった。

『キリツグ、シロと士郎を泣かせたら、わたし怒るわ。その言葉の意味がわたしからの課題よ』

娘の言葉が、やけにいつまでも耳に残っていた。

了

閑話 それぞれの日常 衛宮切嗣編（後書き）

というわけで切嗣編でした。ぶつちやけ、藤村のじいさんの口調とかこれであってるのかよくわかりません。つか、切嗣って藤村のじいさんをなんてよんでいるのかがえがかれたシーンとかあったっけ？  
次回はそれぞれの日常、イリヤ編になります。  
漸く学園パートが出てくるんだな。

閑話 それぞれの日常 衛宮イリヤスフィール編（前書き）

やあ、ばんははろ、E K A W A R Iです。

今回のイリヤ編は予測より案外すんなり書けました。そういや、イリヤ視点ってあんま書いたことなかったのになあ、とか書いてて思いました。

今回はやたらとモブの出番が多かったです。

閑話 それぞれの日常 衛宮イリヤスフィール編

side・イリヤスフィール

朝、眩しいほどの日の光を障子越しに受けてわたしは目が覚める。  
「ん……ん……ん……」  
ぐつと、伸びを一つ。

この家に来たばかりの頃は、畳の上に布団だけ敷いて寝起きするこんな生活に戸惑ったものだけど、今ではすっかり慣れた。

ぴつと、目覚まし時計に手を伸ばす。今の時刻は朝の6時。

高校三年になったわたしは、この時期は本当はもう学校に通う必要もないし、それを差し引いても去年と違って生徒会にすら属していないわたしはもっと遅くまで寝ていても構わないのだけど、一番最後に起きるような真似はしたくないから、無理矢理頭をふって意識を覚醒させる。切嗣や大河よりも遅く出るなんて、恥だもの。

起きると真つ先に、パジャマを脱いで、すっかり着慣れた穂群原学園の制服に手を通し、顔を洗い、髪を整える。この制服を着るのもあと僅かと思えば、一種の愛着が湧いてくるのがちよつとだけおかしい。

それから、台所で朝ごはんの準備をしているシロと士郎に挨拶をする。

「おはよ〜。シロ、士郎」

ぼふつと、座布団に身体を預けて、指定の席へと座り込む。シロと士郎は、色違いの揃いのエプロンを身に着けて、朝食の準備を忙しそうにしているけれど、わたしが声をかけると必ずわたしのほう



を見て、シロは仄かに、土郎は朗らかに笑顔を浮かべて「おはよう」と挨拶を交わす。この瞬間がわたしはとても好き。

「あれ？今日は洋食なんだ？」

くんくん、と、香ばしい匂いを嗅いでそう尋ねると、シロは「ああ、たまには良かろうと思つてな」と苦笑しながら答えた。

うちの朝御飯は、シロも土郎も和食を一番得意とするせい、大抵朝はご飯と味噌汁が主体の和食なのでちょっと珍しい。

その時玄関から「みんな、おつはよ～～～～！」と煩いくらい大きな声が聞こえて、少しうんざりと肩を竦める。全く、どうして大河はいつもこう騒がしいのかしら？同じレディとして情けないわ。

「ああ、おはよう、大河」

「わ、わ、シロさん、今日はフレンチトーストなんですか!？」

「ああ。たまにはな。もう少しで出来るから、座つてなさい」

「はい」

と、嬉しそうに響く女の声・・・これで、既に成人していて、おまけに高校教師なんだから、本当世の中つて不思議だわ。

「おはよう。大河ちゃんは今も元気だね」

なんていいながら、新聞片手に今日も着流しで現れたのは、実の父親である衛宮切嗣。

「あ、切嗣さん、おはようございます!」

と、ぱつと顔を輝かせてキリッグに挨拶をする、大河。本当、キリッグのどこがいいのか知らないけれど、昔つから大河はキリッグのことが好きなのよね。大河の男を見る目のなさに同情しちゃうわ。

「あれ？」

ふつと見ると、今日は朝御飯にあわせてお茶は日本茶ではなく、紅茶を選択してあるみたいで、土郎がみんなのお茶を注いでいる。こういう役はいつもシロの役目だから珍しい。

そのわたしの視線に気付いたらしい土郎は、苦笑しながら言う。

「『たまには、オマエが淹れてみる。これも修行だ』ってシロねえが言うからさ。シロねえほどまだ上手くいれられないけど、そんな

にまずくはないはずだから」

「うん。そんなに緊張しなくても、大丈夫よ。土郎。あなたはこれからまだまだ伸びしろがあるんだからね」

そういつて笑うと、「うん、ありがとう、イリヤ」と子供みたいな顔をして笑って返す土郎。その顔が本当に幼くて、そんなところが可愛くて大好き。

全員で席につく。今日の朝食は、フレンチトーストに、オニオンスープ、フルーツヨーグルトに、温野菜のサラダで、ドレッシングは上質のオリーブオイルをメインにつかったシロの手作りだ。

「いただきます」

みんなで朝食を終えると、時間まではのんびりとくつろぐ。去年までは朝のこの時間に学校の課題を片付けていたのだけれど、卒業までカウントダウンに入ったこの時期になるとそれすらなくて結構手持ち沙汰でもあつて、ちょっとだけつまらない。でも、こうやって和やかに過ごすのも、うん、わたしは結構好きかな。

土郎も学校へいく準備が整ったみたい。だから、わたしは今日も土郎の手をとって、「いつてきます」と声をかけて土郎と一緒に家を出る。

中学生くらいになってきた頃から、土郎はわたしと手を繋いで学校に行くのは嫌がったけど、高校に入った頃には諦めてくれたみたい。今ではわたしの思うがままにさせている。

わたしだって、土郎が本当に嫌がることはしたくない。だって、嫌われたくないもの。でも、土郎が嫌がってたのはただ単に照れてただけだってわかったから、遠慮なく続けた結果、土郎は今苦笑して、やっぱり照れるけど、わたしと繋いだ手を振りほどいたりはない。それが嬉しい。

うんうん、弟はおねえちゃんのいうことを聞くものよねー。

そのまま学校の門のところまで、手を繋ぎながら、他愛無い会話を続けて歩く。その間も、色んな人たちの視線がわたしたちに注が

れているけど、あえて知らんふり。

色々無自覚なシロと違って、わたしは、目立つってことくらいちやんと知ってる。

いつの間にか「雪の妖精」とかいう通称とかつけられて、穂群原の二大アイドルとして扱われていることとか、沢山の男の子がわたしを好いて、そういう目で見ていることだって知ってる。ついでに、士郎がわたしの弟だってことで、そういう人たちに妬まれていることだってちゃんとわかってる。でも、だからこそわたしは尚更見せ付けるように、士郎とスキンシップを測るし、士郎以外の男なんて、寄せ付けてあげない。

(有象無象になんて興味ないわ)

というのが本音。だけど、それを言ったらきつと士郎は哀しむと思うし、わたしは士郎以外の男の子なんて興味がないんだもの。仕方ないわ。

諦めたらいいのよ。わたしは士郎が大好きだから、他の奴なんて興味ありませんって、理解したらいい。でも、高嶺の花だって遠くから見ることでくらいなら許してあげてもいいわ。

それがわたしの本音。

あと、どんなにわたしが士郎が大事なのがわかったら、いつもわたしと一緒にいることをわかったら、早々士郎に手を出したりもしないだろうし、一緒にいるほうが士郎を危険から守れるから、だからこうやって士郎と一緒に行動するのはわたしにとっては凄く当たり前のこと。

学年が違うから、ずっと一緒にいれるわけじゃないのが少し残念だけど、それくらいは妥協してあげる。

そんなことを思いながら、わたしは笑って士郎にじゃれつく。こんな時間がいつまでも続けばいいな、と思っていたその時、第三者の声がそれを邪魔した。

「衛宮先輩、いつまでも衛宮にくっつくのはやめてもらいたい。ここがどこだかわかっているのでしょうか?」

ひくひくと、口元をひくつかせながらそう声をかけたのは、学校で女子の人気を二分していると噂の現生徒会長。

「一成、おはよう」

士郎は何事もなかったかのような調子で、目の前の眼鏡男子に声をかける。

「喝っ、おはようではないだろう。何故朝っぱらから、お前たちは手を繋いで歩いている！？ここは神聖な学び屋だぞ！」

「あー、でもイリヤだしなあ」

苦笑しながらそう返す士郎、それにぶりぶりと怒る一成。

「大体！お前たちは姉弟だろう！？なのに何故、そのような甘やかな恋人がするような真似を・・・」

「ふふん、随分と絡んでくるのねー？一成。さては羨ましい？士郎を独り占めにしてるわたしがうらやましいんでしょ？」

「なっ！？」

くすくすと、目を細めながら笑い、より一層ぎゅっと士郎の腕を抱きしめる。

そのわたしの行動と言動を前に、うろたえ、顔を赤らめる生徒会長。

「昔っから、貴方士郎のこと好きだもんねー？でも、あげないわよ。わたしのほうが士郎のこと大好きなんだから」

そう、昔、はじめてお山に行つて出会ったその時から、一成は士郎のことが好きみたいで、それがわたしにはちよつとおもしろくない。高校に入つてからは、学年も同じとなつて、ほとんど校内で士郎と一緒にするのはこの男だし、わたしからこの男に生徒会長の座がかわつてからは、それを理由にかしよつちゅう士郎と行動しているところも、からかうと面白いことを差し引いても気に食わない。だから、ちよつとだけ意地悪しても許されるはず、とわたしは思う。

そういう意味ではない、と本人に言われても、わたしはこの男が士郎に向けている好意はあつちのほうの意味じゃないのかつて昔っから疑つてる。シロは例外として、大抵の女が苦手ときているから

余計に、そう思える。

「だけど、一番この男の気に食わないところとして、士郎に無防備に一成に信頼をよせてて、わたしが思うような類の心配など欠片もしていないどころか、想像すらしていないところだ。だから……。」

「こら、イリヤ」

「きゃ、いたっ」

「ぺちつと、額を士郎に小突かれる。」

「全く、一成は真面目なだから、からかつちゃ駄目だろ」

「という顔は、真剣で。本当にわたしが面白半分でただたんにかかっただけだ、なんて誤解をしている。可愛い弟に悪い虫がついてほしくないわたしの姉心なんて、ちつとも理解してくれないところがちよつと悲しい。」

「うー、だつてえ」

「わたし、悪くないもん。と内心思いながらも、口にしたところで士郎は一成の味方をするのが目に見えてて、言葉にはせずに目線で抗議をする。」

「あー、一成、悪かったな」

「む、衛宮、お前が謝ることはない。こほん、衛宮先輩、貴女はどうやら俺に対してなにやら壮大な思い違いをしているようだが……。」

「別に思い違いとかじゃなくて、正確に事実を把握しているだけだしよ」

「喝つ、な、何を言うか！」

「そういつて、顔を真っ赤にして怒鳴ってくる姿は面白いのだけど、士郎に味方されているあたりがやっぱり面白くない。まるでこれじゃあわたしが悪者みたいじゃない。ぶく、思わず頬を膨らませる。」

「全く、衛宮やシロさんはあんなに立派なお方だというのに、何故貴女は……。」

「ああ、嘆かわしい、なんていう姿が芝居がかってて胡散臭い。」

「おあいにく様。同じ家で育っても性格なんて人それぞれよ。それ

にいいのかしら？生徒会長？もう、予鈴がなるけど？」

そうわたしが告げると、はっと、一成は目を見開いて、慌てた。

「そうだった。いくぞ、衛宮」

「じゃあ、イリヤ。また後でね」

「うん、じゃあ土郎。また後でね」

そう言つて、笑つて別れて三年の教室に向かった。

退屈な授業。そもそも、卒業までカウントダウンを迎えたこの時期は、三年で学校に来ている者自体が少数派で、特にうんざりする事実としては、わたしの教室に残った生徒の大半はわたし見たさに学校に通っている男子が多数派だつていうことだ。

はあ、思わずため息。好奇心に満ちた視線が鬱陶しい。

この学校に入学して間もない頃を思い出す。

次々に馬鹿みたいにわたしに告白を繰り返してきた男子生徒。勿論、全員丁寧に断つたし、場合によつては再起不能になりそうなくらい口でやりこんで帰したこともある。勿論、悪い噂をそれで流されてはたまらないから、そんなことにならないようには気をつけたけど。中には、断られたことに逆上して襲い掛かってきたものもあるけど、あまりに面倒くさいから、そいつらはわたしの魔眼で「わたしに告白した」ということそのものをなかつたことにした。

魔術は秘匿すべきもの。魔術を実生活で多用するわけにはいかないけれど、逆をいえば、バレなければ何をしてもいいということでもある。まあ、暗示なんて初歩的魔術で、バレるなんてそんなへマをわたしがするはずもなく、二年にあがつて、土郎が入学して、わたしが土郎にべつたりなことを見せ付けているうちに、そんな風に告白されたり、暗示で帰したりも減つていった。

だけど・・・。

（人に告白する勇気もないくせに、鬱陶しいのよね）

ちらちらと、わたしを見る視線が本当に鬱陶しい。告白したらしただで完膚無きまでにふるつもりではあるけれど、それはそれ、これ

はこれ。

本当、目立つのって面倒だわ。いつそ、魔術でわたしに目線がないようにしたいくらい。

でも、今の学校には、冬木のセカンドオーナーである凜がいるし、駄目ね。

もう一度ため息。ああ、早く授業が終わればいいのに。

さて、お昼になった。三年はお昼で帰っていいけど、折角だから士郎と一緒に弁当を食べたい。そう思って席を立ったとき、クラスの女の子達につかまる。

「ねえ、衛宮さん」

「何？」

「わたし達とお昼一緒にしない？」

「え？」

それは思ってもいない申し出で、少し吃驚する。

「ほら、もうすぐ卒業じゃない？」

「本当はね、前から声かけたかったんだけど、衛宮さんいつもすくいなくなるし」

「弟さんと一緒によくいるから声かけづらくって」

「一度でいいから一緒に食べたいなあなんて思ってたんだ？」

そんな風に思われていたなんて、と少し驚きつつも、そういえば興味ないからあんまり意識していなかったけど、前々からこの子たちにちらちらと好奇と羨望のような目で見られていた気はする。

「駄目、かな？」

そういつて、自信なさ気に見上げてくる顔がなんだか捨てられた子犬みたいで、くすり。

「いいわ。そうね。確かにもうすぐ卒業だし、今日くらいは付き合っただけでも、よろしくてよ？」

と、ちよつと芝居がかつたおどけ口調で笑いながら、返事を返していた。

珍しくも、教室の片隅で、机を寄せながら、弁当を囲む。

今日もわたしの弁当はシロの特製だ。可愛らしい水色地に雪だるまが描かれた弁当袋に、撫子色の花模様が所々に描かれたコンパクトな弁当箱。その中身も華やかで、女子高生にふさわしい彩り豊かな中身だ。

「うわあ」

まわりから感嘆の声が上がる。其れを聞いていると、わたしはなんだか誇らしくなってくる。

「すつごく美味しそう・・・」

「綺麗」

「これ、もしかして、衛宮さんが作ったの？」

好奇心と驚きの声。ふるふると、頭を横に振る。

「いいえ。わたしじゃないわ」

「んじゃあ、お母さん？」

「残念。お母様はとづくに亡くなってるわ」

とくに気にしたわけでもなく、さらりと告げたけど、まわりにとっては聞き逃せない言葉だったらしい。

「あ、ごめんなさい」

なんてしょんぼりとしながら暗い声で告げられると、こっちがちよつと困る。

「ちよつと、そんなに気にしないで。わたし、あなたたちにそんな顔させるつもりで言ったんじゃないわ。食事は楽しんでとるものよ、ほら、笑顔笑顔」

殊更、明るくふるまって言うけど、他の子たちにはあまり効果がなかったらしい。だから、ふと、静かな声音で本音を告げた。

「確かにお母様は、10年前に死んだけど、それでもわたしは一人じゃないわ。わたしには大好きな家族もいるし、お母様は今もわたしの中にいるもの。だから、そんな顔をしないで。あなた達にそんな顔させているようじゃ、お母様に叱られちゃうわ」



そういつて、微笑むと、少しずつ彼女達の硬直もほどけてきたらしい。

「じゃあ、そのお弁当を作ったのって、おねえさんか何か？」

とりあえず、一番活発そうな小柄な女生徒に問われて、「んー、そうね」と、顎に手をやりながら考える。

シロは、わたしにとっては妹だけど、偽造した戸籍上は姉ってことになっている。

「衛宮さんって何人兄弟なの？ご家族は？」

「確か、2・Cの衛宮士郎君が弟さんなんだよね？」

「妹のような姉と、弟の士郎とわたしの三人よ。あと、おまけで一人父親がいるわ」

まあ、本当は姉のような妹かなと思ってるんだけど。流石に家の外でまでシロを妹扱いするのは対外的に変なのはわかっていているから、そこまでは言わない。

「あれ？・・・もしかして、衛宮さんってお父さん嫌い？」

「だって、ぐうたらだし、人の気持ち全然考えないデリカシーのない男なのよ。全く、お母様はなんであんな男が好きになったのかしら」

ついつい、愚痴をいつてみる。でも本音だ。キリツグは本当に人の気持ちを考えない。というより、わかってない。自分の寿命がただでさえ短いのに、それを自分から削つていく愚か者。でも、わたしの父親で、うそつきで、本当にどうしようもない男なんだから。きつと、わたしは死ぬまで許してあげない。わたしの言葉の本当の意味に、気付くその日まで許したりしないんだから。だから、さっさと気付けばいいのに。

でも、やっぱり最期までどうせ気付かないんだろうな、とそう思うから、きつとわたしはキリツグのことが嫌いなんだろう。

「わかるわかる。父親ってうざいよねー」

わたしのそんな心など気づくはずもなく、女生徒の一人が話にのってくる。自分達の家庭のことについてああだこうだ話して、笑い

ながら弁当を口にした。

同い年の子たちとこんな風に弁当を食べながら、家庭の不満をぶつけあう。それは今まで殆ど経験がしたことのないことだったけど、存外に楽しめた。

「衛宮さんの髪って綺麗ね」

弁当箱を片付けている時に、そんな言葉をかけられる。

「それ、前から思っていた」

「雪みたいだもんね。名前もそうだし、容姿もそうだし・・・やっぱり衛宮さんって本当は外国人なの？」

「・・・でも、弟さんどう見ても日本人よね」

ぼそり、とそんな声が最後に告げたたされるけど、不思議に思われるのも無理はないから別に気にはしない。

「母がドイツ系の貴族だったの。わたしは、ハーフだから、日本人の血もひいてるわ。でも、わたしお母様似だから、この髪もお母様譲りなのよ」

と、当たり前障りのない言葉をかえす。

「え！？貴族ってマジで？」

「うっそー。どうりで、衛宮さんって妙に気品があると思った。はっはあ・・・」

「じゃあ、もしかして、駆け落ち！？駆け落ち!?!」

妙に興奮した体で詰め寄る子たちに苦笑一つ。

「その辺りは家庭の事情ということで、軽々しく語れる内容じゃないわ」

そういうと、残念そうな顔をしつつもそれ以上をつっこんでくることはなかった。

「そっかあ」

「あ、じゃあ、弟さんと似ていないのって実は腹違い・・・」

「し、ばか、あんた何言ってるのよ」

「うにゃうー、ごめんなさい」

そうこうしているうちに午後の授業のベルがなった。三年はもう終わりだけど、二年である土郎は今から五時間目の授業だ。すっと、鞆を手にわたしは立ち上がる。

「じゃあね、今日は楽しかったわ」

「あ、衛宮さん」

ちよつと名残おしそうな響きで名をよばれる。それに微笑みを浮かべながら、わたしは彼女達を見た。

「図書室にいるから、何か用があったらきたらいいわ。それじゃあね」

そういつて、今度こそわたしは、自分の教室を後にした。

図書室でなんともなしに、読書に没頭していると、いつの間にか夕暮れに街は染まっていた。

ぴつと、電子音。

みれば、切嗣に念のためにとたさされていた携帯にメールが一つ。『悪い。一成と今一緒なんだけど、遅くなりそうだ。先に帰ってくれ』

と、簡潔な内容が書かれている。土郎が携帯を学校にもってきているなんて珍しいこともあるなと思わなくもないけど、また一成と一緒にだなんて、おもしろくない。

だけど、困らせるのも嫌で、『わかったわ』と返信しちゃうあたりがわたしもつくづく土郎に甘いなあと思う。

そういえばもう夕方ってことは、弓道部は終わりだろうか、と思つてひよっこり顔を出す。

「イリヤ先輩」

ちよつと驚いた声でわたしの名を呼んだのは、中性的な美貌が印象的な弓道部の主将にして現部長の美綴綾子だ。

「こんばんは、綾子。もう練習は終わったのかしら？」

彼女は一年の頃から、姉御肌で武芸百般といった感じで目立っていた生徒だった。わたしが生徒会長を務めていた去年も、一年の身

でありながら、前部長と一緒に度々生徒会室にきたもので、その頃からの付き合いだ。

「ええ。ちよいと前に終わりました。見学に来るにはちよっと遅かったですね」

苦笑しながら告げる声はさばさばしていて、好感がもてる。

「そう。桜いる？」

「ああ、間桐ですか？今よんできますよ」

いって彼女は、立派な造りの弓道場の中へと踵を返す。間も無く、急いで制服に着替えたといった風情の桜が、たつと小走りで近寄ってきた。

「イリヤ先輩」

「もう、桜、そんなに急がなくてもいいのに。ほら、髪が跳ねているわ」

そういって笑いながら、はねた髪を撫で付けると、桜は恥ずかしそうに顔を真っ赤にして「すみません」と謝った。

「それで、どうしたんですか？」

「今日、貴女うちに来る日でしょ？士郎は遅くなるようだし、たまには女二人で帰るのも悪くないかな、って思って」

そういって笑うと、桜もつられて薄っすら微笑む。それから、ちよつと気付いたような声で言った。

「士郎先輩、どうしたんですか？」

「また、一成に備品の修理頼まれたんだと思うわ。まったく、士郎もお人よしなんだから」

そういって、ちよつと怒ったように肩を竦めると、桜はくすくすと小さく笑った。

「でも、先輩らしいです」

うん、わたしもそんな士郎のことが大好きなんだと思う。と、心の中で賛同して、桜の手をひいて歩く。

「え、と、イリヤ先輩？」

つかまれた手に戸惑うような桜の声。それに、尚更明るい声で「

そういえば、弓道部では近頃どうなの？」と尋ねた。

「え？弓道部ではですか？」

「土郎、最近あまり顔出してないみたいだけど？」

「そういうと、苦笑しながら、桜はちょっと声のトーンをおとしていった。」

「あ、はい。そうですね。土郎先輩は出ても備品の整備とか弓の手入れとかばかりで・・・出るなら弓をひいたらいいのに、と美綴先輩が憤慨していました」

「そっか」

「はい」

そんな他愛のない会話を続けながら帰宅した。

今日の夕食も美味しかった。シロと桜の共同作業は年々息ぴったりになっていていってる。

今日は大河もいたから、煩さも一際目立ったけれど、シロと桜の料理の美味しさの前じゃ気にならなかった。

ふう、とお風呂からあがって、髪の毛をドライヤーで乾かしながら一息をつく。

土郎は桜を家まで送っていていないし、シロは片づけで忙しい。

キリツグとの魔術の鍛錬時間までもう少し暇もあって、少しだけ退屈。特に見たい番組なんかもない。

ふと、この前の青崎の検診を思い出す。

本人そのものの人形をつくれる稀代の人形師、魔法使いの姉である封印指定の魔術師。そんな偉大な人物ではあるけれど、彼女は魂のことに關しては専門外だ。今のわたしの肉体そのものは彼女の作品であるけれど、この身体に移るのは、キリツグとシロとわたしの三人の努力が必要だった。

そして、それを実行した当時、一番の適任であろうわたしは幼く、シロもキリツグも専門家とはいえない状態で、そんな中、こうして無事に肉体を移れたのは一種の奇跡みたいなものだったんじゃない

のかなと思う。

だから、そんなでこぼこなチームプレイの中で出来た奇跡だからこそ、年に一度ほどの頻度といえど、わたしは青崎の検診を受けることになった。結果はオールグリーン。

元の身体が秘めていたほどの莫大な魔力貯蔵量は今の身体に移ったときになくなったけれど、それでもわたしの魂は間違いなくこの肉体になじんでいた。

それは喜ばしいことなのかもしれないけれど……ふと、今日の昼にクラスメイトに自らが言った言葉も思い出して、胸が少しだけ痛む。

『確かにお母様は、10年前に死んだけど、それでもわたしは一人じゃないわ。わたしには大好きな家族もいるし、お母様は今もわたしの中にいるもの』

我ながら、よくそんなことが言えたものよ、と思う。

お母様はもうわたしの中に居ない。

今の身体に移る時になくした。

わたしはもう……ホムンクルスのイリヤスフィール・フォン・

アインツベルンじゃない。だからもう、お母様はいない。

だれがなんといおうと、自分が一番よく知っている。

わたしは、アインツベルンの裏切り者になったんだ。

「イリヤ、少しいいか？」

そんなハスキーな女の声にはつとずる。

「何？シロ」

がらりと、襖を開けて、いまだ赤いエプロンをきたままのシロが顔を出す。

「悪いが、暫く君の魔術鍛錬は諦めてはもらえないだろうか？」

「どうしたの？シロ」

「君に頼みがある」

そう言ってきた顔は真剣で、わたしは妹の願いをかなえるように、

静かに微笑んで先を促した。

「わかったわ。やってみる」

「ああ、すまない」

ぺこりと、頭を下げるシロ。

「もう、そんな水臭いことは言いつこなし」

苦笑しながら、そのすっかり真っ白になった白髪を撫でた。

「シロ、はじめてわたしを頼ってくれたでしょ？わたし、嬉しいんだから。それに、どうせならおねえちゃんは、シロには謝られるよりも笑った顔のほうが見たいかな？」

そういっておどけたように笑って見せると、ふと、目じりを僅かに和らげて、シロはほんのりと微笑みながら、「ありがとう、姉さん」と、今度はわたしの頭を撫でた。

「うん、シロは可愛くていい子ね」

よしよしと、さらに頭を撫でると、シロは、褐色の肌にはほんのり紅に染めながら「からかうのはよしてくれ」と言う。そんなところがさらに可愛いと思えて、益々上機嫌にわたしは笑う。

「わたしから、爺さんにはいっておくから。あとで、現物をもってくる」

「わかったわ。じゃあ、また、あとでね、シロ」

「ああ、またあとでな。イリヤ」

そうして夜は明けていく。

聖杯戦争がおこるまであと僅か。平凡な日常をそれまでわたしはきつと守ってみせる。

そんなことを思いながら、シロから預かったそれに呪をかけ、月を見上げた。

了





閑話 それぞれの日常 衛宮イリヤスフィール編（後書き）

というわけで、イリヤ編でした。最後のほうの文章は第五次聖杯戦争編入って暫くしてから意味がわかるんじゃないかなと思う。

次回は最後の閑話集にあたる、それぞれの日常 衛宮士郎編になります。

うーん、第五次聖杯戦争編までカウントダウンだなあ。

閑話 それぞれの日常 衛宮士郎編（前書き）

やあ、ばんははろ、E K A W A R Iです。そして最後の閑話集、士郎編です。

誰かシロねえのウェディング姿と白無垢姿を描いてくれる心優しい方はいないものか（自分で描けよ）

今回の話は当初の予定以上にエミヤさん率がえらい高いです。なんてこった。

まあ、そんな感じ。

閑話 それぞれの日常 衛宮士郎編

side・衛宮士郎

最近、不思議な夢を見る。

いや、夢とよんでいいのかわからない。見えるのは、美しい黄金の剣のイメージだ。

俺は夢を見ることなんて滅多にないのに、そればかりを最近よく見る。そして、その剣をもっと見ようと目を凝らして、そこでいつも目が覚めるんだ。

朝の五時半、いつも通りのこの時間に自然と目が覚めて、顔を洗い、着替えてきて、それから学校の課題を少し片付けて、6時10分前になると、親父の部屋に声をかけに向かう。

「親父」

脂汗をかいて、青い顔をして切嗣じいさんはうなされている。そんな朝が1年くらい続いている気がする。でも、俺が声をかけると、それを合図のように、なにもなかったような顔をしてすつと目覚めるのが、ここ1年の通例だ。

「ああ・・・士郎、おはよう」

「うん。親父、おはよう」

ほんわりと微笑みながらかけられる朝の挨拶に、言葉を返ししながら、胸元に言いたいことが競りあがってくる。

眠っている時の爺さんは異常だ。明らかに普通じゃない。

なのに、いくら医者を進めても、親父は取り合うことがない。なんで？どうして？思うことはつきなくとも、それに答えをかえされ

ることまた、ないんだろって、その頑なな黒い瞳を見る度に思う、実感する。

「じゃあ、俺シロねえ手伝ってくるから」  
「うん」

にこにこ笑う。目を逸らす気はないけれど、その笑顔が見ていられなくて、思わず心の中のため息一つ。

言わないのは、言う必要がないと判断したからだ。だから、俺は、貴方の望むとおりに変わらぬ息子いしゅまわらぬでいよう。

「シロねえ、おはよう」

台所に向かいながら、シロねえとは色違いで揃いの青いエプロンを身に着ける。

「ああ、おはよう」

シロねえの手元を見て声をかける。

「鰯の照り焼きが今日のメイン？」

「ああ。オマエは小松菜の胡麻和えを作れ」

「OK」

こうして、シロねえの朝食手伝いをするようになったのは大体4年くらい前からだ。それまでは、未熟者とか色々言われてさせてもらえなかった。まあ、それも、最初のほうはボロクソに言われたし、今も俺が作った料理に対する評価は厳しい。

同じ料理の弟子でも、桜には優しいのにな。最初は桜、おにぎりもマトモに握れなかったのに、それでも根気よくシロねえは声をかけて励ましていた。

料理教室のほうでもそうだ。数回ほどシロねえが開いた料理教室を見に行ったことがあるけど、シロねえはどの生徒も大切に、出来なくても根気よく教えて、決して愚痴を言わずに励ましていた。・・・なのに、なんで俺だけ厳しいのかな？とはいっても、そんなシロねえの指導は嫌いじゃない。確かにキツイことばかり言うけど、結局それは俺のためになっているからだ。

「うん」

隣から呆れた声で叱責される。

「集中力が足りん。こんな時に考え事とは感心せんか？ 士郎」

にやりと、笑う。凄く意地悪な顔だ。なんだか最近シロねえはよくこんな顔で俺を見てくることが増えた気がする。・・・昔はもつと優しくなったのになあ。と、思わず思いつつも、「悪い」と返して目の前の料理に集中した。

「おはよう、士郎、シロ」

大体俺から遅れること十分前後で、イリヤが居間へとやってくる。

「おはよう、イリヤ」

期せずして声がシロねえとハモった。きよとん、とついシロねえを見てしまう。シロねえはばつの悪そうな顔をしてふい、と横をむいた。複雑そうな顔だ。

実はシロねえと言動がハモることは昔頃から時々あることだったりするけど、それがどうもシロねえには喜ばしくないことらしい。大抵ハモったあとはこんな顔をしている。

俺は、シロねえとお揃いみたいで結構嬉しかったりするから、この反応はちよつとだけ哀しい。

その時、玄関から今日も虎の咆哮が鳴り響いた。

「おっはよ～～～～！！ねえ、今日の朝食、なに？ なに？ うーん、良い匂い～～！」

・・・藤ねえ、近所迷惑だから叫ぶなって何回言っても聞かないのは、イイ大人としてどうかと思うぞ。イリヤなんて凄く呆れた目で見てるし。

「大河、走らなくとも、料理は逃げんよ。それと毎度言っていることだが、廊下で叫んだり走ったりするのはやめたまえ。・・・ああ、今日の朝食はジャガイモの味噌汁と、鰯の照り焼き、小松菜の胡麻和えに、出汁まき卵、白菜の浅漬けだ」

「鰯の照り焼きか。それはたのしみだね。やあ、おはよう」

藤ねえが料理に目を輝かせてる中、音もなく新聞片手にひよいと切嗣じいさんが現れる。

「切嗣さん、おはようございます!」

「うん、おはよう。大河ちゃんを見てみると僕も元気になるよ」

「本当ですか?」

あー・・・嬉しそうな顔してるなあ。

「それより、二人とも、席につきたまえ」

シロねえは、ちよつと肩を竦めながら、その言葉をかけると、大人しく二人は従う。

「いただきます」

朝食が終わり、かちゃかちゃと食器を洗う音が響く。今日は大して課題もなかったからわりとのんびり出来る。イリヤは何か用があるらしくて、今は自室だ。親父は部屋へと戻ったし、シロねえは洗い物をしている。隣には藤ねえ。

「ねえ、ねえ、士郎」

声を潜めるようにして藤ねえが声をかけてくる。

「・・・なんだよ?」

ちよつと怪訝になって首を傾げると、藤ねえは、ちらちらと台所のほうを見ながら「シロさんってお付き合いしている人とかいないの?」と、そんなことを聞いてきた。

「は?」

藪から棒になんだ?と思つてつい、そんな間抜けな声を出す。

「だ〜から、お付き合いしている人!ほら、シロさんって綺麗だし、スタイルいいし、料理上手で、よく気が利いて、しかも強くて凄くお買い得物件じゃない?」

いや、藤ねえ、その言い方はどうかと思つぞ。

「でも、全然そういう噂聞かないし。モテると思つのにね〜。ていうか、わたしが男だったらほつとかないわ」

わたしが嫁にもらう!なんて小声がおーっと咆哮する虎。

・・・でも、まあ、藤ねえのその考えはわからなくもない。俺としてはちゃんと恋人の一人でも作ってくれたほうが安心出来るのに、シロねえでそういう話はてんできかないからだ。心配するなっつてほうが無茶だろう。

「で、お付き合ひしている人とかいないの？」

「俺も、そういうのは聞いたことないぞ」

そう答えると、藤ねえは残念そうにそっかーと肩を落とした。

「うーん。あんなに綺麗なのに勿体無いなあ。シロさんだったら、ウエディングドレスも白無垢もどっちも淒く似合うと思うのに」

「それは・・・」

想像してみた。真っ白なウエディングドレスに身を包んだシロねえ。褐色の肌に白が映え、恥らうように俯いている。頬にかかった同じく白い髪がどことなく色っぽくて、半透明の瀟洒なウエディングベールが、露出度の高い肩のあたりをそっと包んでいて、ちらちらと褐色の肌が覗く感じがどことなく婀娜っぽい。

日本古式の白無垢に身を包んだシロねえ。和装がしっくりと似合っつて馴染んでいるのに、褐色の肌に白い髪といったカラーディングがエキゾチックで、愁いを秘めた表情なんかが妙にセクシーだ。三々九度の杯を傾けて、目じりは薄っすらと赤に染まって・・・妄想終了。なんとなく、これ以上考えるのはヤバイ気がする。うん。でも・・・。

「・・・いいな」

「でしょ？シロさんが結婚するときは、絶対わたしいの一番にかけるわよ」

と、そこで呆れとうんざりしたといった感じの感情交じりの声がかかる。

「人のことで、勝手なことをいうのはやめてくれないかね？」

むっすりとした顔のシロねえが、口元を引き攣らせながら、腰に手をあてて立っていた。

「それに大河、そろそろ時間だろう？出たほうがいいと思うが？」

そういわれ、はたと藤ねえは時計を見て、「あ、いつけな―い」  
なんて声をあげながら、ぼんとたった。

「シロさん、今日も朝食ご馳走様でした」

「お粗末様でした」

なんだかんだいってシロねえは律儀なんだよな。口元引き攣らせ  
ているのに、礼をいわれたら必ず言葉をかえしている。

「じゃあ、士郎、またあとでね」

そういうなり、虎はひゅんと風をきるような勢いで飛び出して  
いった。

それを見てシロねえはため息を一つ。ついで、くるり。俺のほう  
を見たかと思うと、じろりと睨んできた。

「士郎、オマエもくだらない話にのるな」

台所にいながらにして、さっきの会話をしつかり聞いていたら  
しい。だけど、そのシロねえの言い分にむっとした。

「くだらないってなんだよ」

「私が結婚がどうのこうのという話だ」

あ、カチンときた。

「くだらなくはないだろ」

「私には必要のない話だ。不毛な内容とは思わないのか」

「思わないね」

その冷めた声音に、心底自分には不要だと思って発言しているこ  
とが嫌でもわかって、ふつふつと怒りが脳を沸かす。なんでこう、  
この人は色々自覚がないんだ。自分には関係ないって？俺はシロね  
えのこと好きだけど、こういうところは本当腹が立つ。

俺が怒っていることはわかってるだろう。シロねえは心底面  
倒くさそうに眉根を顰めて、更に爆弾を落とす。

「ああ、もういい。オマエは私などよりも自分の心配だけしている」

「シロねえ！」

付き合ってられん、そんな感じの口調で吐き捨てながら背を向け  
るのを見て、苛立ったまま声を上げる。



今、シロねえは『私など』って言った。前からのことだけど、なんでこの人は自分を大事にしないんだ。それをみてまわりがどう思うかなんて考えちゃいない。

シロねえは強い。確かに強い。口も魔術も体術も剣術もまだまだかないそうにないくらい強い。だけど、危うい。シロねえの強さは諸刃の剣だ。だってシロねえには自分が幸せになるってことが徹底的に欠けている。シロねえはきつと自分はどうでもいい。そう、シロねえは、自分が幸せになること自体に興味がないみたいだ。そこがイラつく。

どうしてこの人はこうなんだ。誰より優しいくせに。人には尽くすくせに、自分が尽くされるのは拒絶する。頑張ったやつが報われないなんて嘘だ。そんなのあっていいものか。自分を蔑ろにするなよ。俺は沢山アンタに幸せをもらってきたんだ。だったら、アンタも幸せにならなきゃ嘘だろ。皆幸せになる、そんなハッピーエンドじゃなきゃ駄目だろ。

そうだ、シロねえの強さはまるでガラスみたいだ。鋭利で鋭くても脆く、パリンと割れる。そんな不安定な姿を見続けてきた俺の立場になってみるよ。

尊敬だつてしてる。その在り様には憧れさえある。いつしか冬木の謎の紅き女救世主なんてあだ名つけられて、それでも弱者を救う有様には羨望すら抱いている。自分もこうありたいと、そんな漠然とした憧憬すらある。だけど、だけど・・・アンタは女なんだぞ。

確かに、シロねえにはまるでヒーローのような面もあるけど、それでも10年間見てきたシロねえは、それ以上に「衛宮」という家庭を守り続けた「母」で「姉」だった。

幼い頃のばされた手の感触を今でも覚えている。イリヤと俺が昼寝をしているのを見て、毛布をかけてくれた優しい感触や、静かですらに優しい微笑み、そこに俺は「母性」を見た。

大災害の記憶があまりに大きすぎて今では薄れてしまった、実母の面影をそこに見出した。生きていたら「母さん」がしてくれたん

だろうか？って思うことをいつもくれたのはシロねえだった。

だけど、母と呼ぶにはシロねえはあまりに若くて、時折さらけだすあどけない笑みに、この人はまだ年若い「女の人」なんだと思いつ出す。一時は俺やイリヤにかまっているから、自分の大切な相手を見つけれないのだろうと思っていたこともある。俺なんかに構っているから自分の女としての幸せを追求できないんだと・・・それは違うってことは数年と経たずわかったけど。

でも、女として幸せになってほしいっていうのはそんなにおかしな願いか？違うだろ。この気持ちはシロねえにも否定される覚えはない。

そうして尚も言いつろうとしたその時、吃驚した顔のイリヤがひよいと姿を現した。

「シロ、土郎、どうしたの？喧嘩？」

「いや、大したことはない」

さらりと、本当にいつも通りの口調と表情で言つてのけるシロねえ。・・・俺はこれで終わりなんて認めないからな、とじとりと睨んでも効果はないあたりが、ちょっとだけ悔しい。

「ほら、今日の弁当だ」

「うん・・・」

イリヤも、本当になんでもなかったわけではないとは気付いているだろうけど、ちらりと俺とシロねえを見るだけでそれ以上は追及しない。

そうこうしているうちに登校時間だ。そして出て行くとき、ふとイリヤは真剣で諭すような静かな声で「シロ、なにがあつたか知らないけど、引きずっちゃ駄目よ」とそんな言葉をかけてから出て行った。

イリヤは何も聞かなかった。ただ、学校での別れ際「帰ったら、いつも通りにシロと接してあげてね。おねえちゃんはシロと土郎が喧嘩する姿を見るのは哀しいわ」そう言ったので、「大丈夫だよ、

イリヤ。心配かけてごめんな」そういつて、出来るだけ笑顔で手をふってわかれた。

その後はぼんやりと授業を聞いて過ごす。

そして、昼休み、すーっと息を吸い込んで深呼吸したあと、ぱんと自分の頬を張った。よし、と掛け声をかけて気持ちを払拭する。

「一成、今日は生徒会室空いてるんだろ？飯食おうぜ」

にかつと笑ってそう言うと、一成も頷いて立ち上がる。

そうして二人連れ立って生徒会室に向かった。

ばかりと弁当箱を開ける。中身は、おかずのパックが一つ多く、小さなメモ帳に「一成君に渡してくれ」とシロねえの字で書いてあった。それに苦笑しながら「一成、ほら、これシロねえからだって」といいつつ、パックを渡す。

「む、かたじけない。シロさんの厚意にはいつも痛み入る」

なんていいながら、二人分の茶の用意をしている。流石寺の息子というべきなのか、茶坊主が板についている。

寺の息子とはいえ、成長期だというのに、一成の弁当には肉分が圧倒的に不足している。それを知っているからシロねえはよく、一成の分のおかずも用意してもたせる。そんな気遣いに思わず苦笑。中身はからあげとキャベツ、肉団子に厚焼き玉子といったラインナップだ。冷えていて尚、食欲を刺激する。一成も思わず感嘆の唸り声を上げる。

「では・・・」

いざ、いただきますと続こうとした一成の声は、ひよいとのはされた白い手によって遮られた。

「ん・・・やっぱりシロのお弁当はおいしー」

凄く充実そうな微笑みを浮かべて立つのは、浮世離れた白い妖精・・・じゃなくて、俺の義姉のイリヤスフィールだ。容赦なく一成への追加弁当だけを狙って手を出している。

「なっ、なっ、なっ」

一成は思わず、口をぱくぱくとさせて動転している。尚も容赦なく、今度はイリヤは肉団子を浚って、その小さな口に収めた。俺は思わず、はあ、と息をついたあと、すつと空気を取り込んで「こら、イリヤ！」と怒鳴った。

「きゃ、何？」

「一成の分をとつたら駄目だろ。イリヤの分の弁当だってちゃんとあるんじゃないか」

そう、イリヤの手にはしつかりと自分の弁当が握られている。

「だって、一成にシロの弁当を食べられるなんて、悔しかったんだもの」

そうぷーっと頬を膨らませながらいつてくる顔は、なんだか子供みたいで可愛らしくて・・・いやいや、ここで怒りをおさめたら相手の思う壺だと思いなおしながら、「それでも、やっていいことと悪いことがあるだろ」と告げると、「・・・怒った？」と上目遣いでちらつと尋ねてきた。

はつきりいつてイリヤは可愛い。2・Aの遠坂と並んで二大アイドルとよばれているのも頷けるくらい凄く可愛い。いくら家族としていつも一緒にいて免疫がついているとはいえ、こつこつ顔でみられると、ついぐらつと落ちそうになるくらい物凄く可愛い。だから、甘いことを言ってしまうのは健全な男子高校生として仕方ないと思う。

「一成に謝ってくれたら、もう怒らない。それが終わったら仲直りの印に一緒にお昼を食べよう」

イリヤはその言葉にむう〜と小さく唸りながら暫し一成と俺を交互に見たけど、諦めがついたのか、ため息をひとつつくと頭を下げて「ごめんなさい」と、なんだか硬い声音で告げた。

思わず安堵の息を吐き出して、それから、ぽんと隣の席の一成へと声をかける。

「あー、一成悪かったな。イリヤもほら、この通り反省しているから大目に見てやってくれ。その代わり、無くなった分は俺の弁当か

らとつていいから」

そういうと、一成はこめかみに手をあてて、「全く、士郎はお人よしが過ぎるぞ」と重い声で告げた。それに苦笑。そのやりとりをどことなく不満げにイリヤは見ているが、さすがは堅物生徒会長、意にも介していない。

その後は、イリヤと一成が所々で争いあつてはいたが、概ね平和に昼休みは終わった。

放課後になった。俺は一応弓道部所属だけど、最近あまり行つてないし、行つてもマネージャーがやるような仕事ばかり選んでやっている。

その理由は、理由というほどのものじゃないかもしれないけど、俺はまず弓を外そうと思わない限り外さないこともあるかもしれない。だって、最初から出来てしまふんだ。そんなの、一生懸命練習している奴らには失礼だろ、とつい思つてしまふのもあるし、以前シロねえに言われた言葉もある。

『魔術を秘匿するのは当然だが、オマエは弓のほうも出来るだけ知られないようにしろ』

と。なんでそんなことをいわれたのかはわからない。だけど、こくりと気付いたらうなずいていた。

俺にとつては弓的にあたるのは当たり前でも、それは異常なんだと、多分そういうことなんだろう。

でも弓道部は俺にとつて居心地がいいし、桜や慎二がいるし、美綴にはよく勝負をふっかけられるしで、なんだかんだ辞めるほどにはいたっていない。俺が主にやっているのは弓の調整や、アドバイスってほどのことじゃないけど、簡単な姿勢の矯正指導くらいものだ。俺をライバル視している美綴には悪いけど、俺にはそれくらいの距離感が調度いい。

さて、そんな今日はといえば、昨日に続いて、一成と一緒に備品の整備をしている。

俺の得意な魔術系統は、「強化、変化、解析、投影」の系統で、とくに刃物類の投影と解析魔術のほうに才が偏っているらしい。逆を言えば、一般的な魔術は大抵不得手で、本来はこの系統の基礎になるべき強化魔術のほうが苦手だったりするわけだが、まあ、それはまたの話ということにする。

集中するためと断って、一成を部屋から出し、壊れたストーブを見る。

「トレス・オン  
解析開始」

自己に埋没するための呪文を口にし、ストーブの構造を見て取る。普通の魔術師からしたら、こういう解析の魔術に秀でていてもあまり役に立たないものらしいけれど、こういう壊れたものの修理には解析の魔術はもってこいだ。配線が一個断線している・・・と、なにが原因で悪くなったのが手に取るようにわかる。あとの修理は簡単だ。

「一成、終わったぞ」

これが今日最後の修理物だとわかっていたので、声をかけると、一成は「いつもすまん」といいながら、歩み寄ってくる。

「何、気にするな。友達だろ？」

「しかし、こう士郎に頼ってばかりでは・・・」

と、困ったように眉根を寄せる姿を見て、苦笑。恩を返したいのだ、と真面目な一成は思っているのだろうとわかって、イリヤをまねてちよつと茶目つ気を出しながら提案をする。

「じゃあ、今度江戸前屋の大判焼きを奢ってくれ」

そういつて笑うと、一成は目じりを和らげて「そんなことで構わないのなら是非とも。だが、いいのか？」と尋ねてくる。

「ああ。それに、実はシロねえも江戸前屋の大判焼きが好物なんだ」  
そう言つと、ちよつとだけ一成は吃驚したように目を開いて、それからふと「なら、いつもの弁当の礼に、たんまりと用意するとして」なんていいながら笑った。

家に帰る。

「士郎、おつそーい。もう、あんまり遅く帰つてると不良になっちゃうんだからね」

なんていいながら、イリヤにタツクルじみた抱きつき攻撃を受けた時は、思わず苦笑した。

今日の夕食はハンバーグに、シチュー、ハムとアスパラのサラダに、トマトリゾット、食後にあっさり甘さ控えめのパンナコッタという献立で、メインは桜のお手製だ。

食後の紅茶を飲みながら、口どけもふんわりしたパンナコッタを口に運びつつ、料理のことで談笑している桜とシロねえを見る。

虎は横になりながらTVに夢中だし、イリヤは風呂に向かった。

親父は自室に引き上げた。そんな中、一人ぼつんと、デザートを食べながら、目の前で会話する女二人の姿を見ると、なんとなく羨ましい気がしてしまうのはどうしてなのか。どことなく嫉妬っぽいもやもやが少しだけ胸にわきあがって、思わず首を傾げる。

いや、よしんばこれが嫉妬だとしても、そもそも俺は一体桜とシロねえのどっちに嫉妬しているんだか。自分でもイマイチ判別はついていない。ふと、桜と目があつた。

シロねえは、ああ、と何かに気付いたような顔をして、まぶたを少し落とすと、紅いエプロンを丁寧にたたんで、桜への紅茶を追加してから、自室のほうへ向かって出て行った。

「先輩、お隣お邪魔していいですか？」

と、ふんわり柔らかな声で尋ねる後輩を前に、「ああ。いいぞ」といって、少しだけ位置をずらす。

「では、失礼しますね」

そういいながら、くすりと笑う桜が綺麗で、ちよつとだけ困った。

「さ、桜さ」

「はい」

思わず慌てた声をあげながら、先ほどまで思っていた言葉を上げる。

「シロねえにかわいがられているよな」

きよとんと、桜は目をぱちくりさせる。其れを見て、馬鹿なことを言ったな俺とは思いつつも、今更撤回するわけにもいかない。

「俺が料理しているとき、いつもシロねえボロくそに言うんだぞ。」

「馬鹿」だとか、「たわけ」だとか、「未熟者」だとかさ。それが桜にはとてもじゃないが見せないような凄く意地悪な顔でさ」

むう、とちよっと思い出して思わず頬を膨らませた。

「最近のシロねえなんかとくにそうだ。俺相手にはいつも意地悪な顔して、口を開くたびに皮肉ばかりで……って、なんだよ、桜」

気付けば、桜はくすくすくすくと本当おかしそうに笑っていた。目じりに笑いすぎで涙までためている。……なんでさ。そこまで笑われるようなこと俺言っただけ？

「それで、先輩は先ほどわたしに嫉妬していたんですか？自分もシロさんに優しくしてほしい、とか」

かっつと、耳が熱くなった。

「先輩、可愛い」

う……なんか、嫌だ。

「確かにシロさんはわたしにはとても優しいですけど……でも、わたしが先輩に妬くことだってあるんですよ？」

「なんだよ、それ」

意味ありげな視線に、つい、と思わず顔を逸らしながら聞く。頬が火照って暑い。顔が真っ赤なのが自分でもわかる。後輩相手にこんな醜態を晒すとは、我ながら中々情けない。

「シロさんは、土郎先輩に甘えているんですよ」

「え？」

意外な言葉をいわれた。そう思っと思わずまじまじと桜を見る。

彼女は微笑みながら、静かに語りだす。

「シロさんにとって先輩は特別なんです。シロさんが取り繕わず有り餘っているのは土郎先輩の前だけだって、やっぱり先輩気付いて



なかつたんですか？」

それは・・・本当に？

「甘えてて、何を言っても許してくれる相手だとそう思っているから、だからシロさんは先輩にだけ『違う』んです。わたし、そんなシロさんと土郎先輩の関係が、ちよつとだけ羨ましいです」

そうして桜は、ほんの少しだけ寂しそうに笑った。

桜を家まで送って、風呂に入って、でも考えるのは、桜に言われたこと。それがぐるぐると頭の中をまわる。

『シロさんは、土郎先輩に甘えているんですよ』

・・・そうなのか？

だって、シロねえはいつだって・・・カッと頬が熱くなつて、思わず冷水を頭から被った。

なんだこれ、心臓がばくばくなくなってる。予想外の相手に・・・形はどうあれ頼られ甘えられていたというのは、無駄に恥ずかしくて嬉しくてこっぴどくさしい。

こんこん、とその時ノックの音が響く。

「土郎、いるか？」

ドアごしにぼんやりとシロねえのシルエットが浮かび上がる。

「ああ。どうしたんだ？」

「どうしたもなにも、お前がいつまでも出てこないから、さては寝でもしたのかと思って様子を見に来たのだが？もう、40分以上経っている。気付いていなかったのか？」

「え？」

そんなに時間が経っていたのか、慌てて思わず浴槽から身を上げる。

「わ、悪い」

と、声をかけて、それから思わず目を見開いて驚愕した。

俺が立つのと同時に、がらりと浴室の扉を開けて、シロねえが（服は着たままだけど）何食わぬ顔して入ってきたからだ。ちなみに

下、何も隠してない。

「なっ、なっ!?!」

口をぱくぱくとさせながら、思わず固まったところでだれが俺を責められるだろう。いくら家族とはいえ、こっちは思春期真っ盛り  
の健全男子である。この心境をどうか理解して欲しい。

そのままずんずんと近寄ってきたシロねえは、俺の頬に手をのばし、  
「……思わずとくりと心臓が高鳴った……そのまま、こつんと、自分の額と俺の額をつき合わせた。

「ふむ……やや熱いな。大方湯あたりといったところだろう。先  
ほども顔色がおかしかったし、もしか、風邪の引き始め……という線もあるか。馬鹿は風邪をひかないというのがアテにならん。あ  
あ、いい。今日は鍛錬を休んでしっかり寝ている。普段病気知らず  
な分、オマエはどうなるかわからないからな」

……そんな言葉を淡々となにもなかったかのように動じず言う  
この朴念仁を誰かどうにかしてくれ。俺の熱が上がっているのは確  
実にアンタのせいだよ。

とりあえず、今更だし、シロねえは全く気にしていないようだけ  
れど、近くの手ぬぐいで下半身を隠した。気休めでもやらないより  
はやるほうがマシだ。

「……いい。鍛錬には出る。だから、シロねえ、出てっくれ」  
ついつい無愛想な口調で、出来るだけ不機嫌を作っ  
て言ったとい  
うのに、シロねえは不思議そうな顔をしてことりと首を傾げるばかりだ。  
だから、あんたはもう、なんでわからないんだ。今のは俺の  
最大限の譲歩だぞ!?

「おい……士郎、オマエ凄く熱だぞ」

だから!!アンタが……って、ずいっと近寄るな!そんな心配  
そうな目で俺を見るな、触るな、つか、当たってる!!服越しとは  
いえ、ふにやりと柔らかい二つの弾力ある物体があたっているから!  
「やはり、風邪か」

違う!!つか、なんで鋭いところは鋭いくせに、こういうところ

はどこまでも鈍感なんだ！？あ……駄目だ……意識が遠のく。

パタツ。暗転。

……この家に来たばかりの頃、あの大災害の夢を見て、何度も飛び起きた。その匂いも感覚も五感の全てがあまりにリアルで、なのに、会話は覚えているのに両親の顔も薄らぼんやりしてて、焼けていく記憶に翳り、覚えているのは輪郭ばかりだ。

生きなきゃ、とそう思った。あの、救われないはずの地獄。

そんな過去でもある夢から、目が覚めて真っ先に感じたのは、手に感じる暖かいぬくもり。

穏やかに、まるで聖女のような微笑を湛えて、シロねえが俺の手を握り締めて其処にいた。

「士郎」

そう、優しい声で名前をよぶから、俺は安心して、ああ次はあの夢を見ずにすむなと思えて、そのぬくもりに包まれながらまぶたを閉じた。

そんな夜を、衛宮の家に引き取られて、イリヤを迎えに二人が出て行くまでの一ヶ月間ずっと過ごした。

すう、と目を開ける。手には懐かしい暖かさ。ふ、と見上げるその先の面影が、先ほどまで見ていた夢に被った。

「目が覚めたか」

そうして微笑む顔は、昔、聖女のようにだ、なんて子供の頃に思った静かな、笑顔というにはあまりに慎ましい微笑み。

「……おれ……？」

思わず昔に戻ったようで、自分がわからなくなって、つい困惑した。

「風呂場でオマエは倒れたんだ。覚えてないのか。全く、修行が足

りんぞ。自身のことはちゃんと自分で把握できるようになって、常々言っているだろう」

なんて、呆れ混じりに言う声も昔みたいに優しくかった。

「さて、目が覚めたのなら構わないだろう。私はもう行くが、オマエはもう少し寝て・・・」

「シロねえ」

ぎゅっと、離れようとする手を握り締めた。

桜は、シロねえは俺に甘えているといった。なら、それがうぬぼれでないなら、だったら、俺もたまには我俣をいっても許されるだろうか。そんな誘惑が、頭をよぎる。だから、それを口にした。

「俺が眠るまでここにいてほしい。駄目か？」

そういって、じっとその鋼色の瞳を見つめると、シロねえはぱちくりと目を瞬かせて、それから、昔みたいなの柔らかな笑みを湛えながら、「全く仕方ない奴だ」そう笑った。

「・・・今夜だけだぞ」

そういってきた声があまりに暖かいから。

「うん・・・ありがとう、シロねえ」

その手のぬくもりに甘えて、俺は柔らかなまどろみの中へと意識を旅立たせた。

了

閑話 それぞれの日常 衛宮士郎編（後書き）

というわけで士郎編でした。

風呂になんの躊躇いもなくずかずかと入ってきたのは相手が士郎だからですよ。エミヤさん、士郎は、次元が違っているとしても過去の自分の一種だと思っている分、遠慮皆無です。

一方、士郎にとっては、エミヤさんは義理の姉で、母のような存在で、同時に強いけど危うい人で、「女の人」だから、やられる側としては色々たまらない（笑）

次回は第五次聖杯戦争編予告集になります。

## 第五次聖杯戦争編予告集（前書き）

ばんははろ、E K A W A R Iです。

今回あげたものは基本的に小説じゃなくて、予告イラストと漫画になっ  
ていますので、あらかじめご了承ください。

新コスチュームも色々お披露目だお。結構ネタバレ入っている気がするけど、致命的なのは  
ないから大丈夫なはずだ。画力はこれが俺の限界だよ！（え）

まあ、一部予告じゃないイラストも混じっているけど。

携帯だと文字が見れないという意見があったので、漫画の下に台詞も一応併記させていただきます。

第五次聖杯戦争編予告集

I am the bone of my sword .  
体は剣で出来ている。

Steel is my body , and fire is  
my blood .  
血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand  
blades .  
幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death .  
ただの一度も敗走はなく、

Not known to Life .  
ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create  
many weapons .  
彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet , those hands will never h  
old anything .  
故に、生涯に意味はなく。

S o a s I p r a y , u n l i m i t e d b l a d e  
w o r k s .

その体は、きつと剣で出来ていた。

『うつかり女エミヤさんの聖杯戦争』第五次編、予告。

> i 2 9 1 7 2 — 3 0 3 2 <

右上「聖杯戦争の始まりだ」

右下「レイリス：初めまして、裏切り者の姉様」

左下「セイバー：あなたは一体何者なんですか？」

『これは今までにない聖杯戦争』

> i 2 9 1 7 3 — 3 0 3 2 <

右上黒枠「?：十年待っていた」

右上黒枠の横「黒桜：痛いなあ・・・」

左上「アーチャー：率直に聞こう。オマエはオレか？」

真ん中「ギル：冗談だ。貴様など抱いたら我が穢れる」

下段「魔女の願いと人々の想いの下で歯車は廻る」

「?：おそらくは混線したんだと思うの」



> i 2 9 1 7 4 | 3 0 3 2 <

右上『これは希望なのか、奇跡なのか、それとも喜劇か。新たな因果、新たな悲劇と共に世界は変えられようとしている』

左上「ランサー：悪いな」

真ん中「凜：桜、ごめんね」

右下「エミヤ：士郎」

左下「エミヤ：おまえに　をやる」

『そして・・・』

> i 2 9 1 7 5 | 3 0 3 2 <

上段「士郎&エミヤ：体は剣で出来ている。血潮は鉄で、心は・・・」

下段『運命は今終息しようとしている』

「Unlimited blade works」

> i 2 9 2 0 8 | 3 0 3 2 <

> i 2 9 0 7 7 | 3 0 3 2 <

N  
E  
X  
T  
?

< 2 2 9 2 1 0 | 3 0 3 2 >

< 2 2 9 2 0 9 | 3 0 3 2 >

< 2 2 8 8 8 6 | 3 0 3 2 >

## 第五次聖杯戦争編予告集（後書き）

漫画冒頭でエミヤさんがぶっぱなしているのはM202ロケットランチャーで・・・げふげふ。ワルサーPKぶっぱなしているところも描きたかったが、こつちのほうが派手かな・・・なんて。

漫画4P目のコマは描きなおしても書き直してもイメージどおりのものになってくれなくて結構泣けた。妥協の結果がこれだよ！

赤セイバー×女エミヤさんのイラストを混ぜたのはあれだ、この二人評判よかつたし、自分で書いてても楽しかつたし、この機を逃したらもう載せられない気がしたからだ。

下着のイラストはもうちよっと二人の肉質をえろていっくに描きたかつたです、先生（誰だよ）そげな感じですよ。

というわけで、次回から第五次編はじまります。

最後のは0話のイメージイラストだよ。

第五次聖杯戦争編 00・と或る世界の魔法使いの話(前書き)

ばんははろ、E K A W A R I です。

とうとう始まりました第五次聖杯戦争編、第一弾は零話というわけで、そもそも全ての始まりの話になっています。

漸く第四次聖杯戦争編ラストと繋がられた。

大分話の核心に触れる部分を今回バラしましたが、全部はまだ出しません。次にこの話関連のネタが出るのは大分先になりそうです。そんな感じ。

ザー……ザー……。

(接続エラー、接続エラー)

ねえ、アーチャー聞こえる？

(不安、暗雲、動揺、見透かすように伴侶の声が内に響く。)

て……ちよつと、馬鹿士郎何言ってるのよ。

(リンクを閉じる、細める？否、増大。針に糸を通すように慎重に吸い上げ、繋がりを強める)

あー、もう、煩い！アンタはそこで黙ってなさい！

これが真正正銘、唯一のチャンスなんだから。

アーチャーを救う機会はこれっきりなんだから。

(リンクは蜘蛛の糸のように頼りない。知っている、わかっていた。これはただ一度の試み。成功する可能性のほうこそ、それこそ万に一つの奇跡)

ザー……ザー……。

(でも、それを掴み取るのだと決めたのも私)

ねえ、お願い返事をして。

私、あなたに繋がっている？

(接続エラー、接続エラー！。返事は返らない。そして、また私はその作業を繰り返す)

『と或る世界の魔法使いの話』

side . . . ? ? ? ?

まるで御伽噺に出てくるような、それは古い洋館だった。

魔女の家。その印象がまさに正鵠を射てるとは誰が知ろうか。

此処は変わらない。200年以上に及ぶ魔道の探求の末に至った  
魔女の家。

世界に現存する数少ない魔法使いの、最も新しき称号を得た、赤  
き宝石の魔女。

「ごぼと、泡が立ち上がる。その地下室。その溶液の中に、彼  
女は居た。

意識して操作してきたのだろう、年のわからぬ、けれど美しい女

だった。

鳥の濡れ場色をした美しい髪が、宝石を溶かし込んだ羊水の中で揺らめく、その様は幻想的といっていい。

ふ、と目を見開く。アクアマリンの瞳は力強く、けれど同時にどこまでも優しかった。

その部屋で、その光景を見ているのは、おそらく30代半ばといつたくらいの背の高い男だ。その視線を受けて、彼女は伸びやかに足をのばし、そして、あっさりと自身が今まで身を沈めていたその容器から出て行った。

一糸纏わぬ均衡の取れた肢体に、男が手渡したタオルがかけられる。

女は「ありがと」と小さく言うと、とん、と男に背中を預けた。

よく見れば女の右手はいまだ、容器とチューブで繋がっている。

その左手に握っているのは豪華で可愛らしいデザインの、けれど空っぽなルビーの大きな宝石。鎖がしゃらりと音を漏らす。

「どうだった？」

男が声をかける。

「駄目ね、失敗したみたい。細いものは築けているんだけど、リンクが細すぎて声までは届かないのよ」

「そうか」

「誰もやったことのない試みだから、わたしだって最初から上手くいくとは思ってなかったけど、ね」

女の声はいつも通りを装いながらも、どこか疲れたような色もある。当たり前だ。

「でも、アイツはわたしの物だから。やっぱり、なんだかんだいって諦められないみたい。わたしは、自分のものが幸せになれないのは我慢ならないもの」

「知ってるって。まあ、最初に言い出した時は流石に吃驚したけど、そういうところもらしいっていうか」

そんな風がいいながら、あどけなく、男は少年のように笑った。

口元に笑い皺がひろがる。

「・・・でも、あんたやルヴィアゼリツタがいなかったら、ここま  
で来れなかったわ。感謝、してる」

「おいおい。おまえが努力したからここまでこれたんだろ。俺はた  
いしたことをしてないぞ。そんな弱気じゃ、『赤き宝石の魔女』の  
名が泣くぞ。お前はもつとどんと構えてるよ。後ろは俺が支えてい  
るからさ。そのほうがずっとらしい」

「ふふ、そうね。じゃあ、よろしく頼むわ、旦那様？」

わざと意地悪く、学生時代の頃みたいなきみを浮かべて、最後の  
台詞を強調して言うと、言われた男は顔を真っ赤にして、「オマエ  
な・・・ああ、もういい。飯、出来ているから、今日くらいちゃん  
と食べ」といって、ふいと顔をそむけ、背中を向ける。

それに女はふふつと笑いながら、楽しげに、穏やかに微笑んだ。

「ええ、そうね。それじゃ・・・ッ!」

言う途中の女の目が見開かれ、容器に繋がった右手のチューブを  
左手で握り締める。

「・・・来たのか・・・!?」

「ええ、悪いけど、わたしまた入るから・・・その間わたし  
の身体、お願いね。何かあったらパスで呼ぶから」

「ああ、任せておけ」

初めて出会った頃は、背も低くて、幼顔をしていた男の、精悍に  
成長した頼もしいその顔を見る。そつと手を離れた。感覚が遠い。  
愛する伴侶のその顔は、色さえ除けばかつてのパートナーと酷似し  
ていて、でもその純真な目はどこまでも違った。

「『錬鉄の守護者』を抜けるやつなんて、そついやしないさ。俺と  
お前がいれば100人力だ」

そつして彼が笑うから、本当にきつと大丈夫なんだろう。意識が  
揺らぎ、別世界に接続していく中、ぼんやりとそつ思った。

「そつ・・・」

こぼりこぼりと、宝石を溶かした海に浮かびながら、美しき魔女



はまどろむ。

「ありがとうね。わたし、アイツを……」  
続きの言葉は闇に沈んだ。

其れは一人の魔女が望んだ願いから始まった。

多くの同胞の下に、祈ったその結晶の一欠けら。

変わらぬ運命フュイトに輝をいれるその一石。

時と並行世界を架けた願い。夢、希望。

『頑張ったやつがむくわれないのなんて間違っている』

『幸せになれ』

『安らかにあれ』

ただ単純な、そんな想い。

けれど、それが何より強い原動力となり、魔術師が魔法使いになった時、彼女は自分の願いを叶えるための行動を起こした。いつものように周囲のものを巻き込みながら。そして巻き込まれたものたちも魔女の願いを肯定した。

それが全てのことの始まり。

これこそが本当の始まり。

その左手に握り締めた、力なき、唯一の触媒たる紅き宝石がきらり、と光った。

NEXT?



第五次聖杯戦争編 00・と或る世界の魔法使いの話（後書き）

この話読んだら流石にわかるでしょうが、実はエミヤさんが座に戻らないままに連続召喚されたのは偶然でもなんでもなかったという。まあ、この辺はプロローグでもわりと関連あるネタだとは思いますが。しかしあれだ・・・今更ながらこの話のタイトルのコメディ臭さと内容のギャップも大変なことになってきている気がします。が、これ以外にじっくりくるタイトルが思いつかなかったので、なんでこのタイトルで寧ろシリアスメインなんだとかの文句は・・・あー、あー、聞かない。

というわけで、次回から本格始動します。つつても、凜が召喚する日時からスタートの上に、第四次編よりじっくり書くつもりなので、まだ日常といえは日常編だよ。

第五次聖杯戦争編 01・ロード・エルメロイ二世（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

今回の話は久しぶりに登場のウェイバーが主役回なのであった。

ぶっちゃけ、ロード・エルメロイ二世としてのウェイバーの口調がわからないんで、ロード・エルメロイ二世としての口調は時計台の生徒相手の場合のみ・・・でよくね？と結論して書いたので、その辺ご了承ください。

あと、久しぶりにおまけ四コマを復活させた。だって描きたかった。

・・・げんげん、さーせん。

第五次聖杯戦争編 01・ロード・エルメロイ二世

アイツに笑われないほど、強くなるってそう決めていた。

ボクを朋友ともだと呼んだ男に恥じないように、立派になるって。

それは結局未だ叶っていないけど。

弟子ばかり偉くなって、ボクはまだまだ追いついてないけど。

そのくせ、プロフェッサー・カリスマだの、マスター・Vだの、

グレートビッグベン ロンドンスターだのありがたくもなんともない通り名ばっか増えているのにムカついたりするけど。

それでも、いつか、あの王の背中に並んで見劣りしないようにと、そう思って生きてきた。

『ロード・エルメロイ二世』

side・ウェイバー

夢を見たんだ。この世の果てまで征服する。言葉にするとなんて馬鹿馬鹿しい夢。でも、あの男とならそんな夢も見れると思った。気さくで偉大で雄大な王との、たった二週間の夢。

それが今も胸に残っている。今もあの別れと、あの最後の夜に共に肩を並べて眺めた冬木の街並み、あれだけは今も鮮明だ。

最近、ずっと苛々していたのに、なのに今日は悪くない目覚めだった。ボクにしては大きな研究がひと段落して、久しぶりにゆつくり出来るからだろうか。あんな夢を見たのは、昔を思い出して目が覚めた。

ふ、と壁にかかったカレンダーへと目をやる。

1月27日、今日の日付を見て気がついた。

「10年・・・か」

そう、あれからもう10年が経ったんだ。

そんな感傷を頭を左右に振って追い出した。

10年経った、だからなんだというんだ。

ボクはまだアイツに並べるほどになっていない。それが全部だ。

そんな感傷に浸る暇があれば、少しでも魔術師としてのランクを上げるように尽力するべきだ。

朝の気持ちいい感情も吹っ飛び、弟子達を思い出して思わずむすっと眉間に皺を寄せる。それから、朝食用に食パンをセットして、暫く見ていなかった郵便受けに手を伸ばした。

ばさりと、小山になった手紙が落ちる。

「ん？」

その一番上の、シンプルながら妙に目を惹く珍しい紙質の便箋を手取る。差出人は・・・。

「グレン・マッケンジー・・・だって？」

そんな馬鹿な、と思わず目を見開く。

それは10年前に魔術を使って、第四次聖杯戦争の間自分が宿を借りた一般人の老夫婦の名前だ。

終わって暫くは、グレン老の願い通り、孫のフリを続けてあそこにいたし、数年間はちよくちよくと顔をあわせて、フリを続けたとはいえ、今は綺麗に関係を断ち切っており、あの夫婦がボクの今の住所を知っているわけがない。

いや、見れば筆跡はグレン老に確かに似せてはいるが、これは別人の字だ。となると、この差出人である人物は、わざわざグレン老

の名を借りて、ボクに連絡を取ろうとした。グレン老のことをしていることといい、わざわざその名を借りてボクに連絡をとろうとしたことといい、そこから読み取れる答えは。

「第四次聖杯戦争の関係者がボクに用があるってことか」  
そうとしか思えない。

アレに關係して生きているものなど一握りのはずだが・・・さて、鬼が出るか蛇が出るか。

ボクはびりつと音を立てて、その封を破いた。

side・衛宮切嗣

古きよき、極道の親分を前にして、すつと背筋を伸ばす。

僕は近頃はずっと着流しばかりを身に纏っていたけど、今の格好はくたびれた黒いコートに、黒ぞろえのスーツだ。そう、僕にとつての戦闘服の前に、この目の前の人・・・藤村組トップ、藤村雷河は、さも涼しげな顔に、微量な凄みを乗せる。

「世間話に來たわけじゃあ、なさそうだな」

言う声は、カラカラと軽快だが、軽薄ではない。

「ええ、人払いをお願いしますか？」

「つーわけだ。お前等、下がれ」

その鶴の一声で、ざつと、周囲にいた屈強な男たちが波を引くように姿を消す。

それを確認してから、僕は殊更ゆつくりと言葉を押し出した。

「もうすぐ、裏で大きな事件があります」

雷河さんはじつと、僕の声に耳を傾ける。白く鋭い眼光は僕を射抜くかのように、心まで見透かそうとする。

「だけど、それに関わらないで下さい。そう、お願いに來ました」

「見過ごせつてえのか？」

ぎらりと、凄みを帯びて目が細められる。

「藤村組には迷惑をかけません。これは僕達の問題ですから」

「はあ、と極道の古きよき親分をため息をつく。」

「何をしようとしているのかはしらねえが、こっちに飛び火するようじゃあ、テメエ相手でも容赦はしねえぞ」

「ええ。つきましては、暫く大河ちゃんが家に来ないようにしていただけたら、と、まあ、本題はこちらです」

そういうと、ふ、と雷河さんは眉間の皺を緩め、囁くような声音で、「切嗣よ、オメエ・・・」続きの言葉は声になつていなかった。だけど、はっきりとその口は『やっぱり長くないのか』と告げている。

「これが、最後の顔合わせになるかもしれません」

淡々とそう告げる。

雷河さんは再び、はあと息を吐き出して、それからくしゃりと髪をかき上げ、細めた目でどうか遠くを見るように僕を見た。

「僕が消えたら、後の事はよろしく願います」

「うちは便利屋じゃあねえんだがな。ちつ、わかったよ。心配しねえでも、ちゃんと俺が面倒見てやらあ。イリヤも士郎も今じゃあ俺の孫みてえなもんだからな」

「ありがとうございます」

そうして頭を下げて、その屋敷を出た。

これが最後かもしれないと思っても、振り向くことだけはなかった。



いつも通り適当なTシャツに袖を通し、暖かそうだったからとこれまた適当に買った茶色いコートを羽織り、やっぱり適当に選んだマフラーを首に巻いてから、10年前にくらべ、随分長く伸びた髪の毛を適当にゴムで一つに縛ってから、家を出る。

それから、待ち合わせ場所の何の変哲もないカフェにつくと、適当にコーヒーを注文して、窓際の席に座った。

時刻は待ち合わせ時間より20分ほど早い。

全く、ボクはどうかしているんじゃないか。

相手は、関わらないほうがいい相手だ。それがわかって、来るだけならまだしも、こんなに早く向かうなんて、まるで遠足を控えた子供のようじゃないか。

むすりと、そんな自分の機微に不機嫌な気持ちになりながら、自棄食いをしたくなって、フィッシュアンドチップスも注文する。

このコーヒーはまずい。こんな気持ちで飲んでいるからかもしれないが、まずい。

ウェイターはボクにあまり関わりたくないような顔をして、さっさと注文の料理を置いて去った。

そして、約束の時間きっかりに、件の人物は現れた。

「久しぶりだな。それと、待たせてすまない」

それは10年前と全く同じ声音だった。その声をきっかけにはつきりと記憶がよみがえる。だからこそ、僅か目を見開いて僕は固まった。

それは女だった。

身長は170cm半ばに届こうかという背の高い女で、声は、声変わりが終わったか終わってないかくらいの少年の声をどことなく連想させるようなハスキーボイスだ。目を覆っているサングラスの下にはきつと、10年前のような鋼色の目が隠されているのだろう。そう、呼び出した相手は、とつくにいなくなっていると思っていた相手だ。

10年前、ボクが日本で参加した聖杯戦争にアーチャーのクラス

としてよばれたサーヴァント、それが女の正体だ。

「しかし、驚いたな」

「思わずぼうとした僕の耳には、女の声が右から左へと流れて聞こえた。」

「立派になったものだ」

「感心したような響きに、む、と眉根を寄せ、我に返る。」

「確か今はロード・エルメロイ二世とよばれているのだったか？」

「ボクを縛る為の名だよ。ボク自身は大したことはしていない」

そう告げると、目の前の女は、サングラスを外して、ボクの前の席に腰をかけながら、どこことなく皮肉そうな笑みを口元に浮かべて言葉を続けた。

「いやいや、君の噂は遠く日本まで聞こえている。プロフェッサー・カリスマに、マスター・Vだったか？あと、女生徒が選ぶ時計塔で一番抱かれない男とも聞いたぞ。大人気じゃないか？」

「はっ、それはボク自身の力じゃない。弟子ばかり偉くなって讃えられても、嬉しくなんてないね。女生徒にだって興味はない」

「思わずむすくれたまま、注文したフィッシュアンドチップスを口内にかっこむ。其れを見て、アーチャーは困った子供を見るような目で一瞬見たかと思うと、目じりを和らげて、諭すような声を出す。それに、一瞬、どきりとする。果たしてコイツは・・・こんな柔らかい表情を誰にでも浮かべるようなやつだったのだろうか？」

「人を指導して伸ばせられるのも充分才能だと思うがね。それに、立派になったというのはそれらの部分だけではない。精悍になったものだ、と感心しただけだが、気に入らなかったか？」

「・・・ッ」

「真っ直ぐボクを見てくる鋼色の目が酷く落ち着かない。」

「そう、この女は酷くボクを落ち着かない気分させる。」

「それよりっ」

「だん、と思わず机を叩いて、じろと、女を見据えた。」

「なんで、オマエいるんだよ。しかも、オマエ今実体だろ、どうい

うことだ！」

思ったより大声になったが、今この一角には人払いと無音の境界を張ってあるからまず問題はないだろう。そう思って怒鳴ってから思わずほっとした。

「まあ、色々あってな」

そう言っつて、首をすくめる動作が妙に色っぽくて、うっと思わず内心唸った。自分の仕草がどう見られているのかとか自覚はないのか、全く気にしていない様子が恨めしい。

「ああ・・・そう。で、その髪、どうしたんだ？英霊は姿かたちがかわつたりしないはずだろ」

その指摘に、アーチャーはむと、眉を顰めて、子供のようなふてくされ面になる。

そう、一番落ち着かなくさせる原因、それは英霊であるからこそ何もかわるはずがなかったのに存在する、明らかな10年前との差異だった。

10年前、何故か執事服に身を包んでボクたちの前に現れたこの女が、今身を包んでいるのは、何の変哲もない黒いカッターシャツに黒のスラックス、デザインからしてどこことなく男物っぽい赤いジャケットといった、まあ平凡な格好で、でもそんな格好だからこそ、10年前はカッチリした衣装のせいで気付き難かったスタイルのよさが妙に引き出されていた。

また、髪も、10年前はボーイッシュにショートカットされていたのに、今は結えられ、紅い髪飾りで纏め上げられていて、うなじの辺りが妙に色っぽい。それと、顔が変わっていなくても、髪が長いだけでも随分と女らしく感じるわけで、今更ながら、絶世の美姫とはいかないまでも、目の前の相手が結構な美人なことに気付かされた。

そして、気配。圧倒的なサーヴァントとしての気配がなりを潜めて、実体をもっていると思われるこの目の前の女から漂ってくる気配はまるで人間の其れなのだ。10年前あの戦いでこの女と接触して

いるボクならばともかく、普通の魔術師なら、この女が英霊の一角であることに気付かないかもしれない、それほど見事に女の気配は巧妙に偽装されていた。

だから・・・落ち着かない。まるで、こうしていると、ただの女といるかのような錯覚をしそうになる。

女は首をすくめて、ぼつりとした声音を出す。

「まあ、気にしないでくれ。私もあまり思い出したくないことでないの言葉が、先ほど聞いた英霊は姿かたちがかわらないはずじゃないのかというボクの指摘への答えだということに、遅れて気付いた。」

「まあ、いいけど」

むすくれた顔でそう、なんとなく告げる。本当は良くなんてなくて、どうしてそうなったのか追求するのがあるべき魔術師の姿だろうとは思っただけだけど、それを無理に聞くのは野暮な気がした。

「・・・長い、似合っているし」

ぼそりと、小声で気付いたらそんな言葉をつけたしていた。

其れを見て、アーチャーは不思議そうに首を一つ傾げると「邪魔だから纏めただけなんだがな・・・」なんて夢も希望もない言葉を言い放つ。ああ、そうだった。なんか褒められることに関して妙に鈍感だったな、コイツ。

その後、暫し他愛のない話をぼつぼつと5分ほど続けた。

「・・・それで、本題は？」

どうも不味いコーヒーを啜りながら、じつと目の前の白髪の女を見据えそう聞く。アーチャーは其れを見て、遠まわしに言っても仕方ないだろうと思ったのか、すつと鋼色の瞳でボクを見据え、実直な言葉を押し出す。

「冬木で聖杯戦争が始まる」

その言葉に思わず息を呑んだ。

「ついでには、君に頼みごとがある」

「ちょっとまってよ・・・聖杯戦争だつて？まだ、あれから10年しか経っていないのにか？」

確か聖杯戦争の周期は60年ごとだったはずだ。それが10年？  
「ああ・・・君は知らなかったのか？いや、関係者だからこそ君に連絡をいかなないように細工がされていたと見るべきなのか・・・」

ふむ、と考え込むようにアーチャーは顎に手をあて、淡々と言葉を紡いでいく。

「前回の戦いが中途半端に終わったからな。その反動のようなものと思ってくれればいい」

「中途半端つて・・・もしかして、オマエが此処にいるのも、その関係なのか？」

「まあ、そのようなものだ。理解が早くて助かる」

いいながら、女はいつの間にも注文していた紅茶に口をつける。その仕草は優雅で妙に似合っているのだが・・・それに口をつけた途端、不満そうに眉に皺を一本寄せて、むっと唸った。其れを見て、そういえばこの女が入れられる紅茶は吃驚するくらい美味かったなと思いが出た。ここのカフェで出されるものと比べると、まあそもそもが間違いだ。

ふと、この女が今言った言葉を脳内で反復した。

「・・・なあ、オマエ、ボクに頼みごとがあるって言ったな」

「言ったが、それがどうかしたのかね？」

不思議そうな目で女はゆるやかにボクを見る。

「それつてこのボクをわざわざ頼つてここまで来たつてことか？」

それが、とてつもなく意外だった。

聖杯戦争中は敵同士だったし、そのわりに援護してくれたり、心配してくれたりしてたわけだけど、それつて裏を返せばボクは敵にも値しないと見られていたとも言えるし、頼りにならないように見られていたとも解釈できた。

そも、こいつは今こそこんな人間にしか見えない気配と姿をとっているけど、仮にもサーヴァントでありすなわち英雄と呼ばれた存

在なわけで、ボクは未だに魔術師としては四階級どまりでしかなくて、ライダーのやつに肩を並べて恥ずかしくないようになってやると誓っていても、いまだその目標に片手すら届いていない状態なわけで、なのに、この女は、ボクに頼みがあるだつて？信じられない。それが顔に出ていたのだろう、アーチャーはそんなボクの機微を讀んで困ったような顔を少し浮かべると、それでも構わず真摯な声音で言葉を続ける。

「そうだ。ロード・エルメロイ二世に頼みがある」

その真剣で静かな顔に、一瞬即座に言ってみるといいそうになり、その言葉を飲み込んだ。かわりに、ぐつと息を呑んで、それから重く吐き出し、自分の思考を纏める。

「・・・あのな、ボクは魔術師だ」

「承知している」

くしゃりと、自分の髪を弄びながら、生徒に言い聞かせるような声音で、だけど生徒には聞かせることのない素の口調のまま言葉を続ける。

「そのボクに頼み事をするんだ。受けるか受けないかは聞いた後で決めるとして・・・魔術師は等価交換が原則だ。アンタは、ボクに何をくれるつもりなんだ？」

自分でもちよつと意地が悪かったか、と思わなくもなかったが、これはボクが魔術師として最低限譲らずに口にせねばならない内容だ。そう、魔術師は等価交換が原則。頼みごとがあるというのなら、対価を貰うのは当然のこと。ただ働きなんてものはありえない。

「そうだな」

女は淡々と、少しだけ考えるような仕草をして、腕を組み・・・そうやって腕を組むとただでさえ豊かな胸が強調されることに気付いていないのか、コイツ・・・そして、真顔で「望みのままに。私に可能なことであればなんでもしよう。それでは、いけないかね？」そう答えた。

・・・コイツ、自分がどれだけ危ないことを言っているのか自覚

があるのか。いや、見る限りなさそうだけど。

よりによつて魔術師を相手に「なんでも」だって？ 生きたサンプルとしてこれ幸いと研究にまわされたらどうする気なんだ。

いや、魔術師相手じゃなくて一般人の男相手でもまずいだろう。

これまでの反応から男慣れしていなさそうなのに、そんなことを言つて、「じゃあ、抱かせろ」とか身体を差し出すことを迫られたらどうする気なんだ。いや、ボクはそんなことはしないけど。それに、流石にそんなことを言われたら、このどこか変なところで鈍い女も頼みごとを取りやめて去るだけか。いや、でもここまでできて頼むことなんだ、どうしても必要な頼みごとだったりしたときはあるいは・・・つて、だあ、もう、ボクは何を考えてんだッ。

ブンブンと頭を左右にふつて、余計な考えを追い出した。なんかオカシな妄想が湧き出そうな気がしたのはきつと気のせいだ。

「む、どうかしたのか？」

アーチャーは不思議そうな顔をして相変わらずボクの様子を観察している。きよとんとした顔はどことなくあどけなくて、無垢な子供を連想させる。ボクが彼女の言葉のせいで思い浮かんだ諸々の事象を夢にも思っていないなさそうな顔に、思わずむすりと不機嫌な気持ちになる。

「なんでもない」

無自覚つていうのは一番性質が悪い。ふとした仕草とか表情とかが妙に色っぽいくせに、自覚がないとか、一種男に対して無防備だったりするのは、見ていて心臓に悪い。なんだよ、そのガキみたいな顔。これがボクじゃなかったら、相対する男に妙な期待を抱かせただけなんじゃないのか？ 10年前に比べて、雰囲気とか表情とかが柔らかくなっているから余計だ。確か昔はもっと皮肉そうな顔が多かった。

「それで、頼みごとはなんだつて？ 受けるかどうかは聞いた後で決めるけど、とりあえず言ってみる。・・・断つたとしても口外はしないから安心しろよ」

頬杖をつきながら、最後に皿に残ったフィッシュアンドチップスを口に放り込む。それから、じつと目の前の女の出方を眺めた。それに、女は昔みたいないな皮肉そうない笑みを僅かに口元に浮かべて、でも声音だけは真面目に言葉を押し出した。

「君に協会への防波堤になってもらいたい」

「は？」

何言っただ、こいつ。と、思わず目を瞬かせると、女は簡潔すぎたか、とぼつりともらして、それから、淡々と言葉を紡いでいく。「聖杯戦争が起きるといったな」

「ああ、それは聞いた」

頷き、肯定の意を出しながら、女の意を探るようにじつとその鋼色の目を覗き込んだ。

「私は・・・いや、私たちは聖杯を破壊しようと思っている」

「・・・何？」

聖杯を破壊するだつて？誰も欲しがる無色の願望機を？信じられないことを言う。そも、サーヴァントだつて聖杯欲しさに現界に応えるんじゃないかったのか？ライダーだつて、受肉という願いをもつて召喚に応じたし・・・と、そこまで考えて思い出した。そもそも、そういえばこの女は聖杯に願うことなどなかったとそう言っていたような記憶が遠くある。でも、だからといって破壊しようなんて結論になるものなのか？

そんなボクの疑問はわかっているのだろう、アーチャーは苦笑しながら言葉を続ける。

「ああ、やはりそういう反応を返すか。そうだな、君の疑問はもつともだろうよ。だが、君はもう参加者ではない。私が何故破壊しようとしているのかという動機など、君には関わりのない話だ。そうは思わないか？ここで重要なのは私たちの目的が聖杯の破壊ということだけなのだからな」

口元が皮肉につりあがって、女は目を細めてボクを見た。その浮かんだ表情にちょっとむっとしたが、自分より才能があるくせにマ



スターマスターと煩い弟子共に比べたらそれでもマシだと思って、苛立ちを押さえ込む。

「・・・いいさ、続けるよ」

「ふむ。まあ、君自身何故破壊するのかという顔で見てきたからな、わざわざ言葉にしなくても承知だろうが、私たちの目的が聖杯の破壊である以上、他の参加者にとつて私たちがどれほど目障りな存在になりえるのかは想像に難くはないだろう？・・・まあ、極力知られないようにするつもりではあるのだがね。だが、そうも言ってもらえない相手もいてな。それで、もしかしたら或いは、此度の聖杯戦争は例にない派手なものとなりえるのかもしれない。そうなれば、いくら協会の目が薄い極東の地といえど、協会に目をつけられかねない。だから、そのときには冬木のセカンドオーナーへと被害が広まらないように、高名なロード・エルメロイ二世の力をお借りしたい」  
淡々とした口調で女はそう一息で言った。その言葉を聞いて、ふとした疑問が頭を掠める。

「冬木のセカンドオーナー・・・今代の遠坂の当主と知り合いなのか？」

それにアーチャーは「そうだな・・・ああ、よく知っている」と狂おしいほどの親愛の籠った声音で噛み締めるように静かに口にした。

「つまり、アンタが頼りたいのは、聖杯戦争後の協会へのフォロート、その遠坂の当主への風当たりを弱めるための防波堤になっれてくれることなのか？」

「そうなる」

さらりと口にするが、なんでもするとまで言ってまで頼ってきた内容だというのに、あくまで他人のための願いで、自分がそこに入っていないことに気付いて啞然とした。

もう十年ほど前のことだけれど、ライダーが評した「無欲でお人よしの小娘」といった言葉の意味に漸く納得した。いや、ここまでくればいっそ馬鹿だろう。

だが、別の疑問も頭に浮かぶ。遠坂は聖杯戦争の御三家が一角だ。聖杯戦争が始まるというのなら、御三家であるその当主も当然参加するはず。聖杯戦争を生き延びるということがいかに難しいものなのかはこの身でもってよく知っている。

「その遠坂当主が、聖杯戦争で命を落とすとかは思わないのか」

「アレなら、大丈夫だろう」

どことなく、確信の響きでもって、女はぼつりぼつりという。

「アレは鮮やかで強烈だ。アレはきつと、どういう状況であれど生き延びるだろうよ。そういう存在だ」

・・・英霊にそこまで言われるつても、また凄いなと思う。

でもしかし、どちらも聖杯戦争に関わるのなら、その遠坂の当主だって敵方にまわることになるだろうに、わざわざ敵の行く末を気にかけて頼みごとをしにくるとは、本当にこの女は意味がわからない。

だが、要するに頼みたい内容ははっきりした。ボクが望んだ形ではないとはいえど、時計台でボクは一角の地位を築いている。その人脈を頼っているってわけだ。魔術師として頼られた・・・ってわけじゃないことが多少面白くないが、意外にコイツに頼られるのは悪い気がしていない自分にも気付く。

「・・・やはり、私は都合のいいことを言っているか？」

ボクの沈黙を別解釈したらしい目の前の女は、そんな言葉を言って、神妙な顔をしてボクをじっとみた。そういう表情をすると妙に儚げに見えるのが心臓に悪い。

「いいぜ」

だからコーヒを喉にかっこむように自分の心情を誤魔化しながら、即決した。

「その願い、聞いてやるよ」

見れば、ぽかんとアーチャーはボクを見ている。それにちよつとむっとする。

「もう少し、長引くと思ったのだが・・・」

「長引かせて欲しかったのか？それとも、ボクに本当は断ってほしかったのかよ？」

むすつとした顔で、じろりと見ながらそう棘の含んだ声で言うところ、アーチャーは肩を竦め、それからぼつぼつとした声で抑揚なく言った。

「いや、そんなことはない。引き受けてくれるというのなら、感謝する。だが……」

ふ、と女は目蓋を閉じる。それにもない、白い睫毛が揺れた。その表情と雰囲気は妙に落ち着かない気分になる。

「……今だからこそ白状出来るがね、ライダーを死地に追いやったのは私だ」

「は？」

何言つてんだこいつ、と思わずじろじろと眺めた。

「10年前のあの時、私ではバーサーカーへの対抗が難しいと判断した私は、最後に君たちにあつた時、これ幸いとライダーの性格を踏まえ、最後バーサーカーにぶつかるとように誘導したんだ。私は、君のサーヴァントを利用したのだよ」

そう、皮肉そうな……でもどこことなく自虐的な笑みを湛えて女は言った。

「はあ、とため息一つ。それから、とう、と掛け声を上げてボクは、女の額へとデコピンを一つ放っていた。」

「あのな、オマエな」

全く、今ならあの時のライダーの気持ちがよくわかる。

「舐めるなよ。アイツと戦うことを選んだのはライダー自身だし、それによって消えたのもライダーとボクに責がある。当時敵だったオマエが、勝手に他人を背負うんじゃない」

確かにこいつは、無欲な大馬鹿野郎だ。自分を悪役とすることに躊躇というものが無い。負わなくてもいい責任まで負おうとする。

ふと、そこまで思っていることを思い出した。10年前最後にあつた時……確かこの女は。

「・・・なあ、オマエ、あいつどうなったんだ？その、あんたのマスターの、アインツベルンの女」

「・・・アイリは死んだ」

「そうか・・・」

そうだろうと、思っていた。聖杯戦争の関係者なんて碌でもない末路ばかりなんだろう。

その聖杯戦争にこれから関わりうとしている敵マスター候補のためだけにボクを頼ってここまで来た、この大馬鹿相手に、付き合っ  
てやろうというそんな気持ちがあわくボクもきつと馬鹿なんだろう。

それとも、見捨てられないのは、同じ記憶を共有している相手だからなんだろうか。

「なあ・・・アンタ、いつまでロンドンにいるんだ？」

「今晚の便で帰るが・・・それがどうかしたか？」

女は淡々という、それにボクは「じゃあ、等価交換」そうなんでもないような顔をして言う。

「アンタは、こっちにいるギリギリの時間まで、ボクの身の回りの世話をしろ。オマエ、料理得意だったはずだろ。最近碌なものを食ってないんだ。アンタの手料理がいい。食わせろ」

それがアンタからの頼みごとを引き受ける対価だ、とそう口にするでなく告げると、目の前の女はパチパチと目を瞬かせて、「別に構わないが・・・そんなことでもいいのか？」とそんな問いを口にす  
る。

「じゃあ、もう一つ」

そう告げると、女はきりっと姿勢を正して、真っ直ぐな瞳をボク  
に向ける。

「名前、教える。ボクはもう聖杯戦争の関係者じゃない。教えても問題は  
ないはずだろ」

そうだ、アーチャーとそのまま呼んでいるが、それはクラス名であ  
って、こいつの名前じゃない。ボクの事は名前を知られていると  
いうのに、ボクがこいつの名前を知らないというのは中々面白いな

かった。それをよんだのだろう、アーチャーは僅か眉を顰めて考え込む素振りを見せると、それからぼつり、と「・・・エミヤだ」とそう答えた。

「・・・は？」

「イミヤ？と思わず聞き返す。そんな名前の英雄は聞いたことがない。

「だから、エミヤだ。これ以上は充分だろう」

・・・エミヤなあ。本人がそういう以上それが確かに名前なのだろう。英雄の名とは、世間に知られる真名の他に本名をもつものもある。たとえば、英霊としての真名がクー・フリーンであるかのアイルランドの大英雄の本名はセタンタであるように。だから、もしかしたらこいつもその手のものなのかもしれないと思って、追求はやめた。

・・・ただ、どこかで聞いたような名前のような気はする。

「まあ、いい。これ以上こんな店にいても仕方ないだろ。ほら、エミヤ行くぞ」

そういつて、今まで覆っていた認識障害と無音の結界を解除して立ち上がったときだった。

「あれえ？<sup>マスター</sup>導師だ」

そんな、能天気な女生徒の声が聞こえたのは。

嫌な顔を隠さずに聞こえた声の方向を見やる。そこには思ったとおり、何故かボクに懐いている時計台の生徒の顔が一つ。

「何々？<sup>マスター</sup>導師がこんなところにいるなんて珍しいじゃないですか」

「ふん、野暮用があっただけだ」

口調を時計台での講師としてのものに切り替え、しっしと追い払うように手をふるが、女生徒は気にせず近寄ってくる。迷惑そうな顔は全く隠していないというのに、全く気にしていない厚顔無恥っぷりが腹立たしい。

「あれ？」

ひよこ、と女生徒はアーチャー・・・エミヤに気付いてばちばち

と瞬きをした。彼女は他人事のようにこの騒動を見守っている。それに、ちよつとだけむかついた。

「えー・・・もしかして、<sup>マスター</sup>導師彼女さんですか？」

そこには年相応の好奇心があつて、めんどくさくなつたボクは、先ほどのアーチャーへと態度への意趣返しも含めて「そうだ」となんでもないような声でいった。それに、慌てた顔を初めて見せたエミヤを前に、ちよつとだけ気分が浮上した。

「あー、あたしたちの<sup>マスター</sup>導師に彼女がいたなんて、聞いてないわよ」

まあ、実際は彼女じゃないからな。

「<sup>マスター</sup>導師の面食い」

「なんとでもいえ。エミヤ、行くぞ」

そういつて、その褐色の腕をとつて歩き出すと、彼女は困つたような顔をして、女生徒とボクを交互に見ると、自分が女生徒避けの盾に使われただけなんだろうと判断したのか一つ頷いてあとに大人しくついてくる。

「あ、ちよつと、まって。ねえ、貴女本当に<sup>マスター</sup>導師の彼女なの!？」

そう、慌てて追いかけてきた女生徒。

「私は・・・」

何かを言い募ろうとするアーチャーを前にして、ボクはその頬に口付けを落とした。

ほかん、とアーチャーと女生徒、どちらもが目を見開く。

「こつうことだ。ではな。これにこりたら、私を追いかけるのはやめるのだな」

そういつて、アーチャーの手を引いて金をカウンターに叩きつけ出て行つた。

なにやらアーチャーが小声で文句を言っているが、ふん、男相手に警戒をしないほうが悪いんだ。これまでヤキモキさせられてきた意趣返しは、これくらいしないと割に合わない。頬が熱い気がするのは気のせいだ。ぶるりと一瞬肩を震わせてから、マフラーを引き

上げ、頬を隠した。吐く息が白かった。

side・言峰綺礼

かつかつと、地下を降りる階段で靴の音が大きく響く。

地下は薄暗く、私にとって心地よい空気でもって、私を迎え入れる。

「ここにいるのは、10年前の大災害で生き延びた孤児達「だった」ものたちだ。

苦悶の声をあげて、人とも思えぬ姿でそれでも生きています。

『殺シテ』

『助ケテ』

『痛い』

そんな声が、とても耳に心地がいい。

人外魔境。これを見たものはそう称するだろう。その奥で眠るは金の王。

「・・・まだ、目覚めぬか」

人とも思えぬ伶俐な美貌の黄金の王。

王への生贄としては、この孤児達は安物にすぎたか。

だが、時がくればこれは目覚め、動き出すだろう。それは確信。

それまで、駒がないとなると・・・手持ち無沙汰になる。

「駒を調達するとするか」

幸いあてはある。今日にでも手に入れてくるとしよう。

くつと、口の端を吊り上げて笑った。

ああ、まっていた。このときをくるのを私はまっていたのだ。10年間。

とつとつ、あれが始まる。そう。

「10年ぶりの・・・聖杯戦争の始まりだ」

望みなどない。ただ、アレが生まれるのを祝福しただけだ。そのためだけに生き繋いできた10年。

ふと、10年前敵対し、アレに蝕まれている男の顔を思い出した。この手でひねり潰した瞬間、私は少しは快楽を味わえるだろうか？そんなことを思っただけながら地下を去った。

全ては、己が快楽の為に。

NEXT?

おまけ、「異性と認識出来ないだけ」

> i 2 9 5 6 2 | 3 0 3 2 <



第五次聖杯戦争編 01・ロード・エルメロイ二世（後書き）

というわけで、第一話でした。

次回は1月31日朝に続きます。

どうでもいいけど、ウェイバーの容姿変わりすぎでつ。

エミヤさん視点がないと、完全にエミヤさんの立ち位置がヒロインな畏なのは気にしない。しょうがない。男だと自覚しているのは本人のみで、周囲からみたら女で、元男なんて夢にも思われてないのだから。

ウェイバーフラグは、Q&A教室の時には既に築かれていたから、今回のこれは唐突ではないよ、とか言ってみる。

・・・唇にしていたら、流石にエミヤさんキレてたのではないかなと思う。（ぼそ）

第五次聖杯戦争編 02・1月31日・接触（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

今回描いた集合絵ですが、桜が一番上手く描けた気がするんだぞ。

レイリスフィールの触覚（触覚言うな）は描くの難しいのである。

エミヤさんが手にしているのは、ワルサーPPKだ。一度もたせたかったのだ。

今回はオリキャラマスターも登場の回つうわけで、話が本格的に進みだしたなあと個人的には思いました。はい。ついでに、今回の話やたらと難産だったんだぜ。

> i 2 9 8 9 9 — 3 0 3 2 <

・・・俺は多分きつと、アンタが何者でも構わなかったんだよ。

聞こえる声はまるで霞だ。

耳に聞こえる声は既にどちらのものかもわからない。

そして・・・どうしてかな？ たった二週間前がまるで遙か遠くだ。いつの間にか、こんなに遠くに来た。

振り返ることは出来ない。

すぐ後ろには慣れ親しんだはずの気配が、人とも思えぬ質量をもつて其処に在る。

それで、このヒトがナニであるかなんてわかってしまった。

このヒトの感情も今の気持ちも全部わかってしまった。

でも・・・アンタ、本当に馬鹿だな。

うん、馬鹿だよ。

間違はなく大馬鹿だ。

俺は諦めが悪いんだって、そんなこと本当はわかっていた筈なんだろ。

俺のこと、アンタが一番わかっていたはずなのにな。

そして、そんな時でもないのに、二週間前のことが頭を過ぎった。気付くのが遅れたけど、あれが始まりだったんだ。

『なあ、士郎』

ああ、これは夢だ。

『オマエはどんな道を進む。オマエにとっての正義の味方とは、なんだ？』

とても懐かしい夢だった。

それは何をきっかけに始まったのだろうか。今から9年前の冬の日。その日、色んな質問をシロねえにされたことを覚えている。幼い俺は何かをムキになって答えたような気はするけど、詳細はどうにも覚えていない。ただ、それをきっかけにシロねえは俺に魔術を教えるようになったのは確かだ。

見たことのない綺麗な黄金の鞘が吸い込まれるように俺の身体に同化して、それからシロねえはむき出しの俺の背中に触れて、スイツチを入れた。

『意識をしっかりとって。自我を決して手放すなよ』

そう告げられて始まったそれは、幼い俺にとってまさしく地獄のような痛みで、それでもシロねえの言葉通り自分を手放さないように必死に歯を食いしばって耐えた。指一本動かせず、朦朧としながら耐え続けたその最中に聞かれた問い。

『オマエはどんな道を進む。オマエにとっての正義の味方とは、なんだ？』

それになんて答えたのかはもう覚えていない。

ただ、シロねえが満足そうな顔をしていたのは覚えている。

人にはそれぞれ起源がある。なら、もしかしたら俺にとっての起源とは、その時決定されたのかもしれないと、そんな風に思ってい

た。

朝の五時半、いつも通りの時間に目が覚める。

いつも通りの日課をこなして、それから台所にむかって、ああ、と気付いた。

「そっか。そつえば、そつだった」

とんとん、と野菜を切る音。それを聞いて、安心して俺はその音の主に話しかける。

「おはよう、シロねえ」

「ああ、おはよう」

そつ告げる顔は、いつも通りのシロねえのようできて、どこことなく疲れていそうな顔に見えて「今日も別に寝ててよかったのに」と苦笑しながら言うと、シロねえはむつと子供が膨れるような顔を作つて、「オマエにそんな心配をされるようなら、私ももう仕舞いな」と拗ねたような声で言う。相変わらずシロねえは今日も素直じゃないな、と思うけど、慣れたもので、はいはいと受け流しながらシロねえと色違いの揃いの青いエプロンを手早く身に着けた。

シロねえが、突如イギリスへ行くと言い出したのは今から一週間ほど前のことだ。

あまりに急なことで俺は吃驚したけど、切嗣は知っていたらしく、苦笑しながらもそれを受け止めていて、イリヤは仕方ないなあという、どこか複雑そうな顔をしてシロねえを見ていた。

それで、あれよあれよという間にシロねえは旅立ち、一昨日の夜に帰ってきた。次の日は流石のシロねえも疲れたのか、昼過ぎまで寝ていたらしい。

シロねえがいない間の家事労働と昨日の朝食は俺が担当したわけだけど、こうして丸々任されてみて初めてシロねえがどれだけ凄いかがよくわかった。土日に家事労働派遣会社でバイトしているから、そこまで苦じゃなかったのが不幸中の幸いかもしれない。

しかし、今回の旅行は本当に吃驚した。思えば、シロねえだけで

どこかへ行ったのは今回が初めてかもしれない。

「士郎」

ふと、神妙な声で自分の名前をよばれて、朝食用のジャガイモをむいていた手を置いてシロねえを見上げる。

「何？」

「暫く、バイトのほうは休め。既にそう連絡した」

「・・・は？」

何をいきなり。思わず吃驚して固まった俺に対して、シロねえはなんでもないかのように淡々とした声で「いいな」とそんな念を押してくる。

「ちよつとまつてくれよ、なんでいきなり」

大体、本人のあずかり知らぬところでそんな勝手な。

シロねえは淡白な色の瞳でじいっと俺の目を真っ直ぐに見ている。鋼色の目に射抜かれたような気がして、どきりとした。そう、まるでシロねえが知らない人になったかのように・・・いや、この目は何度も見てきている。敵を射抜く鷹の目。これは、シロねえの魔術師としての貌だ。

緊張に思わずぐくりとつばを飲む込みそうになって・・・「おはよー！」とそんな元気なイリヤの声にそんな空気はかき消された。

「ああ、イリヤ、おはよう」

イリヤに挨拶だけ告げると、シロねえは何もなかったかのように再び手元の作業を再開させる。

其れを見て、問いたいことはあつたけれど、それを押し込めて俺もまた調理に戻った。

問いたいこと・・・例えば、二日に一度の頻度できていた虎が三日以上家に顔を出していない理由や、今回の突然の旅行や、最近爺さんが家を空ける回数が増えたことなど、色々ある。

たとえ俺が未だ魔術師として未熟だといつても、なにかが起きている。それがわからないほど未熟であるつもりはない。だけど、切嗣きんすやシロねえ達の態度には、俺にそれを伝えようとして、でも迷っ

ているような色が見えている。なら、それを本人達が言う気になるまで、待とうかとそんな風に思う。だから、自分からは聞かない。きつと、そのときになれば自ら教えてくれるだろうという、そんな確信があったからかもしれない。

朝食を終えて、イリヤと二人で学校に登校する。

シロねえはまだ疲れていそうだったからもう少し色々手伝おうと思っただけど、とうのシロねえ本人に、余計な気をまわすんじゃないと追い出されたから、今日はちょっとだけいつもより早い時間の登校だ。

いつもはもつと明るく元気のいいイリヤも、何故か今日は落ち着いてとくに何を話すでもなく、並んで歩いた。でも、この沈黙は苦ではない。そこには穏やかな暖かさが確かにあった。

「ねえ、士郎」

遠く、校門が見え始めた距離になって、イリヤが口を開く。

「なんだよ、イリヤ」

この一つ年上の義姉の声に混ざった真剣な色に、こちらも神妙な顔になって尋ねる。それに、イリヤは、ふと困ったような顔を一瞬見せたかと思うと、いつもの表情を取り繕って口を開いた。

「あのね、暫くわたし一人で先に帰ることになるわ」

元々三年は今の時期は別に登校しなくても問題はない。だから、別にそれに不満はないけど、ちょっと珍しい気がして、僅かに内心驚いた。

「だけど、わたしがいないからって士郎も遅くなっちゃだめよ。最近は物騒なんだから」

確かに。近頃は昏睡事件などが多発していたりと、冬木の街は物騒だ。だけど、イリヤにそういわれるのはちょっとだけ心外だ。こう見えても俺はそこそ腕に覚えがあるわけだし、イリヤは女の子だし、それに俺だって小さな子供じゃないんだし、イリヤのほうが年上だといっても、たった一つしか違わないわけで、まるで小さな

子供に言い聞かされるように言われるほどの覚えはない。

「大丈夫だって。俺、こう見えても結構・・・」

「士郎」

強いんだから。そんなイリヤが心配することないぞと続けようとした言葉は、イリヤの真剣な声に遮られた。

「お願いだから、お姉ちゃんの言うこと聞いて」

それは本当に俺の身を案じている言葉だとわかったから、俺は上手く言葉を返せないまま、ただ頷いて返事とした。

side・エミヤ

冬木のセンタービルの上に立つ。ざっと、眺める街並み。

「やはり、始まっているか」

サーヴァント全てが召喚されたわけでないが、間違いなく、もう

聖杯戦争は始まっている。

ふう、と思わずため息をこぼす。

これがうっかりスキルのせいなのかは知らないが、困ったことに私は、聖杯戦争が本格的に始まる具体的な日付を覚えていなかった。そのせいか、聖杯戦争に関する知識はどのサーヴァントよりもあるわりに、どうも後手にまわっている気がする。

そんなことを、柳洞寺の方角を見ながら思う。既にあそこはキャスターの根城だ。おそらく、アサシンも門番としていたろうことを考えれば迂闊には近寄れないだろう。

昏睡事件の首謀者はキャスターだ。それでも、あの裏切りの魔女は人の命を軽々しく奪ったりしないだけまだマシというべきか。基本的にあの女はぬるいのだ。暫く泳がせたとしても、人死に出るほどの被害を出すことはないだろうし、なにより、あの女の所業は



若き冬木のセカンドオーナーの逆鱗に触れる類のものだ。ならば、あの女の相手はサーヴァントを召喚したあとの凜に任せればいい。そんなことを思う。

と、踵を返して、深山町のほうへ向かって歩き出す。

のんびり買い物をする暇などこれからは無縁となるだろう。たとえどんな切迫した状況でも兵糧がなければ戦は出来ぬのだ。だから、約一週間分の食材を買い貯めておくか、とそんな理由からである。腹が減っては戦は出来ぬ。これは基本だ。まあ・・・これからの展開次第では一週間も保たぬかもしれんが、こういったことにかかると手間は出来るだけ省くべきだろう。

そんなことを思いながら、kg単位で野菜類や、冷凍保存の利く肉類を大量購入した。流石にそれをもって帰るのは見目が悪いので、宅急便で届けてもらうことにした。

・・・む、貯めていた金が一気に減って、財布が寂しいなどは、断じて思っていないぞ。

side・衛宮士郎

学校について、イリヤとわかれた後、ばったりと弓道部部长の美綴と出くわした。ふうーっと、重いため息なんかを吐いている。

「おはよう、美綴。どうしたんだ？何かあったのか？」

「ああ、衛宮、おはよう。いや、それがさ、慎二の奴が遠坂に振られたらしくてさ、ちょっとね・・・」

「またか」

苦笑。中学時代からの友人である間桐慎二は根は悪い奴ではないのだが、癩癩持ちで機嫌が悪いと周囲に当り散らすところがある。おそらく、今回もそういうことになったのだと思う。

「またかじゃないよ。アンタ、慎二の友達なんだから。ビシツと言っ  
といてくれよ。アイツのお陰でこちらら迷惑してんの」

「わかった。俺からも慎二に注意しとくよ」

そういつて頷くと、美綴はじいーつと俺の顔を見て、不機嫌そう  
な声で言う。

「アンタが、副部長になつてくれたらこんな問題ともおさらばだっ  
たんだけどね」

恨みがましい口調だった。

「うちの部で一番の腕の持ち主はアンタだ。アンタの射を見たがつ  
ている一年生だって多いんだよ。あたしだって・・・なのに、なん  
でアンタはマネージャー気取りなわけ？というか、あたしともう一  
度勝負しろっていうの。勝ち逃げしやがって」

言うなり、じろりと彼女は胡乱気な眼差しを俺に向ける、それに  
思わず苦笑した。

そうだ。美綴は前から俺をライバル視している。そのせいか、今  
のマネージャー染みた俺の立場は不満で気に食わないらしい。どう  
やら美綴は本当は俺に部長、でなくば副部長についてほしかったら  
しいが、どちらか俺は辞退した。練習にマトモに参加していない俺  
がそんな地位につくほうがずっとおかしいだろ。

慎二が副部長であることも、俺を上に乗せたがっている理由の一  
端になっているみたいだが、まあ、前々から慎二と美綴は相性が悪  
いから仕方ないのかもしれない。俺からすればどちらともよき友人と  
も言えるから、正直間に挟まれるのはいただけない。

「遠慮しておく。それより、美綴、そろそろ着替えないとヤバイん  
じゃないか？もう、予鈴がなるぞ」

「あ、いけね」

さばさばした性格の美綴は、これまたあつけらかなとした口調で  
そう言つて、胴着姿で俺に背を向けた。

「じゃあな、衛宮。たまにはちゃんと練習に参加しろよな」

「気が向いたらな」

そういつて、笑顔で手をふってわかれた。

side・エミヤ

自宅に戻り、カタカタとパソコンを操作している衛宮切嗣マスターの元へ向かった。

「『彼女』が冬木に入ったという連絡がきた」

切嗣じいさんは振り向かず、そう簡潔に言う。

「僕から今の現状は伝えているけど、君から何か伝えることはあるかい？」

それに、ふむと暫し物思いにふけると、ああ、とある事を思い出した。

「ならば、私からの依頼を伝えてはもらえないかね？」

・・・これは罪滅ぼしなのか。いや、そんな殊勝な心がけなど遠の昔になくした。

そうだ、私はただ、利用しようとしている。それに痛む心などあるはずがあるうか。

「とある人物の拠点について、調べてもらいたい」

side・衛宮士郎

昼休み、ふらりと席を立つ慎二に向かって声をかける。

「慎二」

「ん？なんだい、衛宮。僕は急がしいんだよ。これから新都のほう

へ食べに行こうと思っっているからね」

なんてことをはははと笑いながら告げる友人。・・・午後の授業  
欠席する気満々だなこいつ、と思わず思った俺は多分悪くない。

「ああ、それとも、お前も来るか？まあ、僕は心が広いからね。お  
前一人くらいなら別に同席してもかまわないけど？」

いつも通りの上から目線で、でもどことなく機嫌がよさそうな感  
じで、慎二はそんなことを言った。

「いい。・・・シロねえの弁当あるし」

と、つい付け足して言うと、慎二は、凄く羨ましいような目線で  
じつと俺の弁当を見て、それから慌て誤魔化すように自分の髪を撫  
で付けた。

「ふん、そうかい。じゃあ、もう、行っていいかな？さっきも言っ  
たが僕も暇じゃないんだよ」

「今朝、美綴から話を聞いた」

そう言うと、慎二はそれまでのわりと良かった機嫌を急速に低下  
させていく。

「あまり、他の人に当り散らすなよ。俺だって、全部は庇ってやれ  
ない」

真つ直ぐに慎二の目を見てそう告げると、慎二は更に機嫌の悪い  
顔をして、それを無理矢理誤魔化すような笑顔を浮かべた。

「衛宮さあ、お前いつからこの僕の保護者気取りになったんだよ」  
びくびくとこめかみがひくついている顔のまま、慎二は続ける。

「この僕が、いつお前に庇ってくださいなんて、言ったんだ？ふざ  
けんなよ、衛宮。僕はお前なんか庇ってもらうほどおちぶれては  
いないんだよ！」

言いながら、ばんと、荒々しく慎二は鞆を手にとって、俺に背を  
向けた。それが、もう話す気なんてないという合図に思えて、「慎  
二」とまた名前をよんだ。

それに振り返ることもなく、ただ慎二はぴたりと止まったままに、  
俺にだけ聞かせるような声で、慎二にしては珍しいほど緊張を孕ん

だ声で言葉を押し出した。

「・・・一応、お前とは友達だからな、警告しといてやるよ。衛宮」  
「慎二？」

その様子が、後姿が、妙に今朝のイリヤの姿にかぶって見えた。

「深夜、一人歩きなんかするなよ。お前みたいな奴は家に籠って震えて大人しくしてるんだ。なにかおかしなことがあっても、顔をつっこんだり誰かを助けようとなんかするなよ」

何を言おうとしているのかはわからない。だけど、それが俺を案じる色を帯びた言葉だということに気付いて、俺は思わず呆気にとられて慎二を見た。

「馬鹿で非力な衛宮にはそれがお似合いだよ。いいか、僕は警告はしたからな」

そう言い残して慎二は今度こそ教室を後にした。

side・イリヤスフィール

午後になり、士郎を置いてわたしは一人家へと先に帰る。

かたかたと、機械を操作する音が聞こえ、わたしはそのままキリツグの元へとむかった。

ひょこりと顔を覗かせても、この子煩惱な男にしては珍しく、わたしに目線すらあわせずに、手の中の機械に顔をむけたままだ。

パソコンといわれている、現代機器の代表。わたしだって、学校で何度か触れてきたけど、基本的な操作くらいしかわからず、正直キリツグが何をしているのかはよくわからない。

魔術師で、現代利器に通じているキリツグのほうが珍しいとはいえ、ちよつとだけ面白くない。キリツグは魔術の腕前だけ見たらわたしよりも低いくらいだけど、その足りない部分を科学技術で埋め

ているところがずるいと思う。

でも、一応何をしているのかは簡単に説明を受けているので、要点だけ絞って「進展は？」と告げた。

なんでも、キリツグがやっているのはハッキングといわれている行為の一つらしい。それを使って、キリツグは冬木のあちこちに目を作っている。

「相変わらずだ」

「そう・・・」

つまり、今のところ召喚されている英霊は5人。いまだ聖杯戦争に本格突入せず・・・ということ。

「部屋で作業しているわ」

「イリヤ、完成度はどれくらいだい？」

たんとんと、軽快な音をたてて、何かを打ち込みながら尋ねてくる父親に「95%くらいね。あとは仕上げだけ」と正直なところを答える。

「本当は、使われないことを願っているんだけどね。でも、もしも・・・のことを考えるとやっぱり手は抜けないわ」

そういつて、諦めたような苦笑を浮かべている自分を自覚する。

本当に、今自分がやっている作業が無駄になればいいのに、と思う。「万が一を忘れるわけにはいかないから」

当初の予定通りにことが進むのならば、自分が今手がけているアしはいらなくなる。だけど、果たしてそう上手くいくかどうかは、シロもキリツグも、わたしも自信がなかった。

これは、万が一の保険の一つ。

「父さんは、そっち方面はからつきだから・・・僕も手伝えたらよかったんだけど」

「いらないわ」

きつぱりと、一言でもってその申し出を断った。

「これはわたしの仕事だもの。奪ったら許さないから」

放課後になり、一成に付き合っっていくつか備品を整備していると、陸上部の人にも調子の悪い備品のチェックを頼まれた。まあ、見るだけならそんなに時間もかからないし、いいかと思っただけで軽く引き受けたのだが……。

「うげ、衛宮。あたしらのテリトリーを荒らしにきたのか!？」

「蒔の字、衛宮某は修理にきたただけだろう」

「あはは、衛宮くんごめんね?」

そんな三人組がついてきた。とくに黒いのは……さつきからキシヤーキシヤーと凡そ年頃の娘が口にするとは思えない威嚇音を立てている気がするの俺の気のせいではないと思います。

というか、蒔寺になんでこうまでことあることからまねなければいけないのか。俺何かしたっけ? 思えば、こいつの態度が完全にこうなったのは、一年半前の夏祭りでシロねえと俺が姉弟だつてバシたあたりからだつたような気がするけど……なんていうか、理不尽だ。

思わず遠い目をしていると、ぼんぼんと三人娘の会話が続いていたらしい。我に返った頃には一体何の話をしているのかさっぱりだ。「……でだ。衛宮なんかは、イリヤ先輩の親衛隊にはつたおさねるべきだと、あたしは思うね!」

……イリヤって親衛隊がいたのか。家族として暮らし始めて10年目にして初めて知る新事実! なんて、テロップっぽくいつてみるけど、まあ、イリヤは凄く可愛いからいても不思議はないとも思う。

「しかし、蒔の字。君は知らないようだが、衛宮も人気は高いぞ。一部の三年生の間では「笑顔が可愛い」と評判だ。他にも重い荷物

を運んでいる時に笑顔で手伝ってくれたのにときめいたなどの意見も聞くな」

「うげげ、嘘だー！衛宮のやつがモテモテなんて話は聞きたくなー！いつ！」

某虎の咆哮並みの大音量で叫びだす冬木の黒豹（自称）。本人目の前にしてここまで好き放題いえるのもある意味凄いよな。氷室は面白がってあおっているし……。

「衛宮くん」

こそりと、困ったような顔が目の前にあった。

「時ちゃんたちがごめんね？時ちゃんも悪気はないんだよ」

ああ、うん。一応わかっている。ありがとう、三枝さん。君がいてくれて助かった。君こそここに降り立った癒しの光だ。

なんて感じで、備品の点検に集中できずに、あーだこーだーいう黒豹の攻撃を避けたりいなしたり、なだめたり、避けたりしながら、雄叫びを聞き続けているうちに、気付いたらあたりは大分暗くなりはじめていた。

イリヤには早く帰れといわれてたから、少しだけのつもりだったけれど、思ったよりも時間を食われていたことに気付き、慌てて三人とわかれ、帰路を急ぐ。

・・・参った。これはあとでイリヤに絞られるかな・・・なんて思いながら歩いていていたそのときだった。

妙に静かだ。風がない。吹きかたを忘れたかのように。

月光の元を悠然と歩く小さな人影。こつ、こつとヒールの高いブーツをはいているような音を立てて、俺のいるほうに向かい歩く。

月影で顔はよく見えない。その衣装はリボンとフリルの多い膝丈までのドレスで、跳ね気味の髪は腰まで届く長さで、左一房だけ金の鈴のついた髪留めを身に着けている。年は背格好から判断すれば中学生になったかなってはいないくらいか。女の子だ。こんな時間に女の子が一人でこんなところに？いや、よく考える。ここは、な



んで、ここには俺とこの子しかいないんだ？それに、あれはただの子供じゃない。あの子から感じる魔力量は、どう考えても同業者まじゅつしのものだ。あれほど巨大な魔力をもっていて、一般人のわけがない。ざっと、少女が顔を上げた、それに思わずどくりと心臓が嫌な音を立てた。

とんでもなく、美しい少女だ。銀の髪に紅玉の瞳で、まるで御伽噺から抜け出てきたような容姿で、でも雰囲気がとてつもなく冷たい。まるで氷の刃のようだ。その紅色の瞳は研ぎ澄まされたナイフそのもの。

だけど、俺が驚いたのは、彼女が美少女だからとか、年に似合わない冷たい目をしていたから、とかそういうところではなく、あまりに彼女が似ていたからだ。

血の繋がっていない一つ年上の姉、イリヤスフィールに。

そう、その少女は、雰囲気や表情を除けば中学校に入学したばかりの頃のイリヤに酷似していた。

「……私がわかるということは、貴方もこちらの住人ですか」

小さな唇が言葉を紡ぐ。その声は、瞳と変わらず淡々と伶俐に冷め切っている。

「でも、話にならない……まるで塵虫ね」

その紅い目は俺を人として見てなどいない。道端に落ちた小石を見るように、その瞳には色がない。

「興が削がれたわ。……塵は塵らしく大人しくしてなさいな。たとえ、子蠅でも、煩ければ間違って叩き落してしまうかもしれないから」

ぞっとするほど美しく冷淡に、彼女は最後俺に一瞬だけ目をやってから、そのまま悠々と去っていった。

どっと、汗が吹き出る。まるで、悪い夢を見たかのようだ。

彼女の身に着けていた鈴の音だけが、あたりにリン、リンと響いて、俺が見たものが幻想でもなんでもないものだということを伝え

ている。

振り向いても、どこにもあのドレスの少女の姿はない。

なんて、悪い冗談。

ピンクのドレス・・・なんて、少女らしい愛くるしい装束に身を包んでいながら、だけど彼女自身のあの冷たい氷のような眼差しと雰囲気、鋭利な刃物のようで、衣装の印象を裏切り、ぞっとするような凄みのある美しさを強調させている。その立ち姿も振る舞いも優雅で、昔のイリヤスフィールそっくりの顔をした少女は、ただ、俺の姉とはどこまでもその伝わってくる印象が違って、でも同じ顔をしていた。

暫くバイトを休めと言ったシロねえ。

真つ直ぐ家に帰つてと懇願したイリヤ。

深夜一人で出歩くなと警告してきた慎一。

そして、まるでゴミを見るかのような目で俺を見てきた、顔だけはイリヤそっくりな・・・氷のような目をした少女。

「何が、おきている？」

その答えを俺が知るのもう少しだけ後のこと。

ただ、今は、湧き上がった不吉の予感を噛み殺すように、自分の身体を抱いて空を見上げた。

NEXT?

第五次聖杯戦争編 02・1月31日・接触（後書き）

というわけで、二話でした。

美綴さんって口調これでよかったのかなあと自分で書いてて不安になりました。

慎二が原作よりもいい奴なのは、この話では士郎と大喧嘩おこしていない上に、シロねえのせいだ（？）奴は原作ほど精神的に追い詰められてないからですよ。

今回は、凜様が主役？回で、「アーチャー召喚」になります。

第五次聖杯戦争編 03・アーチャー召喚（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

今回の話は、赤主従がメインってわけで、原作と重複しているシーンもたくさんありますが、内容が内容なのでご了承ください。

第五次聖杯戦争編 03・アーチャー召喚

わかっていただき。

きつとオマエは私を召喚するのだろうか。

痛む心などとづくに磨耗して果てたはずなのに、何故か。

オマエは、どうやらたとえどんな世界でもオレにとっての特別で  
あり続けているんだと、そう、これはそう思い知らされた。

ただそれだけの話なんだ。

『アーチャー召喚』

side・遠坂凜

10年前、父が死んだ。

聖杯戦争という魔術師の儀式に参加して亡くなった。母もそれに  
巻き込まれて死んだ。そうして一人残ったわたしは、大好きな父が  
最期に残した言葉が魔術師としての言葉だったから、幼くても遠坂  
の当主として、魔術師と生きるんだってそう決めて生きてきた。

いつか現れる聖杯、それを手にするのは遠坂の義務だと語った父。  
あの、10年前のときからわたしは片時だって聖杯戦争のことを忘  
れたことなどない。

そう、忘れない。わたしは、このときのために生きてきたんだから。

嫌味な兄弟子に急かされるまでもない。

結局、英霊縁のものは見つからなかったけど、とんでもない魔力の宝石は見つかったし、今日わたしはわたしのサーヴァントの従者を召喚してみせる。

・・・なんて意気込みながら、帰路に就いていたわけだけれど・・・  
家までもうすぐという時に、ここ10年ですっかり見慣れてしまった、『古馴染み』の顔が見えて・・・思わず脱力しかけた。

「アーチエ、アンタ何やってんのよ」

見れば、件の古馴染み・・・褐色の肌と白髪が印象的な衛宮・S・アーチエは、手に買い物袋を携えて歩いていた。

「む。凜か。ふむ、今日は早いんだな」

「・・・アンタ、わざと言ってるでしょ」

自分の学校の予定などとくに把握しているだろう相手のすつとぼけた態度に、思わずこめかみをびくびくと揺らす。案の定、バレたかなんて小声で言ってるところがちよつと小憎たらしい。

「で、それ何」

「いや、何、商店街で買い物していると・・・何故か気づいたら購入した覚えのないものがこの通り増えてしまつて・・・あまりに数が多いので、まあ、お裾分けに来たというところだな」

そう呟く顔は遠い目をしていて、なんで普通に買い物をしていたはずなのにこんなに増えたんだろう、なんて本気で思っていそうなあたりがちよつとだけむかつく。いいじゃない、そんなに貰えて。ていうか、こいつ商店街のアイドルなくせに、全然そのあたりの機微を理解していなくて、いつも思うことではあるけど、鈍感もいい加減にしなさいって思わず怒鳴りたくもなる。うらやましいスキルなのに、何が不満なんだか。

「というわけだ。受け取ってくれないかね？」

はい、なんていいながら突き出してきた袋の中身はといえは・・・カボチャの煮つけに、ほうれん草のおひたしに、肉じゃが。え？惣菜・・・？商店街で買い物してたんじゃないの、こいつ。

じと目で、袋をアーチエを交互に見ると、アーチエは苦笑しながら言う。

「私が料理教室を開いていることは君も知つてのことだと思つが、その生徒の中には商店街で働いている奥様方も結構いてな、私に評価してほしいのだそう。とはいえ、うちの家族で頂くには些か量が多すぎる。味は私が保証しよう。今夜の夕餉にでもどうかね？」

「・・・まあ、いいけど。貰えるというならいただいておくわ」

そうして袋を受け取ると、アーチエはほっとしたように、一瞬だけ表情を緩めた。

「そうか、それは助かる。ではな」

そういつてわたしに向ける背中が、どこか逃げるかのようで。こいつの今日の態度はいつもと『違う』のだと、違和感がわたしの感覚を捕らえた。

「アーチエ」

思わず呼び止める。

「・・・そうだ。コイツ、一度も今日はわたしの目を見て話していない。」

それにここ十日ほど、こいつはわたしの家には頑なに入ろうとはしなかった。

幼いわたしの家に、半ば強引に押し込むようにして、押しかけて食事や掃除をして帰っていったそんな変な女だったのに。

そもそもコイツと出会ったのは10年前・・・父が死んだ聖杯戦争の時だ。そしてコイツは・・・全然それらしくはないけど、魔術師で、なら、もしかしたら・・・。

（アーチエ、貴女は・・・ひょっとして父を殺したマスターだった？）

だから、わたしに対して気にかけているの？そんなことを何度か

思った。

10年前、あの日あの時のタイミングで出会ったこの魔術師らしからぬ魔術師。ひよっとして彼女とあの時出会ったのは、彼女が聖杯戦争のマスターだったからなんじゃないのかと。なら、今のこの状況もわかつているんじゃないのかと。

たとえ、父の仇だったとしても、聖杯戦争に参加することとはそういうことだと父は知っていたはずだから、恨むつもりはないし、それにわたしはきっとコイツとの今の関係を気に入っている。だからこいつがわたしを妙に気に入っている理由をこれまで追求したりなんかはしなかった。

でも……。

(聖杯戦争はまたはじまった)

なら、問うべきだろうか。

貴女はわたしの敵か、と。聖杯戦争に参加するつもりなのか、と。どんなにこの関係が気に入ってようと……例え縦しんばコイツのことを自分で思う以上に気に入っていたんだとしても、それでもわたしは遠坂の当主だ。敵となったら、そんなことでほだされはしないし、魔術師ならば、こいつもそうだろう。

だけど……。

「凜？」

ふと、自分を心配気に覗き込む鋼色の瞳とかち合った。

「……なんでもないわ」

誘惑を振り払う。自分が自分で思っていた以上に甘ちゃんだったと知らされて、内心でため息を吐いた。心の贅肉だったことくらいちゃんとしってる。でも、それでも確定するまでは、自分からそれを壊そうなんて思えなかった。

「じゃあね。アーチエ」

「ああ、またな、凜」

そうしていつも通りを装って別れる。こいつもわかってる。その上で、やはりいつも通りを演じて彼女も別れの言葉を口にした。そ



うして互いに背を向けてあるべき方へと歩き出す。そんなあくまでいつもどおりの延長線上の別れがわたしたちにはふさわしい。

2月1日、午前2時。わたしの魔力が最大に高まる時間。その時を選んで宝石で魔方陣を描き、そのサーヴァント召喚の儀に備える。結局英霊縁の代物は見つからなかったけれど、それでもわたしは遠坂凜だ。

狙うは最優の名高き剣士のサーヴァント、セイバー。これほどの宝石を使用したんだ、たとえ英霊縁の品がなくなつて、きつとセイバーを引き当ててみせる。

「・・・素に銀と鉄。礎に石と契約の大公、祖には我が大師シュバインオーグ」

慎重に召喚の言霊をつむいでいく。これより遠坂凜は人ではなく、<sup>きせき</sup>魔術を成す為の回路となる。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

魔術師として、生身の肉体で魔術を行使する代償としての痛みが身に走る。神秘を行うことに対する肉体の拒絶反応。これがあるからこそ、わたしは自分がなにより魔術師だということを実感する。

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

覚えた呪文を一言一句違わず口にするたびに、力が魔術回路をぐるぐるとまわしていく。自分が神秘を成す歯車のひとつへと成るのだ。

「Anfangg」

この痛みは、きちんと魔術が発動している証拠だ。それを思えば愛おしさすら感じる。もう少しだ、自己に沈んで朗々と言霊を紡いでいく。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うのならば応えよ」

魔方陣が光を放つ。まるで祝福するかのよう。だから確信した。「誓いを此処に、我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三天の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　！」

完璧な手応えだった。わたしは最強のカードを引き当てたのだと確信し、光が晴れ、サーヴァントが目の前に現れる瞬間を心待ちにしていたのだけれど……。

「はい？」

残されたのは無情な現実。目の前には誰もいないし、居間のほうでなんだか爆発音がする。

「なんでよー！？」

おかしい、わたし完璧だったはずよね！？あんなに高い宝石をつかって召喚したのに、なんでこの結果！？なんてことをぐるぐる考えながら居間まで駆け上がる。

「扉、壊れてる！？」

何があったのか、ぐしゃりと歪んでいる扉。対処法をいちいち考えるのは面倒だし、時間がかかる。

「ああもう、邪魔だこのおつ……！！」

蹴破つて、まるで廃墟みたいになつた居間へと飛び込んだ。

「……………」

そしてそこにかかった柱時計を見て、何故こんなことになつたのかの理由に漸く気づいた。

「……………また、やつちやつた」

そういえば、あの遠坂の家室ともいうべきペンダントを手にしてから、何故か家中の時計が一時間針が進んでいたんだ。つまり今は二時じゃなくて一時。わたしの魔力が最高に満ちるまで一時間も早かつたということ。

遠坂には先祖代々の呪いがある。ここ一番という時に限ってうっかりが発動することだ。それで、サーヴァント召喚なんて大儀式を前に、しっかりそれが発動してしまつたらしい。

「・・・やっちゃった事は仕方ない。反省」

ふふふ・・・わたしの宝石がピアかあ・・・なんて暗い気持ちを押し込んで、なんだか廃墟と化した居間の中心でふんぞり返るように足を組んで座っている、無駄に偉そうな赤い外套の男をじと目で見上げた。

「それで。アンタ、何」

「開口一番それが。これはまた、とんでもないマスターに引き当てられたものだ」

やれやれといわんばかりのその低い男の声は、初めて聞いた声だというのに、どこかで聞いたことがあるような気がした。思わず既視感に数瞬ぼうとするわたしの耳に、「これは貧乏くじを引いたかな」なんて呟く声が聞こえて思わずむっと、片眉を吊り上げた。うわ、こいつ根性歪んでるわ。

「・・・確認するけど、貴方はわたしのサーヴァントで間違いない？」

「それはこちらが訊きたいな。君こそ私のマスターなのか。ここまですら乱暴な召喚は初めてでね、正直状況が掴めない」

そんな言葉と表情にまた、既視感。何度も親しんできたものと、この男が浮かべるものは、そうよく似ている。だからか、言ってることはむかつくのに、何故かあまり憎めない。

「・・・それは悪かったわね。でも、わたしだって初めてよ。そういう質問は却下するわ」

謝罪を挟むと、少しだけ目の前の男の雰囲気は僅かに和らぐ。それは知っている人間じゃないとわからないような微量さで・・・何故、初対面のはずのわたしがわかったのか、自分でもわからない。

男は変わらず皮肉ったらしい言葉を紡いでいく。

「・・・そうか。悪かったというのなら、私が召喚された時に君が目の前にいなかった理由を、私にも納得いくように是非説明してくれ」

「本気？雛鳥じゃあるまいし、目を開けた時にしか主を決められな

い、なんて冗談は止めてよね」

いうと、む、と唸って男は黙った。それを見て、漸く既視感の正体に気づいた。

「そうだ、こいつ・・・アーチエに似てるんだ。」

白髪に褐色の肌に鋼色の瞳と、異彩を放っている色の組み合わせだけじゃない、浮かべる表情、話し方、ニュアンスまで他人とは思えないくらいにそっくりだ。顔立ちだってよく見たら、兄妹で通るくらいには似通っている。

（ひょっとしてアイツの先祖？）

なんてことを思う。

前にアーチエは、私は養子だとか言っていたことを聞いたことがあるような気がするし、衛宮なんて日本人丸出しの姓を名乗っているけど、その場合、旧姓が別にあるっていうわけで、ありえないわけじゃない。

ていうか、ここまで似通っていて他人だなんていわれても全然説得力がない。

なんてことを思いながら、人の姿をとっているけど、濃厚な魔力で編まれた体をもつ目の前の男に、わりと寛大な気持ちで問いをぶつける。

「まあいいわ。わたしが訊いているのはね、貴方が他の誰でもない、このわたしのサーヴァントかって事だけよ。それをはっきりさせない以上、他の質問に答える義務はないわ」

「・・・、男は嫌味つたらしい口調で淡々と言葉を紡いだ。」

「・・・、召喚に失敗しておいてそれが。この場合、他に色々と言すべき事があると思うのだが」

「う、だから、悪かったって言ったでしょ。しつこいわね。アンタ、仮にも英雄っていわれた存在なら、もっと寛大になったらどうなの！？」

「前言撤回。やっぱりアーチエとは似てない。アーチエのやつはもつとなんだかんだで可愛げがあるっていうか、ここまで恨みがまし

いことはいわないし、アーチェはもつと柔らかい。こいつみたいな性悪と並べて悪かったっていうか。とにかく、こいつ性格絶対歪んでる、それ間違いない。

「ああ、もう、いいわ……！貴方はわたしのサーヴァント、それで間違いないわね！？」

寧ろ、断定系で言い切ると、目の前の男はニヤニヤと笑いながら、馬鹿にしたような声で続けた。

「間違いはない……ね。そうか。では私からも訊くが、私が君のサーヴァントだとして、君は私のマスターなのか？」

「……それはどういう意味なのかしら」

思わずぴくぴくとこめかみをひくつかせながら、目の前の男に苦みばしった声を投げかける。それに、男はしれっと、何、簡単なことだよなんて誰かさんを思わせるイントネーションでやっぱりしゃべりだす。

「私もサーヴァントだ。呼ばれたからには主従関係を認めるさ。だが、それはあくまで契約上の話だろう。どちらがより優れたものか、共に相応しい相手かを計るのは別に成る。さて、その件で行くと、君は果たして、私が忠誠を誓うに相応しい魔術師なのか、お嬢さん」

そう言いながら試す姿は……やはり誰かさんにかぶった。試されている。かつては英雄と呼ばれた存在に。よく知っている誰かに良く似た男に。

「当たり前じゃない」

でも、負けるものですか。アーチェに似ていると思ったのは多分表面だけじゃない。表面だけならきつとここまでかぶらせやしなかった。自分より前をいく背中に、この男はよく似ている。でも、だからこそ、絶対にわたしは負けてはいけないんだと思った。

常に優雅たれ。遠坂家の家訓だ。だから、わたしはその家訓どおりに優雅な微笑みを浮かべて、まっすぐに男の鋼色の瞳に視線を強くあわせながら、誓いのように言い切った。

「わたしはこの冬木のセカンドオーナーで貴方のマスターよ。外からきた魔術師なんかに負けやしないし、貴方がわたしに従わないというのならば、実力で従えて見せるわ。覚えてなさい」

男が、先の非礼を詫びようと言い出したのは、言い合う場所をわたしの部屋に変えてからだった。

流れてきた膨大な魔力量や、召喚してもわたしがぴんぴんしていること、それと先ほどきつた啖呵と気迫、それらを総合して、共に戦うに相応しいマスターだと、そう判断したかららしい。

嬉しそうに君を巻き込むことに異存はないなんて告げられると、色々と複雑な気持ちが襲ってちょっと困る。なんていうか、そのとき浮かべていた笑顔の質がやっぱりアーチェの奴によく似てて、でもわたしに向けられる信頼の情はアイツにはないもので、いつかほしいと思っていたものが別の形で与えられたような感じがするのだ。アーチェのやつとは知り合った時の年齢が年齢だったから、アイツはまるで年の離れた妹に接するようにわたしに接してくる。つまり、その視線は保護者としてのものだ。でも本当は対等に見られたかったんだって、コイツと接することで理解してしまった。

「・・・で？貴方、何のサーヴァント？」

そういえば、クラスを訊いてなかったな、と思い出して尋ねる。

聖杯戦争で呼び出されるサーヴァントのクラスは、セイバー 剣士、ランサー 槍兵、アーチャー 騎乗兵、キャスター 魔術師、アサシン 暗殺者、バースカー 狂戦士の七つだけれど、この男はどのクラスにも見えない。まさか、イレギュラークラスとかじゃないわよね、とか思いつつ、アイツの先祖だったりした場合にはこんな見た目でキャスターの可能性もあって、なんだか判然としないまでに複雑だ。

「見て判らないか。ああ、それは結構」

拗ねているんだか、そうでないんだかわからない声で言う男。

「・・・分かったわ。これはマスターとしての質問よ。ね。貴方、セイバーじゃないの？」

「残念ながら、剣は持っていない」

わたしは後方支援型の魔術師だし、やっぱりセイバーがほしいなと、そんな期待をこめて訊いた質問は、見事この白髪オールバック男によって希望を粉碎されて終わった。

「ドジったわ。あれだけ宝石を使っておいてセイバーじゃないなんて、目も当てられない」

「……む。悪かったな、セイバーでなくて」

はあ、と独り言のつもりで呟いた台詞は、どこことなくムキになっているような男の声に拾い上げられた。

「え？あ、うん、そりゃあ痛恨のミスだから残念だけど、悪いのはわたしなんだから」

思わずちよつと吃驚しながら続けると、完全に拗ねたような顔と声になった男。刺々しいその態度が、やっぱりアーチェエの拗ねて怒った時の姿によく似ていた。

「ああ、どうせアーチャーでは派手さにかけるだろうよ。いいだろう、後で今の暴言を悔やませてやる。その時になって謝っても聞かないからな」

うわー、うわー。アーチェエ二号だ。アーチェエ二号がこんなところにいる。

なんていうか、子供っぽくて、こういう態度見ると、こんな大男でも可愛げもあるってもんで、「癪に障った、アーチャー？」なんてことをつい口元をにやつかせながら聞いてしまう。

「障った。見ている、必ず自分が幸運だったと思い知らせてやる」

ああ、うん。こいつ、イイ奴だ。まあ、英雄だし、アイツの先祖なら（自分の中で既に確定）そんな極悪人だとは思ってはいなかったけど、うん、イイ奴。ちよつとひねくれてるけど。

「そうね。それじゃあ必ずわたしを後悔させてアーチャー。そうなたら素直に謝らせて貰うから」

「ああ、忘れるなよマスター。己が召喚した者がどれほどの者か、知って感謝するがいい。もっとも、その時になって謝られてもこち

らの気は晴れんだろうがな」

あ、距離感。こいつとはこれが初対面な筈なのに、アーチェのやつとほとんど同じになってる。全くどうかしてるわ。十年来の付き合いがあるとはいえ、これから敵になるかもしれない女と、自分のサーヴァントとはいえ、今日はじめて会った奴とをこんなにかぶらせて、それを心地よく思っているなんて。

聖杯戦争のサーヴァントなんて、いつ主を裏切るかわからないよ。うな奴らなのに、こんなに気を許しているなんて。

聖杯が貸し与えた道具コウ、それがサーヴァントだつてもわかってる。それでも、この台詞だけで、こいつはきつとわたしを裏切ったりしないんだつて、そう思った。

「期待してる。それでアンタ、何処の英霊なわけ？」

ぴたりと、男はそれまでの表情をかき消した。次に浮かべている表情は・・・苦悩？

「アーチャー？マスターであるわたしが、サーヴァントである貴方に訊いているんだけど？」

苦みばしった声で、男は言った。

「・・・それは、秘密だ」

「は・・・？」

思わず目が点になる。

「私がどのようなモノだったかは答えられない。何故かというところ・・・」

「あのね。つまらない理由だったら怒るわよ」

「それは・・・何故かというと、自分でも分からない」

返ってきた答えはとんでもないものだった。

「なによそれ、アンタわたしの事バカにしてるわけ？」

思わず怪訝な顔になって見やる。赤い外套の男は本当に心苦しそうな顔で、重く言葉を続ける。

「・・・マスターを侮辱するつもりはない。ただ、これは君の不完全な召喚のツケだぞ」



「う……」

そういわれると痛いものがある。男は気にしたふうもなく続きを淡々と口のにせる。

「どうも記憶に混乱が見られる。自分が何者かであるかは判るのだが、名前や素性がどうも曖昧だ。……まあ、さして重要な欠落ではないのだが」

普通に考えれば、十分重要的な欠落だ。何故サーヴァントが自分のマスター以外の相手に真名をいわないかといえば、名を知られればその伝説も知られる、そこから弱点を知られるから伏せているわけで、また、名を知ることによってその英霊の強さがわかるということなのだ。

でも、この古馴染みとよく似た、おそらくは先祖であろうコイツが、さしたることではないと口にするのは何か理由があるのだろうか、件の人物を脳裏に浮かべて推測する。

「……そう。重要な欠落ではないっていつのなら理由を聞かせてくれる？英霊の名は伝説を表す。貴方の名前を知らないんじゃ、貴方がどれくらい強いのかわたしにはわからないんだけど？」

微笑んでさえ、問う。先ほどとは逆だ。先ほどはアーチャーがわたしを試そうとした。今度はわたしの番になったということ。だから出来る限り余裕の態度でもって返答をまつ。

「なんだ、そんなことか。そんなことは瑣末な問題だよ。君が気にすることではない」

不敵に、少年のような笑みを浮かべながら、男は言い切る。

「私は君が呼び出したサーヴァントだ。それが最強でない筈がない」それは、絶対の信頼を込めた言葉……。

思わず頬が赤らむ。そんな言葉をよく抜け抜けという。やっぱり、アーチエとこいつ似てる。耐性がある程度ついてよかった。でなきゃ、素っ頓狂な声を今頃わたしは上げていただろう。それはみっともないことで、そうならなくてよかったとも思う。

人知を超えたサーヴァントにこうまで思われるなんて、ひよっと

してこういうのをマスター冥利につけるといふべきなのか。

思わず、ぶつきらばうな口調になる。

「・・・ま、いつか。誰にも正体がわからないのなら、敵にもわかるはずがないんだし・・・貴方の正体はおいおい追求するとして、今は不問にしましょう」

なんて、一段落したところで、眠気が襲ってきた。あ、そうだ。居間滅茶苦茶だった。

「それじゃアーチャー、最初の仕事だけど」

「早速か。好戦的だな君は。それで敵は」

何処になんて続けようとした従者相手にホウキとチリトリをばっばいっと投げ渡した。

「・・・む？」

「下の掃除、お願い。アンタが散らかしたんだから、責任もってキレイにしといてね」

「待て。君はサーヴァントをなんだと思っている」

あふ、眠い・・・。

「使い魔でしょ？ちよつと生意気で扱いに困るけど」

そして、そんなところを案外気に入ってるけど。

「異議あり。そのような命令はことわ・・・」

赤いのがなんだかまだごちゃごちゃ言ってる。最終手段として、わたしは自分の右腕を抱えた。

「アーチャー」

眠いの、長引かせないでほしい。そんな気持ちをかめてにつこりとわたしは笑顔を浮かべて断言した。

「ゴチャゴチャ言わないの。令呪で無理矢理いうこと効かせられるのと、自主的に掃除するの、どっちがいい？」

ややあつてから、アーチャーは凄く悔しそうな声で「了解した。地獄に落ちろ、マスター」なんて言葉を吐いて、わたしが投げたホウキとチリトリを受け取った。

全く素直じゃない。最初っからそうしていうこと聞いてたら、か

わいのこ。

side・アーチャー

マスターの理不尽な命令をきいて、居間の片づけを始める。やりはじめるとつい、本気になって気づけば想像以上にぴかぴかにしてしまった。

ついでに厨房に足を伸ばす。一人暮らしの洋館にしては中々手入れが行き届いていて、片付けもそれほど時間がかからずに終わるだろう。

全く、空に落とされるわ、あまりに年の若いマスターだわで、最初はどうなることかと思ったが、これならなんとかやっていけそうか。と、思いつつも、先ほどの片付け命令を思い出してやはり前言撤回したくなった。

・・・本当、聖杯戦争のサーヴァントをなんだと思っているのか。

そう、聖杯戦争。

遙か遠くの映像が僅かに脳裏をよぎる。

ずっと、願っていた。まっていた。その一縷の希望だけを頼りにオレは歩いてきた。

霊体化して、屋根の上へ上がる。

我がクラスは、アーチャー。スキルは千里眼。鷹の目で周囲を見回す。分析、分析。

思考する。この状況、建物、時代、雰囲気。私は・・・私の望みを叶える機会を得たのだろうか。

ザー、ザーと、ノイズが走る。

私の望み・・・それはなんだったか。

ザー、ザー。

記憶は摩擦している。遠く遠く人ではありえない時の果てで、多くのものを失っている。

そも、私とは誰だったか。

ザー、ザー。

エ ヤ ウ。名前は、何？ただ、目的は・・・そうだ、確か自分の排除だ。

この時代に生を受けているだろう、  
を私自身の手で殺める  
ことによって、自身の座を消滅させる・・・そう、それが目的、だった、はずだろう。

曖昧。記憶の混乱。すべてはクリアにならない。イレギュラーな召喚だから、というだけではない、私自身の記憶自体が磨耗してきた、その代償だ。

自分がかつて だった時の記憶などほとんど残っていない。  
其れを消す機会を本当に得たのか、得たのなら慎重に行動しないとけない。

たとえ、記憶があやふやでも、自分が未来からきた存在だつてこ  
とくらいわかっている。

この砂霞のような混乱がたとえ晴れたとしても、たとえそうなつても、わたしはマスターに自分の名を告げることもないだろう。  
マスター、あの少女。私が目的を遂げるまでは、それでもあの少女を守る騎士の真似事でもしようと、そんなことを思い空を見上げた。

その願い続けた一縷の希望が、思わぬ形で否定されるなど、今の私  
が知りおはずもなく、ただ月だけが街を照らしていた。

NEXT?



第五次聖杯戦争編 03・アーチャー召喚（後書き）

というわけで、アーチャー召喚の回でした。

アーチャーは内容が内容だからあんまり原作と変えてないですが、凛の反応のほうはわりとちよくちよく変えていたわけですが、その辺の差異が原作凛とこの世界の凛の差だと思ってください。主にアーチエの影響で変わった部分ですね。

次回はサブタイトルまだきめていませんが、某人形師との回想シーンをいれるつもりであります、お楽しみに？

第五次聖杯戦争編 04 崩落の足音（前書き）

ばんははろ、E K A W A R Iです。

今回の話は聖杯戦争二日目つつうことので2月1日の話になってます。  
んで、段々鬱臭とダーク臭が濃くなってきましたよ。

今回の話は、切嗣に対する怒りのコメントが飛んできそうな気がします  
ますが、そんなところさえ楽しんでいただけたら幸いです（え）切  
嗣は基本悪い方向に物語を転がす天才だと思ってる（ちょ）

血塗れの手で、銃を握る。

正義の味方なんて言葉を呪文に在った、かつての自分を捨てて、家族のために銃を握る。

これが正しいことなのかはわからない。

父親を撃ち殺したその時から、そんな資格は消えたと思っていた。だけど、妻と娘で娘をとったその日から、正義の味方という大義名分も消え去った。

でも、完全に父親としてのみの在り方を選ぶのならば、冬木など捨てればよかったのに。

悲劇が起こるだろうことをしって、逃げなかったのは僕の弱さ。

そう、僕の未練。

僕は・・・中途半端だ。

『崩落の足音』

side・衛宮切嗣

それは、今から10年前。

「まさか、かの高名な『魔術師殺し』が私に会いたがるとはな」



ぎい、と椅子に腰掛けた怜悯な顔をしたその女・・・封印指定の人形師、青崎橙子は、油断のない笑みを薄く口元に浮かべて僕を見ていた。

「それで、なんの用だ？今度は私の命でも取りにきたのか？」

からかうような声。警戒は全く解いてないのに、この態度。だが、それに付き合うつもりもない。

「連絡した時にも言ったはずだが」

淡々と、言葉が続けた。

「僕は客としてきた。当代最高の人形師、青崎橙子にしか頼めない依頼だ。それに・・・魔術師殺しはもう、廃業した」

その言葉に、女の眼差しがどこかわる。あまり、大きな変化ではない。それでも、本質を見極めるかのように女の目が細められる。それを、たじろぎもせずを受け止めた。

「・・・だろうな。全く、なんだその身体は。何をしたらそうなる。いや・・・余計なことだったな。私には関わりがないことだ。まあ、いい。客というのなら、聞いてやる。それで、私に何を望む？」

腕を組んで、女は僕を見た。

「人形師青崎は、本人そのものの人形をつくれると聞いた。だから・・・僕の娘の新しい身体を作ってほしい」

「娘、だと？」

意外なものを聞いたかのように、女は軽く目を見開いた。

「そう、普通の人間のように成長し、生きていける肉体を。金はいくらかかっててもかまわない。造ってほしい」

「まて、貴様の娘は、何だ？」

鋭い声で、人形師は切り込む。

「僕の娘は、アインツベルンのホームクルス、次世代の『聖杯』だ」  
その言葉に、一瞬の沈黙が部屋を包んだ。ついで、く・・・と、はき捨てるように女の低い笑いが漏れる。

「はは・・・いいだろう。その依頼引き受けてやる。その代わり、その『娘』の身体は私に渡せ。千年の名家、アインツベルンの最新

型ホムンクルスなのだろう？それも、『聖杯』となれば、私も興味深い」

それが代価だと、女は言った。

それからも年に一度の頻度で僕は、娘のイリヤを連れてこの人形師の元へと通った。

話すことは少ない。元々そういう間柄じゃない。

それでも時は進む。当たり前のように、無情に。そして、僕が余命一年だと診断したのも、気まぐれのように僕の身体を視たこの封印指定の人形師だった。

互いにもう、会うことはないと思ったからか。おそらく最後に僕が戦いに身を投じることに気づいていたからか、人形師は錠剤がつまったピンを放って僕に渡した。

「賤別だ」

「・・・これは？」

「魔術薬だ。其れを飲めば一時的に昔の能力をお前は取り戻せるだろう」

ただし、そう前置きして、女は酷く冷めた目で見据え言い切った。「代償に服用したものの生命力を奪う。・・・そのピンの中身を全て飲み干してみろ、お前は明日には死体になっているだろう」

まあ、使うか使わないかはお前次第だ。と、そうぼやいて、女はタバコの煙をたゆませた。

「いや、ありがとう。今の僕にはとても助かる」

そう、告げると女は、哀れんでいるような、蔑んでいるような、複雑な目をして「本当、お前は馬鹿だな。衛宮切嗣」とそんな言葉を呟くように吐いた。それがこの人形師との別れだった。

「キリツグは馬鹿みたい」

人形師に言われるまでもない。娘にもそう言われた。だけど、僕にはこれしかない。

馬鹿でもいい。

愚かでもいい。

それでも、手段があつて何もしないなんてことには耐えられそうになかつた。

『キリツグ、シロと土郎を泣かせたら、わたし怒るわ。その言葉の意味がわたしからの課題よ』

その娘からの問いの答えははまだ見つかつていない。見つからな  
いままに、その期限がきた。

げほ、と咳を一つ。

身体が凝り固まっている。顔を上げれば、パソコンの上だ。作業中にそのまま眠りに落ちていたらしい。いくら疲労していようと、昔はこんなことはありえなかつた。そんなところに今と昔の差を感じる。

背中には毛布が一枚。ああ、シロがかけてくれたんだな、と思つて苦笑する。起こしてくれればよかつたのに。

「切嗣しじいさん」

今まさに考えていた対象の、低いハスキーな女の声がかかる。シロは、いつもどおり黒いシャツに黒いスラックスの上に赤いエプロンを身につけて現れた。

「起きたのか。食事は、とれそうか？」

その声に心配気な色が見えて、苦笑しながら、手を振つて大丈夫と意思表示をする。

「病人扱いはしないほしいなあ」

「そう思うのなら、顔を洗ってきたまえ。・・・自分が今どんな顔をしているのかわかつていないというのは重症だぞ」

言つて、そつとタオルを差し出された。反論したい気がしたけれど、本当に心配気な鋼色の瞳とぶつかつて、そのまま大人しく言うことを聞くことにする。

そうして洗面所について、鏡を見上げ「ああ・・・」と思わず言葉漏らした。

「これは、シロが言うだけあるなあ」

落ち窪んだ目の下に隈を作り、やせ衰えたような自分の顔は、まるで幽鬼のような有様で、口元には僅かに黒い血がついていた。

side・イリヤスフィール

キリツグもやってきて、シロとわたしと三人で昼食を囲う。士郎は今は学校だ。

10年の生活ですっかり聞きなれた虎の咆哮も絶えてから随分と長い時間が経っている気がする。実際は一週間も経ってないはずだけど、いつの間にかわたしも大河を相手に随分と心を許していたらしい。いないことがこんなに寂しいものだと感じる日があるなんて思わなかった。

静かに食事を続ける。わたしも、キリツグもシロも昼食時に騒ぎ立てるタイプじゃないから、つつましく昼は続く。そうして、食後にそっと、シロが人数分の紅茶を配って、そうして三人揃って魔術師の顔をして向き合った。

「昨日・・・いや、今日というべきだね、の深夜一時ごろ、新たにサーヴァントが呼び出されたみたいだ」

切り出したのはキリツグ。

「そう、これで6人ってわけね」

「そうだね」

相槌をうつキリツグ。シロは、どことなく居心地悪そうに眉をかめただけで言葉を挟まなかった。

我が家の方針は随分と前に決まっていた。

聖杯を聖杯戦争のどさくさにまぎれて破壊する、それを最終目的に、出来れば傍観を貫く、というもの。

サーヴァント七騎が潰しあっている隙に・・・残り二騎が互いの相手をしてつぶしあっていてこちらの相手を出来ない隙にでも破壊しに向かう。という、そんなシンプルな作戦だ。

この作戦がうまくいくのならば、こちらが蒙る被害も、聖杯破壊に使う火力ぐらいで最小限に抑えられるだろうし、上手くいくのならば、士郎には聖杯戦争のことを知ってもらわなくても必要もなくなる。

とはいえ、人生何がおこるかはわかったものではないし、なににより、聖杯戦争には7人の魔術師が必要だし、冬木にいる魔術師の数や、参加しようと他所からくる魔術師の数などもたかが知れているわけで、わたししか士郎が聖杯に選ばれてしまう可能性もあった。その場合は、当初の予定のような最低限の労力でなんとかする・・・なんて甘い考えが通じるはずがなく、下手をすれば、こちらが呼び出してしまうサーヴァント自体も敵にまわる危険性があるし、自分たちの周囲にも被害が及ぶだろう。

それらの方が一を考えた上での根回しに、キリツグとシロはここ数日奔走していた。

だけど、杞憂にすむかもしれない、と自分の手にも士郎の身体にも聖痕の兆しがいまだ出ていないことを思っただけほっとする。だけど、大分前から聖杯戦争の兆しはあったのに、まだ6人。最後の7人目が召喚されるまでは気を抜けない。

もしもの時は、士郎ではなくわたしがマスターになる、と決めていたけど、でも、無駄な足掻きかもしれないけど、それでも士郎には何も知られなくなかった。

二年前、士郎に聖杯戦争のことを話そうとしたキリツグとシロを止めたのはわたしだ。

当初の予定通りだったら、知る必要なんてなくなるし、それに、士郎にこんな馬鹿げたゲームのことは知られたくなかった。

わたしはいい。

だって、わたしは元はアインツベルンの聖杯だった。元から関係者だから、だからいい。

でも、士郎は・・・そうでないでしょう？

士郎。わたしの可愛い、血のつながらない弟。陽だまりのような笑顔が似合う弟にはこんな世界には飛び込んでほしくない。何もしらないでいい。わたしが守るから、だからずっと、ずっと笑顔でこの家においてほしい。「おかえり」なんて笑いながらわたしを出迎えてくれたら、それだけでいい。

シロと士郎が、同一人物だということは知っている。全然違う人生を送って、もう完全に別物になっていても、それでもシロは士郎の可能性の一欠けら。

大好きで（歪で）、優しくて（自虐的で）、何処かボロボロで（大嫌いで）、自分よりも他人のほうが大切なんて、そんなどうしようもなく欠陥だらけの可愛い妹。己の理想に裏切られた反英雄の守護者。

シロだってわたしは大切だし、大好きだと思っている。でも、それでも、士郎がシロのようになる事だけは、どうしても嫌だった。そうなってほしくない。だから余計に、士郎が聖杯戦争なんかに関わるのはどうしても嫌だったのだ。

だから、二人に頼んだんだ。

『士郎にだけは言わないで』と。

わたしが守るから、士郎のことはわたしが守るから、だから言わないで。と。

でも、それでもどうしても誤魔化しきれなかったら、その時は、わたしがわたしの口から士郎に全てを話すから。

だから、言わないで。

キリツグはそんなわたしを見て、『イリヤ』と名を呼んで、それ

からとても静かな声で『覚悟はあるんだね』そう問いかけた。こくりと、わたしは頷く。それをみて、シロは一言も口を挟まなかった。多分シロはわたしとは逆に、士郎に聖杯戦争のことを最初から話すつもりで、その上で魔術を教えていたんだと思う。それでも、わたしの意を汲んで何も言わなかったのだ。

ちゃんとわかってている。これはわたしの我侷。でも、わたしはそのことを後悔してはいない。

だって、わたしは、お姉ちゃんだから。弟は守らなきゃ。

「シロ、本当にキヤスターは放っておいても大丈夫なのかい？」

切嗣がそんな言葉をシロに投げかける。それに、現実引き戻された。

「ああ。あの魔女は易々と人の命を奪うまでの真似はすまい。アレはなんだかんだといいつつ甘いからな。問題は時が経てば経つほど膨大な魔力を溜め込み、自分の神殿内では魔法の真似事すら可能となることだろうが・・・、あの女は冬木のセカンドオーナーの怒りに触れる。私達が手を下さずとも、凜が始末をするさ」

「リンを随分と買っているのね」

その淡々とした中にも信頼が透けて見える言葉に、少しのからかいを込めてそう口にする。

「まあ・・・おそらく、今回も彼女が召喚したのは、『私』だろうしな。やりようはいくらでもあるだろう」

その返答に、胸が痛んだ。下手をすれば、それは、男の姿のほうの『エミヤシロウ』<sup>アーチャー</sup>が敵にまわるかもしれないということ。

「それに、魔力の無駄遣いなど出来るほどの立場ではないだろう？ 私たちは」

それは、その通りだ。シロは今を受肉した元サーヴァントだけでなく、聖杯の泥とインツベルンの呪いを受け、かつては相当に弱体化していた。年月を経ることに少しずつマシにはなっていたようだけれど、それでも今の彼女の力は、英霊全盛期の6割が限度。並

みの英霊と対するにはあまりに不利だし、戦ったところで、人間よりはマシでも、長くは保たないだろう。

それに今の彼女の魔力量を思えば、彼女の主戦闘スタイルである宝具の投影に関して、使い慣れた千将莫耶でもない限りは難しいのだ。今まで溜め込んできた奥の手でも使わぬ限り、通常の宝具を投影することは、今の彼女には負担が過ぎる。夫婦剣以外の他の宝具を投影しようと思えば、物にもよるが、精々一日に1つか、2つくらいが限度だろうか。

それに、魔力供給のラインが繋がっているキリツグ自体、彼女に魔力を渡すような余裕はないのだ。もうずっと、キリツグからシロに魔力は碌に供給していない。今はキリツグとシロのラインは、シロを現世に結びつける鎖役としてしか機能しておらず、シロは魔術礼装を使って、大気中から少しずつの魔力を集めて、それで今の自身を補っている。もしも、彼女が受肉しておらずに、魔術礼装からの魔力だけを頼りにしていたら、きつととつくに自分の身体を維持出来ずに座に帰っていたことだろう。

わたしたちの方針が、メインの聖杯戦争に対しては傍観に徹しようというふうに決めた理由にはそこらへんの事情もある。

だから、今日もまだ、行動を先送りにして、何度も繰り返してきた話し合いをそのまま続けていた。

side・衛宮士郎

その日、俺は久しぶりに弓道部へと顔を出した。

「あ、士郎先輩」

よく知っている、ここ2年間ですっかり見慣れた後輩に声をかけられ、手を上げてよっと挨拶をする。



「桜、お疲れさん。差し入れもつてきたんだけど、美綴のやつは？」  
「美綴先輩は、会議です。わ、レモンの蜂蜜漬けですか」

嬉しそうにほころんで言う桜に、こちらも嬉しくなって笑って、  
「たまにはいいだろ？」と言ってから、聞きたかったことを口にする。

「桜、今日慎二の奴が来ていなかったんだけど、何か知らないか？」  
「え、と・・・兄さんですか」

内気な後輩は、戸惑ったような声で言う。

「その・・・わたしにも、にいさんのことはわからなくて・・・ごめんなさい」

「いや、いいよ。聞いてみただけだからさ」

桜が気にしないように、笑って手を上下にふる。それから、ふと  
気になった別のことを口にした。

「そういえば、桜、最近うちに来てなかったけど、どうしたんだ？  
もしかして・・・シロねえと喧嘩したのか？」

シロねえと桜は仲良しで、喧嘩しているシーンなど見たことなかったから、可能性は低いと思うけど、他に理由も思いつかなかった  
ので、ついそんな風に聞く。

「いえ、そんなのじゃないです」

まさか、と慌てて桜は首を横に振る。それから、ちよつとした家の  
用事で・・・なんていいながら、桜はごによごによと聞こえるか  
聞こえないかの小声で締め切った。

「そつか。桜がこないと寂しいな」

思わず、本音をばやくように漏らす。すると、桜は瞬時に頬をぼ  
つと赤く染めて、俯いた。

「？桜、どうかしたのか？もしかして、風邪をひいたんじゃない・・・」  
「いえ！そんなんじゃないです。わたし、丈夫ですから、風邪なん  
てひかないです。土郎先輩は気にしないでください！」

なんて、赤い顔をして言われてもあんまり説得力がないんだが、  
桜は結構強情だったりすることも知っているので、「そつか、でも

無理だけはするなよ？」なんて、無難な台詞をかける。

「はい、先輩、心配してくださいとさつてありがとうございます」  
そうぺこりと可愛らしくこの後輩はお辞儀を一つした。

と、そろそろ退散したほうがいい時間だろうか、そう思って俺は、最後に桜に一声かけることにする。

「桜、今夜うちに飯食べに来いよ。桜が来るとみんなが喜ぶ」

桜は、戸惑った顔で俺を見ている。それを見て、笑いながら「約束、な？」と言うと、桜は戸惑いがちに、それでも控えめな笑顔を浮かべて、「はい、じゃあ今夜お邪魔します」と言っただけで笑った。

side・アーチャー

「どう？ここなら見通しがいいでしょ、アーチャー」

マスター……名前を聞いてその正体も思い出した。かつて、自分が人間としてこの街に生きていた時に、憧れ、魔術の師匠となつた女性、遠坂凜だ、が、新都のセンタービルの上でそんな言葉を私にかける。

「……はあ。将来、君とつき合う男に同情するな。よくもまあ、ここまで好き勝手連れ回してくれたものだ」

「え？何かいった、アーチャー？」

凜はとくに気にしていない顔で、風に飛ばされる髪をかき上げながら、そんな言葉を返す。

「素直な感想を少し」

言うてから、再び街を見下ろした。

「これなら最初からここにすればよかったな。そうすれば手間もかからずにすんだ」

「なに言ってるのよ。確かに見晴らしはいいけど、ここから判るの

は町の全景だけじゃない。実際にその場に行かないと、町の作りは判らないわ」

「そうでもないが」

アーチャー

彼女は私のクラスが弓兵であることを忘れているのだろうか。なので、簡易にクラススキルのことについて説明をする。

「そうなの？ それじゃあここからうちが見える、アーチャー？」

「いや、流石に隣町までは見えない。せいぜい橋あたりまでだな。そこまでならタイルの数ぐらいは見て取れる」

「うそ、タイルって橋のタイル……！！？」

そうやって素直に驚く姿が、年相応の娘で、当時の遠坂はこんな子供だったのだろうか、とそんなことをぼんやりと思った。このあたりは年を取ったことで感じる若い頃との感覚の違いという奴だろう。

それからも他愛無い会話を、この年若いマスターと一言、二言続ける。

「……？」

ふと、視界に違和感のようなものが襲う。

何かが、『違う』。なにがだ？今、確かにこの視界の端に、目を離せぬ何かが映った。

橋だ。

冬木大橋のアーチの上。そこに、暗闇に溶け込むようにして、その女は立っていた。

どくり、と擬似心臓が嫌な音を立てる。

（誰だ、あれは……！）

漆黒の上下を身に着けた、褐色の肌の女だ。背は高く、白髪を赤い髪飾りを一つつけて結わえている。闇にとけていながら、同時に酷く目を引く矛盾した女。その鋼色の目が、確かにオレの目とかち合った。

その目は確かに、『やはり来たか』そう告げている。

（知らない、あんな女など知らない）

皮肉気に口元を吊り上げて、こちらを見据えるその表情は、いつか鏡で見た自分の顔にそっくりで、嫌悪のあまり吐き気がした。

(あんな女など知らない……!)

そうだ、女だ。オレじゃない。性別が違う。姿も違う。なのに、なんだ？この感覚は。

まるで、これはそう……エミヤシロウを見てしまったかのようにではないか。まるで、同一の存在がそこにあるからこそ生まれる世界の修正力が働いているかのように、あれは認めてはいけないものだ、身体が警報を打ち鳴らす。

これは、一体どういうことだ。あんな女はいなかった。あんな女は知らなかった！オレが参加した聖杯戦争に、あんな女などいなかった!!

ひょっとして、私はとんでもない思い違いをしているのではないか……？

この時代は、私の望みを叶えてくれるその時ではなかったのか……？

ずっと、ずっと願っていたその機会。座から自分が解放されるための一縷の希望。

過去の自分を殺す、その願い。

だが、もしこの世界に過去のオレがいなかったら……いや、いつでも全くの別物であつたらどうする？

そう、もしや最初から、召喚されたその時から既に狂っていたのだとしたら……嫌な想像に歯を食いしばった。

女はもう、橋にいない。幻だったかのように、暗闇にとけた。

「アーチャー……？」

心配気なマスターの声が響く。

「どうしたの？……酷い顔色よ」

その言葉に衝撃を受けた。私の鉄面皮は完璧だったはずだ。内心の動揺を表に出したつもりはかけらもなかったのに。

「なんでもない。凜、そろそろ戻らないか」

「ええ、そうね・・・」  
凜はまだなにかを追求したそうだったけれど、それでも何かを問うことはなかった。  
氣遣わせてしまっただろうか。でも、今はそんな凜の氣遣いがないより有り難かった。

side・間桐桜

ぼすり、と身を自室のベットに投げ出す。  
億劫で何も考えられない。

胸にぽかりと穴が開いて、言葉も、涙すら、出てくることはなかった。

判っていた。過ぎた願いだって。でも、今まではよかったのに、なんで、どうしてわたしは最後の居場所までなくしてしまうのだろうか。

ただ、わたしは、あそこに在るだけでよかったのに。  
酷薄な顔だった。

魔術師の顔だった。

怖かった。本当に怖かった。

ごめんなさい、ごめんなさい。

過ぎた幸せを願ったから、きつと罰が当たったんだ。  
思い出すのは、ほんの3時間ほど前の・・・別れ。

わたしは、間桐の跡継ぎだから聖杯戦争に参加させられるであろうことはわかっていた。

わたしは、その為に間桐に貰われてきた子なのだから。

でも、嫌だと、どうしても嫌だと思って、駄目元でおいさまに

お願いをしたんだ。

「ふむ、良かろう」

そんな、思わぬ許しの言葉がもらえて、わたしは、わたしが呼び出したサーヴァント、ライダーを兄さんに預けて、これであの人たちと戦う必要もないのだと、そんな風にほっとした。

でも、わたしは間桐だから、だからせめてもの戒めに聖杯戦争が終わるまでは衛宮の家に顔を出すのもやめよう。そう思った。

それは、凄く辛い。だって、わたしは衛宮あていの家が大好きだったから。

間桐の家に貰われてきて、ずっと痛いことに耐えてきた。わたしが痛がれば痛がるほど、喜ばれてそんなふうにならずと扱われて、そのうちご飯にも毒が盛られて、全部が痛いことだらけだった。

でも、あの家の人たちは、笑って、わたしを出迎えてくれるから。まるで、本当の家族みたいにわたしを受け入れて、そうやって笑ってくれるから。

ご飯がおいしいと思うのも、わたしが心から笑えるのも、あの家だけだった。

わかっている。おじい様に聞いていたから、しってる。

衛宮は前回の聖杯戦争の実質勝者の家なんだと。いつも微笑んで皆を見守っているおじさまは、魔術師殺しとかつて呼ばれた暗殺者なんだって、ずっときいていた。

優しくて、綺麗で、いつも微笑みながらわたしに手を差し伸べてくれるシロさんだって・・・本当は・・・でも、それでも、みんなあんまりにも優しいから、わたしはいつしか自分が受け入れられているんだって、ここでは必要とされているんだって、そんな怖い錯覚をしちゃったんだ。

わたし、甘えていたんです。本当は、もう駄目なのに。少なくとも、聖杯戦争が終わるまで近づいちゃいけないって知っていたのに。

土郎先輩の笑顔を見て、行ってもいいかなと、そんな馬鹿なこと

を思っちゃったんです。

本当、わたし、馬鹿ですよね……。

土郎先輩は、一般人です。だから、何も知らなかっただけなんです。なのに、勘違いしちゃったんです。

こんな時でも、間桐桜を受け入れてくれるんだって、そんな愚かな勘違いを。

土郎先輩は笑って出迎えてくれました。シロさんも控えめに微笑みながら、でもわたしにやっぱ手を差し伸べてくれました。でも、イリヤ先輩は少し悲しそうな憐れみを瞳に浮かべて、土郎先輩にあわせて表面だけをいつもどおりに、そんなふうにしてわたしに接したんです。そして……おじさま。

いつも、優しくかった衛宮のおじさま。笑って、桜ちゃんよく来たねってそういつてくれたおじさま。でも、その目は……恐ろしい光を秘めていて、土郎先輩が見ていないところで、それは顕著に、瞳で語っていました。『なんで、来たのか』と。

ああ、わたし、来てはいけなかったんですね。馬鹿なわたし。本当、なんでこんなになるまで気づかなかったのかな。

土郎先輩は何もしらない。だから、笑う。陽だまりみたいな笑顔で、汚いわたしに微笑む。……それが、今日ほど辛いことはなかった。

そうして、家に帰るわたしを「見送るから」といつて出てきたおじさま。

にこにここと、いつもどおりに何も知らない土郎先輩たちに手をふって、まるで好々爺みたいな笑顔を浮かべて家族と別れて、そして門の外に出て……がらりと変わった。

ゾツとするほど、怖くて冷たい目。これが、今までのおじさまと同じ人物だなんて、まるで悪い冗談みたいで、冷や汗がどつと背中を流れた。

「桜ちゃん、どうして君は来たのかな？今がどういうときか知って

いるんだらう？間桐のご老人に頼まれてもしたのかい？」

かちり、とライターで火をつけて、タバコを口にしながら、酷薄な声でおじさまはそんな言葉を言う。

「シロは君は無害だから、放っておけというけどね、それを素直に聞くわけにはいかないんだよ。僕は・・・父親だから」

だから、家族を守るためには、害をなす要素を排除すると、この魔術師は語る。

「・・・おじ・・・さま」

声が震えて、上手く言葉がしゃべれなかった。

「君が間桐の後継者なんだらう？なら、わかっているはずだと思うけど」

次はない、とその闇より深い黒の目は語る。

「僕もね、シロや士郎たちが悲しむ姿は見たくないんだ。桜ちゃん、君はわかってくれるよね？」

それは、次に来たらわたしを殺す、ということ。

がくり、と膝が崩れた。

わかっています。

ええ、わかっていました。

わたしは間桐の後継者で、とつくに汚れていて・・・わたしは、ただのおじい様の飼う蟲の一つに過ぎないんだって。

人間の女の子みたいなの、錯覚を、していたんです。

わたし、この家では人間になれるって、そんな錯覚をしていたんです。

楽しいのは、この家だけでした。

ごめんなさい。馬鹿でごめんなさい。

ぼろりと、涙がこぼれた。

おじさまは・・・魔術師殺し、衛宮切嗣はもういない。

誰もわたしを見ていない。体内から見張るおじい様以外誰も見ていない。

ぼろぼろ、涙がこぼれる。



「ごめんなさい、ごめんなさい。」

わたし、家族でもなんでもなかったんです。そんなことに今まで気づいていなかったんです。

まるで道化<sup>ビエロ</sup>。でも、そんなことにすら気づいてなかったんです。

でも、こんなところにいつまでもいたら、誰かに見つかるかもしれない。せめて、何も知らない土郎先輩にだけは見つとも無い姿は見られたくない。

ぐしゃり、涙をぬぐって、蟲<sup>まじゅう</sup>の巣窟の家への道をおぼつかない足取りで辿った。

シャワーを浴びて、そうして、ベットに身を投げ出して、それから、嗚呼と気づいた。

「そっか・・・わたし、何も無いんだ」

最初から、わたしには何もなかったんだ。

なんで、気づかなかったのかな。

嗚呼、もう、いいかな。

疲れた。凄く、疲れた。

いいんです、わたし、遠坂先輩みたいにはなれませんから。

ただ、土郎先輩の陽だまりみたいな笑顔だけを思い出す。

きりり、と胸が痛んだ。

「痛いなあ・・・」

何が痛いのかすらわからず、ただそう少女は呟いて眠りに落ちた。

其れが崩落の足音だったということに、少女、桜自身は気づかぬ

まま、運命<sup>フレイト</sup>は残酷に刻を刻むだけ。

第五次聖杯戦争最後のマスターが現れるのは、この次の日のことだった。

N  
E  
X  
T  
?

第五次聖杯戦争編 04 崩落の足音（後書き）

というわけで、崩落の足音でした。日常編はそろそろ仕舞いになってきましたねえ。

次回、第五話「目撃」は、僕がこの話考え出して以来、三大凄く書きたい名シーン（？）の一つなので、我ながらワケテカしてます。次話のネタをやりたいからこそ、女エミヤさんにうっかり属性をつけたといって過言ではないですからね！そんな感じですよ。ではまた次話で。

第五次聖杯戦争編 05・自撃（前書き）

ばんははろ、E K A W A R Iです。なんだか、書こうと思っていた目標の部分まで少し足りなかったですが、きりがよかったので上げることにしましたとです。

今回の話は士郎のいろんな意味での原作との違いっぷりを楽しめる話なんじゃないかなと思っています。そんな感じですよ。

第五次聖杯戦争編 05・自撃

聖杯戦争。

英霊の座に登録されている英雄の魂の分身を呼び出し、殺し合わせる魔術の大儀式。

そこでなら、満足の行く戦いも出来るだろうと、そんな気持ちで呼び出しに応えた。

最初の召喚者は申し分なかった。

ちつと細かいとはあつたけど、イイ女だったし、色々正反対だったが、そんなところが案外心地よかった。

だけど、アイツといれたのはたったの一週間くらいのもんだ。知り合いに会うのだと顔を綻ばせて告げたバゼット。

救えなかったのは俺の責任だ。

奴のサーヴァントになつちまったのも、俺の責任だ。しょうがねえ。

仕方ねえだろう。ええ？

ただ、昔から俺はイイ女には縁がなかったし、今回もそうだったそれだけだ。

くだらねえ令呪を課されて、いけすかねえマスターに従えられて、全く。

つまんねえことになつちまったな、とそう思っていた。

あの時まで。

「士郎、ごめん。わたし今日学校休むから」

そう、イリヤが言い出したのは今朝のことだった。

二日前から先に帰るといつて、一緒に学校に登校はするも、昼前には帰宅し続けていた義姉イリヤが、今更休んだところで、そこまで驚くことじゃなかったけど、でも藤ねえの件といい、慎二の件といい、昨夜の桜の件といい、違和感や疑問がまた一つ増えたわけで、凄く真相を聞きたい気持ちを我慢して、そのイリヤの言葉を受け入れた。イリヤはほっとしたように、「ごめんね、士郎。あと、士郎も遅くなっちゃ駄目よ。一昨日は本当に心配したんだから」とそんなことを言つて、寂しげに笑つて玄関で別れた。

きっと、その時になれば向こうから話してくれるはずだ、とそんなことを思つてもやもやをやり過ぎしてきたけれど、でも、いい加減そろそろ何が起きているのか教えてくれてもいいんじゃないかと思つ。

特に、昨日の桜の件は、どう考えてもおかしかった。

最近、衛宮うぶは全体的にピリピリしているし、妙な緊張があつて落ち着かない感じだ。しかも、一昨日会つた少女などのことを考えると、なんとなく薄気味悪くて、慎二もないし、変な違和感の中、イリヤ達はその答えを知つていそうな感じなのに、なのに誰も俺にそのことについて言おうとしない状況で、敢えて黙っていることを俺から聞くわけにもいなくて、ずっとずっと変だった。

そんな時に桜の顔を見てほっとしたんだ。ああ、俺の日常はここにあるなつて、そんな安心にとらわれて、そうだ、桜が家にきたら、そうしたら少しはこの変な空気もなくなるんじゃないかってそんな風に思つて、桜に声をかけたんだ。桜がいてくれたら、きっと家は

いつもどおりになる。桜がきてくれたら、イリヤやシロねえたちだつて・・・つてそんなふうに思ったんだ。

でも、多分その俺の判断は駄目だったみたいだ。

ピリピリと走る緊張は、桜がきて余計に大きくなるばかりだった。シロねえは比較的いつもどおりだったけど、イリヤはどことなくぎこちなかったし、親父はとくにおかしかった。

いつもは「桜ちゃん、よくきたね」つてそんな風に笑って出迎えて、桜を可愛がっていたのに。俺には女の子には優しくしないと駄目だつてそう口癖のように言つて聞かせて、桜の事だつて甘やかしていた筈なのに。なのに、表面だけ取り繕つて、ピリピリと敵意染みた気を桜に飛ばしていた。

桜もそれに気付いていたらしくて、恐縮して、おどおどとずっと始終落ち着かない様子だった。なのに無理していつもどおりにしよつとして、痛々しい笑顔で俺に接していたのが、見ててこっちも痛かった。

桜が、家に帰るといつて見送ると親父が言い出したときも、今の親父は桜と二人っきりにしちゃ駄目だと思つて止めようとして、そして、シロねえのそつと自然に出された手に止められた。思わず、吃驚して見上げると、シロねえはどことなく哀しげな眼差しで、口の端だけ笑つて、声には出さずに、大丈夫だ、とそんな風に俺を制した。

それは、とても卑怯でずるい。そんな顔で言われたら、何も知らない俺は口を出せなくなるじゃないか。親父に「らしくないことするなよ」と怒鳴りたかつたのに、出来なくなるじゃないか。そのまま洗いざらい今の状況を聞きだしたかつたのに、そんな顔を見たら言つてくれるまで待つしかないじゃないか。

でも、たとえ止めるのがシロねえであつても、次に同じことがあつたら俺はもう躊躇せずに聞きだすと思う。

大体、俺はもう小さな子供じゃないんだし、何かあつたときにみんなを守るために、俺は魔術も体術も剣術も今まで必死に習得して

きたんだ。これまでの9年の鍛錬、それは些細なものかもしれないけど確実に俺の身になっていと思う。そりゃ、シロねえに比べたらまだまだかもしれない。それでも、俺は衛宮家の長男なんだ。男なら家族くらい守って見せなくてどうする。そう、俺はシロねえのことも、イリヤのことも、勿論切嗣しいきんのことも、桜や藤ねえだって、この手で守りたいんだ。いつまでも、蚊帳の外でなんていられない。だから、明日あたりになっても、何も言わないようだったら、その時は俺から聞こうと思ってる。

本当はシロねえやイリヤたち自身の口から聞きたいけど、俺が待てるのはそれくらいが限界だ。その時は嫌と言っても真相を吐かせる。

と・・・思うけど、まあ、まずは桜に昨日のことを謝るのが先決だよな、とそんな風に思ってる俺は家を出た。

少し心持ち早足に通学路を歩いていく。いつも、イリヤと通っていた道を一人で歩くのは不思議な感じが少しした。

「ん？」

ふと、手に違和感を感じて、首をかしげて左手を持ち上げる。すると、そこには蚯蚓ひみずず腫れのような痣が浮き出ており、血が伝っていた。

「え？」

思わず目を丸くして、まじまじと左手を見る。どこかに引っ掛けた覚えとかはない。なんで、こんな痣が出来ているんだ、と我ながら心当たりのなさに思わず首をもう一度かしげる。

「って、こんなことしている場合じゃないか」

今は朝の登校時間。時間というのは有限だ。いくら余裕をもって家を出ているとはいえ、ぼーっとしていたら、遅刻なんて惨事の憂き目に合う確立とてなくもないのだ。

とりあえず、不思議に思うままに、ポケットからハンカチを取り出して、包帯代わりに巻きつけた。まあ、大して痛くもないし、ハ



ンカチでくるんどけばそのうち血も止まるだろう。

そうして、いつもどおり学校に到着して、門をくぐるうとした。

「・・・ん？なんだこれ」

またも、違和感。なんかやたらと甘ったるい匂いがする・・・と、  
そこまで思ってから正体に気付いて、ぎょつとした。

（これ・・・結界だ）

残念ながら、魔術については半人前という評価を受けている無才な身としては、これがどういう種類の結界かとかそういう詳細はわからないし、そういうのはイリヤの専門だ。だけど、これが『危険』に属するものだということは、家の結界とのあまりの差異と雰囲気から判断することは出来る。

こういうときはどうするべきか。

（確か、2・Aの遠坂は、冬木のセカンドオーナーだって、シロねえは言ってたよな）

セカンドオーナー。一定以上の基準をもつ霊地を魔術協会から任されている名門の魔術師のことをさういうらしい。つまり、裏の世界の冬木の管理人ということだ。そして、管理地で異常事態が起きた時に対処するのも、このセカンドオーナーの役割なのだという。

（どうする。遠坂に相談するべきなのか？）

と、そこまで思考して、以前シロねえに言われたことを思い出した。

（いや、まて早まるな）

シロねえは、俺が魔術師であることは極力知られるな、と何度もこれまで釘を刺してきた。普通魔術師の跡継ぎは一人だけであり、家族全員が魔術師である衛宮の家は異端であり、また魔術協会に関わるのも出来るだけ避けたい。遠坂凜には、衛宮が魔術師の家系で冬木に住んでいることについては協会に知らせず黙認してもらっているが、それでも俺が魔術師だと知られたらそうもいかないのだと。そんなことを真剣な顔で言っていた。

シロねえを困らせるのは俺の本意じゃない。だから、遠坂を俺が頼るとするのは、最終手段にするべきだと、俺は一応わかっているつもりだ。

それに、はっきりいって俺は遠坂と接点なんてないわけで、いきなり話しかけたところで、向こうに警戒心を持たれるだけだろう。

あとこれはシロねえからの受け売りでしかないけれど、ミスパーフェクトというあだ名を持つ、俺も少しあこがれている同い年の優等生遠坂凜は、魔術師としても優等生であるらしい。俺みたいな半人前が気付いた結界に遠坂が気付かない・・・なんてことはないだろう。だけど・・・。

(確か、昨日は遠坂は休みだったんだよな)

遠坂凜は、鮮やかでとても目立つ生徒だ。しかも皆勤の優等生。それが休んだとなったら噂にならない筈がない。

なら、今日ももしかしたら休みかもしれない。

(だったら、俺が調べといたほうがいいのか？放っておくのも気分が悪いし)

俺の魔術は一点に特化していて、こういう結界とかそういう方面には明るくないし、解除方法だってわからない。だけど、基点を探すだけなら、俺でも出来る気がするし、対処方法については、家に帰ってからイリヤに相談して、明日にでも見てもらえばそれでいい。幸いにも、こういうことはイリヤが得意だ。あまり頼りすぎるのも男として情けないけれど、それでも俺に対処は出来ないだろうし、これは『危険』な結界だと思う。誰かが傷つくぐらいなら俺が頭を下げるのなんて安いものだろう。

あと、冬木のセカンドオーナーとはいえ、それほど親しいわけでもない女の子に丸投げするというのも、なんだか納得出来ないものがあるし。

(よし)

行動方針は決まった。とりあえず、結界の基点探しは放課後にまわして、今は桜に謝りに行こうと弓道部へと足を運んだ。

「え？間桐？今日風邪って連絡があつて休みだけど？」  
あれ衛宮、仲良いのに知らなかったの、なんて美綴にいわれてちよつとだけへこんだ。

人生、上手くはいかないよな、うん。

side・アーチャー

その日の朝、遠坂凛<sup>マスター</sup>は学校に行く、そう言い出した。

「凛。マスターになつたからには、常に敵マスターを警戒しなくてはならない。学校という場合は、不意の襲撃に備えにくいだろう」

そんな小言を漏らすと、凛は肩を竦めて、全く応えてない平素どおりの挙措で理由を連ねる。

「そんなことはないけど。いいアーチャー？わたしはマスターになつたからって、今までの生活を変える気はないわ。それにマスター同士の戦いは人目を避けるモノでしょう？それなら人目につく学校にいれば、不意打ちされる事はまずないと思うけど」

「……そうか。凛が決めたのなら私は従うだけだ。だが、霊体化して君の護衛をするぐらいはいいのだからな。まさか学校に行っている間はここに残れ、などとは言つまい」

それに、当たり前じゃない。聖杯戦争中はずっと傍にいてもらうわよ、と言って、年若いマスターは私の淹れた紅茶を啜った。

「もしもの話だが、その安全な場所に敵がいたとしたらどうする」  
確か、私の聖杯戦争のときはあそこに結界が張られていた、そんな記憶が薄らぼんやりとある。なので、そのことをさり気におわす発言をする。するとマスターは、意外な言葉を口にした。

「まあ、いるかもね」

そう、至極あっさりと凜はそんな言葉を放つたのだ。

「何？」

逆にその言葉に驚く。

「一人ね、わたしが通っている学校でマスターになれそうな奴に心当たりがあるのよ」

そんな言葉を淡々と告げるマスター。

「待て、君は敵マスターがまっっているかもしれないと知っていて、学校に行くこうなのか？」

「ええ、そうよ」

こくりと、頷いて、「でもね」そんな言葉で次を連ねて私の言葉を封じにかかる。

「そいつはたとえマスターになっただとしても、不意打ちなんて仕掛けるような奴じゃないの。もし仮にマスターになっただとしても正々堂々聖杯戦争のルールに則って夜に仕掛けてくると思うわ」  
まあ、マスターになれる素質はありそうでも、そいつがマスターになる可能性は低いと思うんだけどね。なんてことをぼやくように続けて、マスターはぐいと残った紅茶を飲み干した。

「さて。無駄話は此処でお仕舞い。これ以上のんびりしてたら遅刻しちゃうわ。行きましょ、アーチャー」

まだ、聞きたいことはあったが、仕方がない。そう思って彼女の供として霊体化して、そのすぐ後ろについた。

「・・・何、これ」

学校には人を飲み込み溶解する結界が張られていた。

『凜、これを張ったのは君がいう心当たりか？』

レイラインを通じて、念話でそう語りかけると、凜は真剣な表情で、いえ、と緩く左右に首を振る。

「こんな杜撰な結界、あいつなわけがないわ。それにあの子が、大好きな弟も通っている学校にこんなものをわざわざ仕掛ける筈がない。これは、第三者の仕業よ。でも、驚いた。あいつ以外にマスタ

「になれる奴なんているわけないと思つていたのに」

あの子？好きな弟？それらの言葉に違和感を覚え、霊体のまま眉を顰めた。これは、『遠坂凜』だ。私がかつて衛宮士郎と呼ばれていた時代に憧れ、魔術の師となつた女性の平行世界の同一人物。なのに、何故こうも言つていることがわからないのか。

「とにかく、これはわたしへの宣戦布告だわ。わたしのテリトリーでこんな下衆なモノ仕掛けたヤツなんて、問答無用でぶっ倒すだけよ」

行くわよアーチャーなんて言葉を携えて、怒気を胸の奥にしまつたまま、凜は颯爽と校内へと足を踏み入れていった。

昼休み。屋上で昼食をとるマスターと2つ、3つ、結界がらみの話をしつつ、「そういえば」と、気になつていたことを切り出した。

「君は敵マスター候補に一人心当たりがあると言つたな。それが誰なのか教えてくれないのか？」

そうというと、凜は肩をすくめながら、「まあ、敵マスター」かもしれない」だけどね」と前置きしてからその名を告げた。

「一つ上の学年の衛宮イリヤスフィールよ」

(衛宮・・・イリヤスフィール・・・だつて・・・?)

その言葉の意味が一瞬理解できなくて、思わず言葉を失つた。それに気付かなかつたらしい、マスターは淡々と言葉を続けた。

「とはいつても、そいつは結構な魔力の持ち主だし、魔眼までもつているとはいえ、跡継ぎは別にいるはずだから、魔術師かどうかの可能性は半々な奴なんだけどね。でも、まあ、冬木にいる魔術師の数なんてたかが知れているわけだし、前途の通り魔術師としての才はあるだろうから、マスターとして選ばれる可能性はあるわ。まあ、自分からそれを望むやつとも思えないんだけど」

今、凜は、「衛宮イリヤスフィール」と、そんな言葉を言ったのか。

(どつという、ことだ)

イリヤが衛宮を名乗っている？アインツベルンではなく？いや、それより、今一つ上の学年と凜は言わなかったか。ということは、彼女は年相応に成長しているともいうのか？

馬鹿な。違う。

私の知っている聖杯戦争とこれは徹底的に違っている。

思い出すのは昨夜の視線。

闇にとける白髪の女。

私に『やはり、来たか』と、そう告げた皮肉気な顔をした、女。

これは、この聖杯戦争は・・・違う。

(認めねばならんのか)

オレの望みは叶わないのだと。

いや、それでも、と摩擦しかけの擦り切れた精神が希望の縁よすがに縋よすがって、手を伸ばす。

衛宮士郎。昔の私。それに会うまではまだ、希望は潰えてはいないのだと、そう信じていたかった。

「アーチャー？どうしたの？」

凜は、急に黙り込んだ私に気付いてそんな言葉をかける。それに、いつもの調子の笑みを口の端に作りながら、「いや、なんでもない。結界の基点を探すのだろう？どれ、私も協力しよう」そういつてごまかした。ごまかせていたらいいとそう思った。

side・衛宮士郎

放課後になってすぐに、女生徒を引き連れた慎二の奴に会った。

「よお、衛宮」

「慎二」

慎二は、何故か今朝から機嫌が頗るいいらしくて、にこにここと笑

いながら俺に話しかける。

「悪いんだけどさ、これから彼女たちと新都に行くんだよね。衛宮さ、僕の代わりに弓道部の片付けやっといってくれない」

「あ、それ藤村先生に頼まれたやつでしょ」

「いいの？」

なんて後ろで女生徒達の言葉が続く。

「いいんだよ。衛宮さ、最近ずっと弓道部に顔出してないだろ。普段部の面倒は僕が見てやってんだからさ、衛宮もマネージャー気取りのつもりなら、弓道場の清掃くらいお安い御用だよな」

かまわないだろ、とにこにこしながら言っただけのける慎二。機嫌がいいけど、吃驚するくらいいつもどおりだ。今朝、昨日なんで休んだのかと聞いた時は機嫌悪そうに濁してたのになあ。とちよつとだけ呆れるような感情がわきつつも「ああ、別にいいぞ」と返事を返す。丁度、人気のない時間帯までどうやって過ごそうかと考えていたところだから、慎二の提案は渡りに船ともいえた。

「確かに、慎二には下級生への指導とか任せっぱなしだからな。それくらいならてんで構わないぞ」

そういうと、慎二は一瞬怒ったように目を見開くが、またいつもの笑顔に戻って、「はは。衛宮ならそういうと思っていたよ。まあ、でも自分で頼んどいて言えた義理じゃないけど、衛宮もあんまり遅くまで残るなよ。最近は本当に物騒だからな」なんて、慎二には珍しい一言をつけたしてから背を向けた。

「じゃあな、衛宮。後は頼んだからな」

「ああ。またな、慎二」

そうやってその背を見送ってから、俺は弓道部に向かって歩き出した。

聖杯戦争にまだまだ大きな動きはなく、私は衛宮切嗣じいさんの傍につきながら、その無線の先の言葉に耳を傾けていた。

「見つかったのは片腕とピアスだけ・・・か」

「はい。あとは多数の血痕だけですが、あの出血量ではおそらく・・・」

機械越しにくぐもった女性の声が淡々と、調べ事の結果を並べていく。

「そうか。しかし、相手は凄腕の封印指定執行者らしい。ならば、そう簡単に死ぬとも限らん。引き続き、君は搜索を続けて・・・」

「シロ、終わったわよ」  
女に返事を返している途中、そんなイリヤの柔らかな声に遮られる。

「これで完成。認識阻害・・・っていうか、誤認ね。見ただけで自動的に発動するようにしてあるから、一般人には普通のコートを着ているようにしか見えなくなると思うわ」

はい、と言って私が以前から頼んでいた依頼物を、どことなく疲れた様子でイリヤは差出した。

「ああ。イリヤ、すまないな」

そういつて受け取ると、イリヤはついできよろきよろと周囲を見渡して「ねえ、士郎は？」と、そんな言葉をかけた。

「士郎はまだ帰っていないの？」

「ああ、士郎はまだ・・・」

と、そこまで言うてから今が何時なのか気付いた。もう夕暮れはとっくに過ぎている。

(ちよつとまで・・・)

そして、あることに気付いた。

(確か、アレが「殺された」のは、「私」が召喚された次の日の夜ではなかったか?)



気付いた途端、ガンと頭を殴られたような衝撃が襲った。

(馬鹿か、私は！！)

そつだ、今日が「衛宮士郎が殺された日」ではないか！そんなことにこんな時間になってから気付くなど、うっかりにも程がある。

「爺さん、今すぐ出るぞ」

ざつと、立ち上がって、エプロンはずして、荷物を背負った。

「士郎が危ない」

side・衛宮士郎

慎二に頼まれ、弓道部の清掃を始めて早数時間。気付けば時間は夕暮れを過ぎて、夜にさしかかろうとしていた。

「……………はっ!？」

しまった、つい久々だったものだからやりすぎた。と思っても後の祭り。当初の目的を忘れ、思わず思いっきり楽しんで弓道場をピカピカにしている俺がいた。

「シロねえじゃあるまいし、何やってんだ、俺」

と、思わずそんな言葉を呟いて、はあとため息をついた。

いや、本当に何やってんだろう。当初は掃除を一時間くらいで切り上げて、結界の基点探しに行こうと思っていたのに、気付けば汚れとかが気になって、ここやったら次あっちゃって、こっちやって、弓の手入れも気になってそれもやって……って感じで気付けば時間が過ぎていた。

いやいや、本当シロねえじゃあるまいし、何やってんだか。

しょうがない。これ以上遅くなったら流石にまずいな。今日はもう帰って、とりあえず結界のことだけでもイリヤに報告しよう、そう思って弓道場の外に出て、異様な魔力と妙な音を聞いた。

(鉄と、鉄がぶつかり合う音・・・?)

そう、まるでシロねえと鍛錬中に聞く音と同じ、それが校庭のほうから響いている。それに惹かれるように、ただ、何事があったも対処できるように、気配と足音は極力消しながら、慎重に音の元出たろう場所へと向かう。

そこで見たもの。それはまるで神話の再来のような光景だった。

人間とも思えぬとんでもない魔力を秘めた赤い男と青い男、それが紅い槍と双剣を手に互いに殺しあっていた。

(なんだよ、これ・・・!)

あれは、人間じゃない。人間の姿こそしているけど、もつと高位の生命体だ。それが、目にもとまらぬかのような速度で打ち合い、斬り合っている。まるで、幻想だ。現実感なんてまるでない。だけど、肌から伝わってくるこの殺気は本物だ。だけど、それ以上に驚くべきこと・・・それは。

(なんであいつ、干将莫耶をもっているんだよ)

あれは、<sup>シロねえ</sup>義姉の武装だ。俺だつて使える、だけど、なんでだ。理由がわからなくて、暫し混乱する。それに、あの白髪の男、あれを見ているとピリピリとおかしな感覚が襲ってくる。ヘンだ、なんで俺は、あいつの剣技からこう目を離せないんだ。いや、それより、シロねえより威圧的ではあるけれど、なんでアイツの型はシロねえそっくりなんだ？わからない。わからないけれど、それは・・・無骨で、されど見惚れるほど綺麗だと思つた。

ざ、と二人の人ならざる男たちは距離をとり、何事かを一言二言話している。それに、大気がピリリと震えて、そして紅い槍を携えた青い男の殺気が先ほどとは比べ物にならぬほど跳ね上がった。

(殺される・・・!)

あの、赤い男は殺されるのだと、言わずともわかつた。瞬間、無意識に、俺はわざと音を立てるようにして、強化をかけた足でもって駆けていた。

(馬鹿か、俺は!!)

あんな奴らに俺が勝てるわけがない。それがわかっていて、なんであんな気付かせるような真似をしたんだ。あれは、俺にどうにかなるレベルの奴らじゃないのに。

(馬鹿か、馬鹿か、馬鹿か)

本当、自分の馬鹿さ加減に嫌になって、内心己を罵倒しながら、校内にむかって、駆けた。

でも、やったことは仕方ない。あとはどうにかしてアレを撒くしかない。あと少しで、裏門の出口にさしかかる。あと少しだ、あと少し・・・すぐにそんな俺の見渡しはやはり甘かったと思い知らされることになったけれど。

「よお、案外遠くまで逃げたな、オマエ」

青い死神が、そこにいた。

とんでもない、魔力の塊だ。やはり、これは人間じゃない。正体はわからずとも高位存在だ。それが余裕の笑みをもって俺を出迎える。気圧されそうになる、それを腹にぐっと力を込めて抑えた。ここまできたら、そう簡単に逃がしてくれるわけがない。それがわかって、覚悟を決めて、男をまつすぐに見上げた。

「ほう？」

男は面白そうな顔をして俺を見る。じり、と背筋に嫌な汗が伝うのを、歯を食いしばって封じた。

「度胸がいいな、ボウズ。いやあ、殺すには惜しい、惜しい」

男は俺を舐めきっている。それが俺が持つ唯一のアドバンテージだ。どうする。こいつに勝てないのはわかりきっている。ここからどう逃げ切る。

「だがな、見られたからには仕方ねえ。ま、恨むんなら自分の運の悪さを恨んでくれや」

「・・・!!」

男は笑いながら槍を向ける。その間も思考し、無手のまま構えを

作った。

シロねえは、俺の「投影魔術」は特に秘匿するように今までしくく言ってきた。誰にも見られてはいけないと、そう言ってきた。だけど、今はもうそんなことを言っている場合じゃない。

（干将莫耶を投影。あの槍の攻撃を一瞬でもやり過ぎして、壊れた幻想で爆破させ、視界を奪ってその隙に逃げるしかない！！）

シロねえならばともかく、俺の技量じゃ、幻想にまで昇華するほどの投影精度をもつ干将莫耶を一瞬で作り出して壊れた幻想まで使えば後が保たなくなるのは自明の理。だが、今は生き残るのが先決だ。そうとも、こんなところでわけもわからず、殺されるわけにはいかない。

俺が死んだら、イリヤたちが悲しむ。それがわかっていて、この命くれてやるわけにはいかない。

（俺は、正義の味方になりたいんだ・・・！）

正義の味方が、自分の命すら守れないんじゃ、笑い話にしかない。周囲の人間を泣かせて何が正義の味方だ。だから、俺は、たとえこんな状況だって、最後まで生き延びるのを諦めたりなどしない。

「この大たわけが！！」

そうして、俺が投影しよう構え、男が槍を下ろそうとしたその瞬間、一瞬の閃光と、よく知った声が俺たちの間に割って入って聞こえた。

「真っ直ぐ帰れと今まで再三言っていただろうが！何をしている！？こんなところで殺されかけるなど、馬鹿か貴様は！？」

その声は間違いなく聞きなれたシロねえの声で、その両手に握った得物でもって青い男の攻撃を塞いで、男のほうを見もせず俺に向かつて思いつきり怒鳴っていた。でもそれすら気にならなくて、俺は思わず呆然とシロねえの手元を見ていた。

シロねえが手にしている得物といえば、白黒の双剣、干将莫耶・・・ではなく、左手は万能包丁で、右手は・・・マグロ解体用の・・・

日本刀みたいな包丁・・・！？

(間違ってる、投影物間違ってるから~~~~!!)

自分の命の危機だったことを忘れ、思わず、そんなことを内心叫んでしまった土郎だった。

NEXT?

## 第五次聖杯戦争編 05・目撃（後書き）

というわけで、目撃でした。次回は「逃走、追撃戦」になります。なんか今回予定のとこまで進まなかったので、次回はこの話書き出してから、書きたくて書きたくて仕方なかったエピソードが二つ入りってことになるんだな。いいい。

ちなみに書きたくて書きたくて仕方なかったエピソード1の片鱗はこの話でも最後ちょっと出てるが。このシーン書きたいために俺はシロねえにうっかり属性つけたんだよ。みたいな感じ。

ちなみに壊れた幻想は物理破壊なので魔力は使用しないのでは？という指摘がありました。この士郎は原作士郎よりは強いとはいえ、サーヴァント並みに至っているわけではありません。投影精度だつてアーチャー達に比べて甘いから中々『幻想』まで昇華したレベルの投影は滅多に作れないし、普通に投影破棄するだけならばともかく、それほど苦労して作ったものを内側から物理的に爆破しようとするれば、相応に労力に魔力を使うだろうとの判断からの描写です。原作の記述からも、普通に魔術を使うだけでも痛みなどを伴うらしいですから、まだ成長途中の士郎がノーリスクでことをなせるとはとても思えなかったからなので、悪しからず。

第五次聖杯戦争編 06・逃走、追撃戦（前書き）

ばんははろ、E K A W A R Iです。前回反響でかすぎてワラタ。でも、個人的には今回の話のほうが本命だったりして。いつもよりちよつとだけ文量は少ないですが、中身は十分濃い話だと思います。ところで、今回の話書いてて思ったのですが、かのフィンランドの白い悪魔「シモ・ヘイヘ」がアーチャーのサーヴァントとして召喚される聖杯戦争・・・とか読んでみたいなあと思った。寧ろ、出てくる英霊はオール現代&近代の英霊で。え？シモ・ヘイヘは英雄ですよ？

第五次聖杯戦争編 06 逃走、追撃戦

シロねえが変なところでうっかりしているのは知っていた。

昔っから、普段はしっかりしているように見えるのに、ちょっと焦るとうっかりが出る事は知っていた。

だから、俺も尚更守れるくらい強くなるうと思っようになっただし、シロねえは女の人だから、そういうちょっと抜けたところも可愛いんじゃないかなと思っっていたわけなんだけど。

だけど、シロねえ。

いくらなんでも今うっかり癖を發揮することはないだろ？

『逃走、追撃戦』

side・エミヤ

切嗣しじいさんの運転するメルセデスくろまに騎乗し、イリヤや士郎の通う学び舎・

・生前は私も通った穂群原学園へと乗り込むと、場は既に異様な空気に包まれていた。

(ちっ。遅かったか)

そのまま、爺さんの車から飛び降りると、士郎の行動パターンや気配などを追って駆け出してみれば、窓からランサーに追い詰めら



れようとしている土郎が見えた。

(あの馬鹿!!)

幸いにも、今の私の気配は礼装のお陰で人間並み、それにプラスして、気配を限界まで絶てば如何にサーヴァントといえどそう簡単に私の存在に気付けるものではない。

ランサーはいつかもみた、余裕の態度で何事かを土郎に言いながら愛槍を向けている。人間相手ということに舐めきっているのがありありとわかった。

気配を絶つたまま駆けながら、音を遮断するための結界をガラス限定で展開。窓ガラスを最小の動きで破り、二人が対峙している廊下へと転がり込み、即座に武器を投影、二人の間に割り込み、実力の一割すら出していないランサーが僅かな驚きで目を見開くのも無視して、そのまま、人の忠告も聞かずに殺されかけた馬鹿者へと怒鳴りつけた。

「この大たわけが!!真っ直ぐ帰れと今まで再三言っていただろうが!何をしている!?!こんなところで殺されかけるなど、馬鹿か貴様は!?!」

すると、土郎は酷く狼狽した顔をして、「か、母さん」とかふざけたことを言い出す。その発言にうっかり、ランサーのことも忘れてつい頭に血が昇る。

「こ、このたわけ、何を言い出す!?!誰が貴様の母親か!?!貴様のようなでかい子供など持ったことないわ!?!」

すると、更に土郎はうるたえて、「ごめん。かあさ・・・じゃなくて、シロねえ。間違ってる!それ、包丁!包丁だから!」

「・・・っは!?!」

言われて気付いた。どうやら焦っていたあまり、夫婦剣ではなく包丁を投影していたらしい・・・って、おい!?!気付けよ、オレ!アブね・・・く、ランサーが人間相手だと思っ手加減した攻撃を選んていなかったら、包丁ごと今頃私真っ二つだぞ。

て、何つい赤面してんだ、私は。いや、それより先ほどからラン

サーがやたらと（槍を向けたまま）大人しいような、と思つてそこで漸く私は士郎のほうから、ランサーのほうへと視線を向けた。

約10年ぶりに目にしたイルランドの大英雄たる槍使いは、ランサーにやにやと笑いながら私と士郎を見て「あん？もうお終いか？」なんてことを言つていた。・・・うわ、にやけ面がむかつく。

「まあ、オマエらを見てんのも飽きないが、時間もねえことだしな。折角出てきてくれたアンタにやあ悪いが、いつちよ息子ともども死んでくれや」

「く、だから息子などではないといつてる！」

言いながら即座に包丁を投影破棄し、干将莫耶を投影。男の紅槍をガギリと、受け止めた。どう見ても遊んでいて、本気とは程遠い大英雄は、ひゅうと口笛を一つ。

「お、なんだ。アンタひよつとして、ゴッズ・ホルダー伝承保菌者か？」

面白そうにくく、っと笑いながら、いう男に対し、はつと口元を吊り上げながら、「さて、どうかな」とわざと挑発的な目で男を見上げた。

「いいな、アンタ。面白くなりそうじゃねえか」

言つと、男の気が先ほどより膨れ上がり、槍をつくスピードが先ほどよりも一つレベルが上がる。

それを男の動きを余さず見ながら、受け流し、応戦を始めると、はつと我に返つたような声で士郎が「シロねえ！」と叫んで私に近づこうとしているのがわかった。

（あの、馬鹿・・・！）

「何をやってる！！さつさと、逃げる」

苛立ち、ランサーの遊びの相手をしつつそう怒鳴りつけるも、士郎は「シロねえを置いていけるわけねえだろ！」なんて見当違いのことを言い出して、自己に埋没するための呪文を口にしようとしていた。

「ッ士郎ー！！」

> i30856 | 3032 <

ゴツつと、回し蹴りの要領で土郎を非常口目掛けて蹴り飛ばす。ガギリと槍を交えながら、ランサーは「おい、おい。あれじゃあのボウズ、死ぬんじゃないのか？」なんてことを楽しそうに口にしなから、やはりこれまた楽しそうな顔をして槍を振るった。

「ふん。あれで死ぬほど軟弱に育てた覚えはない」

「やっぱ、母親なんじゃねーか」

「違うといっている！しつこいぞ、ランサー！」

「ランサー・・・なあ？」

その私の言葉にくくつと、低い声で笑いながら、ランサーは目を細めて、「でだ。それがわかるアンタはやっぱり俺の敵まじゅっしってわけだ」とそんなことを至極楽しそうな声で言った。

「現代の魔術師なんて大したことねえと思ってたが、アンタは大分楽しめそうだな！」

「ッ」

グン、と槍の速度が速まる。軌道を読む。戦術理論を展開する。右下からの心臓を狙った一撃、それを干将で受け流し、体を下に落として、男の視界から逃れ、受身をとったまま口内で呪文を唱えつつ、非常口の方面に向かって身体を転がした。干将は男の一撃の前に弾き飛ばされ、右頬から血が飛び散る。そのまま、気にすることなく、男に弾き飛ばされた干将を些か大げさに爆破させた。

「ッ」

驚いたように跳ねる人外ランサーの気配がしたが、相手は最速の英霊。奴は本気を出していないとはいえ、あれを相手に余裕などない。躊躇なく、飛んで外へと転がり出た。

あれで終わるような輩とは最初から思ってはいない。だが・・・。

（悪いな、ランサー）

私はもう、10年前のようにはいかないのだよ。

「がはっ・・・ツウく」

シロねえに思いつき蹴り飛ばされた腹を押さえて立ち上がる。幸いというべきなのか、蹴り飛ばされた地点から非常口までの距離は大体20メートルくらいしか離れていなかったけど、ドアごと撃ち抜くようにして蹴り上げられた身としては、たまったもんじゃない。

あの時、名前を呼ばれて、これまでの修行の経験から来るだろうと瞬間的に予測して強化魔術をかけていなかったら、きっと内臓ぶちまけてたぞ、なんてことを痛む腹を押さえながら思う。

（それだけ、シロねえに余裕がないってことだったんだろうけど）  
ついで、あの赤い男と打ち合っていた時の青い男の姿を思い出して、ぶるりと震えが一つ走った。

あれは、とても人間に敵う相手じゃない。上位存在だ。それをシロねえがわからない筈がない。なのに、俺を逃がすため残った。本当は助けに今すぐ戻りたい気分だ。けど、それをしたらシロねえの心遣いを無駄にすることになる。

立ち上がり、校庭のほうを見る。目前の見慣れた車が、クラクシヨンを鳴らす。

「士郎！」

親父だ。意図を察して走ってメルセデス・ベンツ300SLクーペに乗り込んだ。そのまま、親父は車をUターン。

「待てよ、シロねえがまだ」

「シロなら心配ないよ。今来るから」

親父の宣言どおり、爆音が一つした直後にシロねえが校舎の外へと転がり出て、そのまま発進し始めるベンツに向かって飛び乗り、俺の横の席へと転がり込んだ。

「切嗣、相手はランサーだ。作戦はスペシャルメニューで頼む」

「は？スペシャルメニュー。」

「うん、OK」

「おい、シロね、どういうこ……!?!?」

ぐん、急に車の速度が加速。ついで、シロねえがのっている右側の扉が自動で開き、ガチャリという音と同時になんらかの結界が展開された。

「なん……!?!?」

「やはり、来るか」

見れば、青い弾丸……ではない。先ほどの紅い槍をもった青い男が、人間ならざるスピードでもって駆け、追いかけてきていた。

「士郎、弾薬の補充を頼む」

「え？うわ、え？え？」

がちやりと、車内に積んであったトランクからおもむろに銃と弾薬を渡される。つて、え？なんでこんな物騒なものが積んであるんだよ！なんて俺の心の叫びも空しく、シロねえはその中から、小型拳銃……ドイツのワルサー社から発売されている、かのヒトラーも愛銃として使用していたというシリーズの戦後モデル、ワルサー PPK/S ブラックモデル（装弾数8発）を手にして、躊躇なく……  
・なんか走って車に追いつこうとしている、あの膨大な魔力を纏った青い男目掛けて打ち込んだ。

ガンガンガンと轟音がして、薬莢が弾数分はじき出される。

ああ、ルパンも真つ青の早撃ちだなあ……つて、そんなこと言ってる場合じゃない！？シロねえ、何考えてんだ！？いくら、相手が人間じゃないだろうからつて、ここ街中だぞ！でも、シロねえは全く気にした風でもなく、「ちっ、矢避けの加護とは厄介な」なんてことを言いながら、次の銃を催促してきた。

（ああ、もう、なるようになれ！）

やけくその気分になって、次はピエトロ・ベレッタM92を手渡す。9mmパラベラム弾の雨があの男を襲っているのだろうが、そんなもの確認していられるわけがない。だが、シロねえが攻撃の手

を緩めていないことを考えたならおそらくあの男はまだまだに追いかけ続けてきているのだろう。

その時、運転に専念していた親父は、「撒くよ」と発言。え？っと思う間もなく、揺れる車内に舌を噛みそうになって、慌てて受身を取って、シートベルトにしがみつく。

ギャギャギャーンなんて、普通鳴らねえだろうって音を立てて、車の速度は加速、複雑な道をスピードを落とさずに駆け抜ける。その様子は、こいつの運転する車には二度と乗りたくねえと10人中10人に言わしめるような運転で、そんな中で、シロねえといえれば、なんか弾を補充した新しい銃を手に、やっぱりアイツ相手に銃ぶっ放してました・・・てえええ！？ちよつと、まて！？シロねえ、流石にそれはおかしいだろ！？

あと、おかしいといえれば、さつきから通行人というか、対抗車がほとんど見かけなくて、見かけてもこの車を避けるように運転しているような、寧ろ銃撃ってるのに、誰も気付いていないかのような・・・ちよ、何したんだ？最初のあれ？最初のあれなのか！？

つか、なんで爺さんもシロねえもこの状況に平然と対応しているんだよ。おかしいのは、俺なのか。そうなのか！？

(もうやだ、この人外魔境)

あ、涙出そうだ。

side・遠坂凜

「何よ・・・これ」

ぎり、と唇を噛んで、惨状を見下ろす。

校舎の裏口で、爆破跡をにらみつけながらそんな言葉が思わずこぼれ出た。

あの時、ランサーとアーチャーの戦いを見ていたらしい何者かは校舎に向かって駆け出した。それを追ったランサーをわたしとアーチャーも追い駆けた。先行させたアーチャーに念話で、『第三者が現れた』と聞き、指針を変更。様子を見守らせることにした。

そして、爆発。

漸く追いついたわたしが、何があったのかとアーチャーに訪ねると、曰く、第三者が自分の投げた武器を爆破させたのだという。

「鉄甲作用とも違うみたいだけど・・・」

魔力の残照から、推測。これは、近代兵器がおこしたものでなく、間違いなく魔術師側の技の一抹。でも、この爆破は火属性の魔術とは違う。自身の属性が五大元素なんだ、それはわかる。だからこそわからない。

（一体、何を爆破させたつてのよ）

これを起こしただろう人間の顔を思い浮かべて、苛立ちを覚える。「凜、ランサーはもう此処にはいない。目撃者と第三者は車にのって逃走したようだ。それを追ったらしい」

淡々と私の従者は、サーヴァントアイツを思わせる顔をして、腕を組んで涼しげにそんな言葉を吐く。

「さて、どうする」

試すような声。それに苛立ちを感じて「いいわ」とそんな言葉で切った。

「第三者が誰なのか検討はついている。今日はもう撤退よ、アーチャー。どうやらわたし、やる事が出来たみたいだから」

結局、あの青い男ははまだ追い払えていない。それに、隣から苛立ちの音が漏れる。

「ちっ、埒が明かん」

言つと、シロねえは銃器を座席の下に落として、ごそごそと後ろに積んであるもう一つのでかいトランクを漁った。

何をしようとしているのか、とたずねたい気持ちはあるが、暴れ馬と化したメルセデスを前にはそんな余裕はない。ないが、シロねえが取り出したものを見て、つい「え？」と声を出して、車の衝撃に舌を嚙んだ。

そう、シロねえが取り出したもの、それはヴァリアントM202A1ロケットランチャー・・・って、なんでさー！？！？そんなの、なんで家の車に積んであるんだよ！？って、え？ちよつとまで、ロケットランチャー！？そつりゃあないだろ！

って、シロねえ何ひよいと背負って車の上に向かつてんだよ、あぁ・・・ロケットランチャーを撃つには車内じゃ手狭だもんなあ・・・うんうん。じゃねえ！ちよつとまで！M202ロケットランチャーって重量12kgだぞ！？12kg！しかも、こんだけ揺れている車の上にひよいつて、ひよいつて！もう、本当にシロねえ、アンタ何者だ！？

ガチャリ、とセツトする音が響く。

(本気でこの街中でそんなものぶつ放す気なのかー！！？)

そんな俺の心の声も空しく、それはゴウつと耳も劈く轟音と共に放たれた。

・・・ところで、M202ロケットランチャーといえば、4連弾可能な4連発式ロケットランチャーである。

当然、聞こえた発射数は4発。

・・・啞然となつても俺に罪はない筈だ。

ひよいと車内に戻ってきたシロねえは妙に清々しい顔をして、「ふ・・・つまらぬものを撃つてしまった」と何かのパロディらしき台詞を呟いた。笑顔が無駄に輝いている。気付けば爺さんの運転が



元通りになっていたの、口を開く。

「シ、シロねえ、アンタ、何考えてんだ！！周囲に被害とか出たら」

「心配せずとも、あれを標的にしている以上周囲に被害など出ん」

きっぱりとした言葉だった。いや、まあシロねえが的をはずすとは思えないけど・・・ってそうじゃなくて。

「いや、じゃなくて、そうだ、ロケットランチャーって、何考えてんだよ！そこまでして・・・」

「そこまでしてもあれは仕留められんさ。何せ、あれは神秘の塊だ。近代兵器などでは傷一つつかんからな」

言うシロねえの顔は真剣だった。

「私がやったのはただの足止めだ」

それで話はもう終わりとばかりに、今度はシロねえは親父に向き合い、そのすぐ傍にある無線を耳にかける。

「すまん。害虫対峙に手間取ってな。遅くなったが報告の続きをしてくれ。もしかしたら、君のもつ情報がチェックメイトに繋がるかもしれないぞな」

side・ランサー

「おいおい、危ねえ姉ちゃんだな、ええ？」

追いかけている相手のあまりにも躊躇のない攻撃を前に、つい口元を吊り上げてそんな言葉を漏らす。

基本が霊体であるサーヴァントだから、現代兵器なんぞじゃあ傷つきゃあしないが、それにしても、ここまで容赦ない相手となると、つい嬉しくなって口を綻ばせちまう。

歡喜に手が震える。

(つまんねえ仕事だと思ったが、こりゃあ中々どうして)

先ほど見た褐色白髪の女の顔を思い浮かべた。

学校で興味本位で声をかけたマスターが従えていた弓兵のサーヴ  
アントと、同じ武器をどこからか取り出した女。あの氣にくわね  
え野郎と同じ戦法をとり、同じ武器をもち、同じく白髪と鋼の瞳に  
褐色の肌という異彩を放つ組み合わせの身体的特徴をもつ女。

(子孫つてとこなんだろうな。にしても、ゴッス・ホルダー伝承保菌者か)

最初のマスター、バゼットがソレだった。

先祖代々名と宝具を受け継ぎ、生身で宝具を扱う異端の魔術師。

(面白くなってきたじゃねえか)

アーチャーあの男は気に食わねえが、女・・・それも人間だつていうんなら  
話はまた別だ。

こんな現代にも、バゼットの他にもあんな女戦士がいたとは、こ  
れでワクワクせずにいられるか。

(さあ、次はアンタは何を見せてくれるってんだ!?)

side・衛宮士郎

車は坂の上へと駆け上がる。自宅はもう目の前、そこに至って、  
シロねえは「士郎」と俺の名を呼び、俺の身体を抱えてとんだ。

メルセデスはスピンし、派手に回転して止まる。

その顔末を見届ける前に、シロねえは「土蔵へいけ!そこでイ  
リヤが待っている」と切羽詰った声でいいながら、その手に黒い弓  
を握り、暗闇に解けるように木の陰の中へと身を潜ませた。

「・・・あとで、全部話してもらおうからな」

いいながら、土蔵に向かって走る。

「士郎!」

イリヤは心配そうな泣きそうな顔をして、顔面蒼白のまま俺の手

を握って、土蔵の中へと引つ張り込んだ。

それから、俺の左手に気付いてぎよつとし、ぎゅつとその手を握って目をつぶった。

「イリヤ」

「土郎、ごめんね。本当は土郎を巻き込みたくなかったの。でも、土郎が選ばれたから、わたしにはもう無理みたい」

「イリヤ・・・何が起きているか知らないけど、俺なら大丈夫だぞ。イリヤに巻き込まれても嫌なんかじゃない」

そう、元気づけようと口にする、イリヤは「だから、嫌だったのよ」とそう零した。

瞬間、館に侵入者を告げる警報が鳴り響く。

「土郎、よく聞いて。今から土郎にはある儀式を行ってもらおう。もう一刻の猶予もない。だから、今からお姉ちゃんが言うこと、一言一句間違わず後に続けて」

「ああ、わかった。それが、外にいるシロねえたちの助けにもなることなんだな？」

それにイリヤは、こくりと頷いた。

外の音が激しい。でもそれが気にならないほど、自分の集中力が高まっているのがわかる。

「・・・告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うのならば応えよ」

イリヤの手を握る。そこから行おうとしていることが伝わってくるようだ。

儀式のはじめに血を採るために傷つけた左手の小指が熱い。

「誓いを此処に、我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三天の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」

カッと、魔方陣が光を放った。

まぶしくて目が開けていられない。何が起きた。何が起きている。

全て遠い。そんな中、少女の声が厳かに明瞭に響く。

「サーヴァント、セイバー。召喚に従い参上した。問おう・・・貴方が私のマスターか？」

視界が戻って真つ先に見たもの、それは一人の少女騎士の姿。

金紗の髪を結び上げ、青と銀の静謐な鎧を身に纏い、青白い月光に照らされた凜とした瞳の人とも思えぬ美しい少女。

それは酷く神聖で、侵し難いほど清廉で、なのに何故か、そのどこか哀しみを背負ったその瞳が、あの大災害の日、始めて出会った時のシロねえの印象に酷く被って見えた。

これが俺のマスターになった日。

NEXT?

第五次聖杯戦争編 06・逃走、追撃戦（後書き）

というわけで、逃走、追撃戦でした。

個人的に冒頭の「母さん」「誰が母さんだ!」「ごめんシロねえ間違えた。じゃなくて、投影間違ってるから!」「は!？」のやりとりがこの話書き出した当初から描きたくて仕方なかったとです。これ書きたいがためにうっかりスキルをつけたくらいだからなあ。

あと、ワルサーPPK。ワルサーをぶっ放すエミヤさんが書きたくて書きたくて仕方なかったんです。うん、漸く書けた。もう悔いはない（ちょ）ロケランオチも個人的には気に入ってる（おい）

あと、ケリイにはかつこよく車をすげえドラテクで運転してもらいたかったのですが、車の免許すらもってねえおいちゃんにはそんなの書くの無理すぎた。サーセン。

今回は内容決まっていますが、タイトルは未定。  
あ、そうそう、セイバーのステータスですが、士郎の能力と幸運度上昇に伴い、原作と変更があるので記載します。

サーヴァント・セイバー

属性：秩序・善

筋力B 俊敏B

魔力B 宝具C

耐久B 耐魔力A

幸運A+ 騎乗B

直感（A）、魔力放出（A）、カリスマ（B）

第五次聖杯戦争編 07・発動（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

微妙に難産だったこの回、思うように上手く話が進まなくてまいったまいった。イメージはあったけど、それをまとめるのは中々難しいものです。とりあえず、色々フラグを立ててみた。

ここに、この時代に召喚されるのはこれで二度目。ただ、それは私の記憶とはあまりに違っていた。そう、あまりに違っていったのだ。だから、私は、今までにない選択をする。

『発動』

side・衛宮士郎

ぐらりと、身体が揺れた。

「……ッ」

ずるりと、倒れこみそうになる体を隣のイリヤが支える。眩暈がした。

(……なんですか……)

と、思っただけで正体に気付いた。目の前の少女だ。青と銀の鎧を身に着けた金髪の人ならざる少女、彼女に向かって俺の魔力が流れていっている。吸い上げられている。その量たるや、今にも気絶してしまいそうだ。

だけど、今はシロねえたちがアレと戦っている最中なんだ、そんな無様は晒せない。

ぎりど、唇をかみ締め、右手を爪が突き刺さって血が流れるほどに握り締めて耐えた。左手の甲が何故か熱く痛むのも、今だけは有り難かった。

「・・・ここに、契約は完了した」

朗々と静謐な声がそんな言葉を紡ぐ。数瞬遠かった五感全てが、痛みによって戻ってくる。

「セイバー」

そう、目の前の少女に懇願するような声を上げたのは隣で俺を支えるイリヤだ。

「セイバー、悠長なことはしている暇はないの。この家にランサーが攻め込んできている。今、他の家族が応戦しているけど、長くは保たないわ」

それに、セイバーと呼ばれた少女は僅かに困惑染みた色を表面に乗せて「失礼ですが、貴女は？」とそんなことを尋ねた。

「わたしは、貴女のマスターの姉よ。貴女のマスターは召喚による消耗でマトモな指示は出せない。だから今はわたしに従ってもらわ」

その言葉に、セイバーは眉を顰めると「いいでしょう。ランサーが来ているというのは本当のようだ。では、マスターを頼みます、<sup>メイガス</sup>魔術師」と言つて、土蔵から飛び出していった。

「待つ・・・」

思わず手を伸ばしたが、ぐらりと体が傾く。

「土郎。駄目よ無茶をしちゃ。本来なら土郎のレベルで英霊を召喚なんてしたら、その場で即気絶してもおかしくないんだから」

英霊・・・？よくイリヤの言っている意味がわからない。ただ、あの青と銀の少女はやっぱり俺が召喚したらしくて、それも尋常な存在じゃない事だけはわかった。あれは、あの青い男や赤い男と同様の上位存在。

確かにイリヤの言うとおりにしたとはいえ、魔術師として半人前である俺が、なんでそんなものを呼び出せたのかはわからない。



だけど、あの少女を呼び出したのが俺だというのならば、尚更、俺は見届けなきゃ。

そうして、庭のほうへと視線を向ける。

そこで見たもの。銃を抱えて庭端にいる親父と、いつの間にか右胸に胸当てをつけて、体中に浅い傷を作ってる黒衣のシロねえ。そして、青い男を圧倒するかのように切りかかっていく青と銀の鎧の少女。

セイバーと呼ばれた彼女は、一見小柄で華奢なその体のどこにそんな力を秘めていたのか、圧倒的なまでの豪腕で青い男に切りかかっていく。その手に握っているのは・・・一体何なのか。見えない何かを握っているのは確かなのに、男の槍と刃を合わせる鉄の音が響いていることから、何か武器を手に行っているのは確かなのに、それは見えなかった。

それに対して忌々しげに男は吐き捨てた。

「卑怯者め、自らの武器を隠すとは何事か・・・！！」

少女はそれに答えず、華奢な体つきに似合わぬ猛攻を男に叩きつけている。ただ、気のせいなのか、ちらりと親父のほうを一瞬だけ見て不解そうな表情を浮かべたような気がした。が、それは本当に僅かな刹那のことで、即意識を全身青い衣装に包んだ、紅い槍を携えた男へと集中させている。それはそうだ。いくら物凄い力で男を圧倒しているといっても、油断すれば狩られるのは少女のほうなのだ。少女に劣っていようと、それぐらいに男もまた尋常ならざる相手なのだ。

「デメエ・・・！！」

苛立たしげにその声を漏らして、男は後進した。

おそらくは、一切その姿のわからぬ武器に間合いの取り方がわからず、攻めあぐねているのだろう。チツと舌打ちをして、それでもまるで暴風のような少女の猛攻を長槍で防ぎ続けている。

少女は守りに回った相手に対し、深く踏み込んで、その不可視の何かを渾身の力で叩き下ろした。

「調子に乗るな、たわけ……!!」

男は跳躍、まるで消えるかのような素早さで後ろに跳び、少女の一撃は空を切って地面を砕いた。

その直後、気合の声を聞いて男は着地点から今度は少女に向かって三段跳びで立ち向かい、地面に剣をつけた少女に槍を振りかぶるそれを、セイバーとイリヤが呼んだ少女は剣を下ろしたまま体を反転させ、流れるような所作で剣を男に叩き込んだ。

「ぐっ……!!」

不満そうな色を乗せて弾き飛ばされる男と、その結果をまるでわかっていたかのような色をどことなく表情に乗せて見据える、青と銀の鎧の少女。その攻防によって、男と少女の距離は大きく離された。

その瞬間、タイミングを読んで、シロねえのハスキーな声が響いた。

「爺さんッ!」

合図。間違いなくそれは合図だった。

第三の結界が発動する。

地脈を利用した結界が、衛宮家このいえを異界へと隔離した。

青い男も、青と銀の少女も、それを驚愕の目で見ていた。

side・言峰綺礼

「む……?」

それは突然だった。

黄金の王が目覚めるまで、暇つぶし代わりに知り合いの封印指定狩りから奪い取ったサーヴァントを使い、視力を共有させて偵察に使っていた。

そして、今宵、妹弟子のサーヴァントと対峙させ・・・そのサーヴァントが十年前の衛宮切嗣サーヴァントの従者であった女と同じ格好と特徴をしていることを不審には思ったが・・・戦わせた。そうした戦いの終盤、切嗣が第四次聖杯戦争の後引き取ったという養子が現れた。目撃者は殺せとそう事前に指示をしている。相手があの子の息子というのなら尚更だ。そのまま私は成り行きを見守っていた。そこに現れたのは魔術師殺しのサーヴァントであった女。まるで元英霊とは思えぬ・・・人間なまみそのものであるかのように弱体化しているあの女の登場に、これは面白い余興になったと遊び心が芽生えたのが悪かったか。

私は、そのままその女も仕留めるように指示をして追わせた。弱体化しているのはあの女だけではない。マスターである衛宮切嗣もそうだ。そうだと知っていた。だが、ただで死ぬような輩とは元より思っていない。此度の聖杯戦争でもなにかしらやるだろう、最後には私に立ちふさがるのは奴だろうと思っていた。だが・・・それでも、ここで死ぬようならば所詮それまでの輩なのだ。ここで死ぬようならば結局は奴のレベルはそれだけだった、そういうことなのだ。

だから、けしかけた。

ここで死ぬならば所詮それだけの輩。しかし、ここで生き延びるのならばきつと私を楽しませてくれるだろう。奴の後継者のことも気になっていた。果たしてどれほどのものかと。

だが・・・。

(やりすぎたか)

奴の後継者しゆいむがサーヴァントを呼び出した。ソレと戦う我が駒。そこまでは視えていた。

だが、なんらかの境界が発動したかと思えば、件のサーヴァント、ランサーと繋げていた視覚のリンクは強制的に断ち切られていた。念話も試してみたが、なにかが阻害していて声は届かない。腕にある令呪を見れば契約が断ち切られたというわけではないが、

アレに使える令呪は残り一つなのだ。令呪で無理矢理呼び戻すことも出来るが、そうしたらアレは私を殺しに向かうだろう。それくらいはわかっていた。

「ままならぬものだな・・・」

ふむ、と思索する。でも、まあいいとすぐに思い直してアレのことを考えるのはやめた。

どうせ、あれはただの拾い物だった。ただの暇つぶしに手に入れた駒だ、この後本当に消えようが別段そこまで惜しいわけでもない。まだ、切り札はある。終盤まで関わることが出来なくなったのは残念だが、それだけだ。

「さて、此度の聖杯戦争では、どれくらいの血が流れるのか」  
それだけを思っ、にっと口元に笑みを浮かべた。

人は歪んでいると私を称するだろう。だが、それがどうしたというのか。私はただ、人が美しいと思えるものが美しいと思えず、人の不幸にしか快樂を見出せなかった。ただ、それだけ。そういう風に生まれついた。なら、そういうふう生きる。私が意義を見出すとすれば、きつとそう。自分を貫く。それが生まれながらにして歪を抱えた私の唯一の矜持だった。

side・エミヤ

これは賭けだった。一歩間違えれば自分が殺されることがわかりきった賭け。だが、それがどうした。自分の命を担保とすることなど、慣れきっていた。

「爺さんッ！」

合図を送る。それを受け、切嗣は、<sup>マスター</sup>在るがままに全てを受け入れる第一の結界から、もしもの時の為に事前に用意していた第三の結

界へと切り替えた。

サーヴァント二人は驚きを表情に出して私と爺さんを見ている。

当然だろう。一定量以上に放出する魔力は、地脈を利用したこの結界によって吸い上げられる設定になっているのだから。私だって若干動きづらい。それが純粹なサーヴァントならば尚更だ。普通にしている分にはそれでも影響はないだろうが、戦闘となると魔力の消費量は大幅に上がる。そして彼らは直前までその戦闘を行っていたのだ、突然奪われた魔力量など、私の比にはならないだろう。

それに、彼らは気付いただろうが、この結界が発動している間は事前に描かれている術式により、マスターとサーヴァントを繋げるレイラインにノイズを送り込み、正常な念話や視力共有などの邪魔をする作用を施してある。

とはいえ、マスターとサーヴァントを繋ぐラインというのはそう単純なものではない。故に、結界が発動していても極近い位置にマスターがいれば一応念話などは通じるだろうが、マスターと遠く離れているとなると話は別だ。間違いなく、マスターとのそういう繋がりは結界発動中は強制的に断たれる。しかも、性質の悪いことにそれらをシャットダウンするためのノイズを発生させるために使う魔力は、今まさに彼ら自身から巻き上げている魔力を応用したものだ。元が自分のものなのだから、毒になろう筈もない。

「そこまでだ。二人とも矛を納める」

その私の言動に、油断ならぬ構えをして、サーヴァント二人は私をにらみつけた。

「貴様、何者……いや……今何をした」

そう、ぎりりと歯軋りをさせながら、低く問うたのは、懐かしき少女と同じ姿と魂をもつ剣使いの少女、セイバー。それを無視して私は「ランサー」と青き槍使いに話しかけた。

「いや、アイルランドの大英雄殿と呼ぶべきかな？ 確か君は誓いで目下からの食事の誘いは断れぬのだったな。どうだ、家で夕食を食べていけないか？」

笑みさえ浮かべて、言う。

それにびっくりと、片眉を上げて、ランサーは猥染みた殺気を飛ばしながら、「ほう、俺の名前を知っているってわけか。女を殺すのは趣味じゃあねえんだが・・・それがどういう意味かわかっているんだろつな」と、自分の愛槍を構えつつ言った。わかっているとも。

名を出すということは、この男が相手を「殺す」と決めると同意なのだ。だが、むざむざ殺される気もない。これは賭けだ。出しても無駄になる確立はある。だが、その一方でこの男ならば、この切り札を切れば、少なくとも自分を今すぐ殺そうとはしなくなるのだからと、そんな確信染みた予感もあつて、用意していた切り札を口にした。

「ランサー、バゼットは生きている」

びっくりと、男の殺気が少し薄れた。

「・・・テメエ」

怪訝な紅い目が私を見据える。それを気にせず、私はその人間ならざる目を真っ直ぐに見ながら淡々と言葉を紡ぐ。

「事実だ。私たちは数日前から冬木で起こったことについては出来る限り把握している。つい先ほど仲間から連絡があつてな、双子館の隠し部屋で、片腕を失った仮死状態の女を発見したそうだよ。バゼット・フラガ・マクレミッツ、君の元マスターだろう？」

男はまだ槍を下げない。ただ、静かに私の言葉の続きを待っている。

「仲間は、瀕死のまま眠り続けている君の元マスターを治療の為に運んでいる最中だ。さて、私たちについてくればもう少し詳しい話や、君にとっても興味深い話をする事が可能だと思っただが、どうかね？君の現・主については見当はついていないが、そいつは君の元マスターの仇ではないのか。なあ、ランサー。君は主の敵討ちをしたいとは思わないか・・・？」

そう口にすると、男はふうと息を吐き出して、「ああ。そうだな・・・いつかは殺してやると思っっている野郎だ。それでも俺は主は裏

切らない主義なんでね、今だ令呪を失っていない以上、アイツが俺のマスターだ。だが、アンタの誘いは中々魅力的だ。さてどうしたものか」言いながら、男は私を試すような視線を送ってくる。

「どうせ、今の奴には見えてしまい。ならば、知らぬ存ぜぬで通せばいい。そうだろう?」

言つと、男はぼつりと「気にくわねえな」と漏らし、それから槍を下げて「名前」と口にする。

「名前くらい名乗れ。テメエは俺の名前を知つてて、俺が知らぬというのは気にくわねえ。相手の名を口にしようってんなら、自分の名を名乗れ。それが礼儀だ」

ぎらりと、どことなく物騒な光を目に宿して、ランサーはそう告げた。

「エミヤ・S・アーチエだ」

自分でも驚くほどすんなりと、ここ10年で言いなれた名が口から流れ出た。

それを聞いて、今までの様子はなんだったのかと思うほど態度を一変、ランサーはにっと笑みを浮かべて私に近寄り、バンバンと肩を叩いて「よし、じゃあ、アーチエ行こうぜ」とかいつて、屋敷の中へ向かって歩き出す。・・・内心馴れ馴れしいなこいつと思つたが、大型犬にからまれたと思えば別にいいか、否定したら面倒な話になりそうだし・・・と思つて受け流すことにした。

「待ちなさい・・・!」

それに、静止の声をかけたのは、青と銀の鎧の少女だった。

「貴女が誰なのかは知りません。ですが、勝手なことはやめてもらいたい。貴女はマスターの家族と聞きました。それが、何故敵のサーヴァントを家に上げると? 悪ふざけはやめてもらいたい」

ぎらりと、不可視の剣を構えて、そんな言葉を吐き出すように言うセイバー。

確かに彼女の言うことは、聖杯戦争におけるサーヴァントの言動

としてとても正しいだろう。そして、彼女がそういうことを口にするのは、性格上やるだろうとわかりきっていたことでもあった。

「マスターの家族だろうが、場合によっては、私は貴女を斬る事も辞さない」

言いながら、不可視の剣を向けてくるセイバー。魔力を吸い上げられて辛いだろうに、それを表に出していないのは流石というべきだろう。

「やめろ、セイバー」

それに静止の声をかけたのは、ふらふらの体でイリヤに体を支えられながら歩く士郎だった。その姿を見て、ああ、今回はキチンと彼女とレイラインが通ったのだなと思つて、そんなことに安直した。全く、私は馬鹿なのか。今まさに私に殺気を飛ばして、敵になりかねない少女の安否をこんなところで気にしてしまうとは。たとえ、同じ容姿と魂とを持ち合わせていようと、あれは私が地獄に落ちても忘れぬと思ひ焦がれた少女とは同一の別人なのに。

そうだ、そもそも呼び出される彼女に対して、過去のように接しようなどと最初っから私は思っていないかった。なのに、それに徹し切れないというのは、やはり馬鹿者というしかないだろう。ただ、表面だけはとりつくろつて、それらの感情を表に出さないようにした。

「マスターは黙っていてももらいたい。わかっているのですか。聖杯戦争とはサーヴァント同士による殺し合いなのですよ。聖杯を手にするのは一人だけだ。だから・・・」

「ごめん、俺はセイバーが何を言っているのかわからない。でも、シロねえに手を出すのは、俺が許さない」

その言葉に、何故かセイバーは泣きそうな目を一瞬浮かべたような気がした。

「行こう」

切嗣は出来るだけ日常に近い声を作つてそう告げ、玄関に向かつて歩き出す。



「セイバー。ごめんなさい。後で出来る限り色々話すわ。だから、今は剣を収めてほしいの」

そういつて、イリヤもまた、士郎を支えたまま、家の中へと向かう。

少女は呆然と立ち尽くす。それに対して、私は……。

「セイバー、君の願いは叶わない」

そんな言葉を静かな声でかけた。

セイバーは碧い瞳を見開いた。ぎよつとしたそんな顔。そこに何かの絶望を思い出したかのような色を見た。

(……?)

違和感が一つ。

何か、歯車が噛み合っていないような、そんな違和感。

思わず、じつと少女の顔を見た。それに、私の肩を掴んでいたラッサーは、ぐいと、肩を寄せ「行こうぜ」というジェスチャー。

騎士王の名を持つ少女は、何かに耐えるように唇をかみ締めて、長い睫を伏せて手を握り締めたかと思うと、きつとこっちに敵しい視線を送り、「わかりました。いいでしょう魔術師<sup>メイガス</sup>。今は剣を納めます。ですが、後で私にも納得のいくように説明をしてもらいます」と言つて矛を納めた。

まただ、また違和感。

果たして、彼女はここで矛を納めるような性格をしていたのだろうか。いや、セイバーはここまで悲愴的であったろうか。元から責任感が強く、王としての責務が強い女<sup>ヒト</sup>であることは知っていたが、それでも、もつと彼女は好戦的で、聖杯に対してのかける思いというのは並々ならぬものがあつたのではないか？それが他人に「君の願いは叶わない」といわれただけで、あそこまで絶望を思い出すような、そんな少女だっただろうか？

思えば最初から、彼女には違和感があつた。

そう、切嗣<sup>しん</sup>を見たときの態度や、私に対する不信感。それらの反応はまるで……知っている風景の中に混ざつた異物を見るようで……

・まさか、と自分の想像を頭を振ってふり払った。それに、すぐ隣にいたランサーは不思議そうに、「なんだ？アンタ頭でも痛いのか？」とかそんなことをあっけらかんとした顔で聞いてきた。

「いや、なんでもない」

気にするなとそういうのと同時に居間にたどり着く。すると、ランサーはどかり、座布団に腰を下ろして「んじゃま、いつちよ頼むぜ」と言っけて手をひらひらふった。

「何がかね？」

そう問うと、ランサーは片眉を不思議そうに顰めて、それからこんなことを言った。

「何がって、飯作ってくれんだろ」

（あ・・・）

そういえば誘い文句として最初に言ったな。すまん、忘れてた。とか、素直に言うのもいやだったので、誤魔化すようにいつもの赤いエプロンを身に着けながら「暫くまってる」と言っけて冷蔵庫の中身をのぞいた。

そのタイミングで、土郎を抱えたイリヤが部屋に辿り着く。

「シロ、何しているの」

「夕食の準備だ」

「・・・」

どことなく、力が抜けているように見えたのは多分オレの気のせいじゃないんだろうな。

そして、次に土郎に視線をやる。先ほどはああセイバーに啖呵を切っていた土郎だったが、今は朦朧としていて、疲労を前に瞼を重くしているのがわかった。

「土郎、夕食が出来たら呼ぶ。だから、今は休んでいる」

「いや、シロねえ・・・俺ちゃんと手伝うから・・・」

「そんな体で何が出来る、馬鹿者。いいから部屋で寝てる。そうすれば少しは魔力も戻る」

言つと、流石に自分の言動に無茶があったと思ったのか、土郎は

罰の悪そうな顔をして、自室へと戻った。

それと入れ違つように入ってきたセイバー。

「……貴女は何をやっているのですか？」

台所に立つ私を見て、開口一番そう口にした。

「夕食作りだが……」

まあ、先ほどまであんなことがあったので、突っ込まれる気はしていた。

セイバーは、「何を悠長な」とか言いながら、きつとランサーをにらんで、それから自分の顔を覆つてうなだれた。

直後響く、グウという腹のなる音。セイバーの顔が赤く染まる。

「ほお〜？」

身近で聞いたランサーはにやにやとした顔で、そのままセイバーを見て「なんだ、セイバー、おまえ実は……」などと、いらんことを言おうとしているのがわかったので、それを最後まで言い切る前に、言葉をかぶせて、「セイバー、よければ味見をしてくれないかね？」とそんな言葉をかけてさえぎった。

セイバーは、悔しそうな顔をしつつも「わかりました」といつてやってくる。それに、内心ほつとした。

くそ、ランサーの奴め、余計なことを。もう少しで屋敷が吹っ飛ばどころだったではないか。

その後、余計なことにならないように、お茶請けと緑茶を人数分出して、出来る限り急いで夕食作りに励んだ。

そうして、衛宮家の遅くも緊張感をどことなく孕んだ晩餐会がかくて始まる。

NEXT?

第五次聖杯戦争編 07・発動（後書き）

というわけで「発動」でした。

今回は・・・どこで切るのかなあと迷っているが、場合によっては今回の終盤部分以上にコメディ風になるかもしれない。

つつても、うっかりシリーズでコメディが出来るのは序盤である今くらいなので、話進むことにシリアス度が増していく気はします。そんな感じです。

第五次聖杯戦争編 08・認識の違いによる見解のすれ違い（前書き）

ばんははろ、E K A W A R R Iです。

今回は久々に字数多めでアレでした。

ちなみに前回の話上げた時に今回の話で出るネタを見事当てた人いでドキンとしましたが、ぶっちゃけ今回のネタは言われて考えたわけではなく、元からそういう予定で考えてた話ですよ？とか言ってみる。

まあ、そんな感じですよ。

もし聖杯戦争に本格的に関わらざるを得なくなった時、出来ればランサーを引き込みたいといったのはオレだった。

基本的にサーヴァントは、聖杯を求めて呼び出しに応じるといわれているが、この男の願いは戦う事であり、聖杯には興味ない以上私たちの目的に反することもなかるうと、そんな言葉で親父に説き伏せた。

だが、引き込みたいといった本当の理由はまあ、非常に私的なことで。

10年前の聖杯戦争の時に遠坂凛<sup>マスター</sup>であった少女を、助けてもらった恩を私が勝手に返したかったからという、そんな自分勝手にも程がある理由だった。

10年前、私のマスターである少女を助けて消えた男と、今回召喚された男は厳密には違う存在だなんてことは百も承知の上。ではあるが、それでも恩がある相手と同一の存在が、精一杯戦いたいというそんなサーヴァントとして召喚される以上本来なら当たり前に叶う願いも果たせぬままに、言峰に使い捨てられるのをただ見過ごすというのも中々胸糞の悪くなる話で。

たとえ、仮にもし10年前に消えた男と全く同じ・・・ランサーがその時の記憶をもっていたと仮定しても、恩返しに助けたいなどといったら、私と違って英雄としての矜持<sup>プライド</sup>の高い男は、俺が選んだ道に余計なことをするなと殺気交じりに怒鳴りつけて私の提案を突っぱねるだろうことはわかりきっていたし、口が裂けても本人にその動機を言うつもりは皆無ではあったが、その上で出来るだけ自然にこの男を味方につけられる方法として、この男の元マスターの件

に目をつけた。

仇を討ちたいとは思わないか、とは我ながら中々卑怯な言葉だ。

この言葉にランサーが乗ってくる可能性は半々と見ていた。

いや、どちらかというところと激怒する可能性のほうが高いのではないかとさえ思っていたが、意外にも男は乗った。

乗ってきたかと思ったら、男が順応するのは早かった。先ほどまで浮かべていた獣染みた殺気はなりを潜め、若干鬱陶しく感じるほどに馴れ馴れしく接してくる。まあ、明日の敵が今日の友、今日の友が明日の敵を地で行っていた男だと思えば不思議はないし、自分で引き込んだ自覚やら負い目もあったので、強く拒絶したりとかなかったのだが・・・それがもしや悪かったのか。

なあ・・・何故私はこんな状況になっっているのだろうか？

もしかして、オレ、選択肢間違えた・・・？

『認識の違いによる見解のすれ違い』

side・ランサー

全く人生ってのはどうなるのかわからない。いや、だからこそ面白いだろ？がな？そんなことを思いながら、トントんと軽快な音を立てて包丁を振るう白髪の女の後姿を、茶請けに出された煎餅をかじりながら眺める。

最初は目撃者をつぶすために追っていたのに、全く妙なことになった。でも、まあ、悪い気分じゃない。

(胡散臭いクソ神父の言う事聞くよりかは、やっぱりいい女につくほうがいいに決まってるしな)

色々ちよいとアレな部分もあるが、生意気な女は嫌いじゃない。それにこの女・・・エミヤ・エス・アーチエと名乗ったか？初対面時の印象からして、結構からかうと面白そうだし、現代の魔術師とは思えぬほど戦闘に精通していることも気に入った。

それに確かに俺は主を裏切る趣味はねえが、あの女が言ったとおり、今は言峰の野郎と繋がっているリンクは上手く作動しちやいなえから、あいつは俺が何をしてようと見えねえわけだし、「敵についていくな」なんて命令を受けた覚えもねえ。あと、これがあの女に受けた仕打ちの中で一番癢に感じたことじゃああつたが、俺が目下のものからの食事の誘いを断らないって誓い<sup>ケッシュ</sup>を立てているのは本当の事だ。俺を利用しようってのは若干面白くはねえが、あの似非神父に使われるよりやマシだ。そう思っついてきた。

まあ、それに・・・生きているってんなら、やっぱりバゼットの奴の安否もちったあ気になっていたしな。あとは俺の真名を知った経緯も、どうも前々から聖杯戦争がらみのことについて調べていたその結果みてえだし、現在の俺の主も最初っから知ってたってんなら俺のミスでもねえしな？寧ろ、そこまで調べることが出来たことに脱帽だ。ドジなよう<sup>トウ</sup>でいて、いや、中々どうして戦<sup>たたか</sup>の要<sup>もと</sup>つてものを押さえてやがる。

と、そんなことを思いつつ、スンスンと鼻をひくつかせる。

(すげえ、イイ匂い)

あんな誘い方をされたんだ。実をいうとそこまで期待していたってえわけじゃない。それなりに美味いもんが出たら上々くらいに思っていたんだが、どうやらこれは予想と裏腹に期待出来そうだな。

と、隣にいるセイバーの奴の様子をちらりと見る。鎧を身に纏い、武装したままの剣使いの少女はといえは・・・、出来る限り気を張って重々しい空気をかもし出そうとむっつりした表情を必死に保とうとしているわりに、チラチラと台所に視線を移しつつ、今にもよ



だれをたらしそうになって、慌てて顔を引き締めるなんて一人百面相を繰り返していた。

「あー、なんだ、セイバーよ」

「なんです、ランサー」

敵意むき出しの目で睨んできていても、先ほどの百面相をさらしたあとじゃあ今更だよな。いやー、気付け？面白いから言わないけど。

「楽しみなのはわかるが、よだれは拭いたほうがいいぜ？お国のレベルを疑う」

言つと、真つ赤な顔になって、キツときつく睨み、「それは、私を侮辱しているのか。いいでしょう、今すぐ消されたいようだ」などといいながら、立ち上がる。そのタイミングで、「セイバー！もうすぐ夕食が出来上がるから、すまないが、君のマスターを起こしてきてくれないか！」と妙に慌てたようなハスキーな女の声が響いた。

それに対してセイバーは、美しい顔をゆがめてちつと舌打ちを一つ。

「命拾いしましたね、ランサー」

といいながら、ズンズンと居間から去っていった。それと一緒に銀髪の娘も「じゃあ、わたしはキリツグを呼んでくるわ」と言い出て行った。それをひらひらと手を振って見送る。

なんか、先ほどといい、今回といい、妙にアーチエの奴、セイバーの奴の扱いに慣れているような気がするんだが、こりゃあ俺の気のせいかな。

(ま、別にどうでもいいが)

セイバーとこいつにどういふ因縁があるかとか、俺には関係ねえからどうでもいい。

と、思いつつ、目の前の白髪長身の女をじっくりと観察する。

白髪褐色の肌で、身長は170半ばくらいと、女にしてはそれなりに長身。先ほどまであちこち傷を作ってたように思うが、それが

見当たらずあたり治癒魔術でもかけたか。顔立ちはいかにもな美人  
つてえわけじゃあねえが、独特の存在感があつて、大人の女の艶と  
少年の清廉さを同居させたような雰囲気を持ち、多少童顔。セイバ  
ーの奴や銀髪の嬢ちゃんみてえな判りやすい美人じゃねえが妙に人  
の目を引く感じだ。あー、こういうのも悪かねえな。衣装は全く遊  
び心のない黒の上下を身につけていて、今はその上に赤いエプロン  
をつけているわけだが・・・これが中々どうして、シンプルなエプ  
ロンだというのに非常に似合つてて、そういう格好をしていると、  
先ほどまでの容赦のない女戦士としての姿が嘘のように家庭的だ。  
(イイ身体してんなあ)

後ろからこうしてみているとよりわかるが、服の上からもわかる  
ほど引き締まつていて、余計な脂肪というのが殆どついていない体  
をしている。かといってそれは女としての魅力ポディラインを損なうというもの  
ではなく、引つ込むところは引つ込み、出るところは出ているメリ  
ハリのある身体なのだ。とくに、尻のラインがいい。肉厚で掴み心  
地が良さそうだ。骨盤もでかめだし、元気な子供ガキを沢山産めそうな  
イイ身体をしてやがる・・・などと分析を続けていると、「おい、  
ランサー」と件の相手に呼びかけられて、思考を中断することにし  
た。

「全く君は・・・少しは運ぶのくらい手伝おうとは思わないのか」  
とぶつぶつと言いながら、どことなく拗ねたような表情で美味そ  
うな料理がたつぷり乗った大皿を二枚手にしてこちらに歩いてくる  
白髪の女。

「客人を持って成すのも、家主の務めだろ？」

「生憎、家は王侯宮殿というわけではないのでね」

とか、しれつと言ってるが、そのわりにむすつとしているのがな  
んか意外にガキくさくて可愛げがある。

「へいへい」

と、言いながら立ち上がり、女の後について残りの皿を運んでい  
ると、家に入つてすぐに自室へと行った赤い髪の坊主（ひでえ顔色

だが、男の顔色を気にする趣味はねえのでスルーしておいた」とセイバー、銀髪の娘つ子と黒髪のオヤジが一緒に入ってきた。

銀髪の中々美人な紅い目の娘は、「食事の前に自己紹介だけ先に済ます？」とアーチエや黒くくたびれたオヤジに問いかけるが、其れに対してアーチエの奴は、「いや、先に食事をすませてからにしよう」と静かな声で言い切った。が・・・俺の目は誤魔化せねえ。その視線が一瞬セイバーの奴を怯む様な目でちらりと捕らえていたのは、やっぱりお前ら関わりあるってことでいいのか？

「ま、なんでもいい。さつさとはじめてくれ」

そういつて、俺はひらひらと手をふる。んで、未だ此処に至って武装したままのセイバーの奴はといえば・・・ごくりと喉を鳴らして、今にもよだれをたらしそうになっているのを必死に理性でとどめているように見えるのは多分気のせいじゃねえよな。

あ、あー・・・セイバーよ。俺らサーヴァントは本来飯は食わなくて大丈夫だつて知ってるのか？敵ながら、ここまでくりゃあ心配になってきた。

「いただきます」

ともかく、そんなこの国の挨拶ではじまって、つつましくも晩餐会は開始されたわけだが、最初に適当に延ばした皿からとったオカズを口に含んだ途端、そのあまりの美味さに俺は目を見開いて驚いた。

「うめえ」

いや、本気で吃驚するくらい美味しい。

王に呼ばれた晩餐会でも、こんな美味しい料理なんざお目にかかったことはねえぞ。見れば、この料理を作ったアーチエの奴はといえば、その俺の言葉に僅かに微笑みを浮かべて「お褒めに預かり光栄だ」などとどことなく皮肉ったおどけたような言葉を口に出すが、そのわりに頬が緩むのが隠しきれてなくて、そのあまりに邪気のない笑みについポカンとした。

「・・・？どうした、ランサー。食わないのか」

「や、なんでもねえ。食う」

きょとんとした顔でそう言うのが見た目の年に似合わずあどけなくて、つい慌てて視線をはずして次の皿に手を伸ばす。

（なんだ、ありや）

まるで、戦闘中とは雲泥の差じゃねえか。いや、私生活と戦闘はそりゃあ切り離すもんだろが、ここまで来ると中々天晴れだ。最初こそドジっていたが、戦闘中は、あんなどこそこのいけすかねえ弓兵みたいな皮肉った表情でもって、人の神経逆撫でるようなことから口にしたたり、百鍊の戦士といわんばかりのツラ見せていたつてのに。なんだありや。まるで普通の娘っ子のようにじゃねえか。実は二重人格なんてオチじゃあねえよな？とかちらりと思いつつ、隣のセイバーに視線をやる。

セイバーの奴といえば・・・、そのちっせえ身体のどこに入るんだってくらい、高速で箸を進めていた。こくこくこくこくと、常に頷きつつ、一本たったアンテナみたいな髪をピコピコ揺らしつつ、もぐもぐもぐもぐとひたすら無言で食を進めている。その横で、いつの間にかアーチエの奴は、なくなったセイバーの奴の茶碗におかわりのご飯をよそっていた。それを当たり前のように受け取って食い進めるセイバー。そのスピードたるや尋常じゃない。いや・・・セイバーよ、おまえはどれだけ飢えていたんだ・・・？

（まあ、負けてられないよな）

と、思っただ俺も本格的に食を進め始める。すると、セイバーの奴同様、茶碗からご飯がなくなったタイミングで、すつとアーチエの奴が隣に現れ、追加のご飯を当たり前のような手馴れた所作で装った。あまりの自然さにそのまま流されそうになったが、真横で目撃しちまったそれについて、どきつとする。特に気負うこともなく、当たり前のように手馴れた仕草は精練されてさえて、どことなく優美だ。

食事中、よくよく見ていけば、アーチエの奴は自分の食事も二の

次に、家族や俺たちへの給仕を当然のように当たり前の様子で執り行っていた。茶が切れそうな奴がいたら茶を注いで、茶碗からご飯がなくなりそうになればおかわりを装いに向かい、合間で自分の食事を進める。いやいや・・・給仕にこれはちつと慣れ過ぎなんじゃねえの？城に仕える傍女でもここまで自然に相手に気を遣わせないように振舞えたりはしねえぞ？

なんてことを思いつつ、観察しながら食事を勧めていく。だからそれに気付いた。飯をひたすら食っているセイバーを見て、ふと浮かべる表情、それが本当に優しく幸せそうな、暖かい微笑みで、そのあまりの裏のなさに思わず言葉を失った。

と、ぽろっと思わずつい箸を落としたのが悪かったか、気付けば目の前で仕方なさそうにため息をつく褐色の肌の女の顔があった。「ったく」

仕方なさそう、と形容したが、それでも女の雰囲気は穏やかだ。代わりの箸を手渡しながら、「だらしがないぞ、ランサー。君は子供か」と口にして、ハンカチを握り締めた右手が差し出された。

「あー、悪い」

そういえば、さつき箸を取り落とした時に口周りが汚れたような気がしたから、これで拭けつてことかと思つて受け取るうかとしたら、女はつい、とそのまま右手を俺の顔にのばして、そのまま自然な動作で汚れを拭った。

思わずぼかんと目を見開く。ぎよつとした空気が周囲に包む。銀髪の娘やら赤い髪の坊主はあわあわとそれを見て慌てた顔を見せると、黒いオヤジからはじやりと、銃器の安全装置をはずす音が響く。それに一人、不思議そうな顔をして白髪の女は首をかしげるとまた今度はセイバーへの給仕にむかった。

（あー・・・なんていうか）

実は天然？

思いつつ、間近で見た女の顔と、繊細な指を思い出す。

いや、年頃の女が、果たしてああも無防備に男に接したり出来る

ものか。

(ひょっとして、俺に気があるのか?)

なんてことを思いながら、茶を啜って女を眺めていた。

side・エミヤ

なんだかんだと夕食は特に騒ぎなどもなく終わり、洗い物は後に  
するとして、食器を水につけたあと、食後の紅茶を各自に配って私  
もまた席についた。

「とりあえずは、自己紹介からはじめようか」

そういったのは切嗣<sup>しいきん</sup>だ。

「僕の名前は衛宮切嗣、この家の大黒柱だ。シロ、イリヤ、士郎の  
三人の父親になる・・・そして、第四次聖杯戦争の実質の勝者だよ」  
その言葉に、セイバーは殺気染みた目でばつと爺さんを見て、ラ  
ンサーは「ほう」と面白いことを聞いたかのような目で方眉だけぴ  
くりと上向かせた。

ついで、イリヤ。

「わたしの名前は衛宮イリヤスフィール、切嗣の娘で、士郎の姉よ。  
わたしのことはイリヤでいいわ」

次に士郎。状況をイマイチ理解し切れていない為、戸惑いつつ言  
葉を連ねる。

「俺の名前は衛宮士郎。正直、マスターとかサーヴァントとかよく  
わかってないし、イリヤたちと違って半人前の魔術使いでしかない  
けど、よろしく頼む」

そういつて、ペこりと頭を下げる。さて、次は私か。といっても、  
どこまでを話すか。

「衛宮・S・アーチエだ。先に紹介された通りこれでも切嗣の子だ。

とはいえ、私は養子なのでな、切嗣と似ていないのは気にしないでくれ。士郎の師でもある」

「なあ」

そう手を挙げ疑問の声を上げたのはランサーだった。

「なんだ？」

「なんでアンタ、シロとかシロネとか呼ばれてんだ？」

（ちっ、妙なところに気がつくな）

それに返事を返したのはイリヤだった。

「愛称よ。ミドルネームの「S」ってというのは、サ行で始まる名前の略称なわけだけれど、シロは恥ずかしがりだから、フルネームを名乗るのを嫌がるのよ。だから、ミドルネームの最初の二文字をとって「シロ」って呼んでいるの」

シレっと完全な嘘ってわけでもないが、嘘を告げるイリヤ。いやいや、恥ずかしがりって、妙な誤解を生むようなことを・・・だがここで否定して追求されるのも困るし、ミドルネームではなく本当は本名を二文字で切ったものだったりするわけだが、それは余計に言うともまずいことだから、イリヤのその助言は有り難いと言えば有り難いのだが、なんだ、それで納得されるのも内心複雑のような・・・って、ランサーよ「へー」ってなんだ、へーって。

「んじゃあ、俺もシロって呼んだほうがいいのか？」

とか、真顔で何を聞いてくる。

「・・・好きにしろ」

とりあえず、そっぽを向いてそう答える。

「なあ」

そこへ士郎が挙手して、真面目そうな声で「アンタらは自己紹介してくれないのか」という疑問を口にした。

それに、今まで口を閉ざしていたセイバーが口を開き「最初にも述べましたが、私はセイバー。貴方のサーヴァントです。真名は別にあります、故あって名乗ることは出来ません。詳細については、少なくとも貴方が聖杯戦争についての基礎知識を身につけてからの

ほうがいいでしょう」と、清涼な声で述べた。

「俺はランサーだ。ま、セイバーの奴と同意見だな。坊主はまず知識を身に着けるのが先決だ」

そういつて、ランサーはひらひらと手を振る。それに、イリヤは「土郎、ごめんね。あとで説明するから」とそんな言葉をすまなさそうに口にする。

「まあ、自己紹介は済んだし、簡潔に我が家の聖杯戦争における方針を先に話そうか」

「ごほんと、咳払いして切嗣はそう口にした。

「僕らは、聖杯を破壊しようと思っている」

その言葉に、風が巻き起こった。

いつ立ったのかそれすらわからぬほど爆発的な魔力を纏って、騎士王の名を冠する少女が、怒りに歪んだ顔立ちで、視得ぬ剣を切嗣に突きつけていた。あと、5m。あと5m踏み込むだけで親父の顔に刃が突き刺さるだろう、その距離で、ぶるぶると手を震わせながら、それでもセイバーは最後の理性を動員して「どういふ……ことだ。一体……どういふつもりだ、衛宮切嗣」と、そう口にした。

痛いぐらいの殺気が辺りを包む。ランサーはそれをほう、と面白い見世物を見たかのような顔で成り行きを見守り、イリヤはそのプレッシャーに動きを止め、土郎は少女のあまりの様子に完全に言葉を失っていた。それを、そんな少女の殺気を、魔術師殺しとかつて称された魔術使いの男は、なんでもないような様子で受け止めて、その黒い瞳で静かにセイバーの碧い瞳を見つめ、「どういふつもりもなにもない」そう答えた。

「冬木の聖杯は既に汚れている。あれは万人を呪い殺す呪詛そのものだ」

その言葉に、はっと、金紗の少女の息を呑む声が聞こえた。眉をぎゅっと寄せ、切嗣に剣を突きつけた格好だったセイバーはやがてゆっくりと剣をおろして、それから「何を根拠に、そんなことを言



う」とそう痛々しいほどに思いつめたような声で尋ねた。

「経験者だからね。」

そう、あまりにも静かな声で、自嘲すら混ぜて、爺さんは言った。それに、セイバーは目を見開いて、どことなく傷ついたような色を見せた。

「嘘……だったというのか。勝者の願いを叶えるというのは嘘、というのか」

血反吐を吐くような声で少女はそう吐き出した。それに淡々と「第三次聖杯戦争までならそれは嘘じゃあなかった。けど、今は、あれは悪意でしか物を叶えられぬ歪んだ願望器だ。信じられないというのなら信じなくていい。証拠が見たいというのなら、10年前に起きた惨劇の僕の記憶を見せてもかまわない」そう切嗣は続ける。それに、少女はがくりと膝を落とした。

「なあ」

それに、今まで黙って成り行きを見守っていたランサーが、つまらなさそうに頬をぼりぼりとかきながら「アンタらの目的はわかった。だが、そいつは俺には関係ねえよな。こっちとしちゃあ本題に入ってほしいんだが」なんてことを口にした。

それに、セイバーはぎよっと目を開けて「ランサー、貴方は聖杯を破壊すると聞いて、関係ないと言つのですか」と、信じられないような声で問いかけた。

「ああ、関係ねえな。俺は別に願い事をかなえてもらう為に召喚されたんじゃねえ」

そう、きつぱりと青き半神の英霊は答えを返した。

「ランサー、君は自ら主を裏切る気はないと、そういったな」

「ああ、そうだな」

「ならば、君の契約を解いたら、君はこちらにつくか？」

それに、始めてこの目の前の大英霊は驚きの表情を浮かべた。

「……可能だったのか」

「君の現主が見ていない今ならば可能だ。君の願いは大方検討がつ

いている。こちらにつけば、君は気兼ねなく主の敵討ちを行えるし、なにより私達の目的は他の聖杯戦争参加者達にとつて都合の悪いものだ。戦う敵には事欠かないだろう。どうだ、悪い話ではないと思うが」

それに、長い睫を伏せて、ランサーは僅か思案すると、静かに口を開け、「いいか、俺は何も見ていない。聞いていない。それでいいな？」そう口にして、無防備にその背を晒した。それは遠まわしにOKと言っているも同然だ。

「ああ、了解した」

ちらり、切嗣に視線を送る。こくりと、爺さんは頷き、イリヤは「セイバー、悪いのだけれどこちらにきてくれない？」と行って、放心している彼女を連れて、居間から抜け出た。

ぱちり、と第三の結界から第一の結界にシフトさせる。その戻ってきた魔力を使って、私はかの裏切りの魔女の剣を投影した。そして、僅かに切っ先を突き刺し、その真名を開放した。そして、ルーフレイカー「破戒すべき全ての符」

「破戒すべき全ての符」

「アンタ、本当に何者だ？」

そう心底疑問そうに口にするランサー。それを前に「しがない魔術使いだよ」とそうため息混じりにこぼす。今ので大分魔力を消費した。やはり真名開放までするととなると消費魔力もばかにならないなどと思う。

「でだ。契約を結びなおすんじゃないのか？」

そう、聞いてくるランサーに「いや、契約を結ぶのは私ではない」と答え、そこで再びイリヤがやってきた。

「貴方と契約するのはわたしよ」

「嬢ちゃんが？」

それに本当に意外そうな声を出して、ランサーは私とイリヤを見比べる。

「何？わたしじゃ不満ってわけ？」

むっとしてそう尋ねるイリヤに対し、「いや、嬢ちゃんに文句があるってわけじゃねえが、あー、なんだ」とかいいつつ、チラチラと私を見てくる男にため息を一つ。

「イリヤは優秀だぞ」

そう告げると、「そういう問題じゃないんだがなー」と煮え切らない返事。む、さつきからなんだ、この男は。

「まあ、いや、よし、ちゃっちゃと済ませようぜ」

といって、最終的に男はあっけらかんとした口調でイリヤがマスターになることを受け入れた。

やれやれ、一時はどうなることかと思っただが。

そうして、契約を繋ぎなおすための呪文をイリヤが唱える傍らで、切嗣に「シロ、ちょっと」と呼ばれそちらに近づく。

「なんだ、切嗣<sup>じいさん</sup>、どうした？」

「いや、先ほどシロが料理を作っている間に藤村組に、今夜道中でばら撒いた銃弾があまりに多かったから、回収の為に連絡を取ったんだけど、ちよっぴりまずいことになりそうだね……」

そう、いいにくそうな声で言う。それにぴんときた。

「ああ……大河か」

「そう。明日どうしても来るって聞かないらしい」

「……まあ、此処数日顔を合わせていなかったしな。いきなりの連絡がそれで心配したのだろう」

大河は爺さんに懐いているからな、余計だな。

「まあ、あまりに心配だけかけけるのも悪いしな。アレは来るといえば来るだろう。数時間共にいるだけであれの安心が買えるというのなら、まだ安いものだろう」

幸いというべきか、まだ聖杯戦争ははじまったばかりだし、聖杯戦争のメインは夜間だ。

「まあ……あの子なら、仕方ないか」

と爺さんにさえ思わず思わせてしまうのが大河の凄いところなの

だろうな。多分。きつと。

「セイバーとランサーのことはどうするか」

「大河ちゃんは妙に鋭いところがあるからなあ」

「いっそ、隠さずに変装させてつき合わせるのも一興か？」

と、そんな話をしているうちに、ランサーとイリヤの契約は完了していたようだ。

「お、なんだ。何の話してたんだ？」

とか、いいながら馴れ馴れしくもランサーは私の肩に手をまわしてくる。

「重い、のかんか、たわけ」

「ん？ああ、悪い、悪い」

とかいいながら、あまり悪びれていない男に内心ちよつと苛つとしながらも、「ランサー」とそうできるだけ真面目な声音でクラス名を呼んだ。

「話がある。あとで私の部屋にきてくれ」

その言葉をランサーがどう捉えたのかなど露とも知らず、私はそうランサーに話しかけて、風呂の準備に向かった。

side・ランサー

「話がある。あとで私の部屋にきてくれ」

そういって、白髪の女は居間を後にした。

私の部屋にきてくれて・・・。

(どう聞いても、お誘いだよなあ)

とは思いつつも、ここ数時間で観察したところ、年に似合わず案外にあの女はガキくさいところがあるみてえだし、天然入ってるっばいからなあ、ここで結論を出すのも早計か？と、思いつつ、残っ

ていた茶を啜る。

(まあ、聞いてから判断するか)  
そう思って、のんびりとくつろぐことにした。

「すまなかつたな、私から言ったのに待たせたようだ」

と、殺風景な何もない部屋に連れて行かれて、彼女がそう言い出したのはたっぷりあれから2時間ほどあとのことだった。

見れば、女は風呂上りのようだった。どうやら、あれから風呂を焚いて、風呂が沸いたら今度は家族に風呂を勧めつつ、食事後あとまわしにしていた洗物やらなにやらと家事をこなしてきたらしい。そして、最後の締めとして自分が風呂に入ってきたと。

長めの白髪を赤い宝石の髪留めでとめて、結い髪にしているのも、うなじのあたりが色っぽくて中々クルものがあつたもんだが、いやいや、こうして髪をおろしているのも童顔が際立って悪くない。服装こそ、やはり変わらず黒の上下と色気のない格好ではあつたが、シャンプーの匂いが鼻腔を擦ってつい手を伸ばしたくなる。

(これは、ひよっとして、ひよっとするか?)

と思いつつ、女の動向を見守る。アーチエは俺の様子に気付いているのか気付いていないのか、なにやら、箱みてえな機械・・・聖杯からきた知識によるとパソコンというらしいを、開くとおもむるに口を開く。

「これが、1時間前に撮られた君の元・主バゼット嬢の映像だ」

カタカタと女が操作する機械の画面、確かにそこにはつい数日前までは俺の主だった女の顔写真が5枚ほど映し出されていた。

青白い顔色ではあるが、確かに話どおり生きているらしい様子にほっとする。

「仲間からの連絡によると、彼女は無事隣町に潜む裏関係の医者のもとへと送り届けたのだそうだ。いまだ目を覚ます様子はないらしいが、数日もすれば目覚めるだろう、とのことだ」

「なんだ?この家に運んだりはしないのか?」

「生憎、家に治癒魔術を得意とするものはいなくてな。それに、折角助かった命だ。聖杯戦争が本格的に始まるうとしている冬木の街に留まるよりも、聖杯戦争が終わるまで外の病院に入院しているほうが安全だろう」

そう、淡々といいつつも、その顔は真面目で真剣だった。

「まあ、君の元主については今のところはこんなところだ」

「なんで、わざわざ俺に？」

「？おかしいことを言うな。バゼット嬢のことを話すという約束だろう」

何を当たり前のことを、といわんばかりにそういうがよ、あの時の言い方を考えれば、バゼットについて話すつてのはただの口実だと思わなくても仕方ないだろうが。とも思うが、余計な一言だとわかっていたので口にはしなかった。いやいや、あの時はそういう風には思えなかったが、案外にこいつは義理堅いらしい。

「まあ、いいがな。で、アンタが俺に部屋に来ていったのはこいつを見せて俺を安心させるためだけか？」

そう、口にすると、「いや」といって女は「もう一つある」とそう返事した。

「ほう？」

もう一つ、な？

しかし、そこで女はちょっと言いにくそうに一旦口をつぐんで、「まあ、口にするとどうにも馬鹿らしくなる話なのだが」と、いいにくそうに前置きをおいた。あー・・・上目遣いでちらちらと見てくるのって結構いいな。

「明日、一般人の知り合いがこの家に朝来ることになっているのだがな・・・」

「ああ、霊体化して隠れてろって話か？」

ぴんときて、そういうと「いや、違う」と言って、女は一つため息。

「おそらく、霊体化したところであの野生的動物の勘の前では意味

をなさなそうだからな、いつそ紹介してしまおうかと思っている」  
・・・は？

(今、紹介するっていったか?)  
流石に予想外のことを言われて、思わず目が点になる。

「ついでに、君の服を作るからスリーサイズを測らせてもらいたい」  
・・・はい？

見れば、女は手にメジャーを握っていた。

「・・・おい？アーチエ？」

「すぐにすむ。じっとしてろ」

いいながら、女は後ろにまわって俺の体に手早くメジャーを巻きつけた。

イイ匂いがすぐ傍からふわりと香る。むにゅっとやわらかい感触が二つ、当たっていることに気付いているのか気付いていないのか

(でも、まあ、どっちでもいいか)

そう、どちらにせよ、今更だ。

無防備に近づいてきたほうが悪い。

(これは俺は悪くないよな・・・んじゃま、頂きます)

こんな美味しいシチュエーションで手を出さないほうがどうかしている。

無防備に後ろから伸ばされていた褐色の細腕を掴み、くるりと体を回転させ、流れるような仕草でそのまま独特の感触のする床・・・  
畳にその柔らかな獲物の体を押し倒した。

その驚愕に見開かれた鋼色の瞳が、まるで本当に無垢な子供<sup>ガキ</sup>みたいな色をしているのが妙に印象的だった。

NEXT?





第五次聖杯戦争編 08・認識の違いによる見解のすれ違い（後書き）

というわけで、8話でした。

シロねえの貞操の行方はどこに。あ、いつときますが、この話はあくまで15禁なので18禁シーンは出てきませんよ。出てこないですってば。ちなみに今回の事件がタグに前からつけてた「ボーイズラブ」の正体だったりするんだぜ。

今回は「危機一髪」お楽しみに。

PS、ちなみに次回でも説明いれるんですが、シロねえが解析魔術ではなく、わざわざメジャーでサイズ測ろうとした理由は、一目見たらサイズなんてわかっちゃうけど、一応初対面の男のスリーサイズを測ってもいないのに知っていたら不自然だろうと、自分の魔術を隠すためにメジャーで測ろうとしただけなんだぜ。

第五次聖杯戦争編 09・危機一髪（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

今回の話には挿絵つけていますが、ランサーの兄貴は邪魔だったので影と腕だけでフィールドアウトしてもらいました（ちょ）わりとお気に入りの絵になった気がします。

今回の見所は多分エミヤさんの心の叫び。

あと、ランサーの兄貴視点だと十分色気があるシーンも、エミヤさん視点で見るとあんまり色気がなくて、よし、18禁回避成功とか内心指立ててたりしたんだぜ。そんな感じですよ。

愛しています。

確かに私は愛していました。

その不器用な在り方も、直向さも、私を女性扱いして遠ざげるところも、時には腹が立つたけれど、それでも確かに私はそんな貴方に惹かれていたのです。

今はもう遅い。

何を言っても言い訳だ。

そんなこと自分で言われずともわかっている。

愛しているなんて、言う資格など私にはどこにもない。

己が欲望のために貴方を裏切った私には。

でも、貴方を手にかけてまで求めたそれが、何の意味もなく、何も私に成さないのならば、一体何の為に私はここにいるのだろうか。何の為に貴方を斬り捨てたのだろうか。

シロウ・・・私の鞘・・・私にはわからないのです。

『危機一髪』

side・セイバー

「本当・・・なんですなね」

黒くやつれた顔の男の部屋で、その部屋の主である男、衛宮切嗣の過去の一部を見た私は、そんな言葉をぼつりと漏らす。

それに、男は「ああ・・・僕の記憶が改竄だと疑うのなら、僕の体も調べるかい？この身体は聖杯の泥に汚染されているからね。生きた実例みたいなものさ」と、そんな言葉をいいながら、一時間ほど前に風呂に入った時に着た着物のあわせを左右にずらす。

かつての主だった筈の男のその身体は、かつての魔術師殺しと呼ばれていた頃が嘘だったかのようにやつれ衰え、まるで重い病魔に冒されているような有様だった。

ケホ、と男が咳を漏らす。

「キリツグ・・・？」

その手に赤い血が僅かについているのを、見逃すことはなかった。

「・・・」

ばつの悪そうな顔をして、切嗣は自分の頭をぐしゃりとかき抱く。それから、「そういえば気になっていたんだけど」と、そんな前置きをして、意外な言葉を言った。

「もしかして、君は僕の事をやっぱり知っていたりするのかい？」

「・・・何を」

知っているものも、10年前にこの地で行われた時の聖杯戦争での私のマスターが貴方だったのではないか。とそんな疑心を浮かべ見やると、男は「やっぱり、そういうことか。いや、でも・・・こういうこともあるのか」なんてぶつぶつといいながら、はあとため息を一つ。

「最初に断っておくけど」

「けほ、とまた咳をして男は言う。」

「『僕』は君とは今日が初対面だ」

「・・・は？」

何を言っているんだ、馬鹿なという気持ちが出た一方、その言葉に妙に納得する自分がいた。何故なら・・・ここは、この世界はあまりに自分が知っているソレとかけ離れている。

「10年前、僕が呼び出したサーヴァントは君じゃなかった。君と、『君の知っている僕』にどんな確執があったのかは知らないけど、ここにいる僕には関係がない。そういうのは悪いけど、持ち込まないでくれ」

なるほど、確かに私を呼び出した記憶がないというのならば、平  
行世界の自分と一緒にされるのは迷惑なのだろう、とかつての魔術  
師顧問マーリン伝で知っている魔術知識と自分の頭の中ですり合わ  
せつつ、思う一方、その言葉に疑問を浮かべる。

「切嗣・・・何故、私が10年前に『貴方』に呼び出された記憶が  
あるとわかったのです」

「僕も君を本来なら呼び出す筈だったからだよ」

なんてことを淡々といいながら、男は崩れた着物を付け直してい  
く。その言葉の裏には、まだ何か潜んでいるように見えたが、これ  
以上男が言うつもりはないのだと、その態度からわかった。

「いいでしょう・・・今はそういうことにしておきます」

そう、口にしてきびすをかえた。

ここに、召喚されてから疑問ばかりが積みあがっていく。

たとえば・・・私が霊体化出来ぬサーヴァントを知っているかの  
ようなこの家の者の態度。成長しこの家に住んでいるイリヤスフィ  
ール（それにしても、切嗣のあの時の娘がまさか、『イリヤスフィ  
ール』とは驚いたが）。そして・・・見知らぬ、あの時バーサーカ  
ーの相手を一手に引き受けて、散っていった遠坂凜のサーヴァント  
と似通った、シロウたちの姉を名乗るアーチエというイレギュラー。  
そして、現マスター・・・シロウ・・・彼にも違和感が付きま  
とう。

「疑問は、やはり一つずつ解消していくべきでしょうか」

ふう、とため息をついて己の格好を見やった。

霊体化出来ないことを知っていたかのように風呂を勧められ、そ  
の間に私用へと着替えにと渡されたイリヤスフィールの昔の衣装。  
それは、前の召喚の時着ていた白いシャツに青いスカート姿とはや

はり違うもの。

・・・あれは凜にもらったものだ。あの時は、この日の時点で凜に会っていた。その凜にもらった服を身に着けた私を似合っていると褒めてくれたシロウ、ちくりと胸が痛んだ。

(私は、愚かだ・・・)

こんなことで傷つく資格などとうにないというのに。

side・エミヤ

どさり、と目の前の青い男に押し倒された体勢で、私は混乱の極みに落とされていた。

(何故、こうなった・・・!?)

ちよつとまで、相手、ランサーだぞ、あのランサー！あのクランの猛犬クー・フリーン！なんで、ランサーが私を押し倒す！？いや、ランサーだからなのか、つていや、だからなんでこうなるんだ！

そんな私の心の内などお構いなしに、件の半神たる青き槍兵は、それはもう男臭い笑みを口元に浮かべて、私の上に馬乗りに乗ったまま、「全く、天然だかしらねえが、俺相手に無警戒なアンタが悪いんだからな？男と二人つきりで会って意味、アンタ親に教わらなかったのか？」なんてことを言いながら、右手で私の髪をすくつてわざとらしく見せ付けるように口付けた。うわ、やめる！気色悪いだろうが、と思いつつもパニック過ぎたのか上手く言葉が出ず、ひたすら目の前の男の行為にフリーズする。

「それとも、やっぱりアンタ俺を誘っていたのか？はは、そりゃ悪かったな。気付くのが遅れた」

何せアンタ鈍そうだったからよ、なんていいながら男は私の胸にその戦士特有の硬い手を這わせる。それに、びくりと生理的に湧き

上がる感覚を前に反応を返して、それから漸く我に返って、「や、やめんか、このたわけっ」と口にして、私の胸にある手を払いのけた。そんなに力を入れてなかったらしいそれ自体を払いのけるのは難しくなかったが、払いのけられた男は気にした様子もなく、そのままがつちりと空いている左手で私の右腕手首を掴む。

(くそ、この馬鹿力めっ！)

元々英霊であつた頃から、この男は私よりも細身だつたくせに半神故なのか筋力はB、私はDと力に開きがあつた。それがこうして弱体化して受肉した今では、かつてでさえあつた筋力の差は更に開いているときている。おまけに、先ほどのルールブレイカーの投影に真名開放と連続で魔力を大量消費したこともあつて、状況の悪いことに抵抗する力は殆どなかった。

じたばたと足も動かすが、男の足腰がガツチリとホールドしていて殆ど意味はなさなかつた。

「おいおい、抵抗すんなよ。優しくしてやろうと思つてんだから、よ」

そんな私の抵抗を前に、半分面倒くさそうに、半分困つたような顔を浮かべてそんなことを言い出す青い猛犬。

「・・・！ランサー、貴様、何をする気だ、何をっ！」

「あん？そんなの言われなくてもわかつてんだろ？男が女を押し倒す時は抱こうとしている時と相場は決まってるだろうが」

(そんなの、わかりたくないわ！このたわけー！！！！)

思わず、心中で叫ぶ。

いや、オレも元男だから、その理屈だけはわかる、わかるが、この場面でそれ言ってほしくない！ランサーが私を「抱く」だと？何故こうなった！！いくら女の姿になつてもう10年になるからってそれでも、私の心は男なんだ！それがランサーと？くそ、何の冗談なんだ、何故こうなった！

生前の邂逅も合わせて、ランサーと出会つのはこれで3度目。一度自分を殺した相手だとはわかつていた。それでも、その正英霊と

しての在り方に憧れめいたものを覚えたことがないといったら嘘になる。

前回の召喚の時は、この男と互角に戦えたことに震えた。かつては何の抵抗も出来ずただ殺されるしかなかった存在相手に、自分は並べる力をもったのだと思つて嬉しかった。一歩間違えればどちらかの命を失う極限で、しのぎを削りあうのが楽しかった。ランサーは私を嫌つていただろうが、私は決して嫌いじゃなかったのだ。少年時代に抱いた英雄への憧れと、それに肩を並べて戦える喜び。そして少しの正英霊である彼への妬みと軽い嫉妬。私の言動に一つつかかってくるランサーを見ていと少しすつとしたりもした。この男に好敵手であると思わせれたらそれは私にとつては嬉しいことだった。私にとつてランサーとは本来そつという存在だ。

光の御子、世界の掃除屋たるこの身とは真逆に位置する英霊。それでも、聖杯戦争でサーヴァントとして呼ばれている間は、同格だと、敵足りえるものだ、そんな風に君に私は見てもらいたかった。しかし、それはもう過ぎたこと。女に変質し、受肉し、弱体化した私が、君が知っている遠坂凜のサーヴァントと同一人物であることは、かつて憧れそれでも好敵手であることを望んでいた男だからこそ知られたくなかった。この男の中の本当の私アーチャーは今回召喚された弓兵だけなんだと思つてほしい。私が、あれと同一存在などと気付いてくれるなど、そう思つている。それはちつぽけなプライドだ。矜持など路傍に捨ててきた私がつちつぽけなプライドだ。かつてランサーと対等に渡り合うことが出来た記憶をもつ、私のなけなしのプライド。教会前のあの戦いを大切なものだと感じたからこそ抱く、プライド。もう、この変質してしまった私は君と対等に渡り合うことは出来ないのだから、せめて、その記憶だけでも大事に守りたかった。

だから、私を女だと信じて疑わない君の態度にはありがたい面も確かにあった・・・あったが・・・だからといって、大人しく抱かれてたまるか!!



(冗談ではないぞ！10年間守り続けたものを、こんなところで易々奪われてたまるかつ！)

大体、女に変質したといつても、心まで女になったわけではないし、男と寝ることなんてそうそう受け入れられるわけがないだろう。相手がランサーなら尚更だ。そもそも私は好きか嫌いかわかっていたらランサーのことは好きだが、その好きの意味は男としての憧れやライバル心とかそういうのであって、色恋沙汰とは完全な別物だし、私はゲイじゃないし、それに男と肉体関係を結ぶなど想像するだけで精神衛生上よろしくないし、そのくせ10年の生活で身体は心と別反応返すことが度々あることに気付いている以上、何かの間違いで男と体を繋ぐなどと、そんな経験を得たら、自分がどうなるのかわからなくて恐ろしいし、大体今にも命を失いそうな誰かを救うためとかそういう理由があるわけでもないのに、やっぱり男と寝たりなんか出来るわけがないだろ！というか、そんな経験はいらない！これからもいらない！つて、オマエ、ランサー、人が考えている間もどこに触っている、貴様は！だからといってやめさせようと抵抗してもびくともしないし、この馬鹿力の駄犬、発情期犬めが！！いい加減にしないと、泣くぞ！つていうか、泣きたい！トオサカ、タスケテ。今ならアカイアクマに魂売つてもいい！つて、ぎゃあああ耳舐めるな！畜生、ええい、何故私はこの男を助けようとなんて思ってしまったのだ！

「・・・うあ、っん」

びくんと、服越しにへそのあたりを繊細な動きで触られて、ついそんな声を反射的に漏らした。・・・つて、なんて声漏らしてんだ、オレは！！くそ、思ったとおりランサーの奴め、調子にのった顔しやがって。だが、それより、何故これで、ぞくぞくしたものが背筋に上ってくる。くそ、この裏切り者の体めつ。調子にのったランサーは思ったとおり、私の右手首を相変わらず左手でがっちり掴んだまま、右手だけで器用にぶちぶちと私の着ているシャツのボタンをはずし始めた。

「や、やめろ、ランサー！」

> i 3 1 7 5 0 — 3 0 3 2 <

空いている左手で必死に男の肩を押すが、びくともしない。ぷるりと、ブラジャーに包まれた私の胸がさらけ出される。それを見ながら、私の抵抗などお構いなしに事を進めていた男は「あー、男を誘う時は、もうちょっとこう、色気のある下着を選んだほうがいいと思っぜ？現代いまはレースの下着とかあるんだろ？どうだ、どうせなら次はそういうのが見たいんだが」なんて、能天気なことを真面目な顔で言い出した。

「こ、こ、この大たわけっ！！！」

つい、怒りで顔を真っ赤に染める。

大体私がいつ男を誘ったというのだ！！勝手な解釈でなんてことを言い出してんだ、貴様は！大体、なんだ？次はって！次があるつもりでいるのか、この男の頭の中は一体どうなってるんだ！？

けど、怒鳴ろうとした口は即座につくむ羽目になった。ランサーの右手がブラジャーごしに私の胸に手をかけたからだ。

「ッ……」

（本気なのか？本気でこの男、私を抱くつもりなのか……！？）  
いや、宣言した以上本気なのだろうが、こっちとしては信じたくなかった。いや、もういろんな意味で。

「まあ、これもこれで悪くはねえな。どちらにせよ、俺の時代にやあなかつたもんだ」

言いながら男は、ブラジャーをたくし上げ、その胸の谷間へと顔を埋めた。

（……あ）

びくりと、今までに感じたことのない種類の恐怖がそれでこみ上げる。

抱かれる。このままでは自分は本当にこの男に抱かれてしまう。悟った瞬間、何かが決壊した。

「……おい？アーチエ」

ぎよつとしたような男の声が耳に届いて、戸惑ったような目の前の男の秀麗な顔立ちが妙に霞んで見えている気がした。

side・アーチャー

学校でのランサーとの戦闘の後、遠坂の屋敷に帰ってきた遠坂凛マスターは「お風呂に入ってくるわ、アーチャーは外の見張りお願いね」とそういつて、不機嫌そうな顔のまま真つ先に風呂に向かった。それから食事を取り、「ちよつと仮眠をとるから、2時頃まじゅうのいになったら起こして」とそんな言葉をかけて寢室へと向かった。「ふむ」

その眠る直前にマスターから頼まれた仕事であるその物を見ながら、私はさまざまなことを思考する。

手の中にあるのは翡翠で出来た宝石の鳥。これを1時ごろになったら放つておいてくれとのことだったが、これが凜が言っていた「やる事が出来た」に繋がることなのか？と思いつつ、まじまじと鳥を見た。

宝石で出来た使い魔は自分の役目がくるのをじつとまっている。

(全く、妙なことになったものだ)

此度の聖杯戦争は、間違いなく私の過去の記憶と食い違っている。その原因は何か……。

(やはり、あの女なのだろうか)

大橋で、自分に「やはり来たか」とそう告げた女。学校でも出会った女。確信はないが、正体に検討はついた。

(ならば、やはり確かめるか)

そも、あれが…… ならば、それはそれで疑問が多いのだ。思いつつ、召喚された当日に修理した遠坂家の居間にかけられた

時計に目をやる。

今の時間は12時を少しばかり過ぎたところ、何をすることにせよ、待機を告げられている今は暇をもてあましている。暇をもてあますと碌なことを考えない。全く難儀なものだと思いながら、死後に慣れた皮肉の仮面を被って笑った。

side・ランサー

据え膳食わぬは男の恥。気に入れば女を抱くというのは俺にとっては今更な当たり前のことで、そうやって今回もまあ、いつもどおりっちゃあいつもどおりに事を運んでいたんだが……。

(こりゃあ、参った)

女は、放心したようにぼろりと涙をこぼしていた。本人は自分が泣いているってことに気付いているのか気付いていないのか、この様子じゃあもしかしたら自分が泣いているなんて自覚がないのかもしれないねえ。それくらいに静かに涙をこぼしていた。

俺は別に悪くないと思うんだが、なんつつか、妙に人の罪悪感を刺激する顔だ。

(これじゃあ、俺が強姦しているみたいじゃねえか)

と、若干よわったなあと思いつつ、「あー、アーチエー？」と名を呼びつつ、ひらひらと右手を彼女の目の前で振る。

それに、アーチエはきつと睨みながら「なんだ」と低く吐き捨てるように言う。

「泣くな」

女の涙には勝てねえ。そのままぺろりと、ほんのり塩辛い女の涙を舌で拭う。すると、それで自分が泣いていることに漸く気付いたらしい、「泣いてなどいない！」と顔を真っ赤にして怒鳴った。あ

「あ、素直じゃねえ。が、身体は正直だ、震えている。そんなこの女の強がり可愛いなとそう思った。」

「そうか、泣いてないのか」

「ああ、そうだ！貴様なんぞに、そんな醜態晒すわけがなからう！」「いや、晒しているから。」

「そうか。じゃあ、続けるぜ」

それに、女はびくりと背を揺らして、言葉に詰まった。

でもわかっくんねえなあ。何をそんなに強がってんだか。とは思いつつも、俺はアーチエの言葉や態度を都合の良い方向に解釈することにした。正直、これまでの媚態を前に俺の身体は準備万端だし、ここまできて逃がすなんて勿体無いまねもする気はない。本人が違うっていつてんなら俺が遠慮する由もないしな。

「待つ、ランサー！やめ、やめないかっ！！」

抵抗なんて今更遅い。そうして俺は女のズボンに手をかけて、そして、バンと勢いよく部屋の障子が開かれた。

見れば、そこには怒気を纏わせた、つい数時間前に俺のマスターになった美麗な少女が拳をプルプル震わせながら、立っていた。

「よう、嬢ちゃん、どうした？」

「イ、イリヤッ」

俺は、アーチエの奴の上に身を乗り上げたまま、手を軽く上げてそう気軽に尋ねる。すると、件の少女、イリヤスフィールは「ラインで妙な空気が流れ込んできていると思っただら・・・」なんていいながら、沸々と怒りに顔を歪めながら、ぎっと美しい顔を歪めてすさまじい目で睨んできた。

「ランサー！！今すぐ、シロから離れなさい！」

ぎっと指を立てて、ずかずかと近づいてくる白の少女。それを前に俺は「あー。いくら、マスターでもよ、それは聞けねえな。男と女の問題に口を挟むのは野暮ってもんだぜ？」と口にする、少女は言峰から再契約する際に回収したらしきただ一つの令呪を掲げて、

「ランサー」と絶対零度の微笑みと声で次の言葉を言い切った。

「今すぐ自分の手で自分の息子をもがされたい？」

その目は本気だった。

・・・元が霊体なので、多分もいでも復活出来ることは出来るだろうなとは思うが、男として想像したくもない光景である。痛い、想像するだけで尋常でなくいるんな意味で痛い。あれは本気だ。多分実行してすぐマスター権をなくしたとして俺に殺されるとしてもやるだろう。そんな目だ。だから、大人しく降参の白旗を振ることにした。

そして、開放されたアーチエの奴といえば、真っ先にイリヤの元に向かい、「イ、イリヤ」と感極まったような声を漏らしながら、その自分より一回り近く華奢な少女の体に縋りついた。白の少女のほうも、ぎゅっと大人のような包容力でアーチエを抱きしめ、「シ口、ごめんね。もう、大丈夫だからね。お姉ちゃんが守ってあげるから」なんていいながら、よしよしとその背をさすっていた。

いやいや・・・。

(お姉ちゃん・・・?)

どう見ても、アーチエの奴のほうが年上だと思っていたんだが、え？実はああ見えて年下だったのか？と、疑問を抱えるままに姉妹の抱擁を見ていると、白い少女は紅色の眼できっと俺を見咎めた。その目は顕著に「さっさと出て行きなさい」と告げている。それを見て、大人しく退散することにした。触らぬなんとかに祟りなしっていうしな。

・・・あ、あとこれは余談だが、そんなことがあったっていうのに朝になったら、ちゃんと俺用の現代服が用意されていて、驚いたのはまた後の話だ。やっぱ、アーチエの奴って変なところで律儀だよなあ。

一時はどうなることかと思った一騒動も危機一髪乗り越え、終わってみれば、屋敷はもう静かだった。夜も深い。いつもはこの時間にまだ起きている士郎も、イリヤの説明によれば、聖杯戦争のことについて簡単な説明を受けてすぐに眠りについたとのことだった。ざあ、と夜風にあたる。雲の隙間から青白い月が庭先をぼんやりと照らす。

そう、こんな夜に、オレは地獄に墮ちてもなお忘れられぬあの幻想を召喚したのだ。

「こんばんは」

今まさに考えていた主と同じ清涼な声が目前で放たれる。中学時代にイリヤが身につけていた服と同じ服に身を包んだ金紗の髪の少女がそこに立っていた。

「セイバー……」

「良い夜ですね、シロ」

そうして、碧い目を細めて、この騎士王の名をもつ少女も空を見上げる。

「ああ、そうだな」

いいながら、ふと、ささやかに笑った。

かつての日々は遠い。

この少女と自分の関係も、自分自身もこんなに変質してしまった。私は、召喚されてから今より、ずっといろんな疑問を抱いていました。わからないことだらけだ

少女はそんな言葉を口にする。

「でも、一番の謎は貴女です」

そして、嘘は許さぬとばかりに厳しい目で私を射抜いて「あなたは一体何者なんですか？」そう真っ直ぐに口にした。

月が雲に隠れる。

NEXT?



第五次聖杯戦争編 09・危機一髪（後書き）

というわけで9話でした。次回10話は色々緊張感孕みつつも不気味な静寂を辿る夜編って感じの予定です。

11話から2月3日編かな。いや、厳密には今回の話も深夜12時過ぎなので2月3日ですが。そんな感じですよ。

PS・イリヤマスターのランサーの兄貴のステータス書きわすれていましたので追加します。

サーヴァント・ランサー

属性：秩序・中庸

筋力B 俊敏A+

魔力B 宝具B

耐久C 耐魔力C

幸運D

戦闘続行（A）、仕切り直し（C）、ルーン（B）、矢避けの加護（B）、神性（B）

ついでに、おまけで書いたイラスト

> i31701—3032<

確か最近女エミヤさんばっか書いててマッチョに飢えていたので、本家エミヤさん描こうとして、そしたらなんか猫を追加したくなっちゃってこんなになった。そんなんだ。

第五次聖杯戦争編 10・交錯するピースの欠片達（前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

今回は静かながらも不気味な夜なテーマの10話です。

ちよつと弓剣つばい内容になった気もします。

セイバーがらみは今回で殆どやっちゃったので暫くセイバーさんは  
出番ほとんどなくなるかと思えます。

挿絵つけた部分はあれだよ、文章でなんかイメージ通りのエミヤさ  
んの表情描写するのは難しいなあと思ったのでつけた。

失敗作だといわれてきました。

お前など失敗作だといわれてきました。

所詮は模造品だと、そんな言葉とうに聞き飽きたのよ。

もうなくしたものを、いつまでもいつまでは彼らは口にするのだ。

ああ、イリヤスフィール様ならば、と。

実際に痛みを受けるのは私なのに。

実際に全てを受け持つのは私なのに。

何も私には期待しないと、そう嘲笑うメイド達。

脆弱な身で嘲笑う私以上の失敗作の群。

白い雪の舞う城。

私を犯す赫。

楔。

呪う様に悲願の達成をと、そんな言葉を壊れたようにいう大爺様。だから、私は殺してしまおうと思ったのです。

この世に生を受けてから、貴女の死を願わぬ日はなかった。

『交錯するピースの欠片達』

月が雲に隠れたそんな衛宮の縁側で、私は鋭く目の前の女性に言葉放った。

「あなたは一体何者なんですか？」

白髪の背の高い彼女は、静かな・・・それでもどこか悲しみを湛えたような鋼色の瞳でじつと私を真っ直ぐに見て、それから「・・・言っただと思うが、私は君のマスターの家族で切嗣の子供だよ」と、そんな言葉を乾いた声で口にした。

「そんなことを、聞いたわけではありません」

その私の言葉に、少しだけ困ったように眉を寄せた。その表情に内心少し戸惑う。なんというか、その表情がどこか、たまに見せていた『彼』に似ているのだ。

「・・・こちらにかけないか？立ち話でするような話題でもなかるう」

そう言っただけ、手本を示すように今は黒いパジャマを身に纏った女性には隠れた月を見上げるように縁側に座った。習って私も座り込む。そして、その横顔を眺める。

まるでどこか白く乾いた砂を連想させるような、そんな白く長い髪に、灼けたような薄褐色の肌。出るところは出ていながらも引き締まった長身は、同性である私から見ても見惚れるほどだ。顔立ちが眉の印象からだろうか、どこことなく凛々しさや少年っぽさを感じさせるが、同時にあどけないような面が見え隠れしていて、多少童顔な印象だ。カラーは異色だが、その顔立ちは西洋人というよりは東洋人のそれに思える。そして、手。努力に努力を重ねてきたようなそんな働き者の手をしている。

戦闘中などは皮肉った表情が多かった。口調もまるでかの赤き弓兵のようだった。色や顔立ちもどこか似ている。縁者だろうか、と、その関係を疑えるほどには彼女はあの赤い弓兵に似ていると、それが私のこの「衛宮・S・アーチェ」の名乗った女性に対する第

一印象だった。なのに、こう接していると何故だろう。どこことなく、彼女はかの弓兵よりも寧ろ、『シロウ』に似ているような気がした。彼女が作ったという夕食をいただいた。それは、悔しいような気はしたが、シロウの作る其れより数段上で、とても美味だった。だけど、ただ美味だったというだけではなくて・・・ただの美味であれば、そうであればこんなに私の胸を打ったりしなかった・・・あれは暖かい、とても暖かいそんな料理だったのだ。そう、かつて私が斬り捨てた少年が作ったそれと同じように。食べるもののことを考えて作られたそんな暖かい料理だった。誰かを想う気持ちが込められたそんな料理だった。

自分が食べることも後回しにして、彼女が給仕にまわっていたことにも途中で気付いた。その、自分よりも他人を優先させる在り方を似ている、とそう思った。そして、その時に密かに浮かべていたどこか懐かしむような笑み・・・その意味は、理由は一体なんなのか。

「こちらからも質問をしていいかね・・・？」

「・・・何をですか」

「君は一体、何を知りたいんだ・・・？セイバー」

そんな風にまたも静かな瞳でまぶしいものを見るかのように目を細めて、彼女は言う。

その瞳に、決意が揺るがされる。

(そんな目で見るのは、卑怯だ)

胸が疼く。あの時貰かれた感覚と斬り捨てた感覚が蘇ったような気がした。

「・・・わかりません」

ずきずき、と胸が痛む。あのカムランの丘で悲願の成就をと誓ったのに、それすらがもう遠い過去になっていく。

「・・・私には、貴女がわかりません」

そうだ、わかっている。おそらくはきつと、この女にトどんな返答

をもらったところで、私は納得することなんて出来ないのだろうと。そうだ、彼女はまるで鏡だ。私の心を映し出す鏡。気付いた。

なんで気付いたのだろう。気付かなかったらもつと楽に対峙出来たのに。じわり、じわりと、胸から苦い感情が痛みと共にせり上がる。

「懺悔を・・・聞いてもらってもいいですか」

彼女はそれに答えを返さなかった。ただ、静かに、本当に静かな目でじつと私が話し出すのをただ待っていた。

「私は・・・マスターを・・・前の自分の主をこの手で殺したのです」

鋼色の目が見開かれた。

・・・彼はその時、死にかけだった。命を奪うのは本当に簡単だった。そもそも、私の手はとつくに汚れている。

国を守る、そう、その為に今まで幾度もこの手を血に浸してきた。国を守るためならば、それなら私などどうなってもかまわないのだと、そんな風に思っ、幾度も幾度も聖剣を手に、敵を斬り捨てて来た。その末に国すら失くし、息子すらこの手にかけた。その果てに望んだやり直し。聖杯を手にいれる、そんな悲願。

私にとっては国が一番大事で、民こそ守るべきもので・・・だから、だから・・・と、あの地下室、聖杯を与えようというそんな神父の甘言のまま、自覚もないままに剣を引いた。

幕切れなんていつだってあつけない。

大切なものはいつだってこの手をすり抜けていつてしまう。

愛した少年だったのに。こんな愚かな私を、愛してくれた少年なのに。

それでも、私は自分の願いを優先してしまつて、そしてそのまま命を奪った。理由はどうあれ、主であった少年の命を。

その瞬間が消えない。いつまでもこの手に感触として残っている。

恐ろしいまでに冷たい感覚。そうだ、過去には息子だって私は殺している。なのに、なのに・・・消えないんだ、どうしても。

簡単だった。終わりは簡単だった。

でも、それは何より重かった。刃の軽さに比例するかのようになんどんと重くなっていく。(それは心が?)まわりつく。(それは体が?)赤が止まない。

その暗闇の中嘲笑う、神父の口元。私の頬から伝う涙。血の匂い。事切れた少年。そして・・・私の胸元から生える赤い呪いの槍。

それが、終わりだ。前回の終わりだ。

あの時、ランサーは何を言っただろうか。ほんの少し前の出来事のような気がしているのに、遠くかすむ記憶。

(ああ・・・)

確か、「こんな形は俺も不本意だったが、あばよ、セイバー。つまんねえ奴に成り下がりがりやがって」だっただろうか・・・?主を殺した私への侮蔑を躪わに、秀麗な顔を歪めて『その時』を終わらせた青き半神。

それだけだ。

結局、主を自らの手で殺した私は『聖杯』を手にすることは出来なかった。

「セイバー」

はっと、自分にかげられた、どことなく声変わり前の少年を連想させる女の声をきっかけに、記憶の奥底から現実へと戻ってくる。

「・・・なんでしょう」

「君は後悔しているのか・・・?」

息につまる。当然だ。だって、聖杯が最初っから汚染されていたのなら、それは最初っから私の願いは叶うはずがなかったということ、それでは・・・それでは一体私は何の為にシロウを手にかけたのか。何の為にアレを背負ったのか。

消えない。消えないんだ。彼を斬ったその時の感触が消えてくれ

ない。

(何が騎士だ。騎士の王だ)

主を斬り捨てておいて騎士を名乗るなど、お笑いもいいところだ。いや……そもそもが叶うことのない力を、ありもしないものを求めての果ての結末ならば、そんな幻想のために何より大切だった人を斬り捨てた私は道化と言い換えてもおかしくはない。

白い髪を、雲越しに覗く月の光で青白く照らしている女は、諭すようなそうではないような、判別が難しい声でぼつりぼつりと言葉を連ねていく。

「後悔するな……なんて私は言えん。私とて、後悔ばかり抱えていた。私は、私もな、愚かだった。もしかすれば君よりもずつとずつと」

そう放つ声や、遠くを見つめている横顔はどこか枯れた老人を連想させた。

「シロ……?」

「しかしな……セイバー」

彼女が私に視線を向ける。その鋼色の瞳は憂いを帯びていて、見ているほうが物悲しくなる、そんな目だった。

「君が斬ったという『マスター』は果たして、君を恨んでいるのだろうか」

「……何……を」

息が、上手く出来ない。

彼女は淡々と、まるで独り言をこぼすかのような調子で言葉を紡いでいく。

「君は後悔しているのだろう。主を斬ったことを。その代償にそうして君は苦しんでいる。その様子をもし見たのならば、果たして君が斬ったという元主はマスターどう思っただろうな」

「そんなの……わからない。けれどっ、きっと……私を恨んでいるに……決まっているではないですか」



「何故、そう思う・・・？」

だって、だって私は・・・自分の願望のためだけに愛する少年を手にかけたのだ。ただ一人、異性として愛した少年をこの手にかけたのだ。

彼が全てを失ったものであることは夢を通じて知っていた。知っていたのだ。私と同じくかつて失くしたものだ、と・・・。全てを失い一人生き残った少年、その未来をただ自分の願いのためだけに私は一方的に奪った。命すら奪ってしまった。なのに、そんな少年まで斬り捨てて、犠牲にしてまで求めたものが・・・何の意味もないものだとしたら、それは救われないではないか。あまりにも救われないではないか。

それじゃあ、あの犠牲は、あの重さは、あの血は、あの人は・・・！ただの・・・無価値へと落ちてしまう。ただの、犬死にへと成り下がってしまう。

セイバーと、ひたむきに不器用に私を呼んだ、人間としてどこか歪で、けど前を見て歩いてきた少年。その言動に、行動に時に苛つかされながらも、それでも私と似ていながら異なる彼は眩しい光だった。その未来をこの手で奪った。

(怖い)

愛していたんだ、そんな言葉言う資格なんてないけれど、確かに私は愛していたんだ。

(怖い)

彼は、誰にも恨み言をいわなかった。それをしっている。

(だから、怖い)

どうせなら、せめてどうせならそう・・・。

(その答えが、怖い)

私を恨んで逝っていてほしい。でなければ、本当に何も救われな

い。  
(だけど、きっと彼は・・・)

「セイバー、今度は私の話をしてもかまわないだろうか？」

淡々と、感情を交えずにシロはいう。それに、「どうぞ」と言い頷いて、話を促す。

・・・先ほどまでの考えは胸の奥底に封印した。そうでなければとても冷静に振舞えそうになかったから。

そして語られる、彼女の事。

「私もね、昔、裏切ってしまったんだ」

遠い、遠い目。鋼の瞳は私を見ていない。過去を見ている。先ほどまでの私がそうであったように。

「あまりに辛くて、苦しくて・・・大切な少女を、最も裏切ってはならなかった少女を、己の願望のためだけに裏切った」

シロが手をのばす。それはまるで水面に映った月をつかむ行為に似ていた。

「なのに。そんな私なのに、彼女は・・・」

それを・・・泣いているのかと思った。

錯覚なのはわかっていて。涙なんて流していない。それでも、泣いているのかと思った。

「なあ、セイバー、もう一度聞こう」

そしてゆつくり、鋼の瞳は私の目を捉える。

「君が斬ったという『マスター』は果たして、君を恨んでいるのだろうか」

side・エミヤ

たわいもない、抽象的な、そんな話をぼつぼつと続けていたように思う。セイバーも私も、淡々とそんな風に語り合った。傍目には傷の舐めあいと映ったかもしれないけれど、それはきっとはずれて

はいない。私もセイバーも互いに過去を見ていた。

「今回の聖杯戦争のことについて・・・いいですか」  
ぼつりと、少女はそんな言葉を出した。

「正直、私はまだまだ自分の気持ちに整理をつけられない。だから・・・これは明日マスターにも言おうと思っっていることですが・・・」  
少女は一瞬瞼を閉じ、考え込むように伏せ、それからすつと哀しみと憂いを秘めた碧い瞳を開き、私を静かに見て、言った。

「今回、私は暫く傍観を貫かせていただきます」  
それは、予想の範囲内の言葉だった。

「今の気持ちのまま、私は・・・誰のためにも戦えそうにない。サーヴァントとしてあるまじきことだとはわかっています。それでも、私は・・・」

「わかった」

そう返答すると、驚きに目を開いて、彼女は私を見た。

「こちらとて、戦う気のないものに戦わせるつもりなど、元よりない。何、君がいなくても、こちらにはランサーもいる。これからどうするかはゆっくりとセイバーが考え、答えを出せばいい」

そういって、安心させるように微笑みを浮かべた。

其れを見て、セイバーは気のせいだろうか、一瞬だけ泣きそうな目を浮かべたような気がしたが、またすぐにいつもの平素の顔に戻って、「ありがとうございます、シロ」といい、ぺこりと頭を下げた。

それから、すつと立ち上がる。話は終わった、これから部屋に戻ろうというのだろう。少女は私に背をむける。

きつと私はそれで、油断し、安心していた。

「ああ、そうだ、シロ」

言い忘れていたことがあった、とそんなニュアンスで、背中越しに少女はなんでもないように言った。

「何故でしょうね。性別も外見も口調も何もかも似ていないというのに・・・貴女は、どこか『シロウ』に似ています」

そう、言い残して今度こそ少女は完全に立ち去った。

言葉を失う。

手が、震える。

(『シロウ』に似ています・・・?だつて・・・?)

それは、その言葉は・・・ぎゅ、と心臓の上を押さえる。

(君が言うのか。アルトリア)

彼女と出会ったのはこの夜だった。あの月明かりも、あの神聖さもどんな時だつてあれだけは忘れたことはない。忘れたことなんてなかった。

既にオレは『衛宮士郎』とは別物だ。そんなものに成り果ててしまった。

なのに、似ていると君は言うのか。

そう、それはとても・・・。

> i31837 — 3032 <

夜風が吹く。月が覗く。空は青い。ピュルルと、自然物ならぬ鳥が飛来する。翡翠で出来た宝石の鳥。遠坂凜の使い魔。

「そうか、漸くか」

凜にしては遅かったな。やはり、ランサーがいる分慎重になったということか。彼女の使い魔が、学校から帰ってから衛宮家を見張っていたことは知っていた。あとは邪魔されぬタイミングを計っていた、それだけだろう。いいさ、私もはっきりさせるほうがずっといい。



深夜2時過ぎ、アーチャーと共に私は再び夜の学校へとやってきていた。

「来たわね」

ぎつと、仁王立ちになって、件の人物を睨むように立ちながら、腕を組んで見据える。

それに、闇に溶けるような黒衣に、軽くジャンパーを羽織っただけの軽装をした白髪褐色肌の女、衛宮・S・アーチエは「それで、こんな時間に人を呼びつけておいて何の用かな、凜。夜更かしは肌にも悪いぞ？君の行為は淑女として問題があるように見えるが？」なんてことをからかうように口にして歩み寄ってきていた。

驚いたことというか、呆れたことというべきなのか、彼女は一人だった。

「とぼけないで。いい、私はあんたと化かしあいするために呼んだんじゃないの」

「ふむ、そうか」

どことなく残念そうな色を見せているのは、どういう意味なのかしらね。ふふ、いい度胸してんじゃないの。とは思いつつも、追求していたらきりがないから全力でスルーすることにして、本題を進める。

「しかし、アンタ、無用心だとは思わないの？サーヴァントも無しにまさか本当に一人で来るなんて・・・呆れた」

「生憎、私はマスターではないからな。サーヴァントがいなくて当然だろう？」

そう、それが意外といえば一番意外なことだった。

「アーチエ、確認なんだけど、セイバーのマスターは衛宮君よね？  
どういふこと」

衛宮士郎。衛宮家の末っ子である少年で、桜が最も良い顔で接する少年だ。遠目でわたしが見る限り、魔力の匂いもそうだけど、彼は普通の少年だった。それが、最優と名高いセイバーを召喚？まるで悪い冗談のようだった。でも、確かに私は、学校から撤退してすぐに衛宮の家に送りつけた使い魔を通して、彼の左手に浮かんだ令呪の存在を確認している。

「聞くまでもないだろう。マスターになれるのは魔術師だけだ」

不敵な笑みを口元に浮かべて、アーチエはそんな言葉を言った。

「は？でも、まって、衛宮君は」

そうだ、末の子なのだ。通常魔術師の跡継ぎは一人だけだ。それ以外には魔術は秘匿されて育てられるか、別の魔術師の家へと養子にやられる。でも、彼は3人目なのだ。

そして、はっと思い出した。

そうだ・・・アーチエは。

ずっと、眼光を鋭くする。ぴりり、と殺気すら飛ばして、この10年来の昔なじみをにらみつけた。

「・・・呆れた。そう、つまり、そういうこと」

私は養子だとそう、言っていた。そして、魔眼持ちのイリヤ。あれだけの子がいて、何故魔術師の養子がいるというのだろう。一度だけ写真で彼らの『父親』である男の顔を見たことがある。くたびれた感があったが、それでもまだ若い男だった。少なくともアーチエの年齢の子供をもつにしては若めだった。なのに、自分の子に魔術を継がせることもまだまだ可能だろうし、イリヤは魔術師として有望な器なのに、わざわざ魔術師を養子に？その答えは・・・。

「つまり、『衛宮』ってというのは、二人の魔術師と、二人の後継者からなる魔術師の二つの複合家系だったってということ」

なんて、反則。家族全てが魔術師だなんて、一体誰が想像しただろうか。

はい、よく出来ました、そう言うかのようにアーチエは口元に皮肉った笑みを浮かべ私を見ていた。

「わたしを騙すなんて、随分な真似してくれるじゃない」

「凜、言っておくが、私は別に君を騙してはいないのだがね。言っただろう？」「衛宮は魔術師の家系」だと。君が勝手に勘違いしただけだ」

「詭弁を言ってるんじゃないわよ」

わざと勘違いさせるように振舞ったくせに。

「まあ、いいわ、此処からが本題よ」

すつと、真つ直ぐに鋼色の目を見据えた。

「アーチエ、貴女はわたしの敵？」

そう、これは何にも勝る、優先される問い。マスターでないことはわかつている。そう、参加者ではない、それでも彼女が聖杯戦争に完全な無関係になるとは、どうしても思えなかった。

「私は……」

鋼色の瞳が、どこか彷徨う。彼女とて魔術師だ。おそらく敵となれば、彼女もあとには殺すことを迷ったりはしないだろう。たとえ……どんなに親しい相手でも。だから、次の言葉は意外だった。

「私から君に手を出すことはないよ」

曖昧な言葉。

「家族に手を出すのならば、抵抗はしよう。だが、私は君を傷つけはしない。君が私を殺したいというのならば、それも受け入れよう」  
カッ、と怒りに頬が染まった。

(今、こいつ、何言ったのよ)

殺したいというのならば、それも受け入れよう？なんて馬鹿な、馬鹿なことを口にするのか。でも一方で、これまでの経験から、その言葉は間違いなく本気で言っているとわかって、余計に頭に血がのぼった。そうだ、捻くつた大層な言い回しが多いけど、こいつは、嘘はつかないのだ。

「信じられないのならば誓おう。私は遠坂凜を傷つけない。家族に手を出すというのならば抵抗はしよう。それでも、私を殺したいと



いつのならば、殺せばいい。君にはその資格がある」

真摯な声で告げられる、響きだけならば神聖ささえ孕んだ祝詞・  
・だけど、その正体はとても……。  
そうだ、わかりきっていたことだ。こいつがそういうやつだなんてわかりきっていたことだ。

(歪んでいる……!)

こいつは、何か、どこか人としておかしいやつなんだってそんなの最初っから知ってた。

ぐっと、自分の拳を握りこむ。そうでもしないと、感情の発露を抑えられそうになかったから。

「アーチャー!!」

苛立った声のまま、この目の前の女と似たところを多分に含んでいそうな己の従者の名を呼ぶ。

「行くわよ!もう、用はすんだからっ」

side・アーチャー

「行くわよ!もう、用はすんだからっ」

そのマスターの声を合図に私は霊体化を解いて彼女たちの前へと姿を現した。

「マスター、少し待ちたまえ」

「何よっ!?!」

苛立たしげにマスターは整った顔を歪めて私に噛み付くような言葉を返す。

「アーチェといったか。少し、この人物に確認したいことがあつてね」

「はあ?確認って何よ、それ」

「いや、何、君はなにやら一人納得したものがあるから立ち去ろうとしているようだが、私はなにせこの女とは初対面だからな。本当にマスターに対して危害を加えない人物なのか・・・見定めたい」  
そう口にする、遠坂凜は口元をへの字にして、僅かに黙って考え込むような顔を見せたかと思うと、むっすりとした顔になって「わかった。校門のところまで待っているからさっさと来なさいよね」  
そう言い残して踵を返した。

凜が去る。それをまっていたかのように、私と同じ外見特徴をもった女が慎重に防音の結界を重ねがけしていた。

「さて、マスターはおかんむりだ。あまり、時間があるとはいえない。故に率直に聞こう」

腕を組み、まっすぐに、やはり性別が違うということにも関わらず鏡で見た私とよく似た表情を浮かべた女に対して、その確信染みた言葉を放った。

「オマエはオレか？」

それに、にっと女の姿をしたそれは笑った。

### side・レイリスフィール

誰もいない夜の公園で、ギィギィと音を鳴らしながら、私はブランコという名の遊具をこいでいた。

「~~~~~」

誰もいない。

夜を前に街は眠っている。

ここに、私を見張る者はいない。

唄を歌う。思いのままの歌を。名など歌にいらぬ。そんなものはいらぬ。

たとえば、失敗作と、所詮は代用品だとそんな風に言われようと、私はアインツベルン。アインツベルンの今代の小聖杯、レイリスフール・フォン・アインツベルン。ならば、淑女として振舞おう。淑女がガツガツした真似をするなんて、見つとも無い。そんなものは似合わない。そう、私はアインツベルン。ならば、待とう。どうせ最後には私と一つとなる。其れが遅いか早いかのこと。

客人がきたら、それを持って成すのが、それが淑女というものでしよう。

だから、今はこうして歌を唄って月を見る。

煩い声がない。それは素直に有り難い事。ゆらゆら、ゆらゆらと、初めて触れる遊具に揺られながら、遠い空を見上げる。声をかけるものはいない。

(殺してしまえば静かになる)

私を所詮は模造品だと、言ったメイドは既に殺した。

身の回りの世話をするためだと、そういつてついでにきたメイドは既に殺した。

ゆらゆら、ゆらゆら、遊具に揺れる。

「~~~~、~~~~」

煩わしい全て、今は此処に無い。

「・・・あら？」

くすりと、口元に手をやって私は微笑む。リン、と髪留めにつけた鈴が揺れて音を鳴らした。

「お客様。下賤な客人ですが、いいでしょう。今、私は気分がいいですから」

わらわら、わらわらと骨の人形が私を囲む、魂無き人形が魔女の操るままに公園へとぞくぞくと集まる。それを眺めて、すつと姿勢を正して立ち上がる。

「でも、面倒ですから今度は直接本体で来て下さいね、キャスター」  
にこり、冷たく笑って、私は、自分の最も忌まわしき敵<sup>サーヴァント</sup>を呼び出した。

「さあ、お狂いなさい！バーサーカー……！」

ああ、もしも、あの骨人形が、貴女であつたなら……そんな空想を抱えながら私は戦闘開始の合図を下した。

NEXT?

第五次聖杯戦争編 10・交錯するピースの欠片達（後書き）

というわけで10話でした。セイバーとエミヤさんはマジで似たもの同士な話だというのが自分で書いてて思った感想。

そして、久々な出番だったオリマスターのレイリ。今回でどうい子なのか薄々わかってきたんじゃないかな。

次回は虎久しぶりに登場で一気に明るくなる予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6723s/>

---

うっかり女エミヤさんの聖杯戦争

2011年9月25日23時50分発行